昭和八年十月十五日印刷
昭和八年十月二十日發行
昭和十三年三月十日再版

不許複製

國譯一切經　論集部　三

【改正定價壹圓廿五錢】

編輯兼發行者　岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者　長尾文雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所　日進舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地十番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

製本所　兩角製本所

索　引

（頁數は通頁を表す）

—論集部三索引終—

答曰　現在は過去世とは或は異相あり、謂く過去の衆生は壽命は無量にして勢は諸天に同じ、是くの如き等なり。人は壽命等が異れば、老死の因緣も亦當に異ること有るべしと謂はんことを恐るゝが故に須らく定んで說くべし、未來も亦爾り。此の六種を法住經と名づけ、餘は泥洹智と名づく、能く老死をして相續せしむるが故に無常有爲の作起は、衆緣より生ずと說く。盡相壞相は卽ち是れ無常の行、離相は卽ち是れ苦の行、滅相は卽ち是れ空無我の行なり。所以は何、此の中にて色性が滅し受想行識性が滅すれば、是れを三種觀の義と名づくればなり。經の中にて、比丘に七處方便と三種の觀と義と有らば、速に漏盡を得と說くが如し。皆是れを泥洹智と爲す。是くの如き等の因緣智は百千無量あり、謂く眼智等にして經の中にて說くが如し、眼は業に緣り、業は愛に緣り、愛は無明に緣り、無明は邪念に緣り、邪念は眼色に緣り、諸漏は邪念に緣り、諸食は愛に緣り、五欲は[五四]摶食等に緣り、地獄の短命は殺生等に緣り、若しくは今苦にても先苦にても皆妄想に緣り、妄想は身心の憎愛に緣り、憎愛は貪欲に緣り、貪欲は邪思惟に緣る。是くの如き等の諸の因緣智は無量無邊なり、自ら應當に知るべし。

成實論卷第十六[五五]（終）

【五四】麗本は揣に作る。

【五五】三本宮本は十六を二十に作る。

答曰　此れは老死性の智と名づく。

問曰　亦老死の集と老死の滅と老死の滅の道とを知ると說くが故に知る、應に是れ苦智なるべし。

答曰　此れは是れ因緣門にして、眞諦門には非ず。是の故に此の中にては應に苦の行を說くべからず。應に集等を說くべし、相順ずるを以ての故なり。

問曰　此の中にては何が故に味と過と出と等の諸智を說かざるや。

答曰　此の義を皆攝すればなり、但集經者が略して說かざるのみ。

七十七智品　第二百二

問曰　經の中にて七十七智を說く、謂く生は老死に緣たり、生を離れずして老死有り、過去未來世の中にても亦是くの如し。是れは法住智にして、無常有爲の作起は衆緣より生ずと觀じ、盡相壞相離相滅相も亦是くの如くに觀じ、乃至、無明の行に緣たるも亦是くの如し。是の中にては何が故に老死性及び滅道等を說かざるや。

答曰　利智者の爲の故に是くの如く說いて、但其の門の可知を開くのみ。餘も亦是くの如し。又外道は多く因緣の中に於て謬りて、世間の萬物は世性を因となす等と說くが故に佛は此れに於て但因緣のみを說きたまふなり。

問曰　已に生は老死に緣たりと說く、何が故に更に離れずと說くや。

答曰　必ず定まれるが爲めの故なり。諸法の中には不定因有り、施は福の因と爲るが如く、亦持戒を以ても福を得れば、持戒は天上に生ずることを得と說くが如し。或は有るが念を生ずらく、老死は生に因ると、或は生に因らずと、故に須らく定んで說くべし。

問曰　何が故に去來世の中にて、復須らく定んで說くべきや。

と名づく。

四十四智品　第二百一

問曰　經の中にて四十四智を說く、謂く老死智と老死の集の智と老死の滅の智と老死の滅の道の智と生有取愛受觸六入名色識行にも亦是くの如くなるとなり。何が故に此れを說くや。

答曰　泥洹は是れ眞の法寶にして種々の門を以て入る。五陰門を以て入る有り、或は界入因緣と諸諦とを觀ずる是くの如き等の門あり皆泥洹に至る。何を以てか之を知る。經の中にて說くが如し、王は城中に處し、雙使の來る有り、一門より入り、到り已りて王に向ひて其の事實を說き、語り已りて還り去る、諸門よりも亦爾なりと。此の中の王は行者に喩へ、諸門は陰界入等を觀ずるを謂ひ、雙使は止と觀との如く、其の事實を說くとは謂く空に通達するなり。是の諸使は諸門より入ると雖も皆一處に到る。是くの如く陰界入等の諸門の方便を觀ずと雖も皆泥洹に入るなり。[五三]羅睺羅の說くが如し、獨屏處に於て法を思惟する時には是くの如きの法は皆泥洹に隨順し趣向し稱讚することを知ると。又佛は讃法の中に於て說く、是の法は能く諸の煩惱の火を滅するが故に名づけて滅と爲し、能く行者の心をして安隱を得しむるが故に安隱と名づけ能く行者をして正遍知に到らしむるが故に名づけて至と爲すと。是くの如き等の義は皆泥洹を讃するなり。又梵行を八聖道と名づけ、八聖道の中にては正智を上と爲し、此の正智の果は所謂泥洹なり。又佛所說の敎は皆泥洹の爲なり。故に知る五陰等の門は皆泥洹に至る。

問曰　有る論師は言く、老死智を苦智と名づくと。是の事は云何。

答曰　非なり。所以は何、是の中にては苦の行を說かざるが故に苦智には非ず。

問曰　是れを何れの智と爲すや。

【五三】具足品第一、立假名品第四十一、三慧品第一百九十四參照。

諸相の不生なるを知るを無生智と名づく。學人は相を斷じて、盡き已るも更に生じ、無學には相が盡きて更に復生ぜず。若し能く諸相をして盡く滅して更に復生ぜざらしめば、爾の時を無生智と名づく。

問曰　學人にも亦盡智無生智あることを知る、我には三結は盡きて更に復生ぜずと念ずるが如し。何が故に十分成就を說かざるや。

答曰　學人は一切の相を斷ずること能はざるが故に盡智無生智有りとは說かず。人が處々に緊縛せらるれば、處は解くと雖も脫を得とは名づけざるが如し。亦此の義もあれば、舍利弗は[五一]給孤獨氏の十分成就を說きたり。又阿羅漢は自在力を得るが故に自ら、結盡きて更に復生ぜずと知るも、學人は爾らず。又阿羅漢が無學道を得る時に自ら一切の生の盡くを知るを名づけて盡智と爲す。[五二]梵行成ずとは謂く諸の學行を捨するなり、所作辦ずとは謂く諸の所應作を皆已に作し訖れるなり、此の身より更に相續すること無しと知る。故に知る但阿羅漢のみ一切の所作に於て、應に自在を得て盡智及び無生智を成就すべく、諸の學人には非ざるなり。人の瘧病が發せざる時と雖も亦名づけて差ゆと爲さざるが如し。經の中にて說くが如し、一切處の喜を離れ一切處の憂を滅し一切法の滅を證せば常に無漏心を行ずと。

他心智は　通の中にて說きしが如し。

五陰の和合せるを假に衆生と名づけ、此等の中の智を名字智と名づく。無漏智を眞實智と名づけ、此れは無漏に似たれば名づけて智と爲すことを得るが故に名字智と曰ふ。

問曰　又人は言く、一切の衆生は等智を成就すと。是の事は云何。

答曰　若し佛弟子にして能く諸法は衆緣より生ずと知らば、是の人は能く得、餘の衆生には非ず、智の名を得るを以ての故なり。一切の衆生は但想を以て識るのみなるも、若し此の智を得ば內凡夫

【五一】給孤獨氏、十不善道品第一百一十六に註せるが如し。給孤獨と通稱せられし人なれば、これに氏を附して呼びたるなり。

【五二】阿羅漢は生已盡、梵行已成（又は梵行已立）所作已辦、不更受後有を自覺するなり。

中にて說くが如し、若し法にして無常ならば卽ち是れ無我なりと。所以は何、眼等の諸根には生あり滅あれなり。若し是れ我ならば我は卽ち生滅せむ。故に知る我に非ず。是の眼等の生ずる時には從來する所無きも、所作あるを以ての故に名づけて[五〇]我と爲すも、而も經の中にては作者有ること無しと說く。故に知る若し法にして無常ならば卽ち是れ無我なり。是くの如く行者は善く無常及び無我を修するが故に身心は寂滅して所有の行が生ずるときは、皆其の惱を覺え、則ち苦想を生ずること、皮無き牛は小觸にても痛を覺ゆるが如し。行者も是くの如く、無我想を以ての故に上の苦想を成ずるなり。愚者は、我想を以ての故に大苦有りと雖も其の惱を覺えず。是れを苦智と名づく。諸行の生を見れば、是れを集智と名づけ、諸行の滅を見れば是を滅智と名づけ、道の始終を念ぜば是れを道智と名づく。

問曰　何をか盡智と謂ふや。

答曰　一切の相を盡くすが故に盡智と名づく。所以は何、學人には相が斷じて還生ずるも、此れは畢竟斷なるが故に盡智と名づくればなり。經の中にて說くが如し、若し妄想は唯是れ妄想なりと知らば、諸苦は則ち盡くと。學人の智は但是れ妄想のみにして是れ我なり、此の心が永く斷ずれば名づけて盡智と爲す。經の中にて說くが如し、阿羅漢は佛の前に於て自ら記す、世尊の所說の諸結は我には此れ無し、我は是の結に於て復疑を生ぜず、我は常に一心に念を正行に攝して貪等の不善は心より漏せずと。是の中にて相を取るが故に諸結を生じ、諸相が斷ずるが故に諸結は則ち滅するなり。學人は相に於て無相を行ずるが故に我心が時には發る、杌樹を見て擬ひて是れ人なりと謂ふが如し。故に阿羅漢のみ獨疑無きを得。心が常に無相の中に行ずるを以ての故に、先に生空を以て五陰の中に於て神我を見ず、後に法空を以て色性乃至識性を見されればなり。故に知る一切の相の盡くを名づけて盡智と爲す。

【五〇】三本宮本は我を無我に作る。

に於ての知も亦應に法智と名づくべし。然らば則ち唯是れ法智のみにして比智無きなり。若し色無色界の去來の行の中には別に智有らば、欲界の去來の行の中にも亦應に別に更に智有るべし。此の義を以ての故に諸論師は言く、得と未得とあるが故に次第に諦を見る、欲界の苦を得と名づけ、色無色界の苦を未得と名づくと。是の故に一時に並びに知るべからず。若し未得の苦は比智を以て知らば、今欲界の中にても未だ得ざる所の苦は亦應に比智を以て知るべし。

問曰 何れの智を以て斷結道と爲すや。

答曰 但法智比智のみを用ふるは方便道の中に在り。

問曰 何れの法智を用ふるや。

答曰 苦法智と滅法智とを用ふ。所以は何、行者は無常苦を觀ずる時には空無我を見、爾の時に諸行の滅を證すれば、餘の智は皆是れ方便なればなり。

問曰 何れの苦を觀じて滅するや。

答曰 諸受の苦を觀ず。此の中にては能く我心を生ずれば、亦此の中に於て滅をも見るなり。說くが如し、內にて解脫するが故に諸愛は盡く滅して自ら阿羅漢を得と說くと。

問曰 經の中にては一切の行の斷ずるを斷性と名づくと說かずや。

答曰 此の行者は內の滅を證するが故に一切厭離するなり。又行者は必ず當應に內滅を證すべく、餘は必ずしも定まらず。

問曰 諸諦の中に於て云何が智を生ずるや。

答曰 生の苦等を知るなり。

問曰 此れは定心に非ざるに、何ぞ能く智を生ぜんや。

答曰 是くの如きの觀あらば、亦陰の無常等の過を見て苦無我想を生ずること有ればなり。經の

餘殘の法を知るを名づけて比智と曰ふ。餘とは謂く過去未來の諸法なり。現在の法に次いで後に知るが故に比智と名づく。所以は何、先に現知し已りて然る後に比知すればなり。法智は現智に名づけ、此の法智に隨ひて思量し比知するを名づけて比智と爲すなり。

問曰 [四八]此の智は是れ無漏智なり、無漏智を云何ぞ比智と名づけむや。

答曰 世間にも亦比智あり、所以は何、法智と比智と他心智と苦智と集智と滅智と道智とには皆有漏と無漏とあればなり。是の諸智が煖等の法の中に在らば、是れ有漏にして、法位の中に入りて得る所ならば無漏と名づく。

問曰 有る人は言く、欲界の諸行と諸行の集と諸行の滅と諸行の滅の道を知るを名づけて法智と爲し、色無色界の諸行の四種を知るを名づけて比智と爲すと。是の事は云何。

答曰 經の中にて說く、佛は阿難に告げたまはく、過去未來世の中にても亦是くの如く知ると。經の色無色界の諸行の中の知を名づけて比智と爲すと說くもの有ること無し。又經の中にて說く、行者は應に念ずべし、我は今現色の爲に侵食せられ、過去にも亦曾て色の爲に侵食せられ、未來の中の色も亦當に侵食すべしと。又經の中にて說く、生は老死に緣たり、去來世の中にても亦復是くの如しと。[四九]馬鳴菩薩の說く偈の如し、

現在の火にして熱からば　去來の火も亦熱きが如く、
現在の五陰にして苦ならば　去來の陰も亦苦なり、と。

是くの如き等の苦は諸大論師も亦是くの如く說きたり。又過去未來世の法を知るを名づけて比智と爲すも亦道理あり。所以は何、行者は去來現在の苦の中に於て厭離すればなり。厭離は此の法の中に於て眞の智慧を生ずに名づく、現在の行の苦の如く去來の諸行も亦是くの如くに苦なりと。今何れの智を以て去來法を知るや。若し是れ法智ならば、色無色界の諸行にも亦去來あれば、彼の中

【四八】三本宮本は比に作る。

【四九】馬鳴菩薩、有名なる論師なれば、贅する要なし。

答曰　阿羅漢の心は相續して生じて念念に皆淨なり。若し更に九智を得ば、眼等も皆應に更に得べし、若し爾らずんば、應に但九智のみを得べからず。又說く、未來修は皆因緣なし。所以は何、此等は見諦道の中にては但相似智のみを修し、思惟道の中にても亦相似及び不相似を修し、見諦道の中にては上地を修せず、思惟道の中にては修し、道比智の中にては世俗の善を修せず、餘智の中にては修し、無礙道の中にては他心智を修せず、信解脫が轉じて見到と爲る時には一切の無礙解脫道の中にて世俗道を修せず、時解脫が轉じて不壞解脫と爲る時には[四五]九無礙八解脫道の中にて世俗道を修せず、第九解脫道の中にては修し、微細心の中にては一切の無漏を修せずと、是くの如き等を說くものにして皆因緣なければなり。是の故に汝にして今若し正因を說かば若しくは應に信受すべし。若し學習を以て修と爲さば、煖等の中に在る時には上の諸の善根は一切皆修す、悉く增益するを以ての故なり。經書を誦習するときは則ち皆明利なるが如し。是の故に煖等の法に在る時には、乃至、盡智は一切皆修す。若し爾らずんば、當に正因を說くべし。

十智品　第二百

十智とは法智と比智と他心智と名字智と[四六]四諦智と盡智と無生智となり。

現在の法を知るを是れを法智と名づく。經の中にて說くが如し、佛は阿難に告げたまはく、汝は此の法に於て是くの如くに見知し是くの如くに通達す、過去未來も亦是くの如く知ると。應に[四七]現法智と言ふべきに、今[四七]現とは說かざるが故に但法智とのみ說くなり。經の中にて說くが如し、愚者は現在法を貴ぶも智者は未來を貴ぶと。又說く、現在の諸欲と未來の諸欲とは皆是れ魔網、魔繫、魔縛なりと。是くの如き等の中にては皆現の語を說くも、現の語を略するが故に但法智とのみ說くなり。

【四五】九無礙、九解脫道。九無礙道は新譯には九無間道といふ、三界の修惑を斷ずる位を無間道といひ、斷じ已りて解脫を得たる位を解脫道となす、九とは三界を九地（欲界を一、色界を四に、無色界を四に分つ）に分ち、九地の一一に見修の惑あり、其の修惑を一地每に九品に分ちて麁大なるものより次第に微細なるものを斷ずるが故に九となす。

【四六】四諦智は四種となるが故に他と合して十なり。

【四七】三本宮本は現在に作る。

智の中に在らば、悉く初果所攝の諸智諸定を得るに、若し爾らずんば、果等は應に數數得べし、所以は何、諸果は皆應に現前する時に得べければなり。是の事は不可なり。故に知る應に未來の中の修あるべし。

答曰　汝が諸分無しと說くは此れは妨ぐる所なし。所以は何、我は戒等の諸分は次第を以て得るものにして一時に得るには非ずと說くが故に難には非ざるなり。汝は諸の得は其の種類を得と言ふも、行者が苦智を得る時には餘の苦智の種は皆名づけて得と爲すこと、人の種を得るが故に人相を得と名づくるものにして、亦念念の中に於て漸に人相を得とも名づけざるが如し。是の事も亦爾るなり。

問曰　行者の所有の苦等の諸智にして次第得ならば、皆已に捨離して更に一時に須陀洹果所攝の諸智を得む。

答曰　無漏の諸智は得れば則ち失せざるなり。

問曰　若し先に得て失はずむば、則ち得と行とは別無し。所以は何、果を得る者が即ち是れ行者ならば此等の過有ればなり。

答曰　若し差別無くんば何の咎ありや。果を成就する者を亦行者とも名づくるが如く、此れも亦是くの如し。又是の人は更に勝法を得るが故に差別あり、是の故に過なし。五戒を受けたる者が更に出家律儀を得るも亦本戒を失はざるが如し。又果を得る者は道を見るを以ての故に差別あるにあらず。人が初事を知ると雖も更に勝事を以ての故に差別有るが如く、此の事も亦爾り。故に知る未來得無し。又行者は空無我智に住すれば、爾の時に云何が世間法を得んや。故に知る盡智を得る時には世智を得ざるなり。

問曰　此の諸の世智は盡智と共に阿羅漢の與に定に入出する心を作すことを得。

問曰　有る論師は言く、阿羅漢は漏盡を證する時に世俗の九智を得、謂く欲界繫の善と無記と乃至非想非非想處の善と無記となりと。是の事は云何。

答曰　一切の阿羅漢が盡く諸の禪定を得るには非ざれば、云何ぞ當に九智を得べけむや。

問曰　一切の阿羅漢は皆禪定を得、但一切が皆能く現に入るには非ざるのみ。

答曰　若し現に入ること能はずんば云何ぞ得と名づけんや。人が書を知るも而も一字をも識らずと言ふが如く、是の事も亦爾り。

問曰　若し人にして離欲するも而も未だ現に初禪に入ること能はずむば、是の人は命終して彼に生ぜざるや。

答曰　經る中にて說く、先に此の間にて入りて後に當に彼に生ずべきに、今云何が此の間にては入らずして而も能く彼に生ぜむや。

問曰　若し欲を離るる時には過去未來の諸禪は皆本より得れば、此の報を以て生ずることを得む。

答曰　未來の業は作無く起無ければ、應に報を得べからず。過去の諸禪は曾し心に於て生じたるものなれば、若し果報を與ふるも、則ち害する所無きも、又應に未來の諸業を得べからず。若し得べくむば、一切の未來も皆應に得べし。何の障を以ての故に得と不得とあらむや。

問曰　若し未來の法にして得べからずむば、學人は應に八分成就すべからざるべく、無學は應に十分成就すべからず。所以は何、若し第二禪等に依りて正法位に入らば是の人は未來に正思惟を得、又若し行者にして盡智が現前せば爾の時には未來に世の正見を得、又人にして無色定に依りて羅漢果を得ば是の人は未來に正思惟正語正業正命を得、又若し人にして第三禪等に依りて聖道を得ば未來の喜を得るに、是くの如き等の法は則ち應に皆無かるべければなり。故に知る未來の法あり。又若し未來の修無くむば、云何が當に諸果諸禪定等を得べけむや。行者にして若し道比

答曰　是れ聞慧思慧なりと雖も是くの如くに五陰を分別せば、能く我心を破せばなり。故に速に漏盡を得と說く。三種觀の智とは謂く有爲法は無常・苦・無我なりと觀ずるなり。若し陰界入門を以て有爲法を觀ずるときは則ち義利なし。

問曰　若し爾らば、前の過の中にて已に無常苦を說き、出の中にて已に無我を說きたるに、何が故に復此の三種の觀を說くや。

答曰　三種を習學するには先に聞思慧にして、然る後に修慧なれば、先に聞思慧の中にて七種を說き、後に修慧の中にて三種を說く。所以は何、若し無常苦にて相を壞せば壞無常と名づくるも、無常を行ずるに非ざればなり。欲染を除くと說くと雖も云何にして除くかを說かざれば、後に三種觀の義を說くなり。

問曰　何をか〔四四〕八忍と謂ふや。

答曰　若し智にして能く假名を破せば、是れを名づけて忍と爲し、是の忍は煖頂忍世間第一法の中に在り。

問曰　行者は亦佛法僧及び戒等の中に於ても忍するに、何が故に但八のみを說くや。

答曰　勝るを以ての故に說くなり。勝るとは近道に名づけ、此の慧を智と爲すが故に名づけて忍と爲す。苦法智を苦法忍と名づくと爲すが如く、是くの如き等なり。所以は何、先に道に順ずる思慧を用ひ、後に現智を得ればなり。象を牧する人が先に象の跡を觀、比智を以て此の中に在ることを知りて、後に則ち現見するが如く、行者も亦爾り。先に忍比知を以て泥洹を思量して然る後に智を以て現見するなり。故に經の中にて說く、知者と見者とは能く漏盡を得と。

九智品　第一百九十九

【四四】欲界と上二界とは各四諦を配し、四諦の一一に法智と忍智とあれば、八忍八智となる。此中の八忍なり。

乃至、識の滅を見る、是れを空無我智と名づく。

問曰　假令(たとひ)諸法は常に在るも、愛等の煩惱は亦除盡すべし、萬物は常に在るも而も精進する者は能く貪愛を除くと說くが如し。何ぞ相を滅することを須ひむや。

答曰　經の中にて說く、

所有の生相は　皆滅相なりと知らば
諸法の中に於て　法眼淨を得、[四〇]
若し滅を以て斷ぜば　畢竟斷と名づく、と。[四一]

有る行者は諸の色の欲を離れて貪恚を遮滅すれば、佛は此れが爲の故に是くの如き偈を說くなり。又說く、

[四二]諸行の性は空にして幻の如きも、凡夫は無智なれば之を實有と謂ふ、學人は虛誑なること幻の如しと了知し、阿羅漢は亦幻をも見ずと。故に知る隨つて何れの慧を以て諸法の滅を證するも、是れを證漏盡智通と名づくるなり。

忍智品　第一百九十八

問曰　經の中にて說く、若し行者に[四三]七方便三種觀の義あらば、此の法の中に於て速に漏盡を得ると。是れ何れの智なりや。

答曰　七方便は聞慧思慧に名づく。所以は何、心にして未だ定ならずむば、是くの如きの觀を作せばなり、謂く此れは是れ色なり色の集なり色の滅なり及び色の滅の道なり色の味と過と出となりと。

問曰　若し是れ聞思慧ならば、何が故に速に漏盡を得と言ふや。

【四〇】法眼淨は初果を指すが、通常なり。

【四一】下に是の如き偈とあるが故に之を偈と見たり。偈の形をなし居れば、差支なかるべし。

【四二】これも、或は偈なるやも知れざれど、形は偈にはあらざれば、今は散文と見たり。

【四三】七方便とは五停心、別想念、總相念、煖、頂、忍、世第一法の七階級を云ふ三種觀は下に說く如し。

とを皆神通と名づくるなり。有る人は言く、一切の聖道は皆是れ漏盡の方便なり、經の中にて若し佛が出世し、[三八]善人は法を聞いて出家し戒を奉じ五蓋を除捨し定を修し諦を見ると說くが如き、此等は皆漏盡の方便と名づくと。又人は言く、施等の善法も亦漏盡の因緣と名づく。經の中にて說くが如し、行者の布施は漏盡空無我智を助成すと。是れを眞の證漏盡智通と名づく。此の法を別して金剛三昧と名づく、能く諸相を破すが故に金剛と曰ふ。[三九]諸の外道人は但五通を名づくるのみ、皆此の眞智を得ざるを以ての故なり。

問曰　無我智を以て應に我見を破すべし、云何が此れを以て貪恚等を斷ずるや。

答曰　無我智は能く諸相を滅す、無相を以ての故に諸の煩惱が滅するなり。

問曰　初めの無我智を以て能く諸相を壞せば、第二の智等は更に何の用ふる所ぞ。

答曰　諸相は滅すと雖も還生ず、是の故に第二等を須ふ。

問曰　若し滅し已りて還生ぜば相は則ち無邊なり、然らば則ち阿羅漢道無けん。

答曰　有邊なり。今現見するに乳は滅して還生じ、有る時には乳が滅して酪が生ぜば是れを則ち邊と爲すが如く、相も亦是くの如し。又鐵を燒けば黑相は滅し還更に生じて赤相が生ずるに至らば爾の時を邊と名づくるが如し。迦羅邏等の諸喩も亦是くの如し。隨つて何れの時に於ても、諸相が滅盡して更に相の生ずること無くむば、爾の時を阿羅漢道を得と名づく。

問曰　阿羅漢には都べて諸相無きや。

答曰　若し不定心の中に在らば、爾の時にも亦色等の諸相あるも、但過を生ぜざるのみ。若し人の眼が色を見、邪心を以て邪分別すれば、爾の時には相は能く過を生ずるなり。

問曰　何れの者か是れ空無我智なりや。

答曰　若し行者にして五陰の中に於て假名の衆生を見ずむば、法は空なるを以ての故に色體の滅、

【三八】麗本は若に作る。今は三本宮本の善に作るに從ふ。これ三慧品第一百九十四に佛の所說法は三時に善なり等云云の引用と同一の文を指し、そこにて善男子といへるに當るものなれば、善人といふ方可なればなり。

【三九】外道に五通ありや否やは異部宗輪論によれば各部派の間にて異論あり。外道も五通を得となすは有部、犢子部等にして、外道の五通を得ること無しとなすは雪山部、化地部、法藏部等なり。元來五通は佛教が佛教以外の說より取入れたるものなるに、後世になりては却つて佛教特有にて佛教以外にては得られずとなすに至れるなり。

次第に憶せば一劫の中の事すら尚知り盡し難し、況んや無量劫をや。

問曰　經の中にて、何が故に我は九十一劫より已來、未だ布施の損じて而して報無きを見ずと說くや。

答曰　佛は此の中に於ては[三五]七佛を以て證と爲す。亦長壽の淨居有りて佛と同じく見ればなり。又佛は眞智を得たまふ故に功德は淸淨なり。若し人にして供養せば二世の福を得、故に此れに齊りて說くなり。有る人は言く、此の智は上地を知らずと。是の事は然らず。上の身通等の中にて已に答へたり。

問曰　若し是れにして性を憶せば、何が故に智と名づくるや。

答曰　憶は相に隨ひて生じ、過去は相無きも而も能く憶念す、當に知るべし、勝慧なり、之を名づけて憶と爲す。宿命を憶するに三種あり、一には宿命智を用ふ、二には報得、三には生便自憶なり、宿命智は修得に名づけ、報得とは鬼神等の如く、生便自憶は謂く人道の中なり。

問曰　何れの業を以ての故に生便自憶なりや。

答曰　衆生を惱さざる此の業を以て能く得るなり。所以は何、死時にも生時にも苦が切逼するが故に憶念せるを忘失すれば、此の中にて失はざることを得ること難し、故に善業を須ふるなり。又人は言く、此の憶は過去は極まつて七世に至ると。是の事は不定なり。有る人は世世に深く不惱の法を修するが故に能く久遠を憶念すればなり。

證漏盡智通とは[三六]金剛三昧是れなり。金剛三昧は是れ漏盡なり。無礙道の漏盡智を無學智と名づく、金剛三昧を以て諸漏を滅盡するを證漏盡智通と名づくるなり。

問曰　餘の神通も亦應に何れの法を以て證すと說くべし。

答曰　先に已に深く禪定を修して[三七]神足通を證すと說きたり。又所用に隨つて證と及び所證の事

【三五】　七佛とは所謂、過去七佛なり。毘婆尸佛(Vipaśyin)、尸棄佛(Śikhin)、毘舍浮佛(Viśvabhū)、拘留孫佛(Krakucchanda)、拘那含牟尼佛(Kanakamuni)、迦葉佛(Kāśyapa)、釋迦牟尼佛 (Śākyamuni)なり。

【三六】　金剛三昧は金剛喩定ともいはるる如く金剛は堅鋭なる他に比なきに喩へて名づけたるものにて一切の障を斷盡する最後の三昧なり。

【三七】　前の身通と同じ。身通は神通にて、神通は又神足通ともいへばなり。原語はリッディパーダ(ṛddhipāda)にて、リッディを神通とも、單に、神とも譯し、パーダは足なり。故に神通足にても可、神足にても可なり。神足に更に六通の一般名としての通の字を加へて神足通ともいふなり。

一には相知、二には報得、三には修得なり。相知とは薔伽呪等を以ての故に[三二]知るが如し。報得とは鬼神等の如し。修得とは謂く禪定力にて他心智を得るものにして、此の六通の中にて說くは修得なる者なり。

若し過去世の中の諸陰を憶すれば、宿命智と名づく。

問曰　何れの陰を憶すと爲すや。

答曰　自の陰と他の陰と及び非衆生の陰とを憶し、唯勝者の諸陰を憶すること能はざるのみにして、能く勝者の戒等の諸法をば憶す。何を以てか之を知る。[三三]舍利弗の佛に答へて言へるが如し、我は去來の佛の心を知らずと雖も能く其の法を知ると。又[三四]淨居天は佛の心を知るが故に來りて佛に白して言く、是くの如し、世尊よ、過去の諸佛の威儀も亦爾りと。

問曰　宿命を辨する中にて何が故に共相と共性とを說くや。

答曰　憶念が明了なるが故に是くの如く相の名字を說く、某の人の如し等と。又事を識るを以ての故に名づけて相と爲し、性は種族に名づく、此れは是れ汝が家なり、此れは是れ汝が性なりと言ふが如し。相と性と合して說くが故に知見が明了なるなり。

問曰　何が故に明了の憶と爲るや。

答曰　過去の法は盡く滅して相無きも而も能く知ることを得、此れを奇特と爲す。有る人は相を思量して知るを以て明了なること能はず、謂く佛弟子も亦是くの如し。是の故に性相合して說くなり。有る人は宿命智を用ひて、或は有道の思慧を以て、過去世を知る、行が識に緣たるが如し。此の二種の中にては思慧を勝と爲す。所以は何、是の人は八萬大刧を知ると雖も此の思慧なきが故に邪見を生ずればなり、謂く此れより來(このかた)を名づけて生死と爲し、此れを過ぎて更に有道の思慧なく終に此の心無しと。有る人は言く、此の智は次第に過去を憶念すと。是の事は然らず。若し念念に

[三二]　大正大藏經は知に作る。誤植なり。
[三三]　パーリ涅槃經の中にあり。
[三四]　淨居天とは、色界第四禪にある五地を指す、無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天なり。

く。有る人は言く、此の智は同性緣なり、有漏を以て有漏を知り、無漏にて無漏を知るが如しと。此の事は然らず。此の人決定の因緣――此の因緣を以て同性緣なりと知る――を說かざればなり。有る人は言く、但現在のみを緣ずと。此れも亦然らず。或は未來を緣ずること、人の無覺定に入るも、此の定より起てば、當に是くの如き是くの如き事を覺すべしと知るが如くなればなり。有る人は言く、此の智は見諦道を知らずと。是の事は然らず。若し知るも何の咎ならんや、有るが說く、辟支佛は見諦道の中の第三心を知らんと欲して卽ち第七心を見、聲聞は第三心を知らんと欲して卽ち第十六心を見る、此れ見諦道を知ると名づけざらんや。又人は言く、此の智は上地上人上根を知らずと。是れも亦不定なり。諸天も亦佛の心を知ればなり、佛が一時深く衆僧を擯せるも還念じて取らんと欲せしを、梵王が悉く知りしが如し。又一時に於て心に念じたまはく、王と爲りて法の如くに世を化せんと、魔王卽ち知り而して來りて勸請せり。又諸天も亦此れは是れ羅漢なり、乃至、此れは是れ須陀洹なりと知る。又諸の比丘も亦佛の心を知る、佛が將に泥洹したまはんとする時に阿那律は次第に佛の入りたまふ所の諸の禪定を知りしが如し。又人は言く、此の智は無色を知らずと。是れも亦然らず、佛は宿命を以て能く無色を知りたまふ、他心智も亦是くの如し。知るも何の咎あらんや。

問曰 云何が他心を知るや。

答曰 緣の中に於て知るなり。若し心にして色に行ぜば色を緣ずる心と名づく、是くの如き等なり。

問曰 若し爾らば則ち他心智は一切法を緣ずるや。

答曰 是くの如し。若し緣を知らずんば、云何が心を知らんや。經の中にて說くが如し、我は汝が心の是くの如く是くの如くなるを知ると。卽ち是れ色等を緣ずるなり。他心を知るは三種なり、

くの如くならざればなり。
問曰　經の中にて說く、光明相を修せば能く知見を成ずと。知見は卽ち是れ天眼なり。
答曰　然らず。亦說く、天耳も慧性を以て之を名づけて耳となさずと。故に慧には非ざるなり。
又天眼は現在の色を緣ずるに、意識は爾らず。有るが天眼を解する中にて說く、衆生の業報を知るに、眼識には此の力あること無く、但意識の中の知が眼識を用ふる時に生ずるなり。故に知る禪定より生ずる色を名づけて天眼と爲す。
問曰　天眼の形處は、大なりや小なりや。
答曰　童子の量の如し。
又問　盲人は云何。
答曰　亦眼處に齊し。
又問　天眼は一と爲すや、二と爲すや。
答曰　是れ二なり。
又問　隨つて向ふ所の方を見るや。
答曰　遍く諸方を見る。
又問　化人にも有りや。
答曰　無し。化を造る者には有り。
天耳の論も亦是くの如し。
行者にして若し他心を知らば他心智と名づく。
問曰　何が故に他の心數を知ると說かざるや。
答曰　此の因緣を以ての故に別に心數有ることなきなり。他の受想等を知るをも亦他心智と名づ

る等の中に於て自在力を得れば、邊際智と名づく。

六通智品　第一百九十七

六通智あり。六通とは身通と天眼と天耳と他心智と宿命と漏盡となり。

[三二]身通とは行者が身より水火を出し、飛騰し隱顯し、日月を摩捫し、梵に至る自在と及び種種の變化とに名づく。是くの如き等の業を名づけて身通と爲す。

問曰　此の事は云何が當に成ずべきや。

答曰　行者は深く禪定を修するが故に得るなり。經の中にて說くが如し、禪定の者の力は不可思議なりと。有る人は言く、變化心は是れ無記なりと。此の事は然らず。若し此の行者にして他を利せんが爲の故に種種に變を現ぜば何が故に無記と名づけんや。有る人は言く、欲界心を以ては欲界の變化を作し、色界心にては色界の變化を作すと。此れも亦然らず。眼等も亦應に是くの如くなるべければなり。欲界の識を以て欲界の色を見るべきや。是くの如き等なり。若し色界心にて欲界の變化を作さば、何の咎かあらんや。又人は言く、初禪の神通は能く梵世に至り、乃至四禪の神通は能く色究竟に至ると。是れも亦然らず、根力の及ぶ所に隨へばなり。若し利根ならば、初禪の神通を以て能く四禪に在り、鈍根ならば、二禪の神通を以てしても初禪を用ふること能はず、大梵王が禪の中間に至るに、此の中にては神通の初禪の力を以て能く諸餘の梵天に到るもの無きが如し、即ち初禪は梵王の住處を知ること能はざるを以てなり。又佛は宿命を以て無色を憶念したまふ、經の中にて說くが如し、若しくは色無色の中の先の所生の處にても佛は悉く之を知りたまふと。是の故に不定なり。

有る人は言く、天眼は是れ慧性なりと。此の事は然らず。天眼は光明に由つて成ずるも、慧は是

【三二】通常いふ神通なり、身體に關するものなる點より身通となしたるに過ぎず。

爲す、是の中には有無くもて、而も名のみは有なりと爲さば、此れ則ち不可なり。盡く滅するを以ての故に、說いて泥洹と名づくればなり。猶衣が盡きて更に別の法なきが如し。若し爾らずむば、亦應に別に衣盡等の法あるべし。汝は滅智ありと言はば亦妨ぐるところなし、樹を斷る等の中に於て智が生ずるも亦別に斷法あること無きが如し。又諸行に由るが故に是の中にて智生ず、謂く諸行の無なるに隨ひて名づけて泥洹と爲す、此の物無きに隨ひて此の物は空なりと知るが如し。

問曰　今泥洹無きや。

答曰　泥洹無きには非ず、但實法無きのみ。若し泥洹無くんば、則ち常に生死に處して永く脫する期無し、瓶の壞と樹の斷と有るは但實に別法あるに非ざるが如し。餘諦等と言ふには皆已に通じて答へたり。所以は何、苦の滅あるが故に[二九]不生不起不作無爲の法等有りと說くも悉く害する所無ければなり。

無諍智とは隨つて何れの智を以てするも他と諍はずむば、此れを無諍と名づく。有る人は言く、慈心是れなり、慈心を以ての故に衆生を惱まさざればなりと。復有る人は言く、空行是れなり、此の空行を以て物と諍はざればなりと。又有る人は言く、泥洹を樂ふ心是れなり、泥洹を樂ふを以ての故に諍ふ所無ければなりと。有る人は言く、第四禪に在りと。此れは必ずしも爾らず、是れ阿羅漢ならば此の智を以て心を修めて皆諍ふ所無ければなり。

願智とは諸法の中に於て障礙無き智を名づけて願智と爲す。

問曰　若し爾らば、唯佛世尊にのみ獨り此の智有り。

答曰　是くの如し。唯佛世尊のみ此の智を具足し、餘人は力の及ぶ所に隨ひて障礙なきことを得るのみ。

邊際智とは行者が最上智を得るに隨ひて一切の禪定を以て[三〇]熏修し增長し、若しは壽命を增損す

【二九】　聖行品第一百九十二の註參照。

【三〇】　麗本は勳に作る。

なり、色を滅するが故に泥洹は是れ常なり、乃至識も亦是くの如しと。又經の中にて說く、滅は應に證すべし、若し法無くんば、何の證する所ぞ。又佛は多性經の中にて說く、智者は、實の如くに有爲の性と及び無爲の性とを知る、と。無爲の性は卽ち是れ泥洹にして、眞智を以て知れば、云何ぞ無なりと言はんや。又諸經の中にて定んで泥洹は無法なりと說くこと有ることなし。故に知る、汝が自ら憶想分別して、泥洹無しと謂ふのみ。

答曰　若し諸陰を離れて更に異法の泥洹と名づくる者あらば、則ち應に諸陰の滅盡せるを名づけて以て泥洹と爲すべからず。又若し泥洹あらば、應に其の體を說くべし、何れの者の是れなりや。經又泥洹を緣ずる定を名づけて無相と曰ふ、若し法相にして猶存せば、何ぞ無相と名づけんや。經の中にて說くが如し、行者は色相の斷を見、乃至、法相の斷を見ると、又經の中にて處處に一切行は無常なり、一切法は無我なり、寂滅泥洹と說く。是の中にて我は諸法の體性に名づくれば、若し諸法の體性を見ずむば、無我を見る者と名づく。若し泥洹にして是れ法ならば則ち體性無くして見ることを得べからず、此の法は滅せざるを以ての故なり。隨つて甁有る時には、甁無きは壞法なれば、若し甁の壞する時には甁が壞すと說くことを得るが如く、樹を斷る等も亦是くの如し。是くの如く若し諸行にして猶在らば爾の時には泥洹とは名づけずして、諸行が滅するが故に泥洹の名あるなり。又苦が滅せば更に別の法ありとは名づけず。經の中に說くが如し、諸の比丘よ、若し此の苦が滅して餘の苦が生ぜずして更に相續すること無くんば、是の處は第一寂滅安隱なり、所謂一切を捨離して身心の貪愛は永く盡きて離滅するなりと。泥洹とは是の中にて此の苦が滅して餘の苦は生ぜざるを言ふに、更に何れの法有りて泥洹と名づけんや。又亦更に別に盡の法有ること無し、但已生の愛は滅し未生のものは生ぜざる爾の時をのみ盡と名づく、更に何れの法有りて說いて盡と名づけんや、實に說くべからず。復次に、有は是れ法の異名にして、五陰の法の無なるを名づけて泥洹と

漏となり。學人は二種を具するも、無學は唯無慧のみなり。若し得るときは則ち一時に盡く得。女人も亦得ること、[二七]曇摩塵那比丘尼等の如し。

五智品　第一百九十六

五智とは法住智と泥洹智と無諍智と願智と邊際智となり。諸法の生起を知るを法住智と名づく、生は老死に緣たり、乃至、無明は行に緣たるが如く、有佛なるも無佛なるも此の性は常住なるを以ての故に法住智と曰ふ。

此の法にして滅せば[二八]泥洹智と名づく、生が滅するが故に老死が滅し、乃至、無明が滅するが故に諸行が滅するが如し。

問曰　若し爾らば、泥洹智も亦法住智と名づく。所以は何、若しくは有佛なるも無佛なるも是の性は亦常住なるが故なり。

答曰　諸法にして盡滅せば名づけて泥洹と爲す。是の滅盡の中には何れの法有りて住せんや。

問曰　泥洹は實有なるに非ずや。

答曰　陰が滅して無餘なるが故に泥洹と稱す、是の中には何の所有あらんや。

問曰　實に泥洹有り。何を以て之を知るや。滅諦を泥洹と名づくればなり。苦等の諸諦は實有なるが故に泥洹も亦應に實有なるべし。又泥洹の中の智を滅智と名づく、若し法にして無ならば、云何ぞ智を生ぜんや。又經の中にて佛は諸の比丘の爲に說く、生起あらば有爲法を作し、不生あらば無爲法を起作すと。又經の中にて說く、唯二法のみ有り、有爲法と無爲法となり。有爲法には生滅住異あるも無爲法には生滅住異なしと。又經の中にて說く、諸の所有の法は若しくは有爲にても若しくは無爲にても滅盡せば泥洹なり、唯此れのみを上と爲すと。又說く、色は是れ無常

【二七】曇摩塵那比丘尼（Dhammadinnā）王舍城の人、毘舍佉（Visākha）といふ者の妻となる、夫が優婆塞となるに及び夫の了解を得て出家す、悟りて後、鄉里に歸り夫の來訪を受け一一その問に答へ深き佛教の理解を示す。立論品第十三參照。

【二八】此の法の滅を知るを泥洹智といふの意。

問曰　經の中にて四無礙智を說く、何れの者か是れなりや。

答曰　名字の中にて礙無き智を法無礙と名づけ、言音の中にて礙無き智を辭無礙と名づく、謂く殊方異俗の言音の差別なり、經の中にて說くが如し、行者は應に國土の言辭に貪著すべからずと。若し言音にして便ならずむば、義も亦解し難く、若し名字無くむば、則ち義は明らむべからず。即ち此の言辭の留らず盡きざるを樂說無礙と名づく。經の中にて說くが如し、四種の說法あり、或は說にして義趣が無盡なること能はざるあり、能く無盡にして而も義趣なきあり、二つ倶に能くするあり、二つ倶に能くせざるありと。此三種の智を言辭の方便と名づく。名と語との中の義を知るに礙無き智を義無礙と名づく。四種の說法あり、義の方便にして語の方便なきあり、語の方便にして義の方便なきあり、倶に方便なるあり、倶に方便無きありと說くが如し。若し人にして能く四無礙智を得れば是れを具足方便と名づく。詣へ難く近づき難き說法の中にても上の樂說は盡くることなく、亦義趣もあり智慧は窮まりなく言辭は滯ることなし。

問曰　此の無礙智をば云何が當に得べきや。

答曰　先世の業の因緣を以ての故に得。若し能く世世に善く因緣の智慧及び陰等の方便を修せば、修習力を以ての故に、今世には文字を學習し經典を讀誦せずと雖も、亦能く知ることを得ること、天眼通等の如し。

問曰　何人か能く得るや。

答曰　唯聖人のみ能く得。又人は言ふ、但阿羅漢のみ得、諸の學人には非ずと。此れ必ずしも爾らず。學人も亦能く八解脫を得れば、何が故に此の智のみを得ること能はざらんや。

問曰　此の四無礙は何れの界の中に在りや。

答曰　欲色界の一切にして、無色界の中にては唯義無礙のみなり。無礙は二種にして、有漏と無

答曰　欲界の淨善を得ば能く不善を斷ずること、[二四]五出性を說くが如し。若し聖弟子にして或は五欲は喜樂を生ぜずと念ぜば、心は通暢せざること、筋羽を燒くが如きも、若し出法を念ぜば、心は則ち通暢す。又說く、行者にして隨つて不善の覺觀を生ぜば、則ち善の覺觀を以て滅すと。是の故に汝が楯の喩を說くも亦欲界なるべし。汝は色に因りて欲を離ると言ふも、是れ末後の事なり。行者は欲界道を以て諸の煩惱を斷じ、次に隨ひて漸くに斷じて乃至能く色界の善法を得、爾の時には欲界を畢竟斷と名づく。色界の法を得れば、汝は滅盡定を得、阿羅漢も亦諸定を得と名づく。但其の[二五]味のみを說くのみなり。汝が淨妙なる喜と及び寂滅の味とを得と言ふは皆已に總じて答へたり。又若し欲界に定無くんば云何ぞ能く散心を以て色界の善を證せんや。

問曰　慧解脫の阿羅漢には定無きも亦但慧のみは有り。

答曰　此の中にては但禪定のみを遮す、必ず當應に少時の攝心乃至一念あるべし。經の中にて、佛が比丘の衣を取る時に三毒あるも衣を著け已れば則ち滅すと說くが如し。經にて散亂心の中に能く眞智を生ずと說くこと有ること無く、皆心を攝して如實智を生ずと說く。

[二六]四無礙智品　第一百九十五

問曰　法位に近き世智ありと、何れの者か是れなりや。

答曰　是れ煖等の法の中にて能く假名を破する智なり。是の智は世俗を以て諦を見るが故に世智と曰ひ、聖道に近きが故に法位に近しと名づく。

問曰　見諦道の中の未來の修等の智なり。

答曰　未來修等の智なし、後に當に說くべし。所以は何、法相を破する中には假名心なし、是の故に見諦道の中にては世智を修せず。

[二四]　五出性は法聚品第十八に六出性とある中の初一を省きたるものならむか。

[二五]　三本宮本は味を末に作る。

[二六]　麗本のみは智を缺くも目錄品名には存す。今之を取る。四無礙智、は四無礙辯とも四無礙解とも云ふ、法無礙、辭無礙、樂說無礙、義無礙の四を云ふ。

身見を遮せば、先に已に過を說きたり、若し欲界の身見を遮すること能はずむば、云何ぞ能く色無色界に生ぜんや。但貪恚を遮するのみなるが故に色界に生ず、身見等を遮するに非ず。故に知る凡夫は實には結を斷ぜず。亦欲界の善法の能く煩惱を遮するものあり。故に知る欲界にも亦修慧あり。又經の中にて說く、[二一]七依處を除くも亦道を得ることを許すと。故に知る欲界定に依りて能く眞智を生ず。

問曰　是の人は初禪の近地に依りて阿羅漢を得るものにして欲界定には非ず。

答曰　然らず。七依を除くと言ふは則ち初禪及び近地を除くのみなり。又此の中には因緣として能く近地に依りて欲界定には非ざること有ることとなし。若し此の行者にして能く近地に入らば、何が故に初禪に入ること能はざらんや。是の事も亦因緣なし。又[二二]須尸摩經の中にて說く、先は法住智にして後は泥洹智なりと。是の義は必ずしも先に禪定を得て而して後に漏盡するにはあらず、但必ず法住智を以て先と爲して然る後に漏盡するなり。故に知る諸の禪定を除く。禪定を除くが故に須尸摩經を說くなり。若し近地を受くれば即ち過は諸禪に同じ。又經の中にて、近地の名を說くもの有ること無ければ、是れ汝が自ら憶想分別するのみなり。

問曰　我は先に楔の喩を說きたり。故に知る異地の道を以て能く異地の結を斷ずるなり。細楔を以て能く麁楔を出すが如く、是くの如く色界道を以て能く欲界を斷ずるなり。行者にして先に欲及び惡不善の法を斷ぜば然る後に能く初禪に入る。故に知る必ず近地ありて之を以て欲を斷ずるなり。又說く、色に因りて欲を出づと。若し近地無くんば云何が色に因らんや。又經の中にて說く、行者にして若し淨喜を得ば則ち能く不淨喜を捨つること猶[二三]難陀が天女の愛に因りて、能く本欲を捨てしが如し。又若し初禪の寂滅味を得ずむば、五欲の中に於て麁弊心を生ずること能はず。故に知る先に初禪の近地を得て能く欲界を捨つるなり。

三本宮本にはなし。なき方可なること詩形上明なり。

【二一】初禪より無所有處までといふ。七三昧品第一百六十二參照。

【二二】七三昧品第一百六十二及び斷過品第一百三十九に引用せられ居たり。

【二三】難陀(Nanda)は釋尊の異母弟なり佛陀歸城の二日目に彼は結婚式を擧げんとせしを佛陀によりて强いて出家せしめらる。家を出でんとせし時、その姬の「早く歸り來ませ」と叫びし語、胸を貫ぬいて忘る能はず、從つて修行を樂しまず、佛陀は仍て神通を以て猿と天女とを見せ修行を勸めらる、難陀始めて修道し遂に羅漢果を得たり。人人は難陀は女を餌として化せられたるものと批評す。茲に本欲と云へるは、其の姬を思ふの情を指す。具足品第一參照。

實には煩惱は都べて盡くことを得ず。經の中に說くが如し、大雷音を聞くも二人のみは怖れず、轉輪聖王と及び阿羅漢となりと。今此の凡夫も亦應に怖れざるべし。又阿羅漢は生を欣ぶと死を惡むとをせず。[一六] [一七]優波斯那阿羅漢が毒蛇の爲に螫されて將に命終せんとせし時に諸根は異らず顏色は變ぜざりしが如く、是の人も亦應に是くの如くなるべし。又阿羅漢は世間の[一八]八法にも心を覆ふこと能はず、此の人も應に是の如くなるべし、離欲を以ての故なり。而も實には凡夫は離欲なりと說くと雖も皆此の相無し、故に知る煩惱を斷ぜず。

問曰 凡夫は能く煩惱を斷じ、此の間に命終して色界に往生す。若し結を斷ぜずむば、云何ぞ彼(かしこ)に生ぜんや。經の中にても亦說く、離欲の外道ありと。又說く、[一九]阿羅邏迦羅摩と欝頭藍弗とは欲色を捨離して無色の中に生ずと、又說く、色を以て欲を離し無色を以て色を離し滅を以て起思の念を離すと。是の故に、汝が凡夫は煩惱を斷ずと雖も還(また)生ずるを以ての故に名づけて斷とは爲さずと言ふは是の事は然らず。汝も亦說く、凡夫の所有の所斷は實には皆是れ遮なりと。但名のみは斷離と爲すも其の實は斷ならざるを說いて名づけて斷と爲し、實には欲を離れざるも說いて離欲と名づくるのみ。偈の中にて說くが如し、

若し我我所を念ずるも　死が來るときは則ち能く斷ず、
小兒の土を弄して戲るるに　隨つて愛する時には[二〇]悋護するも
若し心に厭離する時には　卽ち壞して而も捨て去る、と。

此れをも亦離欲と名づく。而も外道の斷は死斷とは異りて、死斷は色無色界に生ぜず。小兒は土を捨つれば、之を供養すと雖も大果報無く、若し離欲の外道を供養すれば大果報を得。語言は同じと雖も其の義は則ち異る。故に知る凡夫には實に斷離有り。

答曰 遮の中に差別あり、若し能く深く煩惱を遮するときは、則ち色無色界に生ず。又若し能く

【一六】三本宮本は、生を欣ばず死を惡まず、此人も亦應に是の如くなるべしと作る。
【一七】優波斯那(Upasena)は憍薩羅國の人、もと調象師なり、王舍城の寒林蛇池洞に於て毒蛇に嚙まれし時、舍利弗が病床に見舞ひ、その顏色の變らざるを讚ず、その時、答へて曰く、「五根を我と見、我がものと思へばこそ、顏色も變らめ、我は然か見ざるが故に變らず」と。
【一八】通常八風といふ。利衰毀譽稱譏苦樂にて四の逆と四の順となり。
【一九】大正大藏經は阿羅漢に作る。漢は羅の誤植。三本宮本は阿羅羅に作る。麗本は前に阿羅邏となり。これ可なり。阿羅邏迦羅摩、欝頭藍弗は共に佛陀成道以前に就きたる仙なり。佛陀は出家後、先づ阿羅邏迦羅摩に就いて道を求む、彼は佛陀に無所有處のことに就いて語る。佛陀は間もなく無所有處を證得せしも、そが眞の悟に非らざるを知り、去つて、欝頭藍弗の許に行く。彼は佛陀に非想非々想處のことを語る。佛陀間もなくそれを證得せしも、又眞の道に非らざるを知つて、去つて自ら道を求む。
【二〇】麗本には則の字あるも

くせずして而も色界にては能くするや。

問曰　欲界には塵等ありと雖も而も諸の煩惱を斷ずること能はず、是れ散亂界なるを以ての故なり。散亂心ならば能く斷ずる所無し、經の中にて說くが如し、心を攝するは是れ道にして散亂心は道に非ずと。

答曰　應に因緣を說くべし、何が故に欲界を散亂界と名づくるや。是の中には不淨觀等あり、若し是れ散亂界ならば、云何ぞ能く骨等の異相を觀ぜんや。又色界にては心を攝するに何の異相かありて而も欲界には無きや。

問曰　色界道は能く離欲を得るを以て、此の間に於て死せば色界の中に生ずること、梯にて梯を出すが如し。

答曰　何をか離欲と名づくるや。

問曰　煩惱を斷ずるを離欲と名づく。色界道を以て能く煩惱を斷ずるものにして、欲界には非さるなり。

答曰　諸の外道は結を斷ずるも還起して還欲界に生ず、是の故にて凡夫は結を斷ずと名づけず。若し斷じ已りて更に生ぜば、則ち無漏にして結を斷ずるも亦應に更に生ずべきも、是の事不可なり。又經の中にて說く、三結を斷じ已りて能く三毒を斷ずと。凡夫は三結を斷ずること能はざるが故に離欲を得ること無し。又凡夫は常に我等の心あるが故に能く身見等を斷ずること有ること無し。若し凡夫にして能く欲を離るれば、一切の煩惱は皆應に有るべからず。所以は何、一切の煩惱は皆衆緣より成ずればなり。經の中にて說くが如し、衆緣より我を成ずと。若し此の凡夫にして欲界の五陰に於て身見を起さずむば、復未だ上界の諸陰を得ず、然らば則ち應に身見なかるべし。此くの如き過あり。是くの如くならば煩惱は應當に永盡すべく、此の凡夫は應に是れ羅漢なるべきに、而も

問曰　是の三慧は幾くか欲界、幾くか色界、幾くか無色界なりや。

答曰　欲色界の一切なり、[一四]手居士が無熱天に生じ、彼の中にて法を說くが如し。若し人にして法を說かば、必ず其の義を思ふ。故に知る色界にも亦思慧あり。無色界の中には唯修慧あるのみなり。

問曰　有る人は言く、欲界には修慧なく、色界には思慧なしと。是の事は云何。

答曰　何の因緣の故に欲界には修慧なきや。

問曰　欲界道を以ては諸の蓋障と諸の纒とを斷じて欲界の纒をして現在前せざらしむること能はざればなり。

答曰　佛の法の中にては此の語有ること無し、欲界道を以ては諸の蓋障と諸の纒とを斷じて欲界の纒をして現在前せざらしむること能はずと。又說く、欲界道を以て能く煩惱を破すと。何となれば、欲界には不淨觀等あればなり。經の中にて、善く不淨觀を修せば、能く貪欲を破し、[一五]慈等も亦爾りと說くが如し。

問曰　是の欲界の不淨觀等は煩惱を永斷すること能はず。

答曰　色界の不淨觀等も亦畢竟しては諸の煩惱を斷ずること能はず。

問曰　麁重不適等の行を以て能く煩惱を斷ずるものにして不淨等には非ず。

答曰　經に麁等が能く煩惱を斷じ、不淨等は能はずと說くこと有ることなし。經の中にて說く、不淨等を以て能く煩惱を斷ずと。又麁等には何れの勢力ありて能く煩惱を斷じ、而も不淨等は能はざるや。又若し欲界に麁等の行あらば、應に此の行を以て諸の煩惱を斷ずべし。若し無くんば、應に因緣を說くべし、何が故に不淨等ありて而も麁等無きや。若し有りて而も煩惱を斷ぜずむば、色界にも有りと雖も亦應に能く斷ずべからず。是れも亦應に因緣を說くべし、何が故に欲界にては能

【一四】手居士(Hatthaka)は前の聚業品第百〇三品に手天子として出づるものと同じ右參照。

【一五】斷貪品第一百二十五、不淨想品第一百七十八參照。

慧を以て通達するは是れを修慧と名づく。又聞法の利の中にて說く、行者が耳を以て法を聞き口を以て誦習せば是れを聞慧と名づけ、意を以て思量せば是れを思慧と名づけ、見を以て通達せば、是れを修慧と名づく。又四須陀洹分の中にて、正法を聞くを聞慧と名づけ、正しく憶念するを思慧と名づけ、法に隨ひて行ずるを修慧と名づく。又五解脫門の中にて、所尊より法を聞くは是れを聞慧と名づけ、語義に通達するは是れを思慧と名づけ、歡喜を生ずる等をば名づけて修慧と爲す。又經の中にて言く、佛所說の法は[一一]三時に善なり等、善男子の若しくは長ぜるも若しくは幼なるも法を聞いて念を生ずらく、在家は憒[一二]鬧にして出家は閑靜なれば若し出家せざるときは則ち淨く善法を修すること能はずと、卽ち所有の親屬財物を捨てゝ出家し戒を持し諸根を守護し威儀詳審にして獨處思惟し五蓋を遠離して初禪等乃至漏盡を得と。此の中に於て長幼の法を聞くは是れを聞慧と名づけ、在家の憒鬧にして出家の閑靜なるを念ずは是れを思慧と名づけ、五蓋を遠離し乃至、漏盡するは是れを修慧と名づく。又經の中にて說く、二の因緣の故に能く正見を生ず、他より法を聞くと自ら正憶念すとなり。他より法を聞くを聞慧と名づけ、自ら正憶念するを思慧と名づけ、能く正見を生ずるを修慧と名づく。又偈の中にて說く、

[一三]當に善人に習近して　正法を聽受し
獨處を樂しみて　其の心を調伏すべし、と。

是の中にて、善人に習近して正法を聽受するは是れを聞慧と名づけ、獨處を樂しむは是れを思慧と名づけ、其の心を調伏するは是れを修慧と名づく。又佛は諸の比丘に敎へたまはく、汝が所說の時には當に四諦を說くべく所思惟の時には當に四諦を思ふべしと。是の中にて四諦を說くが若きは聞慧と名づけ、四諦を思惟せば思慧と名づけ、四諦を得れば修慧と名づく。是くの如き等の處處の經の中にて佛は三慧を說きたまへり。

【一一】佛の說く法が初も善、中も善、後も善といはるる初中後を三時といへるなり。初中後善に續いて、文あり義あり云云といひ、一種の型となり居るものなれば、等の字にて省略せるなり。等は云云といふと同じ。
【一二】縮刷藏經はここにては閙に作る。鬧も閙も同じ。
【一三】四字一句の詩形なれば、初句は一字餘る。當か習か何れかが竄入なるべし。

問曰　經の中にて、智者と見者とは則ち漏盡を得と說く。何の差別ありや。

答曰　若し智にして初めて假名を破せば名づけて知と爲し、法位に入り已るときは則ち名づけて見と爲し、始めて觀ずるを知と名づけ、達了するを見と名づく。是くの如き法ありて深淺等が別なり。

三慧品　第一百九十四[八]

三慧とは聞慧と思慧と修慧となり。修多羅等の十二部經の中より生ずるを名づけて聞慧と爲す、此れを以て能く無漏の聖慧を生ずるが故に名づけて慧となすなり。經の中にて說くが如し、羅睺羅比丘は今能く解脫を得る慧を成就したりと[九]。違陀等の世俗の經典を聞くと雖も無漏の慧を生ずること能はざるを以ての故に聞慧とは名づけず。若し能く諸經の中の義を思量すれば、是れを思慧と名づく。行者は法を聞いて善趣を思惟すと說くが如し。又說く、行者は法を聞き義を思惟し已りて當に隨順して行ずべしと。若し能く知見を現前すれば、是れを修慧と名づく。行者は定心の中に於て五陰の生滅を見ると說くが如し。諸經の中にて、汝等比丘にして禪定を修習せば當に實の如くに知見を現前することを得べしと說くが如し。又七正智經の中にて說く、若し比丘にして法を知らば聞[一〇]慧と名づけ、義を知らば思慧と名づけ、時等を知らば修慧と名づくと。又羅睺羅が五受陰部等を讀誦するを聞慧と名づけ、獨處して義を思するを思慧と名づけ、後に道を得る時を修慧と名づくるが如し。又經の中にて三種の器杖を說く、聞杖と離杖と慧杖となり、聞杖は聞慧に名づけ、離杖は思慧に名づけ、慧杖は修慧に名づく　經の中にて聞法の五利を說く、未だ聞かざるを則ち聞くと已に聞けるは明了となると疑を斷ずと正見と慧を以て甚深の義趣に通達すとなり。未だ聞かざるを則ち聞くと已に聞けるは明了となるとは是れを聞慧と名づけ、義を斷ずと正見とは是れを思慧と名づけ、

【八】　三本宮本はここより第二十卷とす。

【九】　立假名品第一百四十一に同一文の引用あり。具足品第一、四無礙品第二百一參照。

【一〇】　阿含經の一部を指す。恐らく雜阿含などにあるかかる部なるべし。

田成就と名づく。是の故に正智は卽ち是れ正見なり。又[五]六和敬の中の第六和敬を說いて同見と名づくるも、若し汝が說の如くんば、則ち盡と無生との智は和敬とは名づけず。又正觀なるが故に正見と名づくれば、盡と無生との智は正觀なるを以ての故に正見と名づくるなり。

問曰、五識相應の慧は但智なるのみにして見には非ず。

答曰　何が故に見に非ざるや。

問曰　五識は皆無分別なり。初めて緣に在るを以ての故に見を思惟觀察と名づく。又五識は但現在のみを緣ず、是の故に見には非ず。

答曰　是の中には覺觀なきが故に分別すること能はざるなり。若し初めて緣に在るが故に見には非ずと言はゞ是の事は然らず。所以は何、汝が汝が法にては、眼識には相續緣あること意識の如くなる故に應に初めて緣に在りとは言ふべからざればなり。若し爾らば、意識にも亦應に見あるべからず。又汝は現在のみを緣するが故に見には非ずと說くも、是れも亦然らず。他心智も亦現在を緣ずれば、是れも亦應に見に非ざるべければなり。五識の中には眞實知なし、行無きを以ての故なり。亦常に假名に隨ふが故に見と智と慧と等は一切皆無きなり、況んや但見無きのみならむや。

問曰　有る人は言く、眼根を見と名づくと。是の事は云何。

答曰　眼根は見には非ず、眼識が能く[六]緣ずればなり。俗の言に隨うて說くが故に眼見と曰ふのみ。

問曰　有る人は言く、八見あり、謂く[七]五邪見と世間の正見と學見と無學見となり、此の八見を除いては餘の慧は名づけて見とは爲さずと。是の事は云何。

答曰　若し見と智とは解了することを得て通證すれば、皆是れ一義なり。若し此れは見にして此れは見には非ずと言はゞ、皆自ら憶想分別して說くのみ。

【五】六和敬とは一般の衆僧が共同和合してなす凡ての行持を六種に分類せしもの、一に身和敬、二に口和敬、三に意和敬、四に戒和敬、五に利和敬、六に見和敬なり。順序は身口意見戒利なることもあれど、ここにては見を第六となす順序のものなり。

【六】これ所謂識見家の說にて、論主の取る所なること前にも出でたり。

【七】五邪見は邪見を開いて身見邊見邪見見取見戒取見となす時をいふ。

り。又佛が解[三]智義の中にて說く、實の如くに知るが故に智と名づくと。忍も亦實の如くに知るが故に應に異あるべからず。若し汝にして未知根を以ての故に名づけて忍と爲さば、是の事は然らず。我等は先に忍にして後に智なりとは說かずして、一心の中に於て卽ち忍智と名づければ是の義は成ぜざればなり。汝は云何が不成を以て相成ぜむや。汝が忍は未だ訖らざるに名づくと言ふは我は已に先に答へたり、謂く、先に知りて後に忍す、當に知るべし、忍は卽ち訖りと爲す。若し訖りたることを知らずんば、云何が能く忍せむや。汝は忍の時は未了なりと言ふも、汝が法の中にては忍を以て結を斷ず、如し其れ不了ならば、何ぞ能く結を斷ぜんや。汝は忍の時には疑は猶隨逐すと言ふも、若し爾らば、見諦道の中にては皆疑の隨ふありて、是の中にて智が生ずるも皆應に智に非ざるべし。又是れは忍なり是れは智なりと分別すること有ること無し。世間の觀が四諦に隨順するを亦名づけて忍とも爲し亦名づけて智とも爲すが如く、無漏の忍智も亦應に是くの如くなるべし。

問曰　盡智と無生智とは但智なるのみにして見には非ず。

答曰　何れの因緣ありや。

問曰　經の中にて、別に正見と正智とを說くが故に智は見には非ざるなり。

答曰　若し爾らば則ち正見は正智とは名づけず。若し汝にして正見は是れ正智なりと謂はゞ、正智も亦應に是れ正見なるべし。又[四]五分法身にては慧品の中より別に解脫知見を說く、應當に慧に非ざるべし。然らば則ち盡智と無生智とも亦是れ慧には非ず。今は卽ち正見は異相を以ての故に說いて正智と名づくとなす、謂く一切の煩惱を盡し阿羅漢の心中に於て生ずるが故に說いて正智と名づくるなり。

問曰　若し正智にして卽ち是れ正見なるときは則ち阿羅漢は十分成就とは名づけず。

答曰　體は一にして而も名を異にするのみ、法智と苦智との如し。又阿羅漢を說いて八功德の福

【三】　三本宮本は智を脫に作る。

【四】　五分法身は戒、定、慧、解脫、解脫知見なり。元來戒定慧の三學より解脫と解脫知見とを明けるものにして、他の方面にては三學より解脫のみを開きて四法となすことも行はれ居る法數なり。ここにては解脫知見は三學中の慧より別出したるものとなすなり。

見智品第一百九十三

問曰　正見と正智とは何の差別あるや。

答曰　是れ即ち一體にして差別あることとなし。正見は二種なり、世間と出世間となり。世間とは謂く罪福等有るなり、出世間とは謂く能く苦等の諸諦に通達するなり。正智も亦爾り。

問曰　汝が說く見と智との相は是くの如くにはあらず。所以は何、諸の忍は唯見なるのみにして智には非ざればなり。盡智と無生智と及び五識相應の慧とは但智なるのみにして見には非ず。

答曰　何が故に諸の忍は智には非ざるや。

問曰　未だ知らざるを知らんと欲するを以ての故に未知根と名づく。若し苦法忍にして是れ智ならば、苦法忍知し已れる苦法智は應に知根と名づけ、未知根と名づけざるべし。是の故に忍は智には非ず。又經の中にて說く、若し行者にして是の諸法に於て少しく能く慧を以て觀ぜば、忍は未だ訖竟らざるに名づけ、訖竟れば智と名づけ、若しくは忍は觀の未だ訖らざるに名づく。又初めの無漏慧が始めて見るを忍と名づくるも、應に初めに見るを以て智と爲すべからず。又忍の時は不了なるも、智の時は決了し、又忍の生ずる時には疑は猶隨逐するが故に忍は智には非ず。

答曰　忍は即ち是れ智なり。所以は何、欲と樂忍とは皆是れ一義なればなり。行者は先に苦を知り已りて然る後に忍樂すれば、若し先に知らずんば何の忍樂する所ぞ。又少語の中にては唯觀忍のみを說くも而も智をば說かず。然らば則ち應に行果を受くる者には智無かるべし。若し汝が意にして行者には智ありて而も名づけて忍と爲すと謂はゞ、今も亦應に受くべし。忍は即ち是れ智なればなり。又經の中にて說く、行者は時を知り時を見て即ち漏盡を得と。又說く、知と見とは是れ一義なるを得と。又佛は苦智と集滅道の智とを說くも忍ありとは說かず。故に知る智は即ち是れ忍な

の諸陰に因りて名づけて衆生と爲す。又若し聖人にして無漏心に在らば、爾の時にも亦有心の衆生と名づくるが故に無漏心も亦衆生と名づく。一切の諸陰は皆受陰と名づく、受より生ずるが故なり。

問曰　云何が皆受より生ずと知るや。

答曰　無漏法は皆布施持戒修定等の業心の中より生ず、無ならば則ち生ぜず。經の中にて說くが如し、無明の爲に覆はれ愛結に繫がるゝが故に愚夫は此の身を得、智者も亦是くの如しと。身は即ち受陰なり。

問曰　若し一切の陰は皆受陰と名づくれば、漏と無漏との陰に何の差別ありや。

答曰　一切の諸陰は受より生ずるが故に皆な受陰と名づけ、但後身を受けざるのみの故に無漏と名づく。是れを差別と名づく。陰は受陰と倶に受より生ずるが故に受陰と曰ふ。是の故に此の經は相違背せず。是の二行は皆無所有を緣ず。若し色等の法が空にして及び體性が滅ならば、皆是れ無所有なり。

問曰　此の二は皆五陰を緣ず、經の中にて說く、色の空にして無我なるを見、受想行識の空にして無我なるを見ると。

答曰　諸陰を空無我なりと見るに因る。所以は何、衆生の因緣の中に於て衆生の空なるを見、亦色等の法の滅をも見る。

問曰　是れ則ち倶に緣ずるなり。若し行者にして諸陰と及び空とを念ぜば、即ち陰と及び無所有とを緣ずと名づく。

答曰　行者は衆生の因緣の中に於て衆生を見ざるが故に即ち空心を生じ、然る後に空を見る。又五陰の滅の中に於ては色の體性も受想行識の體性をも見ず。故に知る此の二は皆無所有の緣なり。

巻の第十六[一]

聖行品　第一百九十二

二行あり、空行と無我行となり。五陰の中に於て衆生を見ずむば、是れを空行と名づけ、五陰も亦無なりと見れば是れ無我行なり。何を以てか之を知る。經の中にて說く、色に體性なきを見、受想行識にも體性無きを見ると。又經の中にて說く、無性に因りて解脫を得と。故に知る色性は眞實有に非ず、受想行識性も亦眞實有に非ず。

又經の中にて說く、五陰は皆空にして幻の如し、幻を眞實と爲すと說くべからず。幻にして若し眞實有ならば、名づけて幻と爲さず、亦無なりとも言ふべからず、但無實なるを以て能く誑惑を爲すのみなり。又此の行者は一切は空なりと觀ず。故に知る五陰は眞實有に非ず。一相を破するが故に壁等の一法をも見ざるが如く、五陰も亦爾り、一として實法なし。

問曰　若し色等の法も亦眞實に非ずんば、今は應に唯一の世諦のみなるべし。

答曰　滅は是れ第一義諦なるが故に有なり。經の中にて說くが如し、妄は謂く虛誑にして、諦は如實に名づくと。滅は卽ち是れ如實の決定なるが故に第一義の有と名づく。又行者は眞實智を生ず一切の有爲は皆悉く空無なり。故に知る滅は是れ第一義の有なり。[二]

問曰　汝は五陰の中には衆生なしと見ると說く。何に因りて五陰を說いて衆生と名づくるや、有漏と爲すや、無漏と爲すや。

答曰　亦は有漏、亦は無漏なり。

問曰　經の中にて說く、若し衆生を見れば皆是れ五受陰を見るなりと。

答曰　無漏法も亦衆生數に在るものにして、非衆生數の木石等の中には在らず。故に知る亦無漏

【一】三本宮本はここにて分巻せず。

【二】五智品第一百九十六の泥洹智參照。これ不生不起不作無爲法なり。

の中には無爲空あることを得ず。所以は何、人は無爲の中に於て我想を生ずるなきが故なり。設(たと)ひ餘の空有るも亦害する所無し、汝も亦苦智を空と相應せしむるを以てなり。是の故に空は一切法の緣には非ず。

問曰　世間空は一切法を緣ずるものにして、無漏空には非ず。

答曰　世間空なし。一切の空は皆是れ無漏なればなり。

又問　[六九]法印經の中にて說く、空は是れ世間空なりと。

答曰　是れ出世間の空にして世間空には非ず。

又問　是の中にては知見未淨と說く。故に知る是れ世間空なり。

答曰　我は先に無漏心は能く假名を破すと說きたり。是の故に假名を破するより來(このかた)を無漏心と名づけ、後に滅諦を見て增上慢を離るゝを知見淨と名づく。是の故に世間空なし。汝が說にて一切行は無常、一切の法は無我なるが如く、是くの如く應に行者が無我想を具足する時に法相が具足するが故に無我に於て法の名字を說くことあるべし。[七〇]見品の中にて說きしが如し。若し人にして苦を見ずむば、是れ卽ち我を見ると爲すも、若し實の如くに苦を見れば、卽ち復我を見ず。實の如くにとは謂く無我を見るなり。是の故に一切法は無我なりと說くは但苦諦のみを緣ずるを無我行と說くものなり。汝にして佛は現前に一相異相を見たまふと說かば、此れ亦應に界入等を以て一と爲すことあるべし。故に一相と說くに何の咎かあらんや。

【六九】此經については想陰品第七十七と滅法心品第一百五十三及び智相品第一百八十九並に見一諦品第一百九十一參照。

【七〇】見一諦品第一百九十を指す。

のみ正智にて解脱を得て、能く一相の法及び別異相の法に於て智慧が現在前すること、明眼が色を見るが如くなり。無我想なるを以ての故に諸法は一相なり。故に知る無我は一切法を緣ずるものにして但苦を緣ずるのみには非ざるなり。

答曰 一切は二種なり、一には一切を攝し、二には一分を攝す。[六五] 一切を攝すとは佛が我は是れ一切智人なりと說き、一切を十二入と名づくるが如し。一分を攝すとは一切は[六六]然ゆと說くも而も無漏無爲は然ゆることを得べからざるが如し。(一)又[六七]如來品の中にて、如來は是れ一切捨者一切勝者なりと說けるも持戒等の法をば捨つべからずして、但惡法の爲にのみ一切捨と說き、餘の諸佛に勝るべからざるも、但餘の衆生の爲のみの故に一切勝と說けるなり。(二)又說く、云何が比丘は一切智と名づくるや、謂く實の如くに六觸入の生滅を知れば、是れを總相にて一切法を知ると名づくるものにして、別相智には非ざるなり。佛は總別にて悉く知りたまへば一切智と名づくるも、是の比丘は總じて諸法の無常等を知るが故に一切智と名づくるなり。其の名は同じと雖も而も實には異あるを一分を攝すと名づく。(三)又佛は言く、若し法にして修多羅に入り比尼に隨順して法相に違せずんば、是の法は應に受くべし[六八]と。又說く、若し人にして、此れは是れ佛語なりと言はんに、是の人の語は正しきも而も義が非ならば、智者は中に於て應に正しき義を說いて、此の比丘に語るべし、是の語は應に何れの義と相稱ふべきやと。復說者の義は正しきも而も語が非なる有らば、是の正しき義の中にて應に正しき語を置くべしと。是くの如き等の經を佛は悉く之を聽したまへり。又了義と不了義との經あれば、此れは是れ不了義經なり。何が故に一事に於て而も一切の名を說かむや、應に其意を知るべし。(四)又世間の人は一事の中に於ても亦一切と說く、一切の祠を爲し、一切に食を與ふと言ひ、亦此の人は一切皆食すとも說くが如し。故に知る一切は無我なりと說くと雖も當に知るべし、但五受陰のみの爲に說くものにして、一切法には非ず。汝は十空を說くも、此

【六五】 一切といふを全分の一切と一分の一切とに分つ點は注意すべし。後世此說は法相宗に於て盛に用ひらる。大乘涅槃經を思起さしむるものがある。

【六六】 然は燃の正字なり。

【六七】 增一阿含の如來品なるべし。三不護品第五、行苦品第七十九、故不故品第九十七、善覺品第一百八十三參照。

【六八】 此經の言は四法品第十六に引用せられ註解せらる。これ大因緣經の文なること苦諦聚中想陰品第七十七の引用と同文なるにて知らる。若義入修多羅、不違法相、隨順比尼、是義應取とあり。

答曰　此の智は但有漏の緣のみにして無漏には非ず。所以は何、此の偈の中にて即ち苦を厭離すと說けばなり。故に知る唯苦諦のみを緣ず。又我見を壞せんが爲に無我智を修せば、我見は五受陰の緣なり。當に知るべし、無我も亦受陰を緣ず。是の五受陰は無常なるが故に無我なり、經の中にて說くが如し、若し無常ならば即ち是れ無我なり、若し無我ならば即ち是れ苦なりと。又佛は比丘に語る、斷は汝が所有の法に非ずと、比丘は言く、得已れり、世尊よと。佛は問ひたまふ、汝は云何が得たるやと、世尊よ、色は是れ我所に非ず、受想行識も我所に非ずと、佛は言く、善い哉善い哉、當に知るべし、但受陰の中に無我心を生ずと。又經の中にて說く、諸の所有の色は若しくは過去にても未來にても內外麁細近遠大小にても皆應に我に非ず、我所に非ずと知るべし、是くの如く實に正慧を以て觀ぜよと。又說く、色は無我なり受想行識も無我なりと觀じ、色は無常虛妄にして幻が無智の眼を誑かすが如く怨爲り賊爲り我無く我所無しと觀ずべしと。又佛は說く、此の座の中に於て愚癡の人あり、無明の殼にありて無明に盲せられ、佛の法を捨離して此の邪見を生ず、若し色にして無我、受想行識にして無我ならば、云何ぞ無我にして業を起して而も我を以て受けむやと。故に知る無我は但受陰を緣ずるのみ。又經の中にては處として無我智が一切法を緣ずと說くことなく。處處にて皆五受陰の緣なりと說く。

問曰　佛は自ら一切の法は無我なりと說く。故に知る有爲も無爲も此の智の皆緣にして、但五受陰のみを緣ずるには非ず。又說く、[六四]十空は一切の法を緣ず、空は即ち無我なりと。又說く、諸行は無常にして苦なり、一切法は無我なりと。若し無我智にして但苦諦を緣ずるのみならば、何が故に諸行は無我なりと說かざるや。一切法は無我なりと說くを以ての故に、當に知るべし、若し行と說かば則ち有爲を說くものなるも、若し法と說かば即ち一切に通ずるなり。又說く、誰か一相の法及び別異相の法に於て智慧が現在前なること、明眼が色を見るが如くなるや。唯諸佛世尊

【六四】空は二空三空四空六空七空十一空十三空十六空十八空に區別れるも、特に十空となすことは通常は行はれず。

ぜば、此の法は失滅するも後に意識が生じて能く此の事を知る、是れを想が識を縁ずと名づく。又是の相は能く後に相を縁ずる識の與に因緣と作るも、兎角等は相の因と爲ること無きを識る。是の故に生ぜざるなり。又應に兎角等を縁ずる識あるべし、若し無くんば云何ぞ能く說かんや。

問曰 兎角の性は可識に非ず。所以は何、終に長短黑白等の念を生ぜざればなり。故に過去の法も亦是くの如し、所以は何、我等は過去の法を以て現在前せしむること能はざるなり。聖人が未來の事を知りて、此の事は當に爾るべし、此の事は爾らずと言ふが如し。

答曰 聖智力にて爾るなり。法は未だ有ならずと雖も而も能く豫め知る。[六〇] 聖人は能く石壁を壞して入るも出づるも無礙なるが如く、此の事も亦爾り、無なるも而も能く知るなり。又憶の力を以ての故に知る。眼識は男女を分別すること能はざるが如き、若し眼識にして能くせずむば、意識も亦應に能くせざるべきも、而も意識は實には能くす、是の事も亦爾り。又我等が先に用ひし所のものにして已に滅せる事の中に於て知を生ずるが如く、聖人も亦爾り、無法の中に於て而も能く知を生ず、又[六一] 提婆達多が一識にして能く四字を識ることあること無しと說くも而も亦能く識るが如し、是の事も亦爾なり。又諸の數と量と別異と合と離と此と彼と[六二] 等の是の中には現法無しと雖も亦能く識を生ずるが如く、又人身の一念を以ても遍く知るべからず、分分を以ても識知すべからず、分分にも知らず、一念にも知らずと雖も而も亦人の知を[六三] 生ずるが如く、是の事も亦爾り。汝は因緣譬喩の能く自體を知ること有ること無しと言ふも此の中にては有るは意は能く自ら知ると說く、言く、行者は心の觀るに隨へばなり。而も去と來とには心なし、故に知る現在心を以て現在心を緣ずるなり。若し爾らずんば、終に人は能く現在心相應の法を識ることあることなければなり。

問曰 經の中にて說く、若し能く慧を以て一切の法の無我なるを觀ぜば、卽ち苦を遠離することを得、是の道を淸淨なりと爲す、此の智慧は自體と及び共生の法と餘の一切の法の緣とを除くと。

【六〇】 神通を得たる聖人をいふ。

【六一】 提婆達多（Devadatta）は譯して天授といふ。かかる場合には一般に人といふべきを特に一種の個人名を擧ぐるに過ぎざるものとして用ひられたるものなり。權兵衛八兵衛などいふと同じ用法なり。かかる用法として演若達多（Yajñadatta）等種種あり。

【六二】 これ勝論派の德句義の中のものを擧ぐるなり。別異は別體、此は此體、彼は彼體なり。

【六三】 人を見るとき、其人の身全體を一刹那に見得るにもあらず、又身の一部分一部分を見て、合はせて全體を見るに至るにもあらざれど、其身を見れば、ともかく其人なりとの知を生ずべし。

答曰　汝は二の因緣にて識を生ずと說くも此の事は不定なり。亦緣無くして智を生ずることもあり、一切は皆二の因緣より生ずるには非ず。又第六識は自陰の中に於ては都べて所緣なし。現法なきが故に是の識は色等の法を緣ずること能はず。若し能く緣ぜば、盲人も亦應に色を見るべし。此の人の爾の時の心心數法は去來の中に在り、去來は無法なれば、何れを所緣と爲すや。但神を計するを遮するが故にのみ是くの如く說くなり。若し諸識の生ずることが皆此の二に由らば、四の因緣[五九]には非ず。或は識の生ずるに二の因緣なきことあり、經の中にて說くが如し、六入の因は觸に緣たりと。而も實には觸なくして、六入を以て因緣と爲すなり。若し生ずるときは則ち六入を出でざれば第七入を遮せんが爲の故なり。是くの如く四の因緣を遮するが故に佛は二を說くなり。又過去と未來と虛空と時と方と等の中に於て知が生ぜば、而も此の法は實に無なれば、此れ即ち是れ無緣の知なり。

問曰　若し然らば、此の因緣を以て過去未來等の法は應に有なるべし。若し無ならば、云何にして知を生ぜんや。兎角龜毛蛇足等の中に於ては終に知を生ぜざればなり。

答曰　作の中に於て知が生ずるなり。人の去るを知るが如きは則ち去る時を憶し、若し人の語るを聞かば則ち語る時を憶す、是くの如く等なり。過去の中には作無し、是の故に然らず。

問曰　今過去に於て何の憶する所と爲すや。

答曰　所有無きことを憶す。汝は何が故に兎角等を憶せざるやと言ふも、若し法にして生じ已りて滅せば、是れ則ち憶すべきに、若し本來無ならば何の憶する所ぞや。法にして先に衆生と名づくれば、今は過去となりしと雖も亦衆生と名づくるが如く、是くの如く先に此の法に於て憶を生ずるが故に即ち此の心が還憶するものにして、異心には非ざるなり。又是の人にして先に此の法の相を取らば、此の法は滅すと雖も而も能く憶想を生じて法を分別す。若し法にして此の人の心に於て生

[五九]　因緣、次第緣（等無間緣）、緣緣（所緣緣）、增上緣なり。

答曰　其れが勝るを以ての故なり。行者にして法相を現見するときは則ち疑あることなし。此の疑は我は有と爲すや無と爲すやと疑ひ、亦此の道は清淨を得るや不やとも疑ふものにして苦諦を見せしむるときは則ち我見は斷じ、亦唯此の一道のみにして更に餘あることなしと知るなり。是の故に說く、身見を斷ずるを眞に苦を見ると名づけ、戒取を斷ずるが故に、道を修行して知と所知法との中に於て疑なしと名づく。若し正智を以て所知法を知らば卽ち集を斷じ滅を證して四諦を具すと名づく。故に此の三を說きて疑なき相を示す。此の疑は我と道とより生ず。經の中にて初めて道を得る相を說くが如し、謂く法を見、法を得、法を知り、法に達し、諸の疑網を度りて他の敎に隨はず、佛の法の中に於て無畏力を得て果の中に安住すと。

一切緣品　第一百九十一

問曰　何れの智か能く一切の緣なる。

答曰　若し智にして界入等に行ぜば、一切緣と名づく。所以は何、若し諸入諸界の法を說かば、物事には諸緣と諸塵の知識すべきものと等あり。皆諸法を盡くして若し智にして能く緣ぜば、一切緣と名づく。

問曰　此の智は相應共生等の法を知らず。

答曰　能く知る。若し入等を緣ぜば是れを總相智と名づく。總相智なるが故に能く一切を緣ず。所以は何、若し十二入を說かば則ち更に餘法なければなり。[五八]故に知る此の智は亦自體をも緣ずるなり。

問曰　經の中にて說く、二の因緣にて識を生ずと。是の故に應に自緣智あるべからず。又諸智には、因緣譬喩の能く自體を緣ずるもの有ることなきこと、指端が自ら觸るゝこと能はず、眼が自ら見ること能はざるが如し。

【五八】成實論は十二處を實となす說なり。故に五蘊も十八界も假とせらるるなり。

答曰　此の中には道に順ずる行あり。何れの者にも無常想無我想が具足するを以ての故に、此の苦觀を得れば、其れは道に近づくを以て、是の故に合說するなり。

問曰　若し道を得る時に身見を斷ぜば、何が故に復戒取と疑とを說くや。

答曰　行者は得道して諸法は皆空無我なりと現見すれば、卽ち復疑はずして、凡夫の聞思等の觀に同じからず。若し道諦を見るときは則ち此れ一實にして更に餘道なしと知る。是の故に三を說くなり。

問曰　若し道を得る時に見諦所斷の諸の煩惱盡きなば、何が故に但三[五六]結のみ盡くと說くや。

答曰　一切の煩惱は皆身見を以て本と爲す。佛が比丘に問へるが如し、人は何れの事を以て、何れの事に因りて、何れの事を見るが故に、是くの如きの見――唯此の身にして死することあるときは則ち斷滅するのみと、是の如き等――を生じて一切の見ありやと。比丘は佛に白さく、佛は法王たり、唯願はくは[五七]解說したまへと。佛は言く、人は色を以て、色に因りて、色は是れ我なりと見るが故に此の見を起す、乃至識も亦是くの如しと。當に知るべし、我を見るに因るが故に諸の煩惱を生ずるなり。所以は何、若し身見あらば、則ち此の我は若しくは常なりや、無常なりやと謂ひ、若し定むで常なりと見れば則ち是れ常見にして、定むで無常なりと見れば則ち是れ斷見なればなり。若し我にして是れ常ならば、則ち業なく報なく苦の解脫もなし。我にして若し無常なるも亦業なく報及び苦の解脫も無く、道を修するを以て而も泥洹を得るにはあらず。若し此の見を以て勝と爲さば卽ち是れ見取にして、能く度を得と謂はゞ卽ち是れ戒取なり。自の見の中にては愛あり、他の見の中にては恚あり、此の見を以て自ら高ぶらば、卽ち是れ憍慢にして、皆實の如くに知らざるを以ての故に此の結を起さば卽ち是れ無明なり。是の故に身見が斷ずるが故に見諦の結斷ずるなり。

問曰　若し身見が斷じて餘も亦斷ぜば、何が故に別に戒取と疑とを說くや。

【五六】五下分結中の初三にして身見戒取疑なり。

【五七】大正大藏經は說を脫に作る。誤植なり。

實有なりと謂ふも、行者は此の五陰は空無我なりと觀ずるが故に卽ち復見ず。[五二]法印經の中にて說くが如し、行者は色の無常空虛の離相を觀ずと。無常とは謂く色の體性の無常にして、空虛とは瓶中に水なきを名づけて空瓶と曰ふが如く是くの如く五陰の中に[五三]神我なきが故に名づけて空と爲すなり。是くの如く觀ずる[五四]者をも亦名づけて空と爲し、亦知見未淨とも名づく、未だ五陰の滅を見ること能はざるを以ての故なり。後に乃ち滅を見れば、所謂行者は是くの如き念を作す、我見聞する[五五]所等と。故に知る滅を見れば、諸の煩惱は盡くなり。

問曰 何が故に滅を見れば則ち煩惱は盡き、餘の諦に非ざるや。

答曰 行者には爾の時に苦想が決定すればなり。若し未だ滅相を證ぜずむば、有爲法の中に於て苦心は未だ定まらざること、人の初禪の喜樂を得ずむば五欲の中に於て厭想を生ぜざるが如く、又未だ覺觀無き定を得ずむば覺觀定に於て以て患と爲さざるが如し。行者も亦爾り、未だ泥洹の寂滅相を證せざる時は行苦を得ず。當に知るべし、滅諦を見るが故に苦想が具足し、苦想が具足するが故に愛等の結が斷ずるなり。

問曰 若し滅諦を見るが故に苦想が具足せば、應に滅諦を見て後に煩惱は萬に斷ずべし。所以は何滅諦を見已つて苦想が具するが故なり。

答曰 後時に斷ずるには非ず。滅の中に於て寂滅相を得るに隨ひて卽時に苦想が具足し、後に當に現前すべし。經の中にて說くが如し、行者は集の生相の法に於て盡滅の相を知らば卽ち法の中に於て法眼淨を得と。又人は諸陰の中に於て常に我心有れば、諸陰の無常苦等を觀ずと雖も未だ永滅を得ず、若し滅諦を見れば、相なきを以ての故に我心は永滅す。

問曰 若し滅諦を見るときは則ち我心が盡くとせば、何が故に佛は前人の柔軟心等を觀じて爲に四諦を說いて、但滅を說くのみならざるや。

【五二】此法印經の同一文が滅法心品第一百五十三及び智相品第一百八十九に引用せらる。想陰品第七十七參照。法印經は一切緣品第一百九十一にも存す。

【五三】神我は單に我といふと同じ。

【五四】大正大藏經は觀者者となすも、者の一字は誤植の衍字なり。

【五五】前品最後部に引用せる法印經の中、此經にて後に說く云云の文を略出せるなり。

と。又佛は自ら因緣を觀じて道を得たり。又甄叔伽經〔五〇〕の中にて、種々なる得道の因緣を說く、人の五陰を觀じて得道するあり、或は十二入、十八界、十二因緣等を觀じて得道す。故に知る但四諦のみを以て得道するには非ず。若し汝意にして是の說ありと雖も此の觀を以ては能く煩惱を斷ずるにあらずと謂ひ、亦說いて四諦を觀ずと雖も煩惱を斷ずるにあらずと言ふなるべくんば、又要ず當に眞諦を以て得道すべきに、而も四諦を辨する中にて說く、生は苦なり老は苦なり病は苦なり死は苦なり怨憎會は苦なり、愛別離は苦なり所求不得は苦なり、要を取りて之を言はゞ五陰を苦と爲すと。又說く、苦の因は所謂貪愛にして、常に喜樂に隨ひて處々に身を受くと。是くの如き等を觀ずるも、應に漏を盡すべからず。此れ皆世諦にして、第一には非ざるが故なり。

問曰　生死等を觀じては應に漏を盡すべからずと雖も、略々せば五陰は皆苦なりといふ是の中に智ありて能く煩惱を破すなり。

答曰　餘の三諦は云何。故に知る汝が自ら憶想分別するのみ。又五陰は皆苦なりと觀ずるは是れ散亂心にして應に道を得べからず。

問曰　若し四諦を以て道を得ずんば、當に何れの法を以てか道を得べき。

答曰　一諦を以て道を得るなり、所謂滅と爲り。經の中にて說くが如し、妄は虛誑に名づけ、實は不顚倒に名づく、一初の有爲法は皆虛誑妄取なり。故に知る行者は心が有爲法の中に在るに隨ひて皆眞實には非ず。經の中にて說くが如し、諸の有爲法は虛誑にして、幻の如く焰の如く夢の如く假借等の如しと。〔五一〕法句經の中にて說くが如し、

虛誑は世間を繫ぎて　　堅實有るに似如し
實には無なるを有の如しと見るも　　正觀するときは則ち皆無なり、と。

實の如くに男女の法無く、但五陰が和合せるを强いて男女と名づくるのみ。凡夫は倒惑して之を

〔五〇〕　十號品第四の甄叔伽經と比較すべし。

〔五一〕　これと同一偈が滅法心品第一百五十三に引用せらる。

四眞諦を見ると。又說く、行者にして淨心に苦諦乃至道諦を正觀せば、是くの如くに見るが故に、欲漏と有漏と無明漏との中より心は解脫するを得と。又諸經の中にて聖諦處を說くには盡く皆四諦を說いて但滅のみをば說かす。又佛は四智を說く、苦智と集智と滅智と道智とにして、皆四諦の爲の故なり。有る行者は法として應に遍く四諦を觀ずべし、猶良醫は應に病の[四八]知と病の因と病を破すと病を破する藥とを知るべきが如く、是くの如く行者も諸苦を脫せんと欲せば應に苦と苦の因と苦の滅と苦の滅の道とを知るべし。若し苦を知らずんば、何に由りてか苦の因と苦の滅と及び苦の滅の道とを知るべきや。故に知る但滅を見るのみには非ざるなり。

答曰　諸有の四聖諦の利を說くは皆陰界入等の中に於て說きたり。謂く此の色等と色等の生滅とを知るが故に漏盡を得と。又佛は自ら說く、我は色等の陰の中に於て實の如くに味と過と出離とを知らずんば終に自ら無上道を得と謂はざるも、若し實の如くに知らば則ち自ら道を得たりと知ると。又[四九]城喩經にて說く、「我にして若し未だ老死と老死の生と老死の滅と老死の滅の道と乃至諸行と諸行の生と諸行の滅と諸行の滅の道とを知らずむば、自ら我は無上道を得たりとは說かず、若し實の如くに知らば、自ら佛を得たりと說く」と。是くの如き等の見にして若し是れ得道の見ならば、則ち十六心にて道を得とは名づけず。

問曰　我は是れを得道の見と名づくとは說かず、是れ思惟時なり。

答曰　四諦の中にても亦是くの如くに說く、亦是れ思惟時なりと說くべし。若し爾らずんば、應に因緣を說くべし。四諦を見るを得道の時と名づけ、五陰等を見るを思惟時と爲す。

問曰　煩惱を斷ずる智を名づけて得道と爲す。五陰等を思惟するも煩惱を斷ぜず。

答曰　我は先に已に五陰等の智も亦煩惱を斷ずと說きたり。色等を知見するが故に漏盡を得と說くが如し。又說く、世間の集を見るときは則ち無見を滅し、世間の滅を見るときは則ち有見を滅す

【四八】病知の知は衍字ならざるか句法としても存するを要せざる字なり。次の苦苦因等を參考すべし。

【四九】雜阿含の中に存する經なり。

亦名づけて空とも爲すも而も知見未だ淨ならずと名づくと。此の經の後にて說く、行者は是くの如き念を作す、我の見る所聞く所嗅ぐ所嘗る所觸るる所念ずる所、此の因緣を以て識を生ずれば、是の識の因緣は常と爲すや、無常と爲すやと、卽ち無常なりと知り、若し無常の因緣より生ぜば、識は云何が當に常なるべき、是の故に、一切の五陰無常なり、衆緣より生じて盡相壞相離相滅相なりと見れば、爾の時には行者は知見淸淨なりと。滅盡を說くを以つて知見淨と名づくるなり。故に知る滅を見るを聖諦を見ると名づく。又先は法住智にして後は泥洹智なり。故に滅諦を見るを聖道を得と名づく。

見一諦品　第一百九十

問曰　汝が滅諦のみを見るを行果者と名づくと說くは、是の事は然らず。所以は何、[四五]經の中にて佛は說く、「我と及び汝等とは實の如くに四諦を見ること能はざりしが故に久しく生死に處したるも、今是の四諦を見たれば、身の因緣は斷じ生死の根は盡きて更に有を受けず」と。常に知るべし、四諦を見るが故に行果者と名づけ、但滅を見るのみには非ず。又佛は說く、「上法は所謂四諦なり。是の故に行者は應に悉く知見すべし」と。又說く、「人にして法服し毀形し正信にして出家するが若きは皆四諦を見んが爲の故なり。人にして須陀洹、斯陀含、阿那含道を得んと欲するが若きは皆四諦を見んが爲の故なり。阿羅漢、辟支佛、佛道を得るが若きは皆已に四諦を見たるが故なり。故に知る但滅諦を見るのみには非ざるなり」と。又佛は自ら說く、「四諦は次第を以て得」と。又[四六]轉法輪經の中にて說く、「我は此れは苦なり此れは苦の因なり此れは苦の滅なり此れは苦の滅の道なりと觀じ、是の中に於て眼と智と明と覺とを生ず」と。是くの如く[四七]三轉に皆四諦を說く。又經の中にて說く、鮮淨なる疊も之を池中に投ずれば卽時に色を受く、此の人も是くの如く卽ち一坐に於て

【四五】此言は長阿含遊行經の中に存す。パーリの涅槃經及び增支部四法品にも存す。

【四六】雜阿含に存する初轉法輪經なり。

【四七】四諦の一一を觀じ以て眼智明覺を得るを現在と過去と未來とにて言詮はすを三轉といふ。四諦一一に三轉なるが故に十二となる。合はせて三轉十二行といふ。

問曰　若しくは近にても若しくは遠にても倶に行者と名づくれば、何の差別ありや。

答曰　若し滅諦を見れば、眞行者と名づけ、若し遠分の善根に在りて、五陰の無常苦空無我を見るも而も未だ滅を見ずむば、是れを名字行者と名づく。所以は何、經の中にて說くが如し、比丘が佛に問ふ、何をか法を見ると名づくるやと、佛は言く、眼が色を緣ずるに因りて眼識を生じ、卽ち受想思等を共生す、是の一切の法は皆無常敗壞にして保信すべからず、若し法にして無常ならば卽ち是れ苦なり、是の苦の生ずるも亦苦、住するも亦苦、數々起る相も亦苦なり。乃至、意と法とも亦是くの如し、若し此の苦にして滅せば、餘の苦は生せずして更に相續すること無し、行者は心に念ずらく、是の處は寂滅にして微妙なり、謂く一切の虛妄を捨てゝ貪愛は盡く滅し、離にして寂なる泥なりと、若し此の法の中に於て心が信解に入らば、動ぜず轉ぜず憂へず怖れず、此れより已來を名づけて法を見ると爲すと。故に知る行者にして若し無常等の行を以て五とを觀見せば遠行者と名づけ、若し滅諦を見れば近行者と名づく。車匿の諸の上座に答へしが如し、我も亦能く色等の無常を念じ、而も一切の行の滅に於て愛は盡きたるも、泥洹心にて通達信解に入ること能はずと。若し是くの如くに知らば、法を見るとは名づけず。又說く、行者にして若し此の法に於て軟慧を以て信忍せば、信行者と名づけ、凡夫地を過ぎて正法位に入り初果を得ざれば終に中夭せず。若し利き慧を以て信忍せば、是れを法行と名づけ、此法を見已りて能く三結を斷ぜば須陀洹と名づけ、明に無餘を了せば阿羅漢と名づく。故に知る滅を見るを近行者と名づくるなり。

問曰　行者は何が故に盡く滅を見ざるや。

答曰　經の中にて說く、諸法は無性なり、衆緣より生ぜる是の法は甚深にして一切の愛盡き寂滅にして泥洹なり、是の處は見難し。佛は十二因緣の滅を觀じたるが故に無上道を成ずるなりと。

又法[四四]印の中にて說く、行者にして若し五陰は無常敗壞なり、虛妄にして堅固ならずと觀ずれば、

【四四】此經の同一文が滅法心品第一百五十三及び見一諦品第一百九十に引用せらる。想陰品第七十七參。照法印經は猶一切錄品第一百九十一にも引用せらるるを見る。

を修せば、煩惱は微となつて[三八]盡く、數(しばしば)は覺せずと雖も盡き已らば乃ち知ること、斧柯の喩の如し。又行者は常に三十七品を修すれば、欲縛結縛の散壞すべきこと易きこと、海[三九]舡の喩の如し。故に知る念處より來(このかた)道品を修習するを皆[四〇]行初果の者と名づく。又若しくは一念にて若しくは十五念の中にて修習することを得ずむば、當に知るべし、此れは是れ遠行須陀洹の者なり。

問曰　初めに此の色等と此の色等の生と此の色等の滅とを知ると說けるは是れ初果の道にして、後の三の喩も是れ三の果の道なり。是の故に行初果の者とは名づけず。

答曰　若し卵にして抱かずむば卽ち壞せむも、抱けば則ち成就す。是くの如く、念處より來(このかた)初めに修習を發して、若し成ずること能はずむば、名づけて爲さざるも、能く成ぜれば則ち是れ學人にして、爛壞せずして能く受くるに堪ふる者と名づく。是の故に、若し念處等の中に於て爛壞するときは則ち凡夫と名づけ、若し修習して成ずるときは則ち行初果の者と名づく、猶鷇の中に在るも、若し鷇を出づることを得ば須陀洹と名づくるがごとし。故に知る念處等の中に在るを遠行者と名づく。又[四一]郁伽長者が衆僧を供養せしに、天神が示して言く、此れは是れ阿羅漢なり、乃至、此れは是れ行初果者なりと。若し見諦道にあらば、云何が示すべき、當に知るべし、是れ遠行者なり。又經の中にて佛は說く、若し信等の五根なくむば、是の人は外凡夫の中に住すと名づくと。是の義は內外の凡夫あることを說くなり。若し達分の善根を得ずむば、外凡夫と名づけ、得れば名づけて內と爲す。是の內凡夫を亦聖人とも名づけ、亦凡夫とも名づくるなり、外凡夫に因るが故に聖人と名づけ、見諦道に因るが故に凡夫と名づく。阿難が[四二]車匿に語りて、凡夫は色の空無我なること、受想行識の空無我なること、一切の諸行は無常なること、一切の法は無我なること、寂滅の泥洹を念ずること能はずと言へるは、爾の時の車匿は[四三]來つて法位に入れるも、亦凡夫として此れを念ずること能はずと說けるものなるが如し。

【三八】大正大藏經は塵とす。誤植なり。
【三九】三本宮本は舡を船に作る。
【四〇】麗本に行なし。然らば初果の者と名づくとなる。前には行須陀洹果とありたれば、行の字を存する方可なるべし。
【四一】分別賢聖品第十にこれと同一事の引用あり。參照すべし。
【四二】車匿(Channa)比丘の名。佛陀出家の際從へる馭者と同一人にはあらず。佛陀入滅の際梵檀罰に處せと遺誡せられたる比丘なるが、其後發心し、阿難によつて遂に羅漢果を得るに至れりといはる。
【四三】此比丘は具足品第一にも出づ。經には離有無經の文なるべし。三本宮本は來を未に作る。然らば、未だ法位に入ざるも、となる。

問曰　汝は何が故に次第を壞して說くや。經の中にて說く、若し無常ならば卽ち是れ苦なり、苦ならば卽ち是れ無我なりと。故に無常想が能く苦想を具し、苦想が能く無我想を具するなり。

答曰　經の中にて說く、無常想の修あらば、聖弟子の心は能く無我想に住すと。故に無常想は能く無我想を具足するなり。又是くの如く說くも亦道理あり、所以は何、我とは後世を成ぜむが爲に說く、故我は是れ常なりと說く。是の故に、若し五陰の無常なることを見れば、卽ち無我なることを知るなり。經の中にて說くが如し、若し人にして眼は是れ我なりと說かば則ち道理なし。所以は何、眼には生滅あればなり。若し眼にして是れ我ならば、我は卽ち生滅す是くの如きの過ありと。

問曰　此の二種は當に云何が通ずべきや。

答曰　苦想は二種あり、一には無常想より生じて壞苦の想と名づけ、二には無我想より生じて行苦の想と名づく。是の故に二經も亦相違せず。

問曰　若し爾らば、念處と煖等との法の中にて無常想有るは此の法は皆應に是れ無漏なるべし。

答曰　念處等の中にて若し是れ無漏なるに何の咎あらんや。

問曰　凡夫心は應に是れ無漏なるべからず亦凡夫の心には妄念等もあり、云何ぞ當に是れ無漏なるべき。

答曰　此の人は直に是れ凡夫なるには非ずして、是の人を行須陀洹果と名づくるなり。

問曰　行須陀洹果は見諦道の中にあるに、念處等の法は見諦とは名づけず。

答曰　行須陀洹果には近あり遠あり、念處等の中に住すれば遠行者と名づけ。見諦を近と名づくるなり。何を以てか之を知る。佛は斧柯喩[三六]經の中にて說く、若しくは知り若しくは見るが故に漏盡を得。何れの法を知見するや。謂く此の色等と此の色等の生と此の色等の滅となり。若し道を修ぜずむば則ち漏盡を得ざるも、之を修せば則ち得ること、卵を抱く喩の如し。又行者は常に[三七]道品

【三六】此經は分別賢聖品第十に引用せらる。
【三七】道品は次にいふ三十七品のことなり。

いて名づけて智と爲すときは則ち一切の想は皆應に智と名づくべく、亦二種の想あり、一には世諦を緣じ、二には第一義諦を緣ずと說くべし。

答曰　然らず。想に種々の差別あり、想の極めて癡にして、乃至、世間の善惡をも識らざるあり、想の次に癡にして、能く善惡を別つあり、想の小に癡にして、能く骨相等を緣ずるあり。假名を離れざるときは則ち諸の陰の相を壞すること能はず、此の想は能く陰の相を壞する智に順ずるが故に佛は智なりと說くなり。又此の想は能く實智の與に因となるが故に名づけて智と爲す。[三三]世間にては因の中にて果を說くあり、金を食す、人に五事を施す、女を戒垢と爲し好岸は渠の樂、法[三四]服は人の樂と說くが如し。又七漏經の中にて說く、[三五]用斷等の漏因を漏と名づくと。又說く、食を以て命となし、草を牛羊と爲すと。亦說く、衣食等の物は皆是れ外命なり、若し人の財を奪へば、卽ち是れ命を奪ふなりと。此れ皆因を說いて果と爲すなり。是くの如く智の因を智と說くが故に咎なきなり。

問曰　諸の念處と及び煖等との中にては心は能く實法を緣ず、是れ無漏なりや。

答曰　無漏心は能く假名を破す。是の如に心の能く假名を破するに隨つて、此れより以來を名づけて無漏と爲すなり。

問曰　何れの處の心に齊りて能く假名を破すや。

答曰　隨つて、能く具足して五陰の生滅の相を見れば爾の時には無常想を得、無常想は能く行者をして無我想を具せしむること、聖弟子にして無常想を以て心を修せば、則ち能く無我想に住すと說くが如し、無我想を以て心を修せば、能く速に貪恚癡等を解脫することを得。所以は何、若し無我想にて心を修せば、則ち能く苦想に住すればなり。我想を以ての故に苦なりと雖も、覺らざるなり。是の故に、若し法にして無常無我ならば亦苦なれば、智者は則ち能く深く惡厭を生ず、故に無我想は能く苦想を具するなり。

【三三】論門品第十四にもかかる例出づ。參照すべし。
【三四】麗本は、伏に作る。今は三本宮本に從ふ。
【三五】用斷等漏因名漏。意味不明。論門品第十四に此經を引用すれば、參照すべし。又福田品第十一に七漏をいひ、七流と同一ならむと考へらるるが、七流中には制伏所滅流あれば、用斷は制伏と同意ならむか。

問曰　汝が智慧の相を説くが如く、假名を緣ずるを無明と名づけば、今阿羅漢には應に無明あるべし、亦瓶等を緣ずる心もあるが故なり。

答曰　阿羅漢には瓶等を緣ずる心無し。所以は何、初め道を得たる時に已に一切の假名の相を壞したればなり。故に但事用の爲の故に瓶等を説くのみにして、見慢に著せず。三種の語あり、一には見より生ず、二には慢より生ず、三には事用より生ず、凡夫にして若しくは瓶と説き若しくは人と説かば、是の語は皆見より生ず。學人は我見なしと雖も正念を失するを以ての故に五陰の中に於て、我慢の[二九]相を以て是れ人なり是れ瓶なりと説く、[三〇]差摩伽經の中にて説くが如し。事用より生ずとは、謂く阿羅漢のなり。大迦葉が[三一]僧伽梨を見て言へるが如し、是れは我物なりと。天神が疑を生じたれば、佛が之を釋して言く、此の人は永に慢根を拔き因緣を燒盡したり、云何ぞ慢あらんや、但世間の名字を以ての故にのみ説くなりと。故に知る阿羅漢には瓶等の心なし。

問曰　若し世間の智慧なくんば二種の正見あり等と説く經は云何が通ずべきや。

答曰　此れは皆是れ想を智の名を以て説けるなり。佛は能く諸法實相に通達し、度すべき衆生に隨ひて種〻の名を立てたまふ、智慧を受等の名を以て所謂受する者は諸法に於て解脱を得と説くが如く、亦善く無常等の想を修せば能く一切の煩惱を破すとも説き、亦第四の不黑不白業は能く諸業を盡す、所謂學思なりとも説き、又意を以て諸の貪著を斷ずと説き、又説く、

[三二]信は能く河を度り　一心は海を度り
精進は苦を除き　慧は能く清淨にす、と。

又、眼が色を見んと欲すと説くも眼には實には欲なし、但心が見んと欲するなるを眼の名を以て説くのみなり。

問曰　若し世間智にして實には是れ想なりせば、何が故に智と名づくるや。若し因緣なくして説

【二九】三本宮本は想に作る。
【三〇】差摩伽は比丘の名なり。憍慢品第一百二十八及び滅法心品第一百五十三を見よ。
【三一】僧伽梨(Saṅghāṭi)比丘の三衣の中の一、最も大なるが故に大衣と云ふ、又複衣とも譯さる。
【三二】此偈は想陰品第七十七にあり、又初句は非相應品第六十七にあり。

を得るが故に能く出づと名づけ、未だ四諦を見ざるが故に觀ること能はずとし、若し四諦を見るも而も未だ漏盡を得ざるが故に渡らずと名づくるなり。又佛は自ら說く、法智と比智と他心智とは世智なりと。又說く、宿命智と生死智とは皆是れ有漏なりと。又說く、法住智は泥洹智なりと。是くの如き等は經の中にて說く。故に當に知るべし、有漏智有り。

答曰 若し有漏の智慧あらば今應當に有漏と無漏との智の差別の相を說くべし。

問曰 若し法にして有に墮せば、是れを有漏と名づけ、異るときは則ち無漏なり。

答曰 何れの法を有て墮すと名づけ、何れの法を有に墮せずと名づくるや、是の事を應に答ふべし。若し答ふること能はずんば則ち有漏無漏の相には非ず。汝が世間心は假名に非ざるを緣ず、謂く諸塵を識る等なりと言ふは是の事は然らず。所以は何、佛は凡夫は常に假名に隨ふと說けばなり。是の義は一切の凡夫の心は假名を破せざるを以ての故に常に我相に隨ひて終に離るゝことを得ざればなり。色を見ると雖も亦瓶等の相を離れず、故に凡夫の心は實の義を緣ぜずして、受想等の法を緣ずと雖も亦是れ我々所なりと見るなり。故に知る一切の世間心は皆假名を緣ずるのみ。汝は諸の世間の智慧あり、謂く二種の正見あり等といふも、今當に答ふべし。心には二種あり、癡心と智心となり。假名法を緣ぜば是れを癡心と名づけ、若し但法の謂く空無我のみなるを緣ぜば、是れを智心と名づく。解無明經の中にて說くが如し、無明とば先を知らず、後を知らず、先後を知らず、業を知らず、報を知らず、先後の業報を知らず、是くの如き等の處々を實の如くに知らず見ず解せずして癡妄黑闇なるが故に名づけて無明となすと。實の如くに知らずは謂く空無我を知らざるなり。是の凡夫の心は常に假名に在りて假名を緣ずるが故に名づけて無明と爲し、空を緣ずるを智と名づくるなり。今若し一切世間心にして皆假名を緣じ、假名を緣ずる心をば名づけて無明と爲さば、何ぞ世間の智慧ありと言ふことを得んや。

眼とも名づくと。故に知る、其れは實なり。又佛の十力は皆是れ智性なり。故に知る智慧を實と爲す、第一義を緣ずればなり。

問曰　若し爾らば則ち世間の智慧なきや。

答曰　實に世間の智慧なし。何を以てか之を知る。世間心は假名を緣じ、出世間心は空無我を緣ずればなり。所以は何、世間は卽ち是れ假名にして假名より出づるを出世間と名づくればなり。

問曰　汝が說は然らず。所以は何、經の中にて說く、識は何の識る所ぞ、謂く色聲香味觸法を識る。是の如く陰界入等も皆識を以て識る。今是の識は皆應に出世間と名づくべしと。是の故に、汝が世間心は但假名のみを緣じて實を緣ずること能はずといふは是の事は然らず。又意識も亦能く實に緣ず、能く受想行等を緣ずるを以ての故なり。又佛は二種の正見を說きたまふ、世間と出世間となり。福罪等ありと見るを名づけて世間と爲し、若し聖弟子が苦[二七]集滅道を緣じて無漏の念と相應する慧ならば、出世間と名づく。又偈の中にて說く、

世上の正見を得れば　　生死に往來すること
乃至百千世なりと雖も　　常に惡道に墮せず、と。

又經の中にて說く、邪行の者の善處に生ずることを得るは是の人の罪業が未だ成ぜずして、善緣が先に熟せしなるか、或は、死に臨める時に正見が相應して善心が現前せるかなり　故に善處に生ずるなりと。又十善道の中にても亦正見を說く。汝は云何ぞ世間智なしと言ふや。又佛は自ら三種の慧ありと說く、聞慧と思慧と修慧となり。聞慧と思慧とは皆是れ世間なるも、修慧は二種なり。又佛は念を生じたまはく、羅睺羅比丘は未だ解脫を得る慧を成就すること能はずと。又說く、五法は能く未熟の解脫心をして熟せしむと。此れ皆是れ世間の智慧なり。又經の中にて說く、有る人は能く出でて而も觀ること能はず、有る人は能く觀て而も[二八]渡ること能はずと。世間の智

【二七】麗本は習に作る。習は集の古き異譯なるも、集の方が通常なれば、今は三本宮本に從ふ。

【二八】三本宮本は度とす。麗本もここ以前は度を用ひ居たり。

の煩惱を斷ずればなり。經の中にて說くが如し、善く無常想を修するが故に能く一切の欲染と色染と及び無色染と一切の戲調と憍慢と無明とを破すと。

答曰　然らず。慧が煩惱を斷ずるを想の名を以て說くものなればなり。佛に二種の語あり、一には實語、二には名字語なり。經の中にて慈が瞋恚を斷ずと說くが如き、而も是の慈は法として實には結を斷ぜずして、但智のみが能く斷ずること、智の刀が諸の煩惱を斷ずと說くが如し。故に知る慈が能く結を斷ずとは是れ名字語なり。又慧義經の中にて說く、解和するが故に慧と名づく、何事を解知するや。謂く色にして無常ならば實の如くに無常なりと知り、受想行識にして無常ならば實の如くに無常なりと知る、是を智慧と名づくと。又說く、聖弟子が定にて心を攝せば實の如くに知見すと。是の故に知る第一義の緣を名づけて智慧と爲す。又智慧の喩の中にて智の刀、慧の箭等と說く、是の喩は皆煩惱を斷除することを示し、但眞の智慧のみが能く煩惱を斷ず。故に知る智慧を實となす。又偈の中にて說く、

行者は世間の　一切の諸の天人が
眞智を退失するが故に　名色に貪著するを見る、と。

世間は多くは虛妄の常樂淨等を見れば、眞智を失ふと名づけ、若し眞實の空無我等を見れば、眞智を得と名づく。故に知る智慧を實となす。又經の中にて佛は說く、若し人にして財を失せば少利を失すと名づくるも、若し智慧を失せば大利を失すと名づくと。又說く、諸の利の中に於て、財は是れ少利にして慧を最利となすと。又說く、諸の明の中に於て日月の明は小にして慧の明は第一なりと。若し慧にして實に非ずんば佛は何を以ての故に是くの如き說を作したまはんや。又經の中にて說く、慧根は是れ聖諦の攝なりと。又說く、苦集の智等は當に眞實なりと知るべし、第一諦を緣ぜば是れを智慧と名づくと。又說く、諸法の中に於て智慧を上と爲すと。又說く、無上正遍知を亦慧

則ち善性を成じ、乃至、身を轉ずるも善は常に隨逐す、故に能く常に善人と相遇ふ、是れを大利と爲す。又常に善を修せば、或は現身に於て而も漏盡を得、若しくは死する時に得、若しくは命終し已りて善處に化生して彼の間に於て得ること、聞法の利の中にて說きたるが如し。又行者は內心にて勇猛の相を發して是くの如き念を作す、我にして若し煩惱の陣を壞せずんば、終に空しく返らずと。又行者は憍慢心に依りて是くの如きの念を生ず、他人は信等の善根あるが故に能く定を得、我も今亦有り、何爲れぞ得ざらんと。昔、菩薩が[二五]阿羅邏等の仙人に從ひて法を聞きて是くの如き念を作したるが如し、是の人は信等の善根あるが故に能く法を得たり、我にも今亦有り、何が故に得ざらんやと。又行者は煩惱の劣弱にして智慧の力の强きを知らば、之を斷ずること何ぞ難からん、比丘にして六法を成就せば能く口風を以て吹いて雪山を散ず、況んや死無明をやと說くが如し。又行者は念を生ず、我は宿世に於て定を修せざりしが故に今得ること能はず、今にして若し勤めずんば後にも復得ず、故に應に勤習すべしと。又常に定を修するが故に心は住處を得ること、瓶の轉じて止まざるも必ず住處を得るが如し。又行者は念を生ず、我にして若し常に勤めて精進せば、若しくは得るも得ざるも後に必ず悔ひず、故に應に一心に諸定を勤修すべしと。

[二六]道諦聚の智論の中の智相品　第一百八十九

眞慧を智と名づく。眞とは謂く空無我なり。是の中の智慧を名づけて眞智と爲す。假名の中の慧は想と名づくるも智には非ず。所以は何、經の中にて說く、刀の能く割くが如く、聖弟子は智慧の刀を以て能く結縛使纒一切の煩惱を斷じ、餘法を說かず、不實を以て能く煩惱を斷ずるにはあらずと。故に知る智慧を實と爲す。

問曰　汝は但慧のみが能く煩惱を斷ずと說くも此の事は然らず。所以は何、想を以ても亦能く諸

【二五】阿羅邏は Ālāra Kālāma の後半を省きたる名、佛陀は出家後、此の仙人について學びたりと云ふ。又次に欝頭藍弗(Udraka Rāmaputra)にも聞法したりといふ。故に等の字あるなり。後の三慧品第一百九十四を見よ。

【二六】三本宮本はここより第十九卷とす。以上にて道諦聚中の定具とを述ぶる部を終りたれば、此品以下は第二に智について述ぶ。

も、精進せずむば永く望むことを得ることなし。是の故に應に勤めて修習すべし、懈惓を生ずることと勿れ。又智者は究竟して必ず應に解脱すべきも、若し修習を離るれば更に方便無し、是の故に智者は當に勤めて修習すべし、厭惓を生ずること勿れ。又行者は念ずらく、正行を行ぜば必ず果報あり、未だ便ち得ずと雖も以て憂と爲さずと。又行者は應に念ずべし、我は已に曾て修習の果報を得たり、衆生は昔より來皆一切の諸の禪定を得たるを以ての故に、我も正しく修せば亦必ず當に得べし、故に厭惓せず、又正行者には佛は爲に證を作したまふに、我は今正行するが故に知る必ず得、又我には得道の因緣は具足す、謂く人身を得、諸根は完具し、明に罪福を識り、亦解脱をも信じ、善知識に遇ひ、此等の緣を具す、云何ぞ修習の果報を得ざらんやと。又正しく精進を行ぜば終に唐しく棄てざるが故に厭惓せず。又煩惱の斷ずるは細微にして覺り難くなるも、柯の漸に盡くが如くに、我諸の煩惱も亦當に斷ずること有るべし、但細なるを以ての故に盡く覺ること能はざるのみ。故に知る善を修するには精進を最と爲す。又少智すら尙能く諸の煩惱を破すること、少光明も亦能く闇を除くが如し。是くの如く但少智を得るのみなるも、則ち事は辨ずと爲す。故に厭惓せず。又久しうして而も成じ難きは所謂定を得ることとなり。若し定を得已るときは則ち餘功は未だ幾ばくならず。是の故に速に得ずと雖も終に厭惓せず。又行者は應に定を得ることの甚だ難きことを念ずべし、昔、菩薩の福慧の深厚なるが如きすら精勤すること六年にして爾かく乃ち逮得したまひ、及び餘の比丘の定を得ることも亦難し、況んや我は凡夫にして薄福鈍根なるに而も能く疾に得んやと。是くの如く念じ已りて疲厭を生ぜず。又諸の行人の必ず應に爲すべき者は所謂定を修することにして、更に餘業なし。故に得るも得ざるも要ず當に修習すべし。又修習せば定を得ずと雖も亦身遠離を得と名づけ、身遠離し已れば定は則ち得易ければなり。又若し定を勤修するときは則ち佛恩に負かず、亦遠離を行ずるを以ての故に行者と名づくることをも得。又善を修習すること久しきときは

ば、是の人の念ずる所は終に願に從はず、善法を勤修すること能はざるを以ての故なりと。行者にして若し能く善法を勤修せば、發願せずと雖も、亦諸漏に於て心は解脫を得、因より果を生ずるは願を須ひざるを以ての故なり。猶鳥雀は要ず卵を抱くことに須つも、願を以ての故に鷇が殼より出づるにはあらざるが如し。又願を以ての故に燈明が清淨なるにはあらず、要ず備に清油と淨炷とを具すに須つ、物の觸動すること無くむば其の明は乃ち淨なり。又但願のみの故に能く嘉穀を得るには非ず、必ず良田と好種と時澤と調適と農功とが具足するに須つて乃ち獲る所有るなり。又但願のみの故に身が色力を得るにはあらず、要ず良藥餚饍を服する等の緣にて乃ち充滿することを得るなり。是くの如く、但願のみの故に能く漏盡を得るには非ず、要ず眞智を須つて乃ち解脫することを得るなり。何れの有智者か因より果を生ずることを知りて而も其の因を捨てて餘より果を求めんや。又法を修習せば現に果報を見る、經の中にて佛の說くが如し、且く七日を置け、我は弟子に敎へむ、乃至、須臾にても善法を修習せば、無量歲に於て常に樂を受くることを得と。又[三二]諸の比丘尼が大德阿難に語る、我等が善く念處を修せば、覺は初めとは異るやと。又經の中にて、佛は諸の比丘に告ぐ、若し人にして諂曲心無くして我所に來至せば、我は朝に爲に法を說きて夕に利を得しめ、夕に爲に法を說きて晨に利を得しめむと。[三三]又若し人にして阿羅漢道を得ば、他人と與なること無く非人と與なるにも非ずして但正因を修するのみの故に斯の利を獲るなり。又無上の佛道すら尙善法を積集するを以ての故に得、況んや餘事をや。經の中にて說くが如し、佛は比丘に語げたまはく、我は二法に依りて無上道を得たり、一には善を樂うて厭くことなし、二には道を修して倦まずと。佛は善法に於て終に齊限無く、又諸の菩薩も定を得ずと雖も亦懈惓せず。所以は何、若し善を爲さざるときは則ち獲る所無ければなり。善を爲すも亦相[三四]伐らざるも、善を爲さずむば終に安隱なし。此れを思量し已りて則ち勤めて精進して善法を修習す。若し精進を發せば或は得、或は失ふ

【三二】此經は善覺品第一百八十三に引用せられたる比丘尼經なり。

【三三】此經は四無畏品第三、衆法品第七に引用せらる。

【三四】三本宮本は代に作る。

若し初めに火と合するの法にて赤相を生ずれば、復何ぞ後に火と合するの法を須ひんや、若し初めに火と合する時に黒相が生ずれば、赤相は終に應に生ずべからず。若し第二の時に赤相が生ずれば、復何ぞ久しく火と合することを須ひんや、若し汝が意にして赤相は漸くに生ずと謂はゞ、心も亦是くの如し、何の咎あらんや、壞等も爾り。又諸法は因緣ありと雖も亦次第して生ず、受胎等の漸々に身を成ずるが如く、種根等も亦漸次に生ずるが如し。是くの如く定慧等の法も念々に滅すと雖も亦下中上の法を以て次第して生ず。又修法は微細にして心の相續と異る。羽毛の[一〇]煖が微なるときは卵は則ち漸くに變じ、堂の肌が軟なるが故に斧の柯が微しく盡くが如く、心も亦是くの如し。定慧は妙なるが故に漸次に修習するなり。又法を修習するは時到らば乃ち知る、偈の中にて説くが如し

一分は師より受け　一分は友に因りて得
一分は自ら思惟し　一分は時の熟するを待つ、と。

若し人にして復終日讀誦すと雖も明了なること能はずして、時が熟する者なるが如し。多華を以て一時に麻に熏ずるが如きは少華の漸々に久しく熏ずるに如かず。膏の潤(うるほし)、水の浸(ひたす)、墻壁に[一一]溼する等も皆亦是くの如し。現見するに種根芽等の増長するは微細にして尚見ることすら能はずして日日に長ずる所は毫末の如き許り、小兒等の身も酥乳等の熟するも亦復是くの如し。故に知る法を修することも微妙にして覺り難し。

問曰　或は法の一時に頓に集まることあるを見る。人の先には色を見ざるも、見て即ち染著するあり、亦少時にして多く通達する所有り。何が故に但漸次に修習すと説くのみなりや。

答曰　皆是れ過去に曾て修習せしものなるが故に積習するに漸を以てすることを知る。此の事は已に明にしたり。又但發心のみにて能く成ずる所有るには非ず、經の中にて説くが如し、若し善法に於て勤めて修習せずして而も但諸法を受けず諸漏の中に於て心が解脱を得んと願欲するのみなら

なり。

【一〇】大正大藏經は煖に作るも縮刷藏經は燸に作る。

【一一】溼は水の集まること。

れば其の香は轉増す、是の香及び麻は念々に住せざるも而も熏力あり。故に知る念々に滅する法も亦修習すべし。

問曰 麻は是れ住法にして、華香が來りて熏ずるなり。住心あること無ければ、念々に滅する智を以て來りて而も修習するに、云何ぞ喩と爲さむや。

答曰 住法在ること無し、一切の諸法は皆念々に滅すればなり。此の事は先に成じたり。故に難には非ざるなり。又若し法にして念々に滅せざるときは則ち修習無し。卽ち體が常住なれば修は何の益する所ぞ。若し法にして念々に滅せば、下中上の法なるを以ての故に、修習あり。[一七]

問曰 諸華は麻に到れば能く熏ずるも、智は心に及ばざるが故に修習無きなり。

答曰 先に業の喩の中にて是の事は已に明したり。所謂後業は先業に到らず先語は後語を待たざるも而も身口業にも亦修相あり。是の故に汝が到らずむば修せずと言ふは名づけて難とは爲さず。又現見するに因果は同時ならずと雖も亦因より果あることを得、是くの如く心法は念々に滅すと雖も亦修習あり。又種が水を得れば芽等に到らずと雖も亦能く芽等をして滋茂せしむるが如く、是くの如く智慧も先心を修習して後心が增長するなり。

問曰 若し麻にして念々に滅するときは則ち異る麻が生ずるなり、是の麻は熏じて生ずとせんや、熏ぜずして生ずとせんや。若し熏ぜずして生ぜば、終に熏あること無く、若し熏じて生ぜば、復何ぞ久しく熏ずることを用ひんや。

答曰 因に熏ずるを以ての故なり。種が水を得るときは則ち芽が滋茂するが如く、是くの如く先に華が合するを因として而も異る麻が生ず、是れ則ち熏じて生ずるなり。汝は何ぞ久しく熏ずることを用ひんやと言ふも、汝が[一八]經の中にて說くが如し、火と合するの法に因りて微塵の[一九]黑相が滅して赤相が生ずと。若し初めに火と合するの法にて黑相を滅すれば、應に更に黑相を生ずべからず、

【一七】 熏習は刹那滅のものの中にて能熏所熏が同生同滅たるを要すの意を知り居りしなり。

【一八】 この經は勝論派の經を指す。かかる場合の經は學說の意味と解するも可なるものなり。

【一九】 開辟品第五十の註の中にいへる勝論派のパーカヂャ(燒生)說を指す。火合法の法の字は恐らく規則理由などの意味なるべし。無くとも可なること次の句中に無き所もあるにて知らる。微塵は原子をいふ。原子の黑相は素燒の瓶の場合にて、之を火に入るるとき、黑相は滅して赤相となるなり。これがパーカヂャにて、赤相が更に、冷却したる後、他色となるもパーカヂャ

問曰　經の中にて說く、止を以て心を修し觀に依りて解脱を得、觀を以て心を修し止に依りて解脱を得と。是の事は云何。

答曰　行者にして若し禪定に因りて滅を緣ずる智を生ぜば、是れを止を以て心を修し觀に依りて解脱を得と名づけ、若し散心を以て陰界入等を分別し此れに因りて滅を緣ずる止を得ば、是れを觀を以て心を修し止に依りて解脱を得と名づく。若し念處等の達分を得て心を攝するときは則ち倶に止觀を修するなり。又一切の行者は皆此の二行に依りて心を滅することを得て解脱するなり、

修定品　第一百八十八

問曰　汝は應に定を修習すべしと言ふも、是の定心は念念に生滅すれば、云何ぞ修すべけんや。

答曰　現見するに身業は念念に滅すと雖も修習するを以ての故に異る技能あり、修習すること久しきに隨つて轉轉して便ち易し。口業も亦爾り、習學する所に隨ひて轉調利を增し堅固にして憶し易し、讀誦等の如し。當に知るべし意業も念念に滅すと雖も亦修習すべし。火が能く生を變じ水が能く石を決し、風が能く物を吹くが如く、是くの如く念念に滅する法にも皆集力あり。久しく煩惱に習するに隨ふときは則ち隨ひて熾盛なること、人の世世に婬を修習するときは、心は則ち多欲と成るが如し。恚癡も亦爾り。經の中にて說くが如し、若し人にして隨つて何れの事を念ずるも心は則ち隨つて向ふ、常に欲覺に隨へば心は則ち欲に向ふが如し。二も覺も亦爾り。故に知る此の心は念念に滅すと雖も亦修習すべし。又修を增長と名づく、現見するに諸法には皆增長あり。經の中にて說くが如し。行者は邪念を以ての故に、欲等の諸漏の未だ生ぜざるものも則ち生じ、生ぜる者は增長すと。謂く下より中を生じ、中より上を生ずるものにして、種芽莖節華葉果實の現見するに皆因より漸次に增長するが如し。定慧等の法も亦應に是くの如くなるべし。又現見するに麻を[一六]熏ず

【一六】麗本は勳に作る。三本宮本の熏の方解し易し。以下同じ熏習の說注意すべし。

答曰 此れは無漏解脱には非ず。所以は何、時解脱は但上[一四]の力を以て少時結を遮するのみにして而も未だ永斷すること能はざれば、後に則ち還發るが故に無漏には非ざるに名づくればなり。又此の解脱を時愛解脱と名づく、漏盡の阿羅漢には愛すべき所無し。

問曰 若し爾らば則ち聖所愛の戒無きや。

答曰 諸の學人は漏が未だ盡きざるを以ての故に我心は時には發すれば、是の故に戒に於て愛を生ずるものにして、阿羅漢には我心が永滅したるに而も愛を生ずるには非ざるなり。

問曰 [一五]瞿提阿羅漢は時解脱に於て六返退失し、第七の退を恐れしが故に刀を以て自害せり。若し有漏を失するならば應に自害すべからず。故に知る時解脱は有漏と名づけず。

答曰 此の人は所用の斷結の禪定を退失し、此の定の中に於て六返退失して第七の時に還此の定を得て便ち自殺せんと欲し、爾の時に尋いで阿羅漢道を得たるなり。是の故に魔王は學人は死すと謂ひ、屍の四邊を繞りて遍ねく其の識を求め、來りて佛に白して言さく、世尊よ、云何が汝が弟子は未だ漏盡ならずして而も死せしやと、佛は言く、此の人は已に愛根を拔きて泥洹に入ることを得たりと。

問曰 若し貪を斷ずるを遮斷と名づくれば、經の中にて說く、貪心より解脱を得、恚癡より心は解脱を得と、又說く、貪喜を斷ずるが故に心は好解脱を得と、又說く、欲漏より心は解脱を得と、是くの如きは皆應に遮解脱と名づけ、實の解脱には非ざるべし。

答曰 是の中にても亦無明の斷ぜるを說くが故に知る是れ畢竟解脱なり。若し貪を斷ずるを或は是れ遮斷なり或は畢竟斷なりと說くは、眞智を生ぜざるが若きときは則ち是れ遮斷なるも、眞智を生ずるに隨ひて是れ畢竟斷なり。止を用ひては能く畢竟して貪を斷ずること有ること無し。若し然らば、外道も亦能く畢竟して貪を斷ぜむも而も實には然らず。故に知る但是れ遮斷なり。

【一四】 宮本のみは止に作る。

【一五】 瞿提は Godhika 音寫比丘の名末羅(Malla) 王族の子、睦じき四人の友と共に出家す、Isigiri の Kālasilā にありて六度悟り、病氣の爲に六度退轉す、七度目に悟りし時復た退轉することを恐れて自殺す、此の事を佛陀が知りて來り訪ひ給ふ時に、惡魔ありて、死せる瞿提の靈を求めて遂に得ずして彷徨せり。乃ち佛陀は惡魔に語りて曰く、「入涅槃の聖者の跡は如何が求むることを得んや」と。不退品第二十九に出づる劬提比丘に同じ。

則ち倶に隨ふもの、八道分の中にては三分は戒と名づけ、二分は止と名づけ三分は觀と名づけ戒は亦止にも屬す。又止は能く貪を斷じ觀は無明を除く經の中にて說くが如し、止を修するときは則ち心を修し、心を修するときは則ち貪受が斷じ、觀を修するときは則ち慧を修し、慧を修するときは則ち無明が斷ずと。又貪を離るるが故に心は解脫を得、無明を離るるが故に慧は解脫を得。二解脫を得れば更に餘事無きが故に但二を說くのみなり。

問曰　若し止と觀とが能く心を修し慧を修し、心と慧とを修するが故に能く貪と及び無明とを斷ぜば、何が故に定むで止は能く心を修して能く貪愛を斷じ、觀は能く慧を修して能く無明を斷ずと說くや。

答曰　散心ならば諸心の相續は色等の中に行じ、此の相續心は止を得るときは則ち息むが故に止は能く心を修すと說き、心を息むるより智を生ずるが故に觀は能く慧を修すと說くなり。觀を生じ已りて後にも所修あるを皆慧を修すと名づくるを以て、初慧をも觀と名づけ、後をも名づけて慧と爲すなり。若し經の中にて、止を修して貪を斷ずと說かば、是れ遮斷を說くなり。何を以て之を知るや。色等の外欲の中にて貪を生ずるも、若し止の[一]樂を得ば復生ぜざればなり。經の中にて說くが如し、行者は淨喜を得たる時には不淨喜を捨つと。若し無明が斷ずと說かば是れ究竟斷なり。何を以て之を知るや。無明が斷ずるが故に貪等の煩惱は斷滅して餘無ければなり。經の中にて、亦貪を離るるが故に心は解脫を得と說くは是れも遮斷と名づく、無明を離るるが故に慧が解脫を得るものにして、是れ畢竟斷なればなり。二種の解脫あり、時解脫と不壞解脫となり。時解脫は是れ遮斷にして不壞解脫は是れ畢竟斷なり。

問曰　時解脫は是れ[二]五種の阿羅漢の無漏解脫にして[三]不壞解脫は是れ不壞法の阿羅漢の無漏解脫なるに、何が故に但遮斷とのみ說くや。

【一】三本のみは樂に作る。

【二】五種の阿羅漢。阿羅漢には退法、思法、護法、安住法、堪達法及び不動法の六種の別あり、此の中、最後の不動法の羅漢のみが無生智を起して不退の位に入り、前五種の阿羅漢は無生智なく、從つて、時に退することあり、之を五種の阿羅漢と云へり。

【三】時解脫、不壞解脫。前五種の阿羅漢は好衣、好食、好臥具、好處所、好說法、好同學を得る時、入定して解脫するが故に時解脫と名づけ、第六の不動法の阿羅漢は退することなきが故に不壞解脫と云ふ。

卷の第十五[一]

止觀品　第一百八十七

問曰　佛は處處の經の中にて、諸の比丘に告げたまはく、若しくは[二]阿蘭若處に在りても若しくは樹下に在りても若しくは空處に在りても應に二法を念ずべし、所謂止と觀となりと。若し一切の禪定等の法にして皆悉く應に念ずべくむば、何が故に但止と觀とのみを說くや。

答曰　[三]止を定に名づけ、觀を慧に名づく。一切の善法の修より生ずる者は此の二に皆攝し、及び散心に在る聞思等の慧も亦此の中に攝し此の二事を以て能く道法を辦ずるなり。所以は何、止は能く結を遮し觀は能く斷滅すればなり。[四]止は草を捉るが如く觀は鎌にて刈るが如く、止は地を掃ふが如く觀は糞を除くが如く、止は垢を[五]揩ふが如く觀は水にて洗ふが如く、止は水にて浸すが如く觀は火にて熟するが如く、止は癰に附くが如し觀は刀にて決するが如く、止は脈を起すが如く觀は血を刺すが如く、止は心を制調し觀は沒心を起し、止は金に灑ぐが如く觀は火にて灸るが如く、止は繩を牽くが如く觀は[六]剗を用ふるが如く、止は鑷にて刺を鑷むが如く觀は剪刀にて髪を剪るが如く、止は器[七]鉀の如く觀は兵杖の如く、止は平立するが如く觀は箭を發つが如く、止は服の[八]膩の如く觀は藥を投ずるが如く、止は[九]泥を調ふるが如く觀は印を印するが如く、止は金を調ふるが如く觀は器を造るが如し。又世間の衆生は皆二邊に墮す、若しくは苦か若しくは樂かなり、止は能く樂を捨し觀は能く苦を離る。又[一〇]七淨の中の戒淨と心淨とは止と名づけ、餘の五は觀と名づけ、八大人覺の中にては六覺は止と名づけ二覺は觀と名づけ、四憶處の中にては三憶處は止と名づけ第四憶處は觀と名づけ、四如意足は止と名づけ四正勤は觀と名づけ、五根の中にては四根は止と名づけ慧根は觀と名づけ、力も亦是くの如く、七覺分の中てには三覺分は止と名づけ三覺分は觀と名づけ念は

【一】三本宮本はここにては分卷せず。
【二】阿蘭若(Āraṇyaka)は森林の如き寂靜なる處にて精舍を指す。
【三】止觀、止は奢摩他(Śamatha)、觀は毘鉢舍那(Vipaśyanā)の譯。止は妄念を止息し、觀は眞理に觀達す。卽ち、止は前に在りて煩惱を伏し、觀は後に在つて、煩惱を斷じ眞理を證する觀法なり。
【四】十五種の譬喩あり。此冗漫は止觀を重要視することを示すものなり。
【五】揩は拭ふなり。
【六】剗は剷並に鏟に通ず。鏟は鉋(カンナ)又は草を除く器なり。
【七】鉀は鎧なり。
【八】膩は脂肪なり。
【九】大正大藏經は沒に作り、宮本のみ泥に作るとなす。縮刷藏經は泥に作る。
【一〇】七淨、法聚品第十八に出づ。戒淨、心淨、見淨、度疑淨、道非道知見淨、行知見淨、行斷知見淨なり。以下の法數は通常のものにして、何れも已に出でたるものなり。

又貪等の諸蓋を皆定難と名づく。要を取りて之を言はゞ、乃至、衣服飲食等の法にても善根を滅損し不善を増長すれば皆定難と名づくるなり。應當に覺知し、勤めて、捨離を求むべし。

して後に於て惡心轉増し衆の中にて惡を爲すも亦恥づる所無くむば、是れを無愧と名づけ、善法の本なる二つ白法を失ふが故に常に惡法に隨ふを是れを放逸と名づく。此の三惡法を成就するを以ての故に所尊の師長の敎[四二]誨を受けざれば、[四三]恭敬無しと名づけ、反つて師敎に悷れば與に語ること難しと名づけ、是くの如くなるときは則ち師長に遠離して惡人に親近すれば惡知識に習ふと名づく。此の中に於て、無慚より無恭敬を生じ、無愧より難與語を生じ、放逸より習惡知識を生ずるが故に不信と爲り、邪の戒法を受くれば、常に懈怠と爲り、惡人に習近すれば敎へて不信ならしめ惡を爲すも報無しと言ひ、或は惡を行じて報を得ることを聞かば卽ち鷄狗等の法を受行して、速に罪を畢らんことを望み、此の法を受行するも利あることを覺らざるが故に懈怠を生ず。懈怠を以ての故に善人を喜ばずして、眞實に正行を行ずる者なしと謂ひ、亦正法を聞くことをも惡みて、正法を行ずるも皆邪法の如くに利益する所無しと謂ひ、心濁るを以ての故に喜んで他の過を出して、他の行法も皆自己の如く都べて所得無しと謂ふ。是くの如く煩惱を制すること能はざるが故に心は則ち戲調なり、戲調なるを以ての故に諸根を攝せざれば、則ち能く戒を破す。戒を破するを以ての故に妄に憶念を生じ、行は慧を安んぜず心志は散亂して便ち邪念を生じ、邪念を生ずるが故に便ち邪道を行じ、邪道を行ずる時は利を得ざるが故に心は則ち迷沒す。心が明ならざるが故に三結を斷ぜず、三結を斷ぜざるが故に貪等の煩惱と病等の諸衰とを斷ずること能はざるなり。此れと相違するを名づけて白法と爲す。

又愁憂の定難あり。行者は念を生ずらく、我は爾所の年月歲數に於ても定を得ること能はずと。故に愁憂を生ずるなり。

又喜味に貪著するも亦是れ定難なり。

又不樂の定難あり。好處善師等の緣を得と雖も心は樂しまざるなり。

【四二】麗本は悔に作るも、三本宮本の誨を取る。
【四三】前の不恭敬卽ち恭敬せずと同じ。
【四四】佛敎以外の宗敎家が鷄や狗の如き生活法をなして之を苦行の一種となすをいふ。

問曰　一切の未離欲人は皆眼等の無常を觀ずること能はざるや。

答曰　此の言は少しく失す。應に現在に貪を起さば、眼の無常を觀ずること能はずと說くべし。〔四〇〕又成就の中にても亦差別あり、有る人は貪等が厚重にして常に來りて心に在るときは、則ち能く定を障ふも、若し薄くして而も常ならざるときは、則ち難を爲すこと能はず。又經の中にて說く、十の〔四一〕三惡法は皆定難と名づけ、十の三白法は皆是れ定に順ずと。所謂佛の言く、若し三法を斷ぜざるときは、則ち老病死を度ること能はず、謂く貪と恚と癡となり。若し三法を斷ぜざるときは、則ち貪と恚と癡とを斷ずること能はず、謂く身見と戒取と疑となり。次に三法あり、謂く邪念と邪行と沒心となり。次に三法あり、謂く妄憶と不安慧と亂心となり。次に三法あり、謂く調戲と不守諸根と破戒と爲り。次に三法あり、謂く不信と邪戒と懈怠となり。次に三法あり、謂く善人を喜ばずと正法を聞くことを惡むと喜んで他の過を出すとなり。次に三法あり、謂く恭敬せずと與に語るべきこと難しと惡知識に習ふとなり。若し三法を斷ぜざるときは、則ち恭敬せずと與に語ること難しと惡知識とを斷ずること能はず、謂く無慚と無愧と放逸となり。若し能く無慚と無愧と放逸とを斷ずるときは、則ち能く恭敬せずと與に語ること難しと惡知識とを斷じ、乃至、能く身見と戒取と疑とを斷ずるときは則ち能く貪と恚と癡とを斷じて老病死を度る。是の中にて老病死を度るは謂く無餘涅槃、貪と恚と癡とを斷ずるは謂く阿羅漢果にして有餘涅槃、身見と戒取と疑とを斷ずるは謂く三沙門果、邪念と邪行と沒心とを斷ずるは謂く煖等の達分の善根に在るもの、妄憶念と不安慧と亂心とを斷ずるは謂く四憶念處を修するもの、調戲と諸根を守らずと破戒とを斷ずるは謂く出家の戒を受くるもの、善人を喜ばずと正法を聞くを惡むと喜んで他の過を出すと、不信と邪戒と懈怠と恭敬せざると與に語るべきこと難しと惡知識に習ふと、無慚と無愧と放逸とを斷ずるは謂く在家の清淨なり。所以は何。若し人にして獨處し惡を爲して羞ぢずむば、是れを無慚と名づけ、此の人に

〔四〇〕麗本は有に作る。今は三本宮本の又を取る。

〔四一〕十種の三惡法並に十種の三白法にして、三惡法は下に老病死等三種づゝ擧げられ居るもの、三白法は之に反するものにて是亦次下に述べらる。

は則ち疲極し、緩なるときは則ち飛び去るが如く、又絃を調ぶるに、若しくは急にても若しくは緩にても倶に音を成ぜざるが如し。又精進が若し速なるときは則ち究竟し難し、佛の[三八]阿那律に語げたまふが如し、汝の精進は過ぎたれば、後には應に懈怠すべしと。所以は何、若し精進が過ぐるときは、則ち事は成ぜずして還つて懈怠に墮し、精進にして若し遲きときにも事は亦辨ぜず。是の故に不等を名づけて定難と爲す。

又無念の定難あり、謂く善法を念ぜざるなり。設ひ善法を念ずるも則ち受くる所に非ざるなり。又定相を念ぜずして而も外色を念ぜば、是れを不念と名づく。行者は應に一心に精進して受くる所の法を念ずること、油鉢を擎ぐるが如くすべし。

又顚倒の定難あり、謂く多欲の人は慈心を受行し、多瞋恚の人は不淨を修習し、上の二種の人は十二因縁を觀じ、又沒心の中にて止を修し、[三九]掉心の中にて精進を行じ、是の二心の中にて捨を行ず、是れを顚倒と名づく。

又多語の定難あり、謂く多覺觀なり、覺觀は是れ語言の因なるが故に、又心は住することを樂はずして强いて縁に繫在すればなり。

又不取相の定難あり。相に三種あり、所謂止相と進相と捨相となり。又三相あり、謂く入定相と住相と起相となり。行者は善く是くの如き等の相を分別せざるが故に禪定を失す。

又慢の定難あり、若し我は能く定に入るも彼は入ること能はずと謂はば、是れを憍慢と名づけ、若し彼は能くするも而も我は能くせずと謂はゞ、是れ不如慢、若し未だ定を得ざるも自ら謂ふて得たりと爲さば、是れ增上慢、妙ならざる定に於て而も妙想を生ぜば、是れを邪慢と名づくるなり。

又貪等の法をも亦定難と名づく、經の中にて說くが如し、若し行者にして一法成就するときは、則ち眼の無常を觀ずること能はず、所謂貪なりと。

【三八】阿那律（Anuruddha）佛の十大弟子の一人、迦毘羅衞城の刹帝利種、甘露飯王の子、天眼第一との稱あり。

【三九】麗本は踔に作る。今は三本宮本に從ふ。

で皆敗壞すと見れば、歡喜は則ち滅す。又行者は更に大事を求め、光明等の法を以てせず、是れが爲の故に喜を生ぜず。又行者は滅相の利を見るが故に、光明等の相を以て喜と爲さず。又此の行者は寂滅を修習して煩惱を盡さんと欲す、故に喜を生ぜず。此等の緣を以て能く歡喜を滅す。

又怖畏の定難あり、行者は怖るべき緣を見るが故に怖畏を生ず。世間の所有の怖畏すべき處を行者は悉く見て、此の事の中に於ては皆應に諦(あきらか)に無常敗壞なりと觀ずべく、應に隨ふべからざるなり。所以は何、坐禪の法の中に此の因緣あらば畏るべき事を見ればなり。此れを以て而も怖畏を生ずべからず。是の事は虛妄にして皆空なり、幻の能く凡人を誑らかすが如くにして眞實に非ざるなり、是の如く思惟せば、則ち怖畏を離る。又空法に依るときは則ち怖畏無し。又是の念を作す、我(わが)行力の故に此の異相を感ず、應に怖畏すべからずと。又自ら念ずらく、身に戒聞等の功德の具足せる有らば、害を加ふべきの因緣なきが故に怖畏せずと。又此の行者は道を樂しむこと深きが故に身命を惜まず、何ぞ怖畏する所あらん。又此の人の心は常に正念に處す、是の故に怖畏は便を得ること能はず。又勇悍の相を念ずるが故に怖畏せず、怖畏は是れ怯弱の相なればなり。是くの如き等を以て怖畏を滅除す。

又不適の定難あり、謂く行者に冷熱等の病あり、若しくは疲極失睡の[三七]諸の因緣の故に身をして不適ならしむ。貪憂嫉垢等の諸の煩惱ありて心をして不適ならしむるときは、則ち禪定を失す。是の故に行者は應に自ら身心を將護し其をして調適ならしむべし。

又異相の定難あり、所謂垢相なり。亦垢相にも非ずして能く禪定を亂すものもあり、布施等の相の如し。

又不等の定難あり、所謂精進の若しくは遲く若しくは疾きものなり。疾きときは則ち身心が疲極し、遲きときは則ち定相を取らざれば、倶に定を退失すればなり、鳥の子を捉ふるに、急なるとき

【三七】麗本は謂に作る。今は三本宮本に從ひて諸となす。

るなり。

問曰　憶は過去を緣ずるに、息は是れ現在なり、何が故に憶と名づくるや。

答曰　是れは假名を破する智を憶の名を以て說くなり。諸の心數法は更相に名を爲す、十想等の如し。亦先後の所行をも憶するが故に名づけて憶と爲すなり。

問曰　長短等の中にては聖行を說かず、云何ぞ行無きに憶處と名づくるや。經の中にて說く、若し行者にして出入息を學ばゞ、若しくは長にても若しくは短にても若しくは身に遍ずるも若しくは身行を除くも、爾の時を身憶處と名づくと。

答曰　是れを初方便道と名づく、心清淨なるが爲の故に、後には斷道と名づく。又此の中には無常等の行あり。但此の經にては說かざるのみ、餘經の中にては說く、行者は出入息の中に於て身の生相と滅相と及び生滅相とを觀ずと。又說く、身の無常等を觀ずと。但第四の中には無常等の行が具足するが故に說くなり。

定難品　第一百八十六

是の定にして若し障礙の諸蘊を離るれば、能く大利を成ず。定難とは所謂麁喜なり。經の中にて說くが如し、我にして麁喜を生ぜば心の難法なりと。行者は應に此の麁喜を生ずべからず、貪著等の過有りて定心を亂るを以ての故なり。

問曰　法より喜を生ずるに、云何が生ぜざらしめむるや。

答曰　行者にして空を念ずるときは則ち喜を生ぜず。衆生想有るを以ての故に喜を生ず、五陰は空にして衆生なし、云何が當に喜ぶべき。又行者は應に是の念を作すべし、因緣を以ての故に種種の法が生ず、謂く光明等なり、是の中にて何の喜ぶ所あらんやと。又行者は喜ぶところの法は尋い

問曰　息の起る時には先に出づるや、先に入るや。
答曰　生るる時には先に出で、死する時には、後に入るなり。第四禪に出入するも亦是くの如し。
問曰　是の出入息を念ずるを云何が具足と名づくるや。
答曰　行者にして若し此の十六行を得ば、爾の時を具足と名づく。有る論師は言く、六の因緣を以ての故に具足と名づくと。所謂數と隨と止と觀と轉緣と清淨となり。數とは、出入息を數へて一より十に至るに名づく。數に三種あり、若しくは等と若しくは過と若しくは減となり。等とは謂く十、數を十と爲すもの、過とは謂く十一數を名づけて十と爲すもの、減とは九を數へて十と爲すに名づくるものなり。隨とは、行者の心が息出入に隨ふに名づけ、觀とは行者が息を身に繫けて珠の中の縷の如くに見るに名づけ、止とは心をして出入息に住せしむるに名づけ、轉とは、謂く身が心を緣ずるを轉じて受をして心を緣ぜしむ、心法を現前するも亦爾り、清淨とは行者が一初の煩惱の諸難を離れて心が清淨を得るに名づく。此れは必ずしも定まらず、所以は何、是の諸行の中にては必ずしも數と隨との二法を用ふることを要せざればなり。行者は但心をして息の中に住せしめて諸覺を斷ずるが故に、若し能く十六種を行ぜば、名づけて具足と爲すなり。又此の具足の相は決定せず、鈍根の所行にして、利根者に於ては、則ち具足には非ざればなり。
問曰　是の出入息は經の中にては何が故に名づけて食と爲すと說くや。
答曰　若し息にして出入の停まること等しきときは、身に快樂を得ること、美食を得て益々身が調適なるが如し、故に名づけて食と爲すなり。
問曰　此の十六行の中にては盡く出入息を念ずるや。
答曰　是れを人は五陰を壞裂する方便と名づく。若し五陰を壞裂して假名を除き已らば、更に復何ぞ出入息を念ずることを用ひんや、是れを身憶と名づけ、四種に身を憶するが故に身憶と名づく

答曰　不淨觀は未だ欲を離れて自ら惡厭することを得ずむば、身心は則ち迷悶す。藥を服することが過ぐるときは、則ち還つて病と爲るが如く、是くの如く不淨觀は、喜んで惡厭を生ずること、跋求[三五]沫河邊の諸の比丘が不淨觀の故に、深く惡厭を生じて毒を飲み、高きより墜つる等、種種に自殺せるが如くなるも、此の行は爾らず、能く離欲を得而も惡厭を生ぜざるが故に名づけて勝と爲す。又此の行は得ること易し、自ら身を緣ずるが故なるも、不淨は失ひ易し。又此の行は細微なり、能く自ら身を壞するを以ての故なるも、不淨は行が麁にして、骨相を壞すること難し。又此の行は、能く一切の煩惱を破するも、不淨は但婬欲を破するのみ。所以は何、一切の煩惱は、皆覺に因りて生じ、出入息を念ずれば、諸覺を斷ずるが爲の故なり。

問曰　出入息は身に屬すと爲すや、心に屬すと爲すや。

答曰　亦は身に屬し亦は心に屬す。所以は何、胎中に處せば無なり、故に知る身に由る。若し第四禪等及び無心ならば無なり、故に知る心に由る。

問曰　息は故には起らざれば、應に心に由るべからず。所以は何、是の息は意に由りては起らざること、心は餘事を念ずるも息は常に出入するが如し。食の自ら消するが如く、影の自ら轉ずるが如く、人の爲すには非ざるなり。

答曰　息は故にも起らず、憶念にも由らずして、但衆緣の和合するを以ての故にのみ起る。若し心にして有らば則ち有り、心無くむば便ち無し。故に知る心に由る。[三六]又心の差別に隨ふ。麁心ならば則ち短く細心ならば則ち長し。又出入息は、地に由り心に由る、若し出入息の地に在り亦出入息の地の心も有らば、爾の時には則ち出入息の地あり、所謂欲界及び三禪なり。若し出入息の地に在りて而も入出息の地の心無く、及び無心に在らば、爾の時には則ち無し。若し出入息無き地に在らば爾の時にも亦無し。

【三五】宮本のみは沫を缺く。Valgumudā (Vaggumudā) の音譯。

【三六】麗本は有とす。今は三本宮本に從ふ。

に行者が身憶處を具するなり。喜を覺すとは、是の人は此の定法に從ひて心に大喜を生ず、本より喜ありと雖も、是くの如くなること能はざれば、爾の時を名づけて善を覺すと爲す。樂を覺すとは、喜より樂を生ずるなり、所以は何、若し心に喜を得るときは身は則ち調適なり、身が調適ならば、則ち猗樂を得、經の中にて說くが如し、心が喜ぶが故に身は猗なり、身が猗なるときは則ち樂を受くと。心行を覺すとは、喜の過患を見るなり、能く貪を生ずるを以ての故なり。貪は是れ心行なり、心より起るが故なり。受の中に貪を生ずるを以ての故に、受は此れ心行なりと見るなり。心行を除くとは、行者は受より貪を生ずる過を見るときは、除滅するが故に、心は則ち安隱にして、亦麁受をも滅除す。故に心行を除くと說くなり。心を覺すとは、行者は受の味を除くが故に、心の寂滅を見て沒せず掉せざるなり。是の心にして或時に還つて沒せば、爾の時には喜ばしめ、若し心にして還つて掉せば、爾の時には攝せしるむなり。若し二法を離るれば、爾の時には、應に捨すべし、故に、心をして解脫せしむと說くなり。行者は是くの如くにして心が寂定なるが故に、無常行を生じ、無常行を以て諸の煩惱を斷ず、是れを斷行と名づく。煩惱が斷ずるが故に、心は則ち厭離す、是れを離行と名づく。心の離するを以ての故に、一切の滅を得、是れを滅行と名づく。是くの如くに次第して解脫を得るが故に十六行にて出入息を念ずと名づくるなり。

問曰　何が故に入出の息を念ずるを、聖行・天行・梵行・學行・無學行と名づくるや。

答曰　風か虛中を行けば虛相は能く速に壞相を開導す、壞相は是れ空にして、空は是れ聖行なるが故に聖行と名づけ、淨天に生ずるが爲の故に天行と名づけ、寂滅に至るが爲の故に梵行と名づけ、學法を得るが爲の故に學行と名づけ、無學と爲るが故に無學行と名づくるなり。

問曰　若し不淨を觀じ深く身を厭離して速に解脫を得ば、何ぞ此の十六行を修することを用ひんや。

答曰　八直聖道を以て水と爲す。譬喩は必ずしも盡くは相似せしめざればなり。此の木にして若し八難を離るれば、必ず大海に至るが如く、比丘も是くの如く、諸流の難を離るれば、則ち八聖道水に隨ひて、流れて泥洹に入ること、乳は貝の如しと言ふは、但其の色のみを取りて堅軟を取らず、面は月の如しと言ふは、但其の盛滿なるのみを取りて形を取らざるが如し。又行者にして聖道を出で已りて、內外入に著せば、此の木が卽ち水中に於て、此彼の岸に著して腐爛する等にも如かざるなり。有る論師は言く、恒河の水の必ず大海に至るが如く、是くの如き八聖道は必ず泥洹に至るが故に以て喩と爲すと。是くの如く略して十一の定具を說きたり。若し此の法有らば、自然に定を得。

出入息品　第一百八十五

[三四] 阿那波那は十六行にして謂く入の息の若しくは長若しくは短を念じ、息の身に遍ずるを念じて、諸の身行を除き、喜を覺し、樂を覺し、心行を覺して、心行を除き、出入の息を念じて心を覺し心をして喜ならしめ、心をして攝めしめ心をして解脫せしむるなり。出入の息を念ずるは無常に隨ひて觀じ、斷離滅に隨ひて觀じ、入出の息の若しくは長若しくは短なるを念ずるなり。

問曰　云何が息の長短と名づくるや。

答曰　人の山に上るに、若し重きを擔はば疲乏するが故に息は短きが如く、行者も亦爾り、麁心の中に在らば、爾の時には則ち短し。麁心とは、所謂躁疾散亂の心なり。息が長しとは、行者にして細心の中に在らば、則ち息は長し。所以は何、心の細なるに隨ふが故に、息も亦隨つて細なればなり。卽ち此の人の疲極が止むが故に息も則ち隨つて細なるが如し。爾の時には則ち長し。息が身に遍ずとは、行者にして身の虛なることを信解するときは、則ち一切の毛孔に、風行の出入するを見るなり。身行を除くとは、行者にして境界力を得れば、心は安隱なるが故に、麁息は則ち滅し、爾の時

【三四】阿那波那(Ānāpāna)は數息觀なり。出入の息を觀じて心を鎭むる觀法なり。

答曰　阿難は、頭未だ枕に到らずして、即ち解脱を得たり、是の故に數ゝ希有法の中に在り。何が故に速ならざらむ、又阿難は此の夜の中に於て、精進が小しく過ぎて疲極せるを以ての故に解脱を得ざりしなり。又阿難は自ら[三二]我は今夜に於て必ず漏盡を得んと誓ひたることも亦菩薩が道場に於て自ら誓ひたるが如し、誰か此の力の阿難に如く者あらむや、皆是れ多聞の力なり。

障礙無しとは、所謂三障にして業障と報障と煩惱障となり。若し人にして、此の三障無くむば、則ち難處に墮せず、若し諸難を離るれば、則ち道を受くるに堪ふ。又此の人を四輪を具足すと名づく。謂く好國土と善人に依止すると、自ら正願を發すと、先世の福德となり。又能く四の須陀洹分を成就す。謂く善人に親近すと、喜びて正法を聽くと、自ら正憶念すと、能く法に隨ひて行ずとなり。又能く貪等の三法を棄捨す、經の中にて說くが如し、三法を斷ぜずむば、則ち老病死を度ること能はずと。

不著なりとは、此岸に著せず、彼岸に著せず、中流に沒せず、陸地に出でず、取と非人取とを爲さず、洄澓に入らず、自ら腐爛[三三]せざるなり。此岸とは謂く內の六入、彼岸とは謂く外の六入、中流とは謂く貪喜、陸地とは謂く我慢、人取とは謂く在家出家との和合、非人の取とは謂く戒を持して天上に生ぜんが爲にすること、洄澓とは謂く戒に返ること、腐爛とは謂く重禁を破ることとなり。若し人にして內入に於て我を計せば、即ち外入に於て我所の心を生じ、內外入より貪喜を生ずるが故に即ち中に於て沒し、此れより則ち我慢を生ず、所以は何、若し人にして身に著せば、受は樂あるが故に、人の來りて輕毀するときは、則ち憍慢を生ずればなり。是くの如く、我我所貪喜我慢を以て其の心を亂るが故に能く餘事を成ずるなり。

問曰　此の喩の中にては何れを以て水と爲すや。若し八直聖道を以て水と爲さば、則ち應に內外六入を以て、岸と爲し、貪喜等を中流と爲すべからず、亦應に洄澓腐爛もあるべからず。若し貪愛を以て水と爲さば、云何ぞ此れに隨ひて泥洹に至ることを得んや。

【三二】パーリ律藏の第一結集の記事中に此事を記す。

【三三】分別賢聖品第十の八因緣とはこれを指す。

乃至、心を攝して如實智を生ずれば、是れを修慧と名づく。此の三慧に三種の果あり、謂く厭と離と解脫となり。又法を聞いて讀誦し、人の爲に法を說くは是れ多聞慧にして、諸法を思量するは思惟慧と名づけ、能く定相を取るを是れを修慧と名づく。

問曰 心解脫と漏盡と是の二に何の差別ありや。

答曰 定を以て煩惱を遮するが故に心解脫と說き、永に煩惱を斷ずるが故に漏盡と說く。

問曰 若し持戒等の法も亦是れ解脫處ならば、――說くが如し、戒を持せば則ち心は悔ひず、心悔ひざれば則ち歡喜す等と、或は施等に因るも亦解脫を得と、――何が故に但此の五法のみを說くや。

答曰 勝るを以ての故に獨說くなり。

問曰 此の法に何れの勝ることありや。

答曰 是れ解脫の近因なり、戒等は遠きを以ての故に說かざるなり。

又問 云何が是れ近因なりと知るや。

答曰 行者は法を聞いて陰界入等は但衆法の和合せるのみにして、中には我無しと知るが故に則ち假名を破す、假名を破すれば、卽ち是れ解脫なり、故に近因と名づけ、又經の中にて說く、多聞の功德とは謂く他の敎に隨はずして、心攝し易き等なりと、亦此れを以ての故にも是れ近因なりと知り、又佛法には大功德あり、能く煩惱を滅して泥洹に至る等なり。此寂滅の法の中に於て若しくは聽き若しくは誦し、若しくは自ら思量するときは、則ち速に解脫す、故に近因と名づけ、又施は大富を得、持戒は尊貴にして、多聞は智を得、智慧を以ての故に、諸漏を盡すことを得、富貴を以てするにはあらず、故に近因なるを知る。又舍利弗等を大智者と稱するは皆多聞に由ればなり。

問曰 若し多聞を以て心を攝し易しとせば、阿難は何が故に初中後夜に解脫を得ざりしや。

諂曲ならずとは質實の心を以て隱藏する所無くむば是れ則ち度し易ければなり、人の醫に向ひて具に病狀を說かば、則ち救療し易きが如し。少病とは能く初夜にも後夜にも精進して息まざるに、若し多疾病ならば、則ち行道を妨ぐればなり。精進とは道を求むが爲の故に常に勤めて精進すること、攢燧して息まずむば、則ち疾に火を得るが如くなればなり。智慧とは、智あるを以ての故に四事[三一]は果を得、所謂聖道なり。

問曰　念處等の法は亦行者の分とも名づくるに、何が故に但此の五法のみを說くや。

答曰　俱に是れ分なりと雖も、此の法が最勝にして是れ行者の所須なり、是れ以て獨說くなり。亦一切の惡を離れ、一切の善を集むれば行者の分と名づく、瞿尼沙經の中にて說くが如し。

解脫處を具すとは、謂く五解脫處なり、一には若し佛及び尊勝の比丘にして之が爲に法を說かば、其の聞く所に隨ひて則ち能く語言の義趣に通達し、通達するを以ての故に心は歡喜を生じ、歡喜すれば則ち身は猗なり、身が猗ならば則ち樂を受け、樂を受くれば則ち心は攝す、是れ初解脫處なり。行者は此の解脫處に住するが故に憶念堅强にして心は則ち定を攝し、諸漏は盡く皆滅して、必ず泥洹を得。二には能く經を諷誦す、三には他の爲に法を說く、四には獨處して諸法を思量す、五には善く定相を取る、謂く九相等なり、皆上に說きたるが如し。

問曰　佛及び尊勝の比丘は何が故に此の行者の爲に法を說くや。

答曰　法を受けて能く大利を獲るに堪ふるを以て、是の故に爲に說き、又此の比丘は佛に因りて出家して諸根が純熟せるが故に爲に法を說き、尊勝比丘は所業を同じうするを以ての故に爲に法を說き、又此の行者は必ず須らく法を聞くべし、是の故に爲に說き、又此の人は淨戒等の功德ありて成就すること、猶完器の盛を受くるに堪任するが如くなるが故に爲に法を說く。此れを三慧と名づく。語言に通達するは是れ多聞慧、義趣に通達するは、是れ思惟慧、此の二慧より能く心の喜を生じ、

[三一]　以上の五種中の初四なり。

論なり。故に無戯論者は佛の法の利を得と説く。是れを善覺を具足すと名づく。[二八]

[二九]後五定具品　第一百八十四

善信解を具すとは、行者にして若し能く泥洹を好樂し、生死を憎惡すれば、善信解と名づく。是くの如き信解は速に解脱を得。又泥洹を樂ふ者は心に所著なく、又[三〇]泥洹を樂ふときは則ち怖畏なし。所以は何、若し凡夫にして心に泥洹を念ずるときは、則ち驚怖を生じて、我は當に永に失すべしとせん。

問曰　何の因緣の故に泥洹を信解するや。

答曰　行者が世間の無常苦空無我なるを見るときは、則ち泥洹に於て寂滅想を生ずればなり。又此の人の本性は煩惱が輕微なれば、泥洹を説くを聞いて則ち心に信樂す。又若しくは善師に從ひ若しくは經書を讀みて生死の過患を聞くこと、無始經及び五天使等の諸經の中にて説くが如くなるときは、則ち生死を厭離して泥洹を信樂す。

行者の分を具すとは、經の中にて五の行者の分を説くが如し、一には謂く信有り、二には謂く心は諂曲ならず、三には謂く少病、四には曰く精進、五には智慧と名づく。信有りとは三寶四諦に於て心に疑悔なきに名づく。疑悔なきが故に能く速に定を成ず。又有信の者の心は多喜なり、故に能く速に定を成ず。又信者は心が調して攝し易し、故に疾に定を得るなり。

問曰　若し定に由りて慧を生ぜば、後に能く疑を斷ぜむに、今云何ぞ定に先んじて已に疑無しと説くや。

答曰　多聞を以ての故に能く所疑を斷ずるなり、定を得るが故なるには非ず。又深信の家に生れ信者と事を同じうして常に信心を修せば、未だ定を得ずと雖も而も能く疑はず、是くの如き等なり。

【二八】此最後句が前の惡覺品第一百八十二の最初の句に應ず。故に惡覺品と善覺品との二品にて定具の十一法の中の第六具足善覺を述べたるなり。
【二九】本品は定具の十一法中の後五なる具善信解と具行者分と具解脱處と無障礙と不著とを説く。
【三〇】麗本は有に作る。泥洹を樂ふこと有るときはと讀み得。今は三本宮本に從ひて又とす。

づく。眞智慧は能く諸行を盡す、諸行盡くが故に諸の苦惱は滅す。又行者は一切の世間出世間の事に於て、應に念ずべきは卽ち辨じ勞しく功を加へず。餘人すら尙心を發して其所得を量ること能はず、故に定心は能く利益を獲と說く。

智慧とは、智者の心の中にては煩惱を生ぜず、若し生ずるも卽ち滅すること、一滴の水を熱鐵の上に墮すが如く、又智者の心は諸想を起さず、若し起るも卽ち滅すること、條上の露の日を見れば則ち晞くが如くなるなり。若し智眼ありて能く佛の法を觀ば、目有る者には日が能く用を爲すが如し。又智者を佛の法の分を得と名づく、所生の子が父の財の分を得るが如し。又智慧者を名づけて有命と曰ひ、餘は則ち死と名づく。又智慧者を眞道人と名づく、能く道を知るが故なり。又智者は佛の法の味を知る、舌根にして壞せずむば能く五味を別つが如し。又智慧者は佛の法の中に於て心は定まつて動ぜざること、猶石山を風が動かすこと能はざるが若し。又智慧者を信と名づく、四信を得て、他に隨はざるを以ての故なり、又聖慧根を得れば佛弟子と名づけ、餘人を外凡夫と名づく、故に智者は能く利益を得と說くなり。

無戲論とは、若し一[二七]異の論ならば名づけて戲論と爲す。阿難の舍利弗に問へるが如し、若し六觸にして離欲に入りて滅盡せば更に餘ありや。舍利弗は言く、六觸にして離欲に入りて盡く滅し已らば、若し餘有るも是れは論ずべからず、而も汝は論ずるやと、若しくは無についても亦有亦無についても非有非無についても問答は亦爾り。

問曰　是の事は何が故に論ずべからざるや。

答曰　此れは實我の法の若しくは一若しくは異を問ふなり、是の故に答へざるなり。我は決定無く、但五陰の中にて名字を假りて說くのみ、若し有無等を以て答ふれば、卽ち斷常に墮せばなり。若し因緣を以て我を說かば、卽ち戲論には非ず。又若し人にして衆生空法空を見るときは、則ち無戲

【二七】假名相品第一百四十二の最後部及び其次下の品を見よ。

問曰　此の四法を念ぜば、何等の利を得るや。

答曰　惡不善の法が來つて心に入らざること、善く備を守るときは、則ち惡人の入らざるが如くなるなり。又瓶にして滿つれば更に水を受けざるが如く、此の人も是くの如く、善法が充滿すれば諸惡を容れざるなり。又若し此の正憶を修するときは、則ち解脫分の一切の善法を攝すること、海水を飲めば、則ち衆流を飲むなるが如し、一切の水は大海に在るを以ての故なり。又此の正憶を修するを、自在行處に住すと名づく。煩惱の魔民の壞する能はざる所なること、鷹鷂の喩の如し。又此の人の心は安住して動じ難きこと、圓瓶か制に入るが如し。又此の人は久しからずして當に利益を得べし、比丘尼經[二六]の中にて說くが如し、諸の比丘尼が阿難に問うて曰く、大德よ、我等が善く念處を修せば、覺は本に異るや。阿難は言く、此の法を善くせば應に爾るべしと。

定心とは若し定心を習せば、微妙の利を得、經の中にて說くが如し、定心を修せば、能く實の如くに知ると。又此の人の身を以て、人に過ぎたる法を得、謂く身が水火を出し、飛行自在なる等なり。又此の人は樂を得ること、乃至、諸天及び梵王等の及ぶ能はざる所なり。又此の人は應に爲すべき所を爲し、應に爲すべからずむば、則ち爲さずと名づく。又善く定を修習せば、則ち善法が常に增し、又定を修習せば、後に心は悔ひず、是の人を名づけて出家の果を得ると爲し、亦佛の敎に順ずる者とも名づく。餘人が空しく供養を受くるが如くならざれば、是の人は能く施福に報ふも、餘人は能はず。又此の定心の法は諸佛賢聖の皆親近する所なり、又能く一切の善法を受くるに堪ふ。又若し定にして能く成ぜば、則ち聖道を得、若し成ずること能はざるも、則ち淨天に生ず、謂く色無色界なり。所以は何、布施等を以てしては是くの如きの事を得ること能はざればなり。謂く能く究竟して諸惡を造らざるなり、經の中にて說くが如し、若し小兒にして生れてより慈を習せば、能く惡心を起し惡事を思せむや不や、不なり世尊と。此れは皆是れ定力なり。又定心は眞智慧の因と名

【二六】修定品第一百八十八にも引用せらる。

や。佛は比丘が聚落に近づいて宴坐するを見れば心は則ち悅びたまはざるに、又比丘が空處に睡臥するを見るも佛は則ち心に喜びたまふ。所以は何、聚に近く宴坐すれば、諸の因緣多くして定心を散亂して應に得べきを得ず應に證すべきを證せざらしむるに、空處の睡臥は小なる懈怠なりと雖も若し起ちて定を求むるときは、則ち散心は能く攝し、心を攝すれば能く解脫を得ればなり。又相を取るに因るが故に貪等の煩惱を起すも、空處にては色等の相無ければ、煩惱は斷じ易きこと、火の薪無きときは、則ち自然に滅するが如し。又經の中にて說く、若し比丘にして衆住を樂しみ雜言說を樂しまば、衆を離れざるが故に、尙ほ愛緣の解脫をすら得ること能はず、何に況んや能く不壞の解脫を得んをや、遠離行ならば必ず能く倶に證すと。又燈にして風を離るるときは、則ち能く明に照すが如く、行者も是くの如し、遠離行の故に能く眞智に逮す。

精進とは行者にして若し正勤を行じ不善法を斷じて善法を修集せば、是の中にては勤行するが故に精進と名づく。是くの如くならば則ち能く佛の法の利を得。所以は何、善法を集むるを以て日日に增長すること、憂鉢羅・鉢頭摩等の水に隨つて增長するが如くなればなり。懈怠の行者は猶木杵の初め成じてより來（このかた）日日に滅盡するが如し。又精進の者は、利を得るを以ての故に心は常に歡喜し、懈怠の行者は惡法が心を覆ひて恒に苦惱を懷く。又精進の者は念念の中に於て善法が常に增長して減損有ること無く、又深く精進を行じて最勝處を得謂く諸佛の道なり、經の中にて、佛が阿難に語りたまふが如し、深く精進を修すれば能く佛道に至ると。又精進の者には定心が得易し。又鈍根なるすら精進せば尙生死に於て速に解脫を得るに、利根なるも懈怠ならば則ち得ること能はず。又所有の今世後世の世間出世間の利は皆精進に因り、一切の世間の所有の衰惱は皆懈怠に因る。是くの如く懈怠の過と精進の利益とを見るが故に精進を念ず。

正憶とは常に身受心法に於て正安[二五]慧を修するなり。

[二五] 三本宮本は慧を念に作る。身受心法の正憶は四念處をいふに外ならざれば、念の方適切なるべし。

利を貪樂するが爲に終に安隱無し、深著するを以ての故なり。又此の人の出家するは遠離の樂の爲めなるに、利を貪るを以ての故に其爲す所を忘れ、又亦諸の煩惱を捨つること能はず。所以は何、外物すら尙捨つること能はず、況んや內法をや。又利養は是れ衰惱の因なること、雹の禾を害するが如くなるを見る、是の故に常に少欲知足を習す。又施物の償ひ難きこと、債を負うて償はずむば、後に苦惱を受くるが如くなるを見る。又利養は、是れ諸佛等の善人の棄つる所なるを見る、佛の說くが如し、我は利養に近づかず、利養は我に近づくこと勿れと。又此の行者は善法が充足するが故に利養を捨つ、佛の說くが如し、諸天すら尙出樂・離樂・寂滅樂・眞智樂の我所得の如くなるを得ること能はずと。故に利養を捨つ。又舍利弗の說くが如し、我は能く無相を修し空三昧を持して一切の外の萬物を觀じ、之を視ること涕唾の如しと。又行者は欲を受けて厭足することある者を見ざること、鹹水を飮みては渴を除くこと能はざるが如し、と。是の故に勤めて智慧を求めて足ると爲す。又多欲の者を見るに常に願を發して多くを求むるに得ること少し、故に常に苦有り。又乞ひ求むる者を見るに人に輕賤せられ、敬仰を加へらるること、少欲者の如くならず。又出家が多く求むるは其所應に非ずして、人の與ふるを取らざるは則ち是れ宜しき所なり。此の故に應に少欲知足を行ずべし。

遠離とは、若し在家出家の人の中に於て身遠離を行じ、諸の煩惱に於て、心遠離を行ぜば、是れを遠離と名づく。

問曰 行者は何が故に遠離するや。

答曰 諸の出家人は未だ道を得ずと雖も遠離を以て樂と爲すも、諸の白衣等は女色憒閙の中に處在して終に安樂無し。又若し遠離すれば、則ち心は寂滅し易きこと、水の擾せざれば自然に澄淸なるが如し。故に遠離を行ず。又此の遠離の法は恒沙等の諸佛の爲に讚せらる。何を以て之を知る

三覺を念ずるときは、則ち福は增長し、亦能く心の定を成じ、又心は淸淨を得。又此の三覺を念ずるときは、能く諸纒を障へ、諸纒が斷ずるが故に、速に能く證斷す。又行者は遠離を樂しむを以て、多く善法を集む。故に能く速に解脫を得。

八大人覺とは、佛の法の中にては若し少欲者ならば能く利益を得、多欲の者には非ず。知足者と遠離者と精進者と正憶者と定心者と智慧者と無戲論者とは、能く利益を得、戲論者には非ず、是れを名づけて八と爲す。

少欲とは行者は道を修せむが爲の故に必ず所須を欲するも、但多く餘の無用物を求めざるを、是れを少欲と名づく。

知足とは、有る人は若しくは因緣を以てし若しくは持戒の爲に若しくは他人をして心に淸淨を得しめむとして、是の故に少しく取りて而も心に以て足ると爲さざるも、若し人にして少しく取りて心に以て足ると爲さば、是れを知足と名づく。有る人にして少しの物を取ると雖も而も好き者を求むれば、是れを少欲と名づくるも、知足には非ず。若し趣みて少物を得れば是れを知足と名づく。

問曰　若し所須を取るを少欲と名づけば、一切衆生は皆少欲と名づく、其は各所須有るを以ての故なり。

答曰　行者は著せざる心を以て取る、但用ふることを爲すのみなるが故なり、故に多くは取らず。世人が嚴飾名聞の爲に長く多物を取るが如くにはあらず。

問曰　行者は何が故に少欲知足なりや。

答曰　守護等の中に於て過患有るを見、又無用の物を畜ふるは是れ愚癡の相なれば、又出家人は、應に積聚すること白衣と同じかるべからざればなり。此の過を以ての故に少欲知足なり。又行者にして若し少欲知足ならずむば、則ち貪心は漸く增し、賤利の爲の故に應に求むべからざるを求め、財

を起すべからず。所以は何、念を以ての故に、便ち能く他をして苦樂を得しめずして、但自ら此れを以て定心を壞亂するのみなればなり。

問曰　他をして利せしめんと欲するは慈心にあらずや。

答曰　行者は道を求むるものなれば、應に第一義の利、謂く無常等を念ずべし。是の[二二]中にては少しは福ありと雖も、能く道を妨ぐるを以て、利は少くして過が多し、定心を亂すが故なり。若し散心を以て他人を利せんと念ぜば、則ち貪著の過患を見ること能はず、故に應に念ずべからず。

輕他覺とは、行者が若しくは此の人の種姓・形色・富貴・伎能・及び持戒・利根・禪定・智慧等が皆我に如かずと念ずることなり。行者は應に是くの如き覺を起すべからず。所以は何、一切の萬物は皆無常なるが故なり。若し上中下なるも何の差別あらんや、又此の人の身髮毛爪齒も皆不淨と名づけ、等しうして異あること無く、又老病死等の衰惱も亦同じく、又一切衆生の內外の苦惱も皆等しうして異無ければなり。又凡夫の富貴は、是れ罪の因緣なり、又富貴は久しからずして還貧賤となる。是の故に應に輕他覺を起すべからず。又此の憍慢は是れ無明の分なれば、智者にして云何ぞ當に此の覺を起すべき。

[二三]善覺品　第一百八十三

出覺とは、心に遠離を樂しむなり。若しくは五欲及び色無色界を離れて此遠離を樂しむが故に出覺と名づく。此遠離は樂なり、諸苦無きが故なり。貪著に隨へば苦あるも、貪著無ければ則ち樂なり。諸覺の中に於ては二覺を樂と名づく、謂く無瞋覺と無惱覺となり。所以は何、此の二覺を安隱覺と名づくればなり。[二四]如來品の中にて說くが如く、如來には常に二覺の現前するあり、謂く安隱覺と及び遠離覺となり。安隱覺とは、卽ち是れ不瞋惱覺にして遠離覺とは、卽ち是れ出覺なり。又此の

【二二】問の中にいふ他を利せしめむとすることを指す。

【二三】三本宮本はここより第十八卷とす。此品は前品と別にする要なきものなること前にいへり。唯前品と異りて出覺不瞋惱覺八大人覺の如き善のものを說くのみにて別品とせるなり。

【二四】增一阿含如來品ならむ。三不護品第五、故不故品第九十七、行苦品第七十九一切緣品第一百九十一參照。

毘曇と雜藏と菩薩藏とを讀誦すべし、廣く外典を綜し、多く弟子を畜へ、會人を牽引して四塔を供養し、衆生を勸化して大に布施せしめて、後に當に道を修すべし――を作さば、不死覺と名づく。行者は應に是くの如き念を起すべからず。所以は何、死時は不定にして豫知すべからざればなり。若し餘事を營む中にて則ち命盡くるときは道を修することを得ず、後に將に死せんとする時に心は悔いて憂惱す、我は唐しく此の身を養ひ空しくして所得無く、畜生と死を同じうすと。經の中にて說くが如し、凡夫は應に[二]二十種に自ら心を折伏すべし、謂く是くの如く念ぜよ、我は但形服のみ俗に異り、空しくして所得無し、乃至、當に不調を以て死に至らんと。智者は應に作すべからざる所を作さず、法句の中にて說くが如し、

應に作すべからざるを作さず　應に作すべきならば則ち常に作し
憶念して慧を安むぜる心には　諸の漏は則ち盡くを得、と。

又經の中にて說く、未だ四諦を得ざる者は、方便して得んと欲するが爲に當に勤めて精進を加ふること、頭燃を救ふより甚しくすべし、と。是の故に應に不死覺を起すべからず。又不死覺は是れ愚癡の氣なり。何れの有智者か命の無常なることは條上の露の如く、而も能く一念をも保つを知らむや。又經の中にて說く、佛は諸の比丘に問ひたまはく、汝等は云何が死想を修習するやと。有るが佛に答へて言く、我は七歲を保たずと、或は言く、六歲なりと、是くの如く轉た減じて、乃至、須臾なりと、佛は言く、汝等は皆是れ放逸にして死想を修するなりと、有る一比丘が偏袒して佛に白して言く、我は出息に於ては還入を保たず、入息は還出を保たずと、佛は言く、善い哉善い哉、汝は眞に死想を修すと。是の故に應に不死覺を起すべからず。

利他覺とは、親里に非ざる中に於て、利を得しめんと欲し、若しくは是の念――某をして富貴安樂にして能く布施を行ぜしめ、某は則ち及ばざらしめん――を作すなり、と。行者は應に是くの如き覺

【二】雜煩惱第一百三十六參照。

覺と名づく。行者は應に此の覺を憶念すべからず、所以は何、本出家せし時に已に親里を捨てたるに、今此の覺に依らば、則ち宜しき所に非ざればなり。又若し出家一人にして還親里を念ぜば、則ち唐しく家屬を捨て、空しく成ずる所無けん。親里を愛するを以ての故に貪著を生じ、貪著の故に守護し、守護の因緣にて鞭杖等の業が次第して而も起る。是の故に應に親里覺を生ずべからず。又親里と和合するときは、則ち善法を增長すること能はず。又行者は當に、一切衆生は生死流轉すれば、親里に非ざるは無し、何が故に偏に著せんやと念ずべし。又生死の中を親里と爲すが故に憂悲啼哭して涙は大海を成すに、今にして復貪著せば則ち苦は窮まり已むこと無く、又衆生は利益の因緣を以て則ち相親愛して決定あることなし。又親里を念ずるは是れ愚癡の相なれば、世間の愚人は未だ自利あらざるに、而も他を利せんと欲するもの、若し親里を念ぜば、則ち自利を少くす。此等を以ての故に、行者は應に親里覺を起すべからず。

國土覺とは、行者は念を生ずらく、某處の國土は豐樂にして安隱なれば、當に彼に往到して安樂を得べしと、又心輕躁なれば、遍く遊觀せんと欲す。行者は應に是くの如き覺を起すべからず。所以は何、一切の國土には皆過惡あればなり。有る國は大に寒く、有る國は大に熱く、有る國は險多く、有る國は病多く、有る國は盜賊多し、是くの如き等の種種なる諸過あり、故に應に念ずべからず。又輕躁ならば則ち禪定を失す。所樂の處に隨ひて能く善法を增さば、則ち名づけて好と爲す、何ぞ諸の國土を遍觀することを用ひんや。一切の國土は但遠聞すべきのみ、致らば必ず稱はず、世間人は多く過言するを以ての故なり。[19]又諸國に遊ぶ者は種種の苦を受く、又身は是れ苦の因なれば此の苦の因を持せば、所至の所に隨つて、則ち諸苦を受くるなり。又苦樂を受くるは皆業因に因る、復遠く去ると雖も亦益する所無けん。是の故に應に國土覺を起すべからず。

不死覺とは、行者は是くの如き念——我は徐ろに當に道を修すべし、先に當に[20]修多羅と比尼と阿

【一九】麗本は又を有に作る。今は三本宮本に從ふ。

【二〇】此五藏は分別功德論の說く所なり。異部宗輪論は法藏部五藏說をいふが、それにては第四を明呪藏とす。一心品第六十九、大小利業品第九十九に雜藏の引用、六三昧品第一百六十一に菩薩藏の引用あり。

得、能く好醜を別つを是れを甚だ難しと爲し、今にして度を求めずんば、何れの時にか當に解脱を得べきと見るが故に勤めて精進し、以て睡眠を除く。

善覺を具足すとは、若し人にして睡眠せずと雖も而も不善覺を起す、所謂、欲覺と瞋覺と惱覺と若しくは親里覺と國土覺と不死覺と利他覺と輕他覺と等なれば、寧ろ當に睡眠すべくとも、此等の諸の不善覺を起すこと勿れ、應當に出等の善覺を正念すべし。所謂、出覺と不瞋惱覺と八大人覺となり。

[一八]惡覺品　第一百八十二

欲覺とは謂く欲に依りて覺を生じ、五欲の中に於て利樂ありと見るを是れを欲覺と名づけ、衆生を衰惱することを爲すを是れを瞋覺惱覺と名づく、行者は應に此の三覺を念ずべからず。所以は何、此の三覺を念ずるときは、則ち重罪を得ればなり。又先に已に貪等の過患を說きたり、此の過患を以ての故に應に念ずべからず。

問曰　何が故に癡等の覺を說かざるや。

答曰　此の三惡覺は次第して而して生ずるに、餘の煩惱は是くの如くならず、行者は或は五欲を念ずるが故に貪覺を生じ、所貪を得ざるが故に瞋恚を生じ、瞋の成ずるを惱と名づくれば、是の故に癡等を說かざるなり。又癡の成ずる所の果は謂く貪と恚とにして、若し貪と恚とより生ずるは不善業なり、此の三覺を不善業の因と名づく。經の中にて說くが如し、土封有り、夜には則ち煙が出て晝には則ち火が然ゆるが如しと。煙は則ち是れ覺にして、火を名づけて業と爲すなり。

親里覺とは、親里に因るが故に諸の憶念を起すなり。親里をして安隱の樂を得しめんと欲すれば、若し衰惱を念ずるときは則ち愁憂を生ずるも、若し親里と種種に事を同じうすることを念ぜば親里

【一八】　三本宮本は惡を不善に作る。
此品は、善覺を具足すの說明中特に欲瞋惱の三惡覺を五不善覺とを述べ、次品にて善覺を述ぶ。故に特に分品せずして次品と合して一品となすも可なるものなり。

答曰　若し食にして冷熱等の身病と貪恚等の心病とを增さずむば、是れ則ち應に食すべし。是の食すら亦應に時に隨ふべし。若し此の食は此の時に於ては能く冷熱貪恚等の病を增すと知らば、則ち應に食すべからず。

問曰　諸の外道は言く、若し淨食を食せば、則ち能く淨福を得、謂く意の嗜む所の色香味觸に隨ひて、水灑呪願し然る後に乃ち食せば是れを名づけて淨と爲すと。此の事は云何。

答曰　飮食には決定して淨なるものあること無し。所以は何、若し殘食を以て不淨と爲さば、一切の飮食には殘に非ざるもの無し。乳を犢の殘と爲し、蜜を蜂の殘と爲し、水を蟲の殘と爲し、華を蜂の殘と爲し、果を鳥の殘と爲す、是くの如き等の如くなればなり。又此の身は不淨より生じ體性は不淨にして、不淨にて充滿す、飮食は先に不淨にして後に身中に入る、一として淨なる者無し。但倒惑を以て妄に謂うて淨と爲すのみ。

問曰　若し都べて淨無くんば、則ち旃陀羅等と何の差別ありや。

答曰　又殺さず盜せず邪命せざる等を以て如法に食を得、以て食の過を觀じ、智慧の水にて灑し、然る後に乃ち食す。但水にて灑するのみを便ち名づけて淨と爲すには非ず。

初夜後夜に睡眠を損ずとは、行者は事の勤に由りて成ずることを知るが故に睡眠せず。又睡眠せば空しくして所得なきを見る。若し汝にして睡眠を以て樂と爲さば、此の樂は少くして、弊は言ふも足らざるなり。又行者は煩惱と同處を同じうすることを樂はざること、人の怨賊と與に世に住することを樂はざるが如し。豈人有りて賊の陣の中に於て而も當に睡寐すべけんや。故に睡眠せず。

問曰　睡眠にして強來せば、云何が除遣せんや。

答曰　是の人は佛の法の味を得て深心に歡喜するが故に能く除遣す。又生死の中の老病死の過を念ぜば心は則ち怖畏するが故に睡眠せず。又行者は人身を得て諸根は具足し佛の法に値ふことを

我所得の法は此れに因りて成佛せるものにして、還當に此の法に依るべしと。梵等の諸天も亦讃じて言く、爾り、佛に勝る者無し、一切の諸佛は皆法を以て師と爲したりと。又善知識は猶明燈の如し、目有るも燈無くむば、則ち見ること能はず、是くの如く行者は福徳利根の因緣ありと雖も、善知識無くむば、則ち益する所無し。

問曰　何れの者か是れ善知識なりや。

答曰　隨ひて能く人をして善法を增長せしむるを善知識と名づけ、又一切の善人にして正法に住せば皆是れ天人世間の善知識なり。

根門を守護すとは謂く正憶念なり。行者は目を閉ぢて視ざるべからず、但應に一心に正念をして現前せしむべし。又正慧と名づけ、此の正慧を以て能く前緣を壞す、前緣を破壞するが故に、能く相を取らず、相を受せざるが故に假名に隨はざるなり。若し諸根を守らずむば、相を取るを以ての故に、諸の煩惱は生じて五根に流れ、卽ち戒等の善法を破る。若し能く根門を守らば、則ち戒等は堅固なり。

飮食に量を知るは色力と婬欲と貪味との故に食せずして、身を濟せんが爲すが故なり。

問曰　行者は何が故に身を濟することを爲すや。

答曰　善法を修せんが爲の故なり。若し善法を離るれば、則ち道無く、道にして無くむば、則ち苦を離るゝこと無し。若し人にして修善の爲の故に食するにあらずむば、則ち唐しく怨賊を養ひ、亦施主の福をも壞し、人の供養を損ず。是くの如くんば、應に人の食を食すべからず。

問曰　飮食は何を以て量と爲すや。

答曰　能く身を濟するに隨ふを是れを名づけて量と爲す。

問曰　應に何れの食を食すべきや。

て橋梁と爲し、善人の衆に入るには戒を以て印と爲し、[一三]八直聖田は戒を塍畔と爲す、田に畔無くむば水は則ち住まらざるが如く、是くの如く若し淨戒無くむば、則ち定水は住まらず。

問曰 云何が淨なる持戒と名づくるや。

答曰 若し行者にして深心に惡を爲すことを樂はず、後世及び惡名等を畏るゝに非ずむば、淨持戒と名づく。又行者は心が淨なるを以ての故に持戒も清淨なりと[一四]七婬欲經の中にて說くが如し、身には犯さずと雖も心が不淨なるが故に戒も亦不淨なりと。又破戒の因緣は是れ諸の煩惱なれば、若し能く制伏すれば淨なる持戒と爲す。又聲聞の持戒は但泥洹の爲のみなるも、佛道を求むる者は大悲心を以て一切衆生の爲に戒相を取らずして、能く此の戒をして菩提性の如くならしむ。是くの如き持戒を名づけて清淨と曰ふ。

善知識とは、經の中にて說く、二の因緣を以て能く正見を生ず、一には他に從つて法を聞くと二には自ら正憶念すとなりと、從つて法を聞く所を善知識と名づく。

問曰 若し爾らば、何が故に但善知識とのみ說くや。

答曰 經の中にて說く、[一五]阿難が佛に問ふ、我は一處に宴坐して是くの如くの念を作す、善知識に遇はゞ、則ち道を得るの半因緣と爲すと、佛は言く、是の語を作すこと莫れ、善知識とは則ち道を得る具足の因緣と爲す、所以は何、生老病死の衆生にして我を得て善知識と爲さば、則ち生老病死に於て皆解脫を得ればなりと。又衆生は善知識に因るときは則ち能く戒等の[一六]五法を増長すること、[一七]婆羅樹が雪山に因るが故に五事が増長するが如し。又佛すら尚自ら善知識を樂しむ、初めて道を得たる時の如き、是くの如きの念を作す、若し人にして師無くむば、則ち怖畏する所無く恭敬心無くして、常に惡法の爲に覆はれ安隱の行も無し、我は當に誰を以てか師と爲し、誰に依りてか住せんと。是の念を作し已りて、遍く一切を觀ずるに己に勝る者無ければ、即ち念言を生ずらく、

【一三】八直聖田は八正道を田と見做したるなり。

【一四】三業輕重品第一百十九にては此經を七種婬經と呼びて同一文を引用す。

【一五】立論品第十三に同一文の引用あり。

【一六】五分法身をいふならむ。

【一七】娑羅は sāla の音譯なり。

淨なる持戒とは、不善業を離るゝを名づけて持戒と爲す。不善業とは所謂殺盜邪婬の是れ身の三業と、妄語兩舌惡口綺語の是れ口の四業となり。此の罪を遠離するを是れを持戒と名づく。又禮敬迎送及び供養等にて善法を修行するをも亦名づけて戒と爲す。戒は能く定の因と爲るを以て是の故に受持す。所以は何、猶金を治するに先に麁垢を除くが如く、是くの如く先に持戒を以て破戒の麁過を除き、後に定等を以て餘の細過を除くなり。所以は何、若し持戒にして無くむば則ち禪定無く、持戒の因緣を以て禪定は得易ければなり。經の中にて說くが如し、戒を道根と爲し亦妙梯とも爲すと。又說く、戒を初車と爲すと。若し初車に上らずんば、云何ぞ第二車等に上ることを得ん。又說く、戒を平地と爲すと。此の平地に立てば、能く四諦を觀ず。又二力を說く、思力と修力となり。思力は卽ち是れ持戒にして、修力は是れ道なり。先に破戒の罪過と持戒の利益とを思惟し籌量するが故に能く戒を持し、後に道を得已りて自然に惡を離るゝなり。又說く戒を菩提の樹根と爲すと。根にして無くむば則ち樹無し、故に須らく戒を淨むべし。又法として應に爾るべし、若し持戒にして無くむば則ち禪定無し。猶病を治するには藥法が所須なるが如く、是くの如く、煩惱の病を治せむに、若し持戒にして無くむば、則ち法の藥は具せず。又說く、淨く戒を持するときは、則ち心悔ひず、乃至、欲心を離れて解脫を得と。是の諸の功德は皆持戒に由る。故に定具と名づくるなり。又業障と煩惱障とあり、是の二障の果を名づけて報障と爲す。若し淨く戒を持するときは、則ち此の三障無く、若し心にして障無くむば、則ち能く定を成ず。又淨く戒を持てば、敗壞せざるが故に、必ず泥洹に至る、[一]恒水の中の材の如し。又淨く戒を持つが故に能く安立す、持戒は能く不善の身口業を遮し、禪定は能く不善の意業を遮せばなり。是くの如くに諸の煩惱を遮して眞實の智を得れば、則ち畢竟して斷ず。

又道品の樓觀は戒を以て柱と爲し、禪定の心城は戒を以て郭と爲し、生死の河を度るには戒を以

[一] 恒水は恒河、此中に流るる木の必ず海に至るをいふ。

若し無餘に入らば、是れを名づけて滅と爲す。又經の中にて說く、三性有り、斷性と離欲性と滅性となりと。若し斷性と離欲性とを說かば、即ち是れ阿羅漢なり、一切の煩惱を斷じ三界の欲を離れ、有餘泥洹に住すればなり。若し滅性を說かば、即ち是れ命終して壽を捨て、陰の相續を斷じて無餘泥洹に入れるなり。又二種の解脫あり、慧解脫と心解脫となり。若し斷を說かば、即ち是れ無明を離るゝが故に慧が解脫を得、若し離欲を說かば、即ち是れ愛を離れて心が解脫を得るなり。二解脫の果は是れを名づけて滅と爲す。又若し斷想を說かば、即ち無明漏を斷ずることを說くなり、若し離欲想を說かば、即ち欲漏有漏を斷ずるを說くなり、若し滅想を說かば、是れ此の二果なり。又經に、一切の諸行を斷ずるが故に斷と名づけ、一切の諸行を離るゝが故に離と名づけ、一切の諸行を滅するが故に滅と名づくと說くが如し。然らば則ち此の三は義は一にして而も名が異るのみなり。

若し無常想乃至滅想を修せば、則ち一切の事は訖る。諸の煩惱を滅し陰結の相續を斷じて無餘泥洹に入ればなり。

〔二〕定具の中の初の五定具品　第一百八十一

問曰　汝は先に道諦を說きたり、所謂定具と及び定となり。定を說きたるを以て、定具を今應に說くべし。所以は何、若し定具あらば、則ち定は成ずべく、無くんば則ち成ぜざればなり。

答曰　定具とは謂く十一法なり、一には淸淨なる持戒、二には善知識を得ること、三には根門を守護すること、四には飲食に量を知ること、五には初夜後夜に睡眠を損すること、六には善覺を具足すること、七には善信解を具すること、八には行者の分を具すること、九には解脫處を具すること、十には障礙無きこと、十一には不著なることとなり。

【二】以上にて道諦聚の中の第一部定と具とを說く中初めの定を說き終りたれば、今は、具を說くなり。此品以下修定品第一百八十八まで及ぶ。而して此品は定具の十一法の中淸淨持戒と得善知識と守護根門と飲食知量と初夜後夜損睡眠とを述ぶ。

未だ道を得ざる者は、此等の想を以ての故に能く心を制伏するなり。

後三想品[九]　第一百八十

斷想とは四正勤の中にて說きしが如く、已生の惡不善法は斷ぜんが爲の故に勤めて精進す、此の諸の惡不善法は是れ地獄等の苦惱の因緣にして、亦是れ諸の惡名聞及び心悔等の衆苦の本なり。是の故に應に斷ずべし。

問曰　當に云何が斷ずべきや。

答曰　不作の法を得れば、爾の時に則ち斷ず。又邪憶念は是れ貪欲等の諸の煩惱の因なれば、此の念を斷ずるが故に是の法は則ち斷ず。

問曰　此の斷想を修せば何等の利を得るや。

答曰　此の想を修する者は常に惡法に墮せずして、應に作すべき所を爲す。又此れは八難を離る。人身の利とは謂く煩惱を斷ず。又煩惱を斷ずることを樂ふは是れ、法服毀形の出家人の利なり。若し爾らずんば、唐しく自ら身を辱しむるのみ。又行者が樂うて斷想[一〇]を修するときは、則ち法を以て佛に供養し、欲想を離れて想を滅する者と爲る。

若し欲にして盡きて生ぜずむば、是れを離欲と名づく。此の離欲を念ずるが故に離想と名づく。

問曰　若し斷想は卽ち是れ離想なりと說かば何が故に更に說くや。

答曰　斷より離を得ればなり。斷は謂く貪欲を除滅するなり、經の中にて、貪欲を斷ずるが故に五陰は卽ち斷ずと說くが如し。又斷想は是れ離欲想なり。所以は何、若し此の法に於て貪無くむば、此の法を斷ずと名づく。是の故に、若し離欲を得れば、則ち苦惱は滅す、經の中にて欲を離るれば解脫を得、解脫を得れば、卽ち名づけて斷と爲すと說くが如し。

【九】十想中の最後の斷想と離想と滅想とをここに後三想と呼べるなり。

【一〇】麗本は相に作る。今三本宮本に從ふ。

死も亦不定なりと見る。故に應に死を念ずべし。又無始の生死の中にて無量の業あり、業の能く餘業を妨ぐるあり、我にも亦應に非時死の業あるべし、云何ぞ當に此の命を信ずべけむや。又行者は死には大力勢ありて軟言を以て誘誑し、財物にて追逐し、闘訟するも脱することを得べからざること、大石山の四方より來りて逃避する處無きが如しと見る。

問曰 若し人にして能く閻王をして歡喜せしむるときは、則ち死を脱することを得るや。

答曰 是れ愚癡の語なり。閻王には自在力の能く生の殺を爲すこと無く、但能く善惡を行ずることと考檢するのみ。若し能く報を受け盡せば、反つて身を害する因緣を得るが故に死す。是の故に行者は身は依無く救無くして死道の中に住すと見る。故に死想を念ず。又行者は常に此の身は老病の爲に惱まされて牢固なる性無く、念念に生滅するを以て、相續識が繫ぐと見る。故に死想を修す。又此の行者は死は此れ定、命は則ち不定にして、定は不定に勝ると見る。故に死想を修す。

問曰 何が故に老病等の想を說かずして但死想のみを說くや。

答曰 老病の人を奪ふは盡さしむること能はず、病は强健を奪ひ、老は少壯を奪ふも、親里財物は餘り身は猶在り、死は則ち奪ひ盡す。又老病等は是れ死の因緣なり。故に別に說かざるなり。又經の中にて說く、死を大黑闇と名づく、光明有ること無く、救護者無く、亦伴黨無く、恃怙する所も無く、是れ最も怖ろしき處なりと。故に應に死を念ずべし。又衆生は死の因緣を以て後世を怖畏す。又三界の中の一切には死有るも、老病は爾らず。

問曰 若し衆生を離れて死相有るにあらずむば、衆生は即ち是れ假名なれば、行者は何が故に此の想を修習するや。

答曰 衆生相を壞せずむば、死を怖畏す。若し死想を修すれば、則ち怖畏を生ぜず。故に應に修習すべし。又無常想等を名づけて近道と爲し、不淨と食厭と及び死との想等は是れを遠道と名づけ、

獲るなり。

死想品　第一百七十九

行者は死想を以て、壽命の中に於て心は決定せざるが故に、應に修習すべし。又此の人は常に深く善法を樂ひて不善を除斷す。所以は何、衆生は多く死を忘るゝを以ての故に不善業を起せばなり。若し死を憶念せば則ち能く除斷す。又常に死を念ずるが故に、父母兄弟姉妹親里知識等の中に於ても、貪愛は則ち薄し。又死想を修習するときは則ち自利と爲る、謂く能く一心に諸の善法を集むればなり。世間の衆生は多く他利を樂へば自ら己利を捨つ。又此の人は能く速に解脫を得。所以は何、隨つて世間に往來すれば常に此の死あるも、是の人は死を厭ふが故に解脫を求むればなり。

問曰　應に云何が死想を修すべきや。

答曰　先に總じて一切の無常なるを說きたるも、今は但身の無常なるをのみ觀ず。陰の相續の斷ずるを名けて死と曰ひ、此の身の無常なることは外物よりも甚しくして、猶坏瓶に堅牢の相無きが如しと想するなり。行者は身を觀ずること又此れに過ぐ。所以は何、此の坏瓶は、若し防護を加ふれば、或は久しく住すべきも、此の身は極めて久しくとも百歲を過ぎざればなり。牢きこと無きを以ての故に當に死想を念ずべし。又此の身には多くの違害法あり、謂く刀杖鋒刃怨賊坑岸と飮食の消せざると冷熱の風病となり。要を取りて之を觀れば、一切の衆生と非衆生物とは皆是れ身を違害するの法なり。是の故に應に死想を修すべし。又行者は身は念念の中に於て常に是れ壞相にして一念として保つべきなしと見る。故に死想を修す。又行者は現に少壯にても老年にても有病無病にても能く死を却くる者有ること無く、自ら己身を念ずるに亦當に是くの如くなるべしと見る。故に死想を修す。又行者は不定業報有りて一切の業が盡く百歲を受くるには非ずして、業が不定なるが故に

るに任ふるあるも、人身の中に於ては一として取るべき無し、最も不淨なるを以ての故なり。又[七]優鉢羅・鉢頭摩の諸の蓮華等の如きは不淨の中より生ずるが故に不淨と名づくるも、是の身は爾らず、餘物を以ての故に不淨ならしむるにはあらずして、性是れ不淨なり。又此の身にして若し淨ならば、則ち應に衣裳を以て覆蔽すべからず。人が衣を以て屎尿の聚を覆うて他人を欺誑するが如く、女人は是くの如く、服を以て身を飾覆して男子を誑惑す、男子も亦爾り。當に知るべし不淨なり。又此の身に周遍して常に不淨を出す、謂く九孔の不淨門及び諸の毛孔は一として淨なる者無し。故に知る不淨なり。

問曰 不淨想を修せば、何れの利を得と爲すや。

答曰 男女の淨想を取るを以ての故に貪欲を起し、此の貪欲より諸の罪の門を開くものなれば、不淨想を修するときは、則ち能く貪欲を制伏す。所以は何、此の身は皆是れ臭穢不淨なるも、但薄皮が覆ふが故に知るべからざるのみ、衣を以て不淨聚を覆ふに似如たれば、淨潔を好む者は則ち應に遠離すべければなり。又此の行者は青瘀等の想を以て一切の身を壞し、身を壞すを以ての故に貪欲を生ぜず、又現に青瘀等の色を見ればなり。

問曰 若し實には未だ青ならざるに、何が故に青なりと見るや。

答曰 行者は信解力を以て此の青相を取り、一切の色を見て皆青瘀と爲すなり。

問曰 此の觀は云何ぞ是れ顚倒に非ざるや。

答曰 此の身には青瘀の分あればなり、經の中にて說くが如し、[八]木の中に淨性ありと。又常に青瘀の相を修習するが故に能く餘色に勝る、青珠の光の能く白色を映ずるが如し。是くの如く久しく青瘀等の相を習するときは、則ち不淨が具足す。不淨が具足するときは、則ち婬欲を起さず、婬欲を起さゞるときは、則ち諸の罪の門は閉ぢて泥洹に隨順す。不淨想を修すれば、是くの如きの利を

【七】優鉢羅(Utpala)は青蓮華、鉢頭摩(Padma)は紅蓮華なり。

【八】此經の同文が有相品第十九に引用せらる。三本宮本は木を水に作るも不可なり。

答曰　行者は身の種子の不淨なるを見る、謂く父母の不淨道より生ぜる赤白の和合なり。又此の身は不淨の爲に成ぜらる、謂く爛壞せる飲食の汁流が潤漬すればなり。又生處も不淨なり、謂く母胎の中には不淨が充滿すればなり。又糞穢等の諸の不淨の物が合して而して身を爲し、九孔の中に於ては常に不淨を流す。又身の所置處、是の處は卽ち不吉不淨と爲す。又飮食衣服來りて人身に著くも皆不淨と爲し、他の爲に惡まる。又此の身の爲の物も皆是れ不淨なり、澡浴の水若しくは澡槃等の如し。又身より出づる所の爪髮垢膩及び涕唾等は皆是れ不淨なり。又死屍を見るに以て不淨と爲す、此の身の死する時にも更に何の異かあらん。當に知るべし本より來(このかた)常に是れ不淨なり。生るゝ時には但我心を以て覆ふが故に之を謂うて淨と爲すも、又死人に觸るゝ者は、名づけて不淨と爲す、而も髮爪等は常に是れ死物なり。無量の死蟲も亦常に身に觸る。故に知る此の身は本より來(このかた)不淨なり。

又不淨の[六]蝨及び蠅蚋等の諸の不淨の蟲が常に來りて身に觸る。故に知る不淨なり。又此の身は、厠に不淨が常に滿ち、此の厠中に因りて千種の蟲を生ずるが如く、此の身も亦爾り。又此の身は塚の如し。所以は何、死屍の處なるを以ての故に名づけて塚と爲せばなり。此の身にも亦多くの死蟲が其の中に在りて住す。又此の身は能く不淨を造れば、若しくは淨處にても好華衣服纓珞等にても此の身に由るが故に皆不淨と爲る、又諸の婆羅門は死家産家に於ては從うて食を受けず、不淨なるを以ての故なり、而も此の身の中には千萬種の蟲が常に生じ常に死すれば、則ち從うて飲食を受くべき者無し。故に知る不淨なり。又世間の中にては獄を不淨と爲す、此の身は卽ち是れ千種の蟲の獄なり、故に不淨と名づく。又此の身は常に澡浴を須ふ、若し是れ淨ならば何ぞ澡浴を須ひんや。又妙好の華香纓珞を以て此の身を莊嚴す、當に知るべし、此の身の體性は不淨なれば、外の淨物を假りて以て莊嚴を爲すなり。又此の人身は最も不淨と爲す。餘の衆生の皮毛爪齒筋骨肌肉を以ては或は用ふ

【六】大正大藏經は虱に作り、縮刷藏經は蝨に作る。

惡道に墜つ、經の中にて説くが如し、少しく好處に生じ、多くは惡處に生ずと。此過を見已りて但泥洹のみを求む。又此の人は貪等の過を見る、煩惱は常に衆生に隨ふこと、怨の人を伺ひ、便を得れば便ち殺すが如くなるに、此怨賊の中にて云何ぞ樂しむべき。又煩惱より不善業を生じ、常に追うて隨逐する不善業の果は終に脱すべからざるを見る、經の中にて説くが如し、若し汝にして惡業を作さば、今作已作當作なるも、乃至、空中に飛ぶとも、終に解脱を得ること能はずと。是の故に樂まず。又生等の八苦は尙福人にすら隨ふ、況んや福無き者にをや。是くの如くなるに、云何が當に世間を樂しむべき。又毒蛇の篋、五の拔刀の賊、聚落を空にする賊の如くに、此岸の諸苦は常に衆生に隨ふに、[四]云何ぞ樂しむべき。又[五]鹹辛の愛河に漂はされ、五欲の毒刺、無明の黑闇、火坑の中の如き苦は常に衆生に隨ふに、云何ぞ當に樂しむべき。又行者は安隱の樂は少くして、衰惱の苦は多しと知る。所以は何、諸の世間を見るに、吉日の嘉會、華林の敷榮、果實の繁茂、國土の安樂の久しきを得る者無く、歡樂する者は少くして苦を受くる者は多し。是の故に一切の世間を樂しまず。

問曰 此の想を修習せば何等の利を得るや。

答曰 能く世間の種種相の中に於て心は貪著せず。又此の想を修するが故に速に解脱を得、生死の中に於て復久しくは住せず。又此の行は利なる智慧を得、常に一切の過患の相を習するが故なり。又此の人は心に煩惱を生ぜず、若し生ずるも速に滅すること、一渧の水を熱鐵の上に墮すが如し。行者は世間を樂しまざるを以ての故に能く深く寂滅を樂しむ、若し世間を厭はざるときは則ち寂滅に於て深く樂しむこと能はず。是の故に應に一切世間の不可樂想を習すべし。

不淨想品　第一百七十八

問曰 云何が不淨想を修するや。

【四】行苦品第七十九に同一言あり。
【五】大正大藏經は醎に作るも、今は縮刷藏經に從ふ。

なる香美の飲食の如きも即ち淨ならざる時に能く身を利益す、齒を以て咀嚼し、涎唾が浸漬し、狀は嘔吐の如くにして、生藏の中に墮し、能く身を利益すればなり。故に知る不淨なり。又此の飲食は不知の故に樂しきなり。若し人にして美食を得と雖も還吐出し已らば、更に食すること能はず、當に知るべし、不知の力を以ての故に、之を以て美と爲すなり。又飲食の因緣を以て、田作の役使、積聚の守護、是くの如き等の苦を受け、此の因緣に由りて無量の罪を起す。又所有の不淨は皆飲食に因る、若し飲食にして無くんば、何に由りてか而も皮骨血肉及び糞穢等の諸の不淨物あらん。又所有の惡道と諸の厠蟲等とは皆香味を食著するを以ての故に其の中に生ず、[三]業品の中にて說きしが如し、渴して死せる衆生は生れて水蟲と爲り、憒鬧處にて死せば則ち鳥中に生じ、婬欲を貪して死せば胎胞の中に生ず、是くの如き等なり。又若し此の食を離るれば大樂を得、色界及び泥洹の中に生ずるが如し。又隨つて食を以ての故に稼穡等の苦あり。是くの如く食の不淨苦を觀ずるが故に應に厭想を修すべし。

一切世間不可樂想品　第一百七十七

行者は諸の世間の一切は皆苦にして心に樂しむ所なしと見る。又此の行者は離喜定を修するときは、無常想と苦想と無我想と食厭想と死想と等の如くに、則ち心は一切の世間を樂しまず。又此の人は愛する所の者は則ち貪欲を增すことを見、惡む所の者は則ち瞋恚を增すことを見るが故に俱に樂しまず。又富貴の人には守護等の苦あるを見、貧窮の人には短乏の苦あるを見、又好處者は將に惡處に墮せんとするを見、惡處者は現に諸苦を受くを見る。又現在の富貴をも必ず將に墮せんとすれば、亦是れ貪等の煩惱の住處なりと知り、現在の貧窮をも、因緣の以て出づることを得べきもの無しと知る。故に一切の世間に貪樂せず。又少しく衆生有りて好處に生ずることを得るも、多くは

【三】六業品第一百一十を指す。明因品第一百四十參照。

巻の第十四

食厭想品[一]　第一百七十六

一切の苦の生ずるは皆食を貪るに由り、亦食を以ての故に婬欲をも助發す。欲界の中に於ける所有の諸苦は皆飲食と婬欲とに因るが故に生ず。食の貪を斷ずるが故に應に厭想を修すべし。又劫初の衆生の如きは天上より來りて此の間に化生し、身に光明有りて飛行自在なるも、始めて地の味を食し、之を食すること多き者は即ち威光を失し、是くの如くにして漸々に老病死あり、今百歳に至りて多くの諸の苦惱あり。皆食を貪著するに[二]由るが故に、此等の利を失ふなり。是の故に、應に正しく食を觀ずべし。又飲食に貪著するが故に婬欲を生じ、婬欲に從ふが故に餘の煩惱を生じ、餘の煩惱より不善業を造り、不善業より三惡趣を增し、天人衆を損す。是の故に一切の衰惱は皆食を貪るに由るなり。又老病死の相は皆飲食に由る。又食は是れ深き貪著處なり、婬欲は重しと雖も人を惱ますこと能はざればなり。食を爲す者の如きは若しくは少壯にても老年にても在家にても出家にても食の爲に惱まされざること無し。又應に此の食を食するも而も心の著せざるべきことは未離欲の者には是れ最も難しと爲すこと、刀を受くる法の如く、毒藥を服するが如く、毒蛇を養ふが如し。是の故に佛は說く、當に心を修習し、此れを以て而も食して食を貪る苦の爲に惱まされざるべしと。諸の外道ありて斷食の法を行ず、是の故に佛は言く、此の食は斷を以ての故に離を得ず、當に思して而して食すべしと。若し但食を斷ずるのみにして、煩惱にして盡きざるときは、則ち唐しく死して益無し、是の故に佛は說くなり。此の食の中に於て應に厭離想を生ずべくんば、則ち上の過なし。

問曰　云何が食に於て應に厭想を生ずべきや。

答曰　此の食の體性は不淨にして、極上味の食果も皆不淨なり、是の故に應に厭ふべし。又淨潔

【一】三本宮本はこゝにては分卷せず。

【二】大正大藏經は田に作る。

所以は何、有我を說く者も若し我も無く我所有も無しと知らば、能く是くの如きの決定を生ずる時には、卽ち解脫を得ればなり。

問曰　然らず。或は無我想を以て更に貪心を生ずること、女色を貪るが如し。皆我(わが)親に非ざるを以ての故に、隨つて非我を以て能く罪福を集む、所以は何、自ら身を損益するときは、卽ち罪福無ければなり。

答曰　我心有る者は能く貪欲を生ず。自身の中に於て男子の相を生じ、他身の中に於て女人の相を生じ、然る後に貪著するなり。又貪著の起るは皆假名に由る、彼の相は卽ち是れ假名なり、故に無我にして而も貪心を生ずるには非ざるなり。又無我心の者は諸業を集めず、阿羅漢の如く、我想を斷ずるが故に諸業は集まらざるなり。此の無我想は一切の煩惱及び業を斷ず。故に應に修習すべし。

無我想品　第一百七十五

行者は一切の法は皆破壞の相なるを見る。若し色に著して我と爲すも、是の色が敗壞せば、是れ敗壞の相なりと知るが故に、則ち我心を離る。受等にも亦爾り。人が山水の爲に漂はされ、攬捉さるゝ所あらば、皆斷じて脫失するが如く、行者も亦爾り。所計を我と爲せば、此の物の壞するを見るときは、則ち無我なるを知る。是の故に無我の中に於て無我想を修するなり。

問曰　無我想を修せば何等の利を得るや。

答曰　無我想を修せば能く苦想を具ず。凡夫は我想を以ての故に實の苦の中に於ても苦を見ること能はざるも、無我想を以ての故に少苦の中に於てすら尙其の惱を覺す。又無我想に於ての故に能く捨心を行ず、所以は何、我想を以ての故に我の永に失することを畏るゝも、若し能く實には但苦を失するのみにして、我の失すべき無きを知るときは則ち能く捨を行ずればなり。又無我想を以て能く常樂を得。所以は何、一切は無常なれば、是の中にて若し我々所の心を生ずるときは則ち我は當に無なるべく、我所も亦無ならんと謂ひて、則ち常に苦有るも、若し是の念――我々所無し――を作さば、諸法の壞する時にも、則ち苦を生ぜざればなり。又行者は無我想を以ての故に心は淸淨なることを得。所以は何、一切の煩惱は皆我見より生ずればなり。此の事が我を益するを以ての故に貪欲を生じ、此の事が我を損するが故に瞋恚を生じ、此を以て是の我は卽ち憍慢を生じ、我は命終の後に、當に作と不作とにて卽ち見と疑とを生ずべく、是くの如きは皆我を以ての故に諸の煩惱を起すものなれば、無我想を以ての故に諸の煩惱は斷じ、煩惱が斷ずるが故に心は淸淨なるを得るなり。心が淸淨なるが故に能く金石旃檀刀斧稱讚毀罵を等しくし、心は憎愛を離れて安隱寂滅なり。故に知る、無我想ならば心は淸淨を得。又無我想を除けば、更に餘道の能く解脫を得るもの無し。

る所は所謂是れ苦なれば、若しくは少壯にても老年にても賢愚貴賤にても此の苦の相を知らば皆厭離を生ず。一切の行人が泥洹の中に於て能く安穩寂滅の心を生ずるは皆生死に於て苦想を生ずるが故なり。何を以てか之を知る。若し衆生にして欲界繫の苦の爲に惱まさるゝときは、則ち初禪に於て寂滅の想を生ず、是くの如く展轉して、乃至、有頂苦に惱まさるゝときは、則ち泥洹に於て寂滅の想を生ず。又生死の中の所有の過咎は謂く苦是れなり。經の中にて說くが如し、色中の過とは謂く色の無常壞敗の苦相なりと。又無明を以ての故に此の苦に貪著す。何を以てか之を知る。衆生は眞の苦の中に於て樂想を生ずるが故に、深く苦想を生ずるときは則ち厭離を得ればなり。是の故に佛の言く、我は能く苦を覺る者の爲に苦諦を說く、此の中にては佛は世諦に因りて是くの如き義を示すなり。一切の天人世間の樂想を生ずる處に隨ひて、我諸の弟子は中に於て苦想を生じ、苦想を生じ已つて則ち能く厭離すと。又極愚癡の處にて、謂く苦の中に於て、而も樂想を生じ、此の想を以ての故に一切の衆生は生死に往來して心識が惱亂するも、若し苦想を得るときは則ち解脫することを得。又四食を以て能く後身を致すも、此の苦想を以て能く諸食を斷ず。[五四]子肉食の如く、無皮牛食の如く、火聚食の如く、百矟刺食の如しと是くの如く四食を說く中にては、皆是れ苦の義なり。此の苦想を以て能く諸食を斷ず。又苦想を修する者の意は四識處の中に住することを樂はず、皆苦なるを見るが故なり。癡蛾の火に投ずるは樂想を以ての故なれば、智者は火の能く燒くことを知りて則ち能く遠離するが如く、凡夫も亦爾り、無明の癡の故に後身の火に投ずるも、智者は苦想を以ての故に能く解脫を得。又一切の三界は皆是れ苦なり苦の因緣なり。中に於て苦受は是れ苦にして能く苦受を生ずるは是れ苦の因緣なれば、卽ち苦ならずと雖も久しければ必ず能く生ず。是の故に當に世間の一切は皆苦なりと觀ずべし、厭離の心を生じて諸法を受せずむば則ち解脫を得。

【五四】以下四食の意味明確ならず。

貪心が間錯す、故に一心にと說く。又人は少しく無常を修するも而も多煩惱なるときは則ち壞すること能はず、藥が少くして病が多きが如く、此の事も爾り、故に一心に無常を正觀すれば、能く煩惱を破すと說く。又法の無常なることを知れば、是れを眞の智慧と名づく、眞の智慧の中には貪等の煩惱あること無し。所以は何、無明の因緣を以ての故に貪等あればなり。當に知るべし、無常は貪欲を增すには非ず。又無常想は能く一切の煩惱を滅す、行者にして若し此の物は無常なりと知るときは則ち貪有ること無し。又此の人にして必ず自ら當に死すべきことを知らば、何爲ぞ瞋を生ぜん。何れの有智人か將に死せんとする者を瞋らんや。又若し法にして無常ならば、云何ぞ此れを以てして而も高心を生ぜんや。又諸法は無常性なりと知るが故に則ち癡を生ぜず、癡無きを以ての故に亦疑等も無し。故に知る無常は諸の煩惱と相違す。

苦想品[五三]　第一百七十四

若し法にして侵惱せば、是れを名づけて苦と爲す。是の苦は三種なり、苦々と壞苦と行苦となり。現在の實の苦は謂く刃杖等にして、是れを苦々と名づけ、若し愛別離の時ならば所有の苦生ず、謂く妻子等にして、是れを壞苦と名づけ、若し空無我を得たる心ならば、有爲法は皆能く侵惱することを知る、是れを行苦と名づく。此れに隨ひて心を苦しむるを名づけて苦想と爲す。

問曰　若し苦想を修すれば何等の利を得るや。

答曰　是の苦想には厭離の果あり、所以は何、苦想を修せば貪に依る憙無く、此の喜が無きが故に則ち愛有ること無ければなり。又行者にして若し能く法は是れ苦なりと知らば、則ち諸行を受せず。若し法にして無常無我なりと雖も苦を生ずること能はざるときは則ち終に捨てず、苦なるを以ての故に捨つ、苦を捨つるを以ての故に苦に於て脫することを得るなり。又一切衆生の最も怖畏す

【五三】三本宮本はここより第十七卷とす。

則ち愛は滅するものなればなり。故に無常想は能く貪欲を斷ず。又若し法にして無常ならば、卽ち無我と爲す、行者にして能く無常無我を觀ずるときは則ち我心を生ぜず、我心が無きが故に、我所心も無し、我々所が無きが故に何ぞ貪欲する所かあらん。又能く無常想を修習する者は自他の身に於て念々に死するを見れば、云何ぞ貪を生ぜんや。又行者は所求の事に隨つて皆無常壞敗なるときは、則ち誑らかさると爲す、虛誑なるを以ての故に貪著を生ぜず、小兒すら倘空捲[五二]の誑なるを知るが故に貪著を生ぜざるが如し。又衆生は牢固ならざる事を喜ばざること、人が朽故の器物を憙ばざるが如し。亦女人の如きも某の男子の命が七日を過ぎずと聞かば、復盛年端正にして尊貴勢力ありと雖も誰が當に喜ぶべき者ぞ。是の人は正に無常想を以ての故に貪著を生ぜざるなり。又智者は常に別離の想を習するが故に和合を樂はず。所以は何、智者は退墮等の苦を憶念し、乃至、天欲すら倘貪を生ぜずして但解脫を求むるのみなればなり。汝が無常は貪欲を增すと言ふは是の事は然らず、若し人にして未だ我慢を斷ぜずむば、外物の無常なるを見るが故に憂悲を生じ、愛惜する所を失ふが故に貪求を生ず、是の凡夫人は欲樂を除捨するも更に離苦を知らざれば、猶嬰兒が世の爲に打たれて、還(また)來りて母に趣くが如し。智者は苦の因にして猶在らば苦は滅すべからずと知りて卽ち苦の因を捨つ、所謂五陰なり。又此の行者は內陰を壞裂して無我心を得れば、外物を失ふと雖も憂惱を生ぜず、無我を得たる者には更に何の求むる所ぞ、無常想なる者も亦求むる所無く、又此の無常想にして若し未だ苦無我想を生ずること能はざるときは、則ち具足して能く煩惱を破すとは名づけざるが故なり。經の中にて說く、應に一心に五陰の無常なることを正觀すべし、若し內陰を壞せずして外物の無常なるを見れば、我心有るを以ての故に、憂悲を生ず、此れを則ち正觀とは名づけずと。又人は無常を見ると雖も亦厭離を生ぜざること、屠獵等の如し、是の人は無常を知ると雖も善習とは名づけず。又人は能く正觀すと雖も而も常には勤めて修習すること能はざるときは、則ち

【五二】元明は卷に作り、宮本は拳に作る。捲は拳と同じ。拳を作りて何物が其中にありと稱して之を小兒に與へむといふも、小兒すら其何物もなきを知るが故に欲せざるをいふ。

は極壽一劫、[48]僧伽陀地獄の壽命は半劫、餘は則ち或は多く或は少し。龍等の極多きも亦壽は一劫、餓鬼の極多の壽は七萬歲なり。[49]弗于逮の壽は二百五十歲、拘耶尼の壽は五百歲、欝單越の定壽は千歲、閻浮提の壽は或は無量劫、或は十歲なり。四天王天の壽は五百歲、乃至、有頂の壽は八萬劫なり。故に知る三界の一切は無常なり。又三種の[50]信を以て無常を信知す、現見の中にては法の常なるものあることなく、聖人の所說の中にても亦法の常なるものなく、此知の中にても亦常なるものあることとなし、要ず先に現見して後に比知するが故なり。又若し有る處にして常ならば、何れの有智者か一切の法を滅して而も解脫を求めんや、誰か所愛と常に共に同止して諸樂を受くることを欲せざる者ぞ。而も實智の者は皆解脫を求む。故に知る生法には常を得る者無し。又復當に說くべし、一切の生法は皆念々に滅して尙暫住するものすら無し、況んや常あらんやと。

問曰　無常想を修して能く何れの事を辨ずるや。

答曰　能く煩惱を破す。經の中にて說くが如し、善く無常想を修せば、能く一切の欲染と色染と及び無色染と掉と慢と無明とを壞すと。

問曰　然らず。此の無常想も亦能く貪欲を增す、人にして盛年の久しからざることを覺知するときは則ち深く婬欲に著するが如し。華の久しくは鮮かならざるを知らば則ち速に用ひて樂と爲し、他の妙色の[51]已に常有に非ざるを知らば、則ち駛せて婬欲を增す、是くの如く無常を知るに隨ひて則ち貪著を生ずるが故に無常想は貪欲を壞せず。亦有る人は無常を知るが故に而も殺等を爲し、又乃至、畜生も皆無常を知るも而も亦諸の煩惱を破すること能はず。是の故に無常想を修するも利益する所無し。

答曰　無常なるを以ての故に別離の苦を生じ、盛年安樂壽命富貴を失すれば、智者は此れを以て喜心を生ぜず、喜心が無きが故に貪心を生ぜず、受に因るが故に愛あるも、受にして滅するときは、

る。

【四七】釋は帝釋、梵は梵天をいひ、轉輪諸王は諸の轉輪聖王をいひ。

【四八】僧伽陀は Saṃghāta の音譯にして譯して衆合といふ、八熱地獄の中の一にして、衆多の苦具を以て苦しめらるゝが故に衆合地獄と云はる。

【四九】以下の四は須彌四洲の名なること前に註したり。

【五〇】この信は通常いふ量の意。次の現見が現量、聖人の所說が聖教量、比知が比量にて、之を三種の信といへるなり。

【五一】或は已なるやも知れざれど。印刷上にては大正大藏經も縮刷藏經も已なり。

答曰　汝が法の中にても亦說く、[四二]釋提桓因は能く百祠を爲すも亦復退墮すと。又偈の中に說く、

多くの諸の帝釋等の造るところは　百千祠に過ぐるも
皆悉く無常にし盡く、と。

百千祠の者すら猶在らず。故に知る三祠は常に非ず。又釋提桓因及び天王等の身分も亦盡く。是の故に緣より生ずる法には常なる者有ること無し。又汝が法の中にては韋陀を以て貴しと爲す、韋陀の中にては智慧に由るが故に不死の法を得と說く、說くが如し、[四三]日色の大人の世性に過ぎたるを見て、先に此の人の意に隨順すれば、能く不死の道を得、更に餘道無し。小人の神は小、大人の神は大にして、常に身の中に在り、若し人此の神の相を知らずむば、復韋陀等の經を讀誦すと雖も、益する所無しと。又梵世身も皆是れ無常なり。何を以てか之を知る。汝が法の中にて說く、梵王も亦常に祀祠し持戒して諸の功德を爲すと。若し身の常なることを知らば、何が故に福を爲さむや。又汝が經の中にて說くを聞く、諸の梵王には婬欲ありと。若し婬欲あらば、必ず瞋等の一切の煩惱あり、若し煩惱あらば、必ず罪業あり、是くの如きの罪人にして云何ぞ當に能く常に解脫を得べけむや。又一切の[四四]神仙が皆天祠を爲すには非ず、亦一切のものが梵天道を行ずるにはあらず、若し此にして是れ常ならば、則ち盡く應に之を爲すべし。又一切の萬物は皆悉く無常なり。所以は云何、若し地水火風なるも、大劫の盡ぐる時には、更に餘あること無ければなり。又時の轉ずることとは輪の如し。故に知る無常なり。又戒定慧等の無量の功德を成就せる諸の大聖人、[四五]定光佛等、及び辟支佛、[四六]摩訶三摩伽等の劫初の諸王も皆悉く無常なれば、當に何物の常なる有るべけんや。又佛は自ら說く、一切の生法は皆常定の相無しと。牛糞經の中にて說くが如し、佛は少しの牛糞を以て諸の比丘に示して、爾所（そくばく）の色も常定にして不變なる無しと。是の經の中にては、廣く釋梵[四七]轉輪諸王の果報も亦盡く說く。故に知る一切無常なり。又三界の一切のものには皆壽量あり、阿鼻地獄

【四二】　釋提桓因（Śakra devānām indra）帝釋といふと同じ。三十三天卽ち忉利天の主神なり。婆羅門にては釋提桓因の名を用ひずして、因陀羅と呼ぶ。釋提桓因の因は因陀羅の略なるが、この因陀羅は神名にはあらずして帝又は王の意なり。されど元來は神名なりしものなれば、佛教に用ひらるゝ釋提桓因の名にて因陀羅を指すとなすものなるべし。

【四三】　此文がヱーダの何の部にあるかは今明確ならず。日色は太陽の形をなすの意、大人はプルシヤの譯にして我を指し、而も我を宇宙大に見たるもの、世性は數論派の說く自性非變異なり。小人の神の神は我のこと。我の大小の量が人身の大小に應ずとの考は元來耆那特有のものなるも、大衆部末計にも之に似たる考あり。

【四四】　神仙は仙卽ちリシをいふ。仙の中に神的の仙と人的の仙とあるなり。

【四五】　定光佛　（Dīpaṁkara-buddha）、然燈佛なり。四無畏品第三には錠光とありたり。

【四六】　摩訶三摩伽は Mahāsammata 王を指すなるべし。伽は如何にも誤寫の如く思はる。Mahāsammata は衆許と譯さ

答曰　若し一切の欲色界繫の地等を緣ずるも何の咎あらむや、假令此の定にして更に餘の法を緣ずとも復何の咎あらんや、又此の定は是れ信解なれば虛妄緣を觀ず、虛ならざる地等有ること無し。

問曰　佛弟子も亦地等を觀ずと、是の事は云何。

答曰　學人にして若し觀ぜば皆破壞を爲す。

問曰　實には皆一切が皆是れ地等なるには非ざるに、云何ぞ此の定は顚倒に非ざるや。

答曰　此の觀の中には癡分あり、此の觀の中にて我見を起すを以ての故なり。不淨等の觀は眞實にあらずと雖も而も離欲に隨順するも、此の觀は爾らず、故に癡分あるなり。

問曰　何が故に受等の無邊を觀ぜずして、但識のみを觀ずるや。

答曰　可取は是れ地等にして、取る者は識なり、是の故に識を見て受等を見ざるなり。又先に受等は皆心の差別なりと說きたり。又行者は受等の遍滿するを見ず、一切處にて苦樂を受するにあらざるを以ての故なり。佛弟子にして此の定を行ずるが若きは、緣を壞するが爲めの故なり。所以は云何、此の緣は是れ行者の所貪著處なれば、若し破壞せずんば則ち凡夫に同じければなり。

[三九]無常想品　第一百七十三

無常想と苦想と無我想と食厭想と一切世間不可樂想と不淨想と死想と斷想と離想と滅想とあり。

無常想とは謂く無常の法の中にて定んで無常なるを知ることとなり。

問曰　何が故に一切は無常なりや。

答曰　是の一切の法は皆緣より生じ、因緣が壞するが故に皆無常に歸すればなり。

問曰　然らず。法の緣より生ずと雖も而も無常に非ざるあり、[四〇]外經に說くが如し、三祠を爲す者は常處に生ずることを得と。又[四一]梵世の身は常なりと。

【三九】　三本宮本は無常想の上に十想を加ふ。文首にある如く、無常想は十想の最初なれば十想の中の無常想の意味を示して揭げたるなり。

【四〇】　外經は後文より見れば、婆羅門の經典を指す。三祠は三度祭祀をなすをいふ。

【四一】　梵世は梵界を指す。

問曰　何れの者か是れ信解性なりや。

答曰　青等の諸色の無量なるも、略して其の本を說かば四あり、地等の四大是れなり。四色の本の能く此の八事を破すを、是れを虛空と名づけ、識を以て能く無邊の空を知るなり。故に亦無邊と名づく。所以は何、有邊の法の能く無邊を取るを是れを名づけて十と爲すには非ざればなり。

問曰　地の中には實に水等あるに、行者は云何が能く但是の地のみを觀ずるや。

答曰　久しく此の觀を習して常に地相を取れば、後には但地のみを見て餘物を見ざるなり。

問曰　行者の見る所の地相は實に地たるや不や。

答曰　信解力を以ての故に見て地と爲すのみ、實には地たるには非ず。

問曰　若し變化力にて變化する所あるも亦實に非ざるや。

答曰　變化は定力を以て成ずるが故に作す所は皆實なり、所謂光明及び水火等なり。

問曰　有る論師の言く、[三八]八の一切處は但第四禪の中にのみありと。是の事は云何。

答曰　若し欲界及び三禪の中にあるも、何の咎あらむ。後の二の一切處は各自地に當る。此の十は皆是れ有漏なり、緣を壞せざるを以ての故なり。

問曰　虛空の相は色を破するに非らずや。

答曰　行者も亦信解を以て眼鼻等の空相を取りて空と爲し、直に實の色を破すること能はず、是の故に信解と名づくるなり。

問曰　經の中にて說く、一切地の定に入る者は地は卽ち是れ我なり、我は卽ち是れ地なりと念ずと。何が故に是くの如きの念を作すや。

答曰　行者は心の遍滿するを見るが故に此の念を生ず、一切は是れ我なりと。

問曰　有る人は言く、此の定は但欲界繫の地等を緣ずるのみと。是の事は云何。

【三八】明本のみは八を入に作るも、不可なり。下に二の一切處を述ぶるを考ふべし。

を觸すと說くなり。

問曰 有る人言はく、滅盡定に入る心は是れ有漏にして、定より越つ心は或は有漏、或は無漏なりと。是の事は云何。

答曰 有漏には非ず。行者にして此の定に入らんと欲せば、先より來(このかた)一切の有爲を破壞し、破し已るが故に入り、起つ時には泥洹の緣心が現前す。故に知る俱に是れ無漏なり。

問曰 經の中にて說く、行者は滅盡定に入るも自ら入ることを念ぜず、起つ時も亦自ら念ぜず、と。若し爾らば云何が能く入るや。

答曰 常に修習するが故に、定力は堅强なれば、自ら念ぜずと雖も而も能く入ることを得るなり。又此の行者は有爲を斷じてより爾來(このかた)滅に入る、若し心を制して有爲を緣ぜしめざるときは、則ち入るとは名づけず。是の故に經に說く、此の定に入る者は先に心を調習するが故に能く入ることを得と。

問曰 若し異空の得べき無くむば、無爲の緣心を修して、更に何れの利を得るや。

答曰 久しく修習するが故に定は則ち堅固にして知見は明了なり、有爲の緣心の念々に滅するを見るも亦異つて念々に滅すること無く、但久しく修習するときは則ち心が堅固なるが如く、此の事も亦爾るなり。

[三七] 十一切處品 第一百七十二

前緣を壞せずして心力の自在なるを一切處と名づく。行者は少相を取り已りて信解力を以て其をして增廣ならしむ、所以は何 此の攝心の力は若し實の中に入るときは、則ち皆能く空ならしめ、信解の中に入るときは、皆能く先に取りし所の相に隨はしむればなり。

【三七】十一切處は十遍處定、十禪支とも云ふ、前の八解脫、八勝處と共に三界の貪愛を斷ずる爲の觀法なり。卽ち此は一切萬有と總合して一對象とし、地、水、火、風、靑、黃、赤、白、空、識の十を觀じ、其の一一に於て一切處に周遍せしむる方法なり。此の十一切處の中、前の四一切處に於ては、靑、黃、赤、白の一一について無邊なりと觀ず、次に此の靑等の所依を求むるに大種に依るを知る、故に四大卽ち地、水、火、風につきて、一一無邊なりと觀ず、次に此の色は何に依つて廣大なるかと思ふに虛空に依るを知る、故に空無邊處を觀ず、次に更に此の能觀の識を觀じて、識無邊處を觀ず、以上の如く次第するなり。

以て無量の福を得と。滅定より起つ者は泥洹心を緣ず、是れを無量と名づく、此の滅も亦是れ無量なり、無量の福を得るが故に能く現報を得るなり。又八功德を以て此の福田を嚴る、泥洹の緣心は是れ眞の正見にして餘分は隨從す、是の故に能く現報を生ずるなり。

問曰 有る人は言く、滅盡定は是れ心不相應行にして、亦世間法とも名づくと、此の事は云何。

答曰 上に說きしが如く、此の定より起つ者には深寂滅等の諸の功德あり、此の功德は世間には應に有るべからざる所なり。

問曰 滅盡定は名づけて遮法と爲す、此の法を以ての故に心をして生ぜざらしむれば、是の故に應に心不相應行と名づくべし、鐵が火を得るときは則ち黑相無きも、火を離るれば、還つて生ずるが如く、此の事も亦爾るなり。

答曰 若し爾らば、泥洹も亦應に是れ心不相應行なるべし、所以は何、泥洹に因るが故に餘陰は生ぜざればなり。若し泥洹にして心不相應行に非ずむば、此の定も亦應に不相應行と名づくべからず。但諸の行者の法は應に是くの如くなるべし、此の定の中に入れば所願に隨ふが故に心は能く生ぜざるなり。是の故に應に說いて心不相應行と名づくべからず。

問曰 此の定は是くの如くに次第して入らば、亦應に次第して起つべきや。

答曰 亦次第して起つて漸に麁心に入るなり。

問曰 經の中にて說く、初めて滅盡定より起つ者は三種の觸を觸す、所謂無動と無相と無所有となりと。何が故に是くの如くなりや。

答曰 無爲の緣心の中の所有の觸を無動・無相・無所有と名づく、無動は卽ち是れ空なり、有爲の緣心は輕きが故に動あり、所謂色受等を取ればなり。空の中のものは無相にして、無相の中にては貪等の所有無きなり。此の無心は初めは泥洹を緣じ、後には有爲を緣ずるが故に起つ時には三種の觸

斷ぜし時の如し。汝が、滅盡定に入るも死と名づけずと言ふは是の人には命と熱とが滅せざるに、死者には三事が都べて滅すれば、是れを則ち異と爲せばなり。又此の人は命と熱とに因るが故に心は能く更に生ずるも、死者は爾らず。汝は若し滅せる心が還生ずるときは則ち解脱無しと言ふも、是の事は然らず、所以は何、泥洹に入れる者は先業所受の命と熱と識とが滅して更に生ずることを期せざるに、此の人には命と熱とは滅せざれば、先の心の生ずることを期せばなり、[三四]滅盡定品の中にて說きしが如し。滅盡定に入れる者は是の六入及び身命に因るが故に還能く起る、是の故に心は能く更に生ずるも、泥洹に入れる者には心は更に生ぜず。故に知る此の定は無心なり。

問曰　何が故に、此の定より起つ者に施さば、能く現報を得るや。

答曰　此の定より起てば心は深く寂滅なり、經の中にて說くが如し、滅定より起つ者の心は泥洹に順ずと。又是の人の禪定力は强し、此の定に依るが故に智慧も亦大なり、智慧が大なるが故に能く施者をして勝果報を得しむ、人が百千の聲聞に供養せむよりは一佛にするに如かざるが如し。是の中にては皆智慧を以て勝と爲し、斷結には非ず、是事も亦爾り。又此の定に入れる者は多くの善法を以て其の心を[三五]勳修するが故に大果を生ずること、能く治せる田の收むる所は必ず多きが如し。又能く世を厭ふ者に施さば則ち大報を得、滅定より起つ者は深く世間を惡む、是の故に供養を勝と爲すなり。又淨心なる者に施さば大果報を得、垢心なる者には非ず。此の人は假名の垢心を以てせず、是の故に供養すれば大果報を得。又是の人は常に第一義諦に在るに、餘人は世諦に住す、又此の人は常に無諍法の中に住す。所以は何、有爲の緣心なるときは則ち諍訟あればなり。又經の中にて說くが如し、稊稗は禾を害し、貪欲は心を害すと。是の故に無欲の人に施さば大果報を得。貪欲の因緣は謂く假名相なるに、此の定より起つ者は泥洹を緣ずるが故に假名相を離れたればなり。又[三六]經の中にて說く、若し人にして檀越の供を受け已つて無量定に入らば、是の檀越は、此の因緣を

【三四】　滅盡定品は此品に外ならざるが、此品を特に此名にて指すは奇なり。恐らく前品最後部に滅盡定をいへる文などを指すならむ。

【三五】　三本宮本は熏に作る。此方通常にして解し易し。

【三六】　論品第十一、三障品第一百六に此經の同一文の引用あり。

るときは、則ち無垢心が滅す、此れは是れ佛の法の正義なり。又滅定に入る者を名づけて死とは爲さず、心が滅するを死と名づくればなり。若し滅したる心にして還生ぜば、死者も亦應に更に生ずべし、然らば則ち終に死あること無し。若し滅したる心にして還生ぜば、泥洹に入れる者も亦應に還生ずべし、然らば則ち終に解脱無し。而も實には然らず。故に心は滅せず。

答曰　汝は無心の衆生無しと言ふも、同じく無心なりと雖も而も死よりは異る。經の中にて、問ふ、滅盡定に入れる者は死と何の差別ありや。答へて曰く、死とは命と熱と識との三事の都て滅せるなるに、滅盡定に入れる者は但だ心のみ滅して而も命と熱とは身を離れずと。故に知る應に無心の衆生あるべし。又是の人には心の[三二]得が常に在り、得の力を以ての故に亦心有りとも名づくれば、木石に同じからざるなり。汝が三事は相離れずと言ふは欲色界の衆生の爲の故に說くのみ、無色界の中にては命有り識有りて而も熱無く、又滅盡定に入れる者には命有り熱有りて而も識無ければ、即ち此の經の中にても亦識は身を離ると說く。是の故に若し三事は相離れずと言ふは有る處に隨ひて說くのみ。汝は食無くして云何ぞ存せんやと言ふも、此の身は、已に意思食を先と爲すを以ての故に現在に住し、冷等の觸を以ての故に能く身を持するなり。汝は心は心に因りて生ずと言ふも、心は異心の與に因と作り、因と作り已つて滅す、是の故に能く異心を生ずるなり。

問曰　云何ぞ心を滅して能く異心を生ぜむや、眼にして已に滅せば、則ち識を生ずること能はざるが如し。

答曰　已滅の業が能く果報を生ずるが如く、是の事も亦爾り。又意と意識との二事は相礙ふも、眼と眼識とは是くの如くならず、是の故に非因なり。汝は相續を斷ぜし時に心は滅すと言ふも、是の事は然らず。滅には[三三]三種あり、色滅と心滅と或は[三三]色心俱滅となり。或は色が滅して心には非ず、無色の中の如し。或は心が滅して色には非ず、滅定に入れるが如し。或は色心俱に滅す、相續を

【三二】得については不相應行品第九十四參照。滅盡定も全然心なしといふにはあらざることゝなる。前品の註參照。

【三三】麗本は三を二に作り、或色心俱滅を缺く。今は三本宮本に從ふ。次の說明より見れば此方可なり。

勝るも、無色界の中にては想が勝る、是の故に但二種のみを說く。又諸の識處の中にては但受想のみを說く、識處は心より起るが故に卽ち名づけて行と爲す。又若し受想滅と說かば、則ち一切の心心數の滅を說くなり、諸の心數は相離れざるを以ての故なり。

答曰　然らず。汝にして勝るが故に獨(ひとり)說く言はば、應當に心を說くべし、所以は何、處處の經の中にて心を王と爲すと說けばなり、亦是れ[三〇]二分の煩惱の所依なればなり、亦心の差別を以ての故に名づけて受想と爲せばなり。故に應に心を說くべく、又心を說くときは則ち易し。是の故に汝の說は非なり。

問曰　此の定は何が故に身證と說くや。

答曰　八解脫は皆應に身證と說くべく、又是の滅法は了する所を言へるに非ざるが故に身證と說く、水に觸るれば則ち冷相を知るも、聞いて能く知るには非ざるが如く、此の事も亦爾り。又此れは是れ無心法なり。故に應に身を以て證すべきなり。

問曰　汝が滅定は是れ無心法なりと說くは此の義は然らず、所以は何、此の定に入るものは是れ衆生なるに、世間には無心の衆生あることなければなり。是の故に然らず。又經の中にて說く、命と熱と識との此の三法は常に相離れずと。故に心を滅することなし。又一切衆生は皆四食を以て存することを得るに、滅盡定に入るときは則ち諸食無し、所以は何、是の人は[三一]摶食を食せざれば觸等も亦滅するが故に食無ければなり。又心は心より生ず、若し此の心にして滅せば、餘心は生ぜず、次第緣無きが故に後心が云何ぞ更に生ぜんや。又心は但無餘泥洹に入りて相續を斷ぜし時のみ滅す、餘處にて滅するには非ず。經の中に說くが如し、色を以て諸欲を過ぎ、無色を以て色を過ぎ、滅を以て諸の作念思惟を過ぐと。心を作念思惟と爲せば、要ず滅を以て能く過ぐるなり。有餘泥洹を得るときは則ち垢心が滅し、無餘泥洹を得

【三〇】例へば三業輕害品第一百十九參照。
【三一】麗本は揣に作るも、前にいへる如く摶を取る。

の滅なりと言ひたれば、是れ則ち相違す。

答曰　滅定に二種あり、一には諸の煩惱の盡くと、二には煩惱の未盡となり。煩惱の盡く者は、解脫の中にあるも、煩惱の未盡の者は次第の中にあり。一は煩惱を滅するが故に滅定と名づけ、二は心心數法を滅するが故に滅定と名づく。煩惱を滅するは是れ第八解脫にして、亦阿羅漢果とも名づく。阿羅漢果は一切の想を滅して復生ぜざらしむるに名づくるに、此の中にては諸想を滅すと雖も、餘の結あるが故に更に生ぜざらしむること能はざるなり。

問曰　若し行者にして九次第定を以て能く心を滅せば、須陀洹等は云何ぞ能く心滅法を證せんや。

答曰　九次第の中の滅を名づけて大滅と爲す。若し人にして善く諸の禪定を修せば、道心の力强きが故に能く此の滅を得るも、若し斯の力無くむば、則ち但滅あるのみにして是くの如くなること能はざれば、大力の爲の故に次第定を說くなり。餘處にても亦心滅あり、第四禪の中にては能く心心數法を滅して無想に入るが如くなれば初禪等の中に何が故に滅無からむや。又餘處にても亦應に心を滅する義あるべし、經の中に說くが如し、須陀洹等は皆能く滅を證す、但心滅のみを滅と名づけ、更に餘法の滅無しと。故に知る此の九地を離るるも亦心滅有り。

問曰　若し滅盡定にして能く一切の心心數法を滅せば、何が故に但想受滅とのみ說くや。

答曰　[二六]一切の心を皆名づけて受と爲す、此の受は二種なり、一には想受、二には慧受なり。想受を有爲の緣心と名づく、想を以て假名法の中に行ずるが故なり。假名は二種なり、一には因和合假名、二には法假名なり。是の故に一切の有爲の緣心を皆名づけて想と爲す。慧受を無爲の緣心と名づく。是の故に若し想受滅と說くときは、則ち一切滅を說くと爲すなり。

問曰　一切の心心數法の中にては受想は最も勝る、是の故に獨說く、所以は何、煩惱に二分あり、一には[二七]愛分、二には見分なり。[二八]受は[二九]愛分を生じ、想は見分を生ず。又欲色界の中にては受が

【二六】
一切の心＝受（想受＝有爲緣心／慧受＝無爲緣心）

【二七】　三本は受に作る。
【二八】　三本は愛に作る。
【二九】　三本宮本は受に作る。
右の三字は麗本の方正し。

なり。

滅盡定品　第一百七十一

一切の非想非非想處を過ぎて身に[二三]想受滅を證す。

問曰　何が故に諸禪の中にては一切を過ぐと說かず、無色定の中にては滅すと說かざるや。

答曰　我は諸禪定の中にては皆覺觀喜樂等の法ありと說く、是の故に一切を過ぐとは說かざるなり。

問曰　無邊虛空處には色心あること、此の事は已に明したり。故に無色の中にても亦一切を過ぐとは說くべからず。

答曰　若し無邊虛空定の中に入らば、色と心とを脫することを得るも、而も覺觀等の法を脫することを得ず。復有る人言はく、若し過と滅と沒とを說かば皆義は一にして而も名を異にするなりと。又無色の中にては定心は堅固なるも、下地の中にては心は散亂の爲に壞せらる。是の故に一切を過ぐとは說かざるなり。

問曰　若し俱に刺棘有り、謂く色想等なりと說かば、何が故に心は堅固なりと說くや。

答曰　俱に刺棘と說くと雖も亦第四禪を名づけて無[二四]動とも爲す、是くの如く無色定の中にては定力が大なるが故に堅固と名づくることを得。

問曰　學人は應に滅盡定を得べからず、未だ一切の非想非非想處を過ぎざるを以ての故なり。

答曰　學人は能く非想非非想處にて一切の行の滅するを見るも、但未だ其をして生ぜざらしむること能はざるのみ。故に過ぐと說くことを得。

問曰　若し此の中にて意が泥洹を以て滅と爲さば、汝は先に[二五]九次第の中にての滅は是れ心心數

【二三】滅盡定を或は想受滅定とも稱す。

【二四】不動ともいふ。

【二五】九次第定をいふ。四禪四無色定滅盡定なれば、この品は即ち九次第定の最後を說きつゝあるなり。

べし。又無想定の中にては心は應に滅すべからず。所以は何、行者は要ず心を厭離するが故に能く心を滅すればなり。若し心を厭はば、應に尙無色界の中にすら生ずべからず、況んや色界に生ぜんをや。又凡夫は心に於て深く我想を生ず、經の中にて說くが如し、凡夫は長夜に此の心に貪著し、之を謂うて我と爲すと。是の故に無餘には厭離すること能はず。又經の中にて說く、外道は能く三取を斷滅することを說くも而も我語取を斷ずることを說くこと能はずと。是の故に心を滅すること能はざるなり。又若し正しく因緣法を知らば、能く心空を得。[一九]猨喩經に說くが如し、凡夫は或は能く身を離るるも而も心を離るること能はざれば、寧ろ身の常なるを觀ずるも心の常なるを觀ずること勿れ、所以は何、眼は是の身の或は住すること、十歲乃至百年なるを見るも、所謂若しくは心若しくは意若しくは識の[二〇]是の事は念念に生滅し變異すること[二一]猨猴の樹に緣り、一枝を捨て一枝に攀ぢて一處に住せざるが如し、若し聖弟子ならば中に於て正しく因緣法を觀ずるが故に能く無常を知ると。又因緣法を知らば、受の差別を以ての故に、能く識を分別するも、諸の外道輩は因緣を分別する智なきを以ての故に心を滅すること能はず。又凡夫は色を離るるも心を離れざるが故に解脫を得ず。若し倶に能く心を滅せば、復何を以ての故に解脫を得ざらむ。又凡夫人は滅を怖畏するが故に泥洹の中に於て終に安穩寂滅の想を生ずること能はず。經の中に說くが如し、我無く所有無きは是れ凡夫人の深く怖畏する處なりと。又無想の中に於て愚癡心を生ず。若し泥洹に於て寂滅安穩の想を生ぜずむば、云何が當に能く心を滅すべきや。又凡夫法は要ず上地に因りて下地を捨す、是の故に能く心を滅する因緣なし。但定力にて細想現前するも心は覺せざるを以ての故に自ら無想と謂ふのみ。若し麁想を起さば、卽時に退墮す。少智の人ならば、名づけて無智と曰ふが如く、食にして少[二二]鹹ならば名づけて無[二三]鹹と爲すが如く、迷悶しての失念と蟄蟲と氷魚の如く、非想非非想處を說くが如き此の中にても亦爾り。實には想ありと雖も世俗に隨ふが故に說いて無想と名づくる

【一九】大正大藏經は猿に作るも、縮刷藏經は猨に作る。猿は俗字にて猨が正字なり。宋元宮本は猨の上に猴を加へ、明本は猨猴に作る。但し縮刷藏經の校合にては三本は共に猨猴に作るとなし、猨猴に作るものを記さず。此經の同一文が既に多心品第六十八にも引用せられ、そこにては何れも猨喩經上なし居たり。

【二〇】大正大藏經は是を如に作る。誤植なり。

【二一】大正大藏經は猿に作るも、縮刷藏經は猨に作る。

【二二】大正大藏經は鹹に作る。

今縮刷藏經に從つて鹹とす。

又色の爲に疲[一七]倦するが故に虚空を緣ずるが如く、是くの如く虚空の爲に疲勞して、止息せんと欲するが故に但識を緣ずるのみなり。又此の人は識を以て能く空を緣ずるが故に識を謂ひて勝と爲す。故に但識を緣ずるのみなり。行者は識を以て緣に隨ひ時に隨ふが故に、無邊の疲倦あれば、厭離して還識を破せんと欲す、故に無所有處に入りて、是くの如きの念を作す、識有るに隨ふときは則ち苦なり、我にして若し無邊の識あらば、必ず當に無邊の苦あるべしと、是の故に識を緣ずる心を攝す。心は微細なるが故に無所有と謂ふ。

復是の念を作す、無所有は卽ち是れ想なり、想を苦惱と爲す、病の如く癰の如し、若し想無くむば、復是れ愚癡なり、我にして若し無所有を見ば、卽ち是れを有と爲す、故に諸想に於て未だ解脫を得ずと。行者にして想を衰患と爲し、無想を癡と爲すことを見れば、寂滅微妙にして、所謂非想非非想處なり。凡夫は常に無想を怖畏して以て愚癡と爲す、是の故に終に能く心を滅する者無きなり。有る人言はく、無想の衆生も亦能く心を滅すと。此の事は然らず。所以は何、若し色界の中にして能く心を滅せば、無色界の中にて何が故に能はざらむや。

問曰 色界には色有るが故に能く心を滅するも、無色界の中にては先に已に色を滅し、今復心を滅す、若し色と心とが倶に滅するを見るときは、則ち驚怖し迷悶せん。

答曰 若し彼の中に在りて滅すること能はずむば、此の間に於て生ずるときは則ち應に能く滅すべし、滅盡定の如し。

問曰 是の滅心の果は無想なり、是の故に若し色と心とを滅せば則ち永失と爲す。

答曰 [一八]滅盡定にも亦有心の果もあり、此の事も亦爾り。又若し果にして斷せずむば、亦果に住すとも名づく、變化に在る色が變化の心の中にて還果を生ずるが如し、故に永滅とは名づけず。是の故に色界の中にては應に心を滅すとは說くべからず。若し說かば、無色界の中にても亦應當に說く

【一七】縮刷藏經の校合は宋元二本は倦を惓に作ると記す。

【一八】滅盡定も全く無心なるにはあらず、次の滅盡定品に心の得をいふと參照すべし。

問曰　有る人は言く、諸の無色定は能く滅を緣ずと雖も但比智の分の滅を緣じて現智の分の滅を緣ぜずと。是の事は云何。

答曰　一切の滅を緣ず。現法の智を以てしては現在の自地の滅を緣じ、比智を以てしては餘の滅を緣ず、道にも亦是くの如し、能く一切の法を緣ずるが故なり。

問曰　無色界に生ずる衆生は能く餘地の心を起すや不や。

答曰　能く餘地の心と及び無漏心とを起す。

問曰　若し爾らば、云何ぞ沒せざる。

答曰　業の果報の中に住するが故に能く沒せざるなり、欲色界の中にても、神通力の故に異色異心に住するも而も能く沒せざるが如く、彼の中にても亦爾り。

問曰　無邊虛空定は[一五]虛空處一切處と何の差別有りや。

答曰　虛空定に入らんと欲する方便道を一切と名づけ、入定が成じ已れば虛空定と名づけ、是の中には定の因果あり。是の地の一切の有漏無漏も若しくは定非定も若しくは垢も若しくは淨も皆無邊虛空處と名づく。

[一六]三無色定品　第一百七十

一切無邊虛空處を過ぎて無邊識處に入れば、行者は深く色を厭ふが故に、亦色の治法をも捨つること、人の河を渡り已れば、亦船をも棄て去るが如く、賊より出づることを得れば、遠く捨て去らんことを欲するが如く、行者も亦爾り、空に因りて色を破すと雖も、亦遠く去らんと欲す、無邊識とは行者が識を以て能く無邊虛空を緣ずるときは則ち識無邊なり、是の故に空を捨てて識を緣ずるなり。

[一五]　十一切處の中の第九を指す。下の十一切處品第一百七十二參照。

[一六]　識無邊處無所有處非想非非想處をいふ。

は虚空は是れ色なりと言ふも、是の中にては因緣の是れをして色ならしむべきものあることなし。
問曰　現に門向等の中の虚空を見る、現見の事の中にては因緣を須ひず。
答曰　虚空は現見すべからず、先に已に破したるが故なり、所謂闇中にても亦知るべし等と。
問曰　若し虚空にして色に非ずんば、是れを何れの法と爲すや。
答曰　虚空は無法に名づく、但色無き所を名づけて虚空と爲せばなり。
問曰　經の中にて說く、六種に因るが故に衆生は身を受くと。又說く、虚空は不可見無色無對に名づくと。若し無法ならば、是くの如き說を作すことを得ず。兎角を說いて不可見無色無對と名づくることあることなければなり。
答曰　若し實有の法ならば皆所依有り、名は色に依り、色も亦名に依るが如し。虚空は依無し、故に知る無法なり。汝は空の種を言ふも、是れも亦然らず。所以は何、色は色を礙せばなり。是の色は異色無きを得るが故に增長することを得。此の義を以ての故に、佛は六種に因りて、衆生は身を受くと說くなり。汝は虚空は無色無形無對なりと言ひ、亦諸物をも破すを以ての故に是くの如きの說を作すも、虚空の相有ることを說かず。汝は兎角を說いて不可見無色無對と爲すこと有ること無しと言ふも是れも亦然らず。所以は何、皆虚空に由りて所作去來等の事有ることを得るも、兎角等の中には是くの如きの義無ければなり。
問曰　心も亦是くの如く無色無形無對なれば、無しと言ふべきや。
答曰　心には作業あり、謂く能く緣を取る。虚空には業無く、但無なるを以ての故に所作あることを得るのみ。故に知る無法なり。是の故に此の定は初めに虚空を緣ずるなり。
問曰　此の定は能く何れの地を緣ずるや。
答曰　一切の地を緣じ、及び滅道を緣ず。

問曰　虚空は是れ色入の性なり、云何ぞ此れを緣じて能く色相を過ぎむや。
答曰　此の定は無爲の[一四]虚空を緣ずるが故に能く色を過ぐるなり。
問曰　此の定は無爲の虚空を緣ぜず。所以は何、此の定の方便の中にては、眼等の中の虚空を緣ずと說けばなり。故に知る、有爲の虚空を緣ずるのみ。又經の中にては無爲の虚空の相を說かずして、但有爲の虚空の相のみを說く、所謂無色處を虚空と名づくるのみ。是の故に無爲の虚空無し。
答曰　色性は虚空と名づけず。所以は何、經の中にては虚空は無色にして不可見不可對なりと說けばなり。
問曰　更に有る經にては說く、明に因りて虚空を知ると。色を除いて餘法の明に因りて知るべきものあること無ければなり。
答曰　無色は虚空に名づけ、諸色は明を以て知るべきものなり。是の故に明に因りては則ち色の無きを知るも、虚空有るには非ず。又闇中に於ても亦虚空を知る、盲人は手を以ても亦虚空を知り、又杖を以ても亦此れは是れ虚空なりと知ればなり。故に知る虚空は是れ色性なるには非ず。色は此等の因緣を以ては知るべからざるなり。又色は是れ有對なるに、虚空は無對なり、又火等を以て能く盡く色を滅するも、而も虚空を滅すること能はず。若し虚空にして滅せば更に名づけて何れの法とか爲さん。
問曰　若し色の生ずることあるときは則ち虚空は滅す、墻壁を起すときは、是の中には則ち復虚空有ること無きが如し。
答曰　此の中にて色が生ずれば、是の色は竟に滅する所無し。所以は何、色の無きを虚空と名づくれば、法として更に無とすべからざるものなければなり。是の故に色は滅せずして空なり。又汝

[一四]　此點より此論は無爲法中に虚空を認め居るものなるを知る。擇滅無爲は當然認めらるゝものなり。されど非擇滅無爲が認められ居るや否やは明確ならず。四緣を說くより推究すれば緣欠不生を說くにけ相違なきも、そこに果して無爲を認むるや否や。

復有る人は言く、一切の色相とは、卽ち是れ眼識の所依止の相、有對の相とは、是れ耳鼻舌身識の所依止の相、異相とは、是れ意識の所依止の相なりと。此の事は然らず。所以は何、若し有對の相を滅すと言はゞ、則ち已に色を攝するに、何が故に別に說かんや。又色相對相を離れて、別に意識の所依止の色有ること無し。是の故に應に別に異相を說くべからず、應に先に說きしが如くなるべし。無邊虛空處に入るとは、行者が色相の逼閙の疲倦の故に、無邊の虛空を觀じ、內に眼鼻咽喉等の虛空の相を取り、外に井穴門向樹間等の虛空の相を取り、又身が死して之を塚間に棄て、火が燒滅し盡し、若しくは鳥[三]獸が食噉し、虫が中より出づと觀ずるを以ての故に、此の身には先より虛空ありと知るなり。

問曰 是の虛空定は、何を以て緣と爲すや。

答曰 初めは虛空を緣じ、成じ已れば、自ら諸陰を緣じ、亦他の諸陰をも緣ず、所以は何、悲を以て首と爲して是くの如きの念を作せばなり、衆生は愍むべし、色相の爲に惱まさると。

問曰 此の定は、何れの衆生緣なりや。

答曰 一切の衆生を緣ずるなり。

問曰 是の行者は色相を離れたるに、云何ぞ能く欲色の衆生を緣ずるや。

答曰 是の行者は能く色を緣ずるも、但色の中に於ては心は通暢せず樂まず著せざるのみ。經の中にて說くが如し、若し聖人にして深く見て五欲を憶念せば、中に於て樂まず通ぜず著せず、沒して退還することを畏るゝこと、筋羽を燒くが如くなるも、若し泥洹を念ぜば、心は則ち通暢すと。此の人も是くの如くに亦能く色を緣ずるも、但貪樂せざるのみ。又行者は色相を離ると雖も、虛空邊を以て能く四禪を緣ずるが如く、無色定の能く無漏色を緣ずるが如く、是の中にては非煩惱處を過ぐること無し。故に餘も亦應に爾るべし。

【三】麗本は狩に作る。今は三本宮本の獸に作るに從ふ。

答曰　息は身心に依ればなり。何を以て之を知るや。心の細なる時に隨ひて、喘息も亦細なればなり。四禪の心は不動なり、故に出入息は滅す。又人の疲極せるに若し重きを擔うて山に上らば、則ち喘息は麁にして、息む時は則ち細なるが如く、四禪も亦爾り、動相無きを以て心は止息す、故に出入息は滅す。有る人は言く、行者が四禪の四大を得るが故に、身の諸の毛孔は閉づ、是の故に息が滅すと。此の事は然らず。所以は何、飮食の汁は流れて身中に充徧す[二]、若し諸の毛孔にして閉ぢたるときは則ち應に行ずべからざるに而も實には不可なり。故に知る四禪の心力が能く息をして滅せしむるなり。

問曰　四禪の中には樂受なし、是の中にては云何が愛使あらんや。經の中にては樂受の中の愛使を說く。

答曰　是の中には細の樂受あり、但麁の樂を斷ずるが故に不苦不樂と說くのみ、風の燈を動かすが如し、若し密室に置かば則ち動ぜずと名づく、是の中にても必ず微風有り、然も但麁風無きが故に不動と名づくるのみ四禪も亦爾り、必ず細の樂は有るも、麁の苦樂を斷ずるが故に、不苦不樂と名づくるなり。

無邊[三]虛空處品　第一百六十九

一切の色相を過ぎ有對の相を滅して一切の異相を念ぜずむば、無邊虛空處に入る。色相とは色香味觸の相に名づく。行者は何を以ての故に過ぐや。謂く、此の色の中には對あり、礙あり及び諸の異相あり、謂く鐘鼓等なり。此の諸相は是れ種々の煩惱と種々の業と種々の苦との因なり、此れを以ての故に過ぐるなり。若し一切の色相を過ぐれば、則ち有對の相は滅す、有對の相にして滅すれば、則ち異相無し。是の中にては略するが故に、此れを過ぐるが故に、此れが滅すと說かざるのみ。

【二】印度の醫學にてかく說くならむ。

【三】麗本は虛を缺くも、三本宮本に從つて入るるを可とせむ。本文にかくあればなり。

とありて此れは是れ樂なりと謂ふなり。又此の禪の中にては念も亦清淨なり、所以は何、三禪の中にては樂に著するを以ての故に憶念が散亂なるも、第四禪の中に至れば、樂を貪することが斷ずるが故に憶念は清淨なればなり。

問曰 何が故に四禪にては安慧を說かざるや。

答曰 若し憶念が清淨なりと說かば、當に知るべし、已に安慧を說けるなり、此の二法は相離れざるを以ての故なり。又此れは是れ禪定道にして智慧道に非ず、安慧は是れ慧なり、故に說かず。第三禪の後分の中にても亦安慧を說かず、但捨を行ずる憶念の樂を說くのみにして、捨を行ず念と慧との樂を說かず。又此の憶念は能く禪定を成ず、若し人にして定が未だ成ぜざる時には要ず取想の憶念を以て能く成ず、所以に獨(ひとり)說く。又上功德を得て下功德を捨つれば、思惟を須ひざるが故に慧を說かず。

問曰 不苦不樂受は是れ無明の分なれば、四禪の中にては多く慧と相違す、故に慧を說かざるなり。

答曰 若し然らば、不苦不樂受は應に無漏と爲すべからず、樂受は是れ貪の分なるが故に亦無漏無し。

問曰 三禪の中にては自地に違ふ過の爲の故に安慧を說き、地地に違ふ過の爲の故に憶念を說くも、四禪には自地に是くの如きの過無し、故に安慧を說かざるなり。

答曰 四禪にも亦貪等の過あり、故に應に安慧を說くべし。是の中の貪の過は細微にして覺り難し、故に必ず應當に說くべし。餘地の中にても亦應に說くべきに而も說かず、故に知る、應に我(わが)答の如くなるべし。

問曰 何が故に四禪にては出入息が滅するや。

答曰　我は四禪にも亦受の樂ありと說くも、但第三禪の樂を滅するが爲の故に、是くの如く說くなり。

問曰　若し俱に是れ受の樂ならば、何が故に初禪二禪にては喜と名づけ、三禪にては樂と名づくるや。

答曰　想分別を以ての故に喜と名づけ、想分別無きが故に樂と名づく、行者は第三禪に於ては心轉攝するが故に想分別無し、故に名づけて樂となす。又三禪を得れば寂滅は轉深し、故に名づけて樂と爲す、動求心を說いて聖人は苦と名づくが如し、動は分別に名づくる言なれば、此れは是れ樂なり。

四禪品　第一百六十八

苦と樂とを斷除し、先に憂と喜とを滅し、不苦不樂にして捨と念と清淨となりて〔一〇〕第四禪に入る。

問曰　若し先に苦を斷ぜしに、何が故に此の中に於て說くや。若し必ず說かんと欲せば、應に先に斷ぜしと言ふべし、先に憂と喜とを滅すといふが如し。

答曰　四禪は不動に名づく、此の不動の相を成ぜんと欲するが故に四受無きを說く。所以は何、動は發動に名づく、行者は苦樂の爲に侵されたるときは、則ち心は動ず、心が動ずれば則ち貪恚を生ず、故に苦樂を斷じて心をして不動ならしむるなり。

問曰　若し第四禪は利益を受くること最も大ならば、何が故に名づけて樂と爲さざるや。

答曰　是の受が寂滅するが故に不苦不樂と說く。心念に隨うて此れは是れ樂なりと知るときは則ち名づけて樂と爲す。第四禪を得れば三禪の樂を離るゝが故に以て樂と爲すにはあらず。捨と念と清淨となりとは此の中にては捨が清淨なり、求むること無きを以ての故なり。三禪にては求むるこ

【一〇】第四禪を捨念清淨といふ。

さる、故に喜無き定の中に於て樂心を生ずるなり。

問曰　熱の苦あるに隨つて則ち冷を以て樂と爲すも、若し熱を離るることを得ば、冷は則ち樂に非ず。行者にして若し以て喜を離るれば、何が故に三禪の中に於て、猶樂心を生ずるや。

答曰　樂を生ずるは二種なり、或は苦の在るに由る、熱の苦有らば則ち冷を以て樂と爲すが如し。或は苦を離るゝに由る、怨憎を離るゝが如し。佛が[八]拘舍彌の比丘を離れて、我は安樂なりと云へるが如く、是の事も亦爾り、動想を離るゝことを得るが故に[九]三禪に於て樂を生ず、五欲を離るゝが故に初禪を以て樂と爲すが如し。捨を行ずとは喜を離るゝを以ての故に心は寂滅を得るなり、行者は先に深く喜心に著して多く散亂せるも、今離るゝことを得るが故に其の心は寂滅なり、故に捨を行ずと說く。

憶念あり安慧にしてとは喜の過の中に於ては此の二は常に備はり、喜が來りて破壞せしめざるなり。又憶念とは善を憶念し、安慧とは喜の中の過を見るなり。身にて樂を受くとは喜を離れて捨を行ずるなり、捨は卽ち是れ樂なり、動求無きを以ての故なり。是の樂は想分別より生ぜざるが故に、身にて樂を受くと名づく。聖人も亦說き亦捨すとは說くは世人に隨ふに名づく、故に說いて名づけて樂と爲すなり、非想非非想處の心は貪著せざるが故に捨なりと說くが如し。憶念ありて樂を行ずとは是の人は捨を知る、謂く喜の過を見て厭離を生ずるが故に妙捨を得るなり。又憶念も亦妙なり、謂く能く喜の過を念ずればなり。此の中にても亦應に安慧を說くべきも、念と同じく行ずるが故に說かず。樂とは是れ第一樂なり。是の故に聖人も亦說き亦捨するなり。

問曰　三禪の中にては受の樂あるに、何が故に捨の樂を說くや。

答曰　我(わが)此の論の中にては受を離れて別に捨の樂ありとは說かず、受の樂は卽ち是れ捨の樂なり。

問曰　若し爾らば、第四禪の中にても應に、受の樂を說くべし、捨あるを以ての故なり。

【八】拘舍彌はkosambiの音譯にて、憍賞彌は音譯さるる町の名なり。ここの比丘が諍をなしたることありて、佛は之を靜めむが爲に說法したることあり。

【九】麗本は二に作る。三の方可なれば三本宮本に從ふ。

答曰　此の四の行は皆是れ苦の異名なり、故に無漏と名づく。

問曰　學人にも亦無漏の喜無きや。

答曰　若し道に在る心ならば爾の時には喜無し。俗にあるときは則ち有り、無學には常に無し。

問曰　經の中にて說く、喜樂の心を以て能く四諦を得と。云何ぞ無漏の喜無しと言はむや。

答曰　我心無きを卽ち名づけて樂と爲す。行者は無我心を得て顚倒を破壞し眞實を知るが故に、心は則ち快樂となるものにして、別に喜有ること無し。又此の經にては、喜を以て能く實智を得ずと明す、故に是くの如く說くなり。

三禪品[五]　第一百六十七

喜を離れて捨を行じ憶念あり安慧にして、身にて樂を受け、此の樂は聖人も亦說き亦[六]捨す、憶念ありて、樂を行じて[七]第三禪に入る。

問曰　何が故に喜を離るゝや。

答曰　行者は喜の能く漂ふを見るが故に離る。又此の喜は想分別より生ずれば、喜は動轉の相にして初めより已來(このかた)苦が常に隨逐す、此れを以ての故に離る。又行者は寂滅の三禪を得るが故に二禪を捨つ。又喜より生ずる樂は淺きも喜を離れて生ずる樂は深し、人は妻子等に於ては常には喜ぶこと能はざるが如し、喜は想分別より生ずるを以ての故なり。樂は想分別より生ぜざるが故に能く常に有り、行者も亦、爾り、喜が初めて來るときは則ち以て樂と爲すも後には則ち厭離す。

問曰　若し人にして熱の爲に惱まさるときは、則ち冷を以て樂と爲す、行者は何れの苦の爲に惱まさるゝが故に三禪を以て樂と爲すや。

答曰　二禪の中の喜は是れ動相を發すものにして棘棘なるが如くなれば行者は此の喜の爲に惱ま

【五】三本宮本はここより第十六卷とす。

【六】この讀方にては通常の第三禪の說とは異るも、下にかく讀む如くに解釋せられ居れば、今はそれに從ふべきなり。

【七】第三禪を離喜妙樂といふ。

に名づけ、若し覺の爲に不淨等の法を行ぜば、皆覺分と名づくればなり。汝は亦應に無漏の猗有るべからずと說くも、先に喜を生じ已つて後に無漏を得るなり、謂く如實知見なり。又一切の猗は皆喜に因りて生ずるには非ず、[三]三禪已上には喜無きも亦猗有るが如し。又我等は智を離れて別に受法有りとは說かざれば、此の無漏智が初めより來心に在るを說いて名づけて樂と爲す、是の故に無漏の樂あり、但喜に因りて生ずるにはあらず。又經の中にて說く、身心の麁重を除くを猗と名づくと。無漏を得たる時は身心は調適なり、是の故に無漏の猗あり。又佛は常に捨心を行ず、是の故に佛に喜ありと言ふも、此の事は應に明にすべし。又若し人に我我所無きときは、則ち喜無し。若し羅漢にして喜有らば亦應に憂も有るべきに、而も實には憂無し。故に知る喜無し。

問曰 初二禪には喜有りて憂無きが如く、羅漢も亦爾り。喜有りて憂無きに何の咎有らんや。

答曰 諸の禪定の中には憂あり、根の義の中に說きしが如し。憂と喜とは乃し有頂に至り、苦と樂とは身に隨ひて乃し四禪に至る。又三禪の中に趣けば、喜を離れ捨を行ずと說く。故に知る無漏の喜無し。若し有らば、云何ぞが離と言はんや。又無漏心には應に喜あるべからず、喜は皆假名の想分別に依りて有るものなればなり。

問曰 若し爾らば、初二禪の中には無漏の受は無からん。經の中にて說く、初禪二禪には但喜有るのみにして未だ心の樂有らずと。今、喜も亦無くんば、復何の有る所ぞ。

答曰 此の喜と離の喜と等にては無漏禪を說かず。更に經に無漏禪を說くあり。所謂、行者は何の相と何の緣とにて初禪に入るも、是の相と是の緣とを念ぜず、但初禪の中の所有の色受想行識は病の如く癰の如く、乃至、無我なりと觀ずるのみ。

問曰 病の如く癰の如く箭の如く痛惱なりとの此の[四]四は是れ世間の行にして無漏なるには非ず。是の故に汝が此の經を以て證と爲すも、無漏を成ずること能はざるなり。

【三】三本宮本は二に作る。三の方正し。二禪には喜あるも、三禪にはなければなり。

【四】七三昧品第一百六十三の初めを見るべし。これ八種過患の前四なり。

爾り。又行者は初禪の中に於ては定は未だ具足せずして、常に覺觀の爲に亂さるゝが故に、二禪にて諸の覺觀を滅すと說くなり。內は淨となりとは二禪は心を攝すること深きが故に散亂は常に內に入ることを得ずして亂心が無きが故に內は淨となると名づく。是の二禪の體は一心なり。無覺無觀とは一心の名にして、心は一道を行ずれば亦名づけて禪とも爲す、卽ち是れ內は淨となるなり。此の深定を得るが故に覺觀生ぜざること、初禪の心數が覺觀に在るが如くならず、故に無覺無觀と說く。定より生ずる喜樂とは初禪は離を以ての故に喜を得るも、此の中にては定が成就するが故に喜を得るなり、故に定より生ずと曰ふ。

問曰　初禪の中の喜と二禪の中の喜とは何の差別ありや。

答曰　初禪は憂を滅するを以ての故に喜なるも、二禪は苦を滅するが故に喜なり。又初禪の中の喜は不淨喜に違ふが故に得られ、二禪の中の喜は淨喜に違ふが故に得らる。俱に愛の因緣を以ての故に喜なりと雖も而も初禪の喜は弱し。

問曰　是くの如きの義は有漏と爲すや無漏と爲すや。

答曰　皆是れ有漏なり。我心有るとき則ち喜あり、若し無漏心なるときは則ち我無く、我無きが故に喜も無ければなり。

問曰　無漏にして喜無きこと、是の事は然らず。佛は七覺の中にて喜覺分を說けばなり。覺分は但是れ無漏のみ。故に知る無漏の喜あり。又經の中にて說く、心の喜なる者は身の猗を得、身が猗なるときは則ち樂を受くと。若し無漏の喜無くんば、亦應に無漏の猗樂も無かるべければなり。又佛は衆僧の深く善法を行ずるを見るときは則ち歡喜を生ず。故に知る無漏の喜あり。

答曰　汝は七覺を以て無漏の喜を證するも、是の事は然らず。覺分は二種なり、有漏と無漏となり。經の中にて說くが如し、行者は法を聽く時に能く五蓋を斷じ、七覺分を修すと。又覺を無覺智

卷の第十三[一]

二禪品　第一百六十六

諸の覺觀を滅して內は淨となり一心となりて無覺無觀、定より生ずる喜樂ある[二]第二禪に入る。

問曰　若し第二禪にて覺觀を滅すと說かば、當さに知るべし初禪には必ず覺觀あり、二禪の中に喜あるが故に、三禪にては喜を滅すと說くが如し。

答曰　初禪の中には苦根無きも亦苦根を說くが如く、第二禪にては滅する此れも亦是くの如し。

問曰　初禪の中にては苦根無しと雖も而も諸識はあり、諸識は是れ苦根の所依なるが故に、初禪にては苦根滅せずと說くなり。

答曰　初禪の中には諸識ありと雖も、苦根の所依なるには非ず。

問曰　五識性は是れ苦根の所依なり。性が同じきを以ての故に、初禪に苦ありと說くなり。

答曰　若し爾らば、憂根も意識性より生ずるが故に、應に一切處に有るべし。

問曰　今、何が故に二禪の中にては苦根は滅すと說くや。

答曰　初禪は不定心に近く、不定心は能く欲界繫の諸識を生じ、中に於て苦根を生ず、是の故に初禪にては苦が滅すとは說かざるなり。

問曰　若し爾らば、初禪は亦憂根にも近し、是の憂根も亦應に若しくは第二にてか第三禪にてか滅すと說くべきなり。

答曰　欲に依る憂根は欲に依る喜より生ずれば、淨喜を得れば、則ち不淨喜は滅す。是の故に初禪の中には憂根無し。不定に依りて苦根を生ずるなればなり。初禪は散心に近きが故に名づけて滅とは爲さず。又三禪には苦無きも、亦苦樂を斷ずるが故に第四禪に入ると說くが如し、是の事も亦

【一】三本宮本はここにては分卷せず。

【二】第二禪を說くには常にかく說く。第二禪は定生喜樂といふ。定生は定より生ぜるの意。

づく、[七五]經の中に說くが如し、諸行次第に滅す、初禪に入れば語言が滅し、乃至滅盡定に入れば諸の想受が滅するが如しと。是の故に別の猗法無し。若し初禪が覺觀と相應すと說かば、是れも亦然らず、所以は何、經の中にて說く、行者にして若し初禪に入らば、則ち語言が滅すと。覺觀は是れ語言の因なり、云何が語言の因ありて而も語言が滅せんや。若し覺觀は猶ほ在るも但語言のみが滅すと謂はゞ、若し人が欲界心に在りて語言せざる時の若きも亦名づけて滅となさむ。

問曰　若し初禪の中には覺觀無くむば、應に名づけて聖默然と爲すべきに而も佛は但二禪のみを聖默然と爲すと說きて初禪をば說かず。故に知る、初禪には應に覺觀あるべし。

答曰　覺觀に近きを以ての故に默然と說かざるものにして、覺觀が相應するが故に說かざるには非ざるなり。又經の中にて說く、初禪には音聲刺あるが故に默然と說かずと。

問曰　初禪は何が故に音聲を以て刺と爲すや。

答曰　初禪は定心に住するも弱きこと花上の水の如くなればなり。第二禪等の定心に住して強きこと漆を木に漆するが如し。又觸等をも亦名づけて初禪刺と爲す、觸は能く初禪を起さしむるを以ての故なり。二禪等は爾らず。所以は何、初禪の中にては諸識は滅せざるを以ての故なり、第二禪等にては五識は滅するが故なり。

[七五]　八解脫品第一百六十三に此經の言詳しく引用せらる。

べし。

答曰　五欲を名づけて近とは爲さず、此の行者の心は已に離れたるが故なり。又初禪の次第には欲心を起さず、又五欲の住せざるを初禪枝と爲す、枝は名づけて因と爲す、因は是れ分なり、聖道の分は集會して具はる等の如し、覺觀も亦爾り、是れ初禪の因なり。若し行者の定心にして緣の中に於て退し、還つて定相を取り心を緣に攝して本相を憶念せば、是れを覺觀と名づく。故に知る覺觀は是れ初禪の因なり。第二禪の中にては定心は已に成ず、是の故に覺觀を以て因とは爲さず。亦二禪の次第には覺觀を生ぜず、若し汝にして初禪は覺觀と倶なりと說かば、是れも亦然らず、初禪より起ち次に覺觀を生じて、覺觀[七四]に近きを以ての故に名づけて倶と爲す、弟子と倶に行くといふが如く、少しく相遠しと雖も亦名づけて倶と爲す。又此の地の中には生ずる因緣あり、故に覺觀ありと名づく、鬼病の人の發せざる時と雖も亦名づけて病と爲すが如し、是の人は鬼の爲に汚されたれば、緣あらば還發することあるが故に名づけて病と爲すなり。又樂受は卽ち是れ喜なるも、但差別して說くのみ亦猗より別ちて說いて樂と爲す、經の中にて、身猗を得るときは樂を受くと說くが如し。

問曰　若し爾らば、初禪は何が故に五枝なりと說くや。

答曰　時に隨ひて五と說くなり。七覺意が時節を得るが故に十四覺意と名づけらるゝ如し。是の中に身猗心猗ありと說くも、而も實には身猗無し、但心樂のみなるが故に身も亦樂を受く。喜も亦是くの如し。初めより來身に在るを名づけて喜と爲す。樂は喜の初得の相なるが故に名づけて樂と爲し、後には但喜とのみ名づく、時が異るを以ての故なり。又別の猗法無し、但喜の生ずる時に身心に麁重法無くして、柔輭調適するが故に名づけて猗と曰ふのみ。病の四大が滅して無病の四大が生ずれば、是の人を樂と名づくるが如く、猗も亦是くの如し。又除滅の中に於ても亦說いて猗と名

【七四】麗本は近を離に作り、三本宮本は近に作る。近の方可なるべきこと次の例よりも知らる。

の諸物は、名づけて欲と爲さずと說くが如し。何を以てか之を知る。精進あるものにも色等は猶在るも而も能く欲を斷ずればなり。又經の中にて說く、色等の是の分を名づけて欲とは爲さず、是の中の貪心を則ち名づけて欲と爲すと。若し貪心を生ずるときは卽ち諸欲を求む、欲を求むる因緣の故に、貪恚鞭杖殺害の惡法有りて隨逐す、[七一]大因經の中にて說くが如し、愛に因りて求を生ず等と。故に知る貪欲を離るゝ故に名づけて離欲と爲す。有る人は言く、色等の五欲を離るゝを名づけて離欲と爲すと。惡不善の法を離るゝを離五蓋と名づく。初禪は散亂の心に近きが故に有覺と名づく。又此の行者は定力未だ成ぜずして、散亂の心が發るが故に有覺と名づく。經の中に說くが如し、我は有覺有觀の行を行ずと。當に知るべし佛は散心を說いて覺と爲す。是の覺が漸く微となり心を攝すること轉深きときは則ち名づけて觀と爲す。定の成就するに隨ひて心は多く散せざれば、是の時を觀と名づく。是の觀は行者に隨逐して禪の中間に至る。若し覺觀を離れて喜を得れば、[七二]離生喜と名づけ。是の喜が初めて能く身を利益することを得るが故に、名づけて樂と爲す。是の覺と觀と喜とを離れて一緣の中に住せば、是れを名づけて禪と爲す。是の禪は覺觀の爲に亂さるゝが故に異身の果報を得るも、下中上が差別せるを以ての故に、[七三]梵衆天と梵輔天と大梵天と有り。

問曰　若し覺と觀と喜とを離るるを初禪と名づくれば、則ち復五枝を以て初禪とは爲さず。若し覺觀を離るれば、第二禪とは何の差別かあらん。又經の中にて說く、初禪は有覺有觀にして、猗と樂とは異り、喜も亦異ると。若し喜が卽ち是れ樂なるときは則ち七覺意の中にては應に別に猗と覺と意とを說くべからざるなり。

答曰　汝は初禪に五枝無しと言ふも、是の事は然らず。五枝が是れ初禪の性なりとは說かずして、初禪の近地に此の覺觀あるが故に名づけて枝と爲すなり。

問曰　若し近地に法數の枝と爲るものあらば、初禪も亦五欲に近ければ則ち應に說いて枝となす

【七一】麗本は火因經に作る。非なり。三本宮本の大を取る。此經の同文が無相應品第六十五と思品第八十四と貪相品第一百二十二とに存す。又想陰品第七十七、一切緣品第一百九十一にも此經あり。

【七二】離より生ぜる喜の意なり。離に潰閙を離れて獨居に閑居するにいふ。

【七三】梵衆天、梵輔天、大梵天は色界の初禪天に於ける天名にして初禪天は此三天より成る。但し有部は大梵天を梵輔天の中に入れて初禪天は二天なりとす。

見る、第六は黄を見、第七は赤を見、第八は白を見るなり。行者は是くの如き等の無量の諸色を見る。所以は何、但此の青等の四色有るのみに非ざるも、略して說くを以ての故に八勝處あるなり。行者にして若し能く空を以て諸色を確壞すれば、爾の時を名づけて勝處と爲す。

問曰　誰が能く之を得るや。

答曰　是れ佛弟子なり、餘人には非ず。

問曰　是の八勝處は何れの地の中に在りや。

答曰　欲色界に在り。

問曰　有漏と爲すや、無漏と爲すや。

答曰　先は是れ有漏なるも、空を以て色を壞せば則ち無漏と名づく。

問曰　何が故に此の法を獨勝處と名づくるや。

答曰　此れは是れ行者に貪著せらるゝ處なり。是の故に佛は弟子の爲に說いて勝處と名づく、勝が此れの緣なるを示すが故なり。

[六九] 初禪品　第一百六十五

九次第定は四禪と四無色定及び滅盡定となり。初禪とは、[七〇] 經の中にて說くが如し、行者は諸の欲と諸の惡不善の法とより離れ、有覺有觀にして、離より生ぜる喜樂ある初禪に入ると。

問曰　應に但初禪の相のみを說くべし。何が故に乃ち諸欲を離ると說くや。

答曰　或る人は謗じて言く、世間には能く欲を離るゝ者有ること無し、世人は皆五欲の中に處するを以ての故なりと。人として眼が色を見ず耳が聲を聞かず鼻が香を嗅がず、舌が味を知らず、身が觸を覺せざること無きが故に離欲と說くなり。欲は欲心に名づく、是れ色等なるには非ず。色等

【六九】三本宮本には九次第初禪品とあり。以下七次第定を順次に述ぶる爲なるも、九次第の三字はなきを可とす。若しありと見るも、九次第初禪品とあるべきなり。初の一字を脫せるならむ。

【七〇】何れの經にても初禪を說くときはかく說くが例なり。初禪は特質を取つて離生喜樂といふ。

を取りて此の色の滅を證すれば、是れを空性と名づく。外道は無邊虚空處に因りて色を離るゝことを得、乃至非想非非想處に因りて無所有處を離るゝなり。諸陰に因りて滅性ありとは行者の所有の思量と所有の作起とが皆滅するを妙と爲し、是れを諸陰に因りて滅性有りと名づくるなり。

問曰　是の諸性は何れの定に依りて得るや。

答曰　經の中に說く、明性乃至非想非非想性は皆自行を以て定に入るが故に得と。謂く、行が有爲の道を緣ずるが故に得るなり、所以は何、本初め色を緣ずる初智を是れを明性と名づけ、第二性も亦色を取るも取り已つて分別して空ぜしむ、是くの如く乃至非想非非想性も滅性も滅性なる一切の有爲の法の空に入るが故に得、此の中にては諸の有爲を滅盡せるが故なり。故に知る此の中にて滅を名づけて漏盡泥洹と爲すと說く。

問曰　此の諸の解脫は何れの地の中に有りや。

答曰　行者は色を破壞せんと欲して、或は欲界繫の定に依り、或は色界繫の定に依りて、能く色空を得れば、一切地の中にて能く心空を得。

問曰　此の解脫は幾くか有漏にして、幾くか無漏なりや。

答曰　是れ空性なるが故に一切は無漏なり。

[65]八勝[66]處品　第一百六十四

初めの勝處は、內に色想ありて外色の少なるを見、若しくは好なるも若しくは醜なるも、是の諸色に於て勝知勝見するが故に勝處と名づけ、第二は內に色想ありて外色の多なるを見る、第三は內は無色想にして外色の少なるを見る、第四は內は無色想にして外色の多なるを見る、第五は內は無色想にして外の青色青形青光にして、[67]憂摩伽花の如く、眞青に染まれる[68]波羅㮈衣の如くなるを

【六五】　八勝處、この說は飜譯名義大集にあるものとは少しく異る。ここにては前の八解脫と同じく三界の貪愛を斷ずる爲めの觀法なり。一、內色想見外色少、內色の不淨を觀じ外色の少しの淨を觀ず。二、內色想見外色多、多くの外色の淨を觀ず。三、內無色想見外色少、觀道漸く進み、內心に色想存せず、少分の外色を觀ず。四、內無色想見外色多、前者より更に進み、多分の外色を觀ず。五、見青、六見黃、七見赤、八見白、以上の四は內心に色想なく只外色の青黃赤白色に於て愛着を起さざらしむる觀法なり。

【六六】　麗本は處を缺くも、三本宮本の如く、あるを可とす。

【六七】　憂摩伽、Umaka の音譯。

【六八】　波羅㮈、Vāraṇasī の音譯。市の名なるも、そこより產出せらるる白布を指すが故に、原文にては Vārāṇaseyn として波羅㮈より出づるといふ形容詞なり。

答曰　是の人には定あるも而も證すること能はずんば、更に[六三]如電三昧あり。是の三昧に因りて煩惱を盡すことを得。經の中にて說くが如し、我は比丘が衣を取らんと欲する時には煩惱あるも、衣を取り已れば卽ち煩惱無し、是くの如き等と見ると。所以は何、心は電の如く三昧は金剛の如くにして、眞智は能く煩惱を破すればなり。又此の義は佛の第三力の中にて說きたり、所謂、初禪と解脫と三昧と入と垢淨との差別を實の如くに知るなり。中に於て、禪とは四禪に名づく。有る人は言く、四禪と四無色定とを皆名づけて禪と爲すと。解脫とは八解脫に名づけ、三昧とは一念の中の如電三昧に名づけ、入とは禪解脫三昧の中にて自在力を得るに名づく。舍利弗の說くが如し、我は七覺の中に於て能く自在に出入すと。故に知る慧解脫阿羅漢には諸の禪定あり、但入ること能はざるも、深く修習するが故に能く自在に入るなり。

問曰　阿羅漢には何が故に深くは諸の禪定を修習せざる者ありや。

答曰　是の人は道を得て所作已に辨じ、樂んで捨心を行ずるが故に善習せざるなり。若し捨心無くむば則ち定に入ること難きこと無し。經の中にて說くが如し、行者にして善く四如意足を修すれば、能く雪山を吹いて塵末と爲らしむ、何に況んや死無明をやと。故に知る八解脫の中にて漏の盡滅を說く、定に入りて滅するには非ず。又經の中にて說く、明性あり空性あり、[六四]無邊虛空性あり無邊識性あり無所有性あり非想非非想性あり滅生あり、闇に因るが故に明性あり、不空に因るが故に空性あり、色に因るが故に無邊虛空性あり、無邊虛空性に因るが故に無邊識性あり、無邊識に因るが故に無所有性あり、無所有に因るが故に非想非非想性あり、五陰に因るが故に滅性ありと。若し五陰の假名相を破壞すること能はずむば、是れを名づけて闇を爲し、若し能く五陰の假名を破壞せば、卽ち明性と名づく。佛の一比丘に教ふるが如し、汝諸行を空ずる中に於て當に諸行の空を觀じて自ら心を調伏すべしと。人が燈を持して空室の中に入れば見る所は皆空なるが如くに、行者が色

【六三】　如電三昧は次に說明せらる。

【六四】　これ空無邊性、次は識無邊性といふと同じ。

問曰　學人は實には八解脫を得ざるや。

答曰　經の中にては、學人は九次[五九]第定を得とは說くも滅盡を得とは說かず。行者にして若し滅盡を得て而も諸の禪定に入ること能はずんば、慧解脫と名づけ、若し能く諸の禪定に入りて而も滅盡を得ずむば、是れを身證と名づけ、若し二を倶に得れば、倶解脫と名づく。所以は何、諸漏は是れ一分の障にして、禪定の法は是れ一分の得なれば、二分を解脫せるを倶解脫と名づくればなり。

問曰　諸の次第の中の滅と諸の解脫の中の滅とは異ること有りや。

答曰　名が同じきも而も義は異る。次第の中の滅は心心數の滅に名づけ、解脫の中の滅は諸の煩惱の滅に名づくればなり。[六〇]經の中にて說くが如し、諸行は次第の滅なり、謂く初禪に入れば語言が滅し、二禪に入れば覺觀が滅し、三禪に入れば喜が滅し、四禪に入れば樂が滅し、[六一]空處に入れば色相が滅し、[六二]識處に入れば空相が滅し、無所有處に入れば識相が滅し、非想非非想處に入れば無所有想が滅し、滅盡定に入れば諸の想受が滅すと。此の諸の滅よりも更に勝る滅あり、所謂行者が貪恚癡の心に於て厭うて解脫を得ることとなり。

問曰　云何が次第の中にては心心數が滅し解脫の中にては諸の煩惱が滅すと知るや。

答曰　滅の名は同じと雖も義は應に異あるべし。次第の中にては想受の滅を說くも、解脫の中にては無明觸受の滅を說く。所以は何、假名より受を生ずれば、假名を破すれば則ち滅するも、次第の中にては爾らざればなり。諸經の中にて是くの如く差別す。若し直に行者が滅盡を得るときは一切の事は訖ると說くは當に知るべし泥洹を證する時に諸の煩惱の滅すと爲すものなり、心心數の滅をば說かず。

問曰　若し八解脫にして是れ煩惱を滅するの法ならば、則ち一切の阿羅漢は悉く皆應に得べきや。

答曰　皆得。但入ること能はざるのみ。若し禪定を得れば、則ち能く入ることを得。

問曰　行者にして若し禪定無くんば、云何が能く身心の空なるを得、及び諸の煩惱を盡さんや。

【五九】四禪四無色定滅盡定なり。ここの滅盡は滅盡品第一百五十四にいふを指す理なり。この滅盡を得ればもはや學人にあらずして已に無學なり。
【六〇】初禪品第一百六十五に此經の同一文引用せらる。
【六一】空無邊處なり。
【六二】識無邊處なり。

中に於て深く厭離を生ぜば、餘は但識有るのみ、と。當に知るべし、是の中の四の解脱は諸識を壞裂するなり。第八解脱にて一切は滅盡す、所以は何、若し色を滅し心を滅せば則ち有爲は都べて滅すればなり。是れを阿羅漢果と名づく。是くの如きの次第を以て乃ち滅盡を得るを是れを八解脱と名づく。有る人は言く、初二の解脱は是れ不淨なり、第三の解脱を淨と名づくと。此の事は然らず。所以は何、是れを解脱と名づくるに、不淨觀を以て而も解脱を得ること有ること無ければなり。淨觀も亦解脱なし、但空觀を以てのみ能く解脱を得。又外道は能く淨不淨觀を得るも而も解脱を得とは名づけず。

問曰　外道も亦能く色相を壞裂す、此の事は云何。

答曰　外道は[五五]信解觀を以て色相を壞裂するのみ空觀には非ず。所以は何、信解觀を用つて、身は已に死して之を塚間に棄て[五六]蟲獸が食す等と見るが如くなればなり。

問曰　外道は色を離れて無色定を得れば、應に無色解脱あるべし。

答曰　外道に無色定有りと雖も貪著するを以ての故に解脱とは名づけず。聖人は無色定に因りて能く四陰病等の八事を觀ずるが故に解脱と名づくるなり。

問曰　汝が[五七]滅定は是れ阿羅漢果なりと説くは此の事は然らず。所以は何、學人も亦八解脱を得と名づくればなり。汝は滅定を名づけて漏盡と爲すと説くも、然らば則ち學人も應に漏盡を得べし。

答曰　經の中にては總相にて滅を説き、分別して是れ心の滅なり是れ煩惱の滅なりとは言はず。經の中に説くが如し。二種の滅あり、一には滅、二には次第滅なり、二種の泥洹あり、一には現在泥洹、二には究竟泥洹なり、[五八]亦二種の安穩をも説く、一には安穩、二には第一安穩なり、安穩を得るものも亦二種なり、一には安穩を得、二には第一安穩を得と。是の故に學人の所得は眞實の滅には非ず。又經の中にて説く、若し比丘にして能く滅定に入らば、一切の事は訖ると。若し滅定にして阿羅漢果に非ずんば、即ち應に一切の事は訖るとは説くべからず。

及び根假名品第四十五にも引用せらる。

[五五]　十一切處品第一百七十二を見るべし。

[五六]　麗本は獸を狩に作る。後の無邊虚空處品第一百六十九にも此例あり。今は三本宮本の獸を取る。

[五七]　滅盡定なり。

[五八]　後三想品第一百八十の有餘泥洹無餘泥洹に參照すべし。

答曰　然らず。若し未到地に[四九]依あらば、是れ則ち過あり。若し能く未到地を得ば、何が故に初禪に入らざらむや。是の故に然らず。

問曰　非想非非想處にては、何が故に依を說かざるや。

答曰　彼の中にては了ならずして、定多く慧少きが故に依ありとは說かず。七想定は則ち七依なればなり。

問曰　佛は何が故に七依を說いて七想定と名づくるや。

答曰　外道は眞智無きが故に但想に依止すれば、一切の依止は皆想の爲に汚され、解脫を爲さず、故に想定と名づく。聖人は能く想を破壞し、但此の定のみに依りて直に漏盡を取る、故に名づけて依と爲す。行者が此の諸法は病の如く癰の如し等と觀ずと說くが如し。非想非非想處は亦想が了ならざるを以ての故に想定とは說かざるなり。

八解脫品　第一百六十三

論者言　經の中にて[五〇]八解脫を說く。初めは內に色想ありて外色を觀ず。行者は此の解脫を以て諸色を破裂するなり。何を以てか之を知る。第二解脫の中にて內は無色想にして外色を觀ずと說けばなり。內色を破するを以ての故に內は無色想と云ふ。故に知る、行者は初解脫の中に於て漸く身色を壞し、第二解脫の中に至りては內色已に壞したれば但外色のみ有るなり。第三解脫の中にて外色も亦壞す、故に內外の色を見ざるなり。是れを色空と色づく、[五一]波羅延經の中にて說くが如し、

色相を壞裂し　諸欲を斷滅して
內外無見なり　我は是の事を問ふ、と。

[五二]四の解脫の中にては心識の空なるを說く。[五三]六種經の中に說くが如し、若し比丘にして[五四]五種の

【五〇】　八解脫とは三界の貪愛を斷ぜんために觀する八種の禪定なり。一、に內色想觀外色、內身に於ける色想の貪を除かんが爲に外部の不淨を觀ずるを云ふ。二、內無色想觀外色、內身に於ける色想の貪はなけれども、更に堅牢ならしめんために外色の不淨を觀ず。以上の二は不淨觀なり。三、淨解脫身作證具足住　前二者が嫌忌を生ずる不淨色を觀ずに對し、第三は愛着を生ずる淨色を觀じて貪を除かんとす、故に之を淨觀せず、此の淨觀を身に體驗し具足して住するが故に、身作證具足住とす。四、空無邊處、五識無邊處、六無所有處非想非々想處。以上の四は四無色定に於て何れも、苦空無常無我を觀じて厭心を生じ、貪を捨するが故に解脫と名づく。八、滅受想定身作證具足住、之は滅盡定に於て一切の所緣を棄捨するが故に解脫と名づく。

【五一】　此經は衆法品第七にも存するが、これパーリのスッタニパータの最後部の經なり。

【五二】　四の解脫は八の中の第四五六七解脫なり。

【五三】　五種とは五根に同じ。

【五四】　此經は非彼證品第四十

るときは則ち一切の諸の有爲法を厭惡すと見れば、是の故に佛は此の法を珍愛することを現はすなり。汝は此の經は正義に違すと言ふも、是の事は然らず。汝は何が故に超して四に至ること能はざるやと言ふも、[四二]菩薩藏の中にては超越四相を說いて、初禪より起ちて滅盡定に入り、滅盡定より起ちて、乃至、散心の中に入るとす、心力が大なるを以ての故に能く是くの如く[四三]なるなり。

七三昧品　第一百六十二

論者言[四四] 七依あり、初禪に依りて漏盡を得、乃至無所有處に依りて漏盡を得るなり。依とは因に名づく。此の七處にて聖智慧を得るなり、心を攝して能く實智を生ずと說くが如し。有る人は但禪定のみを得て、之を謂うて足と爲す、是の故に佛は言く、此れは足には非ざるなりと。應に此の定に依りて更に勝法を求むべし、謂く諸漏を盡すが故に、說いて依と爲すなり。

問曰 云何が此の禪定に依りて諸漏を盡すことを得るや。

答曰 佛は說く、行者は、隨つて、何れの相何れの緣を以て初禪に入るも、是の行者は復是の相是の緣を憶念せずして、但初禪の中の所有の諸色若しくは受想行識は病の如く癰の如く箭の如く痛惱[四五]にして無常苦空無我なりと觀ず、是くの如く觀ずる時に、心に厭離を生じて諸漏を解脫す、乃至無所有處も亦是くの如しと。但三空處のみは色の觀ずべき無ければ、行者は欲界の憒亂と初禪の寂滅とを見て、然る後に乃ち得るなり。是の故に佛は言く、初禪の寂滅の樂相を念ずること勿れと。但初禪の五陰の[四六]八種の過患を觀ずべし、餘の依も亦爾り。

問曰 欲界には何が故に依を說かざるや。

答曰[四七] 須尸摩經の中にて說く、七依を除いて更に聖道を得る處ありと。故に知る欲界にも亦有り。

問曰 有る人は言く、初禪の邊なる[四八]未到地に依りて阿羅漢果を得と。是の事は云何。

[四二] 惡覺品第一百八十二の五藏參照。

[四三] この超越相は大乘にて說くと同じ。

[四四] 七依は七依處なり、色界の初禪、二禪、三禪、四禪の四と無色界の空無邊處、識無邊處、無所有處との三を合して七となす。

[四五] 二禪品第一百六十六參照。

[四六] 恐らく直前に存する如病乃至無我を指すならむ。

[四七] 斷過品第一百三十九に引用せらるる經なれば、そこを參照すべし。

[四八] 未至定に同じ。初禪の未至定は特に近分定といふ。

[四九] 大正大藏經は衣とす。誤植なり。

に應に若しくは逆、若しくは順、若しくは逆順、及び超越等とすべからず。五種の入出に何の利を得むや、行者は滅罫定に至らんと欲せば、必ず應に次第に入るべし、又應に次第に起つべし。又若し上地を得れば、何が故に更に下地に入らむや。下地は刺刺なればなり。人は復は小兒の戲を樂しまざるが如く、又人が巧なるを以て復拙を樂しまざるが如く、是の事も應に是くの如くなるべし。又若し超越を說かば是の事は然らず。經の中にては但次第に諸禪定に入ることを說くのみなればなり。行者にして若し能く超して第三に至らば、何が故に超して四五に至ること能はざるや。若し力勢が此れに齊る、人の梯に登るに一[三九]桄を超ゆべきも二を超ゆること能はざるが如しといはば、此の喩も亦必しも定まらず。又大力の人ならば能く四枝に至り亦能く百步を超ゆることもあればなり。是の故に然らず。經の中にては、佛が泥洹に入る時には逆順超越して諸の禪定に入ると說くと雖も此の經は正義と相違すれば信受すべからずと。[四〇]

此の言ありと雖も是の義は然らざるなり。所以は何、若し行者の滅盡定に趣くを說かば但應に順入すべく、五種を須ひざるべければなり。行者にして若し直に滅定に趣かんと欲せば、是れ則ち須ひざるなり。若し自ら心を禪定の中に試みんと欲すとも能く自在にして退せず、故に逆順出入超越すること、人の馬に乘るに、若し敵陣に對せば、則ち[四一]盤を須ひざれば、若し調習せんと欲せば、閑時に於ては則ち可なるが如し。若し下地は刺刺なれば應に入るべからずと言ふも、下地は勝れるを以て後に便ち入るにはあらず、是れ行者の所行の道なるを以ての故なり。若し人は小兒の戲を樂しまざるが如しと言ふも、或る因緣を以ては小兒の戲を爲す、老ひたる伎人の終日舞戲するは、情の樂しむ所に非ずして、敎習の爲の故なるが如し。是くの如く聖人の諸禪逆順出入超越するは天人及び諸の神仙に諸の禪定の中の自在力を示さんと欲するが故なり。又佛が泥洹に入る時には深妙の禪定を以て舍利を熏修せんと欲するが故に自在に入出逆順超越するなり。又人は佛が無餘泥洹に入

【三九】桄は橫木なり。

【四〇】以上が有る論師の說。

【四一】三本宮本は槃に作る。同じことなり。

問曰　經の中にて六三昧を說く。[三七]一相修を一相と爲すあり、一相修を種種相と爲すあり、一相修を一相種種相と爲すあり、種種相修も亦是くの如し、何れの者か是れなりや。

答曰　一相は應に是れ禪定なるべし、禪定を一緣の中に於て一心に行ずるが故なり。種種相とは應に是れ知見なるべし、諸法の種種性を知るが故なり、五陰等の諸法の中に於ける方便なるが故なり。

問曰　云何が一相修を一相と爲すや。

答曰　人が定に因りて還能く定を生ずる若き是れなり。一相修を種種相と爲すとは人が定に因りて能く知見を生ずる若き是れなり。一相修を一相種種相と爲すとは人の定に因りて能く禪定及び五陰の方便を生ずる若き是れなり。種種相修も亦是の如し。

問曰　有る論師は言く、一相修を一相と爲すとは人が第四禪に因りて阿羅漢果を證する若き是れなり、一相修を種種相と爲すとは人が第四禪に因りて、五神通を證する若き是れなり、一相修を一相種種相と爲すとは、人が第四禪に因りて阿羅漢果及び五神通を證する若き是れなり、種種相修を種種相と爲すとは人が五枝三昧に因りて阿羅漢果及び五神通を證する若き是れなり、餘の二も亦爾りと。是の義は云何。

答曰　應に因緣を說くべし、何が故に第四禪及び阿羅漢果は是れ一相にして、五枝三昧及び五神通を種種相と名づくるや。又五枝は依とは爲すべからざるに、五枝三昧は是れ四禪の明相觀相なり、云何ぞ此れに依りて阿羅漢果を得んや。所以は何、要ず一禪に依りて阿羅漢果を得ればなり。又應に明相に依りて阿羅漢果を得べからず。是の故に非なり。

問曰　有る人は說く、六種の入定あり、順入と逆入と逆順入と順超と逆超と逆順超となりと。是の事は云何。

答曰　有る論師の言はく、行者は滅盡定に趣かんと欲するが故に[三八]次第に諸禪に入出す。是の故

【三七】一相修爲一相、一相修爲種種相、一相修爲一相種種相、種種相修爲一相、種種相修爲種種相、種種相修爲一相種種相なり。

【三八】滅盡定は九次第定の最後のものなればなり。

枝と爲し、第四禪の中の清淨心を第三枝と名づけ、此の三枝に依りて能く明相と觀相とを生じ、是の明相と觀相とを因と爲して能く五陰を壞裂す。五陰の空なることを觀ずるが故に觀相と名づけ、能く泥洹に至るが故に名づけて聖と爲す。

問曰　經の中に聖五智三昧を說かく、何れの者か是れなりや。

答曰　佛は自ら說く、行者は是の念を作す、我此の三昧は聖清淨なりと、是れを初智と名づく、此の三昧は〔三六〕凡夫に非ざるものの近づく所にして是れ智者の讃する所なりと、是れ第二智なり、此の第三昧は寂滅妙離なるが故に得と、是れ第三智なり、此の三昧は現在樂にして後にも樂報を得と、是れ第四智なり、此の三昧には我は一心にして入り一心にして出づと、是れ第五智なり。佛は示す、定中にも亦智慧あり、但心を繫ぐのみには非ずと。行者が定を修習する時に、若し煩惱を生ずれば、中に於て智を生じて此の煩惱を除き三昧をして聖清淨たらしめんと欲す、是れを初智と名づく。聖清淨とは謂く凡夫に非ざるものゝ近づく所にして、是れ智者の讃する所なり。凡夫に非ざる者とは、謂く諸の聖人は智を得たるを以ての故に凡夫とは名づけざるなり、此の智は能く假名を破す、是れ第二の智なり。諸の煩惱を薄らぐれば、貪等の煩惱は滅するが故に寂滅と名づく、寂滅の故に妙なり、諸の煩惱を離るゝが故に名づけて離と爲すことを得、此れを得れば皆是れ欲道を離る、是れ第三智なり。證するに隨つて煩惱は斷じて安穩寂滅を得、熱を離れて樂なり、故に現樂後樂と名づく、現樂は煩惱を離れたる樂に名づけ、後樂は謂く泥洹の樂なり、是れ第四智なり。行者は常に無相心を行ずるが故に常に一心にして出入す。是れ第五智なり。是の故に若し未だ此の第五の智を生ぜずむば應當に生ずべく、若し生ずれば卽ち三昧の果を得。

六三昧品　第一百六十一

〔三六〕非凡夫所近は、或は、凡夫の近づく所に非ずと讀むべきものとも考へらる。下に非凡夫者云云とあるによりて今は上の如く讀みたり。

に慈心を以て諸の福德智慧の利を集むるが故に、聖道の慧を得て能く諸結を斷ず、故に慈を修すればば阿那含を得と說くなり。慈と與に修する覺も亦復是くの如し。

問曰 阿羅漢は衆生想を斷ずれば、云何が無量心を行ずるや。

答曰 阿羅漢は慈心に入ると雖も慈業を集成すること能はず、生を受けざるを以ての故なり。

問曰 諸佛世尊の大悲は云何。

答曰 諸佛世尊には是くの如きの不思議智あり、諸法は畢竟空なりと知ると雖も而も能く大悲を行ずること深く、凡夫に於て但定まれる衆生相を得ざるのみ。

問曰 悲は[三四]大悲と何の差別ありや。

答曰 悲は但心の憐愍のみに名づくるも、能く事を成辦するが故に大悲と名づくるなり、所以は何、菩薩は衆生の苦を見て、此の苦を盡さんが爲に勤めて精進を修し、又無量劫に於て修習し成ずる所なるが故に大悲と名づくればなり。又智眼を以て衆生の苦を見、決定して發心し、要ず當に除滅すべきが故に大悲と名づけ、又利益する所多きが故に大悲と名づけ、亦障礙無きが故に大悲と名づく、所以は何、悲心は或は他の惡を念ずるが故に障礙を生ずるも、大悲は種々の深惡に於て通達無礙なればなり。又悲心は或は厚薄ありて等しからざるも、一切平等なるが故に大悲と名づけ、又自ら己利を捨てて但利他のみを求むるが故に大悲と名づくるに、悲は是くの如くならず、是れを差別と名づく。是くの如く、慈等は佛に於ては皆名づけて大と爲す。但悲は能く苦を救ふを以て是の故に獨說くのみ。

五聖枝三昧品　第一百六十

經の中にて五聖枝三昧を說く、謂く、喜と樂と淸淨心と明相と觀相となり。喜は是れ[三五]初禪と二禪とにして喜が相同じきが故に名づけて一枝と爲し、第三禪は喜を離れたる樂なるを以て別して一

【三四】四無量心の中の悲と十八不共佛法中の大悲との差別を說かむとするなり。此兩者は嚴に區別すべきものなり。四無量心は共凡功德の中のものにして不共佛法にあらず。大悲は不共佛法にして共凡功德にあらず。兩者は決して同一視すべきにあらず。法相を亂せばなり。

【三五】初禪は離生喜樂、第二禪は定生喜樂にて兩者に喜あり。第三禪は離喜妙樂、(或離生妙樂)第四禪は捨念淸淨なり。淸淨心の心は念と同じ理なり。

あるも多きに隨ふが故に說く、遍淨の中にては慈が最上なるが故にと、是くの如き等なり。又諸の禪定の中の四無量心は果報を受くること勝る、衆生緣なるを以ての故なり。

問曰　有る論師は言く是の四無量は、但欲界の衆生を緣ずるのみなりと。是の事は云何。

答曰　何が故に餘の衆生を緣ぜざるや、應に因緣を說くべし。佛が無量經の中に於て說く、行者は慈心にて普く四方上下の一切の衆生を覆ふと。色無色の衆生にも亦無常敗壞有りて諸の惡趣に墮す。何が故に緣ぜざるや。

問曰　有る論師は言く、但欲界に生ずる行者のみ能く現に無量に入ると。是の事は云何。

答曰　一切處に生ずるもの皆能く現に入る。

問曰　若し彼の中に生ずるも亦能く現に入らば、則ち福は應に盡くべからず、常に彼の中に生ずればなり。

答曰　彼の中にても亦現に禪等に入るも、諸餘の善法は而も亦退沒あるが如く、慈等も亦爾り。

問曰　若し此の理有らば、何ぞ速に退せざるや。

答曰　是くの如きの業あらば、退の因緣ありと雖も而も速には退せず。欲天等は善業ありと雖も亦惡道にも生ずるが如く、是の事も亦爾り。

問曰　慈三昧を行ずるものは、何が故に兵刃水火も害すること能はざるや。

答曰　是れ善福深厚なれば諸惡は加へず、亦諸天の爲にも守護せらるるが故なり。

問曰　經にて說く、慈と倶に[三]覺意を修すと。有漏と無漏とを云何が倶に修せんや。

答曰　是の慈は覺意と相順すればなり。經の中にて說くが如し、若し人一心に法を聽かば、則ち能く五蓋を斷じ、七覺意を修す、法を聽くべからざるも亦覺意を修すと。又經の中にて說く、汝等比丘にして慈心を修習すれば、我は汝が阿那含果を得ることを保すと。慈心は結を斷ぜずと雖も先

【三】　七覺支をいふ。

問曰　云何が捨を行ずるや。

答曰　等ならざる心の過を見、心をして等しからしめんと欲するが故に捨を行ず。又行者は貪恚の心の過を見るが故に捨を修行す。

問曰　是の無量心は何れの地の中にありや。

答曰　皆三界に在り。

問曰　有る論師は言く、三禪より以上には喜根無しと。是の事は云何。

答曰　我は喜の心は是れ喜根の性なりとは說かず。但他を利せんが爲に心が喜んで濁らざるが故に名づけて喜と爲すのみ。此の四無量は皆是れ慧の性なり。

問曰　云何が無色界に於て四無量心あらんや。色相を以ての故に衆生を分別するに、彼の中にては色相を壞裂すれば、云何ぞ當に有るべけんや。

答曰　無色の衆生も亦分別すべし、經の中にて說くが如し、當に有色及び無色等を作すべしと。又經の中にて說く、慈を修すること極遠ならば[二八]遍淨の報を得、悲を修すること極遠ならば[二九]空處の報を得、喜を修すること極遠ならば識處の報を得、捨を修すること極遠ならば無所有處の報を得と。故に知る無色の中にも亦無量あり。

問曰　一一の地の中に一無量心あるに、非想非非想處には無きや。

答曰　一切處に一切有り、但上慈のみを修するが故に遍淨處に[三〇]生ず、諸業は相似の果報を生ずるを以ての故なり。謂く樂を求むる衆生は還樂報を得。悲も亦是くの如し。身有るに由るが故に多く諸苦を集むるに、[三一]虛空の中には色無きが故なり。[三二]識處の心は緣の中に於て深く樂住するが故なり。捨の極は無所有處なりといふは行者は想の爲に疲倦せらるるが故に無所有處に入るなり。非想非非想處にも亦無量あるも、但細微にして了ならざるを以ての故に說かざるのみ。又一切處に一切

【二八】遍淨は色界第三禪天の中の第三天の名。
【二九】空處は空無邊、識處は識無邊處、なり無所有處と共に無色界の中に前三空天の名。
【三〇】前註にていへる如く、本文が三禪の方がよろしく、二禪にては不可なるを知る。
【三一】この虛空は空無邊處をいふ。空無邊處は勿論虛空無邊處なり。悲の對象は衆生即ち色なるに、空無邊處は色なきが悲の極にて達せらるるものとなすなり。これ前の經の悲を修すること極遠ならば云云の解釋なり。
【三二】識處は識無邊處をいふ。これ前の經の喜を修すること極遠ならば云云の解釋なり。

我も亦是の如くに　能く諸惡を忍ばむ、と。

又偈の說く、

惡口と罵詈と　毀辱と瞋恚とには
小人の堪へざること　石の鳥に雨ふるが如し。
惡口と罵詈と　毀辱と瞋恚とに
大人の堪ふること　花が象に雨るが如し、と。

是の故に應に忍ぶべし。又此の惡事を以て迴らせば、功德と爲らむ、諸惡より功德を成ずるを以ての故なり。又行者は此の衆生の愚癡にして識なきこと猶嬰兒の如くなる知りて、應に瞋るべからず。此の方便を以て能く慈心を修す。

問曰　云何が悲を修するや。

答曰　行者は諸の衆生の樂は少くして苦は多きを見るが故に悲心を生ず、我にして當に云何ぞ苦しめる衆生に於て更に諸苦を加ふべけんと。又衆生が深く樂に貪著するを見て則ち念言を生ず、我今云何んぞ他の所願を斷ぜんやと、故に悲心を生ず。又苦の衆生を見れば、現苦を以ての故に苦しみ、樂の衆生を見れば、無常を以ての故に苦しむ。是の故に一切の衆生には皆苦分ありて、或は早くも或は晩くも脫することを得る者無し。是の因緣を以ての故に悲心を生ず。

問曰　云何が喜を修するや。

答曰　行者は、他の利を嫉まば、是れ凡鄙の相なりと見る、是の故に喜を修す。是くの如きの念を作すべし、我は應に衆生に樂を與ふべし、他が今自ら得るは則ち是れ我を助くるなりと。故に應に喜を生ずべし。又此の嫉妬を見るに空しうして益する所無く、他を損ずること能はず、但反りて自ら害するのみ、又經の嫉妬の過を說く如し、此の過を離れんと欲するが故に歡喜を生ず。

問曰　何の方便を以て此の慈心を得るや。

答曰　後に當に瞋恚の過患を說くべし。此の過患を知り已れば、常に慈心を修し、又慈心の利益功德を見るべし。經の中にて說くが如し、慈心を行ずる者は臥しても安く、覺めても安く、惡夢を見ず、天は護り人は愛し、毒せられず兵せられず、水火にも喪はれず、是くの如きの一切も、瞋より生ずる業は之を如何ともすること無しと。此の利益を聞くが故に能く修習するなり。又行者は念を生ずべし、我にして瞋恚を起さば自ら果報を受く、餘人が受くるには非ず、故に應に瞋らずして而して慈心を修すべしと。又行者は思量すべし、我にして少惡を以てしても人に加ふれば、則ち自ら多惡を受くること百倍も啻ならず、故に應に惡を離るべしと。又經の中にて、五種の瞋を除く因緣を說く、常に當に憶念すべし。又瞋恚は是れ行者の宜しき所に非ず。又當に前人の利益善事を念ずべし、惡事を除捨すれば則ち瞋恚は息む。又當に前人の本末の因緣を觀ずべし、此の人は先世には或は我母と爲りて懷姙し、生育し、我の爲に勤苦せりと、或は我父、兄弟、妻子たりきと。云何ぞ當に瞋るべけんや。又念ずべし、來世には或は當に、我父母兄弟と爲るべし、或は羅漢緣覺諸佛と作らんと、云何ぞ瞋るべけんや。又惡人を見るに、惡を行ずるを以ての故に兩世に苦を受く、是の故に瞋らず。又深く前人の體性の善惡を觀ずべし、若し惡人ならば惡を加ふるも、何が故にか瞋を生ぜんや、火の人を燒くが如くなれば、應に瞋るべからざるなり。又前人が煩惱の爲に逼られて自在を得ざるを見れば、猶鬼の著きしが如く、何すれぞ瞋を生ぜんや。又隨つて何れの因緣を以て忍辱を修習するも、應に此の法は則ち瞋恚息み、慈心增長すと念ずべし。忍の功德とは、謂く行者が念を生ずることなり、我にして若し他を瞋らば、卽ち凡鄙と爲りて、彼れと異なること無しと。是の故に應に忍ぶべし。佛の說く偈の如し。

　　譬へば象を調すれば　　能く刀箭に堪ふるが如く

ち名づけて惱と爲す。又瞋を惱の因と爲す。瞋心を懷かば、必ず能く惱を行ずればなり。

喜とは嫉妬と相違する慈心に名づく。妬は他の好事を見て心に忍びずして、則ち嫉恚を生ずるに名づく。行者は一切衆生の增益の事を得るを見て大歡喜を生じて、自ら利を得るが如し。

問曰　此の三は皆是れ慈なりや。

答曰　即ち是れ慈心の差別の[二六]三種なり。所以は何、瞋らざるを慈と名づく。有る人は能く瞋らずと雖も而も苦しむ衆生を見て悲を生ずること能はず、若し能く一切衆生の中に於て深く慈心を行ずれば、人が子の急に遭うて苦惱するを見るが如く、爾の時に慈心が轉ずるを名づけて悲と爲す。或は有る人は他の苦しむ人に於て能く悲心を生じ、而も他の增益の事の中に於て歡喜の心を生ずること能はず。何を以てか之を知る。有る人は怨賊の苦を見てすら尚或は悲を生じ子が己に勝ることを見てすら尚喜ぶこと能はざればなり。行者は一切衆生の增益の事を得るを見て歡喜の心を生ずこと、己と異ること無きが如し、是れを名づけて喜と爲す。故に知る、慈心の差別を悲喜と爲す。

問曰　何の所捨の故に捨と名づくるや。

答曰　隨つて、怨親を見るとき則ち慈心は等しからず、親に於ては則ち重く、中に於ては如かず、怨に於ては轉薄し、悲喜も亦爾り。是の故に行者は心をして等しからしめんと欲して、親に於ては親を捨し、怨に於ては怨を捨し、然る後に一切衆生に於て慈心平等なり、悲喜も亦爾り。故に經の中にて說く、憎愛を斷ぜんが爲に捨心を修習すと。

問曰　若し爾らば則ち別の捨心なし、但心が平等なるを以ての故に名づけて捨と爲すのみ。

答曰　我は先に慈心の差別を說いて悲と喜と等しと爲したり。又慈心は下中上の法を以ての故に三種あり、能く此の三をして平等ならしむるが故に名づけて捨と爲す、上の慈心を以て[二七]三禪を修習すと說くが如し。

【二六】慈悲喜を三となすも、悲喜は慈に外ならずとし、三は根本は一なりとなすなり。

【二七】麗本は二に作る。今は三本宮本の三に作るに從ふ。下の說に上慈を修するが故に遍淨處に生ずとあれば、遍淨處が遍淨天にて色界第三中禪にあるが故なり。

知る假名を破するが故に慧分別と名づく。慧分別を以ての故に漏盡を得。經の中にて說くが如し、行者は五陰の生滅の相を觀ずるが故に能く陰の滅を證すと。故に知る一切の世間出世間の利は皆四の中に攝在す。

問曰　有る論師は言く、第四禪の中にては能く阿羅漢果無礙道を得れば、名づけて漏盡と爲すと。是の事は云何。

答曰　是の中には差別の因緣あること無きも、但第四禪の中の無礙道を名づけて漏盡と爲すのみにして餘には非ず。是の故に然らず。又定を修するは三種の利の爲にす、一には現樂の爲にす、二には知見の爲にす、三には斷結の爲にす。或は說いて二の爲とす、說くが如し、畢竟して盡くが爲の故に、善清淨の故に、生死が盡くが故に、利の種種性を分つが故に、是の有眼者は道を說くなりと。是の中の前の三は斷を說き、後の一は知を說くなり。佛は此の中に於ては[二四]現樂を說かず。

[二五]四無量定品　第一百五十九

慈悲喜捨なり。慈は瞋り相違する善心に名づく、善知識が善知識の爲に常に利安を求むるが如く、行者も亦爾り、一切衆生の爲に常に安樂を求む。是の故に此の人を一切衆生の與の善知識となす。

問曰　何をか善知識の相と謂ふや。

答曰　常の相なり。今世後世の利益安樂を求むることを爲して終に相違して無益の事を求めず、者も亦爾り、但衆生の爲に安樂の事を求めて、安樂に非ざる事を求めず。悲とは惱と相違する慈心に名づく。所以は何、亦衆生の爲に安樂を求むるが故なり。

問曰　瞋と惱と何の差別ありや。

答曰　心の中に瞋念を生ぜば、撾打して此の衆生を害せんと欲す、瞋より身口の業を起せば、卽

[二四] 斷と知とにて、說いて二の爲とすの二となるなり。之を前の三種に對照すれば、此中には現樂の爲にするが說かれ居らざるなり。
[二五] 三本宮本はこゝより第十五卷とす。

答曰　先に諸覺を滅して、深く心を攝するが故に喜等を說いて樂と爲す、但行苦を以ての故に一切の苦と名づくるのみ。又初禪の中の苦は麁にして、二禪等の中の苦は細なり、苦が細なるが故に名づけて樂と爲すことを得るなり。

問曰　第二禪等にも亦後世の樂行あるに、何が故に但說いて現在の樂とのみ爲すや。

答曰　[二]阿闍世王の爲に現在の沙門果を說くが如し。又近きを以ての故に說き、又五欲の樂を破せんが爲の故に現在の樂を說くなり。若し人にして五欲の樂に貪著せば、その故に諸禪を得ず、是れが爲の故に說く、汝等にして若し能く五欲の樂を離るれば當に勝れたる現在の樂を得べしと。又諸佛は後身を受くる事を讃したまはざるが故に後樂を說かず。又世間人は在家人は樂しくして出家人には非ずと言ふ、是の故に佛は說く、此れは是れ出家人の現在の樂なりと。又是の四修定は皆現樂の爲なり、初めて受くるものの名を以ての故に獨現樂となすなり。

問曰　若し此の四修定にして能く種種の利を成せば、何が故に但此の四利のみを說くや。

答曰　利には二種あり、世間の利と出世間の利となり。第二修定は世間の利の爲にして、所謂知見なり。知は[三]八除入[三]十一切入等の利に名づけ、見は五神通等の利に名づく。所以は何、是の利は眼見なるが故に名づけて見と爲す。是の事は光明を取るに因るが故に成ず、故に知見と爲す。光明の相を說くに二あり、是れ出世間の利にして、慧を以て五陰を分別すれば慧分別と名づく。故に經の中にて說く、慧分別は行者にして若し諸受諸覺諸想を生ぜば、皆能く別知することなり。受を別知すとは謂く觸の因は受に緣たれば、受者有ることなしとなすこと、覺を別知すは此は我を計する覺なれば、云何にして無ならしめむやとなすこと、謂く男女等の假名を分別するは想なり。此の想を破すが故に則ち諸覺無し、經にて說くが如し、諸覺は何を因となすや、所謂想と爲すと。故に知る但想を破するのみなるが故に則ち諸覺無きなり、諸覺無きが故に諸受も亦無し、故に

【二】阿闍世王、(Ajātaśatru)佛陀時代、摩竭陀國、王舍城の王、父王頻婆娑羅王を殺して王位に昇りしが佛教に歸し外護者となる。この現在沙門果を說きたるは長阿含沙門果經是なり。衆法品第七參照。

【三】八除入は八背捨に同じ又八解脫とも云ふ、後の八解脫品、百六十三に明なり。

【三】十一切入は十遍處にして後の十一切處品百七十二に明なり、以上の八除入と十一切處と、八勝處(第百六十四品)とを三法とす。

寂滅を見、更に無相を以て無相を取らずむば、是れを無相無相と名づくるなり。

問曰　有る論師は言く。是の三の三昧を有漏と名づくと。是の事は云何。

答曰　此は有漏には非ず、所以は何、是の時には漏の能く使ふこと無きが故なり。又此の三昧は空等に於て勝るに、云何ぞ當に是れ有漏なるべき。

問曰　若し空等の三の三昧にして實に是れ智慧ならば、何が故に三昧と名づくるや。

答曰　諸の三昧は差別せるが故なり。又三昧は能く如實の知見を生ずるが故に三昧と名づく、果中に因を説くが故なり。

問曰　有る論師は言く、是の空空等の三の三昧は但無學人のみが得るものにして餘人には非ずと。是の事は云何。

答曰　學人も亦應に得べし、所以は何、行者は應に有漏無漏の一切の法の滅を證すべければなり。是の故に學人も亦應に無漏法の滅を證すべし。

四修定品　第一百五十八

定を修して現在の樂の爲にする有り、定を修して知見の爲にする有り、定を修して慧分別の爲にする有り、定を修して漏盡の爲にする有り。若し三昧にして能く現在の樂を得れば、謂く第二禪等なり、何を以てか之を知る。佛は説く、第二禪は謂く三昧より喜樂を生ずるを名と爲し、餘法の爲ならず、舍衞城に入るは飯食の爲の故なるが如しと。

問曰　初禪にも亦喜樂あり、何が故に現樂有りと説かざるや。

答曰　初禪は諸の覺觀を雜ふれば能く心を散ずるが故に現樂と説かざるなり。

問曰　第二禪も亦喜等有りて能く心法を亂すに、何が故に樂と名づくるや。

答曰　是れ空の能なり、謂く應に空を修すべし、空を修すれば利を得、謂く相を見ざるなり、相を見ざるが故に無相なり、無相なるが故に願はず、願はざるが故に身を受けず、身を受けざるが故に一切の苦を脫す。是の如き等の利は皆空を修するを以ての故に得らるるなり。是の故に三と說くなり。

問曰　有る論師は言く、若し三昧にして空無我を以て行ぜば、是れを名づけて空と爲し、若し無常苦、因集生緣、道如行出を行ぜば、是れを無願と名づけて、若し滅[三〇]止妙離を行ぜば、是れを無相と名づくと。是の事は云何。

答曰　汝が無常者を行ずるを無願と名づくと言ふは、此れ則ち然らず、所以は何、佛は常に自ら、若し無常ならば卽ち是れ苦なり、若し苦ならば卽ち是れ無我なりと說けばなり。無我を知らば則ち復願はず、故に知る亦空を以ての故にも願はざるなり。若し因集生緣を行ずるを無願と名づくと說かば、此れ或は爾るべし、所以は何、經の中にて所有の生相は皆是れ滅相なりと見れば、則ち厭離を生ずと說けばなり。又道の中には應に無願の行有るべからず、所以は何、願は是れ愛の分なればなり。經に上中下の願を說くが如し。道の中にては貪愛を生ぜず、是の故に應に無願の行有るべからず。又經の中にて說く、五陰が滅するが故に滅と名づくと。當に知るべし、五陰無きに隨うて是れを名づけて空と爲す、空は卽ち是れ滅なり。是の中には願無し、願は身を愛するを以ての故に願ふなればなり。故に知る此の三は一義なり、應に差別すべからず。

問曰　又經の中にては三の三昧を說く、空空と無願無願と無相無相となり。何れの者か是れなりや。

答曰　空を以て五陰の空なるを見、更に一空を以て能く此の空せば、是れを空空と名づけ、無願を以て五陰を厭患し、更に無願を以て此の無願を厭はば、是れを無願無願と名づけ、無相を以て五陰の

【三〇】麗本は正に作り、三本は止に作り、宮本は上に作る。新譯にいふ滅靜妙離なれば、止の方可なり。

問曰　經の中にて三の三昧を說く、一分修三昧と共分修三昧と、聖正三昧となり。何れの者か是れなりや。

答曰　一分修とは、若しくは定を修するも慧を修せず、或は慧を修するも定を修せざるもの、共分修とは、若しくは定をも修し、亦慧をも修するもの、是れ世間の三昧にして、煖等の法の中に在り。聖正三昧とは、若し法位に入りて能く滅諦を證すれば則ち聖正と名づく。何を以てか之を知る。長老比丘が、行者は定を以て心を修し、慧に因りて能く煩惱を遮し、慧を以て心を修め、定に因りて能く煩惱を遮し、定慧を以て心を修し、性に因りて解脫を得、性とは謂く斷性と離性と滅性となりと說くが如くなればなり。又若しくは定慧が一時に具足するが故に聖正と名づく、定慧を以て解脫を得るを俱解脫と名づくるが如し。

問曰　有る人は言く、一分修とは若し三昧に因りて能く光明を見れば諸色を見ず、若し諸色を見れば光明を見ざるもの、共分修とは謂く能く色をも見亦光明をも見るもの、聖正とは謂く學無學の得る所の三昧なりと。是の事は云何。

答曰　經には唯光明のみを見て色を見ずと說くこと有ること無し。經の中には、但我は本曾て光明をも見亦諸色をも見るも、今は光明を失ひ亦色をも見ずと說くのみ。又汝は應に因緣を說くべし、何が故に能く光明を見て而も色を見ざるや、是の如き等の故に汝の說は非なり。

問曰　又經の中にては三の三昧は空無相無願なりと說く。是の三の三昧は云何が差別するや。

答曰　若し行者にして衆生を見ず、亦法をも見ずむば是れを名づけて空と爲す、是の如く空の中には相の取るべき無ければ此の空は則ち是れ無相、空の中にては願求する所無ければ、是の空を卽ち[一九]無願と名づくるなり。是の故に此の三は一義なり。

問曰　若し爾らば何が故に三と說くや。

【一九】空無相無願は有漏なるときは三三昧、無漏なるときは三解脫門なり。

の心を調するも亦復是の如し。又此の三昧には三種の方便あり、入定方便と住定方便と起定方便となり。法の如くに定に入るは是れ入定方便、定に在りて動ぜざるは是れ住定方便、法の如くに定より起つは是れ起定方便なり。

問曰　云何が此の三種の方便を得るや。

答曰　行者は自の心相を取りて、是の如くに制し、是の如くに發し、是の如くに捨すれば、則ち能く定に入る、住も出も亦爾り。

問曰　但直に定を取るのみならば、何ぞ方便を用ひんや。

答曰　若し此の三種の方便を生ぜずむば則ち過咎あり。隨意なるを得ず、入らんと欲するとき則ち起ち、起たんと欲するとき還入らば、此等の過あればなり。又利を以て損と爲し、損を以て利と爲す、少しの淨色及び少しの光明を見て、大利を得たりと謂ひ、若し無常苦空等を念ぜば、心は樂を得ず、反つて謂つて損と爲すが如し。

問曰　行者は何が故に或は定を得ることあり、或は得ざるや。

答曰　定を得る因緣に四あればなり。一には今世に勤習す、二には前身に緣あり、三には善く定相を取る、四には聞いて定法に隨ふなり。又定を修するに四種あり、一には常に勤習するも而も一心には行ぜず、二には一心に行ずるも而も常には修習せず、三には亦は常に修習し亦は一心に行ず、四には常にも習せず一心にも行ぜず。又四種あり、多善少慧有り、少善多慧有り、多善多慧あり、少善少慧あり。此の中に於て第三の行者は必ず能く定を得、第四は必ず得ること能はず。第一と第二とは、若し調等ならば則ち得。

三三昧品　第一百五十七

て、心は三昧を得るが故に住すとは說かず、故に知る然らざるなり。又一心と言へば則ち餘法を明さゞること、先に說きたるが如く、心の樂しむ處に隨うて、此の緣に於て住するなり。當に知るべし、心の邊に別の三昧無し、心の久住するに隨つて名づけて三昧を爲すなり。

問曰 是の三昧は有漏と爲すや無漏と爲すや。

答曰 三昧は二種にして、有漏と無漏となり。世間の諸の禪定は是れ有漏にして、法位に入りし時の諸三昧を無漏と名づく、所以は何、是の時を名づけて如實に知見すと爲せばなり。爾の時には二種をも亦三昧と名づけ、亦名づけて慧とも爲す。心を攝するが故に三昧と名づけ、如實に知るが故に慧と名づくるなり。心を攝するに三種あり、善と不善と無記となり。是の中にて、善を以て心を攝するを三昧と爲し、不善不記には非ず。此の三昧にも亦二種あり、一には是れ解脫の因、二には解脫の因に非ず。解脫の因とは名づけて定根と爲す、有る論師の言く、唯無漏定のみを名づけて定根と爲すと、是の語は然らず。若しくは有漏にても無漏にても、能く解脫の因と爲らば皆定根と名づくればなり。是の三昧はに住するに隨ふが故に三種を分別す、小と大と無量となり。心が少時住し、若しくは小緣を見れば、是れを小と爲す、餘の二も亦爾り。又時に隨ふが故に三種の相あり、制相と發相と捨相となり。心が退沒する時には應に發相を用ふべく、心が掉動する時には應に制相を用ふべく、心が調適する時には應に捨相を用ふべし。金師の金を治するに、或は炙し、或は漬し、或時には捨置す、若し常に炙すれば則ち消え、常に漬せば則ち生じ、若し常に捨置すれば則ち調柔ならざるが如く、行者の心も亦是の如し。若し動ずるを制せざるときは則ち常に散亂し、若し沒するを發せざるときは則ち復•懈怠し、若し適なるに捨せざるときは則ち還(また)適ならざればなり。又馬を調するに、若し疾ければ則ち制し、若し遲ければ則ち策ち、若し調ならば則ち捨するが如く、行者

問曰　云何にして心が悅ぶや。
答曰　清淨の持戒に從つて、心が悔ひずして生ず。
問曰　已に三昧の因を說きたり。今、三昧は復是れ誰のもの丶因なりや。
答曰　是れ如實智の因なり。如實智とは謂く空智なり。說の如くに行ずる者は是の如くに心を攝し、心を淸淨にして蓋心を除き心を住せしめて心を動ぜざるとき、則ち能く實の如くに苦聖諦と集滅道の聖諦とを知る。是の故に如實智を得んと欲せば、當に勤めて精進して三昧を修習すべし。散心の者は、尙世間の經書工巧等の利をすら得ること能はず、何に況んや能く出世間の利を得んをや、故に知る一切の世間出世間の利は皆定心を以ての故に得。又一切の妙善は皆正智に由り、一切の鄙惡は皆邪智に由る。經の中に說くが如し、無明を首と爲せば、無慚愧が隨從して一切の惡を起し、明を以て首と爲せば慚愧が隨從して一切の善を起すと。而も三昧は是れ正智慧の因なり、故に知る一切の妙善は皆三昧に因るなり。是の故に當に勤めて精進して修習すべし。

定相品　第一百五十六

問曰　汝が心が一處に住するは是れ三昧の相なりと說く、三昧と心とは一と爲すや異と爲すや。
答曰　三昧と心とは異ならず。有る人は說く、三昧と心とは異なり、心が三昧を得るときは則ち一處に住すればなりと。此の言有りと雖も是の義は然らず。若し心にして三昧を得て能く緣の中に於て住せば、是の三昧も亦緣の中に住し、亦應に更に餘の三昧に因りて住すべく、是の如くならば無窮なれば、是の事は不可なり。若し是の三昧にして自然に住せば心も亦是の如く、應に三昧に因りて住すべからず。是の故に若し三昧が心と異ると言はゞ、義に於て益無し。又受想等の諸の心數法も亦緣の中に於て住せば、此れ復更に何れかの法に因るが故に住せむ、是の事は應に說くべし。

燒くも、薪が盡くれば則ち滅するが如く、是の人も亦爾り、受けざるを以ての故に滅するなり。三心を滅するが故に一切の諸苦に於て永く解脫を得。是の故に智者は應に三心を滅すべし。

道諦聚の定論の中の定因品　第一百五十五

論者言　今道諦を論ぜむ。道諦とは謂く八直聖道にして、正見乃至正定なり。是の八聖道には略して說かば二あり、一には三昧及び具と名づけ、二には名づけて智と爲す、今、[一七]當に三昧を論ずべし。

問曰　三昧は何等の相なりや。

答曰　[一八]心を一處に住すれば、是れ三昧の相なり。

問曰　是の心は云何が一處に住するを得るや。

答曰　多習する所に隨つて此の處に於て住し、若し多習せざれば則ち速に捨離す。

問曰　當に云何が習すべきや。

答曰　樂習する所に隨ふなり。

問曰　云何が能く樂なりや。

答曰　身心の麁重を苦と名づくれば、猗法を以て身心の麁重の相を除くときは、則ち能く樂を生ずるなり。

問曰　云何が猗を生ずるや。

答曰　歡喜の因緣を以ての故に身心が調適するなり。

問曰　云何が喜を生ずるや。

答曰　三寶を念じ、及び法を聞く等に依りて心が悅ぶが故に生ず。

[一七] 之によつて知らるる如く、道諦聚は定と具とを說く部と智を說く部とに分る。初の中、定を說く部は此品より下の後三想品第一百八十まで、定具を說くは定具中初五定具品第一百八十一より修定品第一百八十八に及ぶ。それ以下は凡て智を論ずる部なり。

[一八] 心を一處住すは心一境相に外ならず。これ三昧の一般に認められたる定義なり。

問曰 是の人には新業は集まらずと雖も、故業を以ての故に何ぞ生せざることを得んや。

答曰 是の人は正智慧を以て此の業を壞するが故に報を得ること能はざること、焦げたる種子の復生ずること能はざるが如し。又若し愛心無くんば則ち諸業は報を得ること能はざること、地にして潤無くむば則ち種は生ぜざるが如し。又此の行者は、諸の識處に於て、悉く諸相を滅したれば識は所依無し、故に生處も無し、種にして依無くむば則ち生ずることを得ざるが如し。又業煩惱が具はるが故に能く身を受け、具はらざれば則ち滅す、是の人には煩惱無きが故に因緣は具せざれば、諸業ありと雖も生を受くること能はざるなり。又衆生は煩惱を以ての故に諸趣の身を受く、身を受くを以ての故に、諸業は中に於て能く果報を與ふるも、若し煩惱にして無くむば則ち身を受けず、身を受けざるが故に、諸業は云何ぞ能く果報を與へんや。人が債を負うも勢力を恃むときは、則ち債主は便を得ること能はざるが如く、行者も亦爾り。若し生死に在らずむば、諸業ありと雖も報をる與ふこと能はず。又人が縛せらるゝときは、餘人は則ち能く意に隨つて毀辱するが如く、是の如く衆生は煩惱の爲に縛せられ、業の多少に隨うて皆能く報を與ふるも、解脫を得るときは則ち便を得ること能はず。又自業は能く果報を與ふるも、是の人は空行を行ずるが故に諸法の中に於て自相有ること無し、是の故に諸業は報を與ふること能はず。兒を以て奴と爲すときは則ち財分有ること無きが如く、此れも亦是の如し。又煩惱の力は能く諸業を轉ず、煩惱の勢の盡きたるときは則ち諸業は轉ぜず、輪は在りと雖も動勢が盡くが故に則ち復轉ぜざるが如し。又煩惱の力は能く諸業を變ず、母が子を愛すれば血が變じて乳と爲り、愛心が滅するが故に則ち復變ぜざるが如く、是の如く煩惱の力の故に業は能く報を與ふるも、離すれば則ち能はず。又是の人は戒定慧等の功德を以て身を修して、勢力が大なるが故に諸業は便を得ること能はざるなり。是の故に故業ありと雖も、報を與ふること能はざるなり。是の如く此の人の故業は現在に少しく償ひて、新業は造れず、火が薪を

中の所有の堅と堅に依るとを名づけて地等と爲す、若し此の空を得れば則ち所有無しと說くと。又說く、一切の諸行が斷ずるが故に斷性と名づけ、離するが故が離性と名づけ、滅するが故に滅性と名づくと。故に知る一切の諸行皆滅す。若し實に諸行有らば、則ち正しき斷離滅は無し、滅を名づけて無と爲せばなり。當に知るべし第一義の故に諸行皆無なり、但世諦を以ての故に諸行あるのみ。

滅盡品 第一百五十四[一五]

若し泥洹を緣ずれば、是れを空心と名づく。

問曰 泥洹には法心無し、何の緣ずる所あらん。

答曰 是の心は無所有を緣ず、是の事は先に明したり、泥洹を知るが爲の故なり。

問曰 此の空心は何れの處に於て滅するや。

答曰 二處にて滅す、一には無心定の中に入りて滅す、二には無餘泥洹に入りて相續を斷ぜし時に滅す、所以は何、因緣が滅するが故に此の心は則ち滅すればなり。無心定の中にては、緣が滅するを以ての故に滅し、相續を斷ぜし時には、業が盡くを以ての故に滅するなり。論者の言く、行者にして若し能く此の三心を滅すれば、則ち諸業煩惱は永く復起らず[一六]と。

問曰 何が故に起らざるや。

答曰 是の人は無我を具足するが故に業煩惱は滅すること、燈煙の墨の如し。所依處有るときは則ち住するも、依處無くむば則ち住せず。是の如く若し我心の依處有らば、業煩惱は則ち集るも、無きときは則ち集まらざるなり。又無漏の正見は諸相を燒盡して、餘りあること無からしむ、劫火の地等を燒きて餘無きが如し。無相を以ての故に諸業煩惱は則ち復集まらず。又我心有らば、則ち業煩惱は集まるも、阿羅漢は空智に通達して、我心無きが故に則ち復集まらず。

【一五】本品は三心の第三なる空心の滅を說く。最も重要なるものなるべきも、其說くことの極めて簡單なるに注意すべし。

【一六】此言は重要なるものなり。論者は論主自らをいふに外ならず。

すや、差摩伽の言く、我は色が是れ我なりとは說かず、色を離れて是れ我なりとも說かず、乃至、識も亦是の如し、但五陰の中に於て我慢未だ斷ぜざるなりと。此の經の意は學人は或時には散亂の念を以ての故に、則ち我慢を起すも、若し心を攝めて五陰の滅を念ぜば、我慢は卽ち滅すとなす。華は但根莖枝葉のみが華たるにも非ず、亦此れを離れて華たるにも非ざるが如く、是の如く、色等が是れ我なるにも非ず、亦色等を離れて是れ我なるにもあらざるなり。是の如く、我の因緣を滅すれば、則ち我慢は起らず、故に知る、諸陰も亦空なり。又行者は應に一切の相を滅して無相を證すべし、若し實に相あらば、何ぞ念ぜざることをせむ。外道が色を離れたる時に、實に色有りと知りて、但だ憶念せざるが如くには非ず。行者は要ず色等の諸陰の滅盡を見る、盡滅を見るが故に無相に入ると名づく。故に知る、色等は第一義に非ず。又五陰有るに隨つて則ち我心あり、當に知るべし、五陰無きが故に我心は則ち滅す。是の故に諸陰は皆空なり。又水沫經の中にて佛は說く、若し人にして水の聚沫を見て、諦(あきらか)に之を觀察すれば、眞實に非ざることを知る、比丘も亦爾り、若し正しく色陰を觀ずれば、卽ち虛誑にして牢無く堅無くして敗壞の相なるを知る、受は泡の如く、想は野馬の如く、行は芭蕉の如く、識は幻の如しと觀ずるも亦復是の如しと。此の中の五喩は皆空の義を示す、所以は何、眼に水沫を見るも、消ゆる時には還た無なり、泡等も亦爾り。故に知る諸陰は眞實有に非ず。又若し佛弟子ならば深く生死を厭ふ、皆法が本來不生にして、所有無きことを見るを以ての故なり。若し無常を見れば則ち但能く敗壞の苦相のみを生ずるも、若し無性を見れば、餘相無きが故に、則ち能く行苦を具足す、此の[一二]三苦を具するを解脫を得と名づく。當に知るべし、一切の諸法は皆空なり。又空は是れ解脫門なり、此の空は但是れ衆生空のみには非ずして、[一三]亦有法空なり、眼の生ずる時從來する所無しと說くが如く、滅する時も所至の處無し、則ち知る、過去未來の眼は空なり、現在の眼も亦[一四]四大の分別なるを以ての故に空なり。佛の說くが如し、眼の肉形の

【一二】三苦は前の行苦と敗壞の苦相卽ち壞苦と厭生死を苦なりとなす苦苦とをいふ。

【一三】ここにも明に衆生空と有法空、卽ち人空法空をいひ、二空なることを示し居れば、他部も此意味にて見るべきなり。

【一四】四大の分別なりは四大に分別せらるの意にて、此點より法空は所謂析空なりといはる。

の語を以ての故に知る、五陰も亦第一義の故に無なり」。又[六]大空經の中にて說く、若しくは人が此は老死なり某は老死すと言ひ、若しくは人が身は卽ち是れ神なりと說き、若しくは身は異にして神は異なりと說かば、此の言は異るも而も義は同じ。若し此の見有らば我弟子に非ず、梵行者に非ず、若し某は老死すを遮すれば、則ち假名を破し、此は老死なりを遮すれば則ち五陰を破すと」。又說く、生は老死に緣たるを名づけて[七]中道と爲すと。當に知るべし、第一義の故に老死無しと說き、世諦の故に生は老死に緣たりと說くなり」。又瓶[八]相を過ぐれば則ち第一義の故に瓶無きが如く、是の如く、色等の法を過ぐれば、則ち第一義の故に色無し」。又經の中にて說く、若し法にして是れ誑ならば卽ち是れ虛妄なり、若し法にして誑に非ずんば卽ち名づけて實と爲すと」。諸の有爲法は皆變異す、故に悉く名づけて誑と爲す、誑の故に虛妄なり、虛妄の故に眞實有に非ざるなり、[九]偈にて說くが如し。

世間は虛妄に縛せられ　狀は決定せる相の如し。
實には無なるを似有なりと見るも　深く觀ずるときは則ち皆無なり。

當に知るべし、諸陰も亦空なり」。又滅諦を見るが故に說いて得道と名づく。故に知る滅は是れ第一義有にして、諸陰には非ず。若し諸陰にして實有ならば、行者も亦應に見て而して得道すべきに而も實には然らず。故に知る五陰は第一義有に非ず」。又陰の滅するを以て實と爲す。故に知る諸陰は實に非ず、諸陰は是れ實なりと言ふべからず、無陰も亦實なり」。又所有の見らるゝ法は皆癡を以ての故なり。人の眼が誑かさる可からずむば、則ち幻を見ざるが如く、是の如く、若し愚癡無くむば、則ち諸陰を見ず。是の故に、諸陰は第一義有には非ず」。又經の中にて說く、[一〇]有我に隨ふときは則ち是れ動處にして、而も陰の中には我ありと。阿難の說くが如し、法に因りて我を成ず、謂く色陰、乃至識陰に因るなりと」。又諸の上座比丘が[一一]差摩伽に問へるが如し、汝は何れの事を說いて我と爲

【六】この大空經の同一文が身見品第一百三十に引用せらる。
【七】この中道は十二因緣の示す緣起說を中道となす意味のものなり。
【八】三本宮本は想に作る。
【九】これ法句經の偈なること見一諦品第一百九十に引用せらるるにて知らる。
【一〇】無我品第三十四、思品第八十四參照。
【一一】差摩伽はkṣemaka(kh=emaka)ならむ。此名は憍慢品第一百二十八にもあり。道諦聚智論中智相品第一百八十九には差摩伽經を引用す。

故に、假名の想は則ち隨逐せず、譬へば樹有るも剪伐焚燒し灰炭都べて盡きなば樹想は乃ち滅して復隨逐せざるが如く、是の事も亦爾り」。又佛は羅陀に語りて、汝は衆生を破裂し散壞して現在せざらしめよと」。又[四五]一經にて說く、汝陀羅よ、色乃至識を破裂散壞して現在せざらしめよと。故に知る若し衆生を壞せば是れ假名空にして、若し色を破壞せば是を法空と名づく」。又二種の觀あり、空觀と無我觀となり、空觀とは假名の衆生を見ざるなり、人が瓶に水無きを以ての故に空なりと見るが如く、是くの如く五陰の中には人無きが故に空なりと見るなり。若し法を見ざれば是を無我と名づく」。又經の中にて說く、無我の智を得るときは則ち正しく解脫す、故に知る、色性が滅し受想行識性が滅せば、是を無我と名づくと。無我は卽ち是れ無性なり。

問曰　若し無性を以て無我と名づけば、今、五陰は實に無なりや。

答曰　五陰は實には無なるも、世諦を以ての故に有なり、所以は何。佛は諸行は盡く皆幻の如く化の如しと說けばなり。世諦を以ての故に有なるも實有には非ざるなり」。又經の中にて第一義空を說く、此の義は第一義諦を以ての故に空なり、世諦の故に空なるには非ずと。第一義とは所謂色は空にして所有無く、乃至識も空にして所有無きなり。是の故に若し人にして色等の法は空なりと觀ぜば、是れを第一義空を見ると名づくるなり。

問曰　若し五陰にして世諦を以ての故に有ならば、何が故に色等の法は是れ眞諦なりと說くや。

答曰　衆生の僞の故に說くなり。有る人は五陰の中に於て眞實の想を生ずれば、是れが僞の故に、五陰は第一義を以ての故に空なりと說くなり。

問曰　經の中にては、業あり果報あるも、但作者のみは不可得なりと說くにあらずや。

答曰　此れ諸法に因りて作者は不可得なりと說く、是は假名空を說くなり。經の中にて說くが如し、諸法は但假名字のみ、假名字とは所謂無明の因が諸行乃至老死諸の苦の集滅に緣たるなりと。此

【四】羅陀は比丘の名。身見品第百三十參照。
【五】一經は同一經の意。羅陀經あり。

卷の第十二[一]

滅法心品　第一百五十三

問曰　汝は先に三心を滅するを滅諦と名づくと言ひ、已に假名心を滅する因滅を知りたり。今、何をか法心と謂ひ、云何が當に滅すべきや。

答曰　實の五陰心あるを名づけて法心と爲し、善く空智を修して、五陰の空なるを見るときは、法心は則ち滅す。

問曰　行者が五陰の空なるを觀ずとは、五陰の中には常法定法不壞法不變法我我所法無きを謂ふ。此の法無きを以ての故に、其は空なりと言ふも、五陰を見ざるには非ず。

答曰　行者は亦五陰を見ず。所以は何、行者は有爲の緣心を斷じて、無爲の緣心を得ればなり。是の故に行者は五陰を見ずして、但陰の滅を見るのみなり。又若し五陰を見るときは則ち名づけて空とは爲さず、陰は空ならざるを以ての故なり。是の如きの空智は則ち不具足なり。

問曰　行者は色は我無きを以ての故に空なりと見る。經の中にて、行者は此の色の空を見、乃至此の識の空を見ると說くが如し。當に知るべし、色等の諸陰は無きには非ず。

答曰　是の如きの言あるも、但清淨に非ざるのみ。法印經[二]の中にて說くが如し、行者が色等の無常敗壞虛誑厭離の相を見れば、是れをも亦空と名づくるも、但未だ是れ清淨ならず、是の人にして後に於て五陰の滅を見れば、是の觀は乃ち淨なりと。故に知る諸陰の滅を見るなり。

問曰　有爲の緣智を以て何が故に清淨を得ざるや。

答曰　行者は或る時には五陰の[三]相を起すが故に假名心が還生ず、是の故に有爲の緣心は清淨なることを得ざるなり。若し諸陰の滅を證せば則ち五陰は復現前せず、假名を成ずる因緣が滅するが

【一】　三本宮本はここにては分卷せず。以上にて滅諦聚の中假名心とそを滅することとを說きたれば、本品は三心の第二なる法心とその滅とを說く。

【二】　此法印經の同一文が智相品第一百八十九及び見一諦品第一百九十にも引用せらる。想陰品第七十七參照。法印經としては更に一切緣品第一百九十一にも存す。

【三】　三本宮本は想に作る。

破すせしも汝は竟に答へず、猶故らに空を立つ。是の故に一切の諸法は無には非ず。又汝が說く所の無根無緣等の是の事は我等が明す所には非ず、所以は何、佛が經の中にて自ら此の事を遮すればなり、謂く、五事を不可思議あり、世間の事と衆生の事と業因緣の事と坐禪人の事と諸佛の事となり、是の事は一切智人に非ずむば思量し決斷すること能はず、但諸佛にのみ能く法を分別するの智あり。聲聞辟支佛には但泥洹に通達するの智慧あるも、諸法を分別する智の中に於ては但少分を得たるのみ、諸佛は一切の法、一切の種、本末の體性、總相別相に於て皆能く通達す。人の舍宅等の物は壞し易きも成じ難きが如く此の如く空智は得易きも、正しく諸法を分別する智慧は生じ難し。

問曰　佛が道場に坐して得たりし所の諸法の相の如きは、佛の所說の如くに當に是の如くに說くべし。

答曰　佛は一切の法を說くと雖も、一切の種を說かず、解脫の爲ならざるを以ての故なり、佛の如きは諸法が因緣より生ずることを說くも一一の從ふ所の因緣を說かず、但要ず用つて能く苦を滅する者を說くのみ。彩畫等の諸の色、伎樂等の諸の音、諸の香味觸の無量の差別は盡く說くべからず、若しくは說くとも亦大利無し、故に佛は是くの如き等の事を說かざるも、無しとは言ふことを得ず。又人は彩畫等の法を分別することを知らざれば、便ち其は無なりと言ふが如く、汝も亦是くの如し。事を成ずること能はざる所なれば而も便ち是の事無しと說くも、知者に於ては則ち有り、知らざる者が無しと爲すのみ。生盲の人が黑白は無し、我は見ざるが故にと言ふも、見ざるを以ての故に便ち無しとすべからざるが如く、諸色も是の如し。若し、能く自の緣を以て成ぜざるが故に、便ち一切の法無しと言ふも、又諸佛世尊は一切智人にして我等の信ずる所なる佛は五陰ありと說きたまふ。故に知る色等の一切の法は有なり、瓶等の如く、世諦を以ての故に有なり。

なり。又世間は法有りて因と果とが別なきものを見す。(七)又若し果あらば應に自作か他作か無因作かなる[一〇四]べきに、是れ皆然らが、所以は何、法にして能く自體を作るもの有る無ければなり。若し自體有らば何ぞ自作を須ひん、若し自體無くんば何ぞ能く自ら作らん。又法にして能く自體を作るものあるを見ず、故に自作ならず。他作も亦然らず、所以は何、眼と色とは識を生ずるに於て事無きが故に他作ならず、又作の[一〇五]想も無きが故に一切の諸法には作者あること無し。種が此の念――我は應に芽を生ずべし――を作さざるが如く、眼と色とも亦是の念――我等は應に共に識を生ずべし――を作さず。是の故に諸法には作の想あること無し。共作も亦然らず、自と他との過あるが故なり。無因作も亦然らず。若し因無くんば亦果の名も無ければなり。若し四種にして皆無ならば云何ぞ果あらん。若しあらば應に說くべし。(八)又此の果は應に若しくは先に有心にして作るか、若しくは先に無心にして作るかなるべし、若し先に有心にして作らば、胎中の小兒の眼等の身分は誰か有心にして作るや、自在天等すら亦作ること能はず。先に已に說きし業も亦無心なり、是の業を作すに於て過去の中に在らば云何か當に有心にして作すべきや、是の故に業も亦無心なり。若し先に無心にして作さば、云何が他を苦しむる者が苦を得、他を樂しましむる者が樂を得んや。現に業を作すことあるにても亦心を以て分別す、應に是の如く作すべし、應に是くの如く作すべからずと。若し無心にして作さば、云何ぞ此の差別あらん。是の故に先に有心なるも無心なるも、是れ皆然らず。是の如き等の一切の根塵は皆不可得なり。是の故に法無し。

世諦品　第一百五十二

答曰[一〇六]汝は種々の因緣に法は皆空なりと說くと雖も是の義は然らず、所以は何、我は先に說きたり、若し一切にして無ならば、是の論も亦無なり、亦諸法の中にも在らず、是の如くの等にて空を

【一〇五】中論の四不生偈と比較すべし。

【一〇六】麗本は相に作るも、下文には想とあり。三本宮本はここにても想に作れば、今之を取る。

【一〇七】答曰とあるも、之に對する問曰なし。此點は從來の例とは異つて、一見奇なり。されど內容を見れば、此品は世諦有を說くものなれば、前の一異不可說無の四論の如きが後二は勿論無を說くも前二すら結局無をいふに外ならざるに終るを以て、之を反對者が取つて難ずと見て相手とし、之を問曰の論と見做し、それに對して答曰として世諦有を明にする爲に、答曰となせるものならむ。成實論は即ち假有眞空を趣意となす說にして、此點は般若中觀の說と異ることなく、又廣く佛教一般ともいふべき說と一致するものなり。小乘有部並に護法の唯識說法相宗が俗無眞有となすは單に佛教の小部分の說たるのみなり。

ず。理は極まつて此の二なるに而も倶に過あり。是の故に果は無きなり。(二)又若し因中に果あらば、則ち應に更に生ずべからず、有が云何ぞ生ぜん。若し無なるも亦應に生ずべからず、無が云何ぞ生ぜん。

問曰 (三)現見するに瓶を作るに、云何が果無からん。

答曰 是の瓶にして若し先に作られざらむには、云何が作るべきや、其は無なるを以ての故なり。若し先に已に作られたらむには、云何が作るべきや、其は有なるを以ての故なり。

問曰 作る時を作ると名づくるなり。

答曰 作る時有ること無し、[一〇〇]所以は何、所有の作の分は已に作の中に墮すればなり。未だ作られざる所の分は未作の中に墮すが故に作の時無し。又若し瓶にして作あらば應に若しくは過去なるか未來なるか現在なるかなるべく、過去ならば作られず、已に滅せしを以ての故なり、未來なるも作られず、未だ有らざるを以ての故なり、現在なるも作られず、是れ有なるを以ての故なり。(四)[一〇一]又作者に因るが故に作業有りて成ず、是の中にては作者は實には不可得なり、所以は何、頭等の身分は[一〇二]作に於ては事が無きが故に作者無し、作者無きが故に作事も亦無し。(五)又因は果よりも若しくは先なるも若しくは後なるも若しくは一時なるも皆然らず、所以は何、若し先に因にして後に果ならば、因は已に滅盡せるに、何を以て果を生ぜんや、父無きが如き云何が子を生[一〇三]ぜん。若し後に因にして先に果ならば、因が自ら未だ生ぜざるに、云何が果を生ぜんや、父の未だ生ぜざるが如き、何ぞ能く子を生ぜん。[一〇四]若し因と果とにして一時ならば則ち此の理無し、二角の並び出づるが如し。左右が相因たりとは言ふことを得ざればなり。理は極まつて此の三なるに而も皆然らず、是の故に果無し。(六)又此の因と果とは若しくは一なるも若しくは異なるも、二つ倶に過あり、所以は何、若し異ならば則ち應に縷を離れて疊あるべく、若し一ならば則ち縷と疊とは差なければ

【一〇〇】中論にて去時を去となすと比較すべし。

【一〇一】麗本は有に作るも、三本宮本の又を取る。

【一〇二】作るといふ事に關係なしの意。事はハタラキの意。

【一〇三】如無父云何生子の如は全體にかかる。故に父なくんば云何が子を生ぜむや、生ずることなきが如しの意なり。

【一〇四】如父未生何能生子も右と同じ。

問曰　若し意識にして知らずむば、色等の法が應に自體を知るべし。

答曰　(二)法は自ら知らず、所以は何、現在も自ら知るべからざること、刀の自ら割ること能はざるが如くなればなり。過去未來は法無し、故に亦餘心も無し、是の故に意識は自ら知ること能はず。

問曰　若し人にして他心を知る時は則ち意識が能く心法を知るなり。

答曰　(三)人の心が自ら知らざるが如くなるも、亦是の念をも作す、或は心ありと。他心の中に於ても亦復是の如くなるのみ。又若し未來の法なるも亦能く他を知る心を生ずること無し。若し是の如くなるも何の咎あらんや。(四)又意が能く法を緣ぜば則ち多くの過あり、意が緣に到ると及び意識が緣に到らざると應に色等を憶すべからずとの如し。此の過を以ての故に意識は法を知らざるなり。

破因果品　第一百五十一

無を說く者は言く　(一)[九七]若し果あらば、應に因中に先に求那ありて、而して生ずるか、先に求那無くして而も生ずるかなるべきも、二つ倶に過あり。兩手の中に先に聲無くとも、而も能く聲あり、酒の因中に先に酒無くとも亦能く酒を生じ、車の因中に先に車無くとも而も能く車を成ずるが如くなるが故に、因中に先に求那有つて而して果を生ずるには非ざるなり。汝にして若し因中に先に求那無くして而も果を生ずと謂はば、則ち色無き風の[九八]微塵の如きも應に能く色を生ずべし。若し爾らば風にも則ち色あり、金剛等の中にも亦應に香あるべし。又[九九]現見するに白縷は則ち白疊を成じ、黑縷は還黑疊を成す。若し因中に先に求那無くして而も果を生ぜば、何が故に白縷は但能く白のみを成じて黑を成ぜざるや。故に因中に先に求那無くして而も果を成ずるには非

【九七】これ因中有果論と因中無果論とを破するものにして前の繼續と見るべきなり。全品の議論は頗る龍樹の中論の論法と相似たるを注意すべし。求那をいふ點にて見れば勝論派を相手となすが如し。されど勝論派は、佛教者のいふ所にては、因中無果論にして、因中有果論は數論派なり。因中有果と因中無果とを數論派と勝論派とに配當する時は文字は同一なれど因果の概念は決して同一ならず。佛教者は外派を破するに急にしてかかる區別を逸するが常なり。

【九八】微塵は極微にして原子なり。こゝも勝論說を取れるなり。

【九九】以上が因中無果の例、以下が因中有果の例なり。

るも到らざるも倶に聞くべからず、聞くべからざるが故に聲無し。(五)又[九三]有る人は說く、耳は是れ虛空の性なりと、其は物なきを以ての故に虛空と名づく、是の故に耳無し、耳無きが故に聲無し。又聲の因緣もなし、是の故に聲無し。聲の因緣とは、謂く諸大の和合なり、是の和合の法は不可得なり、所以は何、若し諸法にして體が異らば則ち和合は無く、若し異體無くんば云何ぞ自ら合せん。設ひ一處に在るも亦念々に滅す、是の故に和合することを得ざるなり。

破香味觸　第一百四十九

(一)香は取るべからず、所以は何、鼻識は是れ[九四]瞻蔔の香なり、是れ諸餘の香なりと分別すること能はざるを以てなり。意識も香を聞くこと能はず、是の故に意識も亦是れ瞻蔔の香なりと分別すること能はず。

問曰　是れ瞻蔔の香なりと分別すること能はずと雖も、但能く香のみを取る。

答曰　然らず。人が瞻蔔樹を得ざるも、愚癡を以ての故に瞻蔔樹の心を生ずるが如く、是くの如く香體を得ざるも、愚癡を以ての故に而も香心を生ずるのみ。(二)又先に說きたるが如く、香にして若しくは到るも到らざるも而も取らば、二つ倶に過あり、是の故に香無し。

味も亦是の如く、觸も亦無し。所以は何、微塵等の分の中にすら尙觸の知を生ぜざること、先に說きたるが如し。是の故に觸無し。

[九五]破意識品　第一百五十

(一)意識も亦法を取ること能はず、所以は何、意識は現在の色香味觸を取ること能はざること、先に已に說きたり、[九六]過去未來は則ち無し、是の故に意識は色等を取らざればなり。

【九三】　これ勝論說なり。

【九四】　瞻蔔は Campaka にて樹木の名、此の樹は高大にして、黃色の花を持ち、此の花に芳香あり、金色花樹と譯さる。

【九五】　三本宮本はここより第十四卷とす。

【九六】　現在實有、過未無體說を根本となすが故に此言あり。

問曰 [九〇]隨つて、眼が能く見る時を名づけて知境と爲す。

答曰 若し眼にして到らざるを亦知境と名づくれば、一切處の色は應に盡く是れ知境なるべし、是の故に到ると到らざると倶に見ること能はず、故に知る色は見るべからず。(五)又若し先に眼と色とありて後に眼識が生ぜば、是の眼識は則ち依無く緣無し、若し一時ならば則ち眼と色との因緣にて識を生ずとは名づけず、一時にては、相因たること無きが故なり。」又眼は是れ四大なり、若し眼にして能く見んか、耳等も亦應に能く見るべし、同じく四大なるが故なり、色も亦是の如し。」又是の眼識は應に若しくは有の處にても若しくは無の處にても二つ倶に過あるべし、所以は何、若し眼識にして眼に依らば是れ則ち有の處なり、若し物の無き處ならば則ち依止することを得ず。若し汝にして識は眼の少分の處に於て生ずれば、若しくは遍に生ずるも、若しくは二眼の中にて、一時なるも、識を生ずるとき則ち有の處なりと謂はば、有の處は則ち有分なり、是くの如くむば則ち衆識を以て一識を成ずるなり。是くの如きの過あり、亦多識が一時に生ずるの過もあり」、又一一に分を識りて、[九一]有分を識ること能はずむば應に識るべきに而も實には分あること無し。是くの如きの過あり。若し無の處ならば則ち應に眼に依るべからず。

破聲品 第一百四十八

無を說く者は言く (一)一語すら尙ほ無し、所以は何、心は念々に滅し聲も亦念々に滅すればなり。[九二]富樓沙と說くが如き是の語は聞くべからず、所以は何、隨つて、富を聞く識は樓を聞かず、樓を聞く識は沙を聞かざればなり。一識にして能く三言を取ること有ること無し。是の故に識は能く一語を取ること無し、故に知る聲は聞くべからず。(二)又散心は聲を聞くも、定心ならば則ち聞くこと能はず、定心の所知は是れ實なり、是の故に聲は聞くべからず。(四)又是の聲にして若しくは到

【九〇】 隨つてとは何れの時にての意。梵語の時を示す關係代名詞を考へて解すべし。

【九一】 麗本は有分あることなしに作る。三本宮本は單に分とす。今後者に據る。

【九二】 富樓沙は Puruṣa の音を寫せしもの、人の意なれど、我を指し、譯して神我といふ、之を富(pu-)樓(ru-)沙(ṣa)と三綴に分つて論ずるなり。

亦更に餘分の先分に過ぐるに由るが如し。過ぐることなきを以ての故に此の分の論無し。

又[八八]色等も亦無なり、所以は何、(一)眼は細色を見ること能はず、意は現在の色を取ること能はず、是の故に色は取るべからざればなり。(二)又眼識は是れ色なりと分別すること能はず、意識も過去に在りて色中に在らざるが故に能く色を分別する者有ること無し、分別無きが故に色は取るべからず、(三)又初識は色を分別すること能はず、第二識等も亦復是の如し、故に能く色を分別する者有ること無し。

問曰 眼識が色を取り已つて後に意識を以て憶念す、是の故に分別無きにはず非ず。

答曰 眼識は色を見已れば卽ち滅し、次いで意識を生ず、是の意識は色を見ず、見ずんば云何が能く憶せん[八九]や。若し見ずして而も能く憶せば、盲人も亦應に色を憶すべきに、而も實には憶せず、是の故に意識は憶すること能はざるなり。

問曰 眼識より意識を生ず、是の故に能く憶念するなり。

答曰 然からず。所以は何、一切の後心は皆眼識に因りて生ずれば皆應に能く憶すべし、又終に應に忘るべからず、彼より生ずるを以ての故なり。而も實には然からず。故に知る意識も亦憶すること能はず。虛妄を憶するが如く、色瓶等の萬物を取るも亦皆虛誑にして、無なるを而も妄に取るなり、是の故に一切の物無し。(四)又若し眼の見ることを說くに色に到て見ると爲さむや、到らずして能く見ると爲さむや。若し到るならば、則ち見ること能はず、眼には去る相なければなり。是の事は先きに明したり。若し到らずして而も見るならば、應に一切處の色を見るべきに、而も實には見ず、故に知る、到らずして能く見るには非ず。

問曰 色が知境に在るときは則ち眼は能く見るなり。

答曰 何を知境と名づくるや。

【八八】以上にて總論的のものを終りたるなり。而してここより色の論に入り、以下に別品に於て聲香味觸意識と續き更に破因果品に及ぶ。

【八九】此點よりいへば、五倶の意識を認めざることとならむ。

すること能はずむば、他人の所執は自然に應に成ずべし、他の論が成ずるが故に汝が法は則ち壞す。若し因緣の成ずべき有らば則ち名づけて無とは爲さず。

立無品　第一百四十七

[八四]無を說く者は言く　汝は言說を以て空を破すと雖も、然れども諸法は實に無なり、諸の根塵は皆不可得なるを以ての故なり。所以は何、諸法の中には[八五]有分の取るべきもの有ること無ければなり。是の故に一切の法は取るべからず、取るべからざるが故に無なり。汝にして若し有分は取るべからずと雖も、諸分は取る可しと謂はば、是の事は然らず、諸分の中にては心を生ぜざればなり。所以は何、麁瓶等の物ならば取るべきが故なり。又分は有分を作さず、所以は何、有分に因るが故に分を說く、有分にして無なるが故に分も亦無なり。又陀羅驃、求那無くんば分も無し、是の故に分は無し。又若し細分を見るときは則ち應に常に分の心を生じて瓶の心を生ぜざるべければなり。所以は何、若し常に分を念ぜば終に應に瓶の心を生ずべからざればなり。又若し先に分を憶して後に瓶の心を生ぜば則ち瓶の心は應に久しうして乃ち生ずべきに、而も實には久しからずして生ず、故に分を念ぜず。又若し瓶を見て分を分別する心を生ぜざるも、即ち瓶の心を生ず。又一切の分は無なり、所以は何、一切の分は皆分析し壞裂せば乃ち微塵に至り、以て[八六]方に塵を破せば終には都無に歸す可ければなり。又一切の諸法は空竟して必ず空智を生ず、是の故に第一義の中には諸分は皆無[八七]なり。又若し分を說かば則ち二諦を破す、所以は何、若し人にして有分無くして但諸分のみ有りと說かば則ち去來見斷等の諸業無く、是くの如くならば則ち世諦なし、汝は第一義を以て空と爲せば、第一義の中にも亦諸分無し、故に知る但諸分のみを說かば則ち二諦に入らず、二諦に入らざるが故に無なり。又若し法にして過ぐべくむば即ち是れ無なりと爲す、分の有分に過ぐるに因り、

【八四】これ即ち成實論主自らを指し、而して以下自身の說を述ぶ。而もこれ第一義諦にて論じ居るなり。滅諦聚の中前品までにて假名有を說き、此品よりは假名心を滅するを說くなり。

【八五】有分は部分を有するもの(avayavin)にして、全體といふに當る。

【八六】或は方を以て塵を破せばとも讀み得べきか。然らば微塵にも方あるべければ、猶未だ細極至微の分まで分析し至れるにあらず。更に進めば無となる外なし。微塵は極微原子のことなり。

【八七】此點より見て、ここの一切無は第一義諦よりいふものなること明なるべく、從つてこれ成實論主の說なり。

爲すが故に不可說と說くのみ。

破無品　第一百四十六

問曰　無論の中に何等の過ありや。

答曰　若し無ならば則ち罪福等の報、縛解等の一切の諸法も無かるべし。又若し所有無しと執せば、是の執すらも亦無かるべし。說者も聽者も無きを以ての故なり。又有無等の論は皆信を以ての故に說く、若しくは〔八三〕見知を信じ若しくは比知を信じ若しくは經書に隨ふも、若し所有無しと說かば、則ち此の三の中に在らず。汝が意にして、或は我は經書に隨ふと謂はば、是の事は然らず、經書の意も亦解し難ければなり、或時は有と說き或時は無と說けば、云何ぞ信を取らんや。若し比知を信ぜば、要ず先に現見して然して後に比知するなり。又瓶等の法は今現見するに有り、能く心を生ずるを以ての故なり、能く心を生ずるに隨はば則ち此の法あり、故に無には非ざるなり。又今瓶や瓮等は現に差別あり、若し一切にして無ならば何ぞ差別有らんや。汝が意にして或は邪想を以ての故に分別有りと謂はば、何が故に空中に於ても瓶等を分別せざるや。又汝にして若し癡を以ての故に物の心を生ずと謂ふも、若し一切にして無ならば此の癡も亦無なり、何に由りて而も起らむや。又汝意にして一切の法は無なりと謂はば、是の知は何の緣にて生ずることを得しや。諸知は、緣なきを以てしては、生ぜざればなり。物を知るを以ての故に知と名づく、是の知は應に無と言ふべからず。又若し都無ならば、今一切の人は應に意の所爲に隨ふべきに、而も諸の善人は皆布施持戒忍等の善法を樂しみて、不善法を遠離す、故に知る無には非ず、又瓶等の法は今現に知るべし、而も汝は現在に皆無しと言ふ。無法を以ての故ならば亦應に經書をも信ずべからず、然らば則ち何の因緣の故に一切無と說かむや。故に一切無といふ是の事は應に明にすべし。若し因緣を以て明に

〔八三〕見は現に通ず。故に現知と同じ。現量なり。比知は比量、經書に隨ふは聖敎量なり。經書は多くはヹーダ又はヹーダの六支等のスムリティなり。

了することあることとなし。香を聞いて亦香に非ざる法をも知ることを得、味を甞めて亦能く味に非ざる法をも知ることあり。是の故に要ず色を以て陀羅驃を了し、然る後に知るべしといふ、是の事は然からず。

問曰　若し色の了するは見の中に於ては因に非ずとなすも、若し數量等の法ならば不可見なる陀羅驃の中及び風に在れば、亦應に可見なるべし。

答曰　我が法にては色を離れては更に餘法の見るべき無し、故に知る法の中にて色の生ずること有るに隨つて、則ち眼が能く見るなり、眼が色を見已つて卽ち瓶想を生ず、若し法の中にて色の生ずること無くんば、此の中には眼ありと雖も瓶に異るの想を生ぜざるなり。是の故に若し色等を離れて別に瓶ありとは此の理無きなり。

破不可說品　第一百四十五

問曰　不可說論の中に何等の過ありや。

答曰　實法は一異の中に於て不可說なるものあること無し、所以は何、因緣譬喩の此を以て不可說を知るものあること無ければなり。色等の法は實有なるが故に不可說には非ず。又諸法にては各ゝ自相あり、惱壞は是れ色の相にして更に異相なきが如し、云何んが不可說と名づけんや。又識の差別に隨ふが故に法には差別あり、眼識を以て色を知つて、聲等を知らざるが如し。是の故に此の中には不可說無し。又色は是れ色入の所攝にして聲等の攝に非ず。若し汝にして不可說なる者を有らしめんと欲せば、色は是れ色なりとは是れ可說にして、色は是れ非色なりとは是れ不可說なり。聲等も亦是の如し。又諸法には次第の數あり、若し不可說ならば、則ち諸法には數なし、所以は何、第一と第二とは相異らざるが故なり。故に知る實には不可說の法なし、但だ假名の中に於て一異と

のみ、是の故に色が瓶を了するには非ず。又若し可見の法を以て餘法を了して可見ならしめば、瓶等の不可見の法を以て色を了して色も亦應に是れ不可見なるべし。又瓶も應に二種なるべし、亦は可見、亦は不可見なり。可見不可見の法と爲して了せらるるを以ての故なり。又若し要ず色等の法を以て了するが故に眼等の根も知るべくむば、色相は應に是れ眼根の所知なるべからず、所以は何、汝が法にては、色相に因るが故に色は見るべきものにして、是の色相は更に相有ること無ければなり、然らば則ち色相は應に不可見なるべし。是の故に然らず。又若し色を以て了するが故に見るべくむば、一切の諸根は盡く應に陀羅驃を知るべし、耳根も亦應に虛空を知るべし、聲を以て了するが故なり。又應に身根を以て風を知るべし、觸を以て了するが故なり、而も汝が法にては然らず、是の故に此が法を了すること無し。

問曰　餘法は了することを爲すこと能はず、但色のみが能く了することを作す。

答曰　然らず、是の中には因緣の但色のみが能く了することを爲して、而も餘法は能はざること有ることなければなり。汝が[八〇]大にして多なる陀羅驃ならば、是の中の色は可見なりと說くが如く、是の如くならば則ち色に因るが故に色を得、應當に色相を以て色を了し、然る後に得べく、但色のみが能く了することを爲さず、若し是くの如きの說なるも猶先過を離れず。又異時に色の心を生じ、異時に瓶の心を生ず、是の故に縱ひ色が能く了するも、瓶に於て何の益ぞ。又盲人の如きは瓶量を習ふが故に眼根を失すと雖も、觸にても亦瓶を知る。[八一]是の故に但色のみが能く見の因と爲るには非ず。又盲人の身根も亦能く風を知る、是の故に但色のみが了するが故に能く知を生ずるには非ず。又汝が經の中にても亦說く、[八二]觸は來りて身に觸る、地水火には非ず當に知るべし不可見の相は是れ風なりと。此れも亦然らず、所以は何、盲人が此の風を知る時にも、亦此の觸は是れ可見と爲んや、可見に非ずと爲んやを知らざればなり。又人の眼は數量等の法を見るも、是の中にては色が

【八〇】　大にして多なる陀羅驃とは大は三微果以上のもの、多も極微の三以上のものより成る實をいふ。これにて初めて可見となるなり。

【八一】　大正大藏經は如に作る。誤植なり。

【八二】　勝論經には此言なし。意味は觸は所謂合中知にて、實際觸れて感覺が起るものにて、風は來りて觸れて感覺せらるるも、地水火は其觸が地水火の方より來るにはあらずといふなり。

答曰　若し爾らば是の瓶は四根にて取るなり。亦鼻根を以ても泥を嗅ぎ、舌根にても泥を甞むべし。

問曰　鼻根舌根は瓶を取ること能はず、所以は何、闇中にては若しくは瓶を嗅ぐか、若しくは瓮を嗅ぐか、若しくは瓶を甞むか、若しくは瓮を甞むかを分別すること能はざればなり。

答曰　瓶瓮を分別すること能はずと雖も、而も泥中に於て知を生じて、泥を嗅ぎ泥を甞むと謂ふ。又若し瓶を埋めて口のみを出さば、若しくは見るも若しくは觸るるも、定んで是れ瓶なるか是れ瓮なるか是れ破瓦なるかを知ること能はず。故に知る眼根身根も亦應に瓶を取るべからず。又闇中に於て瓶の心を生ずと雖も、金瓶銀瓶を分別すること能はず、故に知る眼根身根も亦瓶を取ること能はざるなり。又鼻根舌根は能く花果乳酪等の法を取るも、眼根身根は則ち取ること能はず、華等を見ると雖も香臭美惡及び甘酢等を分別すること能はざるが如し。是の故に若し眼根身根は陀羅驃を知り、而も鼻根舌根は知らずと謂はば、是の事あること無し。鼻根舌根が陀羅驃に異ることを得ざるも、而も亦分別することあるが如く、眼根身根も亦是の如く、陀羅驃に異ること無しと雖も而も亦分別することを得。又五根の中にては假名の知を取ること有ること無し。故に知る假名は眼身鼻舌の諸根の得る所に非ず。第六根の中には知有りて能く假名を知る。所以は何、意識は能く一切の法を緣ずるが故なり。又眼にして若し能く色を見、非色を見ば、亦應に能く聲等をも見るべし、若し爾らば則ち復耳等の諸根を須ひざるに、是の事は不可なり、是の故に眼根身根を以て陀羅驃を取るにはあらず。

問曰　色を以て陀羅驃を了するときは、則ち眼が能く見るなり、一切の色法に異るを皆見るべきには非ず。

答曰　色を以て瓶を了すとは是の事は然らず、所以は何、誰か瓶を作るか。色は但是れ和合する

應に但色の中にてのみ地想を生じて我は地を見るとは謂ふべからず、香等も亦是の如し、而も實には但色の中のみにて地想を生ず。故に知る色等が是れ地なるには非ず。名字の因縁を假らば、一分の中にても亦假名の名字を說くべし。人の樹を伐るを、亦は樹を伐るとも言ひ亦は林を伐るとも言ふが如し。又諸の求那[七六]邊と陀羅驃とは是の中の所有の因緣とは異る。是の因緣を以て一論を成ぜず。又[七七]僧佉人は說く、五求那は是れ地なりと。是れも亦然らず、所以は何、先に說けるが如く、聲は色等を離れたるものにして、念々に滅し相續して更に生ずれば、四大を成ずる因には非さればなり。故に知る一切の四大に盡く聲有るには非ざるなり。

破異品　第一百四十四

問曰　異論の中に何等の過あるや。

答曰　色等の法を離れては更に地無きなり。何を以てか之を知る。色香味觸を離れては、他の心を生ぜずして、但色等の法の中に於てのみ心を生ずればなり。所以は何、色は異にして聲等は異なれば聲等を待たずして而も色の心を生ずるが如く、若し色等を離れて別に地あらば、亦應に色等を待たずして地の心を生ずべきに、而も實には待たざるに非ざればなり。是の故に別に他あることなし。

問曰　餘法を待たざるに非ず、要ず色相を待つて而も色の心を生ずればなり。

答曰　[七八]破總相品の中にて當に說くべし。色を離れて別の色相無ければ、是の故に然らず。又地等に異るの法は根の能く知ること無し。故に知る別の地等無し。

問曰　地等は二根を以て取[七九]るべし、謂く身根と眼根となり。何を以て之を知るや。眼にて見て是れ瓶なりと知り、身根を以て觸して亦是れ瓶なりと知ればなり。是の故に汝が根の地を取ること無しと言ふは是の事は然らず。

【七六】邊の意味明確ならず。

【七七】僧佉は Sāṃkhya 僧佉人は數論師なり、數論說にていふ求那は地水火風空の五を指す如き意味とは全く異る。故にこの求那は勝論說の求那の意味を適用せるものなり。數論說にては色聲香味觸は五唯と稱せられ、五唯より五大が生ずといはるるが故に、五大の一たる地は勝論說に當てていへば五求那より成ることとなるなり。

【七八】破總相品なる名の品なし。滅法心品第一百五十三などを參照すべし。

【七九】これも勝論說にていふ所なり。

らず。又世間は皆地の色、地の香、地の味、地の觸を說く、是れ色の色なりと言ふこと有るを見ず、要ず異法の相を以て示す、某の人の舍等の如し。

問曰 此は異法の相を以て示すにはあらず、卽ち自法を以て自ら示すなり、[七〇]石人の手足の如し、所以は何、手足を離れて更に石人無ければなり。是の如く色等を離れずして是れ地なりと雖も、亦自體を以て自ら示すに何の咎有らんや。

答曰 若し地は色等を以て自ら示すと說かば、此の理有ること無し。汝は石人の喩を說くと雖も是の喩は然らず、所以は何、若し石人の手を示す時には餘の身を以て石人と爲すものなれば、又空中にも[七一]亦有と說くべければなり。石人の身を說く時、爾の時には石人は更に餘有ることなきも而も亦說くことを得るが如し。佛が是の身中には髮毛血肉等有りと說くは、此の髮等を離れては更に身の是れ髮等の所依止處たるものあることなきが如し。別の依處無しと雖も、而も亦說くべし。故に知る石人を說くは亦是れ妄說なり。汝にして若し石人を以て地を成ぜば亦地も無きなり。[七二]汝の經の中にて說く、色香味觸を有するものは是れ地なりと。是の地には卽ち身の如きもの無し、故に知る色香味觸が卽ち是れ地なるには非ず。又諸の求那の中にては相示(あいしめ)すを得ず、色に香有りと言ふことを得ざればなり、但地は色香味觸を有すと言ふことを得るのみ。故に知る一には非ず。又色等の心と地の[七三]心とは各異る、故に知る色等は地には非ず。又色等の名は異、地の名は亦異なればなり。

問曰 心の異と名の異とは[七四]皆和合の中に異あるなり。

答曰 若し心と名とが但和合の故にのみ有ならば和合は但是れ名字なるのみ、然らば則ち地は但名字有るのみにして一論無きなり。[七五]又地は一切の根を以て知るべし。何を以てか之を知る。人は是の念を作せばなり、我は地を見、地を嗅ぎ、地を嘗め、地に觸ると。若し色香味觸が是れ地ならば、

【七〇】石にて彫める人ならむ。

【七一】麗本は可有說に作るも、三本宮本の可說有の方可なり。石人の手といふ時は手の外のものを石人の身と考へ居るものなるが、手を除いて、卽ち手等以外の足にても胴にても除いて、何處に石人あらむ。之をしもありとなし居るが故に空中にもありといはれ得る不合理に陷るなり。石人の手を除くも其他は猶存すといはむも、手は任意の一例なれば、之の何れにも其まま及ぼすを得。故に石人はなきこととなるなり。

【七二】勝論經の二、一、一、に於ける地の定義なり。ここには勝論說を引用するも、この一論が勝論說なりといふにはあらず。次の異論にも勝論說を引用すればなり。これ隨時破すべきものを引用したるに過ぎず。

【七三】色等を知る心、地を知る心なり。

【七四】心の異は色等を知る心と地を知る心との異、名の異は色と地との名の異なり。この異は和合句義中に異あるに外ならずとなす意味なり。

【七五】これも勝論說なり。勝論經にも此言あり。

短、大小、師徒、父子及び貴賤等の如し、實法は待して成ずる所無し、所以は何、色は餘物に待して更に聲等を成ずるにあらざればなり。」又空を假らずして破せば是れ假名有なり、〔六八〕樹に依りて林を破し、根莖に依りて樹を破し、色等に依りて根莖を破するが如し。若し空を以てして破せば是れ實法有なり、色等は要ず空を以て破するが如し。（二十）又空行處に隨ふは是れ假名有にして、無我行處に隨ふは是れ實法有なり。（二十一）又四論あり、一には一、二には異、三には不可說、四には無なり、是の四種の論には皆過咎あり。故に知る、瓶等は是れ假名有なり。一とは色味香觸が即ち是れ瓶なりとし、異とは色等を離れて別に瓶ありとし、不可說とは色等が是れ瓶ありとも、色等を離れて瓶有りとも說くべからずとし、無とは謂く此の瓶無しとなすものなり。此の四論は皆然らず。故に知る瓶は是れ假名なり。

〔六九〕破一品　第百四十三

問曰　此の一等の四論に何れの過有りや。

答曰　一論の過とは、謂く、色等の法の相は各々差別せるに、若し一瓶のみと爲さば、是れ則ち不可なり。」又色等の一一を名づけて地とは爲さざれば、和合するも云何ぞ地有らん、所以は何、若し一一が馬にして名づけて牛と爲さずむば、云何ぞ和合すとも牛と爲さむや。

問曰　一一の麻は聚を成ずること能はざるも和合すれば能く成ずるが如く、是の如く色等の一一は地を成ずること能はざるも和合すれば能く成ず。

答曰　然らず。所以は何、麻の聚は是れ假名有なり、一等は是れ實法の中にて論ず、云何ぞ喩と爲ん。」又色香味觸は是れ四法なり、地は是れ一法なり、四は應に一と爲るべからず、若し四にして一と爲らば一も亦應に四と爲るべきに、是の事は不可なり、故に知る色等が即ち是れ地なるにはあ

〔六八〕樹を一一取去れば林なるものは破せられて無となる。かかるものを假名有となすは大乘にても一般的なり。

〔六九〕以下破一、破異、破不可說、破無の四品は前節の繼續なり。

謂うて是れ瓶なりと言へばなり。實法の中にては知は更に待する所無し。（十三）又假名の中にては疑を生ず杌なりや人なりやとなすが如し。色等の中にては疑を疑を生ぜず、色を爲さむや聲と爲さむやと。

問曰　色等の中にても亦疑有り、色ありや、色無きやと。

答曰　然らず。若し色を見れば、終に是れ聲なりやとは疑はずして、更に餘の因縁を以ての故に、色有りや色無きやと疑ふのみ。色は空なりと說くを聞いて、而も復色を見るときは則ち疑を生じて、有と爲さむや無と爲さむやと言ふが如し、若し滅諦を見れば此の疑は則ち斷ず。

問曰　滅諦の中にても亦疑あり、滅ありと爲さむや、滅無きやと。

答曰　所執の中に於て疑を生ずるものにして、滅諦の中にてには非ず。若し滅有りと執し亦滅無しと執するを聞かば中に於て疑を生ず、有と爲さむやと無と爲さむやと。是の人は爾時には滅諦を見ざるなり。所以は何、滅諦を見れば復疑あること無ければなり。故に知る疑を生ずる處は是れ假名有なり。（十四）又一物の中に於て多識を生ずることを得るは是れ假名有なり、瓶等の如し。實法の中にては爾らず、所以は何、色の中にては耳等の諸識を生ぜざればなり。（十五）又多[六七]入の所攝は是れ假名有なり、瓶等の如し。是の故に、有る人は說く、假名有は四入の所攝なりと。實法は多入の所攝たるを得ず。（十六）又若し自體無くして而も能く作あらば是れ假名有なり、人の作を說くも而も人の體、業の體は實には不可得なるが如し。又所有る是の怨親等を分別するは皆是れ假名にして、實法有には非ず、所以は何、若し直に色等の法の中に於てならば怨親等の想を生ぜざればなり。（十七）又來去等、斷壞等、燒爛等の所有ゆる作事は皆是れ假名にして、實法有には非ず、所以は何、實法は燒けず、壞せざるが故なり。（十八）又罪福等の業は皆假名有り、所以は何、殺生等の罪、殺等を離したる福は皆實有には非ざればなり。（十九）又假名有は相待の故に成ず、彼此、輕重、長

【六七】入は處と同じ。十二入即ち十二處の多くを多入といへるなり。

に於ては動ず、謂く身が是れ衆生なりとし、心が是れ衆生なりとし、色等が是れ瓶なりとし、色を離れて瓶なりとす。是の如き等なるも、實法の中にては心は定まりて動ぜず、我は色を見、亦聲をも見る等と言ふことを得ず。(八)又可知等の中にて不可說なるをも亦名づけて有と爲す、是を假名と爲す、瓶等の如し。故に知る瓶等は是れ假名有なり。所以は何、色等の法は可知等の中にての不可說と名づけざればなり。又色等の法の自相は可說なるも、瓶等の自相は不可說なるが如し、故に知る是れ假名有なり。(九)或は有を假名相と說く、是の相は餘處に在りて假名の中には在らず、經の中にて業は是れ智者不智者の相なりと說くが如し。若し身口意にして能く善業を起さば是を智者と名づけ、身口意にして不善業を起さば是を智者と名づけ、身口意にして不善業を起さば不智者と名づく。身業と口業とは四大に依止し、意業は心に依る、此の三事を云何ぞ智者不智者の相と名づけん、故に知る假名には自相あること無し。(十)又假名相は餘處に在りと雖も亦復一ならず、人の苦惱を受くるを[六六]稍の心に入つて惱壞するが如しと說くが如し、是れ色の相なり。又受は是れ受の相なり、亦人の中に於ても說く、佛の說くが如し、智者愚者俱に苦樂を受くも、而も智者は苦樂の中に於て貪恚を生じて多少等を取らずと。相は是れ想の相なり、亦人の中に於ても說く、我は光明を見、色の作を見ると說くが如し。起は是れ行の相なり、亦人の中に於ても說く、是の人は福行を起作し、亦罪行及び不動行をも起すと說くが如し。識は是れ識の相なり、亦人の中に於ても說く、智者は法を識るは舌の味を甞むるが如しと說くが如し。是の故に若し餘處に在りて說くも、亦多相を說くは是れ假名相なり。色等の相は餘處にも在らず、亦多相も無し。(十一)又若し法にして一切の使の爲に使はるれば是れ假名有なり、實法は使の爲に使はれず、諸使が人を使ふを以ての故なり。(十二)又假名の中にては知の生ずること無し、先に色等の中に於て知を生じ、然る後に邪想を以て分別して、我は瓶等を見ると言ふ。瓶の中にては知は要ず色等に待す、所以は何、色香味觸に因りて

【六六】註に矛の屬なりとあり。

假名相品　第一百四十二

問曰　云何が瓶等の物は假名なるが故に有にして、眞實には非ずと知るや。

答曰　[六二](一)假名の中にては示相あるも、眞實の中にては示相なければなり。此の色は是れ瓶の色なりと言ふも是れ色の色なりと言ふことを得ず、亦是れ受等の色なりとも言ふことを得ざるが如し。(二)又燈は色の具を以て能く照らし、觸の具を以て能く燒くも、實法には是の如くなるを見ず、所以は何、識は異の具を以て識なるにはあらず、受も亦異の具を以て受なるにはあらざればなり。故に知る具あるは是れ假名有なり。(三)又異法に因りて成ずるを假名有と名づく、色等に因りて瓶を成ずるも、實法は異に因りて成ずるにはあらざるが如し、所以は何、受の異法に因りて成ぜざるが如くなればなり。(四)又假名は多く能くする所あり、燈の能く照らし能く燒くが如し、實法には是の如きを見ず、所以は何、受が亦は受し亦は識ること能はざるが如し。(五)又[六三]車の名字は輪軸等の中に在るも、色等の名字は物の中に在らず、是の如きの差別あり。又輪軸等は是れ車を成ずるの因緣にして、是の中には車の名字は無し。然らば則ち車の因緣の中には車の法なく、而も此に因りて車を成ず、故に知る車は是れ假名なり。(六)又色等の名を以て色等を說くことを得るも、瓶等の名を以ては[六四]瓶等を說くことを得ざるが如し、故に知る瓶等は是れ假名なり。(七)又假名の中にては心が動じて定まらざることあり、[六五]人が馬を見るに、或は馬の尾を見ると言ひ、或は馬の身を見ると言ひ、或は皮を見ると言ひ、或は毛を見ると言ふが如し。或は箏の聲を聞くと言ひ、或は絃の聲を聞くと言ひ、或は華を嗅ぐと言ひ、或は華の香を嗅ぐと言ひ、或は酪を甞むと言ひ、或は酪の味を甞むと言ひ、或は人に觸ると言ひ、或は人の身に觸ると言ひ、或は人の臂に觸ると言ひ、或は人の手に觸ると言ひ、或は人の手の指に觸ると言ひ、或は指の節に觸ると言ふ。意識も衆生等の中

【六二】以下假名有の辨釋に二十種あり。

【六三】前品の初めの偈を見よ。

【六四】瓶は如何なるものなりや又は何より成るやを說くに瓶なりとか瓶より成るとかにては說明とならざればなり。

【六五】群盲評象と比較すべし。

化の如くにして凡夫を誑かし、目づけて怨と爲し賊と爲す、箭の如く瘡の如く苦空無我にして、但是れ生滅敗壞の相のみと」。

問曰 倶に是れ所有無きの心を何が故に或は邪見と名づけ、或は第一義と名づくるや。

答曰 若し人にして未だ眞の空智慧を生ぜざれば、我心有るが故に、無我と說くを聞かば、即ち恐懼を生ず、佛の、若し凡夫人にして、空無我にして更に復作さずと聞かば、則ち大に驚怖すと言ふが如し、故に知る、未だ空智を得ずむば、我心あるが故に、泥洹を怖畏す、則ち邪見と爲すも、眞の空智を得ば本來無と知りて則ち畏るゝ所無し」。又此の人にして未だ眞空を得ずして所有無しと見るときは則ち惡見に墮す、謂はゆる斷見邪見なり。若し是の人にして先に世諦を以ての故に我ありと知り、業の果報を信じ、後に諸法の無常生滅の相なりと觀じ、漸々に滅を證して我心無くむば即ち貪心を滅す。若し所有無しと說くを聞くも則ち過咎無し、故に世諦を說く」。又有る外道が佛を謗じて、瞿曇沙門は[六一]眞實神を破すと、是の故に佛は言ふ、我は世諦を以て衆生ありと說けば、我正見を解するものゝ中にて、衆生ありて生死に往來すと說くも、是を正見と名づくと」。但凡夫のみは邪念を以ての故に實無の衆生の中に於て說いて實有と言へば、此の邪念を破するも衆生をば破せず、瓶等の物をば假名を以て說くが如し。是の中にて、色等が是れ瓶なるには非ず、色等を離れて別に瓶あるにも非ず、是の如く、色等の諸陰が是れ衆生なるには非ず、亦色等の陰を離れて別に衆生あるにもあらず、色等に因りて假名を過ぐるが如く、是の如く、滅相を以て色等に過ぐること。譬喩を以ての故に義をして解し易からしむ、猶畫かける燈をも亦名づけて燈と爲るも而も實には燈の用無きが如し、是の如く瓶ありと說くと雖も、眞實有には非ず、五陰を說くと雖も第一義には非ざるなり。

【六一】我をいふ。カミにあらず。

り。」又若し能く道を得る智慧を成就すれば、乃ち爲に實法を說く可し佛の念言するが如し、「羅睺羅比丘は今能く道を得る智慧を成就せり、當に爲に實法を說くべし」[五七]と。譬へば熟せる癰は之を壞ぶること則ち易きも、生なるときは則破り難きが如く、是の如く世諦智を以て心をして調柔ならしめ、然る後に當に第一智を以て壞すべし、又經の中にて說く、「先に諸法を分別することを知りて、然る後に當に泥洹を知るべし」と。行者は先に諸法は是れ假名有なりや是れ眞實有なりやを知り、而して後に能く滅諦を證するなり。又諸の煩惱は先に麁に後に細に、次第に滅盡すること、髮毛等の相を以て男女等の相を滅し、色等の相を以て髮毛の相を滅し、後に空相を以て色等の相を滅するが如し。[五八]榍を以て榍を出すが如し。故に世諦を說き、又世諦を以ての故に中道を成ずることを得るなり。所以は何、五陰相續して生ずるが故に斷ならず、念念に滅するが故に常ならず、此の斷常を離るゝを名づけて中道と爲せばなり。經の中にて說くが如し、「世間の集を見れば則ち無見を滅し、世間の滅を見れば則ち有見を滅す」と。世諦あるを以て則ち集を見、滅を見るべし、故に世諦と說く。世諦を以ての故に佛の法は皆眞實なり、謂く、有我無我等の門なり。若し世諦の故ならば、有我も咎無く、第一義を以ての故ならば無我を說くも亦實なり。又世諦を以ての故に[五九]置答の難あり、若し實法に就かば則ち皆答ふべし。又若し實に衆生ありと見ば、是れ大癡冥なり、若し實に無しと言ふも亦癡冥に墮す、所以は何、此の有無の見は則ち斷常と爲す、諸の行者をして有邊を出づることを得て復無邊に墮せしむればなり。若し世諦なくんば何れに由りてか出づることを得ん。又若し人にして未だ眞の空智慧を得ずして衆生なしと說かば、是を邪見と名づく、衆生無きに生死を受くるを以ての故に、邪見と名づくるなり。若し空智を得て衆生無しと說かば、是れ則ち咎無し。[六〇]經の中にて、阿羅漢比丘尼が惡魔に語りて言く、「汝は何を以て衆生と爲すや、但空なる五陰聚のみにして實に衆生無し」と說くが如し。又說く是の身は五陰の相續のみにして空にして所有無し、幻の如く

【五七】三慧品第一百九十四に同一文の引用あり。具足品第一四無礙品第二百一參照。

【五八】三本宮本は楔に作る。意は相同じ。

【五九】置答前に出でたり。讚論品第十五參照。

【六〇】無我品第三十四に此經の同一文あり。そこにては聖比丘尼とあり。

問曰　何が故に此を以て假名とするや。

答曰　經の中にて佛は說く、[五五]

輪と軸とが和合するが故に　名づけて車と爲すが如く、
諸陰が和合するが故に　名づけて人と爲すと。

又佛が諸の比丘に語るが如し、諸法は無常苦空無我なり、衆緣より生じて決定性なく、但名字のみあり、但憶念のみあり、但用のみあるが故なり、此の五陰に因りて種種の名を生ず、謂く衆生人天等なりと。此の經の中にては實有の法を遮すが故に但名のみありと言ふなり。又佛は二諦を說く、眞諦と俗諦となり、眞諦とは謂く色等の法及び泥洹なり、俗諦とは謂く但假名のみにして自體あることなきもの、色等の因緣にて瓶を成じ、五陰の因緣にて人を成ずるが如し、

問曰　若し第一諦の中に此の世諦無くむば何ぞ說くことを用ひんや。

答曰　世間の衆生は世諦を受用す。何を以てか之を知る。畫ける火を說かば人も亦信受するが如く、諸佛賢聖は世間をして假名を離れしめんと欲するが故に、世諦を以て說けばなり。經の中にて佛の說くが如し、我は世間と諍はず、世間が我と諍ふなりと。智者は諍ふ所無きを以ての故なり。[五六]有る上古の時に人は物を用ひんと欲せしが故に、萬物生ぜし時に爲に名字を立てたり、所謂瓶等なり。若し直に是れ法のみならば、則ち用ふることを得べからず、故に世諦を說くなり。又若し二諦を說かば、則ち佛の法は清淨なり。第一義を以ての故に智者は勝たず、世諦を以ての故に愚者は諍はざればなり。又若し二諦を說かば、則ち斷常に墮せず、邪見及び苦邊、樂邊に墮せず、業果報等是れ皆成ず可ければなり。又世諦は、是れ諸佛敎化の根本なり、謂く布施持戒の報は善處に生ずれば、若し此の法を以て其の心を調柔して、道の敎を受くるに堪ふれば、然る後に爲に第一義諦を說く。是の如く佛の法は初めは頓に深からずして猶大海の漸漸に轉深きが如くなるが故に世諦を說くな

【五五】これ恐らく偈なるべし。如の一字多し。同一文が四大假名品第三十八に引用せらる。

【五六】これ勝論說にても認むる考なり。

ず當に貪等の因縁にて今世後世に衰惱の事を得ることを見るべければ、是の故に斷ずることを求むるなり。若し爾らずんば則ち斷ずることを求めず。若し人にして、身は[五一]自在等を因とすと說くも、是の人も亦貪欲等を斷ずることを求む、故に知る貪欲等の因縁にて身あるなり。又智者は智慧を以て而も解脫を得と知り、無智を以ての故に縛せらると知るべし、故に知る煩惱の因縁にて身あるなり。又佛は處々の經の中にて說く、貪喜が盡くが故に正解脫を得、所以は何、眼色等を名づけて縛と爲さずして、貪喜を縛と爲し、貪喜を破するが故に心は正解脫を得、正解脫すれば心は能く泥洹に入ればなりと。故に知る煩惱の因縁にて身あるなり。又[五二]空無相無作を以て而も解脫を得、故に知る煩惱の因縁にて身あるなり、所以は何、諸法は空なれば即ち相の得べき無を觀ずれば滅相を以ての故に後身を願はざればなり。是の故に空を以て解脫門と名づく、相違すれば則ち縛なり。此等を以ての故に煩惱に由て身あること是の事は已に明なり。[五三]集諦聚竟る。

[五四]滅諦聚の初の立假名品　第一百四十一

論者言　三種の心を滅するを名づけて滅諦と爲す。謂く、假名心と法心と空心となり。

問曰　云何が此の三心を滅するや。

答曰　假名心は、或は多聞の因縁の智を以て滅し、或は思惟の因縁の智を以て滅し、法心は煖等の法の中に在りて空智を以て滅し、空心は滅盡定に入つて滅し、若しは無餘泥洹に入りて相續を斷ぜし時滅す。

問曰　何をか假名と謂ふや。

答曰　諸陰に因る所有の分別なり、五陰に因りて人ありと說き、色香味觸に因りて瓶あり等と說くが如し。

【五一】自在天なり。

【五二】空無相無願の三解脫門なり。

【五三】後筆にての添加なること前にいひたり。

【五四】三本宮本はここより第十三卷とす。

せばなり。衆生を安樂にせんと欲するを是を福行と名づけ、衆生を苦惱せしむるを是を罪行と名づけ、心を[四五]慈悲等に攝するを名づけて不動行と爲す。此の諸業に隨つて識は後身に住し、識に依りて名色六入觸受を生じ、此の四は是れ先生の業と煩惱との果報なり。復此の[四六]受に因りて愛取有を生じ、是の業煩惱が能く後世の生老死等を生ず。是の如くに十二有分の相續は皆無明を以て本と爲す。故に知る煩惱の因緣にて身あるなり。又生死は無始なり。何を以て之を知るや。經の中にて說く、業の因緣より眼等の根あり、愛を因として業あり、無明を因として愛あり、無明は邪憶念を因とし、邪憶念は還眼が色を緣ずるを因として癡に從ふが故に生ずと。故に知る生死輪轉して始なし。若し自在天を因とす等と說かば則ち無始に非ざれば、是の事は不可なり、故に知る煩惱の因緣にて身あるなり。又煩惱を滅盡すれば則ち解脫を得るなり。又衆生の身には種々の雜類あり、若し[四七]自在等を因とせば則ち應に雜なるべからず、煩惱業は多種あるを以ての故に身も亦一ならざるなり。又[四八]二十二根にては六根に因りて六識を生じ、是の中にて男女根有り、是の諸法が相續して斷ぜざるが故に名づけて命と爲す。是の命は何を以て根と爲すや。所謂業なり。是の業は煩惱を因とし、煩惱は受に依る故に五受を以て根と爲し、是の如く展轉して生死相續し、信等の根に依りて能く相續を斷ず、是の如く二十二根は生死に往來す。故に知る皆煩惱を以て身あるなり。又解脫を求むる者は[四九]戒定慧解脫解脫智見品を生ず、是れ何の所用なりや。皆諸の煩惱を滅せんが爲なり、知者は其の利を見るが故に此の諸品に依るなり。故に知る煩惱の因緣にて身あるなり。又諸の煩惱は次第に滅盡す、[五〇]三結を斷じて須陀洹果を得、貪欲等が薄らぎて斯陀含果を得、欲界の結が盡きて阿那含果を得、諸の禪定の中にても亦是の如く、次第に一切が都て盡きて阿羅漢果を得。是の如く諸の煩惱の次第に滅するに隨ふが故に、身も亦漸く滅す。若し自在天等を因とせば則ち應に漸に滅すべからず、故に知る煩惱の因緣にて身あるなり。又貪等の煩惱は諸の善人が皆斷を求めて滅するものなり、必

【四五】　慈悲喜捨の四無量心を指す。
【四六】　大正大藏經は愛に作る。受の誤植なり。
【四七】　自在天なり。
【四八】　二十二根は、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根及び男根、女根、命根と憂、喜、苦、樂、捨、信、勤、念、定、慧の十根と、未知當知根、已知根、具知根の三根なり。
【四九】　これ卽ち五分法身といはるるものなり。單に戒定慧の三學といふも、また戒定慧解脫の四法といふも、又は五分法身といふも、開合の相違のみにして根本は同じものなり。
【五〇】　この三結は五下分結中の初三にして元來は身見戒取疑なり。單に三結とのみいひて旣に必ず其何なるかは一定し居るものなれば、五下分結の定まりたるは古く又一般に認められたるものなるを知る。阿含に於て已に單に三結とのみある程なり。然るに本論にては五下分結の順序に多少相違し居るを見る。斯陀含果は三結を斷じて三毒の薄らぎたるもの、阿那含果は五下分結の斷盡せるもの、阿羅漢果は五上分結まで全部斷盡せるものなり。

が如く、衆生も亦爾り、無明有るに[40]墮せば則ち世間を樂しむも、若し明を生ぜし時には心は則ち厭離す。是の如く貪愛を身の根本と爲す。所以は何、貪愛を以ての故に求あり、求は二種なり、欲求と有求となり、現在の諸欲を求むるを是を欲求と名づけ、更に後身を求むるを是を有求と名づく。故に知る貪愛は是れ身の本なり。又若し五陰に著するときは則ち身見を生じ、謂うて是れ我なりと言ふを我語取と名づく、此の取に因るが故に餘の[41]三取を生じ、取の因は有に緣たり、有の因は生に緣たり、當に知るべし、煩惱は是れ身の根本なり。又是の身は皆苦なり、此の苦身に於て樂想の倒を生じ、此の樂倒を以て則ち倒愛を生じ、此の倒愛を以て能く後身を受く。故に知る貪愛の因緣にて身あるなり。又此の身は食の因緣を以ての故に住す、[42]摶食に著するが故に欲界を過ぎざること、業品の中にて說きしが如し。香味を貪るが故に廁等の中に生じ、觸に著するを以ての故に胞胎の中に生じ、溫涼の觸に著するが故に卵生濕生して、倶に欲界を過ぎず。三種の觸に因りて三種の受を生ずるが故に觸の因は受に緣たりと說く。意思食も亦是の如く、後身の願を發して、我は當に此を作すべしといひ、見知無き識を貪愛の本と爲して能く後身を致す。是の如く四食も皆貪愛に由れば、一切衆生は皆食を以て存す、故に知る愛の因緣によりて生ずるなり。又四生——卵生と胎生と濕生と化生と——は婬欲を愛するを以ての故に卵生し胎生し、香味等を貪るが故に濕生を受け、其の愛する所に隨ふが故に殷重の業を起すときは則ち化生を受く。故に知る、四生の差別は皆貪愛に由る。又[43]四種に身を受け、能く自ら殺し他は殺すこと能はざるあり、是の如き等の四は皆貪愛の差別を以ての故にあり。故に知る貪愛の因緣にて身あるなり。又[44]四識處は色識住に隨へば、色を依として色を緣じ、喜を以て潤と爲す、受想行も亦是の如し、而も識は是れ識處なりとは說かず、識の時には煩惱無きを以ての故なり。故に知る煩惱の因緣にて身あるなり。又十二因緣は皆無明に由る、所以は何、假名心に隨ふを名づけて無明と爲し、此の無明に因りて福行罪行及び不動行を起

【四〇】三本宮本は隨に作る。此方可なるべし。

【四一】欲取、見取、戒取なり。

【四二】ここには揣に作るも、前に例して改めたり。これ四食の第一にて、次に觸、意思、識の三食が擧げらる。

【四三】四種に身を受く、とは一に自殺不能他殺、二に他殺不能自殺、三亦自殺亦他殺、四に非自殺非他殺なり。

【四四】四識處とは、色識住受識住想識住行識住なり。

死の往來は斷ぜず。又貪等の煩惱の減少するに隨ひ、隨つて好處に生じ、貪等の多きに隨ひ、隨つて惡處に生ずること、猪犬等の如し。煩惱を滅ずるに隨つて善處に生ずとは煩惱が薄きを以ての故に、能く布施を行じ、戒等の福を持し、[三八]六欲天に生じ、婬欲を斷ずるが故に勝禪の樂を得、色染を斷ずるが故に勝定の樂を得、一切の結盡きたるときは則ち無比の泥洹の樂を得るが如し。故に知る此の身は煩惱に因りて有り。又現見するに、衆生が弊なる國土及び諸惡人の弊なる止住處を樂ふは皆貪著に由る、故に知る生死の中にての衆生の所住も亦貪著に由ること、蛾が明色を貪るが故に燈の爲に焚かるるが如し。是の貪著は智よりは生ぜず、所以は何、此の蛾は火が是れ苦觸なりとは知らざるが故に其の中に投ずるなり、是の如く衆生の後身の苦に墜つるは皆無明の[三九]因緣を以て貪愛するが故に生ずればなり。魚の鉤を吞み、麞鹿の聲を逐ふは皆貪著を以ての故に死を致すが如く、又人が貪著を以ての故に遠く異方に到りて而も返ること能はざるが如し。當に知るべし、皆煩惱を以ての故に生ずるなり。又樹根にして拔けざれば其の樹は猶生ずるが如く、是の如く貪根にして拔けざれば苦樹は常に在り、佛の說くが如し、樹根にして拔けざれば、斷ずと雖も、猶生ず、貪使にして拔けざれば數々苦を受くと。又是の身は不淨、無常、苦、空、無我なり、無明に非ざるよりは何れの有智者が貪りて此の苦を受けんや、猶盲人は、垢衣を以て誑かされて、寶飾と爲すべきが如く、是の如く無明の爲に盲せられて則ち能く多くの過患ある不淨の五陰を受く。又我心を以ての故に身を受けて、苦なりと雖も而も捨つること能はず。若し我心無くんば則ち能く遠離す。舍利弗の說くが如し、淸淨にして戒を持ちて道を得る者は死時に歡喜すること、猶毒器を破るがごとしと。故に知る煩惱の因緣にて身あるなり。又有るは無智を以ての故に此の身に貪著するも、畫ける篋を以て不淨を盛滿するに、隨つて未だ開かざる時は則ち愛樂すべきも、開けば則ち臭穢なるが如く、又毒蛇の滿つる闇室の中にては燈の未だ照さざる時には則ち樂著を生ずるも、見れば則ち捨離する

【三八】欲界には六天あるが故に六欲天といふ。從つて次の勝禪は色界、勝定は無色界を指す。

【三九】以下十二因緣によつて說く。

漏の智慧は煩惱を燒くが故に應に復生ずべからざること、焦げたる種子の復生ずること能はざるが如くなればなり。又現見するに、今世にては煩惱より身を生ずること、貪欲に從つて身色が變異するが如し、瞋恚も亦爾、故に知る後世の五陰も亦煩惱より生ず。

問曰 亦飮食等の因緣より五陰の生ずるあるを見るも、而も飮食を名づけて身を受くる因緣とは爲さず。

答曰 飮食は心に假りて能く色等を生ずるも、煩惱は爾らず、更に假る所無くして而も色等を生ず、故に知る煩惱を身の因緣と爲す。又現見するに鳥雀等は多欲、毒蛇等は多瞋、猪等は多癡なり、當に知るべし此の諸の衆生は必ず[三七]當に此の婬欲等の諸の煩惱を修集せしが故に此の中に於て生ぜしなるべし。

問曰 生處は法として爾り、先に煩惱の因緣を修集せるには非ず。

答曰 若し然らば則ち婬欲等は因無ければ、是の事は不可なり、當に知るべし、先に因緣を修集せるに從ふが故に有るなり。又貪恚等の煩惱が熾盛ならば則ち殺等の諸罪を爲し、此の罪を以ての故に現に鞭杖繋縛等の苦を受く。煩惱にして若し薄きときは則ち持戒修善等の利を得、此の戒の善に因りて現に名聞利養等の樂を得れば、現世の衰利の如きは皆煩惱に因る。故に知る來世も亦當に是の如くなるべし。

問曰 若し煩惱に因りて身あらば則ち生死の往來を斷ぜむ、所以は何、煩惱が盛んなるを以ての故に惡道の中に墮し、既に罪身を受けたれば、煩惱にして更に增さば永く脫するの因無く、是の如くにして善處に生ずることを得べからざればなり。若し福身を受くれば、福が轉增すが爲に則ち亦應に復惡處に生ずべからず、是の如くならば則ち生死の往來無し。

答曰 是の人は惡處に墮すと雖も或は善心を得・善處に生ずと雖も或は惡心を起す、是の故に生

【三七】三本宮本は先に作る。次の問曰の文より見るに、先の方可なるが如し。

雀の中に生じ、若し飮食を貪れば則ち生じて死屍の中の蟲と爲ると。又貪著する所に因るが故に諸惡を造り、諸惡の因緣にして强ければ果報を受く。又身に貪著するが故に諸業は能く果報を生ず、所以は何、己身に貪著すれば、愚癡力の故に、憍慢等の諸の煩惱が生じ、此より能く業を集成し、業力を以ての故に諸道の中に生ず。

問曰　若し煩惱の因緣を以て身あらば、煩惱を斷ぜば五陰は應に復相續すること得べからず。

答曰　是の身は本煩惱に由るが故に生ずれば、煩惱は盡くと雖も、勢力を以ての故に身は猶斷ぜず、杖を以て輪を轉ずるに、[三六]暫く杖を癈すと雖も輪は猶止まらざるが如し。

問曰　若し先の業と煩惱との勢を以ての故に身あらば、煩惱を斷ぜし者も先の業と煩惱との勢を以ての故に亦應に身を受くべきや。

答曰　要ず取相を以ての故に識は能く住す、是の人には先業の勢は盡き、今善く無相解脫門を修するが故に後身を受けざるなり、又熱石の上にては諸種は生ぜざるが如し。是の如く智慧の火を以て諸の識處を熱くときは則ち識種は生ぜずして後の相續も斷じ、又諸行の因緣が具足せざるが故に復相續せず。經の中にて佛の說くが如し、識を種子と爲し、業行を田と爲し、貪愛を水と爲し、無明覆蔽す、此の因緣を以て則ち後身を受く、阿羅漢には是の緣が具せざるが故に後身なしと。當に知るべし煩惱の因緣にて生を受くるなり。又煩惱なき者にも苦を知る等の心あり、今生を受くる者には此等の心有るを見ず、故に知る煩惱なき者は生を受くること能はず。

問曰　須陀洹等にも苦等の心あるも、而も生ずる時にも亦有ることを見ず。

答曰　諸の阿羅漢は智慧の力が强うして、一切の煩惱も勝つこと能はざるが故に將に命終せんとする時に、能く生を受くることを障ふも、須陀洹等は智力は爾からず、故に應喩と爲すべからず。又汝は齒が後に漸々に生ずるが如く煩惱も亦爾りと說くも是の事は然らず、所以は何、阿羅漢の無

[三六]　印度の陶師のなす所を指す。圓平板に泥をのせ、板の端近き小穴に杖を挿し、强く廻はす。故に杖を取去るも板は廻はり居るなり。

問曰　云何が煩惱に因りて業ありと知るや。

答曰　假名心に[三三]隨ふを名づけて無明と爲す、假名心は能く諸業を集む、故に知る煩惱の因緣にて業あるなり。又阿羅漢の諸業は集まらず成ぜず、故に知る諸業は煩惱に由りて成ずるなり。經の中にて佛が說くが如し、若し人にして明を得て無明を捨離せば、是の人は能く福業罪業無動業を起すや不や。不なり、世尊よ、又、無漏業も無しと。故に知る但假名に隨ふのみならば能く諸業を起すなり、無漏心は假名を隨はざるが故に業を起さざるなり。又學人は行なし、經に說くが如し、學人は還つて而も行ぜず、滅して而も作さずと。作相は是れ行なり、行を名づけて業と爲す。又無漏心は行相に非ざるが故に無漏業なきなり。是の故に一切の諸の身を受くる業は皆煩惱に因て生ず。又煩惱を斷ぜば復生を受けず、故に知る身あるは皆煩惱に因るなり。

問曰　一切の衆生は皆以て煩惱無きも、生れてより後時に乃ち起る、人の生るる時には齒なくして、其の後に乃ち生ずるが如し。

答曰　然らず。煩惱ある者は所有の相に隨ふ、謂く啼哭等は生ずる時に現に有り、故に知る皆煩惱と共に生ずるなり。又現見するに衆生は多く厠等の中に生じて、[三四]磐石等の中には生ぜざれば、當に知るべし、香味等に貪著するが故に是の中に於て生ずるなり。故に知る煩惱に由て生ずるなり。

問曰　地獄等の中には應に生ずることを得べからざるべし、所以は何、人の地獄等を貪樂すること無きが故なり。

答曰　衆生は癡力を以ての故に、顚倒心が生じ、將に命終せんとする時に於て、遙かに地獄を見て、是れ華池なりと謂ひて以て貪著す、故に則ち中に於て生ず。[三五]經の中にて說くが如し、若し人にして迮閙の中にて死して寬處を得んと欲せば、鳥の中に於ては生じ、若し渴して死せば生れて水蟲と爲り、若し凍死せば熱地獄の中に生じ、熱渴して死せば寒氷地獄の中に生じ、若し婬欲に貪著せば鳥

【三三】、無明品第一百二十七にけ假名に隨逐するを名づけて無明となすといへり。勿論同意なり。

【三四】麗本は槃に作る。三本宮本の磐を取る。

【三五】此經の同一文が六業品第一百一十に引用せらる。食厭想品第一百七十六參照。

は然からず。論者言はく、諸の煩惱には是の如き等の無量の分別門あり、以て解脱を求むる者は應當に知るべし、所以は何、是の縛の過を知るを以ての故に解脱を得ればなり。人の怨を識るが故に能く遠離するが如く、嶮道を知るが故に能く避くることを得るが如く、煩惱も亦是の如し。又煩惱の縛の甚だしく微細たることは[二六]毘摩質多羅阿修羅王の縛よりも過ぐ、乃至、有頂の衆生すら倘惱縛せらる。是の故に應に其の過を知るべし。又衆生は、乃至、有頂にても猶還た退墮するは皆煩惱の過を見知すること能はざるを以ての故なり。又結を斷ぜざるが故に增上慢を生じて、自ら已に斷じたりと謂ひ、後に則ち疑悔す。是の故に應に諸の煩惱の過を知り、爲に誑かさるることの勿かるべし。又若し衆生にして淨妙なる泥洹の樂を捨離し、反つて鄙弊なる欲樂[二七]有樂を貪らば皆是れ諸の煩惱の過なり。若し煩惱を斷ずれば則ち大利を得。故に應に諸煩惱の過を知見すべし。[二八]又解脱の法を障ふるは所謂煩惱なり、若し煩惱を斷ぜずむば終に解脱の因緣なし、所以は何、諸の煩惱を是れ身の因緣なり煩惱に隨つて身あり、身に隨つて苦あればなり、是の故に求めて苦を離れんとせば應に勤めて精進して諸の煩惱を斷ずべし。

明因品、第一百四十

問曰　煩惱を身の因緣と爲すとは是の事は應に明にすべし、所以は何、諸の外道の此の事を信ぜざるありて、或は言く、是の身は因も無く緣もなく、猶草木の自然にして而も生ずるが如し[二九]と、或は言く、萬物は是れ[三〇]大自在等の諸天の生ずる所なりと。或は言く、萬物は[三一]世性より生ずと、或は言く、[三二]微塵が和合するが故に生ずと、是の如き等を說く、是の故に應に明にすべし。

答曰　業より身あること是の事は先に成じたり。是の業は煩惱より生ず、故に煩惱を以て身の因緣と爲すなり。

【二六】毘摩質多羅(Vemacitra)阿修羅王にして帝釋天の妻は此の阿修羅王の娘なり、嘗て諸の阿修羅を率ゐ、帝釋天と戰ひて敗れ捕へらる、心の中に天神は正しと思へば、その縛自然に解け、不正なりと思へば自然に縛められたりといふ。

【二七】有は生存の意。

【二八】麗本は有に作る。今三本宮本に依る。

【二九】以下明業因品第一百二十參照。これ前にいへる六師の一人マッカリ・ゴーサーラ卽ち邪命外道の說。

【三〇】摩醯首羅論師卽ち大自在天外道の說。

【三一】數論派の說。世性は通常いふ自性にて、非變異のこと。

【三二】微塵は極微卽ち原子のこと、これ勝論派の說。

あることを成ず。又根が鈍なるが故に抱いて乃ち欲を成じ、根が轉、利なるが故に視て則ち欲を成ずるなり。

問曰[二五]有る人は言く、思惟所斷の煩惱は漸次に斷ず、先に欲界繫にして、後に色無色界繫なり、見諦所斷のは則ち一時に斷ずと。是の事は云何。

答曰 諦の所斷に隨ふも而も實には一切の煩惱は滅諦を見て斷ずるなり、是の事は先に說きたり、所謂見諦所斷の身見等の煩惱も皆滅諦を見て斷ず、煖法より來、無常等の行を以て五陰の相を觀じ、始めて煩惱を斷じ滅を見て乃ち盡くなり。

問曰 欲界繫の苦を觀じて能く欲界の結を斷じ、集も亦是の如し。欲界の如く、乃至、非想非々想處も亦是の如し。欲界の滅を觀じて能く三界の結を斷じ、道も亦是の如し。是の事は云何。

答曰 滅智が能く煩惱を斷ずるなり。是の故に汝が說は然らず。

問曰 ○經の中にて說く、五陰の無常等を觀ずるが故に須陀洹果乃至阿羅漢果を得と。汝は云何ぞ但滅諦のみを觀じて煩惱を斷ずと言ふや。

答曰 是の五陰を觀ずる智は生滅合觀するが故に能く結使を斷ずるなり。○經の中にて說くが如し、比丘は是の色は是れ色の集。是れ色の滅なりと觀ずれば、又當に說くべし、法を見、法を識らば則ち煩惱は斷ずと。知るべし、滅諦を見るが故に諸の煩惱は盡くなり。又五陰は是れ苦にして、中に於て諸の煩惱を生ず、若し五陰の滅を見れば、以て寂滅安穩と爲す、是の如くむば則ち苦想具足す、故に知る、諸陰の滅を見れば則ち煩惱盡く。諸法は無體性なるに由り、一の捨心に依りて斷ずと說くが如し。無體性は卽ち是れ滅なり。若し行者にして色の無體性、乃至、識の無體性を見るときは則ち深く離を得。又三解脫門な皆泥洹を緣ず、此の解脫門を以て能く煩惱を斷ず、餘の方便無し。故に知る、但無爲のみは道を緣じて能く煩惱を斷ず、是の故に汝が說く所の斷煩惱の法は、是の事

【二五】有部の說なり。

答曰　無量の心を以て諸の煩惱を斷ずるなり。所以は何、經の中にて佛は說く、譬へば巧匠が手に斧の柯を執り、眼は指の處を見れば、日日に盡くす所の若干分の數を分別すること能はずと雖も、但盡き已れるを見て乃ち能く其の盡きたることを知るが如く、比丘も亦爾なり、道を修行する時には、今日盡くす所の若干の諸漏、作日盡きし所の若干分の數を分別し知らずと雖も、但盡き已れば乃ち漏の盡きたることを知る。故に知る無量の智を以て諸の煩惱を盡くすなり、八にも非ず九にも非ざるなり。

問曰　何れの定に依止して何れの煩惱を斷ずるや。

答曰　[二二]七依處に因りて能く煩惱を斷ず。經の中にて佛の說くが如し、初禪に因りて漏盡き乃至無所有處に因りて漏盡くと。又此の七依を離れても亦能く漏を盡くす、[二三]須尸摩經の中にて說くが如し、七依處を離れても亦漏盡を得と。故に知る欲界の定に依りても亦漏を盡くすことを得るなり。

問曰　見諦所斷の煩惱は應に無色定に依りては斷ずべからず、此の行者は色相を壞するを以ての故なり。

答曰　是の事は先に答へたり、謂く無色定は能く色を緣ずと。

問曰　先に初禪より次第に欲を離れて二禪等に至ると爲んや、一時なりと爲んや。

答曰　應當に次第すべし、初禪の欲を離れて二禪等に生ずるを以ての故なり。

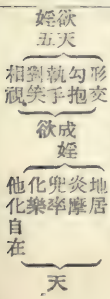
問曰　欲界の中にも亦次第ありや。

答曰　諸の煩惱は念々に滅するが故に、亦應に次第すべし。又[二四]炎摩天は抱くときは則ち欲を成じ、兜率陀天は手を執りて欲を成じ、化樂天は口に說くを以て欲を成じ、他化自在天は相視て欲を成すが如し。當に知るべし欲界の煩惱も亦漸次に盡くなり。有る人は言く、福德の因緣を以て彼の中に於て生ずるものにして、煩惱を斷ずるを以ての故には非ずと。所欲が妙なるを以ての故に差別

【二二】　七依處とは次に初禪より無所有處までなり。

【二三】　須尸摩經、後の七三昧品第一百六十二にも三慧品第一百九十四にも引用せらる。須尸摩(Susima)は比丘の名、始め外道なりしも、佛陀の敎勢の盛と、供養の厚きとを見て、賊住の比丘となりて出家し、後、佛を信ずるに至り其の罪を謝す。

【二四】　以下の四天はこれ欲界六天の中の後の四天なり。

欲天五婬　{形交・勾抱・執手・對笑・相視}　成婬欲　{地居・炎摩・兜率・化樂・他化自在}　天

にして能く色界を縁ず、貪を以て喜楽し、瞋を以て憎悪し、彼の法を以て自ら高ぶり、亦之を以て勝と爲して、欲界に非ざるが如し。欲界の煩惱にして能く色界を縁ずるが如く、色界の見等の煩惱も亦能く欲界の果を縁じ、無色界も亦是の如し。又此の煩惱は皆能く總相にして別相なり、所以は何、貪も亦能く總相にして四天下を染すればなり。又長爪經にて說く、一切の忍は是れ貪、一切の不忍は是れ瞋、一切の不忍は是れ貪、一切の忍は是れ瞋なりと。亦此の煩惱を以て自ら高ぶる。是れ煩惱は皆能く身口の業を起せばなり。所以は何、經の中にて、是の如きの見を生じ、是の如きの事を說く、謂く、神あり等と說けばなり。又此の一切の煩惱は皆第六識の中に在り、五識の中には無し、所以は何、想行は第六識なればなり。故に一切の煩惱は皆想より生ず。若し爾らずんば身見等も亦應に五識の中にも在るべし。所以は何、眼を以て色を見て我は能く見ると謂ひ、疑慢等も亦是の如くなればなり。

問曰　經の中にて六愛衆を說く、云何ぞ五識の中には煩惱無しと言はむや。

答曰　六意行の如きは皆意識の中に在り、但眼等を以て開導するのみ、故に六意行と名づくるなり、是の事も亦爾り。又意識の中の所有の分別の因緣も五識の中には無し、故に知る五識の中には煩惱なし。

斷過品、第一百三十九

問曰[一]　有る人は言く、諸の煩惱は九種なり、下と中と上とにして、下の下と、下の中と、下の上と、中の下と、中の中と、中の上と、上の下と、上の中と、上の上となり。智も亦九種なり、是の煩惱は先に上上を斷じ、後に下下を斷ず。下下の智を以て上上の煩惱を斷じ、乃至、上上の智を以て下下の煩惱を斷ずと、是の事は云何。

【一】有部の說なり。

は浄を得ずと知る、是れ苦を見て斷ずるなり。戒は是れ苦の因なれば、此を以ては淨を得ずと知る、是れ集を見て斷ずるなり。邪見を以て泥洹を謗じ、此の見を以て淨を得と謂ふは、是れ滅を見て斷ずるなり。此を以て道を謗ずるは是れ道を見て斷ずるなり。見取の如きは邪見に依るが故に四種なり、戒取も亦應に是の如くなるべし。

問曰 若し爾らば九十八使とは名づけず。

答曰 諸使は地に隨つて斷じ、界に隨はざるが故に、九十八とに限らざるなり。

問曰[一〇] 貪と慢と、及び邪見を除きたる餘の四見とは皆三根と相應す、苦根と憂根とを除く。瞋恚も亦三根と相應す、樂根と喜根とを除く。無明は五根と相應し、邪見と疑とは四根と相應す、苦根を除く。瞋と覆罪と慳と嫉とは但憂根とのみ相應すと、是の事は云何。

答曰 先に已に無相應を破したり、故に後にも當に說くべし。五識の中には煩惱無きが故なり。又汝が法の中にては貪と喜根と相應するも慳なるときは則ち然らざるが是れ因緣なし、慳は是れ貪分なるが故なり。是の如く憍慢は憂根と相應せず、亦因緣なければなり。故に知る汝等の所說は皆自らの憶想分別なり。

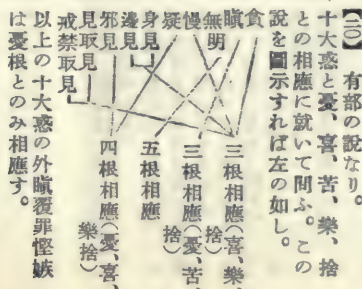
問曰 有る人は言く、見苦所斷の五見と疑と及び貪と恚と慢とは不相應無明なり。及び集諦所斷の邪見と見取と疑と及び貪と恚と慢とも不相應無明なり。是を遍使と名づく、餘は遍には非ずと、此の事は云何。

答曰 一切是れ遍なり、所以は何。一切は皆共に相因となり相緣となるが故なり。又已が邪見の中に於て貪を生ず、所謂苦無く、乃至、道なしと。此の見に貪著して而して以て自ら高ぶり、若し苦を說くを聞かば則ち憎恚を生ず。又此の貪は能く滅諦を緣じ、瞋も亦能く泥洹を憎恚し、亦泥洹を以て自ら高ふる心を生ず、道も亦是の如し。當に知るべし餘使にも亦能遍あり。又欲界繫の煩惱

【一〇】有部の說なり。十大惑と憂、喜、苦、樂、捨との相應に就いて問ふ。この說を圖示すれば左の如し。

貪
瞋
無明
慢
疑
身見
邊見
邪見
見取見
戒禁取見

三根相應（喜、樂、捨）
三根相應（憂、苦、捨）
五根相應
四根相應（憂、喜、樂捨）

以上の十大惑の外瞋覆罪慳嫉は憂根とのみ相應す。

答曰　貪と恚と慢と無明とは二種にして、見諦斷と思惟斷となり、餘の六は但見諦斷のみなり。

問曰　學人にも亦我心あり、故に知る不示相の身見の分は學人も未だ斷ぜず。

答曰　是の慢は見に非ず、見は示相に名づくればなり。

問曰　有る人は言く、[一四]慳、嫉妬、悔、諂曲等は但思惟斷のみなりと。是の事は云何。

答曰　是れ皆二種なり、亦は見諦斷亦は思惟斷なり、何を以て之を知るや。尼延子等が佛弟子の供養を得るを見るが故に嫉妬心を生ずるが如き、是の嫉妬は道を見るときは則ち滅すればなり。故に知る見諦所斷なり。有る人にして先に佛弟子に於て慳惜して施さざりしも、道を見ることを得たるが故に便ち能く施與すれば、是の慳は則ち見諦斷なり、[一五]蘇那刹多羅等の如し。悔も亦た見諦斷なり。須陀洹の地獄に墮する等の因緣、及び[一六]第八世に身を受くるの諂曲等の如きも亦見諦斷なり。

問曰　諸の煩惱は幾くか苦を見て斷じ、幾くか集滅道を見て斷じ、幾くか思惟斷なりや。

答曰　先に說きし見諦所斷の六使は[一七]四種なり、苦を見て斷じ、集滅道を見て斷ずればなり。餘の四使は[一八]五種なり。

問曰　[一九]身見と邊見とは但苦を見るのみにて斷ずるも、戒と取とは二種にして、苦を見、道を見て斷ずるなり。是の事は云何。

答曰　諸の煩惱は實には滅諦を見る時に斷ずるなり。是の故に身見等も應に但苦を見るのみにては斷ずべからず。又身見は四諦の中に於て謬るなり、五陰は無常にして因緣より生ずるも、我は無常なるに非ざれば因より生ぜず、五陰には滅あるも而も我には滅することは無ければ、道と我見とは相違す、是の故に身見は四種の所斷にして、邊見も亦四種の所斷なり、所以は何、行者は苦が集より生ずるを見るときは則ち斷見を滅し、道に由りて滅を得ることを見るときは則ち常見を滅すればなり。戒取も亦四種なり、因あり果あり、是の故に苦を見る時に、戒は是れ苦なれば、此を以て

【一四】麗本は妬を缺くも、三本宮本によつて入るるを可とせむ。次下に於て然ればなり。
【一五】雜煩惱品第一百三十六にも此名あり。
【一六】第八世とは須陀洹は七返生るるのみなるに諂曲の爲には八返となるをいふ。
【一七】此六使は疑、身見、邊見、邪見、見取、戒取にして、次の四種は次文にある如く苦集滅道についていへばなり。身見以下五見は佛教以外の派の說に關係するものなれば、之を斷ずるには佛教の中心說たる四諦によるとなすは誠に當然なりといふべし。
【一八】貪瞋慢無明の四使は見諦斷と思惟斷となれば、四諦を見て斷ずる四種と思惟斷を全體として一種と見たるものとにて五種となるなり。
【一九】有部の說なり。

如き等の惡煩惱あるが故に、當に知るべし、亦不善もあり。有る論師の言く、若し父母及び[九]和上阿闍梨等を貪せば是を善貪と名づけ、他の物等を貪せば不善貪と名づけ、若し他人を損益することを爲さずむば無記貪と名づく。不善法及び惡知識等を瞋るは是を善瞋と名づけ、若し善法を瞋り及び衆生を瞋らば不善瞋と名づけ、若し衆生に非ざる物を瞋らば無記瞋と名づく、若し慢に依りて慢を斷ぜば是を善慢と名づけ、他の衆生を輕んずるを不善慢と名づく、無明等も亦是の如しと。又論師の言く、若し善ならば煩惱とは名づけずと。

問曰[一〇] 欲界の身見を說いて無記と名づく、所以は何、若し身見にして是れ不善ならば、一切の凡夫は皆我心を生ずるに、盡く地獄に墮せしむべからざるが故に、無記と說けばなり。是の事は云何。

答曰 身見は是れ一切の煩惱の根本なり、云何が無記と名づけんや。又此の人は[一一]墮して他人の爲に神我ありと說くに、爾の時云何が當に無記と名づくべき。邊見も亦是の如し。

問曰 若し人の邪見を轉じて疑の中に墮せしめば、此の人は是れ不善なりや。

答曰 此の人は是れ不善なるに非ず、所以は何、寧ろ疑の中に墮すも邪定に入らざればなり。

問曰[一二] 有る人は言く、欲界繫の煩惱は一切能く欲有をして相續せしめ、色無色界繫のも亦是の如しと。是の事は云何。

答曰 但愛のみは能く諸有をして相續せしむ、先に喜びて後に生ずるを以ての故なり。又說く、愛を苦集と爲すと、亦說く、飲食貪欲等を愛樂するが故に處に隨つて生を受くと。邪見等の中には是の如きの義なし。經の中にて慢が因緣にて生ずることを說くと雖も、亦先に慢して後に愛あるが故に生ずるなり。瞋も亦是の如し。故に知る、皆愛を以ての故に諸有は相續するなり。

問曰 諸の煩惱の中にては幾くか[一三]見諦斷、幾くか思惟斷なりや。

【九】和上、阿闍梨、和上(Upadhyāya)とは和尙ともなす。師のことを云ふ。阿闍梨は(cārya)は、弟子の行爲を矯正しその師範となるべき高僧を云ふ。

【一〇】有部の說なり。

【一一】墮は隨なるべきか。宮本のみは此人は神我ありと說き他人も隨ふとなす。

【一二】有部の說なり。

【一三】見諦斷、思惟斷、見諦斷は理に關する惑を斷ずるものにして見道をいひ、思惟斷は事に關する言を斷ずるものにして修道をいふ。

卷の第十一

雜問品[一] 第一百三十八

論者言、一切の煩惱は多く十使の所攝なり、是の故に當に十使に因りて而して論を造るべし。十使とは貪と恚と慢と無明と疑と及び五見となり。

問曰 十の[二]煩惱大地法は、所謂、不信と懈怠と[三]忘憶と散心と無明と邪方便と邪念と邪解と[四]戲掉と放逸とにして、是の法は常に一切の煩惱心と倶なり。此の事は云何。

答曰 先に已に相應を破したり。但心法のみは一一に生ず、是の故に然らず、又此れ道理に非ず、何を以てか之を知る。或は不善心の不善信と倶なるあり、或は不善心にして而も信無きあり、精進等も亦是の如し。故に知る一切の煩惱心の中に此の十法有るには非ず。又汝は睡と掉とは一切の煩惱心の中に在りと說くも是れ亦然らず、若し心にして迷沒せば爾の時には應に睡あるべきも、應に調戲の心の中にはあるべからず、是の如き等の過あり。

問曰 [五]欲界の中にては十煩惱を具し、色無色界にては瞋を除いて餘殘の一切ありと、是の事は云何。

答曰 彼の中にも亦嫉妬等もあり。何を以て之を知るや。經の中にて說く、有る[六]梵王が諸梵に語つて言く、汝等は瞿曇沙門に詣ること勿れ、汝は但此にのみ住して自ら老死の邊を盡くすことを得と。是を嫉妬と名づくと。嫉妬有るが故に亦應に瞋あるべし。又經にて說く、[七]梵王は一比丘の手を捉へて牽いて衆を出でしめ、謂つて言く、比丘よ、我も亦た四大が何れの處にて餘り無く盡く滅するやを知らずと。是の如く諂曲心を以て諸の梵衆を誑かせば、是を諂曲と名づく。若し[八]我は是れ尊貴なり、萬物を造る者なりと言はゞ是を憍逸と名づく。是の如き等も彼の間にも亦有り。是の

【一】 三本宮本はここにて分卷せず。

【二】 煩惱大地法は通常いふ大煩惱地法に當る理なれど、大煩惱地法としては此十より散心邪方便邪念邪解を省きたる六をいふ。大煩惱地法よりも煩惱大地法の方が譯としては正當なり。原語は Kleśamahābhūmika なればなり。

【三】 三本宮本の妄に作る。惛沈 (styāna) に當る。

【四】 麗本は戲調に作る。三本宮本は戲掉作る。麗本は下に調戲ともなす。今まで掉戲とありたり。掉擧 (auddhatya) に當るものなり。

【五】 これ有部の說なり。

【六】 五受根品第八十三に引用せらるるものは之と同一なるべし。

【七】 これ長阿含堅固經の文なり。

【八】 これも前經の中の梵天の言なり。

見取とは、邪法に貪著して捨離すること能はざる所以は、此れ見取の力なり、又見取の力を以ての故に諸結は堅固なるなり。

問曰　帝釋問經の中にて、何が故に但天人には慳と嫉との二結有るのみなりと說くや。

答曰　是の二煩惱は最も是れ鄙弊なればなり。所以は何、他の衆生の飢渴苦惱を見るも、慳心を以ての故に矜(あはれ)み濟ふこと能はざるに、他より得たるを見るも亦嫉妬心を生じて惱熱を懷けばなり。是の因緣を以て貧賤醜陋にして威德なき處に墮す。又[二六]釋提桓因には是の二結偏に多くして、數々來りて心を惱ます、故に佛は爲に說くなり。又此の二結は是れ重罪の因緣なり、所以は何、此の二結に因りて重惡業を起すが故なり、又三毒の中にては貪恚は能く重罪を起すものなるが、貪恚が盛なるが故に此の二結を起すなり。又此の二結は能く男女を惱ます。又捨離し難し。所以は何、若し深く善心を修すれば、乃ち能く永く嫉妬を斷じ、深く布施を修して然して後に盡く慳心を斷ずればなり。業報を見ざるも而も能く重んずる所の物を捨つるを以て、是を甚だ難しと爲すなり。人の如きは、子が己(おのれ)に勝る事を得たるを見てすら心は尙喜び難し、況んや怨賊に於てをや。此の二結は憎愛に依るを以ての故に深くして除斷し難きなり。此等の緣を以ての故に佛が獨り說くなり。[二七]

【二六】帝釋なり。釋提桓因(Śaka devānām Indra)にてサカ卽ち釋が此神の名、デーヴーナーム卽ち提桓は諸神の意、インダ卽ち因はインドラにて、ここにては帝又は王の意。故に此最後のインダ卽ち帝なる釋といふ意味にて帝釋と稱するなり。故に帝は諸神の王の意味なり。

【二七】以上、九結の中にて、戒取、見取、慳、嫉のみを說き、其間に憍慢、貪、恚を捨へば捨ひ得るが如き狀態なり。

佛の法の中に入るは道を行ぜんが爲の故にして、活命の爲ならずと。是の故に善法を樂ふ者は應に淨命を行ずべし。又比丘は應に比丘の法の中に住すべく、若し邪命を行ぜば比丘の法には非ざるなり。

[一二]九結品　第一百三十七

愛等は九結なり。

問曰　何が故に諸見の中に於て別して二取を說くや。

答曰　戒取は免離し難きが故なり。猶ほ浮木が洄澓の中に入らば出づること得べきこと難きが如く、此の人も亦爾り。是の念を作す、我は是の持戒を以て當に天上[一三]に生ずべしと。此が爲の故に淵に投じ火に赴き自ら高きより墜つる等の種々なる諸苦を受くるなり。又世間の人は戒取の中に於て其の過を見ざるが故に佛は說いて結と爲す。又此の戒取に依りて能く八直聖道を捨つ。又此は正道にも非ず[一四]淸淨道にも非ざれば隨苦邊と名づく。又戒取は是れ出家人の縛にして、諸欲は是れ在家人の縛なり。又戒取者は復種々に出家の法を行ずと雖も空しくして所得なし。又戒取者は今も樂を得ずして、後には大苦を受く、牛戒を持つことにして成ずれば則ち牛と爲り、敗すれば則ち地獄に墮するが如し。又此の戒取に因らば、能く正道と及び正道を行ずる者とを謗ず。又戒取は是れ諸の外道の憍慢を起す處にして、是の如きの念を作す、我は是の法を以て能く餘人に勝ると。又戒取を以ての故に[一五]九十六種に差別の法あるなり。又戒取は是れ麁見なるが故に多くの衆生が行ず、智慧の道は微妙にして見難ければ、世間は之を行じて利を得ることを知らざるなり。又是の見は能く人の心を牽くが故に愚癡の者は多く此の法を行ず。又此を重惡見と名づく、正道に逆うて非道を行ずるを以ての故なり。

【一二】九結とは、愛、恚、慢、無明、見、取、疑、嫉、慳なり。一般によく知られ居ればここに列名せざるなり。卽ち他に說かれ居たるを豫想するは仕方なり。

【一三】これが非因計因なり。

【一四】ここに非道計道を含む。

【一五】佛教以外の外派凡てを總括して九十六種といひ、一一は其法あれば、差別の法ありといふなり。但し九十六の數字は單なる型にして事實これだけありといふにをあらず。後世のものは數數之を實數と見、此數を滿たす爲に努力するも、これ註釋家の弊なり。

心と相應し未だ生ぜざる時にも亦斷ずと爲すなり、使も亦是の如し。聖道の時には無しと雖も、亦名づけて斷と爲す、相違法を得たるを以ての故なり。汝は道は煩惱と一時ならずと言ふも、亦未だ斷ぜざるを以ての故に說いて有と言ふなり。汝は凡夫學人が若し善無記心に在らば應に是れ阿羅漢なるべしと言ふも、阿羅漢は已斷なるも、此の人は未斷なるが故なり。人にして斷肉法を受けずむば、肉を食はずと雖も斷肉とは名づけざるが如し、又無明邪念邪思惟等有るが故に、未だ斷ぜざる所の煩惱は則ち生ずるに、阿羅漢には此の因なきが故に餘人とは同じからず。又汝は纒を得れば使は則ち熾盛なりと言ふも是の事は然らず、諸の煩惱は下中上の法を以ての故に熾盛なるものにして、纒を得るが故には非ず。汝は人にして善無記の心に在るも有使と名づくと言ふも、亦未だ斷ぜざるを以ての故に有使と名づくるなり。是等の緣を以ての故に知る。貪等の諸使は不相應に非ず。

[一〇九]八邪道とは邪見乃至邪定なり。實の如くには知らざる顚倒の見なるを以ての故に名づけて邪見乃至邪定と爲すなり。

問曰　正命と邪命とは身口の業を離れざるに、何が故に別して說くや。

答曰　邪命は出家人の斷じ難き所なれば、是の故に別して說くなり。邪命とは[一一〇]諂詐等の五法を以て能く利養を得るが故に邪命と曰ふ。要を取て之を言はゞ、諸の出家人の應に作すべからざる所の資生の業なり、謂く、王使、販賣、[一一一]治病等の業にして、及び應に取るべからざる所の衆生の錢穀等を、若し取らば、皆邪命と名づく。又比尼の制する所なるに、此を以て自ら活せば皆邪命と名づく。經の中にて說くが如し、優婆塞は應に五種の販賣をなすべからずと。

問曰　何を以て命を濟ふや。

答曰　如法に乞求し、此を以て活命せば、應に邪命なるべからず、所以は何、心が不淨ならば善法を毀壞して、道を修するに任へざるを以ての故なり。又道を行ずる者は應に是の念を作すべし、

【一〇九】八邪道とは八正道の反對をいふ。

【一一〇】隨煩惱品第一百三十四を參照すべし。智度論には詐現ニ異相一、自說ニ功德一、占ニ相吉凶一、高レ聲現レ威、說ニ所得利一以動ニ人心一を五邪命となすとあり。

【一一一】麗本は活に作る。三本宮本の治の方可なり。

故に名づけて使と爲す。

問曰 是の使は心相應と爲すや不相應と爲すや。

答曰 心相應なり、所以は何、說く所の貪等の使相は是れ諸使の相にして、喜と相應すればなり。若し喜心と相應せずむば是の事は然らず、是の喜にして若し樂受の中に在らば名づけて貪使と爲せばなり。又貪は染著に名づくれば、心不相應の中に染著の義無し、故に知る諸使は心と相應す。

問曰 然らず、諸使は心相應に非ず、所以は何、經の中に說く、小兒には婬心すら尙無し、況んや能く婬欲せんをや、而も亦欲使の爲にも使はると。又說く、思せず分別せざるも亦緣識住有るが故なりと。又經の中にて說く、身見の斷ずる時には諸使も倶に斷ずと。又聖道と煩惱とは一時なることを得ず、是の故に聖道にして生ずれば心不相應使は斷ず、若し爾らずんば、聖道は何の斷ずる所ぞ。又若し心不相應使無くんば、凡夫學人にして若し善心無記心に在る時には便ち應に是れ阿羅漢たるべし。又使は纏の因と爲し、使より纏を生じ、纏を得れば使は則ち熾盛なり、故に知る諸使は心相應に非ず、又若し人にして善無記心に在るも亦有使と名づく、若し心不相應使無くむば、何が故に有使と名づけんや、故に知る諸使は心相應に非ず。

答曰 然らず。汝は小兒は欲無きも亦貪使ありと言ふも、是の事は然らず、小兒は未だ貪を除く藥を得ざるが故に貪欲は未だ斷ぜず、故に貪使の爲に使はる、鬼病の人は發らざる時と雖も亦鬼病の人と名づくるが如し、所以は何、其の未だ呪術藥草の病を斷ずる法を得ざるを以ての故なり。亦四日の瘧病は二日は發らずと雖も亦瘧病の人と名づくるが如く、亦鼠毒未だ差除せざるが故に雷聲あらば即ち發するが如し。是の如く、何れの心の中に於ても未だ使を除く藥を得ざるが故に名づけて不斷と爲す、餘の問にも亦以て總じて答へたり。汝が思せず分別せざるも亦緣識住あるが故なりと言ふは、亦未だ使を斷ぜざるを以ての故なり。汝が身見は使と倶に斷ずと言ふは、汝は纏を以て

一心に勤めて精進を加ふべし。又凡夫の法は信ずべからず。若し此の具足の因緣を離るるも、或は餘緣あらば、終に復聖道に入ることを得る能はず。又小利を貪せずむば則ち能く出家の果報を得、亦死する時にも悔ひず、亦能く自利利他す。又此の人は功德の中に於てすら尙貪著せず、何に況んや惡法をや。故に正行と名づく。又凡夫の過咎の染すること能はざる所なり。

問曰　何れを凡夫の過と謂ふや。

答曰　經の中にて說く、凡夫は應に二十種に自ら心を折伏すべく、應に是の念を作すべし、[一〇七]我は但形服の俗に異るのみにし　空しく所得なしと、我は當に不善を以て而も死すべしと、當に大怖畏の海に墮すべしと、當に畏處に之くべしと、無畏の處を知らずと、亦道をも知らずと、禪定を得ずと、數〻身苦を受くと、八難を離るゝこと難しと、怨賊常に隨ふと、諸道は皆開くと、未だ惡道を脫せずと、常に無量の諸見の爲に縛せらると、五逆罪に於て未だ防制すること能はずと、無始の生死が未だ邊際あらずと、作さゞれば罪福をも得ずと、善惡は相伐することを得ずと、善法を爲さされば後に安隱なしと、作す所の善惡は終に妄失せずと、我は當に不調を以て死に至るべしと、是の二十法は汚すこと能はざる所なり。又應に作すべき所ならば是の人は已に作したり。故に心は悔ひず、若し貪著せば則ち在家及び出家法を成ずること能はず。是の故に應に小利の七使に貪著すべからず。

問曰　諸の煩惱を何が故に使と名づくるや。

答曰　生死の相續する中にて常に衆生に隨ふが故に名づけて使と爲す。猶乳母の常に小兒に隨ふが如く、瘧病の未だ脫せざるが如く、債を負うて日に息するが如く、鼠毒の未だ除かざるが如く、熱鐵の黑相の如く、穀子の芽の如く、自ら[一〇八]奴券を要するが如く、事を斷ずる證人の如く、智慧の漸く積むが如く、業の常に集まるが如く、焔の常に續くが如し。是の如く次第に相續し增長するが

【一〇七】以下二十種は句點によつて分れ居れば、之によつて知るべし。惡覺品第一百八十二參照。

【一〇八】奴隷階級の風習を示すものなるべし。

さむやと。教化を疑ふとは[一〇一]阿那波那等の教法は能く泥洹に至ると爲んや不やと。讒刺とは瞋恚心を以てして畏敬心無く善人を侵惱するなり。是の人は此の五法を以て其の心を敗壞し、諸の善根を種うるに任へず、故に心栽と名づく。

問曰 是の人は何が故に佛等に於て疑を生ずるや。

答曰 是の人は多聞なること能はざれば、是の故に疑を生ずるなり。若し多聞ならば疑は則ち薄少なり。又此の人は愚癡無智にして佛の法と異法とを分別することを知らず、是の故に疑を生ず。又此の人は法に於て味を得ること能はず、是の故に疑を生ず。又違陀等の經を聞かず讀まずして人の稱讃するを聞くのみなるが故に貴ぶ心を生ずるなり。又是の人は世々に邪疑偏に多くして、心は常に濁るが故に佛等に於て疑ふこと佛の侍者[一〇二]蘇那刹多羅の如し。又此の人は多くの邪見人と共に事業を同じうするが故に疑を生ぜしむ。又此の人は[一〇三]違陀和伽羅那等の邪見の經を讀誦するが故に正智慧を壞し、是の故に疑を生ず。又此の人は諸法の義に於て喜んで邪念を生じて、經を造れる者の意を得ること能はず、是の故に疑を生ず。又此の人は始終に自利の功德を得ること能はざれば、此の緣を以ての故に佛等に於て疑を生ず。

[一〇四]五心縛とは若しくは人は身欲を離れざるが故に身に貪著し、五欲を離れざるが故に欲に貪著し、又在家出家人と和合し、聖語の義の中に於て心は喜樂せず、少利の事を得て自ら以て足れりと爲す。是の中の四縛は貪欲に因りて起る。若しくは人は內の身欲を離れざるが故に外色等の欲の中に於て著を生ずるなり。是の故に[一〇五]衆鬧と和合することを樂しむなり。憒鬧を樂しむを以ての故に聖語義が寂滅の法を示す中に於て心は喜樂せざるなり。是の故に持戒多聞及び禪定等の少利の事の中に於て自ら以て足れりと爲す。此の少利の事に貪著するを以ての故に大利を亡失す。智者は應に小事に貪著して以て大利を妨ぐべからず。是の人にして若し[一〇六]八難を離るゝも、人身の難を得、故に應に

【一〇一】阿那波那は Ānāpāna の音譯、譯して數息觀といふ。出入の息を數へて心を鎭める觀法の名なり。

【一〇二】蘇那刹多羅は Sunakkhatta 即ち Sunakṣetra の音譯。此名は雜間品第一百三十八にもあり。

【一〇三】麗本は違伽陀和羅那に作るも、三本宮本は韋陀和伽羅那に作る。此方正し。違陀はヹーダ(Veda)、和伽羅那はギヤーカラナ(Vyākaraṇa)にて、ヹーダ六支中の文典を指す。初三善品第六にも出でたり。

【一〇四】身欲、欲、和合、不喜樂、足が五心、縛とせらるるなり。

【一〇五】三本宮本は衆閙を兩衆に作る。兩衆は前の在家人と出家人とを指す。

【一〇六】聞法八難にて、地獄、餓鬼、畜生(以上三途)、北鬱單越、長壽天(以上天上)聾盲瘖瘂、世智辨聰、佛前佛後(以上八間)なり。所謂三途八難の八難なり。

處の生に墮す。又此の人は利養が心を覆ふを以て則ち憍慢を生じて餘の善人を輕んず、故に地獄に墮す。又他の施を壞するが故に、若し人身を得るときは則ち貧窮と爲る。又慳心を以て施者の功德と受者と施物とを斷ずるが故に重罪を得。若し法を慳悋すれば盲等の罪を得、所謂生盲及び多惡の中に生じて自在を得ず、聖胎を退失して三世十方の[九七]諸佛の怨賊として生死に往來し常に愚癡と爲りて善人は遠離す、善人に離るゝが故に惡として起さゞる無し。惡は三種の惡に名づく、惡と大惡と惡中の惡となり。惡は殺盜等に名づけ、大惡は自殺し亦人をして殺さしめ自ら慳し亦人をして慳せしむるに名づけ、惡中の惡は自ら法を悋し亦人をして法を悋せしむるに名づく、是の人は法を悋し多人をして惡に墮せしめ、亦是れ佛の法の道を滅するなり。經の中に說くが如し、住處慳に五過あり、未だ來らざる善比丘を來らしむることを欲せず、已に來るときは則ち頻蹙して喜ばず、去らしめんことを念欲す、僧の施物を藏す、僧の施物に於て我所の心を生ずなり。家慳に[九八]五過あり、家を貪著するを以ての故に則ち白衣と共に憂と喜とを同うし、白衣の福を爲すと受者の施を得るとを斷ず、此の二を斷ずるが故に卽ち此の家に生れて廁中の鬼となる。施慳に五過あり、常に資生に乏しく、[九九]二人の利を破り、善人を毀呰し、心常に憂惱す。稱讃慳に五過あり、餘人を讃するを聞いて心常に擾濁し、百千世に於て常に淨心なし、善人を呵毀し、自ら己身を高ぶり、他人を卑下して常に惡名を被る。又一切の慳に總じて斯の過あり、謂く多物を積聚し、大衆を畏怖し、多人の憎惡にて心常に擾濁し、身常に孤煢にして下賤の家に生る、是の如く無量なるは是れ五慳の過なり。

五心栽とは、佛を疑ひ、法を疑ひ、戒を疑ひ、敎化を疑ひ、若し比丘ありて佛及び諸の大人の爲に稱讃せらるれば是の人は則ち惡口を以て譏刺す、是を名づけて五と爲す。佛を疑ふとは是の如きの念を作すなり、佛を大と爲さむや、富蘭那等を大と爲さむやと。法を疑ふとは佛の法を勝と爲さむや、違陀等を勝と爲さむやと。戒を疑ふとは佛の所說の戒を勝と爲さむや、鷄狗等の戒を[一〇〇]勝と爲

【九七】ここには三世十方の諸佛るあり、他には諸佛ともあり。

【九八】この五過は次の憂と喜とを二とし、爲福と得施とを妨ぐを二とし、廁中の鬼となるとにて五なり。

【九九】二人は施者と受者となり。之を二となして前後合せて五となる。

【一〇〇】縮刷藏經は爲勝那に作る。那は耶の誤植なり。

れ四の根本なり。是を名づけて五と爲す。又貪と恚とを以ての故に欲界を出でず、身見は我心を出でず、戒取は下法を出でず、疑は凡夫を出でず。又貪欲と瞋恚との故に欲界を過ぎず、若し過ぐるも還爲に牽かる、餘の三は凡夫を過ぎず、故に下分と名づく。

五上分とは掉戲は禪定を壞するが故に心は寂滅ならず、是の掉戲は取相に隨ふ憍慢の故に生ずるなり。是の取相の心は無明より生ず、故に色染と[九五]無色染とあるなり。此の五結は學人が之を以て上行と爲すが故に上分と名づく。此の五結は學[九六]人の心の中に於てのみ說き、凡夫の爲にはあらず。

問曰 掉戲は何が故に色無色界に於て說いて名づけて結と爲すも、欲界の中にては說かざるや。

答曰 彼の中にては麁煩惱無きが故に掉戲が明了なるなり。又此の掉戲は定を壞するに於て力あるが故に說いて結と爲す。此の上分を斷ずれば則ち解脫を得るなり。有る人は色無色の中にて解脫の想を生ずれば、此を遮せんが爲の故に上結ありと說くなり。

五慳とは、住處慳と家慳と施慳と稱讚慳と法慳となり。住處慳とは、獨り我のみ此に住して餘人を用ひず、家慳とは獨り我のみ此の家に入出し、餘人を用ひず、設ひ餘人あるも我は中に於て勝るとし、施慳とは我のみは此の中に於て獨り布施を得るも、餘人に與ふること勿れ、設ひ餘人あるも我に過ぎしむること勿れとし、稱讚慳とは獨り我をのみ稱讚して餘人を讚すること勿れ、設ひ餘人を讚するも亦我に勝らしむること勿れとし、法慳とは獨り我のみ十二部經の義を知る、又深義を知るも祕して而も說かずとするなり。

問曰 是の五慳に何等の過ありや。

答曰 是の住處等は多人の共有なり、是の人は既に自家を捨てゝ共有の中に於て更に慳恪を生ず、是れ弊煩惱なり。又此の人は解脫の中に於て終に分あること無し、所以は何、是の人は共有の法に於てすら尚捨つること能はず、何に況んや能く自の五陰を捨てんをや。又此の人は餓鬼等の諸の惡

【九五】ここにては掉戲、憍慢、無明、色染、無色染が五上分結なり。順序が通常とは異る。
【九六】麗本は人を缺くも、三本宮本には存す。

に名づけて身結と爲す。又有る人は言く、是の四結は能く生死を繫縛す、故に名づけて結と爲すと。

問曰　五蓋は貪欲・瞋恚・睡眠・掉悔・疑なり、是の事は云何。

答曰　人は諸欲に貪著するが故に瞋恚が隨逆す。經の中に說くが如し、愛より恚及び嫉妬等の煩惱、鞭杖等の惡業を生ずるも、皆貪欲を以ての故に生ずるなりと。是の人の身心は貪恚の爲に壞せられ、多事にて疲勞し則ち睡眠せんと欲し、是の人にして睡眠し小息せば、貪恚還り來つて其の心を散亂し、禪定心を得ず、外緣に隨ふが故に[九一]掉戲を生じ、不淨業の人として心は常に憂悔し、散心悔心を以ての故に心は常に疑を生ず。解脫あれども王子が[九二]阿夷羅曰沙彌に語るが如くならざるなり。

問曰　何故に蓋と名づくるや。

答曰　貪欲瞋恚は能く戒品を覆ひ、掉悔は能く定品を覆ひ、睡眠は能く慧品を覆へばなり。有る人は此の蓋を除かんが爲の故に、是れ善なり是れ不善なりと說けば、是の人は中に於て疑を生ず、有と爲んや無と爲んやと、此の疑が成ずるが故に能く三品を覆ふなり。是の五蓋にては[九三]三法は力強きが故に獨り名づけて蓋と爲し、二蓋は力薄きが故に二法合して成ずるなり。又此の二蓋は生ずる因緣が倶なり、是の故に合して說く。睡眠の因緣は五法なり、謂く、單致利と不喜と頻申と、食不調と心退沒となり。掉悔の因緣は四法なり、謂く、親里覺と國土覺と不死覺と、先に戲樂せし所の言笑を憶念するとにして、是を生因と名づく。藥も亦同じ、故に睡眠は慧を以て藥と爲す。掉悔は定を以て藥と爲し、覆も亦同じ。故に二合して蓋と爲す。此の五法は或是れ蓋にして或は蓋に非ず、欲界繫の不善ならば名づけて蓋と爲し、餘は蓋とは名づけず。

五下分結の貪欲と瞋恚と戒取とは下に墮するを以ての故に名づけて下分と爲す。牛戒を持することが成ずるときは則ち牛と爲り、成ぜざれば則ち地獄に入るが如し。[九四]疑は離欲を障へ、身見は是

【九一】掉悔と同じ。

【九二】阿夷羅曰（Aciravata）は沙彌にして王舍城の人、竹林精舍に近き森にて、ヂヤヤセーナ（Jayasena）王子に遇ひ問はれて、聞き覺えの通りに法を說く、王子去りて後佛陀に見え調御地に就いて敎を受く。

【九三】二蓋は下文に睡眠と掉悔とを指し居れば、此二をいひ、從つて三法とは他の貪欲、瞋恚、疑なり。睡眠と掉悔とは隨煩惱としては四とせられ居たり。

【九四】宮本獨り疑とし、他は礙とす。疑が可なることはこれ五下分結の第四をいふものなるによりて知らる。次の身見が即ち第五なり。故にここにては五下分結の順序は貪欲、瞋恚、戒取、疑、身見となり、古く說かれ居る順序とは異る。此五下分結の順序を亂すは法相上甚だ不可なり。須陀洹が初めの三結を斷ずといふ三結が何れなりや明確とならざるに至ればなり。

五は漏を助くる因緣にして、合して說いて七と爲す、卽ち此の煩惱なり。佛は義に隨ふが故に三漏四流四縛四取四結等と說く。

問曰 四流は欲流・有流・見流・無明流なり、何れの者か是れなりや。

答曰 見と及び無明とを除いて餘の欲界の一切の煩惱は是を欲流と名づけ、色無色界の有流も亦た是の如し。諸見を見流と名づけ、無明を無明流と名づく。

問曰 流の中にて何が故に別して見流を說き漏の中にては說かざるや。

答曰 外道は多く見の爲に漂流せらる、是の故に流の中にては別して說く、能く漂沒するを以ての故に名づけて流と爲し、能く三有を繫ぐが故に名づけて縛と爲す。

問曰 四取は欲取・見取・戒取・我語取なり、何れの者か是れなりや。

答曰 無我の故に但是の語のみを取るを[八五]我語取と名づく。若し人にして我見あらば卽ち二邊を生ず、是の我は若しくは常、若しくは無常なりと。若し定んで無常なりと言はゞ則ち五欲を取す、後世なきを以ての故に深く現在の樂に[八六]著すればなり。若し定んで常なりと言はゞ、鈍根の者は則ち持戒を取して後世の[八七]樂を望み、小利根なる者は是の如きの念を爲す、若し神にして是れ常ならば則ち苦樂は變ぜず、則ち罪福なしと、故に[八八]邪見を起す。是の如く但我語のみに因るが故に四取を生ずるなり。

問曰 四結は、貪嫉身結、瞋恚身結、戒取身結、貪著是[八九]實取身結なり、何れの者か是れなりや。

答曰 他物を貪嫉し、他人にして與へざるときは則ち瞋心を生じ、鞭杖等を以て取る、是れ在家人の鬪諍の根本なり、亦は[九〇]隨樂邊とも名づく、若し人にして戒を持し、此の戒を以て而も淸淨を得んと欲し、卽ち是れのみは實なるも、餘は妄語なりと謂はゞ、是の見は則ち隨ふ、是れ出家人の諍訟の根本なり。亦は隨苦邊とも名づく、五陰を身と名づく、是の四結は要ず身口を須て成す、故

【八五】我語取は元來は我ありと說を固執する取の意なり。

【八六】これ卽ち斷見なり。順世派の如き其代表的のものとせらる。これ欲取なり。

【八七】これ戒取なり。

【八八】これ見取なり。

【八九】是のみが實なりと貪着する取の意。

【九〇】貪嫉身結と瞋恚身結とを隨樂邊と名づくる理なり。戒取身結と貪着是實取身結とを隨苦邊と稱するなり。下の九結品第一百三十七參照。

問曰　若し使にして衆生を使はゞ、經の中にて樂受の中の貪使を說くは此れ則ち相違せん。

答曰　是は語を盡くさず、應に樂受の中にて貪を生じて而して衆生を使ふと言ふべし。

問曰　是の貪は亦色等に因りても生ず、此の中にて、何が故に但樂受に因りて生ずとのみ說くや。

答曰　憶想分別と歡喜と等を以ての故に貪は生ずるなり、但色等よりのみ生ずるには非ず。

問曰　苦受に因りても亦貪を生ず、樂者は求めず苦者は多く求むと說くが如し、何が故に但樂受より生ずとのみ說くや。

答曰　苦受を以ての故ならば貪は生ぜず、是の人は苦の爲に惱まさるゝが故なり。樂受の中に於て貪を生ずるなり。

問曰　不苦不樂受の中にても亦貪使に使はる、何が故に但樂受の中とのみ說くや。

答曰　是れ人は不苦不樂受を以ても樂と爲すが故に貪が生ずるなり、故に樂受の中の貪使のみを說く。此の三受の中には三煩惱使あるを以ての故に但三のみを說くなり。[八二]

雜煩惱品　第一百三十六[八三]

問曰　經の中にて三漏を說く、欲漏と有漏と無明漏となり、何れか是れなりや。

答曰　欲界の中にて無明を除いて餘の一切の煩惱を名づけて欲漏と爲し、色無色界の有漏も亦是の如く、三界の無明を無明漏と名づく。

問曰　諸漏は云何が增長するや。

答曰　下中上の法なるを以ての故に增長す。又色等の勝緣を得るが故に諸漏は增長す。

問曰　是の三漏を云何が說いて七漏と爲すや。

答曰　實の漏に二種あり、見諦にて斷ずるは是れ諸漏の根本、思惟にて斷ずるは是れ諸漏の果、[八四]

【八二】　聖語藏は之を第十四卷の終とす。

【八三】　三本宮本はここより第十二卷となす。

【八四】　法聚品第十八を參照すべし。見諦所斷の煩惱と修道所斷の煩惱とをいふ。思惟は修道を指す。五漏とは遠離所滅、數事所滅、捨所滅、護所滅、制伏所滅の流をいふならむ。之に見諦所斷流、修道所斷流を加へて七流といひ、之を七漏といふならむ。福田品第十一參照。

想、若しくは我想を生ずればなり。是の故に不苦不樂の中にて癡が生ずと說くなり。

問曰　是の諸の使は法の中の使と爲すや、衆生の中の使たりや。

答曰　法に因りて衆生心を生じ、衆生心に隨つて則ち諸受を受け、諸受に隨つて貪等の煩惱使あり、故に知る法に因りて使を生じて而も衆生を使ふなり。何を以て之を知るや。若し衆生にして未だ此の使を斷ぜずむば則ち此の使に使はれ、若し斷ずるときは則ち復使はれざればなり。若し法の中の使ならば法は常に有なるが故に、使は應に常使なるべし、常ならば應に斷ずべからず、又非衆生數(しゅ)にも亦應に使あるべし、若し然らば、若し人の使なるを以ての故に壁等にも使あらむ、人に識あるを以つての故に壁等にも亦識あるべきに、是の事は實に無し。然らば則ち阿羅漢も無けん、餘人の使の故に使あればなり。

問曰　是の使にして未だ斷ぜざるときは則ち使はれ、斷ぜしときは則ち使はれざるや。

答曰　二種の使に使はる、一には[八〇]緣使、二には相應使なり。是の使は若しくは斷、若しくは不斷なれば卽ち是れ緣及び相應なり。何が故に斷ぜしときは則ち使はれずと說くや。若し爾らば、更に應に第三の使の相を說くべし、說くべからざるを以ての故に當に知るべし無きなり。又使は能く異地を緣じて而も使はれず、故に知る、但衆生の中の使たるのみにして、法の中なるには非ざるなり。

問曰　二種の使に使はる、一には緣使、二には相應使なり、是の衆生の諸使は緣にも非ず、相應にも非ず、云何ぞ當に使とすべきや。

答曰　是の事は先に答へたり。諸の使は法に因りて生じて而も衆生を使ふ、[八一]阿毘曇身の中にて欲界の衆生は幾(いくば)くの使に使はる等と說くが如し、若し衆生を使はずんば、云何ぞ是の如きの問あらんや。

【八〇】　これ所謂所緣縛と相應縛となり。

【八一】　阿毘曇身とは、前に六足論といへるに參照すれば、發智論（卽ち迦旃延所造の八犍度論）を指すといふべし。

らずむば、[七六]食不調と名づけ、(十九)若し精進に堪へずむば名づけて退心と爲し、(二十)若し諸の尊長の言說する所あるを敬せず畏れずむば不敬肅と名づけ、(二十一)惡人を喜樂せば樂惡友と名づく。是の如き等を隨煩惱と名づく、煩惱より生ずるが故なり。

不善根品　第一百三十五

三不善根とは、謂く、貪と恚と癡となり。

問曰　憍慢等も亦應に是れ不善根なるべし、何が故に但三のみを說くや。

答曰　一切の煩惱は皆是れ三種の煩惱の分なり、慢等は是れ癡分なるが故に別說せざるなり。又三種の煩惱は多くは衆生の心の中に在るも、慢等は爾らず、又一切の未離欲の者、乃至、蚊蟻にも是の三煩惱は皆心の中に在るも、憍慢等は是の如くならず。又貪は是れ[七七]瞋下善根なり、貪る所に違失すれば則ち隨つて瞋を生ずればなり。癡を二の本と爲す、所以は何、若し人にして癡無くむば則ち貪瞋あらざればなり。又經の[七八]中にて說く、十不善業に三種あり、貪瞋癡より生ずと。慢等より生ずとは說かず。又三種の受あるも、更に第四なし、是の三受の中に三煩惱使あり、若し別に慢等あらば何れの受の中に於ける使なりや、是の事は實に說くべからず。當に知るべし、此の三は是れ諸の煩惱の本なり。

問曰　何が故に樂受の中に貪使ありや。

答曰[七八]　現見するに此の中に生ずるが故なり。經の中にて說くが如し、人にして樂觸を得ば喜を生じ、[七九]苦觸なるときは則ち喜ばずと。是の人は諸受の中に於て、集と滅と味と過と出とを實の如く知らず、故に不苦不樂受の中にて無明使に使はる、所以は何、是の人は無色界繫の諸陰の相續に於て實の如く知らざるが故に、則ち是の中に於て寂滅の想、若しくは解脫の想、若しくは不苦不樂の

【七六】麗本等宮本以外は凡て初に作る。後の雜煩惱品第一百三十六に食不調とあれば、食の方可なり。

【七七】瞋は恚と同じ。瞋恚と熟字す。

【七八】麗本は對に作る。三本宮本聖語藏何れも答に作る。

【七九】大正大藏經は若に作る。誤植なり。

は、外道の行ずる所の種々の邪戒、裸形にして恥無く灰土を身に塗り髪を拔く等を受くるが故なり。又此の邪見人は皆世間の一切の利樂を失ひ、現在には五欲の樂を失ひ、後には善處に生ずるの樂、及び泥洹の樂を失ふ。若し人にして樂を求めて苦を得、解を求めて縛を得れば、狂と名づけざらんや、所以は何、一飡を施す因緣を以ても天に生ずることを得べきに、此の人は邪行を行ずるが故に身命を施すと雖も利益する所無ければなり。

[七一]隨煩惱品　第一百三十四

（一）心重くして眠らんと欲するを睡と名づけ、（二）心攝して覺を離るゝを[七二]眠と名づけ、（三）心が諸塵に散ずるを掉と名づけ、（四）心が憂結を懷くを悔と名づく、所謂應に作すべからざるを而も作し、應に作すべきを而も作さざるなり。（五）曲心にして善を詐るを諂と名づけ、（六）諂心にして事の成るを誑と名づけ、（七）自ら惡を作して羞ぢざるを無慚と名づけ、（八）衆の中にて惡を爲して羞ぢず戁からざるを無愧と名づけ、（九）心が不善に隨ふを放逸と名づけ、（十）實に功德無きに、相を示して、人をして有りと謂はしむるを詐と名づけ、（十一）奇特を現じ利養の爲の故に口にて人の意を悅ばしむるを[七三]羅波那と名づけ、（十二）他物を得んと欲して得んと欲する相を表はして、此の物は好し等と言ふが如きを名づけて現相と爲し、（十三）若し此の人を呰毀せんが爲の故に餘人を稱讃して、汝の父は精進なるも、汝は及ばずと言ふが如きを名づけて[七四]憿切と爲し、（十四）若し施を以て施を求めて、是の施物は某の邊より得たりと言はゞ、是の如き等を利を以て利を求むと名づけ、（十五）若し人にして睡るを喜む病有らば[七五]單致利と名づけ、（十六）若し好處に道を行ずるの因緣の具足を得るも而も常に愁憂せば、名づけて不喜と爲し、（十七）若し人にして頻申し、身は調適ならずして睡眠の因緣を爲さば名づけ頻申と爲し、（十八）若し人にして飲食の多少を調適することを知

【七一】今まで述べたるものは根本煩惱にして、此外のものは隨煩惱なり。本品はこの隨煩惱を說く。二十一種あり。睡、眠、掉、悔、諂、誑、無慚、無愧、放逸、詐、羅波那、現相、憿切、以利求利、單致利、不喜、頻申、食不調、退心、不敬肅、樂惡友これなり。これ等の或ものは以下にては合ぜらるるもあり。

【七二】睡と眠とを分つは細き區別なり。睡は識麁、眠は深細となすなり。覺觀に比較すべし。

【七三】羅波那とは Ravaṇa の音譯にて心が不安にてイラノイラして居る狀態をいふ如きも恐らく瞞に當るならむ。

【七四】三本宮本は激に作る。

【七五】單致利は tandri (tandrin)の音譯にて惛と譯さる。

問曰　見取に何の過あるや。
答曰　是の人は少功徳を得て自ら以て足ると爲す。又是の人は唐しく其の功を勞す、所以は何、是の人は善事に非ざる中に於て妙善なりとの想を生じ勤めて精進を加へ、此の因緣を以て後に則ち心に悔ゆればなり。又是の人は智者の爲に笑はる、非勝の中にて勝想を生ずるを以ての故なり。又若し人にして非勝を勝と謂はば是れ愚癡の相[七〇]なり、猶盲人が瓦礫の中に於て金銀の想を生じ、目ある者の爲に輕笑せらるるが如し、見取には是の如き等の過あり。
問曰　戒を以ての故に清淨を得るにあらずや。
若し人にして智を捨て、洗浴等の戒を以て清淨を得んと望まば名づけて戒取と爲す。
答曰　智慧を以て清淨を得、戒を智慧の根本と爲すなり。
問曰　戒取に何の過ありや。
答曰　說きし所の見取の過と下事を以て足ると爲る等とは皆是れ此の過なり。又戒取の因緣は唐しく諸苦を受く、謂く、寒熱を受け、灰土木刺棘等の上に臥し、淵に投じ火に赴き、自ら高きより墜つる等にして、後世にも亦劇苦の果報を受く。經の中に說くが如し、牛戒を持することにして若し成ぜば則ち還つて牛と爲り、若し成ずること能はずむば則ち地獄に墮すと。又此の人は冥より冥に入る、此の法を受くるを以て現世には苦を得、後にも亦苦しむが故なり。又此の人は深重なる罪を得、所以は何、非法を以て法と爲して、眞法を毀壞し、亦正法を行ずる者を謗し、多くの衆生をして眞淨の法に背きて罪の中に墮せしむるが故なり。大罪を積聚するが故に阿鼻地獄の果報を受く。寧ろ止行ぜざらむも、邪道を行ずること勿れ、所以は何、若し本行ぜずむば道を行ぜしめ易きも、邪行は心を敗るが故に道に入り難ければなり。又是れ怨賊なりと雖も、能く人をして衰惱せしむることは邪見を生ずるに如かず、所以は何、怨賊は人を汚すこと能はざるも、邪見に隨逐するが如き

【七〇】三本宮本は想に作る。

の故なり。是の人の作す所の不善は皆是れ増上す、久しく惡心を集するを以ての故なり。又戒法を以ての故に能く非法を制するも、是の人には善惡無きが故に禁忌する所無く、深く放逸を爲して不善法を行じ、定んで慚と愧との二種の白法を破し畜生と異ることなし。又若し人にして善惡無しと言はば是の人は心の中にて常に不善を懷ふなり。又是の人には能く善法を受くる因緣あることなし、所以は何、是の人は善人に親近すること能はずして善法を聞かざれば、惡心は起り易く善心は生じ難ければなり。易(たやす)く惡を起すを以ての故に善の因緣なきなり。是の如く漸く積めば則ち善根を斷ず。又此の邪見の人は難所に在りと名づく、地獄の衆生の道を得るに任(た)へざるが如く、此の如き人は中國に生れ、方根を具足し、能く好醜を別つと雖も、亦道を得るに任へず。又此の邪見の人は惡として造らざるなく、輕重をも忌まざれば、又少しく不善を作すも、亦地獄に墮す、重罪心を以て是の業を起すが故なり。[六八]業品の中にて地獄の業を解したるが如し。是の因緣を以て、此の人の作す所は皆地獄と爲す。又此の人は罪惡の業を盡くすこと能はず、不善の法が常に心に在るを以ての故なり。又此の人地獄に展轉して解脱を得ること難し、所以は何、斷善根の人は、若し善根にして未だ相續せざる間は、終に地獄を脱せざればなり。是の人には邪見が心の中に在るが故に、善根は云何が相續することを得んや。又邪見の人を不可治と名づく、猶病人に死相が已に現ずれば、良醫ありと雖も、復治すること能はざるが如く、是の人も亦爾り、餘の善無きが故なり。乃至、諸佛も亦治すること能はず。是の故に必ず阿鼻地獄に墮す。

[六九]二取品　第一百三十三

實事に非ざる中に於て決定の心を生じ、但是の事のみ實にして餘は皆妄語なりとなさば、是を見取と名づく。及び先に說きし非勝法の中にて定んで勝の想を生ずるをも亦見取と名づく。

【六八】六業品第一百一十を見よ。

【六九】見取と戒取とをいふ。戒取は通常は戒禁取といふ。佛教外のものが自ら戒なり禁(誓のこと)なりとなすも、佛教よりいへば、何れも戒にも禁にもあらざるものなり。此中には詳しくは非因計因と非道計道との二を含む。

以て解脫を得とし、[60]八直を以て清淨道と爲さざるなり。有の中にて無想を生ずとは、若しくは法にして世諦の中にて有なるをも亦說いて無と爲すなり。無の中にて有想を生ずとは、若しくは、陀羅驃あり、有分者有りと說き、亦數量等の求那も有りと說き、亦[61]總相と別相と及び集とを說き、亦[62]世性等の無物を有と爲すと說くものなり。是の如き等の因緣にて顚倒心を生ずるを皆邪見と名づく。此の邪見の中に於て[63]四種の見を別つて餘殘の重き者を皆邪見と名づくるなり。

問曰　是の邪見は云何が斷ずるや。

答曰　經の中にて佛は說く、正見が能く邪見を消すと。

問曰　正見は云何が生ずるや。

答曰　若しくは見聞比知して正しく決定するが故に則ち正見生ず。又善く正定を修すれば則ち正見生ず、經にて說くが如し、心を攝すれば能く實の如く知る、散心には非ざるなりと。

問曰　是の邪見に何等の過が有る。

答曰　一切の過咎及び諸の衰惱は皆邪見に由るなり。此の人は罪福及び善惡業の報無しと謂ふが故に現在に諸の好事なし、況んや未來世をや。是の如く善惡を破する人を斷善根と名づく、決定して當に阿鼻地獄に墮すべし。[64]阿毘曇六足の中にて說くが如し、是の人を殺すも罪は蟲蟻を殺すよりも輕しと。又此の邪見人は世間を汚染し、多く衆生を損減することを爲すが故に、生ずることは毒樹の生ずるが如し、惱害を爲すが故なり。又此の人の起す所の身口意業は皆惡報を爲す、經の中にて說くが如し、邪見人の起す所の身口意業は、欲[65]願思念するすら、皆惡報を爲す、[66]苦瓠拘賒を種うれば毒枝が必ず害し、[67]曼陀樹を是の中に種うれば所有の地種・水・火・風種は皆苦味と爲るが如し、苦を種うるを以ての故なりと。是の如く邪見の人の諸餘の心心數法も邪見を以ての故に皆惡報を得。是の故に此の人は施等ありと雖も修に好果無し、先に邪見心の爲に壞せらるゝを以て

【六〇】八聖道を指す。他にては八直道ともなす。通常の八聖道の譯語は此論にも用ひられ居れば、これ譯語の不統一を示す一例なり。

【六一】勝論說にいふ同句義と異句義となれば、集は恐らく和合句義の和合の異譯ならむ。

【六二】世性は數論派の說く自性（勝因又は非變異ともいはる）を異譯せるもの。これは前には波居帝とも波羅伽提とも音譯せられ居たるものなり。

【六三】邪見を廣くいへば、身見邊見邪見見取戒取の五種を含むとすべく、又之を邪見中より別開したりともなすを得るが故に、別開して他の四種にはそれぞれの名稱を附し、殘餘の一を邪見となすなり。

【六四】六業品第一百一十の六足阿毘曇樓炭分參照。

【六五】麗本等は凡て曠に作るも、聖語藏の願が可なり。

【六六】苦瓠拘賒は原語不明。

【六七】曼陀は maṇḍa の音譯ならむ。

く本性に還歸すと。又諸法滅すと雖も憶想を以ての故に能く苦樂を受くれば則ち常想を生ず。又神は是れ常、音聲も亦常なりと説く。是等の縁を以ての故に常想を生ず。苦を樂と謂ふとは、隨つて何れかの因縁を以て説いて樂ありと言ふこと、先の三受品の中にて説きしが如し、是の因縁を以ての故に樂想を生ず。不淨の淨想とは、身に染著するを以ての故に眼に不淨を見るも而も淨想を生ずるなり。或は是の念を作す、我が[五七]人根を得たれば、此の人身の不淨なるを見るも、更に衆生あり、之を以て淨と爲すと。是の如き等の縁の故に淨想を生ず。無我の我想とは、陰の相續して生ずるを見て、而も一相を取り、之を以て我と爲すなり。又先に身見の因縁を生ぜしが如し。是の因縁を以ての故に我想を生ず。非勝の勝想とは、是の人は富蘭那等の外道師の中に於て而も勝想を生ずるなり。又[五八]梵王は自ら我は是れ大梵天王にして、萬物を作る者なりと説く。是の如き等なり。有る人は言く、若し人にして具足して五欲の樂を受くれば是を勝法と名づくと。又言く、若し人にして欲を離れて初禪乃至四禪に入らば是れ最勝法なりと。又説く、世間の現見の衆生の中にては婆羅門を尊と爲す、現見に非ざる衆生の中にては天を最尊と爲すと、是れ非勝の勝想なり。勝の非勝想とは、一切衆生の中にては佛を最勝と爲すに、有る人は中に於て勝想を生ぜずして、是の如きの言を爲す、是れ刹利種なり、又學道日淺しと。又謂く、佛の法は言は巧妙ならず、文辭は煩重にして韋陀の如くならざれば此を勝と名づけず。衆僧の中には[五九]四品の人あれば、是の故に勝ならずと。是の如き等は勝の中にて非勝想を生ぜしものなり。非淨道の中の淨道想とは、若し人にして灰水等を以て洗はゞ人をして清淨ならしむと言ふものなり。又説く、生死盡き訖はるを清淨道と名づくと。又但持戒梵行に貪著し天等を供養するのみと。亦説く、自在天に由るが故に清淨を得と。或は説く、苦行すれば本業が盡くが故に清淨道と名づくと。又葷辛及び酥酪等を斷ずるが故に清淨を得と。又淨く洗浴し韋陀の語を以て呪し、然して後に飲食するを清淨道と名づくと。是の如き等の種々の邪道を

【五七】三本宮本は人相に作る。

【五八】長阿含の梵動經等の中に此實例あり。

【五九】四品の人とは前にありし如く四姓の人なり。衆僧は四姓何れよりもの出身者を含め居ればなり。

無く善惡業の報無しとは言く、若し神にして是れ常ならば、則ち善惡無く、若し神にして無常ならば則ち後世なく、後世無きが故に則ち善惡なく、善惡業の報無し。今世無しとは、諸法を分析すれば終に都無に歸すればなり。後世なしとは隨つて死後には作さざるの因緣を以ての故に、後世なしと謂ふなり。父母無しとは、亦分々に之を析して盡さしむるを以てなり。又說く、糞に因りて蟲を生ずるも、糞は蟲の父母に非ざるが如く、又頭等の身分は卽ち父母の身分なるには非ず、又諸法は念々に滅するが故に何れを以てか父母と爲さんや。衆生の受生するもの無しとは、衆生の法は無なるが故に、今世すら尙無し、況んや能く身を受けんをや、又思惟して言く、是の衆生は是の身なりと爲んや、身に非ずと爲んや、若し是の身ならば、眼見するに、此の身は埋むれば則ち土と爲り、燒けば則ち灰と爲り、蟲が食へば糞と爲るが故に受生無しと。身に非ずとは則ち二種あり、若しくは心なると、若しく心を離るゝとなり、若し是れ心ならば、心法の生滅は念々にして住せず、況んや後身に至らんをや、若し心を離るれば則ち我を計せず、他の心の中に於てすら尙我を計せず、況んや心無き處にてをや、是の故に受生する者無し。阿羅漢無しとは是の人は一切の人は飢うれば則ち食を求め、寒ければ則ち溫を求め、熱すれば則ち凉を求め、毀害すれば則ち瞋り、敬養すれば則ち喜ぶが故に能く煩惱を盡くす者有ること無しと見るなり。又經書には或は說く、阿羅漢なしと、此の經に隨逐するが故に此の見を生ずるなり。垢淨等には因緣なしとは、是の人は此の垢の法は自然にして而も生ずと見るなり。又垢ある者は卽ち體是れ垢なるが故に因無しと說くなり。知見無知見も亦是の如し。力も無く勇も無しとは、一切衆生は皆假の因緣なると見るなり。或は有るが言く、自在天に由りて能く所作あり、又衆生は業因緣に屬して自在ならざるを見るが故に、力も無く勇も及び此の果も無しと說くと。無常の常想とは隨つて、何れかの因緣を以て念々に滅するを破し、是の因緣を以ての故に常見を生ずるなり。又說く、諸法は滅する時には還つて微塵と爲ると。或は言

後世の報に名づけ、今世は現在に名づけ、後世は未來に名づけ、父母は能生に名づけ、衆生の受生は今世より後世に至るに名づけ、阿羅漢は煩惱を盡くせる者に名づく。此の事無しと謂ふが故に邪見と名づくるなり。又衆生の垢淨と有知見無知見とには皆因緣なく、又力も無く、勇も及び此の果も無し[五〇]等となすを名づけて邪見と爲す。要を取て之を言はゞ、所有の倒心を皆邪見と名づく。[五一]無常の常想、苦を樂となす想、不淨の淨想、無我の我想、非勝の勝想、勝の非勝想、淨道の非淨道想、非淨道の淨道想、無の中の有想、有の中の無想の如し。是の如き等の諸の顚倒心は謂く[五二]阿毘曇の中の五見、梵網經の中の[五三]六十二見にして、皆邪見と名づくるなり。

問曰 是の邪見は云何が生ずるや。

答曰 癡を以ての故に生ず、因に非らざる[五四]似因に染著するが故に邪見が生ず。又樂因に染著するを以ての故に苦無しと說き、又空の道を失するが故に苦無しと說くは苦を受くる[五五]者無きを以ての故なり。若し世間の萬物は因無く緣無しと說き、或は自在等を因として愛を因とせずと說かば、是を集無しと名づけ、隨つて、何れかの因緣を以て泥洹なしと說き、或は異つて泥洹を說かば、是を滅無しと名づけ、若し泥洹の道無くんば、何れか至る所ならんやとし、或は更に異の解脫道あり、謂く斷食等なりと說かば、是れを道無しと名づく。佛無しとは是の人は言ふ、諸法は無量なれば、云何ぞ一人にして能く盡く知らんやと、或は是の念を生ず、佛を人中の尊と爲すと、人無きを以ての故に當に知るべし佛無し。煩惱の盡くることなきが故に法なしと名づけ、正行の此の法を得る者有ることなきが故に僧無しと曰ふ。布施の現果は得べからざるを以ての故に布施無しと謂ひ、又有る[五六]經書にては布施なしと說き、比知するも亦決定せず、世間には布施を好む者にして而も更に貧窮なる有り、慳貪なる者にして而も富貴を得るあればなり、是等の因を以ての故に施無しと說く。祠無く燒無きも亦是の如し、若し火にて物を燒いて灰と爲さば、是の中に何等の果かあらん。善惡

【五〇】 これ六師中のマッカリ、ゴーサーラ（Makkhali Gosāla）の說、此人は邪命派（Ājīvika）の長なれば、これ即ち邪命派の說なり。

【五一】 無常の常想とは無常なるものを常なりと考ふる想の意。

【五二】 三報業品第一百四の六足阿毘曇參照。

【五三】 過去に關する十八見と未來に關する四十四見とを指す。佛陀の時代印度一般の宗教家の間に行はれたる說を網羅分類せるものなり。長阿含梵動經又は單行の梵網六十二見經を見よ。後世の佛教學者は種種の臆說によりて六十二の數を充たさむとして說をなすも、すべて妄說なり。阿含經を輕視して研究せざりしより來れる誤なり。此經は前品にもあり。

【五四】 麗本は以因とす。前には似因とありたり。又三本宮本に似因に作る。

【五五】 この無はなみすと讀まば解し易し。ここは四諦一一を無となすを述ぶ。無集、無滅、無道、何れも無みしと讀むも可なるべし。

【五六】 佛教以外の典籍を指す。經書といひて單に經といはざるときは凡て然り。

にて說くが如し、若し一一の陰にして人に非ず、和合せる陰も亦人に非ず、陰を離るるも亦人に非ず、現在には是の如く不可得なり、云何が當に阿羅漢は死後作さずと說くべき、故に知る人は不可得なり、人は不可得なるが故に我見及び斷常の見も亦無なりと。又諸法は衆緣より生ずるを見れば、則ち二邊なし。又世間の集を見れば則ち無見を滅し、世間の滅を見れば則ち有見を滅すと說くが如し。又中道を行ずるが故に則ち二邊を滅す、所以は何、諸法の相續して生ずるを見れば則ち斷見を滅し、念々に滅するを見れば則ち常見を滅す。又說く、五陰が即ち是れ人なるにも非ず、亦陰を離れて是れ人なるにも非ず、故に知る常にも非ず斷にも非ず。能く異身を得るが故に一と爲すことを得ず、俱に是れ衆生なるが故に異と爲すことを得ず。又五陰が相續するが故に衆生の生死あり、是の中にては即とも言ふことを得ず、是れ相續して異なるを以ての故なり、亦異とも言ふことを得ず、相續の中にては一と說くべきを以ての故なり。又說く、此の陰より彼の陰は異なるが故に常とも言ふことを得ず、自の相續の因緣の力より生ずるが故に斷とも言ふことを得ず。

邪見品　第一百三十二

若し實有の法に而も無の心を生ぜば是を邪見と名づく、四諦三寶なし等と言ふが如し。經の中にて說く、邪見とは、[四六]施無く、祠なく、燒無く、善無く、惡無く、善惡業の報なく、今世無く、後世無く、父母無く、[四七]衆生の世間に受生する無く、阿羅漢の正行正至して自ら明了に此世後世を證して我生は盡き梵行は已に成じ所作は已に辦じ此の身の已つてよりは更に餘身無しと知る者なしとなすを謂ふ。施は他を利せむが爲の故に與ふるに名づけ、祠は韋陀の語言を以て[四八]天を因となすが故に祠つるに名づけ、燒は天祠の中に於て蘇等の物を燒くに名づけ、善は能く愛果を得る三種の善業に名づけ、惡は不愛果を得る三種の惡業に名づけ、善惡業の報は今世の善惡の名等及び[四九]天身等の

【四六】これ六師中のアジタ・ケーサカンバリーのいふ所に基きたるものなり。此人は佛教者ならざれば、阿羅漢とはいはずして、如來の語を用ひしが、この如來は佛陀を指すにあらずして、宗教的に修行して悟りたりとせらるるもの一般を指したるなり。之を今は阿羅漢とし、從つて我生已盡梵行已立所作已辦なる阿羅漢の特質を加へたるなり。

【四七】これは元來は化生の有情なきをいひたるものなり。

【四八】天に生るることを望みて、それを因として祠るなり。

【四九】天に生れて得る身が天身、或は天人の集りが天身なり。

て我は若しくは斷たり若しくは常なりと說かば是を邊見と名づく、一切の法には非ず、所以は何、現見するに外物には斷滅あるが故なり。經の中にて說く、有見を常と名づけ、無見を斷と名づくと。又身は卽ち是れ神なりとなさば名づけて斷見と爲し、身は異にして神は異なりとなさば[三九]常見と名づく。又死後は作さずとなさば名づけて斷見と曰ひ、又死後も還作すとなさば名づけて常見と爲す。死後には亦は作し亦は作さずとなさば、是の中の所有の作すとなすをば常と名づけ、作さずとなすをば斷と名づく、作に非ず不作に非ずとなすも亦是の如し。

問曰　是の[四〇]第四をば應に見と名づくべからず。

答曰　是の人は世諦の中に於ても亦人法なきが故に名づけて見と爲す、常無常、[四一]邊無邊等の四句も亦是の如し。又經の中にて說く、六觸入にして盡く滅するに異餘あらば卽ち常と爲し、異餘なくんば卽ち斷と名づくと。又若し我は先に作し後にも當に更に作すべきを見ば、是を常見と名づけ、我は先にも作さず後にも更に作さずとせば是れを斷見と名づく。又邪見經に說く、人身の七分は地・水・火・風・苦・樂・壽命にして、若し其の死の時には、四大は本に歸し根は虛空に歸すと[四二]。又說く、刀輪を以て衆生を害し、積んで肉聚を爲すも殺生の罪なしと[四三]なすは是れを斷見と名づくと。及び[四四]梵網經の中にて斷見の相を說きたり。若し後世あり、作者は卽ち是れ受者なりと言はば是れを常見と名づく。

問曰　斷常の見は云何が生ずるや。

答曰　何れの因緣を以て死後に還作すかを說く是の因緣に隨ふが故に常邊の見を生じ、何れの因緣を以て死後には作さずと說く是の因緣に隨ふが故に斷滅の見を生ずるなり。

問曰　此の見は云何が斷ずるや。

答曰　正しく空を修習するときは則ち我見無し、我見無きが故に則ち二邊無し。[四五]炎摩伽經の中

【三九】身體を我となさば身體が死後無とならば我も無となるとなさざるを得ざるが故に是斷見なり。身體と我と異らば。身體死するも我は常住に存すとなすが故に常見なり。

【四〇】前の死後不作が第一、死後作が第二、死後亦作亦不作が第三、死後非作不作が第四なり。

【四一】世界の有邊無邊等の四句なり。

【四二】七を認むるは六師中のパクダ・カッチーヤナ（Pakudha Kaccāyana）の說此人は恐らく邪命派の一異派ならむ。四大が本に歸し根が虛空に歸すといふは六師中のアヂタ・ケーサカンバリー（Ajita Kesakambali）の說なるが、ここには混入せられて一說となり居るなり。

【四三】此說は六師中のプーラナ・カッサパ（Pūraṇa Kassapa）の說、此人は此書中にしばしば富蘭那又は富蘭那迦葉としていはれ居る人なり。

【四四】梵網經は次品にも引用せらる。長阿含梵動經なり。

【四五】無我品第三十四にも此經は引用せらる。

の相を滅するを第一義諦と名づく。又若し世諦の故に有と說かば、則ち須く復第一義にての無を說くべからず。又經の中にて說く、若し諸法には自の體性なきこと知らば則ち能く空に入ると。故に知る五陰も亦た無なり。又第一義は空なり、經の中にて說く、眼等は第一義諦を以ての故に無なり、世諦の故に有なりと。〔三四〕大空經の中に說く、若しくは是れが老死なりと言ひ、若しくは是の人が老死すと言ひ、若しくは外道は身は卽ち是れ神なりと言ひ、若しくは身は異にして神は異なると言はば、是の事は義は一にして而も名が異るなり、若し身は卽ち是れ神なり、身は異にして神は異なりと言はば是れ梵行者に非ず、若し是の人の老死するを遮せば、卽ち無我と說くことにして、若し是れの老死なるを遮せば、卽ち老死、乃至、無明を破するなり。故に知る第一義の中には老死等なく、生は老死に緣たりと言ふは皆世諦を以ての故に說くなり、是を中道と名づく。又羅陀經の中にて說く、佛は〔三五〕羅陀に語る、色は散壞し破裂して滅して現ぜざらしむ、乃至、識も亦時の如し、石壁等の如しと。不實なるを以ての故に現ぜざらしむべくむば、諸陰は現ぜず、亦第一義にては無なるを以ての故なり。諸陰の相の在るに隨つて則ち我心は畢竟しては斷ぜず、因緣が滅せざるを以ての故なり。樹は剪伐焚燒し、乃至、灰炭にすと雖も樹想は猶隨ふ、若し此の灰炭をば風が吹き水が漂はせば樹想は乃ち滅するが如く、是の如く、若し破裂散壞して五陰の相を滅せば、爾の時には乃ち空相が具足すと名づく。又〔三六〕經にて說くが如し、羅陀よ、汝は衆生を破裂し散壞し分析し現在せざらしめよと。是の經の中にては五陰に無常にして衆生は空なりと說く。無先經の中にて說く、五陰散滅すれば是を〔三七〕法空と爲すと。

邊見品　第一百三十一

若し諸法は或は斷なり或は常なりと說かば、是を邊見と名づく。〔三八〕有る論師は言く、若し人にし

〔三四〕この大空經の同文は滅法品第一百五十三に引用せらる。これ中阿含の一經なり。

〔三五〕羅陀(Rādha)舍衞城の婆羅門種の人、年老ひて、精舍に趣き、草取り掃除をして、食を得、後舍利弗にその溫順を認められ佛によりて出家を許さる。下の滅法心品第一百五十三にも此經を引用す。

〔三六〕羅陀經なり。

〔三七〕この二經にて人空と法空とをいふ。

〔三八〕有部を指す。

答曰　二諦なり。若し第一義諦を說かば、有我は是れを身見と爲し、若し世諦を說かば、無我は是れを邪見と爲す。若し世諦の故に有我、第一義諦の故に無我と說かば、是れを正見と爲す。又第一義諦の故に無と說き、世諦の故に有と說かば、見の中に墮せず。是の如く有無の二の言は皆通ず、[三一]虎の子を啗むに、若し急ならば則ち傷つき、若し緩ならば則ち失するが如く、是の如く若し定んで有我と說かば則ち身見に墮し、定んで無我と說かば、則ち邪見に墮す。又過と不及とは二つ倶に過あり、若し定んで無と說かば是れ則ち過と爲し、若し定んで有我と說かば是を不及と名づくればなり。故に經の中にて說く、應に二邊を捨つべし、若し第一義諦の故に無と說き　世諦の故に有と說かば、二邊を捨てゝ中道を行ずと名づくと。又佛の法は諍ひ勝つべからざるに名づく、若し第一義諦の故に無と說かば則ち智者は勝たず、若し世諦の故に有と說かば則ち凡夫は諍はされば なり。又佛の法は淸淨なる中道にして非常非斷と名づく、第一義諦にては無なるが故に常に非ず、世諦にては有るが故に斷に非ざればなり。

問曰　若し法にして第一義の故に無ならば、便ち應に是れ無なるべし、何が爲に復世諦の故に有なりと說くや。

答曰　一切世間の所有の言說、謂く業及び業報、若しくは縛、若しくは解等は、皆癡より生ず、所以は何、是の五陰は空にして幻の如く燄の如し、相續して生ずるが故なり。凡夫を度せんと欲するが故に隨順して有と說く、若し[三二]說かずんば凡夫は迷悶して、若しくは斷滅に墮せん、若し諸陰を說かずんば則ち化すべからず、罪福等の業、若しくは縛、若しくは解は皆成ずること能はざるを以てなり。[三三]若し此の癡語を破せば則ち自ら能く空に入り、爾の時には諸の邪見なし、是の故に後に第一義諦を說くなり。初めには身を觀じて、男女の相を破することを敎ふるが故に、次には髮毛爪等を以て身相を分別して但五陰のみあらしめ、後には空相を以て五陰の相を滅するが如し、五陰

【三一】聖語藏の文にのみ有の字あれど、ある方解し易し。定んでとは一向に決定的に有我とのみ說いて、無我を說かざるをいふ。

【三二】有と說かずむばなり。

【三三】立假名品第一百四十一、假名相品第一百四十二、滅法心品第一百五十三、滅盡品第一百五十四參照。

若し人にして此を知らば　能く生死を度る、更に餘道なしと。[二九]

小人ならば則ち小さく、大人ならば則ち大にして身窟の中に住す。坐禪人ありて光明の相を得れば、身中の神の淨珠の中の縷の如くなるを見る。是の如き等の人は色を計して我と爲すが、麁思惟の者は受が是れ我なりと說く、木石等の中には受なきを以ての故なり、知るべし受は卽ち是れ我なりと。中思惟の者は想が是れ我なりと說く、苦樂は過ぐと雖も猶想あるは我心なるを以ての故なりと。細思惟の者は行を說いて我なりと爲す、瓶等の相は過ぐと雖も猶思有るは我心なるを以ての故なりと。深細思の者は、識を說いて我と爲す、思も亦麁にして、此の思は過ぐと雖も猶故に識あるは我心なるを知るが故なりと。又五陰の中に於て我心を生ず、是の人は受等の諸陰を分別すること能はざればなり。色心の中に於て合して我想を生ず、色等の四法に於て總じて瓶の想を生ずるが如し。色等の差別に[三〇]二十分あるを以て、色は是れ我なりと見るなり。所以は何、色は是れ我にして法を了し、受等は所依なればなり。此の諸の受等は色に繫在するが故に色を我と爲すと謂ふなり。有る人は色が受等の中に住するを見れば、受等は是れ法を了ぜざるが故に色を所依止とす、虛空は了ぜざるが故に、地等を依止となすが如しと。是の如く、二十分は皆癡に由りて生ずるなり。

問曰　眼等の中にては何が故に我分を說かざるや。

答曰　亦有り、經の中にて說くが如し、若し人にして眼は是れ我なりと說かば、是れ則ち然らず、所以は何、眼は是れ生滅すればなり。若し眼にして是れ我ならば我は則ち生滅すべし。又眼等は各各に相が別れたれば、若し眼は是れ我なるも、耳等は我に非ずと說かば是れ則ち然らず、若し耳等にして復是れならば、則ち一人にして多我あらん、色等の中に差別あるが故に、色は是れ我にして、而も受等には非ずと說くことを得べし。

問曰　若し無我と說かば亦是れ邪見なり、此の事は云何。

[二九] 此句は大毘婆沙論にも引用せらるるが、ヴーヂヤサネーイ・サンヒターにあり。印度哲學研究第一卷參照。

[三〇] 前にいへる二十種我見參照。

べて所得なしと。是の如く、凡夫は乃至癩野干の身を貪求して泥洹を用ひず。若し空智を得れば則ち復畏れず。[二六]憂波斯那經にて説くが如し、清淨持戒の人は善く八聖道を修し、命終する時には心は喜ぶこと、猶毒器を破るが如しと。又若し我ありと説かば卽ち邪見に墮す、若し我にして是れ常ならば則ち苦樂は變ぜず、若し變ぜずんば則ち罪福なければなり。若し我にして無常ならば則ち後世なし、自然に解脱して亦罪福なし、故に知る身見は是れ重罪なり。又身見をば名づけて甚癡と爲す、一切の凡夫は皆身見を以て心を亂し、深く有に著するが故に生死に往來す、若し無我を見れば往來は則ち斷ず。

問曰 若し五陰にして我なくんば衆生は何が故に中に於て我心を生ずるや。

答曰 若し人天男女の名相を聞かば、想分別するが故に則ち我心を生ずるなり。亦因に非ずして因に似るを以ての故に我心を生ず、所謂、若し無我ならば誰か苦樂威儀語言を受け、罪福の業を起し果報を受けんやと。又無始の生死に於て久しく我相を集むれば、則ち其の瓶等の相の如くならしむるものを成するが故に我心を生ず。又諸の受陰の中に於て我心生ず、不受の中にては非ず、故に我心を生ずる處と謂ふなり、此の中に我あり、所以は何、一切處には我心を生ぜざるが故なり。又愚癡を以ての故に我心を生ずること、猶盲人が瓦石等を得て金玉の想を生ずるが如し。又是の人は未だ空を分別する智を得ざれば、癡の故に我を見ること、幻夢[二七]乾闥婆城火輪等の中に於て而も有の想を生ずるが如し。

問曰 現見するに色身髮毛爪等の諸分は各異なり、云何が智者にして之を以て我と爲さむや。

答曰 有る人は神は麥の如く芥子等の如くにして心中に住し、婆羅門の神は白く、刹利の神は黃に、[二八]違舍の神は赤く、首陀羅の神は黑しと見る。又韋陀の中にて説く、

冥初の時、大丈夫神は　色日光の如し。

【二六】憂波斯那は比丘の名。此人は阿羅漢にて三慧品第一百九十四に關說せらる。

【二七】乾闥婆城(Gandharva)は尋香城と譯す、蜃氣樓のこと、常に物の幻有無實の例として引用さる。

【二八】毘舍とも書く。

一に正見より生じ、二は聞より生ず、正見より生ずる信は則ち堅固にして、聞より生ずるものは是の如くなること能はず。

身見品　第一百三十 [二四]

[二五]五陰の中にての我心を名づけて身見と爲す。實には我無きが故に五陰を緣ずと說く、五陰を身と名づけ、中に於て見を生ずるを名づけて身見と爲す、無我の中に於て我相を取るが故に名づけて見と爲すなり。

問曰　五陰の中に於て我の名字を作すに何の咎ありや。瓶等の物に、各々自ら相あり、是の中には過なきが如く、我も亦た是の如し。又若し陰を離れて我ありと說かば是れ應に咎あるべし。

答曰　陰を離れずして我を說くと雖も是れ亦過あり、所以は何、諸の外道輩は說く、我は是れ常なり、今世に業を起し後に報を受くるを以ての故なりと。若し是の如くに說かば五陰は應に卽ち是れ常なるべし。又我を說かば我を以て一と爲すなり、然らば卽ち五陰卽ち應に是れ一なるべし、是を名づけて過と爲す。又我は卽ち是れ過なり、所以は何、我心を以ての故に我所あればなり。我所あるが故に貪恚等の一切の恒惱を起す、故に知る我心は是れ煩惱の生ずる處なり。又此の人は陰を離れずして我を說くと雖も、陰の相を取るを以ての故に空を行ぜず、空を行ぜざるが故に煩惱を生じ、煩惱より業を生じ、業より苦を生じ、是の如くにして生死は相續して斷ぜざるなり。又是の人は我を計するを以ての故に尙鹿に身頭目手足を分別することを得る能はず、況んや能く諸陰を分別せんや、我は一なり我は常なりといふを受くるを以ての故なり。若し分別せずんば、何ぞ能く空に入らん。又若し我を見るときは、則ち泥洹を畏る、我は當に無なるべきを以ての故なり。經の中にて說くが如し、凡夫は空無我を聞いて大怖畏を生ず、我は當に無なるべきを以ての故に都

【二四】　三本宮本はここより第十一卷となす。

【二五】　身見以下の五見にも相と因と過と斷とを說き居る理なれど、各別に次第しては說かずして混じて說く。

答曰　若し多疑の者には一切の世間出世間の事は皆成ずること能はず、所以は何、疑人は事業を起發すること能はざればなり。若し發するも則ち劣なるが故に成ずること能はず、又經の中にて說く、疑は是れ心の栽[三一]蘗なり、猶荒田に栽蘗多きが故に異草すら尙生ずることを得ず、況んや稻穀をや、といふ如く、心も亦是の如く、疑根の爲に壞されて、邪事の中に於てすら尙定まること能はず、況んや能く正しく定まらむやと。又佛は說く、疑を闇聚と名づく、闇聚は三種なり、過去の闇聚、未來の闇聚、現在の闇聚なり、此の闇聚は是れ諸の我見の生ずる處なりと。又此の人は設ひ定心を得るも則ち是れ邪定なり、若し佛の法を離るれば則ち能く爲に正定を說く者なし。又多くの衆生は疑を懷いて死に至る、[三二]阿吒伽等の五通の仙人も亦疑を抱いて死すと說くが如し。又此の疑者は、若し施等の福德を爲すも、或は果報なく、或は少しく報を得るのみ、所以は何、是の諸の福業は皆心より起るに、是の人の心は常に疑の爲に濁さるればなり。故に善福なし。又經の中にて說く、疑心もて布施せば邊地に於て報を受く、所以は何、是の多疑者は一心なること能はずして、時に隨つて手づから與ふれども種々に恭敬心を生ずること能はざるが故に邊地に於て少果報を受くること、[三三]波耶綏等の小王の如くなればなりと。

問曰　此の疑は無なり、所以は何、疑を心數法と名づけ、諸の心數法は念々に生滅すればなり、若しくは是なるも疑に非ず、若しくは非なるも亦疑に非ず、一心に是あり非あることを得ず、故に知る無なり。

答曰　我は念々の中に疑ありとは說かず、決定せざる心の相續するを疑と名づくるなり。爾の時には心は是れ杌なり、是れ人なりと決了せず、是が相續して心は不信を以ての故に濁り、亦邪見を以ての故に不信となれば、疑は時には或は有り或は無きなり。是の不信は二種なり、一は疑より生じ、二は邪見より生ず、疑より生ぜば、則ち輕く、邪見より生ぜば則ち重し。信も亦た二種なり、

【三一】三本宮本は枿に作る。註は枿は木餘也とあり。

【三二】三本宮本は阿吒伽羅に作る。阿吒伽は Aṭṭhaka (aṭṭaka) ならむ。

【三三】波耶綏は Pāyāsi ならむ。長阿含弊宿經參照。

答曰　若しくは二種の法を見聞して知るが故に疑が生ず、所以は何、先に二種の立てる物一は杌、二は人を見、後に於て遙に人と等しき物を見るときは則ち疑を生ず、杌なりや人なりやと。土等も亦爾り。二種の聞ならば、若し罪福後世ありと說くを聞き、亦無しと說くを聞けば、是の故に疑を生ず。二種の知ならば、天大に雨ふり而も溝渠は漫溢すと、若し水を堰ぐ時ならば渠も亦漫溢すとの如く、天雨ふらんと欲するとき、蟻子が卵を運ぶと、若し人が發掘すれば亦卵を移し去るとの如く、孔雀の鳴くと人の亦能く作すとの如く、實事の見るべきこと[一七]瓶の如き、實事ならずしても亦見るべきこと旋火輪の如きと、實事にして見るべからざること樹根地下の水の如き、實事にも非ず亦見るべからざること第二頭と第三手との如きとなり。是の如き等二種に法を見聞し知るが故に、疑を生ず。又審に見ざるが故に疑を生ず、[一八]遠等の八因緣の如し。又二の信の故に疑が生ず、有る人は後世ありと言ひ、有る人は無しと言ふに、俱に二人を信ずるが如くんば、是の故に疑が生ず。又此の疑ふべき事の中に於て、乃至、異相を見ざれば、是の故に疑が生ずるも、若し異相を見れば此の疑は則ち無し。

問曰　云何が異相を見ると名づくるや。

答曰　見聞し知りて決定するが故に則ち疑あることなし。佛法の中に於ては、隨つて、身を以て法の實相を證する時には畢竟して疑なし、菩薩が道場に坐する時に、

[一九]精進なる婆羅門に　深法が現前することを得て、
諸緣の盡くを見知し、　疑網卽ち斷滅す。

と、說くが如し。又若し道理ある慧を得ば、此の疑は則ち斷ず、智者が行の因は識に緣たりと聞かば、卽ち決定して生死は無始なりと知るが如く、その如き等なり。

問曰　[二〇]疑に何の過ありや。

【一七】以上の三種の例は正理派の說く比量の三種の實例とせらるるものなり。

【一八】遠等の八因緣については根塵合離品第四十九を見よ。そこには八種以上の場合を擧げたるに、ここに特に八種となすは、明にこれ數論派の說く八種の不可見の場合を指すなり。數論頌に此說存す。

【一九】これパーリ律藏大品の最初部にて佛陀の成道を說く場合に擧げ居る偈に相當するものにして、偈と見るべきなり。ここにある婆羅門は佛陀を指す。これ一見奇なれど、奇にして必ずしも奇ならず。

【二〇】疑の過。

問曰　云何が憍慢多き相と名づくるや。

答曰　是の人の所執は堅固にして與に語る可きこと難く、恭敬の心なく、怖畏に少け、喜んで自在に行じ、自ら大にして教へ難く、所有の薄少なるを自ら以て多しと爲し、喜んで人を輕懱して、此の過除き難し。故に有智者は應に行ずべからざる所とす、此の慢は一切の功德を破らむが爲の故に生ずればなり。

疑品　第一百二十九

論者曰　[一]疑とは實法の中に於て心が決定せざるに名づく、謂く解脱ありや、解脱なきや、善不善ありや、無きや、三寶ありや、無きやと。是を名づけて疑と爲す。

問曰　若し樹杌に於て疑を生じて、杌なりや、人なりやとし、土塊に於て疑を生じて、塊なりや鴿なりやとし、蜂に於て疑を生じて、蜂なりや[二]閻浮果なりや、蛇に於て疑を生じて、蛇なりや繩なりやとし、野馬に於て疑を生じて、光なりや水なりやとし、是の如き等の疑は眼識に因りて生ずるが、聲に於ても疑を生じて、孔雀の聲なりや人の作たりやとし、香に於ても疑を生じて、[三]優鉢香なりや[四]和香たりやとし、味に於ても疑を生じて、肉味たりや、肉味に似たりやとし、觸に於ても疑を生じて、生縮たりや熟縮たりやとし、意識ならば則ち種々に疑を生じて、是の法は[五]陀羅驃有りや、但求那のみなりや、神ありや、神なきやと疑ふが如し。是の如き等は是れ疑なりや不や。

答曰　若し杌人等の中の疑は則ち煩惱には非ざれば、此は後身の因緣と爲ること能はず、漏盡の人も亦此れを起すを以ての故なり。

問曰　是の[六]疑は云何が生ずるや。

[一]　疑の相。

[二]　閻浮果は閻浮(Jambu)樹の果實紫色にして、甜酢の味あり。

[三]　優鉢香、優鉢は優鉢羅(utpala)の略、優鉢羅は蓮花なり、故に蓮花の香をいふ。

[四]　和香、種種の香抹を混ぜしもの。

[五]　ここに勝論説を指摘し居るを見るべし。

[六]　疑の因、同時に斷。

を以て身の因緣を念ぜば、則ち憍慢無し。又智者は一切衆生は若しくは貧若しくは富なるも、若しくは貴若しくは賤なるも、皆骨肉筋脈[八]五臟糞穢が合して而も身を成じ、倶に生老病死憂悲苦惱あり、亦貪恚等の諸煩惱、罪福等の諸業、及び地獄等の諸の惡道分あることを知れば、云何ぞ當に憍慢を起すべけんや。又內外の心の因緣より生ずるを見、念々に滅するを知らば、則ち憍慢なし。又善く空心を修すれば、則ち憍慢なし。所以は何、相に隨逐するが故に則ち憍慢生ず、若し相なくんば、何れの處にか慢を起さんや。又智慧者にして若し實に戒等の功德あらば、則ち慢を生ぜず、所以は何、戒等の功德は皆此の諸の煩惱を盡すことを爲すが故なり。若し功德なくとも、何れの有智者か無事の中に於て而も憍慢を起さんや。又無常[九]等の相を觀ずれば則ち憍慢を滅す、何れの有智者か無常苦不淨の物を以て而も憍慢を爲さんや。

問曰　憍[一〇]慢には何等の過ありや。

答曰　慢より身あり、身より一切の苦を生ず。經の中にて佛が說くが如し、若し我弟子にして、實の如く慢の相を知ること能はずむば、我は與に受記せむ、當に某の處に生ずべしと、餘の慢有つて斷ぜざるを以ての故なり。又一切の煩惱は皆、隨つて相を取る、我は是れ相の中の大なるものなり、故に知る、慢より身あり。又此の憍慢は則ち是れ癡分なり、所以は何、眼は色を見るを以て我能く見ると謂へばなり。又此の憍慢の生ずるは道理を以てせず、所以は何、一切世間は皆無常苦無我なれば、云何ぞ此を以て而も憍慢を生ぜんや。是の故に貪恚癡に於て最も道理無し。又慢より業を起さば、亦は利、亦は重し、貪著が深きを以ての故なり。貪より業を起すも是の如くなること能はず。又憍慢の力の故に貪等は熾盛なり、即ち此の貪は種姓等の慢を得れば則ち增長し熾盛なるなり。又我慢の因緣にて卑賤の家に生じ、亦師子虎狼の中に於て生じ、此の因緣より則ち地獄に墮す。憍慢には是の如き等の無量の過咎あり。

【八】五臟はよくいはるる所なるが、肝心肺腎脾をいふなり。

【九】無常想品第一百七十三の最後部參照。

【一〇】慢の過。

問曰　增上慢に何等の咎ありや。

答曰　彼に當に憂惱すべし、經の中にて說くが如し、若し比丘にして我は疑を斷じて道を得たりと言はば、卽ち應に現前に甚深の因緣、出世間の法を說くべし、若し是の比丘にして實に道を得ざらば、是の法を聞く時に、則ち悔惱を生ず、故に應に勸めて此の增上慢を斷ずべし。又增上慢の人をば諸佛世尊の大慈悲あるすら猶尙捨て遠ざけて爲に法を說かず、是の故に應に斷ずべし。又增上慢の人は邪法に住するが故に實の功德なし、猶賈客の深く大海に入つて而も僞珠を貪るが如く、是の人も亦爾り、佛の法の海に入つて少しの禪悅を得、謂うて眞道と爲して而も貪著を生ず。又增上慢の人は後に老死する時まで道を受くるに任へず、故に當に眞實の智慧を勤求すべし。又增上慢の人は自ら己が利を失ひ、亦愚癡を增益す、實に未だ得ざるに想うて得たりと謂ふを以ての故なり。是の故に應に自ら其の身を誑かすべからず、當に速に棄捨すべし。若し大に勝れたる人に於て少しく如かずと謂はば不如慢と名づく、是の人は自ら高ぶり亦自ら身を下す。若し人にして德無うして自ら高ぶらば名づけて邪慢と爲し、又惡法を以て自ら高ぶるをも亦邪慢と名づく。若し善人及び所尊の中に於て禮敬することを肯はずむば、名づけて傲慢と爲す。是の如き等を名づけて憍慢の相と爲す。

問曰　慢[七]は云何にして生ずるや。

答曰　諸陰の實相を知らざるときは、則ち憍慢が生ず、經の中にて說くが如し、若し人にして無常の色を以て、自ら是れ上、是れ中、是れ下なりと念ぜば、是の人は正に如實の相を知らざるを以ての故なり、乃至、識も亦是の如しと。若し陰の相を知らば則ち憍慢なし。又善く身念を修せば、則ち憍慢なし、牛が角を恃んで則ち暴慢を爲すが如し。若し其の角を去れば則ち能くせざるなり。身は不淨なるが爲に、九孔は惡を流すに、何れの有智者か此を恃んで自ら高ぶらんや、是の如き等

【七】慢の因。同時に慢の斷をも含む。下に斷を說かざればなり。

卷の第十

憍慢品[一] 第一百二十八

問曰 已に三煩惱は是れ生死の根本なることを說きたり、更にありと爲すや不や。

答曰 有り、名づけて慢と爲す。

問曰 云何なるを[二]慢と爲すや。

答曰 邪心を以て自ら高ぶるを慢と名づく。是の慢は多種なり、若し卑に於て自ら高ぶるを慢と名づくれば、等しきに於て等しと計するをも亦名づけて慢と爲す。此の中にては相を取る我心の過あるを以ての故に、等しきに於て自ら高ぶるを名づけて大慢と爲し、勝に於て自ら高ぶらば是を慢々と名づけ、五陰の中に於て我相を取らば名づけて我慢と爲す。我慢は二種なり、示相と不示相となり、示相とは是れ凡夫の我慢にして、謂く(一)色が是れ我なりと見、(二)有色[三]が是れ我なりと見、(三)我の中に色を見、(四)色の中に我を見るなり、乃至識にも亦是の如し、是の[四]二十分を示すが故に示相と名づく。不示相とは是れ學人の我慢にして、長老[五]差摩伽の說くが如し、色が是れ我なりと說かず、受想行識も是れ我なりと說かず、但五陰の中にて我慢我欲我使有りて、未だ斷ぜず、未だ盡さざるを是を我慢と名づくと。若し未だ須陀洹等の諸果の功德を得ざるに、自ら謂うて[六]得たりとなさば、増上慢と名づくと。

問曰 若し未だ得ざるに、何が故に得たりとの心を生ずるや。

答曰 禪を習ふ中に於て少味を得るが故に、能く結使を遮して心中に行ぜしめず、故に此の慢を生ずるなり。又聞思修の力にて、常に善師に近づき、遠離の行を樂しみ、少しく五陰の相を知るが故に、須陀洹等の果の想を生ぜば、増上慢と名づく。

【一】三本宮本はこゝにては分卷せず。大正大藏經は此品より聖語藏との校合を出し、第百三十五品の終まで至る。

【二】慢の相。

【三】有色とは色を有するものの意。

【四】二十分とは、色受想行識について各各以上の如くに四通りの見方を數へしものなり。之を二十種我見ともいふ。

【五】差摩伽。此名は滅法心品第一百五十三にもあり。道諦聚智論中智相品第一百八十九には差摩伽經の引用あり。

【六】これ四波羅夷罪中の妄語にてもあるなり。

色香味觸に因りて成ずと知らば、是の如く色等の諸陰を人と僞さむ、能く是く如くに知らば則ち能く名より生ずる癡を捨離す、是の名字は能く諸法の實義を覆へばなり。[一〇〇]天問經に名は一切法に勝れ、更に能く過ぐる者なし、是の名字に一切の諸法は皆隨ふと說けるが如し。又說く、世間の集を見れば則ち無見を滅し、世間の滅を見れば則ち有見を滅すと。又說く、諸行が相續するが故に五陰は生死すと說くは此れ皆無明の過患なれば、因緣を觀ずれば則ち滅すと。又經の中にて說く、若し人因緣を見ば、是の人は卽ち法を見るなり、若し法を見ば卽ち佛を見るなりと。[一〇一]是の如く、若し人にして能く名より生ずる癡を斷ずれば是の人は則ち實に佛を見るものにして、他の敎に隨はず、是の故に、正智を以ての故に則ち無明は盡き、正しく因緣法を知るが故に能く正智を得るなり。又略して說かば、[一〇二]八萬四千の法藏の中の所有の智慧は皆無明を除くものなり、無明は是れ一切煩惱の根本にして、亦一切の煩惱をも助くるを以ての故なり。是の如きの因緣にて則ち無明は斷ずるなり。

【一〇〇】煩惱相品第一百二十一の天問參照。

【一〇一】此經文は有名なるものなり。

【一〇二】八萬四千の法藏、色相品第三十六にも此語あり。佛法所說の法の一切を指し、數字にて非常に廣大なることを表はす。數量の多き場合に常に八萬四千の語を用ふ。

亦自らも悦び難し、親附すること能はず、亦親近し難し、愚騃にして識なく、弊垢の衣を好み、樂んで黑闇及び不淨處に處し、自ら大にして自ら貴び、憙んで人を輕蔑し、道理を以てせずして自ら功徳を顯はし、過を過と知らず利を利と識らず、淨潔を好まず亦威儀なく、語言に拙くして常に憙んで恚恨し、僻んで他教を取つて而も深く貪著し、學誦するも得ること難く、既に得たるをも失ひ易く、設ひ所得あるも義を辯すること能はず、設ひ所辯ありとも則ち復邪僻あり、是の如き等の相は皆無明に由る、故に知る無明には無量の過あり、是の故に應に斷ずべし。

問曰　當に云何が斷ずべきや。[九七]

答曰　善く眞智を修すれば、則ち無明は斷ず。

問曰　陰界等を知るも亦眞智と名づくるに、經の中にて、何が故に、無明の藥とは若しくは因緣、若しくは因緣觀なりと說くや。

答曰　諸の外道の輩は多く因の物の中に於て謬り、因の中にて謬るが故に、[九八]自在天等が世間を爲ると說き、因の物の中にて謬るが故に陀羅驃あり有分あり等と說くも、因緣法を觀ずれば、此の二は則ち斷ず。

問曰　因緣を無明の藥と名づく、何が故に二種の說ありや。

答曰　餘智を攝せんと欲するが故なり。若し陰界入等を觀ずるも亦無明を破すも、但重き無明を邪見と名づけ、邪見は因緣を以て斷ずるが故に二種の說あり、貪恚も是の如し。又世間は多くは瓶等の名字の中に於て謬る、瓶の名を聞いて則ち心に疑を生じて、色等は是れ瓶なりと爲すや、色を離れて更に瓶ありと爲すやといふが如く、是の如く五陰が是れ人なりと爲すや、五陰を離れて更に人ありと爲すやといふ。若し心にして決定すれば則ち二邊に墮す、所謂斷と常となり、身が則ち是れ神なりと、身は異にして神は異なりとにして、[九九]亦是の如し。若し人にして瓶は衆緣より生じ、

【九七】無明の斷。

【九八】明業因品第一百二十及び此品の無明の因の部參照。

【九九】麗本三本は異身異神となすも、宮本の身異神異の方正し。身と神とは相互に異り、身を離れて神ありとなす說なり。神は精神靈魂を指し、我なり。

は皆是れ無明なり。又邪見は業を起して多く地獄に墮す、邪見は皆無明に由るが故に生ずるなり。又佛の世尊、一切智人、三界の大師たると眞の淨行の者と及び聖弟子等とを、諸の外道輩は別に知ること能はず、眞の寶珠にても盲者は之を棄つるが如し、此れ皆無明の過なり。又一切衆生の所有の衰惱敗壞等の事は皆無明に由り、一切の利益の成就し增長するは皆明に由れば、若し無明を增長せば、究竟して必ず阿鼻地獄に墮す。劫初の人が味は是れ虛妄なりと知らずして而も貪著を生ぜしが故に、色力壽命等の事を失せるが如き、當に知るべし皆無明に由りて諸利を妄失せるなり。又此の無明は但眞智のみが斷ず、貪等は爾らず。又貪心の中には恚なく、恚心の中には貪無きも、無明は一切の心の中に在り、及び慧を修せざる人の無明は常に心の中に在り。又諸の煩惱の中にては無明が最も强きこと、經の中に無明は罪重うして又除解し難しと說くが如し。又無明は是れ十二因緣の根本なり、若し無明なくんば、則ち諸業は集まらず成ぜざるなり。何を以てか之を知る。諸の阿羅漢には衆生相なく無明なきが故に、諸業は集成すること能はず、[95]業が集まらざるが故に識等の諸分も復生ずること能はず。故に知る無明は是れ諸苦の本なり。又現見するに、此の不淨身に貪著すれば、亦無常の中に於ても常想を生ずること、猶空[96]拳にて以て小兒を誑らかすが如く、亦幻師が能く現前に人を誑らかし、土を金と爲すと見せしむるが如し。又俗は言く、愚人は現に罪を以て加へ、而も言を以て誑らかす可しと、世間も亦爾り、眼に不淨を見て而も其の爲に誑かさる。又諸の心法は念々に盡く滅し、相を取るが故に生じ、色滅盡し已るも癡の故に相を取る、聲等の中に於ても亦復是の如し。是の故に解し難し、此れ皆無明の過なり。

問曰 無明多き人に何等の相ありや。

答曰 是の人は畏處に於て畏れず、憙處にて憙ばず、善人を憎惡し惡人を愛樂し、倒に人の意を取りて常に憙んで反戾し、堅く邪事を執して慚愧を少き、嫌疑を顧みず、彼を悅ばすこと能はず、

【九五】此場合、無明の次の行は業と同義と見做し居るなり。

【九六】麗本は捲に作る。解し易き爲に三本宮本に從ふ。

親近し邪法を聽聞して邪念し邪行し、是の四邪の因の故に無明が生ず。又餘の煩惱を生ずる因緣は皆是れ無明を生ずるの因なり。又無明の因に從ふが故に無明が生ずること、麥より麥を生じ、稻より稻を生ずるが如し。是の如く衆生を計するに隨つて則ち無明が生ず。又經の中に說く、邪念の因緣より則ち無明が生ずと。邪念は則ち是れ無明の別名なり、謂く人あると見て先に人の念を生じて後に明了となるが故に名づけて無明と爲す、是の二は先後に相助け相生ずること、樹より果を生じ果より樹を生ずるが如し。

問曰〔九四〕無明に何等の過ありや。

答曰　一切の衰惱は皆無明に由る、所以は何、無明より貪等の煩惱を生じ、煩惱より不善業を起し、業より身を受け、身を受くる因緣にて種々の衰惱を得ればなり。經の中に說くが如し、無明に覆はれ愛結に繫がれて、諸有の身を受くと。又師子吼經の中にて說く、諸取は皆無明を以て本と爲すと。有る偈にて說く、

所有の諸惡處は　若しくは今世なるも
後世なるも皆無明を本と爲す、と。

故に貪欲より一切の煩惱の過を起すこと皆無明のあるに由る、無明より一切の煩惱を生ずるを以ての故なり。又凡夫は無明を以ての故に五陰の不淨無常苦空無我を受くるも、何れの有智者か此の諸苦を受けんや。又正しく思惟するが故に能く五陰を捨つ、經の中にて說くが如し、若し我心にして是れ邪顚倒なりと知らば、則ち復生ぜずと。故に知る無明の因緣を以ての故に縛せられ、明の因緣の故に解くなり。又世間の衆生は無明の力を以ての故に、少味を貪求して多過あるを見ず、蛾の火に投ずるが如く、魚の鉤を呑むが如し、衆生も亦爾り、現に少味を貪りて多過を顧みず。又外道の經典の生ずる所の邪見は罪福なし等と說く、皆是れ無明なり。又諸の惡道は皆不善に因る、不善

〔九四〕無明の過。

問曰　有る人の言く、但明なきを以ての故にのみ無明と名づく、室に光明なきときは則ち名づけて闇と爲すが如しと。

答曰　世間に二種の語あり、或は明なきが故に說いて無明と名づけ、或は邪なる明なるが故に說いて無明と名づく。明無きが故に無明と說くとは、世間に盲は色を見ず、聾は聲を聞かずと言ふが如く、邪なる明なるが故に無明と說くとは夜に杌樹を見て人の想を生じ、人を見て杌樹の想を生ずるが如し。又若し人にして實に是の事を知ること能はざるが故ならば不知と名づく、又邪心を煩惱と名づく。是の諸行の因緣を、阿羅漢は斷ぜるが故に無明の因の諸行に緣たることあることなきなり。若し明に非ざるを無明と名づけば、今の阿羅漢は佛の法の中の明なければ、應に無明と名づくべく、若し無明あらば阿羅漢には非ず。當に知るべし、別に無明の體性あり、邪心是れなり。是の邪は是れ無明の分にして一切の煩惱と爲る、所以は何、一切の煩惱は皆邪行なるが故なり。又一切の煩惱は人心を覆蔽して皆盲冥と爲すこと、貪欲は法を見ず、貪欲は福を見ず、能く此の貪を受くる者を皆名づけて盲冥と爲すと說くが如し、恚癡も亦是の如し。又一切煩惱より諸行を生ずるに、而も經の中にては無明より行を生ずと說く、故に知る一切の煩惱を皆無明と名づくるなり。又空を見ざる者には常に無明有り、但無明に垢さは是れ諸行の因緣なるのみ。又邪なる明なるが故に無明と說くは、未だ空を見ざる者は常に是れ邪なる明なればなり。故に知る無明の分を一切の煩惱と爲す。

問曰[九二]　無明は云何にして生ずるや。

答曰　若し邪因を聞思すれば則ち無明が生ず。陀羅驃あり有分あらば精神あり、諸法は念々に滅せずして、後身あることなく、音聲及び神は是れ常にして、草木等にも心あり[九三]となすが如き、是の如き等の邪執を成ぜむと欲せば則ち無明が生ず。或は邪因に從ふが故に無明が生ず、謂く惡友に

【九二】　無明の因。

【九三】　此說中、陀羅驃有分は勝論說なるも、音聲常住草木有心は勝論說ならず。神常住は殆ど凡ての學派にて認むるも、音聲の常住は正統婆羅門に限り、草木有心は主として數論派吠檀派などの說なり。後身の無は順世派の說たるのみ。諸法不念々滅は數論派等の暫住無常などを指すか。かくして此處の說は一派のみの說を擧げたるものにあらざるを知る。

すと說くなり。又經の中にて明の義を解して、所知あるが故に名づけて明と爲すと謂ふ。何等の法を知るや。謂く色陰無常なるを實の如くに無常と知り、受想行識陰無常なるを實の如くに無常と知るなり、明と相違するを名づけて無明と爲す、然らば則ち如實を明にせざるが故に無明と名づくるなり。

問曰　若し如實を明らめざるを無明と名づけば木石等の法をも應に無明と名づくべし、如實を明にせざるを以ての故なり。

答曰　然らず。木石は無心にして過去世等を分別すること能はざるも、無明は能く分別するが故に木石に同じからざるなり。

問曰　無明は無法に名づく。人目の見ざる色の如く、見ざる法は無なり。是の故に但明なきが故に名づけて無明と爲し、別の法無きなり。

答曰　然らず。若し無明なくんば、五陰の中に於て妄に人有りと計し、及び瓦石の中にて金想を生ぜば名づけて何等と爲すや。故に知る邪分別性を無明と名づく、明無きが故に無明と名づくるには非ざるなり。又無明の因緣より諸行等の相續して生ずるあり、若し無法ならば云何ぞ能く生ぜんや。

問曰　若し明に非ざるを無明と名づけば今但明を除く一切の諸法は盡く是れ無明なるのみ、是の故に一法を以て名づけて無明と爲すにはあらず。

答曰　是の無明は自相の中にて說く、餘法をば說かず。不善と言へば卽ち不善の體を說いて、無記を說かざるが如く、無明も亦爾り。又人の形を稟くと雖も人の行なきが故に、說いて非人と名づく。是の如く此の明は、分別ありと雖も、實には知ること能はず、故に無明と說く、木石は爾らず。

問曰　若し無色無對無漏無爲なりと說かば皆是れ餘說なり、無明は何が故に是の如くならざるや。

答曰　或は此の理もあるも、不善等の中にては則ち是の如くならず。

を答めず、所以は何、是の瞋等の過は衆生の咎に非ざればなり。衆生の心に病發るが故に自在を得ず、治鬼師が鬼の著きたる者を治するに、但鬼に瞋るのみにして病人を瞋らざるが如し。又是の人は勤行精進して善法を貪集するが故に他語を計せずして、又念ずらく、諸佛及び衆の賢聖すら尙罵を免れず、巧罵婆羅門等が種々に佛を罵るが如く、舍利弗等も婆羅門の爲に諸の毀辱を加へられたるが如し、何に況んや我等薄福の人をやと。又此の念を作す、世間は惡多きも、我命をば奪はれざれば、已に大なる幸と爲す、況んや打罵をやと、又是の念を作す、此の惡罵等は我に於て苦無く、忍受すべきこと易し、佛が比丘に敎へしが如し、若し鐵鋸にて身を解かるゝすら尙應に忍受すべし、何に況んや罵らるゝをやと。又此の行者は常に生死を厭へば、若し毀罵を得ば則ち證驗明了にして轉厭離を增し、惡を捨てゝ善を行ず。又是の人は忍辱せずんば後に苦報を受くることを知れば、是の如きの念を作す、寧ろ輕罵を受くるも地獄に墮すること勿らんと。又是の人は深く慚愧を懷き、我は大人世尊の弟子と爲りて道を修する者なれば、云何ぞ當に、應に作すべからざる所の身口業を起すべけんやと。又忍を行ずる菩薩及び帝釋等の得る所の忍力を聞く。是の故に能く忍ぶ。

無明品　第一百二十七

論者言[九二] 假名に隨逐するを名づけて無明と爲す。凡夫は我音聲のみに隨ふ、是の中には實には我も無く我所も無く、但諸法の和合せるのみを假に名づけて人と爲すに、凡夫は分別すること能はざるが故に、我心を生ず、我心を生ずるは卽ち是れ無明なりと說くが如し。

問曰 經の中にて、佛は過去世を知らざる等を名づけて無明と爲すと說く、何が故に但我心是れなりとのみ說くや。

答曰 是の過去等の中にて、多くの人は錯謬するが故に、是の中にて知らざるを名づけて無明と爲

【九二】 無明卽ち癡の相。

得ず、是れ忍辱の力なり。又忍を行ずる者を名づけて沙門と爲す、忍辱を以て道の初門と爲すが故なり。沙門法とは怒らるゝも報ひ怒らず、罵らるゝも報ひ罵らず、打たるゝも報ひ打たざるなり。又若し比丘にして能く忍べば則ち應に出家法なるべし。又瞋恚の者は出家人の法に非ず、出家人の法は忍辱是れなればなり。又若し比丘にして形服は俗に異るも、而も瞋心が同じきときは則ち宜しき所に非ず。又若し忍を行ぜば則ち已に慈悲の功德を具すと爲す。又忍を修せば能く自利を成ず、所以は何、瞋恚を爲す者は、人を惱害せんと欲して而も返つて自ら害せばなり。所有の身口にて惡を人に加ふれば、自ら得る所の惡過は百千倍す、故に知る瞋を大なる自の損減と爲す。是の故に智者にして自他をして大苦及び大罪を免るゝことを得しめんと欲せば應當に忍を行ずべし。

問曰　云何が能く呵罵等の苦を忍ぶや。

答曰　若し人にして善く無常を修して諸法は念々に生滅すと了達せば、罵者受者も皆念々に滅して、是の中にて何れの處にか應に瞋を生ずべけんや。又善く空心を修するが故に能く忍辱して、是の如きの念を作す、諸法は實に空なり、誰か是れ罵者、誰か是の受罵者なると。[九〇]又事にして實ならば則ち應に忍受すべし、我には實に過あり、前人は實語す、何が故に瞋らんやと、若し事にして不實ならば、彼の人が自ら當に妄語の報を得べし、我にして何が故に瞋らんやと。又若し惡罵を聞かば、當に是の念を作すべし、一切世間は皆業に隨つて報を受く、我は昔必ず當に此の罵業を集めしなるべし、今應に之を償ふべく、何が故に瞋らんやと。又若し惡罵を聞かば、當に自ら其の過を觀ずべし。我は身を受け、身は苦器たるに由るが故に、應に罵を受くべしと。又忍を行ずる者は是の如きの念を作す、萬物は皆衆因緣より生ず、是の惡罵の苦も耳識意識音聲等より生ず、我は此の中に於て自ら二分あり、他人は唯音聲のみあり、是れ則ち我罪分多きなり、何が故に瞋らんやと、又我は此の聲に於て相を取て分別するが故に憂惱を生ず、卽ち是れ我咎なりと。又忍辱する者は他人

[九〇]　提婆の臨終時の言を思浮ぶべし。

にて則ち瞋恚が生ず。

問曰 [八五]是の瞋に何等の過ありや。

答曰 [八六]經の中にて說く、瞋を貪欲よりも重罪なりと爲す、故に名づけて解し易しと爲すも而も實には解し難し、但貪の久しく心に隨逐する如くならざるのみ。又瞋を兩惱と爲す、我自ら燒惱し而して後に人を燒けばなり。又瞋を定んで地獄と爲す、瞋より業を起し、多く地獄に墮するを以ての故なり。又瞋は能く善福を壞す、謂く施戒忍の是の三は皆慈等より生ずるに、瞋は慈と相違するが故に能く壞すと名づく。又瞋より業を起せば皆惡名を受く。又瞋より業を起せば後皆心に悔ゆ。又瞋恨する者には憐愍なきが故に名づけて凶暴と曰ひ、衆生は常に苦しんで而も復瞋惱すること、瘡に火を[八七]加ふるが如し。又經の中にては自ら瞋の過を說く、謂く多瞋の者は形色醜陋にして、臥も覺も安ならず、心は常に怖畏し、人の信ぜざる所なり等と。

問曰 瞋恚多き者に何等の相ありや。

答曰 心口は剛强にして常に歡悅せず、頻蹙して近づき難く、面色は和せず、忿り易くして解け難く、常に憙んで恚恨し、諍訟を憙び、兵器を嚴飾し、惡友に朋黨し、善人を憎惡し、人と爲り麁獷にして、諦には思慮せず、慚愧に少く、是の如き等あるを瞋恚の相と名づく。是の相は皆他人を憎惡することを爲す。是の故に應に斷ずべし。

問曰 [八八]當に云何が斷ずべきや。

答曰 常に慈悲喜捨を[八九]修すれば、瞋恚は則ち斷ず。又瞋恚の患を見れば、是れ則ち能く斷じ、又眞智を得れば瞋恚は則ち斷じ、又忍力を以ての故に瞋恚は則ち斷ず。

問曰 何をか忍力と謂ふや。

答曰 若し能く他の呵罵等の苦を忍べば、是の人は善法の福を得、亦不忍より惡を生ずることを

【八五】瞋恚の過を說く。
【八六】貪過品第一百二十四の初頭を見よ。
【八七】大正大藏經は如とす。
【八八】瞋恚の斷を說く。
【八九】四無量定品第一百五十九參照。

づけ、義にては專執と言ひ、瞋にして他の利を得るを見て心に嫉妬を生ずるあらば、名づけて[七六]伊沙と爲し、瞋にして常に諍訟を憙んで心口の剛强なるあらば、[七七]三藍披と名づけ、義にては忿諍と言ひ、瞋にして若し師長の教戒するに而も返つて拒逆するあらば、[七八]頭和遮と名づけ、義にては佷戾と言ひ、瞋にして若し少許り意に適はざる事を得るも則ち心惱亂するあらば、[七九]阿羼提と名づけ、義にては不忍と言ひ、瞋にして言は柔軟ならず、常に喜んで頻蹙し、和顏なること能はずして、意に先ちて語言するあらば、[八〇]阿婆詰略と名づけ、義にては不悅と言ひ、瞋にして同止する中に於て常に憙んで罵詈するあらば、[八一]阿播羅沾と名づけ、義にては不調と言ひ、瞋にして身口意を以て同學を觸惱するあらば、名づけて[八二]勝耆と爲し、義にては惱觸と言ひ、瞋にして常に憙んで彈呵し好んで物を呰毀するあらば、[八三]登單那他と名づけ、義にては難可と言ふ。是の瞋は二種なり、或は衆生に因ると或は衆生に因らざるとなり。衆生に因るを名づけて重罪と爲す。又上中下に九品に分別し、又九惱に因りて分別して九と爲し、事なきに橫に瞋るを是を第十と爲す。是を瞋相と名づく。

問曰　[八四]瞋は云何にして生ずるや。

答曰　意に適せざる苦惱の事より生ず。又苦受の性を正しく知ること能はざるが故に則ち瞋恚が生じ、或は呵罵鞭打等より生じ、或は惡人と事を同じうすれば則ち瞋恚が生ずること、屠獵師等の如く、或は智力が劣弱なるが故に瞋恚が生ずること、樹の枝條が風の爲に動かさるるが如く、或は久しく瞋使を集め乃至性を成ずるが故に瞋恚が生じ、或は屠獵毒蛇の中より來るが故に瞋恚が生じ、或は憙んで他の過を念ずるが故に瞋恚が生ずること、九惱の中に說くが如く、或は時節に隨ふが故に瞋恚が生ずること、十歲人等の如く或は種類を以ての故に瞋恚が生ずること、毒蛇等の如く或は方處を以ての故に瞋恚が生ずること、康衢國等の如く、又先に貪の生ずる因緣を說きしが、此と相違すれば則ち瞋恚が生じ、又我心を計して、憍慢熾盛なると、及び物に著すると、是の如き等の緣

【七六】伊沙は irṣyā の音譯、嫉と譯さる。
【七七】宮本と明本とは披を波に作る。三藍披は saṁrambhin の音譯。
【七八】頭和遮は dveṣa の音譯。
【七九】阿羼提は akṣānti の音譯。
【八〇】阿婆詰略は apakīrti などの音譯か。
【八一】三本宮本は沾を治に作る。阿播羅沾は asuratya の音譯か。
【八二】勝耆は jigīṣā 又は jigīṣu などの音譯か。
【八三】三本宮本は他を陀に作る。登單那他は todanatā などの音譯か。
【八四】瞋恚の因を說く。

が如し。又多聞等の慧が增長するが故に能く貪欲を斷ず、智慧の性は煩惱を破するを以ての故なり。又善の因緣にして具足せば則ち貪欲は斷ず、謂く淨持戒等と[六八]十一定となり、具には後の道諦の中にて當に說くべし。又色智等と法智等との諸の方便あり。佛を大醫と爲し、諸の同學を給仕と爲し、正法を藥と爲して、自ら說の如くに行じて將息を爲さば則ち貪欲の病は斷ず、病人にして三事が具足せば病は則ち時に愈ゆと知ることあるが如し。

問曰　經の中にて說くが如し、不淨を以て貪を除くと。何が故に不淨等及び無常等と說くや。

答曰　一切の佛の法は皆諸の煩惱を破せんが爲なり。然るに各勝力あり、初めは不淨を以て貪を遮し、後には無常智を以て斷ず。又不淨を以て麁の貪欲を除くこと、是れ多く人の知る所なるも、貪使は細なるが故に無常を以て斷ずるなり。又但一經のみの中にては是の如きの說を作すも、諸經の中にては亦餘法の能く斷ずることをも說く。是の如きの因緣にて則ち貪欲は斷ずるなり。

瞋恚品第一百二十六

論者言[六九]　瞋恚の相とは、若し此の人を瞋りて失滅せしめんと欲し、他人をして打縛殺害せしめんと願ひ、一向に棄捨して永く見ることを欲せざらば、是の瞋を[七〇]波羅提伽と名づけ、義にては重瞋と言ひ、瞋にして、但他人を毀罵し鞭打せんと欲するのみなるあらば、[七一]違欣娑と名づく、義にては中瞋と言ひ、瞋にして捨離することを欲せず、或は妻子を憎愛する中より生ずるあらば、[七二]拘盧陀と名づく、義にては下瞋と言ひ、瞋にして常に心を染汚するあらば、名づけて[七三]摩叉と爲し、義にては不報恨と言ひ、瞋にして心に在つて捨てず、要ず還報せむことを欲するあらば、[七四]憂波那呵と名づけ、義にては報恨と言ひ、瞋にして急に一事を執し、種々に教悔するも終に捨つることを欲せざること、師子の河を渡つて彼岸を取らむとする相の如く、死に至るも轉ぜざるあらば、[七五]波羅陀舍と名

【六八】 十一切處品第一百七十二參照。

【六九】 貪に準じて瞋恚にも亦其の相と因と過と斷とを說く。こゝは瞋恚の相を說く。

【七〇】 波羅提伽は pratigha の音譯、普通、瞋と譯さる。

【七一】 凡て婆に作れど、確に婆の寫誤。違欣娑は vihiṃsā の音譯にて害と譯さる。

【七二】 拘盧陀は梵語 krodha の音譯、忿と譯さる。

【七三】 摩叉は梵語 mrakṣa の音譯、新譯には覆とさる。

【七四】 憂波那呵、は梵語 upanāha の音譯通常、恨と譯さる。

【七五】 波羅陀舍は pradāśa の音譯、惱と譯さる。麗本は含に作る、不可。

又一切の貪欲は空竟して皆苦なり、所以は何、貪愛する所の事は必ず當に離散すべく、離散する因緣には必ず憂苦あり、天人は皆色を樂しみ色を貪り色を喜び色に著すれば、是の色の壞する時には憂悲して心に悔ゆ、受想行識も亦是の如しと說くが如し。又佛は處々の經の中に於て種々の喩を說いて、此の[六六]貪欲を呵す、謂く能く慧命を害するが故に說いて毒と爲し、心に在れば卽ち苦あるが故に名づけて刺と爲し、能く善根を斷ずるが故に名づけて刀と爲し、能く身心を燒くが故に名づけて火と爲し、能く諸苦を生ずるが故に名づけて怨と爲し、心の中より生ずるが故に名づけて內賊と爲し、拔き難きを以ての故に名づけて深根と爲し、能く名聞を汚すが故に淤泥と名づけ、善道を障ふるが故に名づけて妨礙と曰ひ、內に疼惱するが故に箭が心に入ると名づけ、諸惡を起すが故に不善根と名づけ、生死の海に注ぐが故に名づけて河と爲し、善財を刦盜するが故に名づけて賊と爲す。貪欲には是の如き等の無量の過患あり、是の故に應に斷ずべし。

斷貪品第一百二十五

問曰　貪欲に是の如きの過あらば、當に云何が斷ずべきや。

答曰　[六七]不淨觀を以て遮し、無常觀等にて斷ずるなり。

問曰　有る人は無常を覺るが故に更に貪欲を增すと、此の事は云何。

答曰　若し人にして能く一切の無常なるを知らば則ち貪欲なし、經の中にて說くが如し、能く無常想を修するが故に則ち能く一切の欲貪、色無色貪、一切の戲掉憍慢無明を破壞すと。又若し人にして能く世間は皆苦なり、苦の因緣は貪なりと見ば、此の貪則ち斷ず。又若し人にして常に我は必ず應に生老病死を受くべしと念ぜば是の貪は則ち斷ず。又若し淨樂を得れば則ち不淨樂を捨つること、初禪を得れば則ち欲愛を捨つるが如し。又貪欲の過を見れば是れ則ち能く斷ず、過は先に說ける

【六六】貪欲＝毒＝刺＝刀＝火＝怨＝內賊＝深根＝游泥＝妨礙＝箭＝不善根＝河＝賊。

【六七】不淨想品第一百七十八參照。

を生ずるなり、若し貪なくむば則ち味ならず、味ならずむば則ち能く速に生死を斷ず。又此の貪欲は解脱と相違す、所以は何、衆生は皆欲樂と禪定樂とに貪著するを以ての故に解脱を樂はざればなり。又貪分を斷ずるに隨つて卽ち變じて樂と爲す、離欲する所に隨つて轉深樂を得と說くが如し。又說く、若し諸樂を得んと欲せば、當に一切の欲を捨つべし、一切の欲を捨つるが故に畢竟の常樂を得と。若し大樂を得んと欲せば當に少樂を捨離すべし、少樂を捨離するが故に能く無量の樂を得。又說く、智者には更に別の利なし、貪愛心を離れ、心が貪愛を離るるに隨つて、則ち諸の苦惱を滅するが如し。又此の貪欲は善法を遮害す、所以は何、深く貪著する者は則ち戒及び種[六五]姓教法威儀名聞を顧みず、敎化を受けず、衰患を見ず、罪福を觀せず、狂の如く醉の如くにして好醜を知らず、亦盲人の福利を見ざるが如し。說くが如し、貪欲は利を見ず、貪欲は法を識らざること、猶盲闇の無智なるがごとしと、貪を除かざるを以ての故なり。又說く、貪欲を大海と爲す、邊なく亦底なし、波浪が旋復して深く、惡蟲及び羅刹あり、是の如きの諸の嶮難は人の能く度る者なし。但淨戒の舡に住し正見の風力を得るのみ。佛を大舡師と爲す、能く諸の正道を弔して、所說の如く修行すれば、是の者は則ち能く度る。又諸の煩惱の中には想分別味の貪著の如くなる者有ることなし。又此の貪欲を最も斷ずること難しと爲す、經の中に說くが如し、二願は斷じ難し、一には得、二には壽なりと。

問曰 貪欲に是の如きの過あらば、云何がもて當に貪欲なる者の相を知るべきや。

答曰 貪欲多き者は喜んで女色及び華香瓔珞伎樂歌舞を樂しみ、婬女の家に到りて飲食し聚會し、大衆聚及び諸戲具を喜び、喜び隨つて愛語し、心常に歡喜し、面色和澤にして意に先ちて問訊し、笑を含んで語言し、忿り難く悅び易く、多く憐愍の心ありて、身體便ち疾み、性多く躁動して、自ら深く身に著す、是の如き等を多貪欲の相と名づく。是の相皆繫性と相順ず、是の故に斷じ難し。

【六五】こゝにては却つて三本が性に作る。

苦、用ふる時も亦苦なること、稼穡商賈征伐仕進等の、是れ求むる時に苦にして、守る時にも恐怖し、失ふことを畏るゝが故に苦、現在には厭くことなきが故に苦なるが如し。又歡愛と會することは少く、別離する苦は多し、故に知る欲を多過と爲す。又佛の說くが如し、愛欲には五種の患あり、一には味少なく過多し、二には諸結が熾盛なり、三には死に至るまで厭くことなし、四には聖の呵棄する所なり、五には惡として造らざるなしと。又此の貪欲は常に衆生をして生死の流に順じ泥洹を遠離せしむ。是の如き等の無量の過患あれば、當に知るべし欲を多過と爲す。又諸の煩惱の生ずること皆貪に因る、身を貪るが故に諸の煩惱を起すが如し。又愛使にして拔けずむば則ち數々苦を受くこと、毒樹にして伐らざれば則ち常に人を害するが如し。又貪は能く衆生をして重擔を荷負せしむ。又經の中にて說く、貪愛を繫と爲す、黑白牛の自ら相繫がず、但繩を以てのみ繫ぐが如く、是の如く、眼は色を繫がず、色は眼を繫がずして、貪欲が中に於て繫ぐなり、若し是の繫に緣らば則ち解脫を得ることなし。又經の中にて說く、衆生は無明の爲に蓋はれ、愛結に繫がれて、生死に往來し、本際あることなしと。又經の中にて說く、貪が斷ずるが故に色が斷じ乃至識が斷ずと、此の貪は無常等の觀を以ての故に斷ず、此の貪欲を斷ぜば則ち心は解脫を得、色貪にして斷ぜば則ち色なし、色なくむば則ち苦は滅す、乃至、識も亦是の如し、故に知る貪欲を堅固縛と爲す。又貪欲は賊の如し、而も衆生は其の惡を見ず。又貪欲は常に輭美門の中に於て行ず、故に深惡と名づく。又衆生の心にして喜べば貪欲を起し、乃至、蚊蟻は皆飲食婬欲の中に於て起る。又此の貪欲は種々の因緣にて能く人心を縛す、謂く父母兄弟姉妹妻息及び財物等なり。又衆生は飲食婬欲等の貪欲が心を覆ふを以て、則ち能く生を受く、若し禪定を貪れば則ち上界に生ず。又此の貪欲は能く和合を爲す、一切世間の樂しむ所各異るも、貪欲の和合すること猶乾沙の水を得て相著くが如し。又生死の中にては貪愛を以て味と爲す、色中の味著と說くが如し、謂く色に因りて若しくは喜、若しくは樂

ち貪欲が生じ、又若し貪使未だ盡きずして愛緣が現前すれば、中に於て邪憶念を生じ、是の如き等の因緣にて則ち貪欲が生ずるなり。

貪過品　第一百二十四

問曰　貪欲には何れの過あるが故に斷ぜんと欲するや。

答曰　貪欲は實に苦なればなり。凡夫は顚倒して妄に樂想を生ずるも、智者は苦なりと見る、苦と見れば則ち斷ずるなり。又欲を受けて厭くことなきこと、鹹水を飲めば隨つて其の渇を増すが如く、渇を増すを以ての故に何ぞ樂あることを得んや。又欲を受くるが故に諸惡は幷び集まる、刀仗等は皆貪に由るを以ての故なり。又經の中にて說く、[六二]貪の衆は輕きも瞋恚よりも捨て難しと、故に名づけて輕罪と爲すも其の實は是れ重し。又貪は後身の因緣と爲る、愛の因は取に緣たり、乃至、大苦聚の集ありと說くが如し。又說く、苦の因を愛と爲すと。又說く、比丘は應に深く思惟すべし、所有の諸苦は何に由りて而もありやと、當に知るべし皆身を以て因緣と爲す、身は愛に因ると。又說く、[六三]摶食の中に喜あれば貪ありと。是の故に識が中に於て生ず、當に知るべし愛をば身を受くるの因緣と爲す。又是の貪は常に不淨の中に於て行ずること、女人等の如し、是の女人の身心は不淨にして、糞を毒蛇に塗れば能く螫し能く汚すが如し。又此の貪欲は常に癡の中にて行ず、經の中にて說くが如し、譬へば狗は血に塗れる枯骨を齩めば涎唾と合するが故に想謂して美しとなすが如く、貪なる者も亦爾り、無味なる欲の中に於ても邪倒力の故に謂うて味を受くと爲すと。又段肉等の七種の[六四]譬喩の如く、有る人は或は去來の事の中に於て貪欲を生ず、故に知る常に癡の中に行ず。又衆生は貪欲の因緣を以て樂少く苦多し、所以は何、富貴なる處は少くして、散壞する時は多きが如くなればなり。又愛欲は樂の因と爲るが故に備に諸苦を受く、謂く求むる時も、苦、守護する時も、

【六二】瞋恚品第一百二十六の瞋の過の部を見よ。
【六三】麗本は揣に作る。
【六四】譬の意明確ならず。

が生じ、又愚癡を以ての故に貪欲が生ず、不淨の中に於て淨想を生ずるが故なり。又惡知識に由るが故に貪欲が生ずること、淨潔衣を以て垢汚を裹むが如く、又多欲の人と事を共にするが故に則ち貪欲が生じ、又身等の[六二]四法に於て妄憶念を生ずれば則ち貪の爲に牽かること、圓瓶に制なきが如く、華に實なきが如く、又若し懈怠して善を勤修せざれば則ち貪欲は便を得、又非行處に於て行ずれば則ち貪の爲に侵さる、謂く婬女・沽酒・屠兒舍等にして、鷹鷂の喩の如く、又不淨等を觀じて未だ緣を壞すること能はざるときは則ち貪欲は勢を得、又久遠より來(このかた)、習せる貪は使を成じて、是れ則ち生じ易く、又女色等の緣に於て憙んで相を取り、取り了るに、相を取るとは手足面目語言戲笑視瞻啼泣等の相に名づけ、取り了るとは男子の形狀差別を分別するに名づけ、是の如くに取り已つて憶念し分別すれば則ち貪欲が生じ、又思量する心弱くして所緣に隨逐して制伏すること能はずむば則ち貪欲が生じ、又若し貪欲を生じ忍受して捨てざれば則ち漸く增長し、下より中を生じ、中より上を生じ、又貪欲の中に於て但利味のみを見て其の過を知らずむば則ち貪欲が生じ、又時節を以ての故に貪欲が生ずること、春時等の如く、又方處を以ての故に貪欲が生ずること、有る處所の如く、久遠より來、多く婬欲を習し、又有るは身に隨ふが故に貪欲が生ずること、年少く無病にして資生具足するが如く、又力能を以ての故に貪欲生ずること、藥を服する等の如く、又若し淨妙なる隨意の五欲を得れば則ち貪欲が生ずること、謂く好花の池、園林の敷榮、清冷の流泉・鮮雲・電光・香風の來り扇ぐを見、若しくは衆鳥の哀聲相和し、及び女人の柔軟にして莊嚴せる音聲、威儀ある語言等を聞くことなり、又業の因緣を以ての故に貪欲が生ずること、淸淨なる施者は則ち能く淨妙の五欲を好喜し、罪人は則ち不淨を好むが如く、又類に隨ふを以ての故に貪欲が生ずること、人が人を欲する如く、又深く假名に著すれば則ち貪欲が生じ、是の人にして內に於て士夫の相を生じ、外に女相及び衣服怨親等の相を生じ、又未だ空心を得ずして內に衆生を見、外に色等を見れば、則

【六二】身受心法なり。

貪、三には觸貪、四には威儀語言貪、五には一切貪なり。又色聲香味觸の貪を五欲貪と名づけ、又六觸に於て愛を生ずるを六塵貪と名づけ、又三受の中の貪に於ては、樂受の中に欲得貪あり、守護貪あり、苦受の中には不欲得貪あり、欲失貪あり、不苦不樂受の中には癡貪あり。又此の貪に九分あり、[五八]大因經の中にて說くが如し、愛に因りて求めて所欲の事に隨ふと。人の此の事の爲に苦しめらるれば則ち異る事を求むるが如し。說くが如し、樂者は求めず、苦者は多く求む、[五九]是の貪の增長するを求と名づけ、求むる時に、若し得ば、名づけて得と爲し、愛は得に因るときは則ち是は取るべし、是は取るべからずと籌量し、若し心にして決定せば、是を籌量に因るが故に欲愛すと名づけ、欲愛に因るが故に貪著し、貪著するを深愛と名づけ、貪著の因は取に緣となり、取を名づけて受と爲し、受に因りて慳を生じ、慳に因りて守護し、守護に因るが故に備に鞭杖[六〇]刀矟等を受く、是を九分と名づくと。又九分あり、是の貪は時に隨ふが故に上中下にして、下の下、下の中、下の上、中の下、中の中、中の上、上の下、上の中、上の上あり。又此の貪の世間分は十種と爲す、好色を見て初めて心を發すを是と言ひ、次に欲を生じ、三には願を發し、四には念じ、五には所作を隨學し、六には慚愧を忘れ、七には常に目前に在り、八には放逸し、九には狂癡し、十には悶死するが如し。是を貪の相と名づく。

貪因品　第一百二十三

問曰　是の貪は云何にして生ずるや。

答曰　若しくは女色等の緣の中に於て邪憶念を生ぜば、若しくは色若しくは形若しくは觸、若しくは威儀語言に則ち貪欲が生じ、又若し眼耳等の門を守護せずむば則ち貪欲が生じ、又飲食に於て節量を知らずむば則ち貪欲が生じ、又女色に親近すれば則ち貪欲生じ、又諸樂を受くれば則ち貪欲

【五八】此經の同文が無相應品第六十五と思品第八四と初禪品第一百六十五とに存す。又相陰品第十七、一切緣品第一百九十一にも此經あり。

【五九】これ大因經の文なるが、無相應品によりて初めて此九分を理解し得、即ち求と得と籌量と欲愛と貪著と取と慳と守護と鞭林等の苦となり。

【六〇】麗本は力に作る。矟は註に兵器なりとあれば、三本宮本の刀の方可なり。

貪相品　第一百二十二

論者言　是の貪の[四七]九結の中にて三界二繫に通ずるを名づけて愛と爲し、[四八]七使の中に於ては分つて二種と爲す、欲貪と有貪となり。所以は何。有る人は上二界に於て解脫[四九]相を生ずれば、是の故に佛は是の處を說いて有と名づくればなり。有を名づけて生と爲す、若し貪なくむば則ち生ぜず、是の故に別に有貪を說く、但欲貪のみには非ざるなり。或は謂く但欲貪のみなるは是を煩惱と名づけ、欲貪を盡くすを解脫を得と名づく。故に佛は禪の無色の中にも亦有貪ありと說く。佛は彼の中にも微細の縛有ることを示すなり、是の故に別に是の貪を說く。十不善道及び[五〇]四縛の中に於ては名づけて貪欲と爲し、貪欲は他物を得んと欲するに名づけ。[五一]五蓋及び五下分結の中に於ては名づけて欲々と爲す。欲を欲するを欲[五二]欲と名づく。[五三]五欲三不善根の中に於ては名づけて貪不善根と爲す、貪不善根は能く諸の不善法を生長するに名づく。是の貪にして若し非法ならば名づけて惡貪と爲す、他物を劫盜し、乃至、塔寺及び衆僧の物を取り、若しくは未だ死せざる衆生の其の[五四]肉を食はんと欲し、若しくは母女姉妹、[五五]師の婦、出家人及び己の妻の非道に婬せんと欲するが如し、是を惡貪と名づく。若し己が物を捨つることを欲せずむば、是を名づけて慳と爲す、卽ち此れ貪なり。若し實には功德なきに人をして有りと謂はしめんと欲せば、是を惡欲と名づけ、若し實に功德ありて人をして知らしめんと欲せば、是を發欲と名づけ、若し多施多物を得んと欲せば、是を多欲と名づけ、若し少施少物を得るも、求め好んで厭くことなくむば不知足と名づけ、若し深く種[五六]性家屬名色財富少壯壽等に着せば名づけて憍逸と爲し、若し[五七]四供養を貪らば名づけて四愛と爲す。又是の貪は二種なり、一には欲貪、二には具貪なり、又二種あり、一には我貪、二には我所貪なり、一は內を緣じ二は外を緣ず、上二界の貪は一向に內を緣ずるものなり。又五種あり、一には色貪、二には形

【四七】九結は九結品第一百三十七に說かるゝものにて、愛、恚、慢、痴、疑、見、取、慳、嫉なり。

【四八】七使とは、貪欲、瞋恚、憍慢、癡、疑、見、欲世間なり。有貪は貪欲にして欲世間は欲世間なるべし。

【四九】麗本は相に作り三本宮本に想に作る。

【五〇】四縛とは、欲愛身縛、瞋恚身縛、戒盜身縛、我見身縛、或は貪、瞋、惑、見とも、又は貪、有、無明、見ともなす。

【五一】五蓋とは欲貪蓋、瞋恚蓋、睡眠蓋、悼悔蓋及び疑蓋にして、此處の欲々とは蓋し欲貪を指す。

【五二】麗本は欲とのみなせど、三本宮本の欲欲を取る。

【五三】五欲は色聲香味觸についての欲。三不善根に貪、恚、癡の三なり。

【五四】人肉を食ふことを指すならむも、印度に當時果して此風習ありしか。

【五五】師の妻を犯すを堅く禁ずるは婆羅門の法なり。

【五六】麗本には性とあるも、三本宮本には姓とあり。後者の方可なれども、數々混ぜらるゝものなり。

【五七】四供養とは、衣服、飲食、臥具、醫藥の供養を云ふ。

種を得んと欲するなり。

問曰 若し後身を得んと欲するが是れ渴の相なりと說かば、何が故に復貪に依止して種々を得んと欲すと說くや。

答曰 更に渴の相あればなり。若し種々を得んと欲すと言はゞ、是れ總相の說なれど、後身を得んと欲すとは是れ別相の說なり。離欲の人も亦種々を得んと欲することあり、謂く渴にして水等を得んと欲するは是れ集諦の所攝には非ざれど、若し貪に依止して後身を得んと欲せば、是の渴を集諦の所攝と名づくるなり。

問曰 若し渴も亦是れ喜にして貪も亦是れ喜ならば、何が故に貪に依止すと說くや。

答曰 初めて生ずるを渴と名づけ增長するを貪と名づく、故に依止すと言ふなり。經の中にて、喜は世間を繫ぐと說くが如し。是の故に喜は卽ち是れ貪なり。又經の中にて說く、貪憂の諸の不善法を除滅すと。是の中の貪は卽ち是れ喜、憂は卽ち是れ瞋なり。瞋を說いて憂と爲すが如くむば、則ち知る亦喜を說いて貪とも爲すなり。是の故に十八意行の中にては煩惱を說かずして、但諸受のみを說く。故に知る喜分は是れ貪なり。又凡夫は貪を離るれば樂を受くこと能はず、瞋を離るれば苦を受くること能はず、癡を離るれば不苦不樂を受くること能はず。何を以て之を知るや、[四五]第三受の中にて說きたり。凡夫人は此の受の中に於いて集を知らず滅を知らず味を知らず過を知らず出を知らず、故に不苦不樂受の中に於て無明使に使はる。是の凡夫人は常に此の五種の法を知らざるが故に、常に不苦不樂受の中に於て無明使の爲めに使はるゝなり。無明使とは卽ち是れ[四六]不知性の受行なり。是の如く凡夫の苦樂の心行も亦卽ち是れ貪恚なり。又若し初に來つて心に在らば受と名づけ、增長して明了とならば名づけて煩惱と爲す。又下輭心を受と名づけ、卽ち此の心の增長するを名づけて煩惱と曰ふなり。

除けり。

【四一】 之を三愛といふ。愛は註四を見よ。

【四二】 天間は經名ならむ。然らざれば、天の間にて、天王天子の間をいふ。無明品第一百二十七に天間經の引用あり。

【四三】 大正大藏經は搯となすも、縮刷藏經は摶となす。摶の方が通常にて、三本宮本も之に同じ。摶食は新譯に段食といふの異譯。四食の一にして吾人常用の食物なり。元來は物質的の食物の義なるも、手にて丸めて團となしたるものを指す。

【四四】 渴はタンハー（taṇhā）又はツリシユナー（tṛṣṇā）の譯此字は愛と譯され、又は渴愛と譯さる。此論にて愛と用ひられ居る語は大抵はこの渴と同じ。

【四五】 不苦不樂受をいふ。辯三受品第八十一參照。

【四六】 不知は無知、受行は受なる心行。

[三五]集諦聚の中の煩惱論の初の煩惱相品　第一百二十一

論者言　已に諸の業を說きたり。諸の煩惱を今當に說くべし。垢なる心行を名づけて煩惱と爲す。

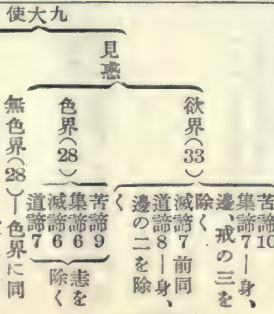
問曰　何をか謂うて垢と爲すや。

答曰　若し心にして能く生死をして相續せしむれば、是を名づけて[三六]垢と爲す。此の垢心の差別を貪恚癡等と爲す。是の垢心を名づけて[三七]煩惱と爲し、亦罪法とも名づけ、亦退法とも名づけ、亦隱沒法とも名づけ、亦熱法とも名づけ、亦悔法とも名づく、是の如き等の名あり。是の垢心にして修集するときは則ち名づけて使と爲す、但垢心の生ずる時のみを使と名づくるには非ず。煩惱は貪、恚、癡、疑、憍慢及び[三八]五見に名づけ、此十の差別に[三九]九十八使あるなり。貪は[四〇]三有を喜樂するに名づく、亦無有を喜樂せば是をも名づけて貪と爲す、經の中にて、欲愛と有愛と無有[四一]愛とを說くが如し。無有は斷滅に名づく、衆生は苦の爲に逼られば陰身を滅せむことを欲し、無を以て樂と爲すなり。

問曰　喜樂は是れ受の相にして、貪の相には非ざるなり。經の中にて、今喜後喜の義は今世に樂を受け後にも亦樂を受くを言ふと說き、又今憂後憂の義は今世に苦を受け後にも亦苦を受くを言ふと說くが如く、又[四二]天問の中にて、子あらば則ち喜なり言ふに、佛は子有らば則ち憂なりと答ふが如く、是の如く是の如き等なり。

答曰　貪を喜分と爲す、經の中にて說くが如し、受の因は愛に緣たり、樂受の中には貪使あり。[四三]摶食の中には喜あれば、貪あり、喜盡くが故に貪も盡くと。當に知るべし貪を喜分と爲す。是れ則ち咎なし、何を以てか之を知る。經の中にて說くが如し、集諦とは謂く[四四]渴是れなりと。何をか謂ひて渴と爲すや。謂く後身を得んと欲するは是れ渴なり。何れの相なりや。謂く貪に依止して種

【三五】以下明因品第一百四十に至るまで集諦聚の中の第二なる煩惱論なり。
【三六】三本宮本は垢心に作る。
【三七】煩惱＝罪法＝退法＝隱沒法＝熱法＝悔法。隱沒は覆をいふに外ならず。
【三八】之を根本煩惱となすが、下に詳解せらる。
【三九】三界をいふ。有は元來に生存の意なれど、多くは生存の場所を指すなり。
【四〇】

九大使
- 見惑
  - 欲界（33）
    - 苦諦10
    - 集諦7—身、邊、戒の三を除く
    - 滅諦7 前同
    - 道諦8—身、邊の二を除く
  - 色界（28）
    - 苦諦9
    - 集諦6
    - 滅諦6
    - 道諦7
    - （恚を除く）
  - 無色界（28）—色界に同じ
- 思惑
  - 欲界（4）貪、恚、癡、憍慢
  - 色界（3）貪、癡、慢
  - 無色界（3）色界に同じ

身見、邊見の如き煩惱は、苦果の身に就いて起る煩惱にして、苦の因なる煩惱に就いて起るものに非ざるが故に集諦に攝せず、又色、無色の二界に於ては總じて、瞋の如き麁動なる煩惱起らざるが故に瞋を

ずるが故に、能く神通變化等の事を成ず。故に知る業を以て因と爲すなり。又地獄等の諸惡趣の中にては瞋惱等が多し、故に知る瞋惱等に由りて諸の惡道あるなり、樹上に果を見れば樹は是れ因なりと知るが如し。故に知る業を身の本と爲すなり。又惡道中にては癡等の力が強し、當に知るべし煩惱は是れ惡道の因なり、一切の不善に皆癡に由るが故なり、又諸の惡道に生ずるものは多く、善處に生ずるものは少なし、眼見するに殺等の惡行者は多く、善を行ずる者は少なし。故に知る殺等の事は是れ惡道の因なり。又殺等の事は善人の呵棄して而して爲ざる所なり、善人は必ず殺等には惡果あることを知るが故に呵棄して爲さざるなり、若し惡果なしと知らば、何が故に棄てんや。又諸の善人は心に若し惡を起さば、卽ち勤めて制止す、惡報を懼るるを以ての故なり。當に知るべし殺等には必ず惡報あり。若し爾らずむば、應に意の作す所に隨ふは是れ最も樂たるべく、則ち殺して衆生を食ひ、他の財物を奪ふべく、他の妻を婬犯するも是れ亦皆ならむも來世の苦を懼るるを以ての故に、斯の事を遠離するなり。故に知る業より身あるなり。又正智を修習して有漏業を盡くとすときは則ち身を受けず、故に知る業は是れ其の本なり。又阿羅漢には諸の有漏業ありと雖も、正智を修するが故に、業は則ち集めず、故に知る業を身の因と爲すなり。身の因が滅するが故に身も亦滅するなり。又四諦を知るが故に、諦に依りて煩惱永に復た起らず、起らざるを以ての故に則ち身あることなしと、智者は是の如く思惟して則ち四諦を知らんと欲す。故に知る業を身の因と爲すなり。又若し因緣にして具せずむば則ち身を受けず、地が乾き種が焦けたるときは則ち一切の芽は生ぜざるが如し。是の如く識處地にて、愛水が業種を潤すこと無くんば、眞智の爲めに焦かれたる後身の芽は則ち生ぜず、智者は是の事を知るが故に、識處地を乾かし、業の種るを焦かんと欲して、則ち勤めて精進を加ふ。故に知る業は是れ身を受くるの因緣なり。[三四]業論竟る

【三四】後に添加せられたる句なり。以上にて集諦聚の中の第一なる業論を終れるなり。

答曰　是の事は已に種々の因緣にて破したれば、當に知るべし業より身を受くるなり。又萬物には種々の雜類あれば、當に知るべし因も亦差別す、粟麥等の異を見れば、種の不同なることを知るが如し。自在天等は差別なきものなるが故に、當に知るべし、因業に無量の差別あるが故に、種々の身を受くるには非ざることとなる。又諸の善人は皆業に因りて身を受くることを信ず、[二九]所以は何、是の人は常に施戒忍等の善法を行じ、殺生等の諸の不善法を離れたればなり。故に知る業より身を受くるなり。又若し業に因りて身を受くるときは、是れ則ち[三〇]返るべし、眞智を得るが故に邪智は則ち斷じ、邪智が斷ずるが故に貪恚等の諸の煩惱が斷じ、諸の煩惱が斷ずるが故に能く後身を起す業も亦斷ず、是れ則ち返るべしとす。[三一]自在等の因の中には則ち返るべからず、自在等に斷ずべからざるを以ての故なり。故に知る業より身を受くるなり。又現見するに果は因と相似す、麥より麥を生じ稻より稻を生ずるが如し。是の多く不善業より不愛の報を得、善業より愛報を得るものなるに、自在等の因の中には此の相似なし。是の故に業を身の本と爲す、自在等には非ざるなり。又今現見するに萬物は皆業より生ず、惡業を以ての故に[三二]打捕・繫閉・鞭杖・死等の諸苦を受け、善業の因緣にて名聞利養等の樂を受く、意に隨つて愛語せば意に隨つて報を受くることを得。故に知る業より身を受け、自在等には非ざるなり。又世間人は自ら萬物は業の因より生ずることを知る、故に稼穡等の業を起し、亦施戒忍等の諸の福德業をも爲し、閉坐して而も自在より所欲を望むものあることなし。故に知る業より報を得るなり。又若し人は自在等を因となすことを說くと雖も、而も猶諸業に依るとす、謂く自ら身を苦しめ及び齋等を受くればなり。故に知る業を以て因と爲すなり。又若し事にして現ならずむば、[三三]應に他の敎に隨ふべし、謂く聖人の所行なり、一切の賢聖は皆戒等の善法に依る、業の因より世間あることを知るが故なり。若し戒等を離るれば亦聖人もなし、聖教にして業に違背するものあることなければなり。故に知る業より身を受くるなり。又戒等の諸の善業を行

派の認むる大人を指す。派名は明ならず。

【二八】自然は自性(svabhāva)と同じ。自然も自性もかゝる說にては無因論と混ぜらるゝこと多し。其ものゝ自性上生じ來るとなすが自然論にして、生ずるには因なくして生ずとなすが無因論なり。

【二九】故にかゝる說は眞ならざるなり。

【三〇】返るとは身を受くることを還滅せしめて、身を受けざるに至るをいふ。

【三一】自在天のこと。

【三二】捕縛、留置、鞭打、致死等。

【三三】事が明ならざる時は他の敎即ち聖人の所行に隨ひ、それによりて知るべきなりの意。

以は何、意が淨なるを以ての故に則ち持戒も淨、若し意にして不淨ならば戒も亦不淨なればなり、[三二]七種婬經の中にて說くが如し。又戒にして淸淨ならば大果報を得、經にて戒を持せば願ふ所は意に隨ふ、謂く戒が淨なるが故なりと說くが如し。又若し淨く戒を持せば安穩心を得、餘法には非ざるなり。汝は身口業は麁なるが故に先に斷ずと言ふも是の事は然らず、微細の善を以て大果報を得ること、禪定の中の思の如くなればなり。汝は、若し婬心を起さば便ち應に犯戒なるべしと言ふも是の事は然らず、若し人にして意業が不淨なるときは則ち戒も亦不淨、又罪福を得ることは異にして結戒法は[三三]異なればなり。汝が起す所の作業は身口に由ると言ふは皆總を以て答へたり、謂く身口業の法は異にして意業の法は異なり、身口業は要ず作に由りて成ずると、四の因緣を以て殺生罪を成ずるが如くにして、心業を離れざればなり。又世間の衆生謂へらく、身口業は惡なるも、意業は爾らずと、又意業は人に加へざれば、亦有ることをも得べからずと。又先に罪福の相を說きたり。是を以ての故に但意業のみ重し、身口には非ざるなり。

明業因品　第一百二十

論者言　已に略して諸業を說きたり。業は是れ身を受くるの因緣にして、身は苦性と爲す、故に應に之を滅すべきなり。此の身を滅せんと欲せば、當に其の業を斷ずべし、因が滅するを以ての故に果も亦滅するが故なり、形に因りて影あれば形だに滅せば則ち影も滅するが如し。[三四]是の故に、若し苦を滅せんと欲せば、當に勤めて精進して此の業因を斷ずべし。

問曰　業より身を受くと、是の事は應に明にすべし、所以は何、或は有る人は言く、身は[三五]波羅伽提より生ずと、有は言く[三六]自在天より生ずと、或は言く[三七]大人より生ずと、或は言く自然より生ずと。是の故に應に因緣を說くべし。云何が業より生ずと知るや。

【三二】初王定具品第一百八十一にては此經を七婬欲經と呼びて同一文を引用す。
【三三】異、異は相互に異るの意。
【三四】麗本は知に作るも、三本宮本の如の方可なり。
【三五】明因品第一百四十參照。波羅伽提は恐らく prakṛti などの音譯にて雅語の prakṛti なり。一切有無品第二十三に波居帝の音譯ありしを參照すべし。こゝにある如き異說を述ぶる時は大體一定し居りて、其中に必ず prakṛti 說あり。數論派の說く自性卽ち非變異なる物質的根本因たるものを指す。一切物質的のものはこれより生ずるものはて、身體も亦なり。
【三六】大自在天外道の說。大自在天なる神が一切のものを生ずる第一原因となすなり。大自在天派はシヴ派の一派なり。
【三七】大人はプルシャ (puruṣa) の譯、通常は丈夫と譯す。一切の身を生がる原因となすが爲に大の字を附したるなり。プルシャは人の意。數論派も自性に對する神我としてプルシャを說くも、これは何等をも生ずることなければ、こゝの大人とは全く異る。こゝのは特にかゝる說を主張する一

生じ即ち地獄に入ると。云何ぞ意業に果報なしと言はんや。汝は但願のみを以て能く事を成ずるには非ずと言ふも是れも亦然らず。又人にして深く善心を發せば大會福に勝る。汝は意には犯罪なしと言ふも是れも亦然らず、若し惡心を發せば即時に罪を得ればなり。佛の說くが如し、三種の罪あり、身口意の罪なりと。故に知る但惡心を發すのみにても罪なきを得ず、但結戒せざるは持し難きを以ての故なるのみ。麁罪は持戒にて能く遮し、細罪は定等にて能く除くなり。汝は罪福は易しと言ふも是の事は然らず、人は心力が薄きを以ての故に易きを捨て難きをと爲さば、慈心等の如く、其の福甚だ多し、布施には非ざるなり。但衆生の智力劣弱にして慈等の意業を行ずること能はざるを以ての故に施等を爲すなり、華香等の諸の供養等の具を離れては淨心は得難きを以ての故なり。汝は福が無盡ならんと言ふにも亦此を以て答ふ。是の人にして若し智力あらば則ち能く無盡の善法を得む。汝は意業は損益する所無しと言ふも是の事は然らず、身口業は皆意業の爲に導かるるを以ての故に勝と名づくるにはあらずして、力の起す所に隨ふを以て是れ則ち勝と爲す。又諸の利益は皆慈心を行ずるに由る[三]者なり。所以は何、慈を行ずる力を以ての故に、風雨は時に隨ひ百穀は成熟すること、劫初の時には粳米が自ら生じ、十歲人の時に至りては是の事皆無きが如し、云何ぞ慈心に利益無しと言はむや。又慈を行ぜば能く一切の不善業の根を盡くす、不善業に由りて諸の衰惱あれば、云何ぞ慈を行ずるに大利益無しと言はんや。若し一切衆生にして慈心を行ぜば盡く善き處に生ず、一切自然は功を加ふることを須ひず、故に知る慈福は最も深厚なりと爲す。又或時には慈を以て布施して衆生を利益し、或は但慈のみを以て利す。又慈を行ずる者には、衆生が若しくは其の身に觸るるも、若しくは影の中に入るも、皆快樂を得、當に知るべし慈福は施等に勝る。汝が衰と利とは太甚だしからむと言ふは是れ先に已に答へたり、謂く意力を以て衆生を損益すればなり。故に知る意業を重しと爲す。汝は久しく戒等を集むるも益する所なしと言ふも是れも亦然らず、所

【三】麗本は由行慈心者に作るも、者は不要ならむ。三本宮本になし。

又意を重しと爲す、意業の報の故に壽が八萬大劫なるが如し。又意業の勢力は身口業に勝る、善を行ぜし者にても、將に命終せんとする時に、邪見心を生ぜば、則ち地獄に墮し、不善を行ぜし者にても、死する時に、正見心を起さば、則ち天上に生ずるが如し、當に知るべし意業を大と爲す。又經の中にて說く、諸罪の中に於て邪見が最も重しと。又說く、若し人にして世間の上正見を得ば、生死に往來すること乃至百千歲なりと雖も、終に惡道に墮せずと。又意業の力は身口業に勝る、和利經の中にて說くが如し、[一八]外道の神仙が一の瞋心を起せば、即ち[一九]那羅于陀國を滅し、[二〇]檀特等の諸の險難の處の如きは皆な是れ仙人の瞋心の作る所なりと。又意業は能く即ち果報を得、經の中にて說くが如し、若し是の人にして今死せば即ち地獄に入り、即ち天上に生ずること獼猴の手を離るるが如しと。又此の意業にして垢法を積集すれば、乃至、阿鼻地獄に入り、善法を積集すれば、乃至、泥洹あり。又心に報あるが故に身口に報を得るなり、故業ならざれば果報無きを以ての故なり。又弃業を離れて身口業の報あるにはあらず。若し意にして身口に依りて、善不善を行ぜば、身口業と名づけ、身口業を離るるも意業には報あるも、意業を離れて身口には報なし、故に知る意業を重しと爲す、身口の業には非ざるなり。汝は身口業は定んで實なり、五逆罪は皆身口の所作なるが如し、故に重しと名づくと言ふと雖も、是の事は然らず、思が重く事が重きを以ての故に業は重く、身口が重きが故に重きには非ざればなり。又心が決定せるを以ての故に業は則ち定んで實なるなり、但心力のみを以て正法住に入り、亦心力を以て能く逆罪を具するが如し。若し心なくむば、父母を殺すと雖も、亦逆罪なし、故に知る身口には力なし。汝は身口は能く事を辨ずと言ふも、是れも亦然らず、事が訖るを以て辨ずと名づく、若し他の命を奪ひ已れば、殺生罪を得るものにして身口業を起す時には非ず、事の訖る時には要ず心力を須ふ、是の故に身口には非るなり。汝が但空しく心を發すも果報なしと言ふは是の事は然らず。經の中にて說くが如し、强心を發するが故に即ち天上に

【一八】此經は思品第八十四にも引用せられ居たり。昔、摩燈伽(Mātaṅga)といふ仙人あり、五通を得て、彈宅迦林(Daṇḍaka)といふ山に入りて坐禪す、其の妻容色あり、仙に侍して食を奉ず、偶〻彈宅迦王遊行して山に入り、容色ある妻を將いてかへる。曰く、仙人は已に欲を離る、何ぞその妻を要せんと。仙人再三催促すれども返さず、遂に怒りて大石を雨らし國土、國人を壓殺すと。(二十唯識述記)。

【一九】那羅于陀はNālandāに當るが如し。

【二〇】檀特、檀特山、檀陀山、彈多落迦(Dantaloka)山をいふ。

若し意業にして大ならば、心を發して殺生せんと欲するとき、則ち地獄に墮せむ、是の如くならば、久しく戒等を集むと雖も、復何の益する所あらん。又持戒等の諸の善の功德を行ずるも安穩あることなし、所以は何、但一たび心を發せば、便ち罪を得るが故なり。又經の中に說く、身口の業は麁なるが故に先に斷ず、麁なる煩惱を斷ずるが故に心は定を得るなりと。又若し婬心を發さば則ち婬を爲し已つて便ち應に犯戒なるべし、若し心を發すのみならば婬とは名づけずとせば、此の婬心を離れて更に何れの法あつて名づけて婬と爲さむや。起す所の作業の皆身口に由りて、意業を以てせざるあり、他人を欺くは必ず口業に由りて妄語の罪を得るが如し。又先に四種の因緣にて殺生罪を得と說きしが如し、謂く衆生あり、衆生想あり、殺さんと欲するの心あり、其の命を斷ずなり。四事を以て罪を成ぜば、當に知るべし、意業を以て重しと爲すにはあらず。又佛の言ふが如し、[一五]若し小兒にして生れてより慈を習はば能く惡業を起し惡業を思はんやと。故に知る但身口業にのみ惡あり、意業には非ざるなり。

答曰　汝は身口業が重くして意業には非ずと言ふも是の事は然らず、所以は何、[一六]經の中にて、佛は說く、

心は法の本たり　心は尊く心は導く、
心に善惡を念ずれば　即ち言ひ即ち行ふ、と。

故に知る意業を重しと爲す。又意が差別するが故に身口業に差別あるなり、上中下等の如し、心を離るれば身口業なし。又經の中にて說く、故らに作業を起せば必ず應に報を受くべしと。又[一七]七種の淨福を說くに三種は但意業のみを用ふ、此の七淨福は財福よりも勝ると爲す。又、慈は是れ意業なり、經にて慈心は大果報を得と說く。經にて說くが如し、我は昔七歲にして慈を修集せしが故に、七大劫に於て此の間に還らずと。故に知る意業を重しと爲す、則ち能く遍く一切世界を覆ふ。

【一五】具足品第一及び思品第八十四に同一の言あり。
【一六】法句經の偈なり。
【一七】七種淨論とは七淨法を指すか。法聚品第十八參照。

情志迷亂し、憫悶し痛苦し、面色變異して人は見ることを喜ばず、況んや身口を起さんや。此等の緣を以ての故に知る、不善には無量の患あり。

[一〇]三業輕重品　第一百一十九

三業の中にては何れの者か重しと爲すや、身業なりや口業なりや意業なりや。

問曰[一一] 有る人は言く、身口業が重し、意業には非ざるなり、所以は何、身口業は定んで實なるが故なり。五逆罪は皆身口に因りて造らるるが如し。又身口は能く事を成辦す、人の心を發して此の衆生を殺さむとせば、要ず身口を以て能く其の事を成すが如し、但意業のみにて殺生の罪を得るには非ず、亦但發心するのみにて塔寺を起す[一二]梵福德を得るには非ざるなり。又若し身口なくして但意業のみならば則ち果報なし、人の我は當に布施すべしと心を發して而も實には與へざるときは則ち施福なきが如し。又但願のみに隨つて事を成辨するを得るに非ず、人にして大施會を爲さんことを發願するも而も實に與へざれば則ち會の福なきが如し。若し心業大なる者が應に施福を得べくむば、然らば則ち業報は錯亂せん。又比尼の中には意の犯罪なし、若し意業にして大ならば何が故に犯せざるや。又若し心を發すのみにして便ち福を得ば福は則ち得易し、行者は何が故に此の易業を捨てて而も施等の難行の業をなさむや。又若し然らば則ち福は無盡ならん。人の但空しく心を發すのみにして、竟に用ふる所なきが如くんば何ぞ盡くる所あらんや。財物に量あるを以ての故に福も盡くべし。又但心を發すのみにして能く他を損益するにはあらず、飢渴せる衆生は要ず飲食を須ふるが如く、心業が能く除くには非ず。又世間人の衰と利とは[一三]太甚だしからむ、心が輕躁にして制伏し難きが故に、惡として起さざる無ければ、則ち[一四]已に重衰を受け、若し善心を發して福業を造らんと欲せば、則ち已に大利を獲ればなり、是れ則ち過は甚だし。又

〔一〇〕三本宮本はこゝより第十卷とす。

〔一一〕何れの說なりや明ならざるも、意業よりも身口業を重しとせば、動機論よりもむしろ結果論となるべきものにして、佛敎一般のものとしては特別の說なり。

〔一二〕梵は梵行の梵の如く淸淨の意なるべし。

〔一三〕麗本は大とし、三本宮本は太とす。下文には麗本も太となせば、こゝも太となすべきなり。

〔一四〕麗本は己とし三本宮本は已とす。されど已ならざるべからず。以下註を省いて凡て訂正すべきは訂正して正しきものを出す。

の事は先の三業品の中にて已に答へたり。又不善を行ずる者は訶憒等の諸の苦惱の分を受く。又他人をして惡む所の事を得しむれば名づけて凶暴と爲す、是の故に應に此の不善業を離るべし。又經の中にて說く、殺に五失あり、人の信ぜざる所となり、惡名聞を得、善に遠ざかり惡に近づき、死する時悔を生じ、後に惡道に墮すなり。又殺生の因緣は樂少く苦多く、又不善業を行じて人心を染汚し、世々に積集し久しうして則ち治し難し。又不善を行ずる者は冥より冥に入りて三塗に流轉し永く出づることを得ず。又不善を行ずる者は、空しく人身を受くるものなること藥を雪山に採るに而も毒草を收むるが如し、是を極愚と爲す。是の如く十善道を以て乃ち人身を得たれば、但善を行ぜざるすら尙大失と爲す、況んや惡業を起すをや。又不善を行ずる者は、自ら身を愛すと雖も、而も實には自ら愛せず、自ら身を護ると雖も實には自ら護るに非ず、自ら惱む業の因緣を起すを以ての故なり。又是の人は身を遇すること猶ほ怨賊の如し、自ら苦しましむるが故なり。又若し不善を行ぜば則ち自ら其の身を賊ふ、況んや他人をや。又不善業を行ぜば今は現はれずと雖も果報は則ち著はる、是の故に少なりと雖も亦信ぜざるべからず、毒は少しと雖も亦能く人を害するが如く、債は少しと雖も漸々に滋息するが如し。又惡を人に爲さば人は常に忘れず、是の故に作すことは久遠なりと雖も亦信ずべからずと爲す。又不善を行ずる者は名づけて樂を失すとなす、不善を行ずるを以ての故に人天の樂を失すればなり、樂を樂しまざる者は愚の甚だしきなり。又不善を行ずる者は苦が劇しくして恐れむべし、現に心に悔ゆ等の苦を受け、後に則ち惡道の苦を受くればなり。又不善業の果は、虛[七]に飛び海に隱るるも、脫することを得る處なし、[八]金鎗が佛を追ふが如し。又一切の不善は皆癡に由りて起る。故に智ある者は應に隨ふべからざるなり。又經の中に說く、放逸は怨の如く能く善法を害すと。故に應に隨ふべからず。又不善業は、諸佛・菩薩・[九]應眞・賢聖・五通神仙及び罪福を明らむるものは訶毀せざるなし、故に應に造るべからず。又現見するに、惡心熾盛ならば則ち

【七】虛空なり。
【八】金鎗を三本宮本は金槍に作る。
【九】應眞は應供と同じにて、こゝにては阿羅漢をいふ。

巻の第九[一]

十善道品 第一百一十七

[二]十善業道とは、所謂離殺乃至正見なり。是の十事は戒律儀の所攝なり。一時に禪を得れば、[三]無色律儀の所攝なり。亦一時に離を得れば善業道と名づく、即ち是れ無作なり。

問曰 餘の禮敬布施等の福も是れ善業道なり、何が故に但離のみを說いて業道と名づくるや。

答曰 [四]離が勝るを以ての故なり、是の十種業は施等よりも勝ると爲す、所以は何、布施等の得る所の福報は持戒に及ばざるを以てなり。[五]十歳人が離殺の因緣を以て壽命を增益するが如し。又十不善業は是れ實罪なるが故に離を實福と名づく。又後の三善業は是れ衆善の本なり。是の故に施等の諸善は皆業道の所攝なり。又是の業道には離鞭杖等もあり、[六]先後合して說くが故なり。一切の諸善は皆中に在て攝せらる。

過患品 第一百一十八

問曰 不善業に何れの過患ありや。

答曰 不善業を以ての故に地獄等の苦を受く。經の中に說くが如し、殺生の因緣の故に地獄に墮す、若し人中に生ずれば則ち短命を受く、是の如く、乃至、邪見も、又不善業の因緣なるを以ての故に久しく苦惱を受く、阿鼻地獄の如きは無量歳を過ぐるも壽命は盡きずと。又衆生の所有の一切の諸惡敗壞衰惱は皆不善に由る、又未だ曾て不善業に大利益あることを見ず、屠獵師等の終に此の業を以て尊貴を得ざるが如し。汝が意にして或は、賊を壞(やぶ)る因緣を以て而も富貴を得と謂はば、是

【一】三本宮本はこゝにては分卷せず。
【二】十善業道は前品に說けるものと反するもの、離殺は不殺生のこと、乃至、正見は無癡のことなり。
【三】三律儀の中に無色律儀の名稱存せざりき。思ふにこれが定律儀といはれしものなり。禪を得れば、其まゝ禪律儀を得すといひて可なるべきに、特に無色律儀といへば、これ禪律儀と定律儀とを便宜開きたるに過ぎざること明なりといふべし。
【四】離は十善にていふ時は virati 又は prativirati の譯にして、十惡一一についてこの離をいひて十善なるを詮はす。この離の勝るを見るなり。
【五】人壽が十歳となれる時期の人をいふ。前にもありたり。
【六】前品に、鞭杖等は十不善業の眷屬にして先後なりとありしを參照すべし。

諸有の重業も　　及ぶ能はざる所なり、と。

又此の聖人の心には不善業は堅固なること能はず、一滴の水を熱鐵の上に墮すが如し。又此の聖人は善業深遠にして〔一〇八〕恒殊羅樹の根の如し。又此の聖人は善多く惡少なし、少惡は多善の中に在るときは則ち勢力なきこと一兩の鹽ならば之を恒河に投ずるも味を壞すること能はざるが如し。又此の聖人は信等の賊に富む、貧窮の人は一錢の爲にも罪を受くるも、富者は百千の爲なりと雖も亦罪を得ざるが如し。又聖道に入るが故に尊貴と爲る、〔一〇九〕貴人は罪なりと雖も牢獄に入らざるが如く、又虎狼犬羊及び尊卑は共に諍へば大なる者が勝つこと得るが如し。又此の聖人の心は聖道に宿すれば、諸の惡道の罪も復惱ますこと能はず、王が空舍に宿すれば、餘人の能く入るもの無きが如し。又此の聖人が自行を行ずる處には、惡道の罪業は便を得ること能はず、〔一一〇〕鷹鷂の喩の如し。又聖人は心を四念處に繫ぐが故に諸の惡道の業は便を得ること能はず、圓瓶を〔一一一〕鈹に入るるが如し。又二種の結を具するが故に惡道に墮し業に隨ひて報を受くるなり、聖人は一種を斷ぜるが故に惡道に墮せず。又此の人は常に善業の報を受く、故に諸の惡道の業は便を得ること能はざるなり。又先の〔一一二〕六業品の中にて地獄業の相を説くが如くなるに、聖人は因緣なきが故に、惡道に墮せざるなり。

【一〇七】恒殊羅（Khadira）普通珂地羅、朅地羅等と音譯さる、印度南方に多くある樹木にして、毒刺を有す、支那に擔山木と譯さる、アカシヤの一種なり。

【一〇九】かゝることは通常としては、佛敎に於て、許されざる所なれば、これ當時の印度の一般に行はれたる所なるべきか。

【一一〇】鷹鷂の喩のことはこゝと貪因品第一百二十三と善覺品第一百八十三とに存するも、意義明確ならず。鷂は黄雀なれば、鷹と雀とにて推定する外なし。

【一一一】鈹は註に水器なりとあり。

【一一二】前の一百一十品なり。

殺心を起さず。

問曰　經の中にては、[107]學人も亦人を呪し、滅せよ、汝をして種を斷ぜしめんと言ふと說く、此の事は云何。

答曰　亦經にては、阿羅漢が呪すと說くあるも、是れ漏盡の人にして煩惱の根斷ぜしすら尙心を起さざるに、況んや當に呪すべけんや。學人が呪すと言ふも、亦應に是の如くなるべし。又聖人は不善業に於ては不作律儀を得す、云何ぞ當に不善を作すべけんや。又此の聖人は惡道に墮せず、若し能く不善を起さば則ち亦應に墮すべきなり。

問曰　若し諸の聖人にして今世には不善業を造らざるが故に惡道に墮せざるも、過去世の中には不善業あるに、何が故に墮せざらむや。

答曰　是の聖人の心中にて實智の生ぜし時には、諸の惡道の業は皆已に羸劣となれば、猶敗種の復生ずること能はざるが如し。又三毒は二種なり、一には能く惡道を得、一には則ち能はず。惡道に入る者をば聖人は斷盡せり。業煩惱を以ての故に身を受くることを得、聖人は諸の業煩惱ありと雖も、具足せず、是の故に墮せず。又是の人は大勢力に依る、所謂三寶は能く大惡を消すこと、人が王に依れば債主も惱まさざるが如し。又是の人は智慧明利にして能く惡業を消すること、人の身中の火勢が盛なるが故に、消し難きをも能く消するが如し。又此の人は多くの方便ありて、或は諸佛を念じ或は慈悲の諸の善業を念ずるが故に、諸惡を脫することを得ること、多方の詐賊も諸の嶮難に依れば則ち得べからざるが如し。又此の聖人は解脫道を知得すること、牛王の行くが如く、鳥の空に依るが如し。又長夜に諸の善法を修習するが故に惡道に墮せず、經の中にて說くが如し、若し人常に身の戒と心の慧とを修せば、地獄の報業あるも、能く現に輕受すと、又偈に說くが如し。

　慈悲心を行ずること　　無量無礙ならば、

【一〇七】學人は有學にて未だ學行すべきもののある人、佛道修行者なり。阿羅漢を無學といふに對す。

く或は財利の爲にもせず、亦瞋恚もせず、但癡力が好醜を識らざるを以ての故に衆生を殺すものあり。

問曰　經にて說く、惡道の因緣に四あり、貪に隨ひ、恚に隨ひ、怖に隨ひ、癡に隨ひて行ずるが故に、諸の惡道に墮すと。今此の中にては、何が故に、怖に隨うて惡業を起すを說かざるや。

答曰　怖は是れ癡の所攝なればなり。若し怖に隨ふを說かば、卽ち是れ癡に隨ふことなり、所以は何、智者は、乃至、命を失する因緣にてすら尙惡業を起さざればなり。又此の事は先に已に答へたり、謂く煩惱にして增長して能く身口業を起さば、爾の時に、不善道と名づく、是の三は多くは不善を起すが故なり。

問曰　何が故に名づけて業道と爲すや。

答曰　意が[一〇五]卽ち是れ業にして、此の中に於て行ずるが故に業道と名づくるなり。先に後の三を行じ中後に何の七を行ず、中の三業は道にして業に非ず、七業は亦は業亦は道なり。

問曰　亦鞭杖及び飲酒等の諸の不善業もあるに、何が故に但十のみを說くや。

答曰　此の十は罪重きが故に說くなり。又[一〇六]鞭杖等は皆是れ眷屬にして先後なり、飮酒は是れ實罪なるには非ず、亦他を惱ますことをも爲さず。設令ひ他を惱ますも亦但酒のみなるには非さるなり。

問曰　是の不善道は何れの處に在りと爲すや。

答曰　悉く五道に在り。但欝單越のみには邪婬の三事を以て起り貪欲を以て成ずるものなきも、餘は三事を以て起り亦三事を以て成ず。

問曰　聖人にして能く不善業を起すや否や。

答曰　亦意の不善業を起すも、身口のをば起さず。又意業の中にても亦但瞋心を起すのみにして

【一〇五】此釋は全く大乘的なり。三業輕重品第一百一十九參照。

【一〇六】勿論鞭杖にて打つことなり。眷屬の先後とは、同種類に屬し、中心たる惡業の先か後かをなすもの丶意。

名づけて綺語と曰ふなり。餘の三の口業も皆綺語を雜へて相離るゝことを得ず。若し妄語にして而も苦言に非ず亦別離せざるものなるときは則ち二種あり、妄語と綺語となり。若し是れ妄語にして亦別離せんと欲して而も苦言せざるものなるときは則ち三種あり、妄語と兩舌と綺語となり。若し妄語にして苦言し別離せんと欲せざるものならば亦三種あり。妄語と惡口と綺語となり。若し妄語にして苦言し亦別離せんと欲するものなるときは則ち四種あり。若し妄語なくして苦言するも亦別離せず、但時に非ざる語、無益なる語、義なき語なるのみならば則ち但是れ綺語なるのみ。是の綺語は微細にして捨離すべきこと難ければ、但諸佛のみ有りて能く其の根を斷ず、是の故に但諸佛のみありて獨り世尊と稱し、言は則ち信受せらる、餘の及ぶ者なし。

問曰 已に七種の業道を說きたり。何ぞ復三意業を說くことを用ひんや。

答曰 有る人は言く、謂く罪福は要ず身口に由る、但心よりするのみに非ず、是の故に心も亦是れ業道なりと說くと。是の三種の[一〇四]意業力の故に身口の惡業を起すなり。是の三種は重しと雖も、意業は微細なるを以ての故に後に在りて說くのみ。一切の煩惱は能く惡業を起すと雖も、此の三は但衆生を惱ますことをのみ爲すが故に不善業道と名づくるも、若し中下の貪ならば、業道とは名づけず、是の貪は增上して深く他の有に著し、方便して惱まさんと欲し、能く身口の業を起すが故に、貪嫉を以て業道と爲すなり。恚癡も亦爾り。又若し癡を說けば、卽ち一切の煩惱を說くなり。此の中にて但能く身口の衆生を侵惱するものを起すが爲のみの故に三種を說く。

問曰 何が故に癡を名づけて邪見と爲すや。

答曰 癡に差別あり、所以は何、一切の癡が盡く是れ不善なるには非ざればなり。若し癡が增上して轉(うた)邪見を成ぜば、則ち不善業道と名づく。一切の不善は皆此の三門に由る。若し人財利の爲の故に不善業を起さば、金錢の爲に衆生を殘殺するが如く、或は瞋の故を以てせば、怨賊を殺すが如

【一〇四】貪恚癡なる意三を指す。

罪を得ず。若し衆生有りて衆生想あらば、因緣が具するが故に、殺生罪を得。若し見たりし事の中に於て見ざりしとの想を生じ、問はれたる時に見ずと言はゞ、是の人の想は倒せざるが故に衆生を欺かず、事は倒せりと雖も、亦名づけて實と爲す。若し見ざりし事の中にて而も見想を生じ、問はれて、見ずと言はゞ、是の人の想は倒し衆生を欺誑す、事は倒せずと雖も、亦妄語と名づくるなり。

兩舌とは人の他を別離せんと欲して而も口業を起すが若きに名づく、是を兩舌と名づく。若し別離せんとする心なきに、他が聞いて自ら壞するならば則ち罪を得ず。若し善心にして敎化して惡人を離れしむれば、別離を爲すと雖も、亦罪を得ず。若し結使濁心を以てせずむば、復た口に言ふと雖も、亦罪を得ず。

惡口とは人が苦言して利益する所なく但他を惱まさんと欲するのみなる若きに名づく、是を惡口と名づく。若し憐愍の心にて利益せんが爲めの故ならば、苦言するも罪なきも、事なきに惱を加ふるが如くならば、是れ則ち罪あり。方に依り針灸すれば苦しますと雖も罪にはあらず、苦言も亦爾り。諸佛賢聖も亦此の事を爲す、癡人等と言ふが如し。又若し結使濁心なくむば、苦言をなすと雖も、名づけて罪と爲さず、離欲の人等の如し。若し善心を以てするも苦語する中にて煩惱を起さば、卽時に罪を得。

綺語とは實語に非ずして義の正しからざるが若きに名づく、故に名づけて綺語と爲す。又是れ實語なりと雖も、非時なるを以ての故に亦綺語と名づく。又實にして而も[一〇一]時なりと雖も、衰惱に隨順して利益なきを以ての故に、亦綺語と名づく。又言は實にして而も時も亦利益ありと雖も、言に本末なく義理が[一〇二]次せざるを以て亦綺語と名づく。又癡等の煩惱心を以ての故に語らば名づけて綺語と爲す。

身意の正しからざるをも亦[一〇三]綺業と名づくるも、但多くは口を以て作し、亦俗にも隨ふが故に、

【一〇一】この時とは非時の反對にて、適宜に時を得たる言といふ場合の時を指す。
【一〇二】次第せずの意。
【一〇三】綺業の釋一見奇なるも、論主は凡て心に重を置く點よりかくいふに至れるならむ。綺は此釋を容れ得る字なり。

問曰　若し主なき女人にして自ら來つて妻と爲らんことを求むれば、是の事は云何。

答曰　若し實に主なくして衆人の前に於て如法に來らば、邪婬とは名づけず。

問曰　若し出家人にして婦を取らば、邪婬を免れむや不や。

答曰　免れず。所以は何、此の法なきが故なり。出家の法は常に婬欲を離る、但罪は他として人の婦を犯すよりも輕きのみ。

妄語とは、若し身口意にて他の衆生を誑かし虚妄に解せしむれば、是を妄語と名づく。佛は重罪なるが爲めの故に說く。衆中にて定んで問ふも名づけて妄語と爲し、乃至、一人に問ふ時も亦妄語と名づく、豈に衆人を須たんや。又誑さんと欲する所の人に隨つて此の人に於て罪を得。若し人にして他人に語つて我某甲に是の如きの事を語れりと言はゞ、事は不實なりと雖も、妄語とは名づけず。又妄語は想に隨へば、若し見たりしも見たる想なくして、問はれて、見ずと言ふも、妄語の罪なしと、比尼の中にて說くが如し。

問曰　若し人にして事倒[100]して見ざりしを見たりと言はゞ、云何が妄語に非ざるや。

答曰　一切の罪福は皆心に由りて生ず。是の人は見ざりし事の中に於て而も見たりとの想を生ぜるなれば、是の故に罪なし、實の衆生の中に於て衆生想なく、衆生の中にて衆生想を生ずるに非ざむば殺罪を得ざるが如し。

問曰　實有の衆生に衆生想を生ぜば乃ち殺罪を得るが如く、是の如く、若し見たりしに見たりとの想を生ずるときは、則ち應に罪なかるべきものにして、見ざりしに見たりとの想にて而も罪なきことを得るには非ず。

答曰　是の罪は心に因り衆生に因りて生ず、是の故に衆生ありと雖も、衆生想なくむば、則ち罪を得ざるなり。心なきを以ての故なり。若し衆生なきに衆生想あるも、衆生なきを以ての故に、亦

【一〇〇】前の八種語品第一百一十四を見よ。

盜とは此の物にして實に此の人に屬する、而も劫盜し取るが若きに名づく、是を名づけて盜と爲す。是の中にも亦四種の因緣あり、一には是の物が實に他に屬す。二には他に屬すと知る、三には劫盜する心あり、四には劫盜し取り已るなり。

問曰　有る人は言ふ、[九五]伏藏せるものは王に屬す、若し此の物を取らば則ち王に於て罪を得と。是の事は云何。

答曰　地中の物をば論ぜず。但地上の物のみ應に王に屬すべし、所以は何、[九六]給孤獨等の聖人も亦此の物を取ればなり。故に知る罪なし。又若し自然に物を得ば劫盜とは名づけず。

問曰　若し一切萬物にして皆共業の所生ならば劫盜は何が故に罪を得るや。

答曰　共業の因より生ずと雖も因に强弱あればなり。若し人にして其の業因の力强く、又勤めて功を加ふれば、此の物は則ち其の人に屬するなり。

問曰　若し人にして塔寺衆僧の所に於て田宅等の物を奪取すれば、誰より罪を得るや。

答曰　佛と及び僧とは此の物の中に於て我所の心無しと雖も、亦從つて罪を得。是の物は定んで佛と僧とに屬するに、中に於て惡心を生じて若しくは盜し若しくは劫するを以て、是の故に罪を得るなり。

邪婬とは、衆生が妻に非ざるに、之と婬を行ずるが故きに名づく、是を邪婬と名づく。又是れ其の妻なりと雖も、非道に於て婬を行ずれば亦邪婬と名づく。又一切の女人には皆守護あり、若しくは父母兄弟夫主兒息等なり、出家の女人ならば王等の爲に守護せらる。

問曰　[九七]婬女は婦に非ざるに之と婬を行ずるは云何ぞ邪婬に非ざるや。

答曰　少時は婦と爲ればなり。[九八]比尼の中にて是の少時の婦は乃至一[九九]鬘を以て遮すと說くが如くなるが故なり。

【九五】　地中に埋沒して存するものなり。これ有部の說なり。

【九六】　給孤獨（Anāthapiṇḍika）給孤獨長者なり。王舍城にて佛に見え、佛を信奉して舍衞城に迎へ奉らんとし、莫大の金を投じて祇園精舍を建立せし人なり。

【九七】　賣春婦なり。

【九八】　賣春婦に對しては邪婬ならずとなす意なり。一種の奇說なり。但し優婆塞又は通常の白衣にていふ。比丘に適用すべき理なし。

【九九】　三本宮本は髮に作る。

問曰　狗等の衆生の音聲は是れ口業なりや不や。

答曰　言辭の差別なしと雖も、心より起るが故に亦名づけて業と爲すなり。又、若しくは現相、若しくは號令、若しくは籥笛等の音は皆口業と名づく。是の身口業は要ず意識に由りて能く起るものにして、餘識には非ざるなり。是の故に人は自ら身業を見、自ら口業を聞くことあり。意識の起す所の業が相續して斷ぜざるを以ての故に自ら見聞するなり。

十不善道品　第一百一十六

經の中にて佛は[九四]十不善業道を說く、謂く殺生等なり。五陰の和合せるを名づけて衆生と爲す、此の命を斷ずるが故に名づけて殺生と爲す。

問曰　若し此の五陰は念々に常に滅せば、何を以て殺と爲さむや。

答曰　五陰は念々に滅すと雖も還相續して生ずるに、相續を斷ずるが故に名づけて殺生と爲す。又是の人は殺心あるを以ての故に殺罪を得るなり。

問曰　現在の五陰を斷ずるが爲の故に殺生と名づくるや。

答曰　五陰の相續する中にて衆生の名あれば、此の相續を壞するが故に殺生と名づくるなり。念念に滅する中に衆生の名あるを以てにはあらず。

問曰　有る人にして官の舊法に依りて衆生を殺害し、或は强力の爲に逼られ强いて衆生を殺して、自らは罪なしと謂はゞ、是の事は云何。

答曰　亦應に罪を得べし、所以は何、是の人は殺罪の因緣を具足すればなり。四の因緣を以て殺生の罪を得。一には衆生あり、二には是れは衆生なりと知る、三には殺さんと欲する心あり、四には其の命を斷ずるなり是の人は此の四因を備へたれば、云何ぞ罪なからんや。

【九四】十不善業道については今まで說きたる所にて何れの十なりやは唯其一を擧ぐるのみにても既に知られ得る所なれば、單に殺生等とのみいへるなり。又此品にて次第に一一說き行くが故に直に明になるが爲に、初めには一種を擧げるを省略せるなり。

施すべく若しくは塔寺を起すべしと發願せば是の人は定んで無作を得するなり。

問曰 是の無作は幾時得し、幾時失するや。

答曰 所作の事の在るに隨ふ。若し園林塔寺等を起して施さば、施物の壞せざるに隨つて、爾の時常に隨ふ。又心の息まざるに隨ふ。人が我は應に常に此の事を作すべしと發心するが如し。若しくは會同なるも、若しくは衣施なるも、是の如き等の事が心に在りて息まずむば、爾の時に常に得するなり。又命の未だ盡きざるに隨ふ。人が出家戒を受くれば爾の時に常に得するが如し。

問曰 [八九]有人の言く、但欲界の中にてのみは作より無作を生ずるも、色界の中にてはなしと。是の事は云何。

答曰 應に二界に在るべし、所以は何。色界の諸天も亦應に能く說法し、佛及び僧を禮すべければなり。是の如き人等にして云何ぞ作業より無作を生ぜざらんや。又有る人は言く、[九〇]隱沒無記には無作なしと。是の事は然らず、隱沒無記は是れ重煩惱にして、是の煩惱にして集まらば則ち名づけて使と爲せばなり。似不隱沒無記にのみは無作なし、所以は何、是の心は下軟にして集を起すこと能はざればなり、華は能く麻を熏ずるも、草木等には非ざるが如し。[九一]有る人は言く、梵世を過ぎて上には能く作業の心を起すことあることなし、所以は何、覺觀が能く口業を起すものなればなり。彼には覺觀なくして、[九二]但梵世の心のみを用つて能く口業を起すと。是の事は然らず、衆生は業に隨て身を受くるものにして、若し上地に生ぜば、[九三]應に梵世の中の報を用ふべからざればなり。故に知る自地の心を以て能く口業を起すなり。又汝は彼に覺觀なしと說くも、後に當に有と說くべし。

問曰 聖人は結を斷ずること未だ盡さずして、能く作業を起すや不や。

答曰 聖人は實の罪業を起すこと能はず。

【八九】これ有部を指す。

【九〇】有人は有部を指す。隱沒無記は新譯の有覆無記（nivṛtāvyākṛta）に同じ、其の性は無記なるも道を覆ひ迷路に導くの因となるが故に隱沒といふ。不隱沒無記は之に反して無覆無記（anivṛtāvyākṛta）なり。下の喩に華を隱沒無記に草木を不隱沒無記に譬へたることゝなる。

【九一】有部を指す。

【九二】これ上地のものが下地の心を借りて口業を起すとなすなり。

【九三】これ上地のものが下地の心を借る等を許さざるなり。

問曰　見聞覺知に何の差別ありや。

答曰　三種の信あり、見は現在の信に名づけ、聞は賢聖の語を信ずるに名づけ、知は比知に名づけ、覺は分別に名づく。三種の信は慧にして、此の三種の慧は或は皆是れ實、或は皆顚倒なり。上人は不淨を起さざれば、但淨語のみを起す。是の故に下人の用ふる所なるときは則ち不淨と名づけ、上人の用ふる所なるが故に名づけて淨と爲す。有る人は言く、是の義の中にて諸の正智人を皆名づけて上と爲す、但道を得たるのみにはあらず。故に凡夫人にも亦淨語あり。

九業品　第一百一十五

九種の業とは、欲界繫業の三種、作と無作と非作非無作と、色界繫業の亦是の如くなると、無色界の[八四]二種及び無漏業となり。身口所造の業を作と名づけ、作に因りて集むる所の罪福の常に隨ふ是の心不相應[八五]法を名づけて無作と爲す。亦無作にして但心よりのみ生ずるあり。非作非無作とは卽ち是れ意にして、意は卽ち是れ思なり。思を名づけて業と爲す。是の故に、若し意に後身を求むれば、此をも亦意業と名づけ、亦名づけて思とも爲し、後身を思念するが故に名づけて業と爲す。

問曰　若し然らは、則ち無漏の思は無し。

答曰　若し此のみを以て思と爲さば、則ち[八六]無漏無し。

問曰　是の無作は身より生ずと雖も、當に多少の差別あるべきや不や。

答曰　若し一切の身分にして皆作業を起さば、此に因りて則ち多の無作を集めて大果報を得む。

問曰　是の無作は何れの處に在りや。

答曰[八七]　業道の體が定んで集むる無[八八]作は或は有り或は無し、餘は則ち心に待つ、若し强心ならば則ちあり、軟心ならば則ち無きなり。又此の無作は亦願よりも生ず、若し人にして我は要ず當に布

【八四】これ作を除いて二種といふなり。

【八五】有部は色なりとす。又有部は心よりのみ生ずとはなさず。

【八六】三本は無漏の思なりに作る。然らば、此のみをと讀まずして此をと讀むべし。然し後身を求むる思が其儘無漏の思たるべきや。

【八七】次品を參照すべし。業と業道とは決して同一ならずして異る概念なるを注意すべし。

【八八】三本宮本は無作の次に作を有し、業道體定集無作作或有或無となせば、業道の體が定んで無作を集め、作は或は有り或は無し、と讀まる。恐らく不可なり。

は言く、要す他よりて受くと。是れ亦定まらず、若し人なき時は但心に念じ口に、我は八戒を持すと言へばなり。是の戒に五種の清淨あり、一には十善道を行じ、二には前後に諸善あり、三には惡心の爲に惱まされず、四には憶念を以て守護し、五には涅槃に回向す。能く是の如く齋するときは則ち四大寶藏も其の一分に及ばず、[七九]天王の福報も亦及ばざる所なり。[八〇]帝釋が偈を說き、佛は之を訶したるも、若し漏盡の人ならば應に此の偈を說くべし。偈に言く、

[八一]六齋の神足の月に　八戒を奉行すれば
此の人は福德を獲て　則ち我と等しと爲す、と。

此の齋法を受くるは應に泥洹の果なるべし、故に漏盡の人は應に此の偈を說くべし。受齋法の中にては、繫縛桎梏も皆應に放捨し、亦一切の不善の因緣をも斷ずべければなり。是を清淨と名づく。

問曰　轉輪聖王は好んで齋法を受くと、誰か之を敎へし者ぞ。

答曰　大德なる[八二]天神の曾て佛に見えし者之を敎へて受けしめたるなり。

八種語品　第一百一十四

八種語とは四種の不淨と四種の淨となり。四の不淨とは若し人にして見たるを見ずと言ひ、見ざりしを[八三]見たりと言ふものなり。見ずとは謂く見て、問はれて、見ずと言ひ、見たりとは謂く、見ざりしに、問はれて、則ち見たりと言ふものにして、是の如きは事が倒し心が倒するが故に不淨と名づくるなり。四種の淨とは、若し見たるを見たりと言ひ、見ざりしを見ずと言ふものなり。見たりとは謂く見ざりしかば、問はれて、見ずと言ひ、見ざりしとは謂く見たれば、問はれて、則ち見たりと言ふものにして、事も實にして心も實なるが故に名づけて淨と曰ふなり。聞覺知も亦是の如くなり。

【七九】天王は四天王ならむ。
【八〇】三本宮本に此一文なし。之に反して偈の次に、若人齋日受齋福如帝釋の十字を加ふ。
【八一】六齋神足月、每月、八日、十四日、十五日、二十三日、二十九日、三十日の六ケ日を六齋日とす、齋とは梵語の Posadha なり。此の六ケ日には四天王が人の善惡を伺ひ、又は惡鬼が人を伺ふ日なりとて、諸事を愼み、殊に正午過ぎて一切の食物を絕つが故に齋日といふ。特に、正月、五月、九月の月には諸天が神足を以て天下を巡行するが故に神足月と稱せらる。
【八二】天神とは梵天帝釋等一切の天衆を指す稱。こゝにては何れの天神なるかは指名せられ居らず。
【八三】下にある如く、見聞覺知の四についてかく一一いふが故に四種となるなり。

Muyut 8692-8700

七二 禪律儀と無漏律儀とは心に隨つて行じ、戒律儀は心に隨つて行ずるにあらず。

問曰 七三 有人の言く、定に入る時に禪律儀あり、定を出づれば則ち無しと、是の事は云何。

答曰 出入に常に有るなり。是の人は實を得たれば、惡法を作さず、破戒と相違すれば、常に惡を爲さず、善心が轉勝るが故に應に常に有るべし。

問曰 若し禪にして無色の中にて破戒法なくむば、何れとの相違を以て善律儀と名づくるや。

答曰 法として應に是の如くなるべし、諸仙聖人は皆律儀を得ればなり。若し破戒と相違するを以ての故に律儀あらば、則ち但應に惱むべき衆生の所よりのみ善律儀を得べく、是の如きの咎より、是の故に然らず。

七四 八戒齋品 第一百一十三

八戒齋を 七五 優婆娑と名づく。七六「優婆娑とは秦には善宿と言ふ。」是の人は善心にして破戒を離れて宿するが故に善宿と名づくるなり。

問曰 何が故に正に八事を離ると說くや。

答曰 此の八は是れ門にして、此の八法に由りて一切の惡を離るゝなり。七七 是の中、四は是れ實惡、飲酒は衆惡の門、餘の三は是れ放逸の因緣なり、是の人にして五種の惡を離るれば、是れ福の因緣にして、餘の三種を離るれば是れ道の因緣なり。白衣は多くは善法劣弱にして、但能く道の因緣を起すのみなるが故に、此の八法を以て 七八 五乘を成就するなり。

問曰 是の八分齋は但應に具受すべきのみなりや、分受くることを得と爲すや。

答曰 力に隨て能く持す。有る人は言く、此の法は但齋すること一日一夜のみなりと。是の事は然らず、多少の戒を受くるに隨つて、或は半日乃至一月なるべきことに、何の咎あらんや。有る人

【七二】 禪と無漏との律儀が隨心轉戒なること前品註に述べたり。

【七三】 これ有部を指す。

【七四】 通常八齋戒といふ。

【七五】 優婆娑はウパヷーサ(Upavāsa)の音譯、具には優波婆娑といふべし。譯して近住とも齋とも善宿ともなす。近住は聖道に近づきて住する義、齋は八齋戒を持つ義、善宿は不善を離れて善道に宿する義なりといふ。男女に拘らず八齋戒を持つものゝ稱なり。ここには善宿と譯されたり、善宿の右の解釋は全く此文に據るなり。

【七六】 これ譯者の添加なり。

【七七】 八戒齋の中
- 殺生・不與取・非梵行・虛誑語 ― 實惡
- 飲酒 ― 衆惡の門
- 塗飾鬘舞歌觀聽・眠坐高廣嚴麗床上・食非時食 ― 放逸の因緣

【七八】 五乘とは人、天、聲聞、緣覺、菩薩の五をいふ。

亦戒福を得するが如しと言へば、是の如く一衆生に於ても亦律儀を得するなり。

問曰　是の戒律儀に二種あり、一には盡形、二には一日一夜なり。盡形とは若しくは比丘、優婆塞なり。一日一夜とは[六九]八戒を受くるが如し、一日一夜とは是の事は云何。

答曰　是の事は定りなし、若しくは一日一夜、若しくは但一日のみ、或は但一夜のみ、若しくは半日、或は半夜、隨つて、能く受くる時に出家を得せば、則ち但應に盡形のみなるべきも、若し我は但一月二月のみ、若しくは但一歳のみと言はゞ、則ち出家法を得すとは名づけず。五戒も亦爾り。

問曰　若し善律儀を得するも、還律儀を破失するや不や。

答曰　失せず。但不善法を以て此の律儀を汚すのみ。

問曰　但現在の衆生に於て戒律儀を得するのみにして、三世の衆生よりも得すと爲すや。

答曰　皆三[七〇]世の衆生の所に於て得するなり。人が過去の所尊を供養するも亦福德あるが如く、律儀も亦爾り、是の故に一切の諸佛は同一戒品なるも是の律儀は無量なり、一衆生に於て七種を起すことを得るが如し。不貪等の善根より起るが故に、亦上中下の心よりも起るが故に、故に多種あるなり、一人のもの〻如く一切衆生の邊にも亦是の如くにして、念々に常に得するが故に無量なり。

問曰　戒律儀は幾時得すべきや。

答曰　有る人にして一日戒を受くれば是れ初律儀、即日優婆塞戒を受くれば是れ第二律儀、即日出家して沙彌と作らば是れ第三律儀、即日具足戒を受くれば是れ第四律儀、即日禪定を得れば是れ第五律儀、即日無色定を得れば是れ第六律儀、即日無漏を得れば是れ第七律儀にして、道果を得る處に隨ひて更に律儀を得、而も本得たるものは失せず、但勝れたるもの〻み名を受く、是の如くなるときは則ち福德益と增す。此の戒律儀を以て一切衆生に於て念々に常に得、故に一日の戒律儀を說く。[七一]四大寶藏も十六分の中の一に及ばず。

【六九】八戒とは次品にあり。或は八齋戒、八關齋、八支齋とも云ふ倶舍論によれば、一に殺生、二に不與取、三に非梵行、四に虛誑語、五に飲諸酒、六に塗飾香鬘舞歌觀聽、七に眠座高廣嚴麗床上、八に食非時食、以上の八種の非法を離るを八戒とす。

【七〇】有部は唯現在世のみとなす。

【七一】四大寶藏とは何れをいふか明ならず。彌勒出世の時に出づといふ四大寶藏が通常知らるゝものなるが、こゝにて適當ならざるが如し。

り、應に殺等の罪を起すべからずと。

問曰　餘道の衆生も此の戒律儀を得するや不や。

答曰　經の中にて說く、[六五]諸龍等も亦能く一日戒を受くと。故に知る應にあるべし。

問曰　[六六]有る人の言く、不能男等には戒律儀なしと、是の事は云何。

答曰　此の戒律儀は心邊より生ずれば、不能男等にも亦善心あるに、何が故に得せざらんや。

問曰　何が故に比丘と作ることを聽さざるや。

答曰　是の人は結使深厚にして道を得ること難きが故なり。又此の人は比丘の中にも在らず、亦比丘尼の中にもあらず、是の故に聽さざるなり。又彼の中にて亦餘人をも遮す。[六七]睞眼等の如し、是の人も亦此の善律儀を得す。

問曰　毘尼の中にては逆住の者、[六八]賊住の者、比丘尼を汚すもの等をも遮して、比丘と作ることを聽さず、是の諸人等にも亦善律儀ありや。

答曰　是の人にして若し白衣と爲らば、或は善律儀を得ん。此の人の布施慈等の善法を修行することを遮せざるが如く、是の如く若し世間の戒律儀ある者ならば、何の咎あらんや。但是の人は惡業の爲に汚され、亦聖道をも障ふるを以て、是の故に出家を聽さざるなり。

問曰　殺す可き等の衆生より善律儀を得すとせんや、一切衆生に於て得すとせんや。

答曰　皆一切衆生の邊に於て得するなり。若し爾らずむば、律儀は則ち分あらん、分あらば則ち具足せざればなり。又此の律儀にして則ち增減すべくんば、亦尼延子の法に同じ、謂く百由旬の內にては殺生せず等なれば、此等の過あり、是の故に律儀には分別あることなし。若しは有る人にして、或は此の人に於て殺を離るゝも、此の人は離れざれば、是の人は此の戒律儀を得ずと言ふも、有る論師は、若し布施して慈心を行ずる等を分別するにも亦福德あり、戒も亦爾り。一戒を持せば

り、無漏定に入るとき自然に得らるゝ無作なり。道共戒ともいはるゝものなり。定共戒道共戒は有漏無漏の定心と共に生じ共に滅する戒體なれば隨心轉戒とも稱せらる。又、別解脫律儀は受戒の作法によるものなれば、戒の種類に應じて八種とせらる。

【六五】　有部は之を處中妙行と會す。

【六六】　これ有部の說なり。

【六七】　睞は註に邪視なりとあり。

【六八】　賊住とは他敎徒が佛敎の比丘の形をして、佛敎徒の中に來り混住するを云ふ。

問曰　是の不善律儀は云何にして捨することを得るや。

答曰　隨つて、善律儀を受くる時に捨し、死する時にも亦捨し、又深心を發して今日よりは更に復作さずといはば、爾の時にも亦捨す。有る論師の言く、[六〇]轉根の時には捨すと。是の事は然らず、所以は何[六一]不能男等も亦成就することを得ればなり。比尼の中にても亦說く、若し比丘にして轉根するも律儀を失はずと、當に知るべし轉根を以ての故に捨するはあらず。

問曰　五道の中にては何の道の衆生が不善律儀を成就するや。

答曰　但人のみが成就す、餘道には在らず。有る人言く、師子虎狼等は常に惡業を以て活命すれば、亦應に成就すべしと。

七善律儀品　第一百一十二

七善[六二]律儀とは不殺、乃至、不綺語なり。

問曰　非衆生數に於ても是の善律儀を得るや不や。

答曰　得るなり。[六三]但要ず衆生に因るのみ。是の善律儀に三種あり、[六四]戒律儀と禪律儀と定律儀となり。

問曰　何が故に無漏律儀を說かざるや。

答曰　無漏律儀は後の二の中の攝にあるが故に別に說かざるなり。有る論師の言く、更に斷律儀あり、謂く欲界を離るる時善律儀を得て、破戒等の惡を斷ずるを以ての故に名づけて斷と曰ふと。而も實には一切の律儀は皆三の中の攝なり。

問曰　諸の外道等も此の戒律儀を得するや。

答曰　得するなり、此の人も亦深心を以て諸惡を離るるが故なり。戒師敎へて言く、汝は今日よ

【六〇】　轉根とは男女根を轉成することなり。
【六一】　不能男は生不男、犍不男、妬不男、變不男、半不男などの不男をいふ。三障品第一百六にも存す。
【六二】　前品の七不善律儀と反對にて解し易ければ、中間を略せるなり。
【六三】　非衆生數即ち有情ならざるもの草木國土等に於ても善律儀は得らるゝも、得るものは必ず衆生たるなり。
【六四】　戒律儀は別解脫律儀にて欲界にて受戒の作法にて、五戒八戒を受けて善の無作を發得するもの、禪律儀と定律儀とは靜慮律儀に當り、色界等の諸定に入りて得る無作なり。定共戒ともいはるゝものなり。定律儀を禪律儀より區別する點は明確ならず。定は于來禪の譯語にて、禪は晉譯なれば、禪と定とは異らざればなり。然るに此二を區別すとせば恐らく禪は色界四禪、定は四無色定をいふならむ。故に靜慮律儀の中をかく二種に開きたるならむ。十善業道品第一百二十七よりも知らる。但しこれは便宜上なしたるまでに相違なし。正行品第一百二には戒と定と無漏とを三種律儀となし居たればなり。此外に猶第三として無漏律儀あ

問曰　何れの者か不善律儀を成就するや。

答曰　殺不善律儀を成就するは謂く屠殺等、盗を成就するは謂く劫賊等、邪婬を成就するは謂く非道に婬を行じ及び女に婬する等、妄語を成就するは謂く歌舞伎兒等、兩舌を成就するは謂く喜んで讒謗し及び讒書を讀誦し國事を[五八]遘合する等、惡口を成就するは謂く獄卒等亦惡口を以て自ら活命する等、綺語を成就するは謂く言辭を合集し人をして笑はしむる等なり。有る人の言く、諸王宰將にして王事を治せば常に此の不善律儀を成就すと。此の事は然らず、所以は何、若し人罪を作り相續して息まずむば、是を不善律儀を成就すと名づくるも、王等は然らざればなり。

問曰　云何にして此の不善律儀を得るや。

答曰　惡業を行ずる時に隨つて得るなり。

問曰　殺さるる衆生より此の律儀を得となすや、一切衆生より得となすや。

答曰　一切衆生より得るなり。人にして戒を持せば、切一衆生に於て善律儀を得るが如く、不善律儀も亦是の如し。若し、隨つて、衆生を殺さば、二種の無作を得、一には殺罪の所攝、二には不善律儀の所攝なり、餘の衆生に於ては不善律儀の所攝を得るのみ。

問曰　是の不善律儀は幾時に成就するや。

答曰　[五九]乃至、未だ捨心を得ずむば、則ち常に成就す。

問曰　若し人にして下軟心に從へば不善律儀を得、若しくは勝等の心あるも得んとせば、是の人は常に是の如く成就して更に得となすや。

答曰　心に隨ひ、煩惱の因緣に隨うて更に此の不善律儀を得、念々に常に得、一切衆生に於て得て七種を起す。是の七種に上中下あるが故に二十一種あり。是の如く念々に常に一切衆生の邊に於て得るなり。

【五八】三本宮本は構に作り、註して集忠とするあり。

【五九】乃至は殺等を作す時は勿論のことゝなす意なり。

著せず、自ら戒行を持して又破戒せずむば前後の眷屬は則ち欝單越に生じ、是の善にして少しく劣れるは拘耶尼に生じ、又小くして如かずむば弗于逮に生ず。

天の報業とは是れ施戒善の上淨なるが故に天に生じ、又若し人にして智慧を得、分折して諸結を伏せば、その故に天上に生ず。又亦雜業に隨ふが故に差別あること、人中に說きしが如し。又願を以ての故に、若し天上は樂を受くるの因緣なるを聞いて作す所の善業にて皆往生せんことを願へば、八福生處の中にて說きしが如し。若し[56]慈悲喜捨を行ずるときは則ち梵世乃至有頂に生じ、是の中には禪定に差品あるが故に報も亦差別あり、若し善く睡眠調戲等を斷ぜずむば、是の人の身光は則ち濁り、若し善く除滅すれば先は則ち明淨なり。又上善業の報なるときは則ち天に生ず、諸の所欲は念に隨つて卽ち得るを以ての故なり。若し色相を離るるときは無色定を得て則ち無色處に生ず。是の如き等を天の報業と名づく。

不定報業とは下の善不善の業なり、是の業は或は地獄・餓鬼・畜生・人・天の中にて受く。

問曰 餘の四道の中にては善業の報を受くることを得べきに、地獄は云何。

答曰 若し小地獄の中ならば暫く停息することあり、火地獄より脫することを得て、遙に樹林を見、心に喜んで往いて此の林中に趣入し、涼風樹を動かし、刀劍未だ墮ちざれば、爾の時には暫く樂しみ、或は鹹河を見てこれ淸水なりと謂ひ、馳走して往趣し亦暫く樂しむを得るが如し。是の如き等は是れ地獄の中の善業の報分なり、是を不定報業と名づく。

[57]七不善律儀品 第一百一十一

七不善律儀とは、謂く殺盜邪婬兩舌惡口妄言綺語なり。若し人にして此の七に於て事さば、若しくは具足し若しくは具足せざるも、皆不善律儀の人と名づく。

【五六】 これ卽ち四無量心なり。

【五七】 通常は單に不律儀といひ、次の善律儀も單に律儀といふ。律儀不律儀の作法によりて身内に律儀不律儀の本體を生ず。之を本論は無作といひ、有部にては無表色といふ。有部は之を色の所攝となすも、本論は不相應法の中に攝す。この無作無表色は卽ち、戒體なり。律儀無作は防非止惡をなし不律儀無作は防善作惡をなす功能あり。支那の律宗中法礪の相部宗は成實論によりて、戒體を非色非心不相應法とし、懷素は俱舍論によりて無表色として色法なりとし、道宣の第八識の種子となすと三說鼎立したることあり。

の中に墮して生ず、貪愛は是れ生の因緣なるを以ての故なり。此の如き等は業報經の中に廣く説くが如し。

問曰 已に三惡報業を知れり、何れの業を以ての故に人天の中に生ずるや。

答曰 若し布施持戒修善等の業ならば、上なるは天に生じ、中下なるは人中に生ず。利根ある者なるときは則ち人中に生ず、能く人の法を行ずるを以ての故に名づけて人と爲すなり。又雜善業の故に人中に生ず、此の業には上中下と一心不一心と淨不淨と等あり。何を以て之を知るや。人には種種なる差品の不同有るを以ての故なり、經の中にて說くが如し、生を殺せば則ち短命、盜竊せば則ち貧窮邪婬ならば則ち家は貞良ならず、妄語せば則ち常に誹謗せられ、兩舌せば則ち眷屬和はせず、惡口にせば則ち惡聲を聞き、綺語せば則ち人は信受せず、貪嫉ならば則ち婬欲多く、瞋恚せば則ち惡性多く、邪見ならば則ち愚癡多く、憍慢せば則ち下賤に生じ、自ら高ぶれば則ち矬短せられ、嫉妬せば則ち威德なく、慳ならば則ち貧寒、瞋ならば則ち醜陋、他を惱ませば則ち多病、雜心にして布施せば則ち美からざる味を嗜み、非時に布施せば則ち意に隨ふことを得ず、疑悔せば則ち邊地に生じ、不淨施を行ずれば則ち苦に從つて報を得、非道に婬を行ぜば則ち不男の形を得。人中には是の如き等の雜不善業あるなり。善業は亦此とも相違すること、殺さされば長壽を得る等の如し。人道の中にて此の如き等の種々の不同あるが故に知る是れ雜業の報なり。又願を以ての故に人中に生ずることを得。有人にして放逸を樂まざるも、亦多欲ならずして、智慧を好樂し人身の願を發するときは則ち人中に生じ、又若し人にして父母及び諸の所尊を供養することを好樂し、亦沙門婆羅門等を供養することを知りて喜んで事業をなし、亦好んで福を修するときは則ち人中に生じ、人中に於て、若し淨業の因緣なれば[五五]欝單越に生じ、又若し人にして田宅舍廬の我所の差別を憎惡せば欝單越に生じ、又若し人にして正しく白業を行じて他を惱まさず、財を取つて而も以て布施して亦貪

【五五】欝單越は前にいへり。須彌山の北方に位する北拘盧洲なり、須彌の西方に位するを拘耶尼(Godānīya)といふ、東方に位する大洲を弗于逮、南方に位する大洲は吾人の住所にして閻浮提(Jambudvīpa)といふ。東の洲の原語は pūrvavideha にて東勝身と譯す。弗于逮は pū(-rva)-vide(ha) の音譯ならむ。

き業を起すこと、人が妄説し自な呪し誓つて、若し此の食を食せば我をして草を食せしむるなりと言ひ、或は土を食へと言ひ、是の如き等の如くならば、又若し人にして惡口し罵つて、汝は何ぞ草を食ひ土を食はざるやと言はば、是の人は語に從て生を受けて草土等を食ふと說くが如く、又人にして不淨施を行ぜば草等の報を得、又若し人にして債を觝(こば)んで償はずむば牛羊麞鹿驢馬等の中に墮して其の宿債を償ふ、この如き等の業は畜生の中に墮するなり。

問曰　已に畜生の報業を知れり、何れの業を以ての故に餓鬼の中に墮すや。

答曰　飮食等に於て慳貪心を生ずるが故に餓鬼に墮するなり。

問曰　若し人にして自物を與へざらむに、何が故に罪を得るや。

答曰　是れ慳人なればなり。若し人にして從ひて乞はるるも、貪惜するを以ての故に、則ち忿怒を生ぜば、此の罪を以ての故に餓鬼の中に生じ、又此の慳人に、若し人從うて乞ふに有るを而も無しと言はば、妄語するを以ての故に餓鬼の中に墮し、又此の人は久しきより來(このかた)慳結を修集し、他が利を得ることを見て慳妬心を生ずるが故に餓鬼に墮し、又此の慳人は他が施を行ずるを見て則ち施主を憎恚して、此の乞者は得るに慣るるを以ての故に必ず當に復び來つて我に從つて乞ふべしと言ひ、又久遠より來(このかた)慳心を修集し、既に自らも施さず亦他の與ふるを遮せば、又若し共有の物なること、寺中の僧物及び天祠の中の諸の婆羅門の物の如きを有る人にして獨惜んで人に與ふることを欲せずば、その故に餓鬼に墮し、又若し人にして刼奪し他の飮食を壞せば、その故に飮食なき處に生じ、又若し人にして布施の福無くむば、所生の處に隨つて、報は得る所なく、兼ねて乞者を呵罵するの業あるが故に、中に於て苦を受け、又此の慳者にして人の飢渴せるを見るも、憐愍心無きが故に、所生の處にて常に飢渴を受くること、慈悲を以て天上に生ずることを得るが如く、是の如く恚恨するを以ての故に惡道の中に生じ、又親屬に深著し樂住處に愛するが故に[五四]迦陵伽等の餓鬼

【五四】迦陵伽は迦陵頻伽 Kalaviṅka なる鳥をもいへど、こゝにては Kaliṅga なる地又はかく稱せらるゝ林などを指すなり。鳥は餓鬼にはあらず。

邪行なる者は、當に知るべし、便ち地獄の人を見ると爲すと。[四七]

問曰 已に地獄の報業を知れり。畜生の報業は何れの者か是れなるや。

答曰 若し人善に雜へて不善業を起さば、この故に畜生に墮し、又結使が熾盛なるが故に畜生に墮すること、婬欲が盛なるが故に雀鴿鴛鴦等の中に生じ、瞋恚が盛なるが故に[四八]蚖蛇蝮蠍等の中に生じ、愚癡が熾盛なるが故に猪羊等の中に生じ、憍逸が盛なるが故に師子虎狼等の中に生じ、掉戲が盛なるが故に獼猴等の中に生じ、慳嫉が盛なるが故に狗等の中に生ず、是の如き等の如く、餘の煩惱が盛なるが故に種々の畜生の中に生じ、若し少しく施分ある者は畜生に生ずと雖も、中に於て樂を受くること、金翅鳥龍象馬等の如く、又口業の報は多く畜生に墮すること、人の業の果報を知らず信ぜざるが故に種々の口業を起し、言の如くに是の人にして輕躁なること猶獼猴の如きときは則ち獼猴の中に生じ、若し言の[四九]貪嫉なること鳥の如く、語ること狗吠の如く、[五〇]駛なること猪羊の如く、聲は驢の鳴くが如く、行は駱駝の如く、自ら高ぶること象の如く、惡しきこと逸牛の如く、婬なること鳥雀の如く、怯なること猫貍の如く、諂ふこと野干の如く、[五一]便なること[五二]羖羊の如く、多毛なること牛の如く、是の如き等の惡口の業を起すが故に、業に隨つて報を受くが如し。又衆生は樂を貪るを以ての故に種々の願を發すること、婬欲を樂しむときは則ち鳥等の中に生じ、若し諸龍金翅鳥等の勢力あることを聞かば、その故に其の中に生ぜんことを願ふが如し。又經の中にて說く、若し[五三]迮狹の處に於て死して寬處を得んことを願はば則ち鳥の中に生じ、若し渴して死せば水を求むるが故に水中に生じ、餓死せば食を貪るが故に廁等の中に生ずと。又愚癡より輕微なる業を起し、善を雜ゆるを以ての故に蚤虱蟲蟻等の中に生じ、又若し他人を敎へて邪法に墮せしむるときは則ち無智處に生じ、盲生盲死せば死尸の中の蟲と作り、又雜行を行ずるが故に畜生の中に生ずること、經の中にて諸の畜生は種々の心に隨つて種々の形を得と說くが如く、又若し應に草を食すべ

【四七】極めて細に又煩瑣に說くも、人生實際生活上此の如きものゝみにて盡くにはあらざるべきが故に、單に大綱を擧げたるものに過ぎざることとなる。然らばこれ煩瑣なる列擧といふ外なし。但し論主の意としてはかく列擧して罪を怖れしめむとするものならむ。以下も之に準ずべし。

【四八】蚖は毒蛇なり。

【四九】三本宮本は饕に作り、食を貪るなりとの註あり。

【五〇】注に癡なりとす。

【五一】三本宮本は佷に作り、很佷なりとの註あり。

【五二】牡羊なりと註せらる。

【五三】此經の同一文が明因品第一百四十に引用せらる。食厭想品第一百七十六參照。隘なりと註せらる。

是の人は身に惡を造り　自ら怨をして願を得しむ、と。

又事なくして而も忿り、此の忿心を以て而も罪業を爲すときは則ち地獄と爲し、若し事有つて忿る罪なるときは則ち爾らず、又瞋を以て業を起さば、是の結は重きが故に、則ち地獄と爲すこと、經の中にて、瞋を重罪と爲すも而も除滅し易しと說くが如く、又若し惡心にして性を成ずるときは則ち地獄と爲すも、若し因緣を以て而も罪業を起さば是は則ち輕微なり。又若し縱逸なる人の造る所の惡業なるときは則ち地獄と爲すも、若し知識の爲めに護せらるるときは則ち天に生ずることを得ること、[四三]莎婆魁膾が命終に臨む時に、舍利弗が其の所に到りしに、是の人は則ち惡眼を以て舍利弗を視、異呼して少しく來り前ましむること能はざりしかば、更に氣を以て之を噓くに、舍利弗の光色の益ゝ榮ゆるを見て、便ち念を生じて言く、此人は我に勝れり殺すべからずと、即ち淨心を以て七反上下して舍利弗を視、此の因緣を以て七たび天上に生じ七たび人中に生じて後に辟支佛道を得たるが如く、又[四四]鴦掘魔羅が多く罪業を起し將に母を殺さんと欲せしに、佛を善知識と爲したるが故に卽ち解脫を得たるが如く、又[四五]施越が火坑毒飯を以て害を佛に中てんと欲せしも、佛を善知識と爲せしが故に亦解脫することを得たるが如く、是の如き等の人は惡業ありと雖も地獄に墮せざるが故に、若し縱逸なる人の作す所の惡業なるときは則ち地獄と爲すと說くなり。又若し善根を斷じて復び治すべからざること[四六]調達等の如くならば、猶病人の死相の已に現ぜるが如く、是の人の作す罪は則ち地獄と爲し、又若し人にして數ゝば善を爲さずむば、將に命終せんとする時にも善心生じ難く、是の人は心に悔ゆるが故に、地獄に墮す。又若し死に臨める時に邪見心を起せば、是の人は先の不善を因と爲し邪見を緣となすを以ての故に地獄に墮す。是の如く多く諸業の地獄の報と爲すものあり。又論師の曰く、一切の不善は皆是れ地獄の因緣なり、是の不善の餘のものは畜生等の中に生ず、經の中に說くが如し、佛は比丘に語る、汝等が見る所の衆生の身の邪行、口の邪行、意の

【四三】莎婆は Vasava の音譯か。

【四四】鴦掘魔羅（Aṅgulimāla）譯して指鬘といふ、惡師の敎により、千人の命を斷じて道に入ることを誓ひ九百九十九人を殺し、唯一人を殘す、最後に母を殺さんとして佛の敎によりて救はれしといふ。

【四五】施越の原語は Gagga か。

【四六】調達（Devadatta）佛陀の異母弟にして、一度佛弟子となりしも後に佛陀に背き佛陀に危害を加ふ。

而も作し、應に作すべきをも而も作さず、應に語るべからざるをも而も語り、應に語るべきをも而も語らず、應に念ずべからざるをも而も念じ、應に念ずべきを而も念ぜざればなり。是の人の作す所の罪業は少なしと雖も亦地獄と爲し、又若し不善の中の過を見ずむば是の人は則ち能く重罪業を起して地獄の報を受け、又若し人にして罪を爲して善に依らざるときは則ち地獄と爲すこと、債を負へる人が王に依恃せざるときは債主は則ち便を得るが如く、又若し人の善業劣弱ならば作す所の少罪も亦地獄と爲すこと、人が身中に火勢微少ならば消し難き食を得るとき則ち消すること能はざるが如く、又若し人にして但不善のみを行じて善業の雜はることなきときは則ち地獄と爲すこと、人が賊の爲に輕重に悉く繫がるるが如く、又若し一切の善根を捨離して、象が戰ふ時には手を護惜せざるが如く、是の人にして罪を作るときは則ち地獄と爲し、又若し小法を行じ小師に受學するも、是の人にして罪を作るときは則ち地獄と爲すこと、貧賤にして債を負へば富貴の爲に牽かるるが如く、又若し人にして常に不善を長ずれば、債を負うて日々息むが如し、猶屠兒獵師等の如く、業は則ち地獄と爲し、又若し罪を覆藏するときは則ち地獄と爲すこと、瘡の內の漏の如く、又若し人にして不善が久しく心中に住して疾く滅すること能はざるときは則ち地獄と爲すこと、治せらるる毒が卽ち能く人を殺すが如く、又若し人にして自ら不善を爲し亦以て人に敎ふるときは、多くの衆生に苦惱の門を開くが故に、則ち地獄と爲すこと、諸の國王及び多くの知識人の惡邪の行を行じて多人をして學せしむること、富蘭那等の如くなるが如く、又若し作す所の業にして多く衆生を惱ますこと林を燒く等の如く、又他人に敎へて非法に墮せしむこと田獵等の如く、又若し人にして惡業を以て活命すること、賊・[四二]魁膾・屠・獵師等の如く、又畢竟破戒の人の作す所の罪業なるときは則ち地獄と爲す、死に至るも捨てざるが故に畢竟と名づく、偈に說くが如し、

　畢竟破戒の人は　　藤の樹枝に蔓るが如く、

【四二】魁膾は註に屠宰の首たる者とあり。

す、經の中にて、喜んで殺生する者は地獄の中に生ず、若し人と爲ることを得ば、則ち短命を受くと說くが如し。乃至、邪見も亦是の如し。

問曰 已に十不善道は地獄の報を受くることを知るも、亦畜生餓鬼及び人道の中にも生る、而も汝は但地獄及び人中にのみ生ずと說く、今當に別に說くべし。何れの業が但地獄の報のみを受くや。

答曰 卽ち此の罪業にして最も重き者が地獄の報を受け、小輕なるときは則ち畜生等の報を受く。又若し三種の邪行を具足するときは則ち地獄と爲し、餘の具足せざる業は畜生等と爲す。又故作の重罪なるときは則ち地獄と爲し、又破戒破見の人の造る所の惡業なるときは則ち地獄と爲し、又深心に惡を爲し心壞し行壞せば是の人の造る惡業は則ち地獄と爲し、又不善業を造るに不善を以て助くるときは則ち地獄と爲し、又若し賢聖に於て不善業を造るときは則ち地獄と爲し、又不善の業、不善の修集を起すること、人の不善の業を起して後に快樂なりと讚して捨離することを欲せざるが如くなるときは則ち地獄と爲し、又慳恚心を以て而も罪業を造るときは則ち地獄と爲し。若し財物の爲にすれば則ち餘の報を受くるも、又邪見の心を以て不善の業を起すときは則ち地獄と爲し、又破戒の者の作す所の罪業なるときは則ち地獄と爲し、又慚愧なき者の作す所の罪業なるときは則ち地獄と爲し、又惡性なる人の作す所の罪業なるときは則ち地獄と爲すこと、譬へば濕地の小雨も泥と成るが如く、又常に不善を行ずる者の作す所の惡業なるときは則ち地獄と爲し、又若し急緣なきに而も惡業を造るときは則ち地獄と爲し、又若し人にして空無我の分を得ずして、深く染著するが故に、造る所の罪業なるときは則ち地獄と爲し、[四二]又若し人にして身の戒と心の慧とを修せずして造る所の惡業なるときは則ち地獄と爲し、又若し凡夫人の作す所の惡業なるときは則ち地獄と爲す。所以は何、是の人は陰界諸入十二緣等を知らず、知らざるを以ての故に、應に作すべからざるをも

【四二】三不護品第五、讚論品第十五、三報業品第一百四の註參照。其他十不善道品第一百一十六等にも存す。

問曰　有る人の曰く、具に受くれば則ち戒律儀を得と。是の事は云何。
答曰　多少を受くるに隨つて皆律儀を得、但だ要のみを取らば、五あるなり。
問曰　繫縛を離る等をば、何が故に名づけて戒を爲さずして、而も但不殺等のみを說くや。
答曰　是れ眷屬なるが故なり。
問曰　何が故に、婬を斷ずることを說かずして不邪婬のみを說くや。
答曰　白衣は俗に處せば常に離るること難きが故なり。又自ら其の妻を婬するは必ずしも諸惡趣に墮せず、須陀洹等の如きも亦此の法を行ず、是の故に全く婬欲を斷ずることをば說かざるなり。[三七]
問曰　兩舌等を離るるをば何が故に名づけて戒と爲さざるや。
答曰　是の事は細微にして守護すべきこと難ければなり。又兩舌等は是れ妄語の分なれば、若し妄語を說かば、則ち已に總說せるものなればなり。
問曰　飮酒は是れ實罪なりや。
答曰　非なり。所以は何、[三八]飮酒は衆生を惱ますことを爲さざるが故なり。但是れ罪の因なるのみなり。若し人にして酒を飮まば、則ち不善の門を開く、是の故に若し人をして酒を飮ましむれば、則ち罪分を得、能く定等の諸の善法を障ふるを以ての故なり。衆果を植うれば必ず牆障を爲すが如し。是の如く四法は是れ實罪なれば、離るるを實福と爲し、守護の爲の故に此の酒戒を結するなり。

六業品　第一百一十

業に六種あり、[三九]地獄報業と畜生報業と餓鬼報業と人報・天報・不定報の業となり。
問曰　何者か是れなりや。
答曰　地獄報業とは六足[四〇]阿毗曇の樓炭分の中にて廣く說くが如し。又殺生等の罪は皆地獄と爲

【三七】優婆塞の五戒中には不婬とは說かざるも、比丘の戒の中にては不婬といふべきなり。之を不邪婬といふときは邪なる婬を禁ずる意味ならずして邪卽婬を禁ずるなり。優婆塞に不邪婬といへば、邪なる婬を禁ずる意なり。比丘には正婬なるものなし。

【三八】飮酒は性罪ならざれば、他の四の性罪と同性質なるにはあらず。四の性罪戒を持つは衆果を植ふるが如く、不飮酒は之を守護する牆の如きものとなすなり。

【三九】四諦品第十七には六道を擧げ居たるも、ここには五道のみを擧ぐ。五道は有部の說、六道は犢子部等の說なりといはる。六業品第一百一十より見るも五道なれば、五道が此論の認むる所なるべし。

【四〇】邪見品第一百三十二阿毘曇六足參照。漢譯に大樓炭經、其異譯に起世經と起世因本經とあり、長阿含第四分起世經と同一なるものなれど、こゝにては六足阿毘曇中の樓炭分なれば、これ施設論を指すなり。

答曰　聖人を殺さば、多くは地獄に墮す、若し阿羅漢を殺さば、必ず應當に墮すべし。若し人にして佛を打ちて而も血が出でざるも、亦重罪を得、世尊を害せんと欲せしものなるを以ての故なり。

問曰　若し人にして一逆罪を作るすら則ち地獄に墮す、若し二三を作るも亦一身に於て盡く報を受くや不や。

答曰　是の罪は多きが故に又重苦を受け、是の中に於て死して還是の中に生ずるなり。

問曰　破僧罪の中にては云何なるを重しと爲すや。

答曰　若し非法を非法と知り是法を是法と知り是の如き心にて作すときは、則ち名づけて重と爲す。若し非法を法と謂ひ法を非法と謂ひてせば是は[三三]先の如くならず。又若し人にして佛所に於て僧を破して自ら大師天人中の尊と稱せば是れも亦重しと爲す。[三四]

問曰　若し凡夫にして、破すべくむば、是れ聖人に非されば、何ぞ重罪と名づけんや。

答曰　正法を障礙するが故に重罪と名づくるなり。

問曰　僧を破せば、法は幾時と爲るや。

答曰　法は久しく住せず、一宿をも經ざるなり。是の中にて梵王等の諸天、舍利弗等の諸大弟子は卽ち還和合す。有る人の言く、是の五百の比丘は先世に他の得道の善根を障へし因緣にて、今此の報を得るなりと。又凡夫人は心輕躁なるが故に破壞すべきこと易きも、若し但世間空のみを得て我心なきものすら尚壞すべからず、況んや無漏のものをや。惡欲が心に在るを以ての故に破僧の因緣を造るなり。故に福を求むる者は應に惡欲を捨つべし。

[三五]五戒品　第一百九

佛は說く、[三六]優婆塞には五戒ありと。

【三三】前のよく知りながらも故意になすが最も重ければ、知らずしてなすはそれ程重きにはあらず。

【三四】破僧とならざる時にても四波羅夷中の妄語となる理なり。

【三五】三本宮本はこゝより第九卷となす。

【三六】優婆塞(Upāsaka)譯して、淸信士、近事男といふ、總じて、五戒(不殺、不盜、不邪婬、不妄語、不飲酒)を受けて、三寶に親近する信者の稱。

くが如し、是れ第二業なり、黑白が雜はり行ぜば是れ第三業なり、一切の無漏業は皆是れ諸業を盡くし、以て相違するが故に、但十七學思のみを第四の業と名づくるには非ず。

問曰　無漏は實に白なり、何が故に不白と名づくるや。

答曰　此の白相は異りて、第二業の白と同じからず、是の白は最勝にして相待なきが故なり。轉輪聖王は清淨を成就して人天の眼に過ぎたりと說くが如し、實には是れ人眼なるも餘人に勝るが故に名づけて人に過ぎたりと曰ふ、此の業も亦爾り、餘の白業に勝るが故に不白と說くなり。又有る人の言く、應に說いて非黑白報業と名づくべしと。此れ則ち過なし。又泥洹を非白と名づくれば、是の故に此業をも應に非白と名づくべし。又亦應に非黑非白とも說くべし、所以は何、泥洹を無法と名づくればなり。此の業を泥洹と爲すが故に不黑不白と名づく。又世間の貴重なる有漏の善業なるが故に名づけて白と爲せば、第四業は能く此の業を捨つるを以ての故に不白と名づけ、又此の業には黑相なきが故に亦白相の得べきものなく、又報が白なるが故に業を白と名づくるに、是の業には報なきが故に、白とは名づけざるなり。

五逆品　第一百八

次身に報を受くが故に無間と名づく。若し現に受くるものなるときは則ち輕にして苦惱の報は少なきも、其の重きを以ての故に、[三]次第して疾く阿鼻地獄に墮するなり。三逆は福田の德重きに由るが故に名づけて逆と爲す、所謂僧を破すと惡心にて佛身より血を出すと阿羅漢を殺すとなり。父母を殺すは恩養を識らざるものなるを以ての故に名づけて逆と爲す。此の逆罪は但人道の中にてのみ能く起るものにして、餘道の中にてには非ず、人には別の知あるを以ての故なり。

問曰　餘の聖人を殺すは逆罪を得るや不や。

【三】次第してとは此生に引續きて直に次生に於ての意。

に墮在して、名聞あることなきが故に名づけて黑と爲し、及び二世の苦毒は今苦と後苦となるが故に名づけて黑と爲す。

問曰　是の業の何れの者か能く純苦惱處に生ずるや。

答曰　相次いで惡を爲し心に悔ゆる間あることなく、善が能く惡業を消することあることなくば、是を能く純苦惱處に生ずるものと名づく。又邪見の心を以て而も諸惡を造ると、又重き人に於て惡を爲す、所謂父母及び餘の善人になると、又衆生に於て惡を爲して遺惜する所なきこと、衆生を殺し、若しくは盡く財物を奪ひ、若しくは牢獄に閉ぢて而も復食を斷ち、若しくは重く考掠して餘樂なからしむるが如きと、是の如き等の業は純苦惱處に生ずるものなり。白白報業とは若し人にして純ら諸善を集めて不善あることなきものなり。此の[二八]二業の勢力は最大にして餘の能く勝るものなし。若し黑業の報を受くる時ならば、白報を容れず、白業の報を受くる時ならば黑報を容れず、所以は何、一切衆智は皆善と不善とを集むるも業の力が相障ふるが故に並び受くることを得ず、[二九]二人の物を負へば、强き者が先に牽くが如し。第三の業は弱し、善と不善とが雜はるが故に並に報を受く、互に相勝るが故なり。

問曰　有人の言く、[三〇]若し不善業が惡道の報を受くれば、是を初業と名づけ、色界繫の善を第二業と名づけ、欲界繫のものが天人の中に雜つて報を受くる業ならば、是を第三業と名づけ、無礙道の中の[三一]十七學思は是れ第四業なりと。此の義は云何。

答曰　佛は自ら此の業等の相を說く、謂く、若し人にして罪を身口意の行に起さば、苦惱の身を受け苦惱處に生じ、受くる所の諸受は皆意に隨はずと。故に知る、隨つて、衆生をして純苦處に生ぜしむれば、是を初業と名づく。色無色界ならば則ち純に樂を受け、欲界の天人なるも亦純に樂を受くる者あり、經にて樂ある人には亦六觸入もあり天の覺する所の諸塵は意に隨はさるはなしと說

【二八】黑黑報業と白白報業となり。

【二九】二人にて負ふべきものを一人にて負へるなり。

【三〇】これ有部の說なり。

【三一】十七學思。

答曰　若し爾らば、則ち出家人の持戒等にして皆福德あるも、是れ亦應に捨つべけむも、而も實には不可なり、是の故に布施も亦應に捨つべからず。但三有に回向すること勿れ、當に泥洹の爲にのみすべし。又但應に煩惱と諸の不善業とをのみ遠離すべし、所以は何、是の諸業は因の時に防ぐべく、果の時には如何ともすべきことなければなり。是の故に諸佛は常に因の時に於て敎化說法すること、閻王が果の時に於て方に化して訶責するが如くにはあらざるなり。

問曰　是の三業障の中にては何れの障が最も重きや。

答曰　有人の言く、報障が最も重し、化すべからざるを以ての故なりと。有る人の言く、人に隨ふを以ての故に一切皆重しと。

問曰　何れの者か轉ずべきや。

答曰　皆滅せしむべし。若し轉ずべくむば名づけて障とはなさざればなり。

四業品　第一百七

問曰　經の中にて佛は四種の業を說く、[二六]黑黑報業と白白報業と黑白黑白報業と不黑不白無報業となり、諸業を滅盡するが爲の故なり。何れか是れなりや。

答曰　黑黑業報とは、隨つて、何れの業を以てするも苦惱處に生ずるものなり、阿鼻地獄と及び餘の苦惱にして善報なき處、若しくは畜生と餓鬼との[二七]少分の如し。此と相違するを第二の業と名づく、隨つて何れの業を以てするも苦惱なき處に生ずるものなり、色無色界と及び欲界の人天の少分との如し。黑白の雜はるを第三の業と名づく、隨つて、何れの業を以てするも苦惱と不苦惱との處に生ずるものなり、若しくは地獄と畜生と餓鬼と人天の少分となり。第四の業を無漏と名づく、能く三業を盡くせばなり。若し業にして二世の所呵として今呵と後呵とならば、是人は罪の爲に黑暗

【二六】黑黑報業とは惡業にして苦果を感ずるもの、白白報業とは善業にして樂果を感ずるもの、黑白黑白報業とは善惡業の交雜せるもの、不黑不白無報業とは、黑白の相を離れるもの、卽ち無漏業をいふ。(涅槃經三十七)。

【二七】苦惱にして善報なき處は畜生の一部と餓鬼の一部とを指すなり。畜生の全部及び餓鬼の全部が然るにはあらざるなり。少分は少部分なり。

るべし、然らば則ち梵志は應に施を受くべからず亦應に與ふべからず。而も、今、梵志は但受くるのみにて與へず、故に知る此を邪道と爲す。又諸王が如法に民を治するが如きも、亦應に罪あるべし。又若し子にして罪を爲さば而も父母にも分あるべし、則ち應に子を生まざるべし。又良醫が疾を療するにも亦應に罪を得べし、其の命を得るを諸罪と爲すを以ての故なり。又天が[二四]降す時に雨は五穀を生長せば天は應に罪を得べし、多くの惡衆生を濟育するを以ての故なり。又食を施す者も亦應に罪を得べし、受者が或は食して消せずんば、乃ち、死に至らしめ、亦未だ離欲せざる人は味に著するを以ての故に、施者には應に罪あるべし。然らば則ち施者は常に應に、受者をして自ら誓を立てて、今汝が食を食せば、要ず惡を爲さずと言はしめ、然して後に當に與ふべきなり、若し是の如くせずんば則ち施者兩つながら失なり。

問曰　經の中にて亦言く、若し比丘が[二五]檀越の食を食し、檀越の衣を着して無量の定に入らば、此の因緣を以ての故に、此の檀越は無量の福を得と。若し是の因緣を以て而も福を得ば、云何が罪を得ざるや。

答曰　若し是の比丘にして檀越の食を食し檀越の衣を着し無量の定に入らば、檀越の施の福は自ら增長することを得るも、定むでは福を得ず、田にして良きが故に收むる所必ず多きも、薄きときは則ち收むるは少なきが如し。是の如く、福田は良きが故に施の報は則ち大なるも、薄きときは則ち福も少なし。受者を以てのみ福となし罪となして、而も施者が分を得るにはあらず。是の故に罪福の因緣を以て而も罪福を得るならず、彼は因緣と爲ると雖も、而も罪福は要ず自ら三業を起すに由るなり。

問曰　未だ離欲せざる人の心は自在ならずして、必ず有に貪著す、故に出家人には應に施を行ずべからず。

【二四】　三本宮本は時雨を雨時に作る。然らば、天の雨を降す時に五穀を生長せばとなる。此方自然なるが如し。

【二五】　此經の同一文が福田品第十一、滅盡定品第一百七十一に引用せらる。檀越(dānapati)は施主家とあると同じ。後世支那の梵語學者は檀那波帝の那を省きて檀のみとし、波帝を越としたるなりと解釋するも、不適當なる解釋なり。檀はダーナ(dāna)がダーン(dān)となり居たる爲にかく音譯せられたるもの、若し那を附せば、鼻音が重複し却つて不正となる。越はパ(pa)かパト(pat)のみの音譯なり。古くは後世の如き雅語としての梵語が傳はりたるに非ざりしが故に、梵語のみにて解釋する後世の梵語學者の說が不正なるなり。

答曰　然らず。他にして罪福を作すも、我に於ては分なし、所以は何、罪福の因縁の中には多くの過咎あればなり。何となれば、衆生の如きは是れ殺の因縁なり、若し衆生なくんば何ぞ殺す所あらんや。然らば則ち〔二〕死する者にも應當に罪あるべし。又富者は是れ盜の因縁、美色は是れ邪婬の因縁、他人は是れ妄語等の因縁、僞稱等は是れ欺誑の因縁なるが如くむば、〔三〕買者も亦應に罪あるべく、又受者にして施者の因縁と爲らば、亦應に福をも得べし。若し人にして井池等を造らば用ふる者は皆應に福を得べし、然らば則ち應に自ら福徳を爲すべからざるに、而も實には然らず、是の故に因縁の中には應に罪福あるべからざるなり。又受者の福分にして應當に消盡すべくむば、則ち人は應に他より施を受くべからず、所以は何、福徳分を以て飲食を〔三〕貿ふものなるが故なり。又施者は應に罪は多くして而も福は少かるべし、所以は何、詎ぞ幾所の婆羅門の能く善を爲す者あらんや。多くは三毒の濁心を以て深く五欲に著して勤めて善を修せざるのみ。是の故に施者は應に罪は多くして福は少なかるべし。又梵志等は自ら善人にして法を修行すと稱するも、是の人は諸法を正觀し禪定して心を攝すること能はず。若し禪定を離るれば心は調伏し難し。是の故に施者にして未だ離欲せざる人に施さば、應に罪を得ること多かるべし。又人にして父母を供養し妻子親屬知識に供給するも、皆應に罪を得べし。則ち人の福分を得るものあることなからむも、而も實には然らず。是の故に罪福は因縁の中には在らざるなり。又持戒等の法も亦他を利益す、是の人にして殺生せず、故に一切に命を施さば、則ち持戒の者は大罪の分を得む、殺さざるを以ての故なり。前の人が壽を得て作す所の衆惡が盡きなば、應に是れ持戒者の分なるべし、故に福を求むる者は便ち當に殺生し、應に持戒すべからざるべし。又人にして法を說きて他をして福を修せしめ、福の因縁を修したる後に富貴を得ば、富貴は則ち憍逸、憍逸は則ち諸惡を造れば、此の諸惡は說法者に皆應に分あるべし。又施の因縁は他人をして富ましむ、富の因縁を以ての作す所の諸罪も亦應に是れ施者の分な

【二】衆生の存することが殺業の起る所以となるものなれば、若し此點よりいへば、衆生が自然に死せば、殺業の因縁を失うことになるが故に、罪ともなるといふべし。

【三】錢を拂うて買ふ者は盜の因縁を失ふこととなる點にていふ。

【三】代換するの意なり。

地獄等の報を以て報に非ずと爲すべけむや。故に離欲の時に斷ずるを以て、便ち報に非ずと名づくとなすべからず。

問曰　不苦不樂の報業を不動と名づけば、此の業は是れ善なれば、應に樂報を受くべし、何が故に不苦不樂報を受くるや。

答曰　是の受は不動なるが故に實には樂なるも、寂滅なるを以ての故に、不苦不樂と名づくるなり。又經の中にして樂受の中の貪使を說くは、彼の中の貪が彼の受の中に於て故らに是れ樂なると知らしむるなり。

三障品　第一百六

問曰　經の中にて、三障を說く、業障と煩惱障と報障となり。何れか是れなりや。

答曰　若し諸の業と煩惱と及び報とにして能脫道を障ふるが故ならば名づけて障と曰ふ。

問曰　何れの者か能く障ふや。

答曰　施戒の修善を三有に回向せば、此は能く道を障ふ。又定んで報を受くるの業も是れ亦障と爲す。經の中にて說くが如し、若し此の人にして必定して報を受くるの業を集めば、則ち正位に入らず、是を業障と名づく。又若し人の煩惱が厚利にして增上し、常に心中に在らば是れ煩惱障なり。又若し人の煩惱にして除遣すべからざること、[三〇]不能男等の欲の如くなるも、亦煩惱障と名づく。又若し地獄等の罪惡の生處にて及び所生の處に隨ひて、道を修すること能はずむば皆報障と名づく。

問曰　有る人は先に悉く前の人を明めず、其の善を知らずむば、則ち布施せずして、彼の人にして若し我施に由りて諸惡を造ることを得ば、我に則ち分有らんと謂ふ、梵志等の諸の出家人の如し。故に出家人には應に布施すべからず、新業の繫を以て解脫を障ふが故なり。

【三〇】　五種の不能男あり、生、犍、妬、變、半なり。七不善律儀品第一百一十一にも存す。

答曰　汝は、憂は想分別より生ずるが故に報に非ずと言ふも、樂も亦是れ業報なり、是の樂は二種なり、一には樂、二には喜にして、喜も亦想分別より生ずれば、應に報とは名づくべからず。汝は業報は則ち輕しと言ふも、是の憂は重きこと苦よりも過ぎたり、所以は何、憂は是れ愚人の所に有りて、智者には則ち無し、是の故に除き難く、亦能く深く熱惱をも生ずればなり。又[一八]四百觀の中にて說く、

小人は身が苦しみ　君子は心が憂ふと。

又此の憂は要ず智を以て斷じ、身の苦樂も亦能く除く。又憂は能く三世の中の惱を生ず、所謂我(われ)の先有の苦と今苦と當苦となり。又憂は是れ諸の煩惱の住處なり、經の中にて煩惱處と爲すが如し、故に十八意行を說く。五識の中には煩惱を生ぜざるを以ての故なり。又經の中にて說く、憂を以て二箭と爲すは苦を受くること重きを以ての故なり、人が一處にて重ねて二箭を被れば則ち苦を受くること倍增するが如し。是の如く癡人は苦の爲めに逼られ、更に憂患を增し、身心を惱ますを以ての故に苦よりも甚だしきなり。又愚者は常に憂ふ、所以は何、是の人は恩愛より乖離し、怨憎と合會し、求むる所を得ざる等の故に常に憂惱すればなり。又此の憂は二因より生ず、一には喜より生じ、二には憂より生ず。若し所愛の物を失すれば、是れ喜より生ずるなり、經の中にて說くが如し、佛が[一九]波斯匿王に問ふ、汝は迦尸憍薩羅國を愛するやと。又說く、諸天は色を樂しみ色を貪る、是の色にして若し壞せば則ち憂惱を生ずと。是を喜より生ずと名づく。憂より生ずとは憎む所の事より生じ、亦嫉妬等よりも生ずるものなり、未だ離欲せざる者の嫉妬等の結は常に其の心を惱ませばなり。天人には慳と嫉妬との結多しと說くが如し。又多くの衆生は他人を憂惱せしむるが故に憂惱の報を得、種に隨ひて果を生ずと說くが如し。故に知る憂は是れ業報なり。汝は離欲の時に斷ずるが故に報に非ずと言ふも、是の事は然らず、須陀洹は未だ離欲せざるも、亦地獄等の報を斷ずればなり。

【一八】　四百觀はこれ提婆の Catuḥśataka なり。漢譯にある大乘廣百論釋論は此四百觀の後半に護法の註釋せしものなり。之によつて成實論が提婆以後の作なるを推定し得。之については本國譯者が既に十數年前初めて此引用を見出し公に紹介したり。

【一九】　波斯匿（Pasenadi Prasenajit）王、佛陀時代憍薩羅（Kosala）國の王にて佛教に歸依したる人、舍衞城に都したり。迦尸（Kāsi）は現今のベナーレスなるが、王の時の前半に憍薩羅國の領地なりき。後半には摩竭陀國の阿闍世王に與へたり。摩竭陀（Magadha）國には頻毘娑羅（Bimbisāra）王あり、阿闍世王の父にして王舍城を都とし、佛教に歸依したり。

問曰　經の中にて佛は三種の業を說きたり、樂報と苦報と不苦不樂報との業なり。何れか是れなりや。

答曰　善業は樂報を得、不善業は苦報を得、不動業は不苦不樂報を得。[一五]此の業は必ずしも定んで受けざるも、若し受くれば則ち樂報を受く、苦等には非ざるなり。餘の二も亦爾り。

問曰　是の諸業も亦色報を得、何が故に但受のみを說くや。

答曰　諸報の中に於ては受を最勝と爲せばなり。受は是れ實報にして、色等をば具と爲す。又緣の中に於ては受を說く、火苦火樂と說くが如し。或は因中にて果を說くことあり、人が食を施すを[一六]五利を施すと名づくるが如く、亦錢を食す等と言ふが如し。

問曰　欲界より三禪に至る中にて不苦不樂報を受くることを得るや。

答曰　受くることを得。

問曰　是は何れの業の報なるや。

答曰　是れ下の善業の報なり、上の善業ならば則ち樂報を受く。

問曰　若し爾らば、何が故に第四禪及び無色定の中にて說くや。

答曰　彼は是れ自地なればなり、所以は何、彼の中には但是の報のみ有つて更に異受なければなり、寂滅なるを以ての故なり。

問曰　有る人の言く、[一七]憂は業報に非ずと。是の事は云何。

答曰　何が故に無きや。

問曰　憂は但想分別のみより生ずるに、業報は應に是れ想分別なるべからざるが故なり。又若し憂にして是れ業報ならば、業報は則ち輕し、故に報に非ざるなり。又此の憂は離欲の時に斷ずるに、業報は爾らずして離欲の時にも斷ぜず、是の故に憂は業報に非ず。

【一五】不動業を指す。

【一六】食を僧に施して得る色と力と命と安と辯とを五利といふ。

【一七】これ有部の說なり。

と說けばなり。有る論師の言く、是の學人には我慢あるが故に諸業は亦集むも、但無我の智力を以て必ずしも報を受けざるなりと。

問曰　是の三種の業は何れの界に於て造るべきや。

答曰　三界の中の一切の處にて造るべし。

問曰　不定業は有りや、無しや。

答曰　[四]有り、若し業にして或は現報或は生報或は後報ならば、是を不定と名づく。是の如き業は多し。

問曰　若し此の三種の業を知らば、何の利を得るや。

答曰　若し能く是の三種の業を分別せば則ち正見を生ず、所以は何、現見するに、惡行者にして而も富樂を受け、善者にして苦を受くるものあり、中に於て或は邪見を生じて、善惡には報なしと謂はむも、若し此の三業の差別を知らば則ち正見を得む、偈に說くが如し。

惡を行ずるも樂を見るは　惡の未だ熟せざるが爲なり
其の惡にして熟するに至らば　自ら苦を受くることを見む。
善を行ずるも苦を見るは　善の未だ熟せざるが爲なり、
其の善にして熟するに至らば　自ら樂を受くるを見む、と。

又分別大業經にて說く、殺を斷ぜざる者にして天上に生ずることを得ば、是の人は若しくは先世に福ありしか、若しくは將に命終せんとせし時に强き善心を發したるなりと。能く是の如くに知らば則ち正見を生ず。是の故に應に此の三種の業の相を知るべし。

三受報業品　第一百五

色界に屬する禪定の意業をいふ、欲界の三業は其の果報に於て他の緣力の關係上、移動することあるも、上二界の禪定を修するものはその禪定の差別によりて受くべき果報は決定して變動することなきが故に不動業となす。

【四】故に業は現報と生報と後報と不定との四種となる理なり。

報なり、五逆等の如し、亦利亦は重なるものなるときは、則ち後報を受く、轉輪王の業若しくは菩薩の業の如しと。又有る人の言く、是の三種の業は願に隨つて報を得るなり、若し業にして今世に受くることを願ふものなるときは、是れ卽ち現受なり。[九]末利夫人が自らの食を以て分つて佛に施し現世に王夫人と爲らむことを願へるが如し、餘の二業も亦是の如しと。隨つて、業の熟するとき則ち先に受くるなり。

問曰　過去の業を云何が熟と名づくるや。

答曰　[一〇]具足、重相、是を名づけて熟と爲す。

問曰　頗しくは一念に業を起し、次念に報を受くるものありや。

答曰　無し。漸次に當に受くべきこと、種が漸次に芽を生ずるが如し、業の法も是の如し。

問曰　若し胎中に處し及び睡眠狂亂等の人ならば、能く業を集めむや不や。

答曰　此等にして思あらば則ち能く業を集む、但具足せざるのみ。

問曰　若し此の[一一]地の欲を離るゝも、能く此の地の業を起すや不や。

答曰　我心ある人は皆此の業を集む。若し我心を離るれば則ち復た集めず。

問曰　阿羅漢にも亦禮敬修福等あり、此の業は何が故に集めざるや。

答曰　衆生心を以ての故に諸業は則ち集むるに、阿羅漢には我心なきが故に諸業は集めざるなり。又阿羅漢の心は無漏なり、無漏心ならば諸業を集めず。又經の中にて說く、罪福の業を斷ぜるを阿羅漢と名づくと。是の人は[一二]罪業福業及び不動業を集めず、故業は受け畢りて新業は造らざればなり。

問曰　學人は諸業を集むるや不や。

答曰　亦集めざるなり、所以は何、經にて是の人は諸業を散壞して積まず集めず滅して然せず等

あれば、むしろ報を受くる世が定まり居る點にて現報等の名を附すと解釋すべきなり。現報業すら必ずしも現受にはあらざればなり。若し現受なるときは、現報にて、それが其まま生報後報の業として次生後生に受くるにはあらざるなり。

【九】末利（Mallikā）夫人は舍衞國の花鬘師長の娘、佛に花を供養す。佛が現世の果報を得くべきものと豫言したる七人の一人として、後に波斯匿王に召され、その一夫人となる。

【一〇】意味明確ならず、重の字の意味が明ならざるなり。過去業の熟は果の現はることなれば、カサナルの意なるか。然らば、重相を具足せば、と讀まるべし。

【一一】通常はもしと讀む。頗はかたよるの意なればなり。ここにては或はの意の方適切なり。恐らくかならずと讀むも差支なかるべし。

【一二】此の地とは欲界にあらば欲界を指し、色界にあらば色界を指していふ。

【一三】罪業福業不動業、罪業と福業とは共に欲界の善惡業にして、苦果を招くべきものを罪業といひ樂果を招くものを福業といふ。不動業は色無

巻の第八[一]

三報業品　第一百四

問曰　經の中にて佛は[二]三種の業——現報と生報と後報との業——を說く。何れが是れなりや。

答曰　若し此の身が業を造りて卽ち此の身にて受けば是を現報と名づけ、此の世にて業を造り次の來世にて受けば是を生報と名づけ、此の世に業を造り次の世を過ぎて受けば是を後報と名づく、次の世を過ぐるを以ての故に名づけて後と爲すなり。

問曰　中陰の報業は何れの處に在りて受くや。

答曰　二處にて受く。[三]次第の中陰の業は生報の處に在りて受く、生に差別あるを以て中陰と名づくるが故なり。餘の中陰の業は後報の處に在りて受く。

問曰　是の三種の業には報が定まると爲さんや、世が定まれるや。

答曰　有る人の言く、報が定まれるなり、現報業は必ず現に報を受け、餘の[四]二も亦爾りと。此の言ありと雖も是の義は然らず、所以は何、若し爾らば、但五逆は名づけて定報と爲すのみには非ざればなり。而も[五]六足阿毘曇にては說く、[六]五逆は是れ定報なりと。又鹽兩經の中にては亦不定なりとも說く、又業の應に地獄の果報を受くべきに、是の人が身の戒と心の[七]慧とを修するが故に能く現に報を受くるものあり。是の故に是の三種の業は應當に世が定まれるものなるべし、現報業も必ずしも現には受けず、若し受けば則ち應に現受なるべく、[八]餘處なるには非ず、餘の二も亦是の如し。

問曰　何等の業が能く現報を受くや。

答曰　有る人の言く、利にして疾なる業が現報を受く、佛と諸の聖人と及び父母と等に於て起す善惡の業の如し、是れ則ち現報なり、若し業が利ならずして而も重きものなるときは、是れ則ち生

【一】三本宮本はここにては卷を分たず。
【二】詳しくは不空を入れて四種となる。下を見るべし。現報は順現法受、生報は順次生受、後報は順後次受なり。
【三】ここの次第とは次のといふ意。
【四】他の二もそれぞれ次生及び後世に受くと定まれるものなり。
【五】邪見品第一百三十二の阿毘曇參照。有部の認むる論藏にして、集異門論、法蘊論、施設論、識身論、品類足論、界身論なり。これ發智論卽ち八犍度論を身論となすに對して、足論と呼び、一一に足の字を加へて呼ぶ。但し品類足論のみは足は元來の名の中にあるなり。
【六】鹽兩經を宮本は監兩經に作る。故不故品第九十七にもありて、宮本と明本とが監兩經に作れり。
【七】三不護品第五の註及び讃論品第十五を參照すべく。
【八】餘處とはここにては次生後生を指す。以上の意は報が現世次生後世と決定せる點にて現報等と稱せらるとの說に對して、五逆すら現報業となさざる說もあり、生報後報なるべきものにして三學を修したる爲に現報となるものも

業あるなり。

問曰　若し彼の中に於て不善業を起さば、是の業は何れの處の繫と爲さんや。

答曰　是の不善業は欲界の果報を受くるが故に、欲界に繫在す。善業には上中下ありて、下なる者は欲界の報を受け、中なる者は色界の報、上なる者は無色界の報なり。又有る人の言く、四禪の所攝の善業は色界の報を受け、四無色定の所攝は無色界の報を受け、餘の散心にして業を起さば欲界の報を受く。

問曰　云何が彼の中にて善業を起して、欲界にて果報を受くや。

答曰　此の[八八]間にて心を攝して善業を起さば、彼の間にて報を受くるが如く、是の如く彼の中にて散心にして善業を起さば此の間にて報を受くるなり。又色無色界にて不善業を起して、欲界の中にて報を受くるが如く、彼の中の善業も亦是の如くなり。

問曰　若し色無色界に在らば、欲界繫の善業を起すこと能はず。

答曰　是の中にも此の因緣なからむや。若し欲界に在りて能く色無色の善業を起さば、色無色界に在りても欲界の善業を起すこと能はざらんや。又汝等は色界の中に在りて能く欲界の無記心を生ずと說けば、若し能く無記心を生ぜば、何が故に善心を生ずること能はざらんや。又經の中にて、佛は[八九]手天子に、當に念住心にて麁想を受くべしと語りたり。麁想は卽ち是れ欲界繫の心にして、是の人が、隨つて、善心を以て法を聽き佛を禮するも皆是れ欲界繫の心なり、若し爾らずむば麁想とは名づけず。又是の中にて財福を求念せば、[九〇]世尊よ我は三事に於て厭足すること無きが故に此の間にて命終して無熱天に生ぜむと說くが如し。謂く佛を見、法を聽き、僧を供養して財福を求念するは是れ欲界繫の心なり。又此の中には念佛等の財福に非ざるものあるが故なり。當に知るべし、欲界繫の善あるなり。

【八八】　此の間にてとはここ欲界の中にての意。間は中の義にして其中に入り墮するをいふ。

【八九】　手天子(Hatthaka-devaputra)。此手天子は淨居天より來りて給孤獨園に至り、世尊の說法を勸請して「世尊が八衆外道に圍まれて說法し給ふ如く、我所にても諸天が聽法の爲に來集せり」と告げたりと傳へらる。

【九〇】　此語は同じく、手天子が世尊に告げたる語にして、二事といふは、次にある見佛と聽法と供養僧となり。無熱天は色界第四禪の攝なり。

答曰　亦業を以て本と爲すなり。所以は何、皆是れ先世の布施持戒等の力に由る所あるものなればなり。是の故に亦業等より生ずるなり。

問曰　若し無漏法も亦業より生ぜば、是も亦繫法と名づくべし、是れ則ち不可なり、經の中に不繫受ありと說くを以ての故なり。

答曰　無漏法は眞智を以て因と爲し、業を以て緣と爲す、因の力が大なるが故に名づけて不繫と爲すのみ。

問曰　何れの業か欲界の報を受け、何れの業か色界の報、無色界の報を受くや。

答曰　若し欲色無色界に在りて十不善業を起さば則ち欲界に於て報を受く。

問曰　若し色無色界に在るも、亦能く不善業を起さむや。

答曰　彼の中にても能く不善業を起す、經の中に說く、彼の中に邪見ありと、邪見は不善に非らざらむや。

問曰　彼の中の邪見は是れ無記にして不善に非ざるなり。

答曰　無記には非ず。何を以てか之を知る。佛は經の中にて、邪見は是れ苦惱の因なりと說けばなり。邪見の人の起す所の身口意業にして造作する所あらば、皆苦報と爲す、猶苦瓠の如し。所有の四大は盡く苦味と爲す、欲界の邪見不善の如し。色界無色界も亦此の相なるを以ての故に不善と名づく相が同じきを以ての故なり。[八六]婆伽梵志が諸梵に語つて言へるが如し。汝等は[八七]瞿曇沙門を詣すること勿れ、我此の間に於て能く汝を度脫せんと。是の心口の不善は色界に在りて起るなり。又餘の梵天は彼に於て佛を難じたり、是の如き等なり。又人にして色無色界に在りて是れ泥洹なりと謂はば命の盡く時に臨んで、欲界の中陰を見て卽ち邪見を生じ、泥洹なしと謂はむ、無上法を謗ずるものなるが故に、云何ぞ不善に非さらむや。此等を以ての故に、當に知るべし、彼の中にも不善

【八六】　婆伽梵志（Baka）梵天の一人にして、曾て、此の境は常住不變にして生老死なし、此の外に出離なしとの邪見を抱き佛陀の教說に反對せしが後に佛陀によりて教誡せらる。梵天は色界初禪天の攝なり。

【八七】　瞿曇（Gotama）釋尊の姓にて、外道は佛陀を呼ぶに常に之を以てす。支那には古き時代 Gotam となりて傳はり、最後の母音が脫せられ居たるなり。故にかかる音譯出でたるなり。最後の母音の落ちて傳はりたることは古き時代には殆ど凡て然りともいへる程なり。

問曰　若し報より報を生ぜば、是れ則ち無窮ならん。

答曰　我の說く業報は三種なり、善と不善と無記となり。善と不善とよりは報を生ずるも、無記は生ぜず、故に無窮には非ず。穀より穀を生ずるに、是の中に於ては種子より芽を生じ、麩等よりは生ぜざるが如く、是の如く善不善の報より異報の生ずることあれど、無記の報よりは生ぜざるなり。汝は功を勞せずと言ふも、業より報を生ずと雖も要ず功を加ふることを須つて然して後に成することを得べきこと、穀を得る業より穀の生ずるあるも、然れども要ず種等を須つて爾して乃ち成ずることを得るが如し。汝は解脫を得ること無しと言ふも、是の事も然らず、眞智を得るが故に諸業は滅盡すること、猶種が燋くれば復生ずること能はざるが如くなればなり。故に[八四]解脫の過なし。又諸の生ずる所の法は皆業を以て本と爲せば、若し業の本なくんば、云何ぞ能く生ぜんや。[八五]又萬法の生ずるには各定分ありて、此の如きの法は必ず是の人の身より生じ、餘の身に在るにあらず、若し業の本なくんば云何ぞ是の如く決定し差別せんや。

問曰　若し法にして但因よりのみ生ずること、豆より豆を生ずるが如きは何の咎ありや。

答曰　是の事も亦業を以て本と爲す、豆の業の因緣を得るを以ての故に、豆より豆を生ずるなり。何を以てか是を知る。上古の時の人が善行を行ぜしが故に粳米は自ら生じたるなればなり。故に知る業を本と爲すが故に豆より豆を生ずるなり。

問曰　是の衆生數の物は則ち先業より生ずるなり。

答曰　然らず、非衆生數の物も亦業を以て本と爲せばなり。一切衆生には共業報の果あり、謂く住處を得るに、業の因緣を以ての故に地等あり、明の業の因緣を得るを以ての故に日月等あり、當に知るべし物の生ずるは皆業を以て本と爲すなり。

問曰　若し生法にして皆業を以て本と爲さば、有爲無漏は云何。

【八四】　解脫なきの過なしの意。解脫の過は解脫に關するの過の意と解すべきなり。或は無の字が二字ありしを一字脫するに至りたるに非ざるか。

【八五】　一切は業より生じ、業は心より生ずとなすなり。故に通常いふ業感緣起と同一の考にはあらず。而して業は眞智を得れば凡て滅し、滅したる後は心のみとなる理なり。

答曰　若し業にして地獄より他化自在天に至つて、中に於て報を受くれば、欲界繫業と名づけ、梵世より阿迦尼吒天に至つて報を受くれば、色界繫業と名づけ、虛空處より非有想非無想處に至つてこの報を受くれば、無色界繫業と名づく。

問曰　無記業及び不定報業は此の三種の中に在らざるや。

答曰　是の業及び果報は皆欲界繫と名づく、所以は何、此の法は是れ欲界の業と果報となるが故なり。

問曰　欲界法は一切盡く是れ業報なるには非ず、是の故に然らず。

答曰　一切の欲界法は盡く是れ欲界繫業の報なり。

問曰　若し爾らば、則ち是れ外道の邪論なり、謂く一切の受くる所の苦樂は皆是れ先業を因緣とし、又[八二]先業の果報なり。謂く善不善の業には報と非報とあらば、又精進の功は則ち用ふる所なし。若し皆是れ業報ならば、復何ぞ功を勞せんや。[八三]及び若し諸の煩惱及び業にして皆是れ業報ならば、則ち解脫を得ること無けん、業報は盡くべからざるを以ての故なり。

答曰　汝は是れ外道の邪論なりと言ふも、是の事は然らず。外道は、苦樂好醜は但是れ先業の果報のみと說けばなり。然らば則ち應に復現在の因緣を假るべからざるに、而も實に萬物を見るに現在の緣より生ずること、種子等の如し、故に一切は皆先業の因緣に從ふとは言ふことを得ず。又因に從ひ緣に從うて萬物の生ずることを得ること、種を以て因と爲し、地水空時等を緣と爲し、眼識は業を以て因と爲し、眼と色と等を緣と爲すが如し。是の故に外道の邪論に同じからざるなり。汝は先業の果報なりと言ふも、是の事も然らず、現見するに果よりは異果有りて相續して生ずること、穀より穀を生ずるが如くなればなり。是の如く報より報を生ずるに何の咎有らんや。又不能男人及び鳥雀鴛鴦等の欲、毒蛇等の瞋の如きは、當に知るべし、皆是れ先業の果報なり。

【八二】麗本は失に作り宋本元本宮本も爾るが如し、明本のみは先に作る。次文に先とあれば明本正し。
【八三】町版は又に作る。

づけ、又無學人は必竟して不善業を起さざるが故に寂滅行と名づく、身寂滅口寂滅意寂滅と說くが如しと。有る人は言く、此の三種の行は義一にして而も名を異にするなり、但其の質直を美むるが故に正と稱し、諸の煩惱を離れたるが故に淨と曰ひ、諸の不善を離れたるが故に寂滅と名づく、故に三名なりと雖も其の義は異ならざるなりと。

問曰 有る論師は言く、但心のみ是れ寂滅行なり、思には非ずと。此の義は云何。

答曰 是の三種の行は皆但是れ心のみなり、所以は何、心を離れては思なく、身口業もなければなり。

問曰 經の中に說く、正行成就の人を見れば、則ち天を見ると爲すと。若し[八一]天數を見れば、一切の正行者が皆天上に生ずるには非ざるに、何が故に是の如く決定して說くや。

答曰 天數と言ふが故に是の事は已に明なり。正行者は必ずしも天に生ぜずと雖も、若し尊貴處に生ぜば、則ち天と相似す、故に天數を見ると言ふ。諸の正行者は皆應に天に生ずべきも、或は餘緣に壞せらるるを以て、是の故に生ぜず、所謂邪正雜行して邪行强きが故に天に生ずることを得ざるなり。經の中にて佛が阿難に語るが如し、我は人の三正行を行じて而も惡道に生ずるものあるを見る、是の人には先世の邪行の果熟して、今正行すと雖も未だ具足せざるが故なりと。又命終の時に臨んで邪見心を起すが故に惡道に墮す。邪行にして善處に生ずるも亦是の如し。故に凡夫法は信ずべからざるなり。當に知るべし、强力なる業に隨つて生を受くること差別するなり。

繫業品　第一百三

問曰 經にて三種の業あり、欲界繫業と色界繫業と無色界繫業となりと說く。何れの者か是れなるや。

[八一] 天數の數は衆生數といふ場合の數と同じく、天は天人をいふ。故に天人たるものの中に入るものを指す。天を見るの天も天人なり。

中に施さば、是の如き等の施は此の果報を得と。

問曰　若し經の中にて、正行は愛報を得と說かば、何が故に復正行の因緣を以て天上に生ずることを得ると說くや。

答曰　邪行有る者も亦天上に生ず、或は天に生ずるを是を邪行の報なりとも謂ふ、故に經の中にて、更に正行の因緣にて是の中に生ずることを說くなり。又邪行と正行とは能く善惡道の身を得、身を受け已つて、中に於て苦樂を受く、邪行の因緣にて、惡道の中にて、苦を受け、正行の因緣にて、天人の中にて、樂を受くが如し。

正行品　第一百二

身の所作の善を身正行と名づく、口意も亦爾り。殺生等の[七七]三不善業を離るゝを身正行と名づけ、口の四過を離るゝを口正行と名づけ、意の三不善を離るゝを意正行と名づく。是れ[七八]三種の律儀の所攝を離るゝなり、所謂戒と空と無漏との律儀なり。又所有の禮敬布施等の善の身業を皆身正行と名づけ、所謂實語軟語等を皆口正行と名づけ、不貪等の意業を皆意正行と名づく、是を三正行と名づく。

問曰　外道の[七九]神仙が報なくして解脫戒を得ば是の人能く戒律儀を得るや不や。

答曰　是の諸の外道は心より[八〇]律儀戒を生じ、或は亦口より受く、又諸餘の人等も亦能く戒律儀所攝の正行を得、壽十歲の人は不殺法を受くるが故に生める子は壽二十歲なるが如し。

問曰　經の中にて正行淨行寂滅行を說く、何の差別ありや、

答曰　又論師の言く、凡夫の善の身口意業を名づけて正行と爲し、學人は已に結を斷ぜるが故に即ち此の正行を名づけて淨行と爲し、無學人は結を斷じて、結生の語なきに從ふが故に寂滅行と名

【七七】三不善業は、殺生、偸盜、邪婬の三、口のは、妄語、綺語、惡口、兩舌の四、意のは、貪、瞋、癡の三なり。これ所謂身三口四意三なり。

【七八】後の七善律儀品第一百一十二を參照すべし。

【七九】仙又は仙人といふと同じ。仙は聖人又は賢者の意。

【八〇】三本は、戒律儀を生じとし、宮本は戒律儀戒を生ずとす。前後の文より見れば、宮本が可なるが如し。

行に二種あり、一には十不善道の所攝にして、殺盜邪婬の如し、二には不攝のものにして、鞭杖と繫縛と自ら妻に婬す等と及び不善道の前後の惡業との如し。

問曰　是の殺生等の三不善業は但是れ身業の性なりや。

答曰　殺罪は殺不善業と名づく。是の罪は身も亦造るべし、隨つて自の身を以て衆生を殺害すればなり。口も亦造るべし、隨つて人に敎勅して衆生を殺さしめ或は呪を以て殺せばなり。心も亦造るべし、人あり、心を發せば能く他をして死せしむればなり。盜と婬との罪も亦是の如し。但自ら作らば具足罪を得るのみ。又身不善業は或は身を以て相と爲し、或は口を相と爲す。或は心を發すれば他が則ち知り、[六]此の因緣を以て亦殺等の罪を造ることを得るも、但多くは是れ身の所作のみなるを以ての故に、通じて身業と名づくるなり。口邪行も亦是の如く、口の造る所の惡業を口邪行と名づく。是の中にも亦二種あり、若し人が決定して問ふ時に現前に他を誑かさば、是れ不善道の所攝なるものと、餘は不攝と名づくるものとなり。貪恚邪見等は是れ意邪行なり。

問曰　何が故に十不善道の中にて邪見を說き、三不善根の中にて癡を說くや。

答曰　邪見は是れ癡の異名なり、是の癡が增長して堅固なるを名づけて邪見と爲す。癡は更に別相なし、但顚倒し貪著するのみなるを以ての故に名づけて癡と爲すなり。

問曰　經の中に說く、諸の邪行は不愛報を得、正行は愛報を得と。是の愛と不愛との相は決定せず、即ち一色にして而も愛不愛あるが如し。是の故に應に其の相を辯ずべし。

答曰　樂は是れ愛の相なり、經の中にて、福報を樂と名づくと說くが如し。苦は是れ不愛の相なり。經の中にて、汝等は罪に於て應に怖畏を生ずべしと說くが如し。是れ苦の因緣なるを以ての故なり。

問曰　若し樂にして是れ愛の相ならば猪犬等が糞を食するを以て樂と爲すは是れ福德の果なりや

答曰　是れ不淨福の果なり、業經にて說くが如し、若し非時に不淨を施し、輕心濁心を非福田の

【六】身不善業なれば、身のなすが主にして、口も亦此中に入る。心も身や口に表はるれば他にはその心を發せることが知られ、その表はれたるものにて殺をなせば、身不善業の心にてなさるるものあることとなる理なり。されど多くは身の所作のみなり。

せずと雖も、亦人を惱ますことをなすが故なり。汝は自ら殺し自ら罵るも亦罪を得と言ふも是の事は然らず。若し自ら身を苦しめて而も罪を得ば、則ち人の好處に生ずること得るものあることなし、所以は何、人は四威儀の中に於て常に其の身を苦しむればなり。然らば則ち一切のものは常に應に罪を得ること、他人を惱ますが如くなるべし、是の故に好處に生ずることを得るものあることなきも、此の事は然らず。當に知るべし、自の身罪福あるにあらざるなり、道の爲の因緣の故に[七四]比尼の中にて此の戒を結びたり。若し人にして惡心にて自殺せば、煩惱を以ての故に罪を得るなり。

無記業とは、若し業にして善にも不善にも非ずして、他の衆生に於て益することもなく損ずることもなくば、是を無記と名づく。

問曰　何が故に無記と名づくるや。

答曰　此は是れ業の名字なり。若し業にして善にも非ず不善にも非ずむば名づけて無記と曰ふ。又善不善の業は皆能く報を得るも、此の業は報を生ずること能はず、故に無記と名づく。所以は何、善不善の業は堅强なるも、是の業の力は劣弱なればなり。譬へば敗種の芽を生ずること能はざるが如し。又報には二種あり、善が得る愛報と不善が得る不愛報とにして無記には報なし。

問曰　此の中にありて非愛非憎を取りて、是れ無記の報なりとせば何の咎ありや。

答曰　佛が說く報には二種あり、邪身行は不愛報を得と正身行は愛報を得とにして中ありとは說かず。福德の果報あらば愛念如意を得、罪ならば則ち此と相違す。又苦樂は是れ罪福の報にして、不苦不樂も亦是れ善行の果報なり。[七五]故に知る無記には報無しと。

邪行品　第一百一

佛は三邪行を說く、身邪行と口邪行と意邪行となり。身に造る所の惡を身邪行と名づく、此の邪

【七四】三本宮本は毘尼に作る。此方が普通なり。

【七五】通常は善因善果惡因惡果といふも、正確には善因樂果惡因苦果といふべきものなり。又因是善惡果是無記といふ。

の利あればなり。又汝は、禮敬等は他の功德を損ずと言ふも是の事も然らず、好心を以て禮敬し、外道が他を損ぜんが爲の故に而も禮敬を行ずるが如くなるには非ざればなり。又布施するも、若し他が消せずむば亦他の功德をも損ずるが如きは、然らば則ち布施にも亦應に福あるべからず。故に禮敬等は應に深く思惟して、益あらば則ち行ずべし。經にて說くが如し、一の比丘あり、浴室の中に於て手もて他身を摩す、佛諸の比丘に語る、此の供養者は是れ阿羅漢なり、供養を受くる者は是れ破戒人なり、汝等は當に師子を以て狐等を供養すること無きことを學すべしと。汝は但發心するのみの故に福を得るにあらずと言ふも、心は是れ一切功德の本なり、若し人にして他を利せむに、[七一]已利も今利も當利も皆善心を以て本と爲し、若し人にして他を損ぜむに、已損も今損も當損も皆不善心を以て本と爲せばなり。又慈を行ぜば、慈心の果報を以て一切を饒益す、謂く風雨の時に隨ひ、日月星宿の常度を失せざる、大海の溢れざる、大火の燒かざる、大風の壞らざる、此れ皆慈の果報力なり。經の中にて、若し一切世間にして皆慈心を行せば、則ち欲する所は自然なりと說くが如し。汝は[七二]塔寺を劫奪するも應に罪なるべからずと言ふも、是の人は衆生心を以て而も之を劫奪するなり、隨つて是れ何れの塔なるも、此を劫奪することを爲さば、是の因緣を以ての故に、若しくは能く損ずることを爲すも若しくは損ずること能はざるも、皆主と爲るが故に罪を得るなり。若し汝が[七三]心にして佛に於て惱を生ずること能はざるが故に罪なしと謂はゞ、惡口等を以て阿羅漢に加ふるも、苦を生ずること能はずむば、亦應に罪なかるべし。汝は現前にて罵らずむば應に罪なかるべしと言ふも、是の事は然らず、是の人は惡心を以て彼に加ふればなり。惡心を以ての故に、彼は聞かずと雖も、若し聞かば必ず當に苦を生ずべければ、是を以て罪を得。汝は若し惡心を生ずるも身口を起さずむば應に罪あるべからずといふも是れ亦然らず、是の濁惡心は他を惱まさんが爲の故に生じたれば、若し他が覺知せば必ず苦惱を生ずること、賊の來つて人の物を奪ふが如く、覺知

【七一】縮刷藏經は已とし、大正大藏經は己となすも、何れも不可なり。ここは過去と現在と當來との三世を併せ擧ぐるものなれば、已なることといふまでもなし、已に利したり、今利す、當に利すべしの三時凡て心を本とす。

【七二】塔寺は非衆生數なれば、損害を與ふるも罪となることなしといふも、損害をなすものが衆生心を以てなすが故に、衆生心より罪生ずといはるるなり。罪が心より、卽ち衆生數の心より生ずとなすは注意すべき思想なり。

【七三】この心は通常いふ意と同じ。汝が意にしてとは汝の意味する所がの意味なり。

等の非衆生數ならば、若しくは財物を奪ふも若しくは毀壞を加ふるも、應に罪あるべからず。又現前にて惡口して他を罵しらずんば應に罪あるべからず、聞かざるを以ての故に、何の損減する所ぞ。又他人に於て但惡心を生ずるのみにして身口を起さずんば、復た何の損する所ぞ。此れ皆應に罪を得べからず。又或は自ら罵り、或は自ら身を殺し、或は自ら邪行するも、亦或は罪を得ん。是の故に善と不善との相は但他を損し益するに由るのみには非ざるなり。

答曰　汝は自ら身を將養して福德ありと言ふも是の事は然らず、若し自ら供養して福德あらば、則ち人の應に他を供養すべきことあることなければなり。而も實には福德を求むる者は他人を供養す。又自に隨つて已が爲にせば其の福は轉薄し。故に知る自らの爲にするは應に福あるべからず。又汝は自ら食するを福業を行ずと爲すと言ふも、若し自ら身を養ふは他を饒益せむが爲なりとせば、是の心邊より能く福德を生ず、自ら養ふに由りて而も福を得るには非ざるなり。汝は塔寺の非衆生の灑掃も亦福を得と言ふも、是の人は佛の功德の衆生の中に於て尊きことを念じ、是の故に灑掃するなれば、此の事も亦衆生に由るが故に福を得るのみ。

問曰　已に滅度せる佛は衆生と名づけず。又經の中にては、佛は有にも非ず、無にも非ず、亦有無にも非ず、亦非有にも非ず非無にも非ずと說く。云何が衆生と名づけんや。

答曰　若し滅度せるを以て衆生と名づけざるも、是の人は佛の未だ滅度せざる時を念じて而も供養を爲す者なれば、是の故に福を得るなり。人の父母を祭祠して生存時を念ずるが如し[七〇]。若し爾らずんば、父母を供養すとは名づけず、此の事も亦爾り。汝は禮敬等は他に於ては益なしと言ふも、是の事は然らず、所以は何、禮敬等を以て種々に他を利し、他をして尊貴人に恭敬せられしむれば、是を利益と名づけ、亦他人をして恭敬に隨學して亦福德を得しめ、又他を禮敬する時には自ら憍慢を破し不善分を破するを以ての故に利益する所多く、亦他の功德を顯はすを以て禮敬等に是の如き

【七〇】二世無品第二十二の最後參照。

福なきなり。又天祠の中に於て、福心を以ての故に羊を殺さば、羊をして天に生ぜしむ、福心を以て殺すが故に則ち福德あるなり、若し爾らずんば、一切の殺生は皆福を得罪を得ん。又婆羅門の言く、或は劫盜するも罪なきあり、食に乏しきこと七日ならば、首陀羅より取ることを得、若し命が斷ぜんと欲すれば婆羅門より之を取ることを得るが如し。亦好兒を生まんが爲の故ならば、婬欲も罪なし。若し故心を以てせずんば則ち應に此等の差別あるべからず、故に知る若し人不故にして他人に毒を與ふるも何に由りてか罪を得ん。若し故にして他に毒を與へ、毒が反つて病を消せば、則ち應に福を得べし。人に食を施すに、是の食が消せずして人をして死せしむれば是れ應に罪を得べきが如し。若し不故にして而も罪福あらば是の法は則ち亂る。又世間人は一切の事の中にて皆心を信ず。即ち一言が能く喜怒を生ずるが如し。[六七]椎打等亦是の如し。故に知る諸業は皆心に由るなり。又意業は最勝なり、[六八]後の品に當に說くべし、故に知る諸業は心に在り。又若し智慧人は五欲に處すと雖も而も罪を得ず、皆是れ意の力なり、所以は何、智者は色を見るも妄想を起さゞるが故に色に著するの過なければなり。聲等も亦爾り。若し妄想を起さずして而も罪あらば一切の見聞は盡く應に罪あるべし、然らば則ち意業は用なけむ。智者は智慧を以て首と爲し、五欲を受くと雖も貪著を生ぜざれば五欲は在りと雖も心が厭ふを以ての故に而も能く染せざるなり、是れ意業の力に非ずや。是の故に不故にして而も罪福を得ることあることなし。

問曰　汝は善と不善との相は謂く他を損し益するなりと說くも、此の事は然らず、所以は何、若し人にして自ら身を[六九]將養して而も福業を行ぜば、此の人は自ら食するに亦福德あり、又塔寺は非衆生なるも灑掃すれば亦福を得、又禮敬等は他に於ては益なく但他の功德を損ずるのみなれば應に福あるべからざればなり。又但發心するのみの故に福德あるには非ず、衣食を以て他人を利益するに隨つて爾の時に福を得るなり。是の如く慈悲を行ぜば應に福あるべからず。又若し塔寺

【六七】椎は註に擊なりとす。

【六八】三業輕重品第一百一十九を見るべし。

【六九】將はやしなふの意。

なりと分別せんや、皆心を以ての故に是の差別あるのみなればなり。三人ありて倶行して塔を繞るが如し、一は佛の功德を念ずるが爲に、二は盜竊せむが爲に、三は淸凉たらむが爲にして、身業は是れ同じなりと雖も而も善と不善と無記との差別あり。當に知るべし、心に在るなり。業に定報のものあり、不定報のものあり、上中下のものあり、現報と生報と後報と等のものもあるに、若し心に由らずして而も罪福を得ば、云何ぞ當に是くの如きの差別あるべきや。又若し心を離れて業あらば則ち非衆生數にも亦應に罪福あるべし、風にして山を頽(くづ)して衆生を惱害するが如くんば、風には應に罪あるべきも、若し香華を吹き來つて塔寺に墮さば便ち應に福を得べきが如し。是れ則ち不可なり、故に知る心を離れて罪福なきなり。有る外道の說く、[六六]斷食の法を行じ灰土刺棘等の上に臥し淵に投じ火に赴き自ら高崖より墮つ等は、苦の因緣なるを以て、而も福德ありと。智者難じて言く、若し爾らば則ち地獄の衆生の常に燒炙せられ、餓鬼の飢渴し、飛蛾の火に投じ、魚鼈の水に處し、猪羊犬等の常に糞土に臥すは、是等も亦應に福を得べきや。是の人は答へて曰く、要ず故心を以て此の苦惱を受くれば則ち福德あるも、不故には非ざるなり。地獄等は福の心を以ては燒等の苦を受けざるなりと。若し故心を以てせざるが故に福なしとせば、亦故心なきを以て是の故に罪もなし、若し不故心なるを以て而も福あらば地獄等の中にも亦應に福あるべし是の如きの過あり。又若し不故心にして而も罪福あらば則ち善人なけむ、所以は何、四威儀の中に於て常に衆生を殺せばなり。此の事は不可なり。當に知るべし、不故ならば則ち罪福なし。又好き生處を得ることもなし、常に罪を爲すが故なり。而も實には梵王等の諸の妙好なる身あり。故に知る不故には罪福の業なきなり。又汝等の法の中にては不淨食を食せば則ち皆罪あり。若し深く思惟せば一切の飲食は皆是れ不淨食なり、不淨食なれば皆應に罪を得べし。是の如く酒等に觸るれば則ち婆羅門なるには非ず。若し見聞せずして淨心を以て食するは便ち罪なしとせば、當に知るべし、心を離るゝときは則ち罪

【六六】　これ等が戒禁取の例なり。

を傷殺し、亦常に我[六四]想を以て而も他の物を取り、亦自想に隨つて妄語を爲せばなり。是の故に終に好身なし。

答曰　故作なるときは則ち罪にして、不故には非ざるなり。經の中に、實に衆生あり、中に於て衆生想を生じて、殺さんと欲する心あらば、殺し已つて殺罪を得ると說くが如し。盜等も亦爾り。

問曰　人が毒を食ふに、故なるも不故なるも倶に能く人を殺すが如し、[六五]又火を蹈むに、知るも不知なるも倶に能く人を燒くが如し、刺等も亦爾り。當に知るべし殺生せば故なるも不故なるも倶に應に罪を得べし。

答曰　此の喩は然らず、毒は身を害するを以ての故に死するも、罪福は心に在れば、何ぞ喩と爲すことを得んや。又火と刺と等は若し覺せずんば、苦を生ずること能はず、是の故に此の喩は然らず。若し識ることなくんば則ち痛みを覺せず、識ることあらば則ち覺す、是の如く、若し故の心無くんば、作せる業も成ぜず、心あらば則ち成ず、此の喩は應に爾るべし。又故ならば則ち罪あるも、不故ならば則ち無し、諸業は皆心を以て差別すればなり。故に上あり下あるなり。若し故の心無くんば、云何が當に上下あるべきや。醫と非醫とは倶に人の苦を生ずるも、心力を以ての故に罪福が差別するが如し。又兒が母の乳を捉ふるときは則ち罪を得ず、染心なきを以ての故なり、若し染心にて捉ふれば則ち罪あるが如く、當に知るべし、罪福は皆心より生ずるなり。又若し不故の心にして而も罪あらば、解脫を得る人も亦不故にして而も衆生を惱ますことあれば是れ應に罪を得べく、則ち解脫することあることなし、諸の罪人は解脫することなきを以ての故なり。又若し不故にして而も罪福あらば、則ち一業にして便ち應に是れ善と不善となるべし。人の福業を爲す時に、誤つて衆生を殺さば、此の業は則ち亦は罪なり亦は福なりと名づくるが如くなるも、是の事は然らず。當に知るべし、不故は應に罪あり福あるべからず。又若し心無くして而も業あらば、云何か此は善、此は不善此は無記

【六四】麗本は相、三本宮本は想に作る。次の文より見て想の方可なり。

【六五】麗本は有に作る。三本宮本の又を取る。下之に準ずるものあり。

諸の惡賊を殺さば則ち王の爲に愛せらるるが如し。

答曰　因緣を以ての故なり、深く愛するには非ず、說くが如し、若し人にして、惡業を以て、主の心をして歡喜せしむるも、主にして若し厭心を生ぜば反て還此の人を疑ふと。若し惡事を以てして疑を生ぜば、云何ぞ愛すと名づけん。又不善を行ずる者は尙自ら愛するすらなさず、呪んや他人をや。故に知る殺生は是れ不善法なり。又殺等の法は是れ打害繫縛等の諸の苦惱の因なり、故に知る不善なり。

問曰　不殺等の法にも亦苦の因あり、王が人に敕して惡賊を殺さしむるに、若し殺さずむば王は必ず之を害するが如し。

答曰　若し殺さざるを以て便ち害せらるれば、諸の殺さゞる者は皆應に死すべし、是の人は自ら王敕に違するを以ての故なり。若し此の人は深心にて殺さゞるなりと知らば則ち害を加へず、反つて應に供養すべし。故に知る殺等は是れ苦の因緣にして、不殺等には非ざるなり。又殺等を行ぜば死する時に悔を生ず。故に知る不善なり。又殺等を行ずるが故に人の信ぜざる所となる、同類の中に於てすら尙相信ぜず、何に呪んや善人にをや。殺等を行ずることあらば、尙同類の爲にすら譏しらる、況んや餘人にをや。殺等を行ずることあらば、善人は捨てゝ遠ざくること旃陀羅屠獵師等の如し。殺等を行ずることあらば、樂人と名づけず、屠獵者は遂に此の業を以て而も富貴を得ざるが如し。又善人は功を爲して殺等を捨離す、若し不善なるに非ずんば何が故に功を爲して勤めて捨離することを求めんや。又現見するに殺等には不愛の果あり、當に知るべし、來世にも亦苦報を得ん。又若し殺等にして不善なるに非ずむば更に何れの法ありてか不善と名づけむや。

問曰　若し殺等の法にして是れ不善ならば、則ち好身なし、所以は何、殺生せざる時あることなければなり。若しくは來にても、若しくは去にても、足を擧げ足を下す時、恒常に細微なる衆生

を離るれば、還利樂を得て壽命增長し、壽年八萬の如くならば諸欲は意に隨ふ。故に知る殺を不善と名づく。又今、[六一]欝單曰土には自然の粳米あり、衣は樹より生ず、皆殺等を離るるに由るが故なり、要を取て之を言はば、衆生の所有の一切の樂具は皆殺等を離るるより生ずるなり。故に知る殺等は是れ不善業なり。又殺等の法は善人の捨つる所なり、若し諸佛菩薩緣覺聲聞及び餘の功德人ならば皆亦捨離す。故に知る不善なり。

問曰　是の殺生等は善人も亦聽す、違駄經の中にては、天祠の爲の故に聽るして羊を殺さしむればなり。

答曰　此は美人に非ず、善人とは常に求めて他を利し、慈悲心を修して怨親同等なるものなり、是の如きの人ならば豈に當に殺生を聽すべきや。是の人は貪恚濁心なるが故に此の經を造れるなり。天上に生ぜんことを求めて他の衆生を呪ふも、福力を以ての故に能く是の事を成ぜるなり。又此の殺等は解脫を得る者の爲さざる所なり。故に知る不善なり。

問曰　解脫を得る者は亦餘事――謂く[六二]過中食等――をなさず。是の事も亦是れ不善なるべきや。

答曰　是は罪の因緣なるが故に善人も亦捨つるなり。若し法にして過無くむば、應に捨離べすからず。過中食等は能く[六三]梵行を害す、是の故に亦捨つるなり。法が體性として不善なるを以ての故に捨つるあり、殺盜等の如し。法が不善の因緣と爲るが故に亦捨つるあり、飮酒と過中食と等の如し。故に知る殺生は體性として不善なるなり。又殺生する者は多人が憎惡すること師子虎狼及び諸の怨賊旃陀羅等の如し。若し此の法の因緣を以て人に憎惡せらるれば、豈に不善に非ざらんや。又若し殺さざる者は多人の爲めに愛せらるること、慈悲を行ずる諸の賢聖人の如し。故に知る殺を不善と爲す。

問曰　生を殺すことある者は、勇健なるを以ての故に、人の爲めに愛せらる、人にして王の爲に

【六一】欝單曰は Uttaravarti の音譯、後の Uttarakuru といふと同じ。後者が卽ち北拘盧洲といはるるものの原語。須彌山の北方にある大洲の名、此中の曰は數數越に作る。下には欝單越とも用ふ。

【六二】正午を過ぎて猶食を取ることをいふ。小乘戒にては正午を過ぐれば食するを得ずとせらる。

【六三】梵行(brahmacarya)は佛教の修行をいふ。淸淨行の意なり。

知るべし。衆生は復た先世に自ら殺の緣を造りしと雖も、殺さば亦應に罪あるべし、汝は、罪人は能く成ずる所なしと言ふと雖も、是の事は然らず、[五五]旃陀羅等も亦能く呪術を以て人を殺せばなり。仙人も亦爾り、惡心を以ての故に語に隨つて能く成ずるなり。又此の人は福力の故に能く成じ、命を奪ふを以ての故に罪を得。汝は、或は心力ありて命を奪ふより福を生じ、命を施すもの罪を得と言ふも是の事も然らず、所以は何、要ず心力と及び福の因緣とに由るが故に能く福を得るものにして、但心のみに由るに非ざればなり。若し善心を以てするも、師の妻に婬し、婆羅門を殺さば、福を得べけむや。[五六]安息等の邊地の人は福德の心を以て母姉等を婬するに復福あらんや。故に知る福の因緣より福德の生ずることあるものにして、但心のみには非ざるなり。劫盜等も亦是の如し、故に知る殺等は皆是れ不善なり。[五七]又此の殺等は利他の爲に非ざるが故に不善と名づけ。現世に於て少時は樂を得と雖も、後には大苦を受けて、他を損ずるを以ての故に不善の相と名づく。又現見するに多く衆生の殺等の法を行じ、亦多く[五八]三塗及び人道の中に在りて諸の苦惱を受くるあり、當に知るべし、苦惱は是れ殺等の果なり、果は因に似るが故なり、又三惡道の中の罪苦は尤も劇し、故に知る殺等の因緣を以て此の中に生ずるなり。

問曰 天人の中にても亦是の如し、[五九]諸天も亦常に阿修羅と戰ひ共に相殺害す。人中にても亦坑埳網毒を以て色生を殺害す。

答曰 人天の中にては殺等の法を離るるあるも、三惡道にはなし、當に知るべし、此の中にては罪苦尤も甚だし。又人は殺等の因緣にて則ち壽等の利樂を失したり。上古の時には人には無量の壽命あり、光が身より出でて明なること日月の如く、飛行自在にして、地は皆自然に意に隨へる物を生じ、自然に粳米ありしも、皆殺等の罪を以ての故に是の如きの事を失ひ、後轉更に失ひ、[六〇]十歲人の時に至らば酥油石蜜稻粟麥等の一切は皆無し。故に知る殺等は是れ不善業なり。又若し殺等

【五五】旃陀羅(Caṇḍāla)。四姓の外に在つて、漁獵、屠殺等を業とする下賤の者の稱。

【五六】安息はパルテイヤ(Parthia)國をいふ。ペルシヤ人系統の國にして、西曆紀元前二百五十年頃の建國なり。大夏の南、ペルシヤの東方、西北印度より西方に當る所にありて大勢力を得たる時代あり。

【五七】麗本は有に作る。三本宮本の又を取る。

【五八】地獄餓鬼畜生の三惡道なり。

【五九】阿修羅と三十三天の神とが戰ふこと常にいはる。

【六〇】人壽が無量壽より漸次減じて、遂に十歲となれる時をいふ。

は是れ勝人にして能く種々なる悔法を以て此の罪を除滅すればなり、若し功德にして與に等しくば、自殺するも他を殺るも其の罪は亦等し、此の罪は重くして除滅し難きを以ての故なり。若し財主の德にして勝らば應に自ら身を捨つべし、此の中の罪は除くべからざるを以ての故なり、是の如く分別して劫奪せよと。殺の中にても亦應に是の如くなるべし。[五四]惡業を以て活命することあらば、是の中には惡業あるが故に、云何が福と名づけんやと。汝が若し人逕ちに前んで殺さば則ち罪なく、殺さずむば罪を得ると言ふ是の言は已に壞したり、所以は何、若し前[さき]の人の德にして勝らば自ら應に身を捨つべければなり。若し罪なくむば、何が故に爾るや。汝は違駄經に殺生すとも福を得と說くと言ふも、此の語は先に答へたり、謂く殺に福なければなり。汝にして人の實に應に死すべきは殺すも罪なしと言はゞ、則ち怨賊を殺すも亦應に罪なかるべし。又一切衆生は皆是れ罪人なり、業を起作して陰身を受くるを以ての故なり。然らば則ち殺生すとも罪なしとは是の事は不可なり。

問曰　若し衆生にし先世に自ら殺の緣を造つて今殺すならば、何が故に罪を得るや、劫盜等の業も亦皆是の如し。

答曰　若し爾らば、則ち罪も福もなし、所以は何、是の人は前世に殺の緣を造りしが故に之を殺すも罪なし、故に此の殺生を離るるも亦福德なければなり。是の如くならば若し他人に施すも亦應に福無かるべし。受くる者も先世に自ら施の業を行じて、今自ら報を得るものなるを以てなり、而も實には不可なり、罪福なきが故なり。當に知るべし、衆生は自ら殺業を造りしと雖も、殺さば亦皆罪を得、貪恚癡の諸の煩惱を起すを以ての故なり。此の諸の煩惱は邪顚倒と名づく、邪倒の心の生ずるすら尙應に罪を得べし、況んや當に故[ことさら]に身に業を起すべきをや。故に生死をして無窮ならしむるなり。若し爾らずんば、則ち諸の神仙は貪恚等の諸の煩惱を起す時にも、應に便ち神通を失すべからず。若し此にして罪に非ずんば、復何れの法と相違するが故に福德と名づくるなりや。當に

【五四】ここは前の問曰の中の破戒人と爲さずの文を指すものなれば、三本宮本の又の字の方解し易し。

く皆福德の因緣を以ての故に得るも、名聞身力及び樂は但是れ福の不淨なるものなるが故に殺に由りて得るのみ。

問曰 師子虎狼等の得る所の身力は皆罪より生ず、夜叉羅刹等が身力の樂を得るも亦罪より生ずるや。

答曰 是の事は先に答へたり、亦不淨の福なるに由るが故に罪の緣を以て得るなり、汝は、經書の中にて、若し陣に逆ひて死せば天上に生ずることを得と說くと言ふも、是の事は然らず、所以は何、是の經は此の邪語を以て愚人を誘導して其をして勇あらしむればなり。何を以て之を知るや。要ず福に由りて福を生じ、罪に由りて罪を生ずるに、是の中には都べて福の因なければなり。何に由りてか福を得んや。汝は四品の衆生には各自に法ありて、剎利は人を護らむが爲の故ならば殺すも罪なしと言ふも、此は家法の如し。屠兒等の世々の家法は常に應に殺生すとも亦罪を免れざるべきが如く、剎利も亦爾り、是れ王法なりと雖も亦故に罪を得。若し剎利は王法なるを以ての故に殺生ずとも罪なしといはゞ、則ち屠獵等も亦應に罪無かるべし。但剎利は憐愍の心を以て民の爲に患を除く、此に由りて福を得るなり。若し他の命を奪はゞ、此れ則ち罪あり、人が他の財を劫奪して以て父母を養はゞ、是の人は則ち罪と福とを並び得るが如し。

問曰 是の人にして劫盜するも以て父母を養はゞ應に罪を得べからず、世法經[五一]にて說くが如し、若し食に乏しきこと七日ならば、首陀羅より奪ひ取るも罪なし、若し命が斷ぜんと欲せば。婆羅門よりも取ることを得と。是の人は惡業を以て[五二]活命すと雖も、名づけて破戒人とは爲さず、急難なるを以ての故なり。猶虛空が塵垢に汚されざるが如く、是の人も亦爾り、罪の染せざる所なり。

答曰 即ち[五三]梵志法の中にて說く、若し劫奪する時に、財主が來つて護らば、梵志は爾の時に應に籌量すべし、若し財主の功德にして如かざらしめば、則ち應に之を殺すべし、所以は何かん、我

【五一】何れの律法經かは明確ならざるも、現に勝論經及び其註釋にこれと同じ文を引用し居るを見る。

【五二】生活すの意。

【五三】梵志は婆羅門をいふ。故に梵志法は婆羅門法なり。次の規定の文も勝論經の註釋中に引用せらる。故は世法經の文ならむ。財主の德が我に如かざる場合は、我は勝人なれば、財主を殺して劫奪するも可なり。德が財主と我と同等ならば、自殺殺他何れをかなすべし、罪は重くして悔法を行ひ得べからず。財主の德勝り居らば、自殺すべきなり。

四には亦他人にも教ふ、五には布施す、六には施を受くなり。四法とは一には自ら天祠を作るも師とは作らず、二には他より違駄を受くるも他に敎へず、三には布施するも施を受けず、四には人民を守護すなり。三法とは天祠を作るも師とは作らずと自ら違駄を讀むも他に敎へずと自ら布施するも施を受けずとなり。一法とは謂く上の三品の人に供給するなり。若し刹利にして人民を守護するが爲の故ならば、他の命を奪ふも、福ありて罪なし。又違駄經にて說く、生を殺生すとも福を得、所謂違駄の語を以て呪して羊を殺さば、羊は死して天に生[五〇]ずと。違駄經は是れ世間の信ずる所なり。又說く、若し實に應に死すべき者ならば之を殺すも則ち罪なし、五通仙が能く呪して人を殺すが如き、神仙に罪ありとは言ふべからず。罪人にして云何が能く此の事を成ぜんや。故に知る殺生すとも福を得るなり。又或は心力ありて能く命を奪ふも、福を得、命を施すも、罪を得、若し人にして善心を以て生を殺して樂を得しめんと欲せば、云何が罪あらんや、屠兒等が牛羊を畜養するは、施すと雖も、而も罪なるが如し、盜等の事の中の如きも亦福德もあり。

答曰　汝が、殺生すとも所欲を得るが故に福德と名づくと言ふは是の事は然らず、所以は何、福德に由るが故に所欲に隨ふことを得むも、是の所欲の事は殺生に緣りて得るものなればなり。然る所以は先世に造りし不淨の福なるを以ての故なり。經の中に、劫奪殺害して財を得て、用つて施し、他をして悲泣せしむると及び不淨なる施と、是の如き等の施を名づけて不淨と曰ふと說くが如し。要ず惡緣に由りて而も報を受くることを得ればなり。又此の人の先世には福もあり亦殺生の業緣もあり、是の故に今の身は殺に因りて報を受くるなり。亦衆生の應に財と命とを償ふべきあり、故に殺害に由りて所欲に隨ふことを得るなり。又一切衆生は皆殺生を以て而も富貴を得るには非ず、世間が是の人は薄福にして、多く作すも獲ることなしと言ふが如くなればなり。名聞喜樂も亦是の如

【五〇】これ祭祀の爲に犧牲とする時をいふなり。

せば則ち人民を利するが如し。是等は殺生を以てして而も福を得べきや。或は有る人は劫盜の因緣にて父母を供養し、婬欲の因緣にて好兒息を生み、妄語の因緣にて或は壽命を與へ、惡口等を以て他をして利を得しむ、是れ皆十惡の所攝なり、云何が此を以てして而も福を得んや。

答曰 是の人は福をも得、罪をも得、他を利することを爲すが故に福を得、他を損ずるを以ての故に罪を得。

問曰 是の醫も亦初めには他に苦を與へ、後に樂を得しむるに、何が故に罪と福とを得ずして而も但福のみを得るや。

答曰 是の醫は善心を以て針灸して。惡意あることをなければなり。若し業にして善惡の爲の故に起らば、則ち罪と福とを並び得るなり。

問曰 殺等は皆是れ福を得、所以は何、殺の因緣を以て所欲の事を得ればなり。王の爲に賊を殺せば富貴を得るが如し。福の因緣を以て所欲に隨ふことを得るに、云何が殺生を名づけて福と爲さゞらむや。又人にして能く殺せば則ち名聞を得、名聞は是れ人の樂ふ所、人の樂ふ所は是れ福德の果なり。又殺を以ての故に喜樂を得、喜樂も亦是れ福德の果報なり。又[四五]經書にて說く、若し陣に逆ひて死すれば天上に生ずることを得と。[四六]偈に。

若し人にして陣に戰ひて死せば　天女は諍ひて夫と爲す、

と說くが如し。

又說く、善にして富貴なる人と雖も賊と爲らば、而も逕ちに前んで能く殺せば則ち罪なし、殺さされば則ち罪を得と。又[四七]世法經にて說く、[四八]四品の人あり、婆羅門、刹利、毗舍、首陀羅なり。是の四品の人には各自に法あり、婆羅門には六法あり、刹利には四法、毗舍には三法、首陀羅には一法なり。六法とは一には自ら天祠を作る、二には天祠師と作る、三には自ら[四九]違駄を讀む、

【四五】經書は佛敎以外の印度婆羅門の書なり。
【四六】此偈も佛敎以外の婆羅門等のものなり。聖薄伽梵歌等ならむ。
【四七】世法は婆羅門の傳ふる律法經(dharma-sūtra)なり。法經といはるるを以て、佛敎の法の經と區別せむが爲に、世法經となせるなり。
【四八】四品の人とは印度の四姓をいふ。
【四九】違を宋本元本は圍、明本は韋に作り、馱を明本は陀に作る。大正一切經は馱を馱となすも。縮刷大藏經は馱とす。ヹーダ(Veda)の音譯。

問曰　何れを名づけて好と爲すや。
答曰　他をして樂を得しむれば、是を名づけて好と爲し、亦は名づけて善と爲し、亦は名づけて福と爲す。
問曰　若し他をして樂を得しむるを名づけて福と爲さば、他をして苦を得しむれば應當に罪有るべし。良醫の針灸が他をして苦を生ぜしむるが如きは是れ應に罪を得べきや。
答曰　良醫の針灸は樂を與ふることを爲すが故に罪を得ざるなり。
問曰　若し樂を與ふることを爲して便ち福を得といはば、他の妻を婬し其れをして樂を生ぜしむるが如きも亦應に福を得べきや。
答曰　婬欲をば決定せる不善と名づく、若く人にして他をして不善法を行ぜしむれば、是れ則ち苦を爲す、樂を爲すには非ざるなり。樂は今樂後樂に名づく、現在の小樂の、此の因緣を以て、後に大苦を得るものには非ず。
問曰　有る人は飲食の因緣に他人に樂を生ぜしむるに或飲食は消せずして人をして死に至らしむ、是の施食の人は應に罪を得べきや、福を得るや。
答曰　是の人は好心にて食を施して惡心なきが故に、但福德のみを得て罪を得ざるなり。
問曰　他の妻を婬するも亦復是の如し、但樂を爲すのみなるが故に。亦應に罪を得べきや、福を得るや。
答曰　此の事は先に答へたり、謂く婬欲は是れ決定せる不善にして大苦を生ずるが故なり。又飲食を布施する中には福德の分あり、所以は何、飲食を得るものは必ずしも盡く死するにはあらず、衆生は皆貪染心のものなるが故に而も婬欲を受くるは全く福因に非ず、云何が福を得んや。
問曰　有る人は殺生を以ての故に多人を利益す、人が賊を破れば則ち國に患なく、若し毒獸を殺

問曰　若し利根なる須陀洹と鈍根なる斯陀含との是の二つの福田ならば、何れを勝ると爲すや。

答曰　利根なる者が勝る、鈍根なるものには非ざるなり。

問曰　此の語は然らず、經の中にて說くが如し、百の須陀洹を供養せむよりは一の斯陀含を供養せむには如かずと。又說く、稊[39]稗は禾を害ひ貪欲は心を穢す、是の故に無欲の人に施さば、應に福を得ること多かるべし、斯陀含は能く[40]三毒を薄らぐも、須陀洹は未だし、何が故に勝ると言ふや。

答曰　是の經を不了義と名づく。何を以て之を知るや。卽ち此の經の中にて說く、畜生に施さば百倍の利を得、而して實に[41]鷄鳥等に施さば得る所の果報は外道の[42]五神通の人に施すに勝ると。是の故に此の經は應に其の義を辯ずべし。此の經は多きに從ふが故に說くのみ。利智慧の人を除けば、須陀洹は智力を以ての故に、諸欲を受くと雖も、亦福田と名づく。欲を斷ずるに非ざる凡夫、乃至、能く有頂定を得る者は多聞の智あらば、達分の中に在るも尙勝る、有頂定は不通達分に非ざればなり。又[43]彌勒菩薩は未だ佛を得ずと雖も、阿羅漢の爲に禮敬せらる。又但能く空にして菩提心を發するのみなるものも以つて羅漢の爲めに敬せらる。一沙彌が衣鉢を擔持して阿羅漢を逐うて行くに、是の沙彌にして無上心を發さば、阿羅漢は卽ち衣鉢を取て自ら擔うて其の後に隨うて行くが如し。喩の中に廣く說くが如くなるが故に知る智慧の福田を勝ると爲す。

[44]三業品　第一百

問曰　經の中にて三業を說く、善と不善と無記業となり、何等か是れ善業なるや。

答曰　何れの業を以てするも能く他に好事を與ふるに隨つて、是の業を善と名づく、是の善業は布施持戒慈等の法より生ず、洗浴等には非ず。

【三九】　註に稗に似たる穢草なりとあり。

【四〇】　五下分結中の初三結なり、下の煩惱品第一百三十六品を見よ。

【四一】　註に鷄は黃雀なりとす。音は知刮切なり。

【四二】　佛敎にいふ六通の最後の漏盡通を除きたるを五神通といふ。

【四三】　彌勒菩薩(Maitreya-bodhisattva)慈民と譯す、釋迦牟尼佛の佛位を紹ぐべき補處の菩薩。

【四四】　三本宮本はここより第八卷となす。

く。次の業は能く辟支佛道を得るもの、次の業は聲聞道を得るもの、次の業は有頂の報を得るもの、壽は八萬大劫にして、是れ生死の中の最大なる業報なり。次の業は無所有處を得るもの、壽は六萬劫なり。是の如く次第して、乃至、梵世は壽命は半劫なり。次に欲界の他化自在天にして受天の數は萬六千歲、乃至、四天王は受天の數は五百歲なり。是の如く人中の四天下は各々業に隨つて報を受く。是の如く畜生餓鬼地獄も亦小利業あるなり。

問曰　何等の業が能く阿耨多羅三藐三菩提を得るや。

答曰　[三五]檀等の六波羅蜜にして具足すれば、能く阿耨多羅三藐三菩提を得。此の善業が次第に轉薄(うたた)きに從つて辟支佛の菩提を得、轉薄うして聲聞の菩提を得。若し增上の四無量心を行ずれば有頂に生ずることを得るも、四無量心を行ずること次第に轉薄うして次に下地に生じ、四無量心を行ずること小にして轉薄(うたた)きと及び定戒の因緣に隨ふとの故に色界に生じ、布施と持戒と修善との因緣を以ての故に欲界に生ず。是の施等の業は福田の厚薄に隨ふが故に差別あり、若し諸佛の福田の中に於て行ずれば、是れ則ち最勝なり。次は辟支佛等の福田の中に於て行ずるものにして、次第に轉少(うたた)なし。

問曰　智の福田が勝るとなすや、斷の福田が勝るや。

答曰　若し智にして能く法相に達して、謂く必[三六]竟空ならば、此れ則ち勝ると爲す。所以は何、佛が智を以ての故に弟子の中に於て勝り。斷を以てにはあらざるが如くなるが故なり。雜藏[三七]の中にて說くが如し、若し僧房の地の一[三八]閻浮提の如きを掃はむも、佛塔の猶一掌の如き處を掃はむに如かずと。一切の智慧を有せば、皆斷を爲すが故に、若し諸の菩薩にして久しく生死に處せば、皆善斷をなす。善斷とは、謂く自ら結を斷じ亦衆生のをも斷ずるなり。是の諸の結は皆智を以て漸に斷ず。故に知る智慧の福田は斷よりも勝ると爲す。

【三五】檀等の六波羅蜜、檀はダーナ(dāna)の音譯にて、ダーナは布施、六波羅蜜の第一なり。六波羅蜜とは、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧をいふ。元來古くは支那はダーン(dān)の音にて傳はしが爲に檀と音譯せるなり。ダーナなりしにはあらずして、最後の母音が脫し居たりしなり。

【三六】麗本は必、三本宮本は畢に作る。

【三七】雜藏は一心品第六十九にも引用さる。惡聲品第一百八十二參照。

【三八】閻浮提(Jambudvīpa)新譯の贍部洲に同じ、須彌山の南方に當れる大洲の名、即ち吾人の住める世界のこと。

又此の人、非法を是れ法なりと說く時に多くの衆生の諸の善法を行ずるを障ふるが故に重罪と名づくるなり。

問曰　但僧を破するの罪のみが阿鼻地獄の報を得るや、更に餘のものありや。

答曰　餘業も亦あり。若し罪もなく福もなく、父母及び諸の善人を供養するも果報あることなしと言はゞ、是等の邪見も亦此の報を得、又他人をして此の邪見に墮せしむれば、多くの衆生をして諸の惡を造らしむるが故に此の報を受く。又能く是の如きの邪見の經書を作らば、富蘭那等の諸の邪見の師の正見を害するが如くなるが故に、多くの衆生の惡を爲す因緣を開くもの。又賢聖を謗る罪も、亦此の報を得、八萬四千歲一[二七]脊に苦を受くと說くが如し、又法句の中に說くが如し、

　聖人は法を以て壽とし、　此の法を以て敎化するに、
　鈍根は惡見に依りて　是の如きの語に違逆すれば、
　[二八]刺竹が實を結ぶときは、　則ち自ら其の形を害ふが如く、
　是の人は地獄に墮し　首は下にして足は上に在り、と。

惡心を以て惡口し、賢聖を誹謗せば、是の人は十萬の[二九]尼羅浮地獄、三十六及び五の[三〇]阿浮陀地獄に墮す。又殺生等の若しくは事が重く心が重き是の罪も亦阿鼻地獄に墮す。

重と相違するを是を名づけて輕と爲す。[三一]炙と大炙と等の諸の淺き地獄、畜生、餓鬼及び人天の中に於て不善の報を受く。是を輕罪と名づくるなり。

大小利業品　第九十九

問曰　經の中にて大小の利業ありと說く。何れの者を大利業と爲すや、

答曰　何れの業を以ても能く[三二]阿耨多羅三藐三菩提を[三三]致すに隨つて、是を最[三四]大利報業と名づ

【二七】脊は註に腋下なりとす。三本宮本は刺とす。下も同じ。

【二八】三本宮本は刺とす。下も同じ。

【二九】尼羅浮地獄は、八寒地獄の第二、梵語の Nirarbuda の音譯なり。漢譯して皰裂といふ、嚴寒の爲に皮肉に皰が生じて裂け爛れるをいふ。

【三〇】阿浮陀地獄（Arbuda）は八寒地獄の第一なり、譯して皰といふ、極寒のため身に皰の生ずるをいふ。

【三一】炙、大炙とは、八熱地獄中の第六炎熱地獄(Tapana)と第七大熱地獄（Pratāpana）とを擧げて、前の五地獄を略せしなり。

【三二】阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara-samyak-saṃbodhi)舊譯には無上正遍知、新譯には、無上正等正覺とす。佛の智なり。

【三三】三本宮本は到に作る。此方解し易からむ。

【三四】三本宮本には報なし。問曰の文より見れば、なきを可とせむ。

くも、必ず當に報を受くべきもの、不定業とは都べて盡さしむべきものなり。

問曰　云何が定報業と名づけ、何等か是れ不定報業なりや。

答曰　經の中にて[二二]五逆罪は是れ定報業なりと説く。

問曰　但五逆罪のみ是れ定報業なりや更に餘のものありや。

答曰　餘業の中にも亦定報の分あり、但示すことを得べからざるのみ。或は事が重きを以ての故に定報なるあり、佛及び佛弟子に於て、若しくは供養し若しくは輕毀するが如し。或は心が重きを以ての故に定報なるあり、人の深厚なる纒を以て蟲蟻を殺害せば人を殺すよりも重きが如し。是の如き等の餘業にも亦定報なるあり。

問曰　若し五逆罪にして薄からしむべくむば、何が故に都べて盡くさしむること能はざるや。

答曰　此の罪は法爾として都て盡くさしむべからず、[二三]須陀洹は懈怠に至ると雖も八生に到らざるが如し。又五逆罪は堅重なるを以ての故に都て盡くすべからず、王法の中にては重罪あるものは輕からしむることを得べきも、全く[二四]捨つべからざるが如し。

輕重罪品　第九十八

問曰　經の中にて輕重の罪業ありと説く。何れを輕重と謂ふや。

答曰　若し業にして能く[二五]阿鼻地獄の報を得ば、是を重罪と名づく。

問曰　何等の業が能く此の報を得るや。

答曰　若し業にして[二六]僧を破らば、必ず此の報を受く、所以は何、三寶を別離し、僧寶をして佛寶を離れしめ、亦法寶をも礙ゆればなり。又上の邪見を生ずるが故に能く是の業を起し、亦深く佛を嫉恚するが故に此の業を起し、亦久しく惡を集め性深く利養を貪るが故に、故に此の業を起す。

【二二】五逆罪とは、殺父、殺母、殺阿羅漢、佛身出血、破和合僧をいふ。

【二三】須陀洹の人は欲界にありて人と天との間を七度往來生死するを限度とし八度に及ぶことなし、即ち極七返なり。

【二四】三本のみは赦とす。此方解し易からむ。

【二五】地獄の最下、八熱地獄の最下にある地獄にて、無間地獄のこと。

【二六】僧は元來僧伽(Saṅgha)の略、僧伽は和合衆ともいひ、統制ある組織體たる社會的團體なり。之を破るを破和合僧といひ、五逆罪又は五無間業の一なり。

作さず集めずとは、亦は作さず亦は喜をも生ぜざるものなり。是の中に於て、亦は作し亦は集するものは是は必ず報を受く、經の中にて、若し業にして亦は作し亦は集めば、是の業必ず果報を受くと說くが如し。是の故に、作し集むる業は、若しくは現に報を受け、若しくは生じて報を受け、若しくは後に報を受く。

問曰 若し故作して集むる業にして必ず報を受くれば則ち解脫することなし。

答曰 業は故作なりと雖も、眞智を得るが故に復更に集めざるあり、譬へば焦げたる種は復生ずること能はざるが如し。

問曰 佛は[一九]鹽兩經の中にて說く、有る人は地獄報の業を造るも現世に輕く受くと。

答曰 若し重惡の業にして能く現に輕く受くれば、何が故に都べて盡くさしむること能はざるや。若し人にして具(つぶさ)に眞智を修すること能はざるときは、則ち惡業は便を得るが故に、現在世に少しく界報を受くるなり。

問曰 阿羅漢は具に眞智を修すと雖も、亦惡報を受く。

答曰 深く善法を修すれば則ち不善を障ふ、是の故に、若し人にして百千世に於て戒等の善業を集むれば、則ち不善の業は起るを得ること能はず、猶諸佛一切智人の如し、餘人は是の如くなること能はざるが故に不善業の爲めに便を得らる。故に阿羅漢は具に眞智を修すと雖も、宿業を以ての故に亦惡報を受くるなり。

問曰 經の中にて亦佛は[二〇]謗等の不善業の報を受くと說く。

答曰 佛は一切智人にして、惡業の報なし一切の不善法の根本を斷ぜしを以ての故なり。但無量の神通方便を以てのみ、現に佛事を爲すこと不可思議なり。[二一]增一阿含の中にて五事の不可思議ありと說くが如し。業には二種あり、定報と不定報となり。定報業とは、若しくは多くも若しくは少

【一九】鹽兩經を明本宮本のみは監兩經に作る。下の三業報品第一百四にも此經の引用あり。

【二〇】佛身を業報身とし有漏と見れば不善業の報ありとなすこと有部の說の如し。

【二一】增一阿含は三不護品第五にも引用せらる。行苦品第七十九、一切緣品第一百九十一善覺品第一百八十三參照。增一阿含第廿一には世界と衆生と龍と佛土境界との四不可思議を說く。五となす場合は衆生多少と業果報と坐禪人の力と諸龍の力と諸佛の力とをいふ。成實論の見たる增一阿含は系統を異にせる派の傳承せるものなるべし。

り。

問曰　幾（いくばく）の時に作より無作を生ずるや。

答曰　第二心より生じ、善惡心の强きに隨つて則ち能く久しく住す。若し心にして弱きときは則ち久しく住せず、一日戒を受くれば、則ち住すること一日なるが如く、盡形[一八]戒を受くれば、則ち盡形まで住するが如し。

故不故品　第九十七

問曰　經の中にて故作業と不故作業とを說く。云何が故不故と名づくるや。

答曰　先に知つて而も作さば、名づけて故作と爲す、此と相違するを不故作と名づく。

問曰　若し不故作ならば名づけて業と爲さず。

答曰　是の業有り。但心のみにて故作する業なるときは則ち報あり。又心を決定して作す業を故と名づけ、心を決定せずして作さば不故と名づく、卒語するを不故と名づけ、不卒語ならば是を故と名づくるが如し。經の中にて、汝は過失あり、我は當に數ふべし、若し卒語するときは我は則ち數へず、乃至三たび問ふと說くが如し。若し先に作す心なくして而も作さば、人の行く時に踐蹈して蟲を殺すが如く、是を不故と名づく。是の不故の業は集まらざるを以ての故に報を生ずること能はず、業に四種あり。作して集めざるあり、集めて作さざるあり、亦は作し亦は集むるあり、作さず集めざるあり。作して集めずとは、殺等の業を作すも後に則ち心にて悔い、施等の業を作すも後に亦心にて悔ゆるが如し。又業を起作するも心が復憶せずんば是を作して集むに非ずと名づく。集めて作さずとは、若し他が殺等を作さば、則ち心に喜を生じ、他が施等を作さば亦心に喜を生ずるものなり。亦は作し亦は集むとは、若し殺等の罪、施等の福を作すも、亦心に喜を生ずるものなり。

【一八】麗本に戒なきも、三本宮本のあるに從ふ。下の八戒齋品第一百十三參照。

べけんや。又作が卽ち是れ殺生なるには非ず、作が次第して殺生の法が生じ、然して後に殺罪を得るなり、人に殺を教ふるに殺す時に隨つて敎ふる者も殺罪を得るが如し。故に知る無作あり。又意には[一六]戒律儀なし、所以は何、若し人不善に在るも、無記心若しくは無心ならば、亦持戒とも名づくればなり。故に知る爾の時には無作の不善あるなり。律儀も亦是の如し。

問曰 已に無作の法ありて心には非ざることを知りたり。今、是を色と爲すや、是を心不相應行と爲すや。

答曰 是れ[一七]行陰の所攝なり、所以は何、作起の相を行と名づくるに、無作は是れ作起の相には非ざればなり。

問曰 經の中には六思衆を行陰と名づくと說いて心不相應行とは說かず。

答曰 是の事は先に以て明にせり、謂く心不相應の罪福ありと。

問曰 若し無作にして是れ色の相ならば何の咎ありや。

答曰 色聲香味觸の五法は罪福の性に非ざるが故に、色性を以て無作とは爲さざるなり。又佛の說く、色は是れ惱壞の相なりと。是の無作の中には惱壞の相は不可得なるが故に色性には非ざるなり。

問曰 無作は是れ身口業の性にして、身口の業は卽ち是れ色なり。

答曰 是の無作を但名づけて身口業と爲すのみ、實には身口の所作には非ざるなり。身口意の業に因つて生ずるを以ての故に身口意業の性なりと說くのみ。又或は但意のみより無作を生ぜば、是の無作は云何ぞ色性と名づけんや、又無色の中にも亦無作あれば、無色の中に云何が當に色あるべけんや。

問曰 何等の作が能く無作を生ずるや。

答曰 善不善の作業より能く無作を生ずるのみにして、無記には非ず、力が劣なるを以ての故な

【一六】下の七善律儀品第一百十二を參照すべし。

【一七】有部が無表を色となすと異りて、論主は心不相應行となすなり。無作を不相應法となすことは十住毘婆沙論第十にも存す。

のあることなければなり。又經の中にて二種の業を說く、若しくは思若しくは思已なり。思は卽ち是れ意業にして、思已は二種なり、思に從つて業を集むと及び身口の業となり。是の意業の最も重きことは後に當に說くべし。重業の集めらるゝに從つて[五]無作と名づく、常に相續して生ず。故に知る意業にも亦無作あるなり。

無作品　第九十六

問曰　何れの法を無作と名づくるや。

答曰　心に因つて罪福睡眠等を生ずれば、是の時に常に生ずるを是を無作と名づく、經の中に說くが如し、若し樹を園林に種ゑ井橋梁等を造らば、是の人の爲す所の福は晝夜に常に增長すと。

問曰　有る人は言ふ、作業は現に見るべければ、若し布施禮拜殺害等ならば是れ應に有なるべきも、無作の業は見るべからざるが故に無しと。應に此の義を明すべし。

答曰　若し無作なくんば則ち殺等を離るの法なかるべし。

問曰　離は不作に名づくれば、不作は卽ち無法なり、人の語らざる時には、語らざるの法の生ずること無きが如く、色を見ざる時にも亦見ざるの法なきが如し。

答曰　殺等を離るゝに因りて天上に生ずることを得るなり。若し無法ならば云何ぞ因と爲らんや。

問曰　離るゝを以ての故に天に生ずるにはあらずして、善心を以ての故なり。

答曰　然らず、經の中にて、精進の人は隨つて壽にして福を得ること多し、故に久しく天の樂を受くるなりと說けばなり。若し善心のみならば、云何ぞ能く多くの福あらんや、是の人は常に善心あること能はざるが故なり。又說く、樹等を種ゆるの福德は晝夜に常に增長すと。又說く、持戒堅固なりと。若し無作なくんば、云何が當に福の常に增長すること及び堅く戒を持することゝを說く

【五】無作は新譯の無表なり。意業にも無作を認むること有部と異る。次品はこの無作について論述す。

ば、是を身業と名づく。

問曰　若し爾らば、身が則ち身業なり。餘處にて生ずるを以ての故に、身の所作を名づけて身業と爲るには非ざるなり。

答曰　身は是れ業を作すの具にして、身が餘處に於て生ずる時に、罪福を集むるを名づけて業と爲す。是の故に身が業なるには非ざるなり。

問曰　罪福を集むるは是れ無作なり。身作とは云何。

答曰　身が餘處にて生ずる時に、造作する所あるを名づけて身作と爲すなり。

問曰　是の身が或は善或は不善を作すとも、而も身は然らず、是の故に身の所作には非ざるなり。

答曰　心力に隨ふが故に身が餘處に生ずる時に能く業を集むるなり、是の故に[一四]集むるを善不善と名づく、直に是れ身なるには非ず。口業も亦爾なり、直に音聲語言なるに非ずして、心力が音聲語言に隨ふを以て集むる所の善惡を是と口業と名づくるなり。意業も亦是の如し、若し心が我は是の衆生を殺さんと決定せば、爾の時に罪福を集むることも亦是の如し。

問曰　身口より別に業あるが如く、意と意業とは卽と爲すや、異と爲すや。

答曰　二種なり、或は意が卽ち意業なると、或は意より業を生ずとなり。若し意が衆生を殺さんと決定せば、是れ不善意にして亦是れ意業なり、是の業は能く罪を集むること身口業に勝る。若し未だ心を決定せずむば、是の意は則ち業と異るなり。

問曰　已に作相を知りたり。作に從つて異を生じ業を集むれば、何者を相と爲すや。

答曰　是れ卽ち無作と名づく。

問曰　但身口にのみ無作あつて、意には無作なきや。

答曰　然らず、所以は何、是の中には因緣の但身口業にのみ無作あつて、而も意には無作なきも

【一四】麗本の集名善不善を三本宮本は集若善不善となす。

問曰　凡夫法は是れ心不相應行なりと、是の事は云何。

答曰　凡夫法は凡夫に異ならず、若し別に凡夫法あらば、亦應に受よりも別に瓶法等あるべければなり。又[八]數と量と一と異と合と離と好と醜と等の法も皆應に別に有なるべし。外の[九]經書の中にて、瓶は異瓶法は異なり、瓶法に因りて是の瓶の色は異、色法は異なるを知ると說くは是の事は然らず、所以は何、法は自體に名づくればなり。若し汝にして凡夫法は異ると謂はゞ、則ち色は自ら無體にして、應に色法に待するが故に有なるべきも、是の事は然らず、是の故に、汝は深く思はざるが故に別に凡夫法ありと說くなり。有る諸論師は外典を習ふが故に阿毘曇を造りて、別に凡夫法あり等と說くも、亦有る餘の論師は別に[一〇]如、法性、眞際、因緣等の諸の無爲法ありと說く。故に應に深く此の理を思ふべし。文字にのみ隨ふこと勿れ。[一一]（苦諦聚竟）

[一二]集諦聚の業論の中の業相品　第九十五

論曰言　已に苦諦を說き竟りたれば、集諦を今當に說くべし。集諦とは諸業及び煩惱なり。是の業に三種あり、身業と口業と意業となり。身業とは身の所作を身業と名づく、是の業は三種にして、奪命等の不善と、起迎禮拜等の善と、斷草等の無記となり。

問曰　若し身の所作を身業と名づくれば、瓶等の物も亦應に是れ身業なるべし、身の所作なるが故なり。

答曰　瓶等は是れ身業の果にして、是れ身業なるには非ず、因と果とは異なるが故なり。

問曰　應に身業あるべからず、所以は何、身の動作する所を名づけて身業と爲さば、有爲法は念々に滅するが故に應に動あるべからざればなり。

答曰　是の事は念々滅[一三]品の中に已に答へたり。所謂法にして餘處に於て生ずる時他を損益せ

【八】勝論派の說く德句義の中のものなること前に註したり。

【九】麗本は瓶となすも、三本宮本の經に作るを取る。勝論派の經又は說を指す。瓶は實、瓶法は同にて互に異り、瓶の色は德、色法は同にて同じくまた互に異るとなすが勝論說なり。瓶法色法は瓶たること色たることにて、これまさしく第四同句義たるものなり。同句義を同異句義となす說あり。

【一〇】如は如如とも眞如ともいふと同じ。法性も眞際も共に如と同じ。眞際は實際ともいふ。如法性實際は羅什譯の中論などにて常に用ひられ、諸法實相と異らざる意味のものなり。之を別有のものとなさざるが論主の說なり。

【一一】後人の添加なるべきこと前にいひたり。

【一二】以下明業因品第一百二十までは集諦聚の中の業論なり。

【一三】念念滅品なる品名はなきも、內容よりいへるものにして、識無住品第七十四を指す。

此と相違するを名づけて不得と爲すも、亦別に不得の法あることなきなり。

無想定とは、此の定法なし、所以は何、凡夫は心心數法を滅すること能はざればなり、後に當に說くべし。是の心心數法は微細にして覺り難きが故に無想と名づくるのみ。

無想處も亦是の如し。

滅盡定とは心が滅して行なきが故に滅盡と名づくのみにして、別の法あることなし、猶泥洹の如し。

命根とは業の因緣を以ての故に五陰の相續するを命と名づく。是の命は業を以て根と爲すが故に命根と說くなり。

生とは、五陰の現在世に在るを生と名づけ、現在世を捨するを滅と名づけ、相續するが故に住にして、是の住が變ずる故に[五]異なり、別に法の生住滅と名づくるものあるには非ず。又佛法の深義は謂く、衆緣が和合して諸法の生あり、是の故に法として能く異法を生ずることなきなり。又說く、眼色等は是れ眼識の因緣なれど、是の中にては生ありとは說かず、是の故に生なきも咎なきなり。又說く、[六]生等の法は一時に生ずと。若し法にして一時に生じ即ち滅せば、是の中にて生等は何の爲す所ぞ。應に是の事を思ふべし。又十二因緣の中にて佛は自ら生の義を說く、諸の衆生が處々に生じて諸陰を受くるを名づけて生と爲すと。是の故に現在世の中にて初めて諸陰を得るを生と名づくるなり。亦說く、五陰の退沒するを死と名づくと。亦說く、諸陰の衰壞するを老と名づくと。別に老死なる法あることなし。

名[七]衆とは字に從つて名を生ずるなり、某の人と言ふが如し。字に隨つて義を成ずるを句と名づけ、諸の字を字と名づく。有る人は言ふ、名句字衆は是れ心不相應行なりと、此の事は然らず、是の法の名は聲を性として法入の所攝なればなり。

【五】麗本は是住變故名爲住異とし、三本宮本は是を省き、名爲住を省く。後半は三本宮本に據る。名づけて住の異と爲す、にても可なれど、住の字は不要なり。

【六】麗本は生法等とし、三本宮本は生等法に作る。生住滅等の法の意なれば、後者を取る。

【七】新譯に名身といふに同じ。身は積集の義なり。故に名の集まりたるをいふ。字は新譯の文なり。文はアイウの如きをいへば、字といふも可なるのみならず、字の方解し易し。文は文章と通ずれば混じ易き缺點あり。句は短文章なり。

卷の第七[一]

不相應行品　第九十四

[二]心不相應行とは、謂く得と不得と無想定と滅盡定と無想處と命根と生と滅と住と異と老と死と名衆と句衆と字衆と凡夫法と等なり。得とは諸法が成就して衆生と爲るが故に得あるなり。衆生が現在世の五陰を成就するを名づけて得と爲す。又過去世の中の善不善の業は未だ果報を受けざるも衆生は是の法を成就す、經の中にて是の人は善法を成就し又不善法を成就すと說くが如し。

問曰　有る人の言く、過去の善不善の身口業は成就すること、出家の人が過去の戒律儀を成就するが如しと。是の事は云何。

答曰　是れ皆成就す、所以は何、經の中に說く、若し人にして罪福を爲さば、卽ち是れ[三]己が所有の二事として常に其の身を追ふこと猶影の形に隨ふが如しと。又經の中に說く、殃福は朽ちず、謂く能く果を得と。若し罪福の業を成就せずむば、應に果を得べからずして、則ち諸業を失ふなり。

問曰　過去の律儀は應に成就すべからず、所以は何、汝は過去の法は滅し、未來は未だあらず、現在は常には善心あること能はずと言へるに、云何ぞ戒律儀を成就せんや。

答曰　是の人には現在の律儀が成就するものにして、過去には非ざるなり、現に染むるを以ての故に染むるが如く、是の如く現に戒に在るを以ての故に名づけて持戒と爲すなり。過去を以てにはあらず。但先に受けて捨てざるを以ての故に過去を成就すと名づくるのみ。

問曰　有る論師は言く、衆生は未來世の中の善不善の心を成就すと、是の事は云何。

答曰　成就せず。所以は何、未だ作さざる業を已に得るが故なり。是の故に未來は成就せず、是を名づけて得と爲すなり。別に心[四]不相應法ありて名づけて得と爲すことなし。

【一】三本宮本はここにては分卷せず。

【二】心不相應行法として十六種を數ふ。

【三】已とも巳ともあり。天和癸亥年の刊行の町版本は巳となすも、オノガと讀ましめ居れば、己と見たる理なり。今は己として見たり。

【四】不相應法は凡て假法となす意なり。有部說と異ることを見るべし。

も亦應に是れ不善根なるべきも、略するを以ての故に三不善根を說くのみ。不善品の中にて當に說くべし。

無記根とは、有る人は四なりと說く、謂く無記なる愛と見と慢と無明となりと。又有る人は三なりと說く、愛と無明と慧となりと。是は佛の所說には非ず。無記心が何れかの因緣より生ずるに隨うて、此の因緣を名づけて無記根と爲す。又身口業は多く無記心より起るが故に無記心を無記根と名づくるなり。

心が行ずる時に能く身心をして安靜ならしめ[九一]麁重を除滅すれば、爾の時を猗と名づく。種々なる心の時を捨と名づく、若し諸受の中ならば、了ならざる心行を捨と名づけ、[九二]諸禪の中にては、苦樂を離れて任放する心行を捨と名づけ、[九三]七覺の中にては、沒せず動ぜずして平等なる心行を捨と名づけ、憂苦を離れて平等心を得たるを捨と名づけ、[九四]四無量の中にては、憎愛の心を離れたるを捨と名づく。是の如く[九五]種種なる法に隨つて相違するが故に、則ち無量の心數の差別あるなり。

【九一】麁重とは煩惱のこと。
【九二】色界第四禪を捨念清淨地といふ。
【九三】七覺支の中の捨覺支なり。
【九四】四無量心の中の捨無量心なり。
【九五】大正藏經は雜種法に作るも、雜は種の誤植なり。

を離れたるときは則ち正見と名づく、是れ三種の知なり。邪覺は是れ顚倒の思惟にして、謂く無常の中の常等なり、正覺は是れ未だ眞智を得ざるも、比相を以て是の行を知るものにして[八七]達分善根の中に在り、是を說いて忍と名づけ、是の如き等の餘の道に順ずる比知を名づけて正覺と爲す。是の中にて、若し憶想分別を離るれば、現在知と名づけ、此の覺の中に於て、此の因緣を以ての故に是の如し、此の因緣の故に是の如くならず、と思惟し籌量すれば、是を名づけて觀と爲す。

問曰 有るは說く、覺觀は一心の中に在りと、是の事は云何。

答曰 然らず。所以は何、汝等が自ら喩を說いて、鈴を打つ初めの聲を覺と爲す、餘の聲を觀と爲すが如しとなせばなり。又波の喩の如く、麁なる者を覺と爲し微なる者を觀と爲せば、是の時は方に異るが故に應に一心なるべからず。又[八八]五識は無分別なるが故に覺觀あることなし。

餘の心數品　第九十三

若しくは善を行ぜず、或は邪に善を行ずるを名づけて放逸と爲す、別の一法の名づけて放逸と爲すものなし、爾の時の心行を名づけて放逸と爲すなり。此と相違するを不放逸と名づく、若し善の心行を不放逸と名づくれば、又別の法なし。又心が不善に隨ふを名づけて放逸と爲し、善法に隨順するを不放逸と名づくるなり。

善根とは不貪・不恚[八九]・不癡なり。思量を以て首と爲して、能く貪著することなきを名づけて不貪と爲し、慈悲を以て首となして、忿怒を生ぜざるを是を不瞋と名づけ、正見を以て首となして、謬らず錯らざるを是を不癡と名づく、一の別法の名づけて不貪と爲すものなし。有る人は言ふ、無貪を不貪と名づくと、是の事は然らず、所以は何、無貪は無法に名づく、無法にして云何ぞ法の與に因と爲らんや。無瞋無癡も亦是の如し。又[九〇]三不善根と相違するが故に但三のみを說くなり。憍慢等

【八六】　三本宮本は名爲覺觀に作る。初禪は覺觀其ものにはあらずして之を有する位なり。前文の經文より見るも亦麗本可なり。

【八七】　達分善根四法品第十六に退分住分增分達分の四種の善根のことをいひ居たる中のものにて無漏の善根なり。

【八八】　眼耳鼻舌身の五識は分別することなきなり。

【八九】　不恚は不瞋と同じ。

【九〇】　三不善根とは貪、瞋、癡の三毒といふ。

問曰 云何が[八〇]異識の更へし所を異識が能く憶するや。

答曰 憶の法として是の如きなり。自ら相續し生滅する法の中に於て卽ち異識を生じ、還つて自ら能く緣ずるなり。又知識も法として爾り、異識の更へし所を異識が能く知る、眼識が色を識りしを意識が能く知るが如し。又[八一]他人の更へし所を他人が能く知る、諸の聖人は乃至[八二]宿命の餘身の更へし所を、憶の力の故に知るが如し。

問曰 若し先に更へし所を知るを名づけて憶と爲さば、今の識等の法は皆應に憶と名づくべし、所以は何、是の法も亦先に更へし所を行ずるが故なり。

答曰 識等の法も亦是れ憶なりと說く、佛が[八三]薩遮尼延子に語て、汝にして本事を憶せば當に答ふべしと言へるが如し。又說く、若し先の戲樂を憶せば、則ち煩惱が發すと。故に識等の法も本事を憶するが故に亦名づけて憶と爲すなり。是の憶は相を取るより生じ、法に隨つて相を取れば是れ則ち憶が生ずるなり。異らば則ち定慧を生ぜず。定慧品の中にて當に說くべし。

覺觀品[八四] 第九十二

若し心にして散行して數々起生せば、是を名づけて覺と爲す。又[八五]散心の中にも亦麁と細とあり、麁なるを名づけて覺と爲す、深く攝せざるを以ての故に麁心と名づくるあり、經の中にて說くが如し、佛の言く、我は有覺觀の行を行ずと。是の故に、初禪は未だ深く攝せざるが故に[八六]有覺觀と名づく。散心が小微なるときは則ち名づけて觀と爲す。是の二法は遍く三界に在り、是れ心の麁と細との相なるを以ての故なり。又散亂心を名づけて覺觀と爲す、此の相を以ての故に一切處に應ず。又未だ現知せざる事は比智を以て知るものにして、應に爾るべきと爾らざるとを思量すれば是を名づけて覺と爲す。是の故に、未だ現知せざる事を思量するが故に正覺と邪覺との名あり。分別思量

【八〇】一識の知れる所を他識が能く憶するやの意。

【八一】甲の經驗を乙が知るの意。

【八二】宿命は前世の生存をいふ。自分の前世の生存時の身の經驗せし所を現在の身にて知るなり。乃至は前世が多きが故にいふ。

【八三】薩遮（Saḥyaka, Saccaka）尼延子は毘舍離に住せし高名なる外道にして後、佛陀を訪れ、論議して佛によりて教誡を受けて喜ぶ。尼延子は尼乾子とも用ふるが、元來は尼延陀の陀を去りて、子を加へたるなり。尼延陀はニガンタ（Nigantha）にて一宗教の名なりしが、後にはヂャイナとなれるものなれば、實際としては尼延陀はヂャイナと同じきなり。子は此際は其教を奉ずる人を指す意なり。尼延子に其まま相當する梵語の存する理なし。

【八四】覺と觀とは新譯の尋（tarka）と伺（vicāra）との異譯にして、觀察思惟作用の麁なるものを覺となし細なるものを觀とす。

【八五】散心を三本宮本は攝心に作る。然らば、心を攝する中にも、となる。次の觀の說明より見るに、散心の方可なるが如し。

答曰　不信法には非ず、信は是れ淨相にして、是の不善の信も亦是れ淨相なればなり。若し爾らずんば則ち不善の受は應に受とは名づくべからざるに、而も實には然らず。故に三種の差別あるなり。若し信にして根數に在らば、解脫に隨順し、三十七品に在らば、則ち定んで是れ善なり。

勤品　第九十

心行の勤發、是を名づけて勤と爲す、常に餘の法に依りて若しくは念若しくは定が中に於て發動し一心に常行せば是を名づけて勤と爲す。勤に三種あり、善と不善と無記となり。若し四正勤の中に在らば是を名づけて善と爲し、餘のものは善とは名づけず。行者にして若し不善の過患、善法の利益を信ぜば、然る後に勤を生ず、不善を斷じ、善法を集せんが爲めの故なり。故に信根に次いで精進根を說くなり。是の勤の善法の中に入るを名づけて精進と曰ふ、能く一切の利益の本と爲る。此の精進を以て憶等の法を助けて能く大果を得ること、火の風を得て焚燒する所多きが如し。

憶品　第九十一

先に更し所を知るを是を名づけて憶[七八]と爲す。經の中に久遠に更し所を能く憶して忘れずと說くが如し、是を名づけて憶と爲す。

問曰　此の憶は三世の中に在り、所以は何。經の中に說く、憶は一切に皆宜しと。又此の憶は四[七九]憶處あり、是の四憶處も亦三世緣なり。何が故に但過去のみを緣ずと說くや。

答曰　此に皆宜しと言ふは三世と爲すには非ず。若し心にして掉沒せば則ち憶は二處に隨ふ、是を遍行と名づく。汝が四憶處も三世緣なりと言ふは、是の中の慧は能く現在緣にして、是れ憶なるには非ず、是の故に如來は先に憶の名を說き、解すれば則ち慧と說くなり。

【七八】　憶はスムリティ(smṛti)の譯とならん。

【七九】　四憶處、四憶念處ともいふ。身、受、心、法の四念處をいふ。四念處の念處は smṛtyupasthāna (satipaṭṭhāna)にしての念(smṛti, sati)は記憶、想起の意を有すれば、念にても憶にても憶念にても可なり。されど念處の譯が通常にて本論の他部にてかく譯され居れば、ここにのみ憶處となすは譯語の不統一なるを示すものといふべし。

心を[七二]集するを知るを性智力と名づけ、智が性に隨つて喜を生ずと知るを欲智力と名づく。故に衆生は性に隨つて相從し、長く惡心を集するときは則ち惡を好喜し、久しく善心を集するときは則ち善を喜樂すと說くなり。若し寒き者ならば熱を喜ぶも、是れ現在の因緣にして性に從つて生ずるにはあらず。是を性と喜との差別と爲す。

信品　第八十九

[七三]必定は是れ信の相なり。

問曰　必定は是れ慧の相なり、必定は斷疑に名づけ、是を慧の相と名づくればなり。

答曰　未だ自ら法を見ずして、賢聖の語に隨つて心が淸淨を得るを是を名づけて信と爲すなり。

問曰　若し然らば、自ら法を見已れば、應に信あるべからず。

答曰　然り。阿羅漢を不信者と名づく。法句の中に、不信者、不知恩者を名づけて上人と爲すと說くが如し。又經の中にて說く、世尊よ、我は是の事に於て佛の語に隨うて信ずと。若し自ら法を見て、心が淸淨を得ば、是を名づけて信と爲すなり。先に法を聞き後に身を以て證し、是の如きの念を作さく、此の法は眞實なり、諦にして虛誑ならずと、心が淸淨を得ば、是を名づけて信と爲す、[七四]四信の中に在り。譬へば病人が先に[七五]師の語を信じて藥を服し病を差し、然る後に、師に於て淸淨心を生ずるが如き、是を名づけて信と爲す。是の信に二種あり、一には癡より生じ、一には智より生ず。癡より生ずるは善惡を思はさるものにして、[七六]富蘭那等の惡師の所に於て生ぜる淨心なり。智より生ずるは四信の中のものの如く、佛等に於て生ぜる淨心なり。是の信は三種なり、善と不善と無記となり。

問曰　是の不善の信は卽ち是れ煩惱なり、[七七]大地の中の不信法にして是れ信には非ざるなり。

【七二】集は前文の如く修集にて、修集は修習と同意味。集は習と異らざる意味なり。

【七三】信(Prasāda)は澄淨の意なり。下に心が淸淨を得るを信となすとあるもの是なり。故に澄淨を必定と譯せしなるべし。

【七四】前に註したり。法聚品第十八參照。

【七五】醫師のことならむ。

【七六】輕重罪品第九十八、六業品第一百一十、邪見品第一百三十二、雜煩惱品第一百三十六にも此人名出づ。富蘭那は富蘭那迦葉(Pūraṇa-kāśyapa)と云はる、佛陀と同時代の六師の一人として知らる。富蘭那が個人名で迦葉は其出身の族姓である、此人の說は、如何なる惡事をなすも惡報なく、如何なる善事をなすも善報なしと爲すもので全く極端なる無道德說である。邪命派の一異派ならむ。

【七七】大地法なり。かかる煩惱分類の名稱は時々出づるも、何れの煩惱を何れに分類するかは少しも說かれ居らず。これかかる煩惱分類が他にてなされ居るを豫想し居るなり。此論としては何等發揮する所なきなり。

欲品　第八十七

心の須むる所あるを是を名づけて[六七]欲と爲す、所以は何、經にて欲欲と言へばなり。諸欲を須むるを以ての故に欲欲と名づくるなり。又經の中にて說く、欲を法の本と爲すと。欲求するを以ての故に一切の法を得、故に法の本と名づくるなり。又說く、若し諸の比丘にして深く我法を欲せば、法は則ち久しく住すと。若し一心に須むる所ならば名づけて深く欲すと爲す。又[六八]如意足の中にて、欲三昧、精進三昧、心三昧、思惟三昧と言ふは、心の須つ所に隨ふを欲と名づくるなり。是れ法を欲し、精進を以て助け、定と慧とを修集し、此の四事に從つて須つ所を皆得れば、如意分と名づくるなり。又說く汝は飛び去ることを[六九]欲すと。一比丘あり、常に好んで讀誦せしも、是の人は禪を修して阿羅漢を得たれば復讀誦せざりき。[七〇]天有り問ふて言く、汝は常に好んで誦せしに、今、何が故に誦せざるやと、比丘の言く、我、本、未だ欲を離れざりしが故に經書を須欲したるも、今は三界を離れたれば復須めず、所有の經書と禪定と智慧とを聖人は皆是れ捨つべきの法なりと說けばなりと。故に知る須むるを以て欲と爲し、所須に因るが故に諸欲を貪るなり。是を貪欲と名づく。

喜品　第八十八

若し心にして好樂せば是を名づけて[七一]喜と爲す、衆生の性と類とは相從するものにして、惡を喜べば惡に隨ひ、善を好めば善に從ふと說くが如し。是を名づけて喜と爲すなり。

問曰　性をば喜と名づけず、所以は何、佛が衆生の種々なる諸性を知るは是れ性智力にして、種々なる喜を知るは是れ欲智力なればなり。故に知る性と喜とは各異る。

答曰　久しく心を修集するときは則ち名づけて性と爲し、性に隨ひて喜を生ず、是の故に久しく

【六七】この欲はチャンダ(chanda)の譯ならむ。

【六八】次の四を四如意足といふ。心と思惟とは定と慧に外ならざること下文にて知らるべし。

【六九】意味明確ならざれど、恐らく欲すは須むと同意のものとして擧げたるものならむ。

【七〇】天は天界のものをいふ。通常いふ神なり。天の字は天界の意と天神の意との二意に用ひらる。場合に應じて解すべきなり。

【七一】喜はプリーティ(prīti)の譯ならむ。次の性類相從とあるをかく讀みたり。次の例より見て、性は喜惡を指し、類は隨惡を指し、同じく好善は性、從善は類なりと解せらる。かく解すれば次の問曰の文及び答曰の文の意味は明となる。

細軟を以ての故に生ず、毛が目に入れば則ち苦心を生じ、餘處ならば然らざるが如し。或は苦が滅するを以ての故に生ず、目の患を除けば則ち食に味を得るが如し。或は障を滅するを以ての故に生ず、欲等を除けば則ち其の過を知るが如し。或は漸次の故に生ず、下に因りて中を生じ中に因りて上を生ずるが如し。或は[六四]偏する所に隨ふが故に生ず。

問曰　若し一切の知識にして皆[六五]次第相屬せば、何が故に能く異の心念を生ずることなしと説くや。

答曰　外道の爲の故なり、[六六]外道等は神と意と合するが故に知識生ずと説く、此の語を破せんが爲に諸の知識は次第緣に屬すと示すが故に是くの如く言ふなり。若し能く異の心念を生ずることなくむば、知識生ぜず、所以は何。次第緣を以ての故に、則ち知識には因ありて一一にして而も生ずればなり。又偏する處に隨うて一一にして識が生ず、譬へば樹を伐るに傾くに隨つて而して倒るが如し。又先に諸識は一時には生ぜずと説きたり。是の因緣を以ての故に知る諸識は一一に次第して生ずるなり。又諸識は法として應に次第して生じて神と意との和合を待たざるべし、外物の芽莖枝葉華實が次第して生ずるが如く、內法も亦是の如く、一一の知識が次第して生ずるなり。是の念は二種なり、一には正、一には邪なり。正とは謂く理に順ずるなり、正問正難と説くが如し、是を答ふべき理ある難問と名づく。又諸法實相無常性等を問ふは、是を名づけて正と爲し、所に隨うて能成するが故に名づけて正と爲す。故に知る道念眞實念等に隨順するを名づけて正念と爲すなり。又人に隨ふ時に念を名づけて正念と爲す、多欲の人は不淨觀を正念と爲し、心沒する時には相を發するを正念と爲るが如し。此と相違するを名づけて邪念と爲す。正念は能く一切の功德を生ずるも、邪念は能く一切の煩惱を起す。

【六四】　三本宮本は偏に作る。何れが可なるか明確ならざるも、恐らく偏の方可なるべし。一方にかたよるの意なればなり。下の文の實例を見れば、

【六五】　次の答より見て、これ次第緣を指すなり。次第緣は現在の知識が次の刹那に過去となりたる時、直に次刹那のものを現在前たらしめて、其間に隔なきが故にいふ。次第緣の等無間緣ともいはるはこれが爲なり。

【六六】　本論にて今まで外道の説として擧げたるは數論派勝論派正理派の説にして、特に勝論派の説が多かりき。ここにても勝論派の説なるべし。而して同時に正理派の説ともなり居るものなり。此説にては知識は我意根境の四和合、我意境の三和合、我意の二和合にて起る三種の場合ありて、何れの場合にても我意を缺くことなければ、かくいへるなり。數論派の説にては單に我意が合して起るとのみはいへざる點あり。

し法にして來つて身に在らば、皆名づけて觸と爲し、又能く受等の心數の與に因と作るに隨つて、爾時に名を與へて觸と爲すなり。

念品　第八十六

心の作發を[六〇]念と名づく、此の念は是れ作發の相なるが故に念々に能く更に異心を生ずればなり。又說く念の相は能く事を成辦することなり。[六一]經の中にて、若し眼内入にして壞せずむば色外入は現前に在るも、是の中にて、若し能く異の心念を生ずることなくむば、則ち眼識は生ぜずと說くが如くなればなり。

問曰　諸の識の知は皆念の力を以て生ずるや不や。

答曰　不なり、所以は何、諸の識の知は生ずることは必ずしも定まらざればなり。或は作發する力を以て生ず、強いて欲等を除くが如し。或は根の力を以ての故に生ず、明目の者が能く毫端を察するが如し。或は緣の力を以ての故に生ず、遠く燈を見るも其の動くを見ざるが如し。或は善習を[六二]以ての故に生ず、工巧等の如し。或は諦に相を取るを以ての故に生ず、著する所の色の如し。或は法として自ら應に生ずべし、劫の盡く時の禪の如し。或は時節を以ての故に生ず。短命なる衆生の惡心の如し。或は生處を以ての故に生ず、牛羊等の心の如し。或は身の力に隨ふが故に生ず、男女等の心の如し。或は年に隨ふが故に生ず、小兒等の心の如し。或は疲倦を以ての故に生じ、或は業の力を以ての故に生ず、諸欲を受くるが如し。或は定の力を以ての故に生ず、心を一處に繫ぐれば知識の增長するが如し。或は[六三]畢定を以ての故に生ず、無礙道に次いで必ず解脫を生ずるが如し。或は久しく厭ふを以ての故に生ず、辛苦を厭へば則ち甜味を思ふが如し。或は樂ふ所に隨ふが故に生ず、色等に對して或は色を觀ることを樂ひ、聲を聽くを喜ばざるが如し、青等にも亦爾り。或は

【六〇】念は作意(manaskāra)の異譯か。

【六一】原文は若眼內入不壞、色外入在現前、是中若無能生異心念者則眼識不生なり。前の識不俱生品第七十六に、若眼入不壞、色入在知境、若無能生識念、眼識不生と比較すれば共同一文なるを見るべく、從つて彼此相俟つて理解し易かるべし。譯語は不統一なりといふべし。

【六二】麗本は以を缺くも、三本宮本によりて取りたり。

【六三】三本宮本は必定に作る。現今の語にていへば、必然的の意なり。

識が生じ、然る後に受等の法が生ずるなり。六六經の中にても亦爾の時を觸と名づくと說くなり、是れ道理あるなり。又我等は此の二種の觸を受けず、常に三事が和合するを觸と名づくと言へばなり。設ひ復是の二種の觸あるも經の法相に違するが故に亦應に棄捨すべし。是の故に經を引くも非因なり。又若し是の觸にして異ること水火の如くならば、作も亦應に異るべきに、而も實には別に異作あるを見ず。故に知る此の觸は三事に異ならざるなり。又若し觸にして是れ心數ならば、則ち餘の心數と異ならん、所以は何、觸は是れ諸の心數が緣じて而して觸するものにして、觸が緣じて以て異を生ずるには非ざればなり。故に心數法には非ざるなりと。觸は受が愛に緣たり、愛が受に緣たるに非ざるが如し。

問曰 觸が勝れたるを以ての故に觸が緣じ、心數は觸の緣たるに非ざるなりと。

答曰 觸には何れの勝れたる相あり、而も餘の心數には無きや、應に其の相を說くべきに、而も實には說くべからず、是の故に非因なり。受は是れ初時にして愛は是れ後時なり、故に受は愛に緣たり愛が受に緣たるには非ず。又若し觸にして是れ別の心數法ならば、應に其の相を說くべきに、而も實には說くべからず。當に知るべし異ならざるなり。又、佛は異法の中に於ても亦觸の名を說くこと、若し苦惱あらば來つて人の身に觸ると說くが如し。又樂觸を受くるも放逸ならず、苦觸を受くるも瞋らずと說くは、此の受の中に於て觸の名字を說くなり。又佛が[五九]箭毛鬼に語つて、汝が觸は麁澁にして身に近づくべからずと言ひ、世間は火觸は是れ樂なりと說くが如き、亦觸を食と爲すと說き、亦手の觸と言ふ、此等は皆身識の所知の事の中に於て觸の名字を說けるなり。又餘處にて盲は色を觸せずと說くも、亦色等の緣の中に於て觸の名字を說くなり。是の觸の語は不定なるが故に別に此の心數法あるに非ざるなり。若し觸は是れ心數なりと說かば、則ち觸の相と相違す、所以は何、佛は三事が和合するが故に觸と名づくと說きたり、故に知る實に別の心數法なきなり。若

[五九] 箭毛鬼、(Sūciloma)針毛鬼とも鍼毛鬼とも云ふ。九鬼の一。

を思と名づくと說くと雖も、而も思は多く善不善の中に在りて說き、是の思に衆多の分あるなり。若し人にして他の衆生の爲に善を求め惡を求むれば、爾の時を思と名づけ、若し未だ得ざる事を求むれば、爾の時を求と名づけ、若し後身を求むれば、爾の時を願と名づくるなり。故に知る一の思を種々の名を以て說くなり。

觸品[57]　第八十五

識が緣の中に在らば是を名づけて觸と爲す。三事が和合するを以て觸と名づくるは是れ觸の相には非ず、所以は何、根は緣に到らざればなり。是の故に根と緣と應に和合すべからざるも、此の三事は能く緣を取るを以ての故に名づけて和合すと爲すのみ。

問曰　別に心數法の觸と名づくるあるなり、所以は何、十二因緣の中にて觸の因は受に緣たりと說けばなり。又觸は受想行等の因と爲ると說く。若し法にして無ならば云何ぞ因と爲らんや、故に知る此の心數法ありて名づけて觸と爲すなり。又六六經の中にて[58]六觸衆を說き、又經の中にて、應に無明等の觸を觀ずべしと說く。若し假法の諸因を成ずと說かば、應に復別に假法を說くべからず。又經の中には二種の觸ありとす、一には三事が和合する觸と二には三事が和合するが故の觸となり。故に知る觸には二種あり、一には自體あると、二には是れ假名なるとなり。日と珠と牛糞との三事は火と異り、月と珠とは水と異り、地等は芽と異るが如く、是の如く觸が、眼等に異るに何の咎あらんや。又諸の比丘の和合は比丘に異らず、諸陰の和合は諸陰に異らず、二木の和合は二木に異らず、二手の和合は二手に異らず、衆病の和合は衆病に異らざるが如く、觸も亦是の如く眼等に異らざるに、復何の咎あらんや。

答曰　我は先に心が能く緣を取る爾の時を觸と名づくと說きたり。是の故に心の時を因と爲して

【五七】觸は別の心所即ち心數なるに非ずして、假に過ぎざることを論ず。

【五八】六觸衆とは、六根が六境に對してはたらき、六種の觸を起すをいふ。

答曰　汝は無漏の思なしと言ふも、我も亦無漏の思ありとは說かず、所以は何、作起の行相なるが故に名づけて思と爲せばなり。無漏法には作起する相なし、故に思は是れ作起にして滅法には非ざるなり。又汝が思は是れ愛の因と言ふは是れ亦然らず、所以は何、思をば愛の果と爲し、亦是れ愛の分にして愛の因には非ざればなり。果が斷ずるを以ての故に因が斷ずと說く、謂く意志食が斷ずるが故に三愛が斷ずるなり。行等の因緣業は皆是れを以て答ふ、故に知る愛の分が是れ思なるなり。愛に二種あり。因あると果あるとなり。因を愛と名づけ果を求と爲せば、求が卽ち是れ思なり。

問曰　若し因の時に愛と名づけ、果の時に思と名づくれば、則ち思は愛の分に非ず、所以は何、若し法にして因に在る相は異、果に在る相は[五五]異なり、故に知る思は愛の分に非ず。有因有緣經の中にて癡人の求むる所を卽ち名づけて愛と爲すと說くが如き、愛とは所作なれば卽ち名づけて業と爲す、是の故に思は業に[五六]墮するの相なり、故に愛とは異る。若し人にして此の事を貪るが故に是の事を求む、是の故に貪より求を生ずれば、求は卽ち是れ思なり、是の故に貪を思の因と爲すなり。

答曰　我は先に愛の分は是れ思なりと說きたれば、愛の分は卽ち是れ愛なり、但愛の初めて起るをのみ貪と名づけ、貪り已るを求と名づくるなり。又汝は願と言ふも是の事は然らず、所以は何、願は是れ思の分なればなり。先に願ふを業と名づけ、後に業を迴向するなり。

問曰　思は意と一とせんや、異とせんや。

答曰　意は卽ち是れ思なり、法句の中に

　　惡心の作す所、說く所は皆苦果を受く、善心も亦爾り、

と說くが如し。故に知る意は卽ち是れ思なり。若し意にして是れ思なるに非ずんば、何れの者を意業とせんや。意業は意が緣の中に行ずるに名づく、是の故に思は卽ち是れ意なり。總相にては意行

【五五】因に在る相と果に在る相とは互に異る。
【五六】三本宮本は隨に作る。

にして亦是の戯論の作起は愛に依る、我ある處に隨つて則ち動念戯論あり、作起は愛に依れば、若し作起する法ならば說いて愛に依ると名づくと。當に知るべし求は則ち是れ思なり。又[五二]說く、若し小兒にして生まるゝより慈ゞ習はゞ、能く惡業思惡業を起さんや不や、不なり、世尊よ、と。是の義は求欲して惡業を造るに名づく。又業とは若しくは思と思已となりと說く。是の中にて、思は是れ意業なり、思已は是れ身口業なり、思已を名づけて求已と爲す。又和利經の中にて[五三]尼延子が、冷水を斷ちて煖水を受け、死する時冷水を求むるに、竟に得ずして而して死し、意著の天に生ぜりと說く。是れ則ち冷を思するを以ての故に生ぜるなり。故に知る求は即ち是れ思なり。

問曰　汝は、求は是れ思なりと言ふも、此は是れ愛の相にして是れ思なるには非ざるなり。所以は何、有因有緣經の中にて說く、癡人の求むる所は即ち是れ愛なりと。又[五四]大因經の中にて說く、愛に因るが故に求む等と。又經の中にて說く、苦なる者は多く求め、樂なる者は求めずと。又說く、若し人にして五欲を行ぜんと欲せば、欲は即ち是れ求なりと。又愛の因緣にて取あり、先に求めて後に取る、求は即ち是れ愛なりと說く。是の故に汝が求を以て思とするは是の事は然らず。又汝は願は是れ思なりと言ふも是れ亦然らず、所以は何、和利經の中にて、思せずして業を造らば業は則ち重からずと說けばなり。思はせずとは先には知らざるに名づけ、世間も亦知を以て思と爲すること、云何ぞ智者にして能く是の事を爲すや、誰か思ある者にして當に是の事を作すべきと言ふが如し。此の語の義は智者に名づくるなり。故に知る知は即ち是れ思なり。

答曰　願を名づけて集を爲し、欲分の願を思と名づく。人が我は未來世に是の如きの身を得んことを願ふと言ふが如し。

問曰　若し欲分の願にして是れ思ならば、則ち無漏の思はなからむ。又思を愛の因と爲す、經の中にて若し意志食を知見せば即ち知見は三愛を斷ずと說くが如し。故に知る思は是れ愛の因なり。

【五二】此言は無我品第三十四にもあり。滅法心品第一百五十三參照。

【五三】具足品第一及び三業輕重品第一百一十九にも同一文の引用あり。

【五三】尼延子は尼乾子と同じ。實際としてはジャイナ教徒を指す。和利經は三業輕重品第一百一十九にも引用せらる。和利は尼延子の名にてウパーリ(upali)の音譯。

【五四】此經の同文が無相應品第六十五と思品第八十四と貪相品第一百二十二と初禪品第一百六十五とに存す。又想陰品第七十七、一切緣品第一百九十一にも此經あり。

熱なしと言ふべけむや。三禪の衆生は一身一[四四]相なりと說くも、是の中にも亦光明の差別あるが如し。若し禪を行ずる者にして、善く睡眠戲調を除くこと能はずむば、則ち光明は不淨なりと說くが如し。又少智の人をも名づけて無智と爲す、又世人は食中に鹹少きを以て名づけて鹹なしとするが如し。是の如く彼の中にては憂喜は了ならざるが故に名づけて無しと爲すのみ。又汝等は彼の中には覺なしと說くも、佛は經の中にて想の因は覺に緣ると說けば、是の中には想あるに、云何ぞ覺なからん。故に知る覺法あり。乃有頂にも、[四五]麁なる覺の爲の故に、二禪にて滅すと說くのみ。是の故に上二界の中にも亦苦樂等あるなり。[四六]（受陰竟る）

苦諦聚の行陰論の中の思品　第八十四[四七]

經。經の中には、思は是れ行陰なりと說く。

問曰　何等を思となすや。

答曰　[四八]願求を思となす。經の中にて下思・下求・下願と說くが如し。

問曰　何を以ての故に求を名づけて思となすと知るや。

答曰　經の中にて作起の故に名づけて行と爲すと說けば、陰を[四九]愛して作起するを是れを求と名づく。經に作起は皆愛に依ると說くが如くなればなり。又經の中に說く、一束の麥を四衢道の中に置き、六人が來つて打つに、第七の人有りて復更に來つて打つが如き、比丘よ、汝が意に於て云何、是れを熟すとせんや不や。熟し已れり。世尊よ、佛の言く、癡人も亦爾り、常に六觸入の爲に打たれ、是の如く打つ時に、復後身を思ふ、是を熟するに至ると爲すと。當に知るべし求は卽ち是れ思なり。又說く、[五〇]意思食をば應に火聚の如しと觀ずべしと。火は何の喩ふる所ぞ。是の人は後身を求め、後身は火の如きなり、常に諸苦を生ずるが故なり。又經の中にて說く、[五一]我は卽ち是れ動處

【四四】　麗本は想に作る。今三本宮本に從ひて相とす。

【四五】　麁覺よりいへば、第二禪にて既に滅するものなれば第二禪以上には覺なしといふも、細覺よりいへば有頂天までも存するなり。

【四六】　以上にて受陰の說明終りたれば、かくここに附言せるなり。されど他の色陰識陰想陰及び行陰の最後にもかかる附言なければ、省くを可とせむ。後世の研究者が判り易き爲に書加へたるものに過ぎざるべし。

【四七】　三本宮本はここより第七卷となす。

【四八】　思（cetanā）は新譯にては造作にて心をして造作せしむる作用なりとす。詳しくは思願造作といはるることある如く、造作には造作せむとする願求あり。故に願求とも又は次にある如く作起の願求ともなる。

【四九】　麗本は受陰作起し是名求とし、三本宮本は愛陰作起是求となす。受は愛なるべきこと次文より知らる。名の有無は何れにても可なり。

【五〇】　意思食、四食の一、第六意識が其の欲する境に希望をかけ、其の思の力を以て、たとひ其の肉體は飢竭するも身命を長養し支持するをいふ。

色にして敗壞せば則ち憂苦を生じ、乃至、識も亦是の如し。故に知る一切の未だ欲を離れざる人には皆憂喜あり。又愛の緣は喜を生ずれば、此の愛の緣を離るれば必ず憂悲を生ず、凡夫は智なければ、何ぞ能く力として所愛の緣を得るも而も喜を生ぜず、失ふも憂を生せざることあらんや。經の中にて說くが如し、唯道を得たる者のみ將に命終せんとする時にも憂喜の色なしと。故に知る一切の凡夫には憂喜が常に隨ふ。又佛は自ら說く、憂せず喜せずして一心に捨を行ずるは是れ應に羅漢の功德なるべしと。又[40]六捨行は唯聖のみの所行にして、凡夫には非ず、凡夫は或る時には捨を行ずれども、皆未だ緣を知見すること能はざるを以ての故なり。經の中にて凡夫の色の中の所有の捨心は皆色に依止し、色を貪して離れずと說くが如し。故に知る凡夫には捨心なきなり。又經の中にて樂受の中の貪使を說きて、若し彼にして樂受なくんば何れの處をか貪して使はれむやと。汝が意にして或は不苦樂の中の貪使に使はると謂はゞ、經には說ける處なし。又上地の中にては轉(うたた)、寂滅の樂が大にして身心を利す、是の天は一たび坐すること千却なるも、若し苦行する者ならば、諸の威儀に於て久しく住すること能はずと說くが如く、經の中に安坐すること七日にして解脫の樂を受くと說くが如し。又是の中にては猗樂が第一なり。經の中に猗者は樂を受くと說くが如し。故に知る一切の地の中には皆樂あり、汝が意にして或は猗[41]樂は受樂とは異ると謂はゞ是の事は然らず、所有の利益の事が來つて身に在らば則ち名づけて樂と爲す、是の故に猗樂は受樂に異ならざればなり、

問曰　若し上界に定んで苦樂憂喜あらば、云何が[42]禪經と相順ずることを得んや。

答曰　此の經は法相に違害すれば、若し[43]捨つるも何の咎あらんや。又此の中の樂は寂滅を行じ、不善は麁なる貪と麁なる恚とを發起すること能はず、是の故に說いて無苦樂と名づくるのみ。又此の中の苦樂は細微にして了ならず、刀仗等の苦、親を喪ふ等の憂あることなければ、是の故に無と名づくること、色界には寒なく熱なしと說くが如し。是の中にも亦四大あれば、云何ぞ當に寒なく

【四〇】六捨行、六根が六境を緣ずるに常に憂えず、喜ばず平靜なる心狀を保つを云ふ。

【四一】猗樂の樂の字麗本になきも、三本宮本にあるに據りたり。

【四二】一心品第六十九にも禪經あり。

【四三】若捨何咎について、今は捨を以て禪經の說を捨つる意と見て讀みたり。或は捨は五受の中の一と見て、上界に捨ありとなすは咎なしの意と見るべきか。五受と上界との關係については詳しくは初禪品第一百六十五以下を參照すべし。

初禪には實には苦根なし、是の故に應に此の經を信ずべからず。

問曰　色無色界にては深く善法を修すれば應に憂と苦とは無かるべし。

答曰　三界は皆苦なり。上二界の中には麁苦なしと雖も亦微苦はあり。何を以てか之を知る。四禪の中には四威儀ありと說けば、威儀あるに隨つて皆應に苦あるべければなり、又色界には眼と耳と身との識あれば、此の識の中の所有ゆ受を名づけて苦樂と爲し、一威儀より一威儀を求む、故に知る苦あり。又經の中にて問ふ、色の中に何の味ありや。所謂、色に因りて樂を生じ喜を生ず。色の中に何の過ありや。謂く所有る色は無常、苦、敗壞の相なり、色界には色あるが故に味心もあり、過心もあり、故に苦樂あり。又行者は諸の禪定に於て亦は貪し亦は捨す、必ず樂受の因緣を以ての故に貪し、苦受の因緣の故に捨すればなり。故に知る苦樂あるなり。又佛は、聲等は是れ初禪の刺、覺觀は是れ二禪の刺、乃至、非想非無想處のは有想受が刺なりと說きたり。刺は苦の義に名づく。故に知る一切は苦あるなり。又一切の五陰を皆名づけて苦と爲し、正しく惱害するを以て苦と爲す、欲界の受の惱害するが如し。故に苦なり。上二界の受にも亦惱害あれば、何が故に苦に非らざらんや。欲界に病等の[三八]八行を說くが如く、色無色界にも同じく八行を說けば、何が故に苦なからんや。又色界には光明の優劣を說く。故に知る色界の業も亦差別業す。業が差別するが故に必ず應當に苦報を得るの業あるべし。又經に說く、此の中には嫉妬等の煩惱あり、有る[三九]梵天が諸梵に語つて言く、此の處は是れ常なれば、汝等は瞿曇沙門に詣ること勿れと、亦有る梵天は來つて佛に難問するが如し。又經の中にて說く、第四禪に入れば不善法を斷ずと。又經の中にても亦是の中には邪見煩惱ありと說く。是等の煩惱は卽ち是れ不善なれば應に苦報を得べく、何が故に苦なからん。又論師の說く、一切の煩惱は皆是れ不善なりと、是の中には云何ぞ苦受なからんや。又經の中に說く、諸の天人は色を愛し色を樂しみ色を貪り色に著すと。是の諸の天人は色を愛樂し貪著するが故に、是

【三八】八行とは生、老、病、死、愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五陰盛苦の八にして、通常は之を八苦といふ。苦諦の說明には數數此八種を以てす。

【三九】雜問品第一百三十八に引用せらるるものは之を同一なるべし。

の中には苦受の相多く、樂受は爾らず、所以は何、多く衆生の三惡趣に在るありて、天人に生ずるは少ければなり。又功を加ふるを須ひずして自然に得るは苦なるに、功を加へて樂を求むるも、得ることと得ざることとあること、猶田中の穢草は自ら生じ嘉苗は爾らざるが如し。又苦受に因りて重罪業を起す、所以は何、苦受の中には瞋使あればなり。經の中に說く、瞋を重罪と爲すと。

(三)又論師の言く、不苦不樂が能く生ずと、所以は何、是の中には癡使あればなり。[三三]癡は是れ一切の煩惱の根本なり。又此の受は細微にして、是の中の煩惱は覺知し難きが故なり。又此の受は是れ衆生の本性にして、苦と樂とは客たり。又此の受は遍く三界に在るも、餘の二は爾らず。又此の受は是れ長壽の因なり、此の受を貪るが故に壽は八萬大劫にして久しく苦相の諸陰を受くればなり。又此の受は泥洹と相違す、所以は何、是の中には寂滅相泥洹相を生ずるが故に、復た眞實の泥洹を得ること能はざればなり。又此の受は聖道を以て能く過ぐ、離性に因りて解脫を得るに、苦受樂受は世間道を以てしても亦能く過ぐることを得と說くが如くなればなり。又此の受は生死の邊を窮めて相續を斷ずる時に斷ずればなり。是の故に能く深厚なる煩惱を生ずるなり。

[三四]五受根品　第八十三

問曰　樂根は何れの處に在りとなすや、乃至、捨根は何れの處に在りや。

答曰　[三五]苦樂は身に在り、得る所の身に隨ひ、乃し四禪に至る、[三六]餘の三は心に在り、得る所の心に隨ひ、乃し有頂に至る。

問曰　[三七]經の中にて說くが如くんば、憂根は初禪の中にて滅し、喜根は三禪の中にて滅し、樂根は四禪の中にて滅し、捨根は滅盡定の中にて滅す、是の故に汝が說は然らず。

答曰　若し汝にして此の經を信ぜば、則ち苦根は應に初禪に在るべきに、而も汝が法の中にては、

【三三】以下の各文も不苦不樂が能く生ずとなす說の理由なり。

【三四】憂喜苦樂捨を五受根といひ、單に五受ともいふ。

【三五】苦樂は身に在り、とは苦樂は身の感ずるもの、而して身は欲界より色界四禪天まではけ存す。

【三六】餘の三は心に在り、とは憂喜捨の三は心にて感ずるもの、而して心は無色界の身なき所にもあり。

【三七】此間に有部よりの問にして、論主は之を信せざるなり。

答曰　煩惱を斷ぜる人の苦受は是を名づけて淨と爲し、又煩惱と相違する苦受は是を名づけて淨と爲す。

問曰　已に垢淨と說きたり。何が故に更に依貪依出を說くや。貪は卽ち煩惱にして出は卽ち是れ淨なればなり。

答曰　先には總じて垢を說き、今は更に別して貪を說いて垢の因と爲すなり。經の中にて垢喜あり、淨喜あり、淨の中の淨喜ありと說くが如し。垢喜とは五欲に因つて喜を生ずるなり、淨喜とは謂く初禪の喜なり、淨の中の淨喜とは謂く二禪の喜なり、若し受にして但泥洹の爲のみならば是を依出と名づく、是の故に更に說くなり。

問曰　五根の中にて、何が故に苦受と樂受とは各分つて二と爲すに、而も捨受は不らざるや。

答曰　憂と喜とは要ず想の分別を以て生ずるに、苦と樂とは必ずしも想の分別に由らざればなり。捨受は想の分別微なるが故に二と爲さざるなり。

問曰　第三禪の中の意識の受くる所は何が故に樂と名づけて喜と說かざるや。

答曰　是の樂は深厚にして身心に遍滿するが故に名づけて樂と爲し、喜は但能く心に遍ずるのみにして身に遍ずること能はざるが說に三禪の中にては佛は喜を差別して身に樂を受くと說くなり。

問曰　是の三受の中にては何者か能く深厚なる煩惱を生ずるや。

答曰　(一)有る論師の言く、樂受が能く生ずと、所以は何、先に已に壞敗等の因緣にて大苦を受くと說きたるを以ての故なり。(二)又論師の言く、苦受が能く生ずと、所以は何、衆生は苦の爲に逼られて、樂を求むるを以ての故に、深く煩惱を起せばなり。[三] 又種々の樂には少苦も能く勝ればなり。人の具足して五欲を受くる時に、蚊蚋に侵かさるれば、則ち苦を生じて、色等の五欲の樂を覺するに是の如くならざるが如く、又百子を存するの樂は一子を喪ふの苦に如かざるが如し。又生死

【三】以下の各文は凡て苦受が能く生ずの理由として擧げたるなり。

づけて樂を受くとなすなり。又衆生が此の受を受くるが故に可受を名づけて受と爲す。

問曰　衆生は名づけて受となさず、經の中には受くるを受と爲すと說けばなり。

答曰　名義は是の如きも、相あれば則ち作あり、假名の中には相あり。是の苦樂不苦不樂が身に在らば則ち心が能く覺す、故に受くるを受と爲すと說くなり。

問曰　經の中にては諸受の中の順受觀を說く、行者は爾の時に云何が苦樂不苦不樂の相を生ぜんや、是の人は爾の時には皆苦想を生ぜざらむや。

答曰　是の人は未だ一切皆苦なることを得ずして、但三受のみを憶念すればなり。

問曰　若し意識を用つて四念處を修せば、云何が身樂を說くや。

答曰　一切の受の中に於て應に是の如く繫念すべければなり、是の身樂は是れ心樂なりと。又念處を修する時身中に樂想を生ずれば、是の中に繫念するが故に身樂と名づくるなり。

問曰　若し一切の受にして皆是れ心法ならば、何が故に身受を說くや。

答曰　外道の爲の故に說くなり。外道は諸受は神に依ると謂ふが故に、佛は諸受は身心に依止すと說くなり。

問曰　何者か是れ身受なりや。

答曰　五根に因りて生ずる所の受は是を身受と名づく。第六根に因りて生ずる所の受は是を心受と名づくるなり。

問曰　是の受を云何が垢と名づけ、云何が淨と名づくるや。

答曰　諸の煩惱を垢と名づくれば、是の煩惱に使はるる受は是を名づけて垢と爲し、煩惱に使はれざる所の受は是を名づけて淨と爲すなり。

問曰　云何が苦受を淨と名づくるや。

不苦不樂受の中の無明使に使はると、若しくは不苦不樂受の中の無明に使はれずと。
答曰　是の人は不苦不樂受の中に於て三種の心と寂滅想と不苦不樂想とを生ずるが故に、不苦不樂の心を生ずるなり。若し邪智を以て相を取らば則ち樂心を生じ、若し上地の樂味を取らば、則ち苦心を生ず。是の故に經の中に諸受を說くに多語あるなり。所以は何、一切の諸受は皆無明に使はるも、是の不苦不樂受は時に隨ふが故に三種の差別あるなり。又若し未だ苦集等に通達せずむば、爾の時には苦受の中に於て樂想を生じ亦不苦不樂想をも生ず。是の故に諸受の集等を知らざるが故に無明使に使はると說くなり。但不苦不樂受の中にては多く無明使に使はるるなり。

問受品　第八十二

問曰　經の中にて、是の人の樂受を受くる時には、實の如くに我は此の樂受を受くと知ると說く。實の如く何れの受を知るや。過去未來の受は受くることを得べからず、現在の受は自ら知ることを得ざればなり。
答曰　此の經の意は人の受を說けば、是の故に過なし。又樂等の受は來つて身の中に在り、意を以て能く緣ず故に亦咎なし。又樂具の中に於ては樂等を說いて世間と名づく、亦因中に果を說くことあるが故なり。又是の人は先に樂受を受けて然る後に相を取るが故に、樂受を受けたる時に實の如くに知ると名づくるなり。
問曰　受者を以ての故に受と名づくと爲すや、可受の故に受と名づくるや。若し受者を以て受と名づくれば、則ち受は樂等とは異る、而も經の中には樂受苦受不苦不樂受と說く。若し可受を以て受と名づくれば誰か之を受くる者ぞ、受くるを以ての故に受と名づくればなり。
答曰　緣の中に於て樂と說く、火の苦、火の樂の如し。是の故に、緣を覺知するを以ての故に名

此の緣に勝たば、我に於て增益し、若しくは損滅を作して、還つて貪瞋を生ずと。故に知る未だ緣に勝たずむば又不苦不樂受なり。其の相の寂滅なること無色定の如し。寂滅なるを以ての故に、惱煩は細行するのみなれば、凡夫は中に於て解脫の想を生ずるなり。是の故に佛は說く、此の中には無明使ありと。又未だ緣を覺せず故に、苦樂は了ならず、若し此の緣を知らば苦樂は則ち了にして、爾の時には則ち貪瞋を生ずるなり。

問曰　若し此の緣を覺するときは則ち苦樂の想を生ず、是の故に但應に苦樂受あるのみなるべし。

答曰　是の人は有る時には此の緣の中に於て樂心をも生ぜず、苦心をも生ぜず、是の故に但苦樂のみあるにあらざるなり。先に說くが如く、皆是れ苦にして而も三の差あるなり。

問曰　汝にして此の緣を覺知すれば還つて樂想を生ずと言はば、云何か覺知せんや。無明なるを以て覺知すべからざるべし。

答曰　是の人は此の緣の中に於て先に相を取るが故に此の緣の中に於ては若しくは無明使、若しくは貪瞋使なり。

問曰　但苦樂の中に於てのみ癡を生ず。經の中にて說くが如し、是の人は諸受に於て實の如くに集と滅と味と過と出と等を知らず、知らざるを以ての故に、不苦不樂の中に於て無明使に使はると說く。是の故に但苦樂の中に於てのみ無明使を起すなり、不苦不樂の中には非ず。

答曰　此の經は自ら諸受に於て實の如くに集と滅と味と等を知らざるが故に不苦不樂の中にて無明使に使はると說くのみ。

問曰　是の說ありと雖も此の義は然らず、云何ぞ苦樂に於て集と滅と等を知らざるが故に、不苦不樂受の中にて無明使に使はれん、所以は何。餘事に於て知らずんば餘事の中にて使はるればなり。是の故に此の經は是の如く說くべし、是の人は不苦不樂受の中に於て、集等を知らざるが故に、

なるを以ての故に苦なり、無漏の諸禪も亦此を以て苦なり。又若し聖人にして無漏心に住すれば、深く一切を厭ふ、故に無漏心にして生ずれば則ち深く厭患を生ずること、睫の目に入れるが如し。凡夫は知らずして、皆苦を以て樂となすも、聖人は智が深妙なるが故に、[三〇]有頂を厭離すること餘人よりも甚だし。欲界を厭患するが故に無漏の苦を有漏に喩ふるなり。又諸の聖人は無漏心を得て但泥洹にのみ向ふ、所以は何、是の人は爾の時に明に一切有爲法の苦を見ればなり。若し無漏にして樂を受くるときは、則ち應に樂を喜ぶべく、應に復泥洹に向ふ心を生ずべからず。

問曰　若し諸の心行を皆受と名づくれば、云何か別に諸の心等の法ありや。

答曰　卽ち是れ一受の緣の中にて行が異るが故に差別あるなり、諸の心等の法も亦行と緣とが異る。但識の緣なる時のみ是の行を心と名づくるなり。此等は先に說きしが如し。是の一切の法が身中に在る時には、利益等の諸の差別あるが故に、故に名づけて受と爲すなり。又多くは心が能く煩惱を起すを以て、爾の時を受と名づくるなり。經の中に、樂受の中の貪使、苦受の中の瞋使、不苦不樂受の中の無明使を說くが如し。是の故に想の分別する緣中の喜等の法を受と名づく、所以は何、是の時に能く諸の煩惱を生ずるが故なり。

問曰　若し一一の受の中の三煩惱使ならば、何が故に定んで樂受の中の貪使と說くや。

答曰　苦受の中には應に貪使あるべからず。癡は一切處の使にして、癡の力を以ての故に苦の中に於て樂想を生ず、事を知見せざるが故なり。苦を得れば瞋を生ず。不苦不樂受は細なるが故に、貪と瞋とを覺せず、所以は何、是の人は此の中に於ては苦樂の想を生ぜざるが故なり。事を知見せざるが故に但癡使を生ずるのみ。又[三一]捨の緣の中に於ては若し貪瞋ならば行ぜざれば凡夫は中に於て能く緣に勝つと謂ふ。是の故に佛は言く、汝は此の緣に勝たず、未だ覺せざるを以ての故に貪瞋は行ぜざるのみなりと。經の中に說くが如し、凡夫は所有の色中にて捨を生じ、皆色に依止す、若し

【三〇】有頂は有の頂上の意味にて色界第四禪の最上なる色究竟天をいふ。

【三一】捨は不苦不樂に外ならず。

貪處と瞋處と癡處と、喜と不喜とあると倶に相違すと、福果と罪果とあると不動果あるとなり。是の諸の緣の中にて隨つて三受を生ず。故に知る此の不苦不樂受あるなり。又心處に可適なるを是を樂受と名づけ、心處に違逆するを是を苦受と名づけ、逆せず順ぜざるを不苦不樂受と名づく。又世の八法は得失毀譽稱譏苦樂にして、凡夫は失等の四法に於ては其の心に違逆し、得等の四法に於ては以て可適となす、必ず當應に離欲の聖人の能く倶に捨する者有りて捨すべくむば、不苦不樂受と名づく、是の故に無に非ざるなり。

問曰　若し觸等の因緣を以ての故に三受あらば、則ち一切の心行は皆名づけて受と爲さむ、所以は何、所有の心行は身中に在りて、皆是れ苦・樂・不苦・不樂なればなり。

答曰　是の如し。一切の心行は皆名づけて受となす、所以は何、經の中にて[二九]十八意行を說けばなり。是の中にては但是れ一の意のみにして、十八の差別あるなり、謂く六喜行、六憂行、六捨行なり。想が分別するを以ての故に苦分樂分捨分あるなり。故に知る一切の心行は受に非ざるはなし。又經の中にて說く、諸受は皆苦なりと。故に知る心行の身中に在りて皆名づけて苦と爲す。又若し色生ぜば卽ち是れ苦が生ずるなり、云何ぞ色を名づけて苦と爲すや、苦の因なるを以ての故なりと說く。故に知る緣及び諸根は但能く苦を生ずるのみ。是の故に一切の心行は皆名づけて受と爲す。行苦を以ての故に、一切の諸行は應に是れ苦なりと觀ずべく、壞苦を以ての故に、應に樂受を觀じて苦と爲すべく、苦々は卽ち苦なり。是の三種の苦は皆衆緣和合に從ふが故に生じて、念々に滅するが故に、聖人は苦を觀ずるなり。是の故に一切の心行は皆名づけて受と爲す。

問曰　無漏の諸受も亦是れ苦なりや。

答曰　亦苦なり。所以は何、無漏の諸受をも聖人は亦次第に捨つればなり。初禪より來(このかた)乃至一切滅を證す、是れ皆苦なり。又有漏禪の樂と無漏禪の樂とは何の差別ありや。隨つて有漏禪は我の因

【二九】前の無相品第二十に註したり。

能く下地のを捨つればなり。故に知る樂受は過は苦よりも甚だし。又衆生の心は生處に縛在し、乃至畜生も亦身を貪惜す、當に知るべし皆樂受の味を以ての故なり。是の故に應に樂受を觀じて苦と爲すべし。

辯三受品　第八十一

問曰　已に一切皆苦なることを知れり。今、何の差別を以ての故に三受ありや。

答曰　卽ち一の苦受は時が差別せるを以ての故に三種あるなり。能く惱害する者ならば則ち名づけて苦と爲し、旣に惱害し已れば更に異苦を求むるも、以て先の苦を遮して願求するを以ての故に大苦は暫く息む、爾の時を樂と名づけ、憂と喜とを了せず願はず求めずむば、爾の時を名づけて不苦不樂となすなり。

問曰　不苦不樂は名づけて受と爲さず、所以は何、苦樂は覺すべきも、不苦不樂は覺すべからざるが故なり。

答曰　是の人も三觸の爲には觸せらる。謂く苦觸と樂觸と不苦不樂觸となり。因あるを以ての故に當に知るべし果あることを。人の熱にして極まれば、冷觸を得て樂を覺し、熱觸を得て苦を覺し、不冷不熱觸を得て、不苦不樂を覺するが如し。故に知る此の不苦不樂あるなり。汝意にして或は不苦不樂觸の中にては受を生ずること能はずと謂はば、是の事は然らず、所以は何。人は此の觸の不冷不熱なるを覺し、所緣を覺知すれば、卽ち名づけて受となす、云何ぞ無しと言はんや。又緣に三の差別あり、怨と親と中となり、人は親に於いては喜を生じ、怨に於ては憂を生じ、中に於ては捨を生ず、故に知る想が分別するが故に此の三受あり、緣が別なるを以ての故に此の三想を起すなり。又緣には三種あり、益を爲すと損を爲すと或は倶に相違すと、樂と不樂とある、倶に相違すと、亦

量の過を獲ること、猶魚獸の味ふ所至つて寡くして其の患は甚だ多きが如し。故に應に苦を觀ずべし。又樂受は是れ煩惱の生處なり、所以は何、身を貪るを以ての故に則ち所須を欲し、欲の因緣の故に、恚等の煩惱が次第して而して生ずればなり。又樂受は是れ生死の根本なり、所以は何、樂に因りて愛を生ずればなり。經の中に說くが如し、愛を苦の本と爲すと。又一切衆生にして造作する所あらば樂の爲ならざるはなし、故に苦の本と名づくるなり。又樂受は捨て難きこと桎梏よりも甚だし。又生死の中にては樂を貪れば縛せらる、所以は何、樂を貪るを以ての故に生死を脫せざればなり。又此の樂受は常に能く苦を生ず、求むる時には欲するが苦、失する時には憶するが苦、得たる時には厭ふことなきこと海の流を吞むが如くにして是も亦苦たればなり。又樂受は是れ疲倦せざるの因なり、所以は何、衆生は樂の因を求むる時には、嶮難を經と雖も樂の爲なるを以ての故に心は懈倦せざればなり。是の故に智者は應當に苦を觀ずべし。又樂受を諸業を起すの因と名づく、所以は何、樂を貪るを以ての故に能く善業を起し、現の樂の爲の故に不善業を起せばなり。亦是れ一切のものが身を受くるの因なり、所以は何、樂を取れば愛を生じ、愛の故に身を受くればなり。又樂受は涅槃とは相違す、所以は何、衆生は生死の樂に貪著するが故に泥洹を樂はざればなり。又未だ欲を離れざる者は此の樂受を愛し、愛の因は苦を生ず、故に知る樂受は是れ衆苦の本なり。又經の中にて說く、二の求は斷じ難し、一には謂く得求、二には謂く命求なり、求むるものにして意の諸欲に隨はゞ、是を得求と名づけ、壽命を求め得て此の諸欲を受くるを、是を命求と名づく。此の二の求は皆樂受を以て本と爲す、是の故に智者は斷じ難きを應に斷ずべし、謂く能く實の如くに樂受の相を觀ずるなり。又樂受の味は亦能く染汚す、未だ離欲を得ざれば大智人の心にも斷じ難きを以ての故に、苦受よりも甚だしきなり。又樂受の味は是れ貪等の因なり、若し樂受なくんば、則ち貪る所なければなり。又樂受の味は眞智能く斷ず、所以は何、世間の諸智は要ず上地の味を取りて、

四威儀を行ずるに皆樂あることなし、所以は何。經の中に說くが如くなればなり、色は是れ苦なり、受想行識も是れ苦なり、若し色の生ずる時ならば、當に知るべし、卽ち是れ老病死等の諸の衰惱が生ずるなり、受想行識も亦復是の如しと。又身は常に忽務し身口意を以て衆事を造作す、衆事を造作するを皆名づけて苦と爲す。又諸の賢聖は身の盡くるを以て悅となす、若し實に樂たらば云何ぞ樂を失うて而も歡悅を生ぜんや。故に知る皆苦なり。

壞苦品　第八十

問曰　汝は多くの因緣を以て苦を明すと雖も、而も人は猶樂を貪り、所欲を得るに隨つて以て樂と爲す。

答曰　是れ先に已に答へたり。凡夫は倒せるが故に、苦に於て樂を取るのみなり。又癡惑に[二八]害せられたるを云何が信ずべきや。所欲を得と雖も、亦應に苦と觀ずべし、所以は何、是れ皆無常にして、壞する時には苦を生ずればなり。經の中にて佛は、天人は色を愛し色を樂しみ色を貪るも、是の色が壞する時には大憂苦を生ず、受想行識も亦復是の如しと說けるが如く、壞敗するを以ての故に、當に知るべし、亦苦なり。又人は虛妄の樂を受けて便ち貪著を生じ、貪著の因緣を以て守護等の過を生ず、故に當に樂は苦よりも甚だしと觀ずべし。又樂を苦の門と爲す、樂を貪るを以ての故に、三毒より不善の業を起し、地獄等に墮して諸の苦惱を受くればなり。當に知るべし皆樂を以て根本と爲すなり。又一切の合會は皆別離の相なり、所愛より離るゝ時には深く諸苦を受くればなり。愛せざるに由るにはあらず。故に知る樂なるものは過は苦よりも甚だし。又樂具の生ずるは皆衆生を欺誑し諸苦に墮せしむることを爲す。野禽に食ましめ、魚の爲めに餌を沈むるが如し。皆取るを以ての故なり。樂物も亦然り、故に應に苦を觀ずべし。又樂受の中に於て少味を得るが故に無

【二八】麗本の癡惑所害云何可信をかく讀みたり。三本宮本は害を言に作る。然らば、癡惑の言ふ所を云何が信ずべきや、となる。

だに實には亦樂なきは、亦是の如くに倶に顚倒なるが故なり。又人は辛苦の中に於て樂心を生ずること、重きを擔うて肩を易ふるが如し。故に知る樂なし。又經の中にて佛は說く[二二]、當に、樂は是れ苦なりと觀じ、苦は箭の心に入るが如しと觀ずべく、不苦不樂は當に無常にして[二三]念々に生滅すと觀ずべしと。若し定んで樂あらば、應に苦と觀ずべからず。當に知るべし、凡夫は苦に於て樂を取る、是の故に佛は凡夫人の樂想を生ずる處に隨つて、汝は當に苦を觀ずべしと說けるなり。又此の三受は皆苦諦の攝なり、若し實に是れ樂ならば苦諦が云何が攝せんや。又苦は眞實たり、樂相は虛妄なり。何を以てか之を知る。苦心を觀ずるを以て能く諸結を斷じ樂心に非ざればなり。故に知る皆苦なり。又一切萬物は皆是れ苦の因なること、猶怨賊の如し。怨賊に二種あり、或は卽ち能く苦を爲し、或は初めには歡善なりと雖も後には卽ち人を害す。萬物も亦爾り、或は初には便ち善を生じ、或は後には反つて害を爲す。故に知る皆苦なり。又衆生は欲を得て厭くことなきこと、鹹水を飲むで足らざるが如し。故に苦なり。又求欲する所なきを乃ち名づけて樂と爲し、求むるが故に苦と名づく。世間には求むることなき者のあるを見ず。故に知る樂なきなり。又一切衆生には身苦と心苦とが常に隨逐す、故に知る身は苦たり。又身は獄の如く、常に羇鎖あり。何を以てか之を知る。此の身を滅するを乃ち羇鎖を解脫すと名づくるを以てなり。故に苦なり。又一切の物は漸々次第して皆鄙惡すべきこと、[二四]地獄等の身と冬夏等の時と小兒等の根とが、寒暑等を知らば、相待して後皆憎惡するが如し。當に知るべし皆苦なり。又身は怨賊多し、謂く[二五]毒蛇の篋五拔刀の賊親善を詐る賊及び聚落を空にし聚落を壞する賊にして、大河の此岸の種々なる諸苦は皆常に隨逐す。故に知る皆苦なり。又衆生の身には諸の苦が隨逐することを知る、謂く生苦・老苦・[二六]病苦・死苦・怨憎會苦・愛別離苦・違願等の苦、常に與に相隨ふが故なり。故に知る身は衆苦の聚たり。又身あるを以ての故に則ち我所及び貪著等の諸の衰惱あつて集まる、故に知る身は衆苦の因緣たり。又亦[二七]五道の衆生も

【二二】これ增一阿含第二十三卷の經文なり。三不護品第五、一切緣品第一百九七一、故不故品第九十七善覺品第一百八十三參照。

【二三】麗本は念生念滅に作る。今三本宮本の念念生滅に從ふ。

【二四】地獄等の身は八寒地獄ならば、熱のことを知りて、それと相待して其身を憎惡し、冬とは熱を知れば、それを相待して冬を憎惡するが如きをいふ。

【二五】身を毒蛇の住する篋に譬へ、又五根が有れば之を拔刀賊に譬へたるなり。後文にも之と同一の言あり。一切世間不可樂想品第一百七十七參照。

【二六】麗本は痛苦となすも、三本宮本の病苦を取る。

【二七】五道は六道より阿修羅を除きたるものなり。有部は五道を認め犢子部は六道を認むといはる。四諦品第十七參照。

相なるには非ず、所以は何、人の微樂を受くるが故に、手を擧げて大に呼ぶこと有るを見ざればなり。又受としては轉微なるが故に寂滅相と名づく、猶上地の轉々して寂滅なるが如し。是の故に微樂の中にて苦想を生ずと說くは但是の[一七]語あるのみなり。凡夫愚人が微苦の中に於て妄に樂想を生ずるときは則ち道理あり。

[一八]行苦品　第七十九

諸受は皆苦なり、所以は何、衣食等の物は皆是れ苦の因にして樂の因に非ざればなり。何を以てか之を知る。現見するに衣食にして過增せば則ち苦も亦增すが故に苦の因と名づくるなり。又手痛等の苦は相を以て示すべきも、樂相は然らざればなり。又衣食等の物は皆病を療することをなすも、人にして渴せざれば飮むことは樂を生ぜざるが如し。又人は苦の爲めに惱まさるれば、異苦の中に於て樂想を生ずること、人が死を畏れて刑罰を以て樂と爲すが如し。又鞭杖刀矟は諸苦の因緣なること、皆是れ決定なるも、樂の因は然らず。又一切の須ふる所は究竟して苦なるが故に、當に知るべし、先に有るも後時に乃ち覺すること、屐の漸く盡くが如し。又女色等の中に於ては先に樂想を生ずるも、後には還つて憎惡す、故に知る邪なる憶想を以て此の樂想を生ずるも、邪なる憶想を離るれば還つて其の過を見るなり。又女色等は皆是れ[一九]乾消病等の苦の因なり。故に樂には非ざるなり。又欲を離るゝ時には皆此の緣を捨つ、若し實に是れ樂ならば、何が故に捨てんや。又人は隨つて[二〇]樂處に生ずるも後には卽ち此の事が還つて苦の心を生ず、故に知る樂には非ず。又身は苦の田と爲るも、樂の[二一]田には非るなり。野田の中にては嘉苗は植え難くして而も穢草は生じ易きが如く、是の如く身田には衆苦が集まり易く而も虛樂は生じ難し。又人は苦の中に於て先に樂倒を起して、後に貪著を生ず、樂にして若し少しだに實ならば、名づけて倒となさざらむ。常我淨の如きが少し

【一七】單にかくいふ言語があるのみにて、事實はなしとの意。凡夫は顚倒想のものなれば、妄想を生ずるも當然なり。

【一八】諸受の皆苦なることを論ず。行苦は苦苦並に壞苦と合せて通常三苦といふ。苦苦は三受中の苦を指し、體これ苦なるものをいふ。此は前品にていへるものなり。行苦は體が行にして、行は遷流無常なれば苦たるものなり。之を此品にて論ず。壞苦は樂の壞したる時苦となるものにて、此は次品に說かる。

【一九】三本宮本は消を痟に作る乾消病とは一種の性病ならむ。

【二〇】隨つては何れにてもの意。樂處とは北拘盧洲の如き等の處。

【二一】三本宮本は因とす。

増益とも爲り、又先の苦を遮せば、爾の時には是の中にて則ち樂相を生ずるも、若し先の苦を離るれば、是の熱觸は則ち樂と爲ること能はず、故に實有には非ざるなり。

問曰　汝は但名相を以ての故にのみ樂ありと言ふも是の事然らず、所以は何、經の中にて佛は自ら三受を説けばなり。若し實に樂なくんば、云何ぞ三を説かんや。又色にして若し定んで苦ならば、衆生は中に於て貪著を生ぜずと説き、又何等をか色中の味と爲すや、所謂色に因りて能く喜樂を生ずと説き、又樂受の生ずる時は樂、住する時も樂なるも、壞する時は苦なり、苦受の生ずる時は苦、住する時も苦なるも、壞する時は樂なり、不苦不樂受は苦を知らず樂を知らずと説けばなり。又樂受は是れ福報にして、苦受は是れ罪報なれば、若し實に樂受なくんば罪と福とには但苦果のみあらんも、而も實には然らず。又欲界の中にも亦樂受あり、若し實に樂受なくんば、色、無色界には應に受あるべからざるに、而も實には然らず。又樂受の中の貪使を説けば、若し樂受なくんば何れの處を貪する使ならんや、苦受の中の貪使を説くべからず。故に知る實に樂受あり。

答曰　若し實に受樂あらば應に其の相を説くべし。何者をか樂と爲すや。而も實に説くべからず、當に知るべし但苦の差別の中を以て名づけて樂相と爲すのみなり。一切の世界は大地獄より上は有頂に至るまで皆是れ苦相にして、多苦の爲めに惱まされ、少苦の中に於て此の樂相を生ずるのみなること、人が熱苦の爲に惱さるときは則ち冷觸を以て樂と爲すが如し。是の故に諸經に是の如きの説を作すも妨ぐる所なきなり。

問曰　亦、世間は一切皆樂なり、微樂の中に於て而も苦[一六]想を生ずとも説くべし。若し爾らずんば亦微苦の中に於て樂想を生ずとも言ふを得ざるなり。

答曰　苦受の相は麁なるが故に微樂を以て苦とは爲すべからざるなり。又樂は微なりと雖も亦惱

【一六】麗本は相に作り、三本宮本は想に作る。次の句は凡て樂想となせば、こゝも苦想樂想の方可なり。以下の苦想樂想の想についても同じ。

假法の相を取るを是を名づけて想と爲すなり。

苦諦聚の受論の中の受相品　第七十八

問曰　云何が受と爲すや。

答曰　苦と樂と不苦不樂となり。

問曰　何を謂て苦となし、何を謂うて樂と爲し、云何が名づけて不苦不樂と爲すや。

答曰　若し身心を増益せば、是を名づけて樂となし、身心を損減せば是を名づけて[一四]苦と爲し、二と相違せれば、不苦不樂と名づく。

問曰　此の三受は決定の相なし、所以は何、卽ち一事にして或は身心を増し或は損減を爲し或は俱に相違するが如くなればなり。

答曰　是の緣にして定らずむば、受は定まらざるには非ず、所以は何、卽ち一の火にして或時は樂を生じ、或時は苦を生じ、或時は能く不苦不樂を生ずるが如く、緣に從つて受を生ずれば、是れ則ち決定すればなり。卽ち此の一事は、時に隨ふを以ての故に、或は樂の因と爲り、或は苦の因と爲り、或は不苦不樂の因と爲るなり。

問曰　何れの時を以ての故に此の緣は能く苦樂の因と爲るや。

答曰　隨つて、能く[一五]苦を遮すれば、是の時の中に於て則ち樂相を生ずること、人にして寒さの爲めに惱さるれば、爾の時には熱觸が能く樂相を生ずるが如くなり。

問曰、是の熱觸にして過増せば還つて能く苦と爲り、復是れ樂なるには非ず。故に知る樂受も亦無し。

答曰　世俗の名相の故に樂受あり、眞實の義には非ざるなり。是の人が熱觸を喜ぶ時に隨つて亦

【一四】樂と苦とを其結果より區別するなり。

【一五】樂は全く消極的に考へられ居るを見るべし。下にも樂は世俗の名相の故にありて眞實、義ならず實有ならずとし、地獄より有頂に至るまで皆苦相にして、少苦の中に樂相を生ずるに過ぎずとなす。壞苦の說參照。

問曰　今、相の義は云何。

答曰　緣は卽ち是れ相なり。何を以てか之を知る。師子獸王が河の此岸に立つて彼岸の相を取り、流を截つて渡るに、若し相當らざれば則ち此岸に還り、死に至るも捨せずと說くが如くなればなり。是の經の中にては樹木等を以て相と爲すなり。又比丘が相を示すに是の中にては亦衣等を以て相とも爲すと說き、又世尊は是の如きの相を現ずと說き、又宰人は王に因つて食すが故に嗜む所の相を取ると說き、又明旦は是れ日出の相となりと說き、又三相——所謂攝相と發相と捨相と——を說き、是の中にては卽ち攝等を以て相と爲し、隨つて何れの法を念ずるも心が繫つて緣に在るを是を攝相と名づけ、又諸天が退する時には先づ五相が現じ、是の中にては卽ち五法を以て相と爲す。故に知る假法を以て相と爲すにはあらず、市行陰の所攝にも非ず。又舍利弗は[一]富樓那の面貌等の相を取り、又經の中に眼は色を見て相を取らずと說き、又[二]法印の中にても、若し比丘にして自ら色聲等の相を斷ずるを見るも、我(われ)は、未だ是の人は淸淨知見を得たりとは說かずと說く。此の故を以て知る緣が卽ち是れ相なり、假法なるにはあらず。

問曰　緣は是れ相なるには非ず、所以は何、無相三昧にも亦緣あるが故なり。又色を見已つて相を取らずと說くに、若し緣にして是れ相ならば、云何ぞ色を取つて而も相を取らざらんや。

答曰　相に二種あり、過相あると無過相となり、過相を遮するが故に、色を見て相を取らずと說くなり。相なくむば、緣にも亦過あり、後の[三]滅諦の中にて當に廣く說くべし、謂く三心を滅するが故に無相と名づけ、初入の行者に一切の相が盡くるに非ざるは是れ過なるも、若し攝相と發と捨との相等を取らば、是れ則ち過なく、又涅槃を無法と名づく、故に應に難と爲すべからず。若し法の相を取らは汚と爲すこと能はざるも、假名の相を取らば則ち煩惱を生ずと說くが如し。所以は何、怨親等の差別の相を取るが故に、憂喜等を生じ、此より能く貪恚等の過を生ずればなり。故に知る

【一】富樓那(Pūrṇa-maitrāyaṇīputra)憍薩羅の人、佛弟子となり、說法第一と稱せらる。舍利弗は此人の德風を慕ひ其の坐禪の道場に行き、法の問答をなして互に賞讚し合へりといふ。

【二】法印經なり。滅法心品第一百五十三、智相品第一百八十九、見一諦品第一百九十一を見よ。一切緣品第一百九十一にも此經あり。

【三】滅諦聚初立假名品第一百四十一以下を指す。三心は假名心法心空心なり。

精進は苦を除き、　慧は能く清淨にす、

とも說くが如し。而も實には慧を以て渡ることを得るものにして信等を以てにはあらず。是の如きは智慧なるも想の名を以て說くなり」。又經の中にて說く、慧を以て刀と爲す、聖弟子は智慧の[六]刀を以て諸の煩惱を斷ずと說くが如し。故に知る、慧が能く結を斷ずるものにして是れ想なるには非ざるなり」。[七]又三十七聖道品の中には想の名を說かず、故に結を斷ぜざるなり」。又經の中にて、知者見者は能く漏を盡くすことを得、知見せざる者には非ずと說き」、又[八]三無漏根の中にては、未知欲知根と知根と知已根と說きて、皆知を以て名となし」、又佛は慧を說いて慧品解脫知見品と爲し、又禪なければ智ならず、智なければ禪ならずと說き」、又[九]次第經にては淨戒を持つ者は則ち心悔いず、乃至、心を攝むれば如實の知を得と說き」、又法智等は皆慧を以て名と爲し」、又三學の中にては慧學が最勝にして、亦智慧具足せば解脫知見具足すと說き」、又七淨の中にても知見淨を說き」、又佛は一切の法を正知するが故に無上智慧と名づくと說くも、想には是の如き說なし」。又理として應に慧を用つて諸の煩惱を斷ずべく、是れ想なるにはあらざるなり。所以は何。[一〇]大因緣經にて、若し義にして修多羅に入り、法相に違せず、比尼に隨順せば、是の義は應に取るべしと說くが如くなればなり」。又正義の中に於て隨義語を置き、正語の中に於て隨語義を置くと說く。故に經には無常想等は能く諸結を斷ずと說くと雖も、理として應に是れ慧なるべし」。又無明は是れ煩惱の根なれば、無明を離るゝが故に慧は解脫を得るなりと說く。故に慧を以て諸の煩惱を斷ずるなり。

問曰　汝は諸想は假法の相を取ると言ふも、何を以て相とするや。

答曰　有る人は假法を以て相と爲す、假法に五あり、一には過去、二には未來、三には名字、四には相、五には人なりと」。是の事は然らず、所以は何、人は五陰に因りて成ずるも、相には成ずる因なきが故に假名に非ざればなり。

【六】　麗本は刃に作る。

【七】　三十七菩提分と同じ。

【八】　三無漏根、未知欲知根は意根樂根善根捨根及び信勤念定慧の九根が見道にあるものにて、見道にて曾て知らざりし四諦の理を知らむとして行動するものなり。知根は九根の修道にあるものにて四諦の理を知り終りたれども他の煩惱を斷ずる爲に四諦の境に於て數々了知するものなり。知已根、九根の無學道にあるものにて、四諦の理を已に了知せりとの知を具有するものなり。

【九】　此語の同一文の一部が無相應品第六十五に引用せらる。

【一〇】　此經の文句は四法品第十六に引用せられ而も一一解釋せらる。又一切緣品第一百九十一に之と同文を引用す。若法入修多羅、隨順比尼、不違法相、是法應受とあり。

卷の第六[一]

苦諦聚の中の想陰品　第七十七

問曰　何の法を想と爲すや。

答曰　假法の[二]相を取るが故に名づけて想と爲すなり。所以は何、經の中にて、有る人は少想なり、有る人は多想なり、有る人は無量想無所有想なり。而も實には此の多少等の諸法無しと說くが如くなればなり。故に知る想は假法の相を取るなり。是の想は多くは顚倒の中に在りて說く、無常の中の常想は顚倒なり苦の中の樂想は顚倒なり無我の中の我想は顚倒なり不淨の中の淨想は顚倒なりと說くが如し。又[三]信解觀一切入等の中に於て說く。又想の三種を以て差別して緣を取る、謂く怨と親と中となり。人は是の緣の中に於て次に三受を生じ、受は三毒を生ず、故に想に過あるなり。想に過あるが故に佛は應に斷ずべきものと說くなり、眼に色を見るも、[四]想を取ること莫れと說くが如し。故に知る假法の相を取るを是を名づけて想と爲すなり。

問曰　假法を取るを想と爲すは此の義は然らず、所以は何、此の想は能く煩惱を斷ずればなり。經の中にて說くが如し、善く無常想を修するが故に、能く一切の欲染と色染と及び無色染と、一切の戲掉と我慢と無明とを斷ずと。故に知る但假法を取る想のみには非ず。假法を取る想のみならば則ち應に能く諸の煩惱を斷ずべからざればなり。

答曰　此は實智慧なるも想の名を以て說くなり。受者が一切に於て解脫を得と說き、亦意を以て諸の煩惱を斷ずと說くが如く、又不黑不白業を以て能く諸業を盡くすと說き、亦は、

[五]信は能く河を渡り　一心は海を渡り

【一】三本宮本はこゝにては分卷せず。以上にて識論を終り、次に想論受論行論をなし五蘊の一一の論を說き終りて苦諦聚が終了するなり。此品は想を論ずるが故に、想論となすべきなるも、想は唯一品に於てのみ論ぜらるるが故に直に想陰品と呼びたるなり。

【二】想は常に取像の義なり。

【三】信解觀とは十一切處に入れるをいふ。後の十一切處品第一百七十二品を見よ。一切處をこゝには一切入と譯せるなり。一切入が十種あるが故に十一切處といふ。

【四】三本宮本は相とす。此方可なるが如くなるも、こゝにては想の意なり。

【五】此偈は智相品第一百八十九にあり、又初句は非相應品第六十七に引用せらる。

も亦爾り、住する時促るが故に分別すべからざるなり。又諸識にして若し一時に生ぜば、一切の生法皆は一念一時に俱生するに何の障礙かあらんや。然らば則ち一切の法の生ずるには功を爲すことを須ひざるべく、業をも功をも造らずして亦應に解脫すべきも、是の事は不可なり。故に知る諸識は一時には生ぜず。又身を心使と爲す、若し諸心にして俱生せば、身は則ち散壞せん、〔三〇〕去來等の心が一時に生ずるを以ての故なり。而も身は實には壞せず。故に知る諸心は一時には生ぜず。又眼が外物の種根芽等と及び〔三一〕迦羅羅頞胞等の色と少壯老形の次第してあるとを見れば、心も亦應に爾るべし。又經の中にて說く、若し樂を受くる時ならば二度則ち滅す、所謂苦受と不苦不樂受となり。是の如き等と。若し識にして俱生せば則ち應に一時に俱に三受を受くべきに、而も實には然らず。故に知る諸識は一時には生ぜず。又一身の中に一心生ずるが故に名づけて一人と爲す、若し識にして俱生せば、則ち一身にして多人ならんも、而も實には然らず。是の故に一身に識は並び生ぜざるなり。又若し識にして並び生ぜば、則ち應に一時に一切の法を知るべし、所以は何、眼の中に無量百千の識が生じ、乃至意の中にても皆亦是の如くなればなり。是の如くならば、則ち應に一切の法を知るべきに、而も實には然らず。故に知る諸識は一時には生ぜず。

問曰 諸識は何が故に要ず次第して生ずるや。

答曰 一の次第緣の故に識は一一に生ずるなり。

問曰 何が故に正しく一の次第緣ありや。

答曰 法として應に是の如くなるべきなり。汝が一神一意となすが如く、我も亦是の如く、一意一次第緣なりとす。芽が種に屬すれば應に次第して芽を生じて、莖等を生ぜざるが如く、是の如く法が心に屬するに隨つて應に次に心が生じて餘法をば生ぜざるべし。又識相は定んで爾り、一一の起滅と次第と相屬とは火相の熱の如し。是の故に諸識は要ず次第して生ずるなり。

【三〇】麗本には以去來等心以一時生故とあり。三本宮本は心の下の以を缺く。此方可なり。

【三一】迦羅羅、前の分別賢聖品第十品の「歌羅羅」參照。

識俱生品[236]　第七十五

問曰　已に心の念々に滅することを明したり。今、諸識は一時に生ずと爲んや、次第して生ずと爲んや。有る論師の言はく。識は一時に生ずと。所以は何、有る人は一時に能く諸塵を取ればなり。人の瓶を見つゝ、亦樂聲をも聞き、鼻に花香を嗅ぎつゝ、口に香味を含み、扇風が身に觸れつゝ、雅なる音曲を思惟するが如し。故に知る一時に能く諸塵を取るなり。又若し一識にして能く身中に於て遍じて苦樂を知らば、然らば則ち一の眼識を以ても亦應に能く諸樹を取るべきに、是の事は不可なり。云何ぞ一識にして悉く根莖枝葉華實を知らんや。故に知る多識が一時に俱生して、遍じて諸觸を取るなり。又種々の色の中にて一時に知を生ずるも、而も青の知は卽ち黄の知なるには非ず。故に知る一時に俱に多識を生ずるなり。又諸の身分の中にて能く速に知を生ずれば、一分を取る時に卽ち能く遍じて取るなり。又佛の法の中には[237]有分あることなければ、一識にして遍じて諸分を取るべからず。故に知る一時に能く多識を生じて遍じて諸分を取るなり。

識不俱生品[238]　第七十六

答曰　汝が諸識は一時に俱生すと言ふは、是の事は然らず、所以は何、識は念を待つて生ずればなり。經の中に說くが如し、若し眼入にして壞せずむば色入は知境に在るも、若し能く[239]識の念を生ずること無くんば、眼識は生ぜずと。故に知る諸識は念を待つを以ての故に一時には生ぜず。又一切の生法は皆業因に屬し、心は一一に生ずるを以ての故に、地獄等の報は一時には受けず。若し多心が俱に生ぜば便ち應に俱に受くべきに、而も實には不可なり。故に知る諸識は一時には生ぜず。諸識は能く速に緣を取る、旋火輪の如きは轉ずること疾きを以ての故に其の際を見ざるなり。又諸識

【二三六】此品は諸心の一時に生ずる義を明す段にして反對者の說なり。識の俱生は勝論派正理派にては全く許さず。

【二三七】有分は部分を有するもの（avayavin）の意にて、全體のことなり。正理派の如きは部分を實在と認め、又其部分以外に部分を有する全體なるものゝ實在をも認む。唯識二十論には勝論派が有分色を認むといふも、元來は正理派の說なれば、後世勝論派にても亦認むるに至れるならむ。故にこゝにても正理派勝論派の說を出して、佛教にてはかゝるものゝ實在を認めずとなすなり。

【二三八】前品に答破して諸識の並起せざる義を明す。これ論主の說なり。

【二三九】宮本のみは眼識とす。下の念品第八十六を參照すべし。

らざれば、法が時と倶ならば、時は法と倶なり。又取は二種なり。一には決了と二には不決了となり。若し識にして念々に滅せずんば、一切の所取は盡く應に決了なるべし、我が識に隨ふを以て多く相續すれば、是の取を生じて則ち了するも、若し少しく相續すれば是れ則ち了せず。又識が塵を取るに或は遲く或は疾ければ心は則ち不定なり。汝は依と緣とは異らずして是の義は已に成じたりと言ふも、色は念々に滅するが故に、依と緣とも亦異らん。汝は能く具に取ると言ふも、識が能く遍じて身分を卽るが故に具に取ると名づくるなり。是の故に一識にして而も能く遍じて取るものあることなし。所以は何、未だ具足して取らざるに、心は已に隨つて滅すればなり。何ぞ、心が一切の取を能くすることあることを得んや。汝は作業は用なしと言ふも、是の事も然らず。燈は念々に滅すと雖も、亦照の用あるが如く、諸業と風とは念々に滅すと雖も、亦能く物をも動かす、是の識も亦然ればなり。又燈等は念々に滅すと雖も亦取ることをも得べきが如く、識も亦是の如く、念々に滅すと雖も亦能く取ることを得るなり。復次に諸の心意識は皆念々に滅す、所以は何、青等の諸色集にして現前に在らば能く速に生滅す。故に知る住せざるなり。又人或は心を生じて、自ら一時にして能く諸緣を取ると謂ふ。故に識は住せざるなり。若し識にして暫住せば、則ち人は應に此の惑心を生ずべからず、所以は何、種と根とが相續して暫住することあるが如くなるが故に、人は其の中に於て、惑心を生じて、芽莖等一時にして而も有りとは謂はざればなり。故に知る識は念々に滅するなり。又人にして瓶を見れば卽ち瓶憶を生ずるは見るに次いで憶を生ずるを以てなり。故に念々に滅するなり。又若し諸識にして念々に滅せずんば、則ち一智にして卽ち邪、卽正なるべく、是の人が是れ取るなるに、卽ち取るは人に非ずと見るが如し。是の如くならば疑取は卽ち是れ定取にして、是れ則ち不可なり。故に知る念々に滅するなり。又分別等の諸の因緣を取る。故に知る念々に滅するなり。又聲と業との相續は念々に滅する相なれば。中に於て知を生ずるなり。故に知る心は念々に滅するなり。

實に了することあり、故に知る諸識は念々に滅するには非ず。又眼識は眼に依りて色を緣ず、是の二は異らざれば識も亦異らず。又心は能く具に青等の諸色を取る、故に知る念々に滅するには非ず。若し汝が意にして、相續するを以ての故に能く決了すと謂はゞ、是れも亦然らず。若し一一の心にして決了すること能はずんば、復相續すと雖も、亦了すること能はざればなり。一の盲人にして色を見ること能はずむば、多も亦能はざるが如し。若し汝にして復一一の縷は象を制すること能はざるも、多く集まらば則ち能くするが如く、是の如く一心にては決了すること能はざるも、相續するときは則ち能くすと謂はゞ、是れも亦然らず、一一の縷の中には各少力あれば、和合するときは則ち能くすれども、心は一念の中にては少しの了する力もなし、是の故に相續するも亦應に能くすべからざればなり。而も實には了す。故に知る念々に滅するには非ず。又若し心にして念々に滅せば、去來等の業は皆應に用なかるべし、少時住するを以ての故に能く用あらしむるなればなり。是の故に知る心は念々に滅するには非ず、復無常なりと雖も、要ず暫住することあるなり。

[一三三]識無住品　第七十四

答曰　汝が心は了すること有るが故に念々に滅するには非ずと言ふは是の事は然らず。諸相は心に在る力にて能く決了するものにして、住するを以ての故にはあらざればなり。若し爾らずんば、[一三四]聲と業との中に於ては應に決了すべからず、所以は何、現見するに此の事は念々に滅するが故なり。而も實には決了す。故に知る住するを以ての故に能く了するにはあらず。又了することを以て心と爲す。若し青を了せば、卽ち黄を了するには非ず、是の故に設使ひ暫住して青を了するも黄を了すること能はず。又青を了する時は異、非青を了する時には[一三五]異なり。一法は應に二時なるべか

【一三三】前品に答へて識の念念滅を明す。これ論主の説なり。

【一三四】聲と業とが刹那滅卽ち念念に滅することは勝論派の説く所なることと前述せり。故に此等の品の反對説の中には勝論説あるを知る。

【一三五】青を了する時と非青を了する時とは異るとの意。

眼中に住し、明を待つて能く見ること、即ち是れ人が能く見聞する等の如しと言ふと雖も、是の事は然らず、所以は何、今此の論の中にては法の實義を求むるに、人は是れ假名なれば、應に喩と爲すべからざればなり。又應に人相を求むべし。我は諸陰を人と爲すと説く。亦疑識等の衆は定識の衆に異り、疑識等の衆を以て卽ち定識の衆と爲さずと説く。是の如きの一切を、汝は根が差別せるが故に識に差別ありと言ふも、是の事は然らず。根は是れ識を生ずる因緣なり、若し識にして是れ一ならば、根は何の爲す所ぞ。汝燈と算とを以て喩と爲すも、是の喩は然らず、照らさゞらむが爲に燈を[三二]然するも而も燈の體は照らさゞるには非ざるが故に、自ら照らさゞるも燈を以て闇を破するが如くに、眼識が生ずることを得、眼識が生じ已つて亦能く燈及び瓶等の物を見ればなり。又算數人も能く自色を知り亦他色をも知るが故に相知と名づくればなり。汝は業等と言ふも、業等の難の中にて已に答へたるが故に斯の咎なし。又若し心にして常に一ならば、卽ち業もなく報もなし、所以は何、正しく心と及び所依とを以て業と爲せばなり。若し心にして是れ一ならば何ぞ業報あらん。縛解等も亦是の如し。又汝は異り作し異り受くと言ふも、是れも亦然らず。諸陰は相續して一にも非ず異にも非ざるに、二邊に隨するが故なり。又世俗の名字にて諸業等を説くは眞實義に非ざるが故に、陰の相續の中に於て此彼等の名字を説くも咎なし。故に知る多心なり。

[三三]識暫住品　第七十三

問曰　已に多心を明したり。今、諸心は念々に滅すと爲んや、少時住すと爲んや。有人の言く、心は少時住すと。所以は何、色等を了するが故なり。若し念々に滅せば、應に能く了すべからず、故に住せざるには非ざるあり。又若し念々に滅せば、則ち色等の法は終に知るべからず、所以は何。電光の如き暫住するものすら尙了すべからず、況んや念々に滅して而も能く了せんや。今、

【三二】然は燃と同じ。

【三三】前の非相應品第六十七に含まれ居たる說より此品以下の論起る。

爲ると言ふも、若し心にし是れ一ならば、卽ち是れ常と爲る。常は卽ち眞我[二九]なり、所以は何、今の作と後の作とが常に一にして不變なるを以ての故に名づけて我となせばなり。」又心の差別相を知ること能はざるが故に、則ち以て一と爲すは、注水の如く、相續する心を謂うて一と爲すこと、眼病者が衆髮を見て一と爲すが如し。若し此の事に於て能く分別するものは、則ち其の異を知る。」又深智者は能く心の異を知る、所以は何、諸の梵王等すら、中に於て迷悶して是の如きの言――是の身は無常にして、心識は是れ常なり――を爲せばなり梵王等の若きすら猶尙迷惑す、豈に況んや餘人にして而も常に著せざらんや。故に應に善思すべし、衆緣生の法は常に倒れて則ち滅すと。」汝が、左が見て右が識ると言ふは、是れ智力の故なり。異り見て異り識るは此の人は書を作し餘人は能く識るが如く、又餘人の爲す所を聖人は能く知るが如し。亦未來の事は未だ生ぜず未だあらざるも聖智は能く知る。又過去の事は無なるも憶念の故に知り、未來は未だあらざるも智力が能く知る。此の事は後に當に廣く說くべし。

明多心品　第七十二[三〇]

「汝が心は一にして用が多業を爲すと言ふは、是の事は然らず、所以は何、正しく了を以て心と爲せばなり。而も色の了と聲の了とは異れば、心が何ぞ一なることを得ん。」又瓶を捉る手の業の如き、卽ち此の業は更に餘物を捉らず、是の如く、隨つて何れの心を以て色を取るも卽ち此の心が聲を聞くにはあらず。」又此の眼識は眼を以て依と爲し、色を以て緣となす、是の二は無常にして念々に生滅すれば眼識は何ぞ念々に滅せざることを得んや。譬へば樹無くむば影も亦隨つて無きが如し。是の如く眼と色とは念々に滅するが故に、依りて生ずる所の識も亦念々に滅す。念々に滅する法には去る力あることなし。」又先の意品の中にて已に種々に答へたり、故に意は去らざるなり。」汝は識が

三本宮本は人に作る。第六十九品に以心一故名衆生相といへるを指すを以て、一相ならば衆生相といふ一の相の意となる。人は衆生と同意なれば、此方適當なり。

【二九】實我をしての、我のことにして、佛敎以外にて認むる常一主宰の我なり。

【三〇】此品も前の繼續にて分品せざるも可なれども、特に非多心品第七十の說を駁して、多心品第六十八の結論となせるなり。

が如し。故に心は一にして用が多業を爲すと說く。汝は、一識は六塵を取らざるが故に一心に非ずと言ふも、此の事は然らず、我は根が差別せるを以ての故に識に差別ありとなせばなり。若し識にして眼中に住せば、但能く色を取るのみにして餘塵を取らず、餘も亦是の如し。汝は取と可取とは異ると言ふも、是の事も然らず、心法は能く自體をも知ること、燈の自ら照し亦餘物を照らすが如く、算數人の亦能く自らも算し、亦他人をも算するが如し。是くの如く、心も一にして能く自體をも知り亦能く他をも知るなり。汝は[二六]猨の喩を說くも、是の事も然らず、一猨猴が一枝を捨てゝ復一枝を取るが如く、心も亦是の如く、一緣を捨てゝ復一緣を取ればなり。其の餘の所說は能く自ら業を起し自ら報を受くとなす中にて皆已に總じて答へたり。所以は何、若し心にして異らば、則ち應に異りて作し異りて死し異りて生ずべく、是の如き等の過あればなり。故に知る一心なり。

非一心品[二七] 第七十一

答曰 汝は心は一にして貪等に長く汚さると言ふも是の事は然らず。相續心の中に於ては是れ一相のみなるを見ればなり。夕風は卽ち是れ晨風、今の河は卽ち是れ本の河、朝燈は卽ち是れ昨燈なりと言ふが如し。齒を再生すと名づくるが如きは、而も先の齒は實には再び生ぜざるも、相似せる者が生ずるを以ての故に再生と名づくるなり。是の如く心も異れども相續するを以ての故に是を一心と謂ふのみなり。汝は憶念することを言ふも、人は或は自ら本心を念ず、若し本心にして來らば今何の念ずる所ぞ。又云何が當に此の心を以て卽ち此の心を念ずべきや。一智として能く自體を知るもの有ることなし。故に一心には非ず。汝は修集を言ふも、若し心にして常に一ならば何の修益する所ぞ。若し多心あらば、則ち下中上次第に相續して生ずるが故に修集あり。汝は心が[二八]人相と

【二六】三本宮本に獨猴に作る。

【二七】三本宮本はこゝより第六卷とす此品は前の一心品第六十九の說を破す。

【二八】麗本は人を一に作り、

しと謂ふこと勿れと。又言く、是の心の遍行すること日光の照すが如し、智者は能く制すること鈎の象を制するが如しと。故に知る心は一なり。諸緣の中に走るなり。又無我の故に、應に心が業を起すべし。心は是れ一なるも能く諸業を起し、還自ら報を受くを以て、心が死し心が生じ心が縛し心が解するなり。本更用せし所を心が能く憶念す。故に知る心は一なり。又心は是れ一なるを以ての故に能く修集す。若し念々に滅せば則ち集の力なければなり。又佛の法にては無我なるも、心が一なるを以ての故に衆生相と名づく、若し心にして多ならば衆生相には非ず。又[二三]左が見て右が識るも、應に異り見て異り識るなるべからず。故に知る心は一なり。自ら見て自ら識るなり。

[二四]非多心品　第七十

汝は色等の識は異ると言ふと雖も、是の事は然らず、所以は何、若し心が是れ一にして種々の業を爲し色聲等を取らば、一人が[二五]五向の室中に在りて處々に塵を取るが如くなればなり。即ち是れ心が眼中に於て住し、明等の緣を待ちて、而して能く色を見るなり。即ち此の人が餘處に於て伴を待つが如きは即ち是れ心の知る所の差別なり。即ち此人は先には是れ知者なるも後には還つて知ることなきが如し。是の如く邪知は還つて正知と爲らば、即ち此人は先には是れ淨なるも後には還つて不淨と爲るが如し。是の如く疑知は即ち是れ定知とならば、即ち此人は先には是れ疑者なるも還つて定者と爲るが如し。是れ不善心が即ち還つて善となり、亦無記とも爲らば、即ち此人は或は善を念じ或は不善を念じ或は無記を念ずるが如し。即ち是れ心は能く來去の威儀の差別を作さば、即ち此の人が去來の業等の種々の威儀を爲すが如し。是の如く淨心は即ち不淨と爲り、不淨は即ち淨と爲らば、即ち此人は先には是れ清淨にして後には還つて不淨なるが如し。即ち是れ心は樂と相應し、後には還つて苦と相應せば即ち此の人は本樂人たるも還つて苦人と爲る

【二三】左眼が見、右眼が識るの意。

【二四】前品の繼續なれば分品せざるも可なれども、此品は特に多心品第六十八の說を反駁するものなり。

【二五】五向は五の窓なり。

故に知る多心なり。又可取の法が異るが故に能取も亦異る。人が或は自ら心を知るとなすが如きは云何が自體が自ら知らんや。眼は自ら見ず、刀は自ら割かず、指は自ら觸れざるが如し。故に心は一ならず。又[一〇五]猨喩經にて說く、譬へば猨猴の一枝を捨てゝ一枝に攀ぢるが如く、心も亦是の如く、異り生じ異り滅すと。又若し心にして是れ一ならば、六識衆を說く、此の言は卽ち[一〇六]壞せん。又經の中にて說く、身は或は住すること十載なるも而も心は念々に生滅すと。又說く、當に住心の無常を觀ずべし、此の心は相續するが故に住するも、念々に停らずと。又一業の再びは取るべからざるが如く、識も亦是の如く、重ねては緣に在らず。又草火の移つて薪に到らざるが如く、是の如く眼識は耳の中には到らず。故に知る多心なり。

[一〇七]一心品　第六十九

問曰　心は是れ一なり、所以は何、經の中にて是の心は長夜に貪等の爲に汚さると說くが如くなればなり。若し心にして異らば常に汚さるとは名づけず。又[一〇八]瓔珞經にて說く、若し心にして常に信戒施聞慧を修せば死して則ち上生すと。又[一〇九]禪經の中にて說く、初禪を得たる者は心調柔するが故に能く初禪より第二禪に到ると。又[一一〇]心品の中で說く。

是の心は常に動ずること　魚の水を失するが如し
是の故に汝等は　當に魔軍を壞すべし、と。

故に知る心は一なり、此より動いて彼に到るなり。又[一一二]雜藏の中にて比丘の言く、

[一一三]五門窟の中にて　獼猴は動發し、
獼猴は且く住す　本の如しと謂ふこと勿れ、と。

故に知る一心なり。五根門の身窟の中に於て動ずれば、今は卽ち是れ本なり、故に言ふ、本の如

【一〇五】此經の同一文が三無色定品第一百七十に引用せらる。
【一〇六】六識衆ありといふ言が自語撞着すとの意。
【一〇七】前品と全く相反する說を述ぶ。
【一〇八】瓔珞經の名稱は阿含系統の經名としては普通にはあらず。
【一〇九】五受根品第八十三にも禪經あり。
【一一〇】これ法句經中の一品ならむ。
【一一二】雜藏は大小利業品第九十九にも引用せらる。惡覺品第一百八十二の五藏參照。
【一一三】五門窟は身體をなし、獼猴とは心をいふ。

〔一〇〇〕多心品　第六十八

問曰　已に別の心數なく、亦相應もなきことを知りたり。今、此の心を一と爲んや多と爲んや。有人の謂く、〔一〇一〕心は是れ一なり、生に隨ふが故に多なりと。

答曰　多心なり、所以は何、識を名づけて心と爲せばなり。而して色の〔一〇二〕識は異にして香等の識も亦異なり、是の故に多心なり。又眼識の生ずることも異なり、謂く光明虛空等の緣を待つに、耳識のは爾らざればなり。〔一〇三〕三識は塵が到るが故に生ずるに、意識は多緣より生ず、故に知る一ならざるなり。又若し識にして塵は常に是の如きの相なりと知らば、云何ぞ更に異の塵を知らんや。若し多心が生ずるときは則ち能く知ることを得。邪と正との知は異り、若しくは定若しくは疑若しくは善不善無記の知も異るが如く、善の中にも亦禪定解脫及び四無量神通等の異あり、不善にも亦貪欲瞋恚愚癡等の異あり、無記にも亦去來等の異あるなり。識の能く身業口業を起すあり、威儀を起すあり、若しくは合若しくは離、次第緣の增上に因りて各々差別するが故に、諸心も亦異るなり。又淨不淨等の諸受は差別せるが故に心も亦異る。又所作が差別せるが故に心にも異あり。又淨不淨の心性は各異る。若し心性にして淨ならば則ち垢とならざること、日光は本より淨なれば終に汚すべからざるが如し。若し性にして不淨ならば淨ならしむべからざること、〔一〇四〕毳の性は黑なれば白ならしむべからざるが如し。而も施等の中には實に淨心あり、殺等の法の中には實に不淨心あり、故に應に一ならざるべし。又苦樂等に隨つて受は差別せるが故に心も亦一ならず、比丘よ、識を川つて何等の事を識るや、謂く苦樂不苦不樂を識ると說くが如し。又若し心にして是れ一ならば、一識にして應に能く一切の塵を取るべきも、多心なりと說かば根に隨つて識を生ずれば、是の故に能く一切の塵を取らざるなり。若し心にして是れ一ならば、何れの障を以ての故に、一切を取らざるや。

〔一〇〇〕前の心心數法有無のより此品以下の論生じ來る。

〔一〇一〕此說が論主の取る所なるが如し。

〔一〇二〕色識と香等識とは互に異るとの意なり。眼識の生ずるのも、これ等とも異り、又耳識等とも異るなり。

〔一〇三〕この三識は鼻舌身識なり。此三は合中知なれば、對象が根と合せざれば其識は生ぜざるなり。

〔一〇四〕註に毛なりとあり。

生も亦應に相應すべきも、若し衆生にして相應すべからずんば、貪等も亦相應せず、心相續して行ずる中に垢等の心を生じて諸の相續を汚すを以ての故に心を染すと說くのみ。染より心が解脫を得と說くが如し。是の心相續の中にて若し淨心にして生ぜば解脫を得と名づくるも、是の事も亦然り。雲霧等は日月と相應せずと雖も、亦能く翳と爲るが如く、貪等も亦然り、心と相應せずと雖も亦能く染汚するなり。又煙雲霧等は能く日月を蔽ふが故に名づけて翳と爲す、貪等も亦爾り、能く淨心を障ふが故に名づけて汚すと爲すなり。

問曰　雲霧日月は一時の中に在り、煩惱と心とは是の如くならず、故に此の喩は非なり。

答曰　障礙することは同じきが故に、是の事は已に成じたり、故に咎なし。是の煩惱は能く心相續を汚すが故に名づけて染と爲すなり。汝が[九八]數は心より生じて心に依止すと言ふは、是の事は先に答へたり。汝が心と心數法とは性が羸劣なりと言ふは、念々に滅するを以ての故に羸劣と名づくるのみ。相助くるが故に能く緣に行ずるには非ず。若し相助くとせば應に暫住することを得べきに、而も實には相助くる力あることを見ず、何ぞ相應することを用ひんや。汝は、覺意の相宜しきは是れ時に隨つて應に三覺を修すべきを說くものにして、一念の中には非ずと言ふも、舍利弗の言へるが如し、我は七覺に於て自在に能く入れば、若し心にして掉動せば爾の時には應に猗等の三覺を修すべしと。又佛も亦覺法の次第を說きたもふ。汝は一時に菩提分を修すと言ふも、是の事は然らず、若し一時に三十七品を修せば、則ち應に一時に二信及び五念等を並修すべければなり。若し汝が意にして得處に隨ふと謂はゞ、修は卽ち是れ離修なり。又他の所得に隨へば、二禪等の如くなるが故に不離と名づく。又[九九]一時に三十七品ならば則ち道理なし、所以は何、一念に多法を修することを得ざればなり。

【九八】數は勿論心數法なり。

【九九】三本宮本には修すとあり。

夫の識が緣に造る時には、[九三]四法が必ず次第して識を生じ、次に想を生じ、想の次に受を生じ、受の次に思を生じ、思及び憂喜等ありて、此より貪恚癡を生ずるなり、故に卽ち生ずと說くのみ。汝は五枝の初禪と言ふも、是の禪地の中に此の五枝あるは是れ一時なるには非ず、欲界の三受の如し。所以は何、先に法を說き後に地を說くを以ての故なり。又覺觀は、相應することを得ざること、先に已にへたり。汝は識處を言ふも、此の經の中にては識が處を緣ずることを說くのみにして處に依るとは說かざるなり。何を以て之を知るや。卽ち此の經の中にては、識が色を緣じて喜潤するが故に住すと說けばなり。汝は若し識が識を緣じて住せば則ち應に五識處あるべしと言ふと雖も是の事は然らず、所以は何、是の識の時は少なければなり。識は事を識り已つて心に想等を生じ、是の中に愛を起す、愛を起す因緣を說いて識處と名づく、是の故に識は是れ識處なりとは說かざるなり。又[九四]七識處の中にても亦識は是れ識處なりと說けば、又應に此の經を思ふべし。但語にのみ隨ふこと勿れ。[九五]信は能く河を度ると說くが如き、此の言は不盡なり。而も實には慧を以て度ることを得るなり、是も亦應に爾るべし。汝は心數は心に依ると言ふも是の事も然らず、先に心が事を識りて後に想等を生ずるが故なり。又經の中にて說く、受等は心に依ると。彩畫が壁に依る如きを是を心數が心に依ると名づくるには非ず。汝は心數の相依ること束ねし竹の如しと言ふも經とは相違す、若し俱に相應せば、何が故に心數は心に依るに而も心は數に依らざるや。若し汝にして心は先に生じて大なるが故に數法は依止するなりと謂はゞ、則ち我義を成ず、心が生ずる時には數法なきを以ての故なり。汝は煩惱が心を染するが故に相應を知ると言ふも此れ道理なし、若し心が先に淨なるに貪等が來つて汚さば、是れ卽ち淨法も汚さるべく、則ち法相を害すればなり。亦先に心性は本淨にして客塵が來つて汚すと說きしが如き、彼は應に此に答ふべし。若し心にして[九六]本性淨ならば貪等は何をか爲さん。[九七]心が垢なるが故に衆生垢、心が淨なるが故に衆生淨なりと言ふが如し。然らば則ち衆

が如しとなり。

【九二】 頂生王(Mūrdhagata-rāja)長淨王(Poṣadha-rāja)の頂上の皰中より生れて轉輪王となり、遂に忉利天に上り帝釋天を害して自ら之に代らんとして成らず、地上に還り困病して死したりといふ。

【九三】 四法は前品にいへる觸受想思なり。こゝにては少しく加へたるなり。

【九四】 七識處、七識住とも云ふ、三界五趣の中にて、識が安住する所、愛着する所を差別して、七ケ所を設く。之をいふ。

【九五】 これ想陰品第七十七に引用をらるゝ偈の初一句なり。

【九六】 三本宮本は心性本淨とす。

【九七】 有我無我品第三十五參照。

又心と心數法とは性が羸劣なるが故に相依つて能く緣ずること喩へば竹を束ぬれば相依つて立つが如し。又經の中に說く、心が掉動する時は[八四]三覺に宜しからず、謂く擇法と精進と喜となり、更に動を增すが故なり。三覺意に宜しきは謂く猗と定と捨となり、發動を止むるが故なり。若し心にして[八五]懈沒せば、則ち三覺に宜しからず、謂く猗と定と捨となり退沒を增すが故なり。三覺意に宜しきは謂く[八六]擇法と精進と喜となり、能く發起するが故なり。念は能く倶に調す。又論師の言はく、一時に[八七]助菩提法を修習して、相離るゝことを得ざれと。故に知る相應あるなり。

[八八]非相應品　第六十七

答曰　汝が見の受は是れ神なりと言ふは是の事は然らず。凡夫の癡惑が妄に此の見を生ぜるものにして此は是れ受にして此の識の依止なりと分別すること能はざればなり。是の人にして若し能く是の如く分別せば、亦能く空にも入らむも、是の人は心の相續を見て別たず、但語言のみに著するが故に此の如く說くのみ是れ癡惑の語にして信ずべからず。汝は諸陰に因るが故に名づけて人と爲すと言ふも、是れ五陰の相續に因りて人と名づくるが故に諸陰を說くのみ。世間は樂人苦人不苦不樂人と言ふも、一時に此の三受あるべからざるが如し、諸陰も亦然り。汝は根智相應の信ありと言ふも、經の中にては亦餘事の相應をも說く、二の比丘が一事の中に於て相應すと說き、又[八九]怨と相應するの苦、愛より別離するの苦を說くが如し。汝が[九〇]法の中にては色には相應なきも、而も此れ世俗を以ての故に、亦相應とも名づくるなり。智信も亦爾り、信は能く無常等を信じ、慧は隨つて了知し共に一事を成ずるが故に相應と名づくるのみ。汝は觸に從つて卽ち受等ありて倶生すと言ふも、是の事は然らず。世間にては事が小しく相遠ざかると雖も亦名づけて倶とも爲すことあり、[九一]弟子と倶行すと言ふが如く、亦[九二]頂生王が心を生じ卽ち天上に到るとも說くが如く、此の事も亦然り、凡

く部にも枝とあり。初禪のみ枝については其處を見よ。

【八三】麗本は數を與に作る。此然らば心と法とはとなる。此場合法とは心數法なれば、これにても差支なきが如くなるも、前の第六十一品第六十三品に之と似たる佛言ありて心數法となすを可なりと思はしむれば、今は三本宮本に從ひたり。

【八四】三覺は七覺支の內の三覺支なり。

【八五】三本宮本にはこゝにも念能倶調の一句あり。

【八六】麗本は謂を缺く。

【八七】三十七菩提分をいふ。四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八聖道是なり。

【八八】此品も分品の要なきも前品の說を反駁するが爲に、前品に準じて分品せるなり。文の首に答曰を補ひ見るべし。かくなすが此論の慣例なり。

【八九】怨相應苦は通常は怨憎會苦といふ。怨憎と會ふの苦なり。會は相應なり。

【九〇】汝が法とは有部の說を指す。相應は色には說かずして心心所にて說くのみなればなり。

【九一】師が弟子と倶行すといふも、師と子とは前後多少隔りて行く、之を倶行すといふ

第して說く、若し善人に親近すれば、正法を聞くことを得、正法を聞くが故に能く正念を生じ、正念の因緣にて能く道を修行すと。又[七〇]經の中に說かく、眼が色を緣ずるに因りて眼識が生じ、三事が和合するが故に觸と名づくと。若し心と心數法とにして一時に生ずと說かば、則ち三事が和合すること無く、若し一一に生ずと說かば、則ち三事が和合することとあるなり。是等の緣を以ての故に相應無し。

[七八]有相應品　第六十六

問曰　相應法あり、所以は何、[七九]人の見の受の若きは是れ神にして、識心は之に依りて相應するを以ての故なり。想陰等も亦是の如し。若し相應なくんば、何に由つてか此れあらん。[八〇]又人經の中にて說く、眼が色を緣ずるに因りて眼識を生じ、三事が和合して觸を生じ、共に受想行等を生ずと是の法の中に於て種々なる名あり、所謂、衆生天人男女大小、是の如き等の名なり。皆諸陰に因るなり。若し心と心數法とは次第して生ずと說かば、則ち二陰に因りて人ありて、應に五陰には因るべからず、所以は何、去來の陰[八一]等に因りて名づけて人と爲すべからざればなり。汝にして現在には五陰なしといはゞ、云何ぞ五陰に因りて人天等と名づくと說かむや、而も此の中にては諸陰に因ると說いて、但二のみには非ざるなり、故に五陰に因りて衆生の名あるなり。又經の中には相應有りとの語を說く、謂く根智相應の信ありと。又經の中にて說く、觸は卽ち受想思と倶生すと。又[八二]五枝の初禪を說き、亦受等は是れ識の住處なりと說く、若し識にして相應なくんば、云何ぞ識は受等の法の中に住せんや。是の住を依止住と名づく、所以は何、識は是れ識住處とは說かざるが故なり。又經の中に說く、是の[八三]心數法は皆心より生じ心に依止すと。又說く、衆生の心は長夜に貪恚等の爲に染汚せらると。若し相應なくんば云何ぞ能く染せられんや。

受、因受生慳、因慳守護、因守護故備受鞭杖刀稍等、是名九八〇。彼此比較して九法又は九分を理解するを得るも、譯語の不統一は掩ふに由なし。こゝの上文の九法はよく理解せられ得。

【七五】　三本宮本は枝に作る。

【七六】　此は經名か名目か明確ならず。

【七七】　次品に同一文ありて人經と呼ぶ。

【七八】　此品は分品せざるも可なるものなれど特に前品の說に反して相應法の有ることを主張する說を述ぶれば別品とせるなり。これ有部の說なり。

【七九】　若人見受足神の見は現と通じ、神は我の意なれば、現の受を神となす考をいへるならむ。或は、若し人の見の受にして是れ神ならば、識心は之に依ればなり、相應するを以ての故なり、とも讀まる。されど次品の最初を見れば、見の受が神なることは假定にはあらざれば、今は上の如く讀みたり。

【八〇】　前品に同一文あり。

【八一】　麗本は得に作るも三本宮本では等とあれば、今之に從ふ。

【八二】　三本宮本は支に作るも、後の第百六十五品の初禪を說

を説く。若し比丘にして四念處を行ずれば爾時には念善提分を修習するものにして、心は念の中に在りて諸法を簡擇す、諸法を簡擇するが故に精進を生じ、精進の力の故に能く善法を集めて、心に淨喜を生じ、心に喜を生ずるが故に猗を得、猗を得るが故に心は攝まり、心が攝まるとは則ち定を得、定を得るが故に能く貪憂を捨し、貪憂を捨すが故に知る心數は次第して而して生ずるあり。又[70]八道分經の中にても亦次第して説く、若し正見を得るときは、則ち正見より正思惟乃至正定を生ずと。又[71]次第經の中にて、佛は阿難に語る、持戒の人は應に願欲すべからざれば、心に憂悔なし、持戒の人の心法には憂悔なし、憂悔なき者は應に願欲すべからざれば、心に歡悦を得て、心に憂悔なし、法として應に歡悦すべし、歡悦すれば則ち心喜ぶ、心喜べば則ち身猗を得、身猗すれば則ち樂を受く、樂を受くれば則ち心攝まる、心攝まれば則ち實智を得、實智を得れば則ち厭離す、厭離すれば則ち解脫すと。故に知る心法は次第して而して生ずるなり。又[72]八大人覺の中にても亦次第して説く、若し比丘にして小欲を行ずれば則ち、足ることを知る足ることを知れば則ち遠離す、遠離すれば則ち精進す、精進すれば則ち正しく憶念す、正しく憶念すれば則ち心攝まる、心攝まれば則ち慧を得、慧を得れば則ち戲論滅すと。又[73]七淨の中にても亦次第して説く、戒淨は心淨と爲り、心淨は見淨と爲り、見淨は度疑淨と爲り、度疑淨は道非道知見淨と爲り、道非道知見淨は行知見淨と爲り、行知見淨は行斷知見淨と爲ると。又因緣經の中にても亦次第して説く、眼が色を緣ずるに因りて癡分の濁念を生ず、是の中にて癡は則ち無明なり、癡者の求むる所を愛と爲し、愛者の作す所を業と名づく、是の如き等と。又[74]大因經の中にても次第して説く、愛は九法に首たり、愛に因りて求を生じ、求に因るが故に得し、得に因るが故に挍計し、[75]挍計するに因るが故に染を生じ、染に因るが故に貪著し、貪著するに因るが故に取る、取るに因るが故に慳心を生じ、慳心に因るが故に守護し、守護するに因るが故に便ち鞭杖諍訟の諸の苦惱等ありと。又[76]須陀洹法の中にても亦次

【七〇】八道分は八聖道支と同じ。八聖道なり。宋元宮本は八聖分經とし、明本は八聖經とす。何れも不可。

【七一】此經の同一文の一部が想陰品第七十七に引用せらる。

【七二】八大人覺はこゝにては經名と見るも經名と見ざるも可なり。八大人覺は少欲、知足、寂靜、精進、正念、正定、正慧、無戲論をいふ。詳しくは善覺品第一百八十三を見よ。

【七三】七淨も亦經名か法數名か何れと見るも可ならむ。

【七四】此經の同文が思品第八十四と貪相品第一百二十二と初禪品第一百六十五とに引用せられ、又想陰品第七十七、一切緣品第一百九十一にもあり。

【七五】こゝの原文は愛首九法、因愛生求、因求故得、因得故校計、因校計故生染、因染故貪著、因貪着故取、因取故生慳心、因慳心故守護、因守護故便有鞭杖諍訟諸苦惱。貪相品の原文は是貪增長名求、求時若得名爲得、愛因得則籌量、是可取是不可取、若心決定是因籌量故欲愛、因欲愛故貪著、貪著名深愛、貪著因緣取、取名爲

ち覺の時には欲なきものなれば、識る時に云何ぞ覺あらんや。或は有る人の言く、五識の中には想ありて覺なしと、是の覺は想に因りて生ずれば、云何ぞ想の時に覺あらんや。是の故に應に五識には想なく覺なく觀なきことを受くべし、所以は何、五識の中には男女の分別なく亦受等の分別もなし、是の中にては何の分別する所ぞ。又汝等は、「五識は次第して必ず意識を生じ五識は分別なきを以ての故なりと說くも、」若し五識の中に分別あらば、何ぞ次第して意識を生ずることを用ひんや。又覺觀は應に一心の中にては生ずべからず、麁と細とが相違するを以ての故なり、譬へば鈴を振る初めの聲を覺と爲し餘の聲を觀と曰ふが如く、彼の喩も亦然ればなり。若し五識の中に覺觀あらば、應に其の業を說くべきに、實には說くべからず。當に知るべし心と心數法とは次第して而して生ずるなり。」又癡と慧とは相違すれば、應に俱有なるべからず、云何ぞ一念の中にて亦は知り亦は知らざらむや。又一心の中にては疑あるべからず、所以は何、若しくは杌と若しくは人とが一心の中に行ずることを得ざればなり。心業には此の力なきを以ての故なり。」又人の言く、心數法の中にては憶は過去世の緣に行ずれば現在心は云何が當にあるべきや。又若し此の人は是れ我知識なり、曾て我を利益せりと念じ、念じ已つて喜を生ぜんに、是の事は云何ぞ一心の中に在らむや。」又欲すると欲せざるとは云何ぞ一心の中に在らんや。經の中にて說くが如し、若し諸の比丘にして我法を樂欲せば、法は則ち增長せむも、若し樂欲せずむば、法は則ち損減せむと。云何ぞ當に一心の中に在るべきや、」又若し一心の中に心數法あらば、法は則ち錯亂せん所以は何、一心の中に於て、知と不知と疑と不疑と信と不信と精進と懈怠とあればなり。是の如き等の過あり。」又一切の心數にして應に盡く一心の中に在るべくむば、何れの障を以ての故に、苦樂貪恚等は一心の中に在らざるや。若し汝にして苦樂等は相違するが故に一心の中に在らずといはば、知と不知等も亦相違するが故に應に一心の中に在るべからず。故に相應なきなり。」又〔六九〕七菩提分經の中にて、佛は次第して諸の心數法

【六九】菩提分は七覺支ともいひ、念・擇法・進・喜・輕安・定・捨をいふ。輕安をまた猗とも譯す。

る、故に[六四]識等有りて亦應に次第して而して生ずべし。若し汝が意にして貪等の煩惱の如きは色と共因なれば應に俱生すべしと謂はば、是の事は然らず、色には了知なし、能緣ならざるが故なり、心と心數法とには緣も有り、了もあり、是の故に一時に應に俱有なるべからず、[六五]多の了なきが故なり、又一身を以て一衆生と名づくるは一了を以ての故なり、若し一念の中に多の心數法あらば、則ち多の了あらむ、多の了あるが故に應に是れ多人なるべし。此の事は不可なり。故に一念の中には受等の法なし。又何が故に六識は一時に生ぜざるや。

問曰　諸色は皆次第緣の生ずるを待つが故に一時ならざるなり。

答曰　何れの障を以ての故に一の次第緣が次第に六識を生ずることを得ざるや。當に知るべし、先因後果次第して生ずるが故なり。又經の中に說かく、眼は色を見るも、相を取らず、[六六]相を取るは卽ち是れ想の業なりと。若し佛にして識業を聽るして而も想業を遮すとせば、當に知るべし、或は識あつて而も想なきなり。若し人にして想を取らば、是れ見已つて取るものにして、是れ見る時には非ざるなり。故に知る識等は次第して而して生ずるなり。又經の中にて說く、眼は色を見已つて隨喜し思惟すと。是の中にても亦先に識業を說きて、後に受等を說くなり。又經の中にて說く、見は是れ見るなり等と。故に知る一切の心に盡く受等あるに非ず。又五識の相を以て是の事は明かなるべし、所以は何、人が眼識の中に於ては怨親の相及び平等の相を取ること能はざる若きは、是れ則ち想なく亦憂喜なく分別なきが故なればなり。或は有る人の說く、是の中には亦貪等の煩惱もなしと。故に知る思なきあり。能く後有を求むるが故に名づけて思と爲す。此は後に[六七]當に說くべし。故に知る五識には亦思もなきなり。又汝等の五識は分別すること能はず、此の中に云何が覺觀あるべきや、思惟分別は先に麁にして後に細なるが故に[六八]覺觀と名づくるあり。又若し五識の中に覺觀あらば、我の汝を知ることを欲すと說くが如き、本より皆思に由りて覺が生ずるなり、是れ則

【六四】故有識部は或は、故に有識等もと讀み、有識は心數法を指すと解すべきものならむか。

【六五】一刹那に二識併起するを認めざる考なり。了は了別又は辨別の意にして識なる文字の義なり。以下に於ても了については同じ。

【六六】想は取像の義なこと表はる。

【六七】思品第八十四を見るべし。

【六八】覺觀は尋伺にて麁の思惟分別が覺、細なるが觀なり。

明より心が解脫を得るなり。若し染心より解脫を得と說かば、是の說は遮斷にして、無明より慧が解脫を得と言はば、是れ畢竟斷なり。若し染に從ふが故に心が解脫を得、無明に從ふが故に慧が解脫を得とせば、若し恚等に從つては何れの物の解脫を得んや。是の事應に答ふべし。當に知るべし心を離れて解脫を得ることなきなり。故に但心あるのみなり。汝は心が勝るを以ての故に但心を說くのみなりと言ふも心には何れの勝る義ありて、而も慧等の法には無きや。汝は、人は多く心を識るが故に但心を說くのみなりと言ふも、世間の人は亦多く苦樂をも識れば、應に受等をも說くべく汝が[五九]有餘語と言へる經は何が故に但心數のみを說かずして、而も但心を說くのみなるや。汝が但一法のみを斷ずと言へるは、是の語は[六〇]緣あり、佛は衆生の煩惱の偏に多きに隨つて、[六一]若し常に心を覆ふ者ならば、是れを一法と說きたまへるなり。此の法を斷ずるが故に餘も亦自ら斷ずればなり。是の故に非因なり。汝が、名相を說くが故に心數を說くといふは、汝自らの憶想分別するのみ、是の經は此の義を說かざればなり。汝にして若し自ら憶想分別を生ぜだ、何ぞ名相を以て心緣を說くと言はざるや、此の理あるべければなり。汝が觸は受等の心數の與に因を作るといふは、是の言は多くの過あり、倶に相應の法なるも、而も觸は是れ受等の因にして、受等は是れ觸の因に非ずと言へばなり。此等の咎あり。故に知る但心のみにして別の心數なきなり。

[六二]無相應品　第六十五

相應法なし。所以は何、心數法なきが故に心は誰と相應せんや、又[六三]受等の諸相は同時なることを得ざればなり。又因果倶ならず、識は是れ想等の法の因なれば、此の法は應に一時に倶有なるべからざるが故に相應することなし。又佛は說く、甚深なる因緣法の中にては是の事が生ずるが故に是の事は生ずることを得と。又穀子と芽と莖と枝と葉と華と實と等の如きは現に因果の相次ぐを見

【五九】　大正大藏經の麗本は汝言有餘諸經者となすも縮刷藏經のは諸を語とす。三本宮本も諸を語に作る。之に據れば上記の如く讀まる。有餘語とは第六十二品にいへる不盡語と同意なり。不盡なるが故に即ち有餘なるなり。有餘の諸經の諸は恐らく誤植ならむか。

【六〇】　因緣ありの意。

【六一】　三本宮本は苦に作る。

【六二】　第六十一品に心と心數法とが別に存在すとなす說の中に相應のことがいはれ居たるが故に、それによつて此品以下の說が引出さるゝなり。此品相應法なしと主張すは經部の說なり。

【六三】　以下相應の意味を說く。

との名字と義とを說くべし、[五七]集起を以ての故に心と名づくれば、受等も亦能く後有を集起する相が心に同じきが故に名づけて心と爲さむ。又心と心數とは倶に心より生ずるが故に名づけて心數と爲さむに、若し人但心數法あることを說くのみならば、是の人は應に數法の名と義とを說くべきに、而も實には說くべからず。是の故に非因なり。汝が作が異り及び心に覺を生ずと言ふは皆此を以て答へむ、所以は何、我は心の差別を以ての故に所作の業が異るとし、亦心の中に心を生ずるを心に覺を生ずと名づくればなり。汝が垢と淨とは因なしと言ふは是の事は然らず、數法なしと雖も、而も垢と淨とあればなり。又異相なきが故に心數法無し、所以は何、汝は心に相應するを以ての故に名づけて心數と爲すも相應法は無し、後に當に廣く說くべし。故に心より別に數法あるに非ざるなり。

[五八]明無數品　第六十四

汝は相が異るが故に心數ありと言ふも是の事は然らず、所以は何、若しくは識、若しくは覺の是の諸相は等しうして差別あることなければなり。若し心にして色を識せば即ち名づけて覺と爲し、又想等とも名づく。世間は汝が是の人を識するを即ち名づけて知ると爲すと言ふが如し。苦樂を受くるに從へば亦即ち是れも知るなり。當に知るべし。識は即ち受想なり。若し此等の法にして定まれる異相あらば、今應當に說くべきに、實には說くべからず。故に異相なきなり、汝は慧が解脫を得と言ふも是の事は然らず、因緣なきが故なり。心に染あるに隨つて亦無明もあり、是の心聚の中の染及び無明は盡く與に相應す。若し無明が慧を垢にし心を染垢すと言はば、則ち因緣なし、是の如く無明を離るるが故に慧が解脫を得、染垢を離るるが故に心が解脫を得となすも亦因緣なし。又是を不了義經と名づく。經の中にて三漏を離るるが故に心が解脫を得と說くが如し。故に知る亦無

【五七】心は集起の義なることと佛教に於て一般的のことなり。

【五八】此品も前品の繼續にして別品となさざるも可なり。されど前の非無數品第六十二を反駁し、無數品第六十に相應ずる結論的のものなり。

非有數品　第六十三[五三]

答曰　汝は相應するを以ての故に心數法ありと言ふも是の事は然らず、所以は何、諸法は獨行すればなり。後に廣く說くべし。故に相應することなし。是の心は獨り行くといふにも亦此れを以て答へん、同性を遮するに非ずして、是れ數法を遮するなり。」汝は異を攝するが故に心數ありと言ふも、是れ經を作る者が自ら名字を立つるのみにして、佛は經の中にて相攝を說かず、是の故に非なり。」汝が依處と言ふものも、汝の意識が心に依るが如く、依るを以ての故に便ち名づけて數と爲すにはあらず。是くの如く心は心に依るも異るものと名づくることを得ず。」汝は五陰なしと言ふも是の事は然らず。我は心の差別を以ての故に、名づけて受と爲すもあり、名づけて想等と爲すもあればなり。汝は心數を以て別つて三陰と爲すも、我は亦心を以ても別つて三陰と爲す。」汝は生ずることが異ると言ふも、是の事も然らず、若し心にして數法と共に生ぜば、何が故に二が心を生じ、三が心數を生ずと言はんや。若し但心を說くのみならば則ち此の理あり、所以は何、是の人は先に識の時を說き後に[五四]相等を說けばなり。」汝が相應して緣と世との故に異あるを知ると言ふは是れ先に已に破したり、相應することなきが故なり。汝は智に依りて識に依るに非ずと言ふも、我は心に二種あり一を名づけて智と爲し、一を名づけて識と爲す、故に智なる心に依りて識に依らずと說くなり。」[五五]汝は佛が心に依りて生ずる法を心數と名づくと說きたまふといふも、心の生ずる所の法を名づけて心數と曰はば、心も心に依りて生ずるが故に心數と名づけむ。」汝は佛も亦心數なしとは說かずといふも我も、亦心數法なしとは言はず、但心の差別の故に名づけて[五六]心數と爲すと說くのみ。又若し道理あらば、不可說をも說くと名づくるも、其にして道理なきが如きに說くと雖も說くには非ず、是の故に說くを以て因と爲すべからず。」又我等は當に心と心數法

【五三】此品は前の立有數品第六十一を反駁するものなり。

【五四】三本宮本は想とす。

【五五】無相品第二十參照。

【五六】心數法なしといふは心より別に心數法なる實法なしといふ意なるを見るべし。

ざるが故なり。又心垢なるが故に衆生は垢なり、心淨なるが故に衆生淨なりと說くが如き、若し但是れ心のみならば、則ち垢と淨とは因なし。是の人は無明を以ての故に垢にして、慧が明なるが故に淨なるにあらずむば、自ら垢たり自ら淨たるべし、此れ則ち不可なり。是の故に心數法あり。

[五〇] 非無數品　第六十二

汝は能緣の法を心と名づけ、心の差別を數と名づく、道品の中に說くが如しと言ふと雖も、是の事は然らず、所以は何、經の中に、心相は異にして心數の相は異なり、能識は是れ[五一]識の相、苦樂を覺するは是れ受の相、別知するは是れ想の相、起作するは是れ行の相なりと說けばなり。故に知る心は異にして心數も亦異なり。汝は心が解脫を得と言ふも、是れ亦然らず、餘經の中にて說く、無明を離るるが故に、慧が解脫を得と。[五二]故に但心が解脫を得とのみは說かず。又心勝るを以ての故に但心を說くのみ。又世間人は皆多く心を識るも、數の法は爾らず、故に佛は偏に說くのみ。又佛の經の中には不盡の語ありとは此れ是れを言ふなり。又經にて說くが如し、汝等比丘にして能く一法を斷ぜば、我は汝等が阿那含道を得ることを保す、所謂貪欲なりと。而も實には偏に斷ぜず、是の事も亦然り。歡喜心等も皆此を以て答へん。汝は內外の二法を言ふも、是れ亦然らず。外に名色ありと說くは即ち心數を說くなり、外入の攝なるを以ての故に名づけて外と爲すのみ。又是の中にて佛は三事を說く、內に識身ありとは即ち識と根とを說くもの、外に名色ありとは即ち是れ塵を說くものなり。汝は識身ありと說くと言ふも、是れ亦然らず、此の經の中にては外の一切の相は即ち是れ心數なりと說けばなり。汝は三事が和合するを觸と名づくと言ふも是の事は然らず、觸は受等の心數の與に因と作れば、是の故に獨り說くのみなればなり。

と識との三が和合して、心數法を生ずとの意なり。心數法をこゝにては觸を例として出せり。

【四九】 四依とは、行四依・法四依・人四依・說四依とあれども、此處に當る四依は法の四依なり。一、依法不依人、二、依了義經不依不了義經、三、依義不依語、四、依智不依識なり。四法品第十六參照。

【五〇】 此品は前品の繼續なれば、別品とせざるも可なるものなり。されど特に前々品に於ける無心數家の說を破す。

【五一】 後世の語にては識＝了別、受＝領納、想＝取像、行＝造作が通常なり。相は特質の意。

【五二】 三本宮本によりて故を補ふ。

問曰　心と心數法とは異なる、所以は何、心と心數法とは共に相應するが故なり。若し心數なくんば、則ち相應すること無からんに、而も實には相應するものあり。故に知る心數法あるなり。汝意にして若し心と餘の心と相應すと謂はば、是の事は然らず、所以は何、經の中にて、[四六]心は獨り行き遠く逝きて、寢ね藏れて形なしと說けばなり。是の中にては但同性を遮するのみなり。心數と共に行くと雖も猶ほ名づけて獨行と爲すは、比丘の獨處には虫獸ありと雖も、類なきを以ての故に、亦獨處と名づくるが如し。故に知る心は餘の心とは相應せざるも、而も實には相應あるなり。故に知る數あり。又[四七]心は七界一入一陰の所攝なるも、心數法は一界一入三陰の所攝なり。又心は是れ依處なるも、數法は依止なり。經の中にて、是の心數法は皆心に依りて行ずと說くが如し。又若し心數なくんば則ち五陰なからん、是れ則ち不可なり。又[四八]此の二の生ずることは異る。二より心を生じ三より數を生ずればなり、經の中に說くが如し、眼が色を緣ずるに因つて眼識を生じ。三事が和合するを觸と名づけ、觸の因緣にて受を生ずと。又說く、名色の集の故に識の集あり、觸の集の故に受の集ありと。又心數法は所依と相應して同じく共に一緣にして、一世の中に在るも、心は是の如くならず。是の差別を以ての故に知る。心は異心數法は異なり。又[四九]四依の中に說く、智に依りて識に依るに非ずと。智にして若し是れ識ならば、云何ぞ依ると言はんや。故に知るぬ智は識に非るなり。又佛自ら心數法の名を說いて、心より生じ、心に依止するが故に、名づけて心數と爲すと謂ふ。又佛が此の義唯獨の心のみあつて而も心數なし――を說かず。他の人も亦但數のみあつて而も心なしと言ふべければなり。汝にして若し名字を以て數を破さば、我も亦名字を以て心を破すべし。又所作が異るが故に、諸法の相は異る、水は能く浸潰し、火は能く焚燒するが如し。是の如く受等の所作が異るが故に、知に異相あるなり。又諸經の中にて說く、心の中に覺を生ずと。故に知る心數は心に異る。應に心中に自ら心を生ずべから

【四五】　心の外に別に心所あるを主張する說を述ぶ。

【四六】　此經の言は前の根塵合離品第四十九にも引用せられ居たり。

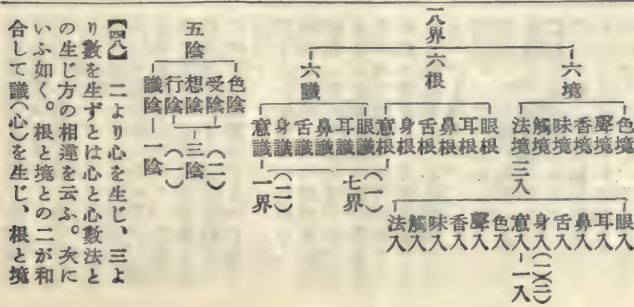
【四七】　(一)心は七界一入一陰の所攝、(二)心數法は一界一入三陰の所攝なり。とは左圖によりて知るべし。

十八界
- 六境：色境　聲境　香境　味境　觸境　法境
- 六根：眼根　耳根　鼻根　舌根　身根　意根
- 六識：眼識　耳識　鼻識　舌識　身識　意識

(一)七界：眼識　耳識　鼻識　舌識　身識　意識　意根
(二)一界：法境

三入：眼入　耳入　鼻入　舌入　身入　意入　色入　聲入　香入　味入　觸入　法入
(一)(二)一入

五陰：色陰　受陰　想陰　行陰　識陰
(二)三陰：受陰　想陰　行陰
(一)一陰：識陰

【四八】　二より心を生じ、三より數を生ずとは心と心數法との生じ方の相違を云ふ。次にいふ如く。根と境との二が和合して識(心)を生じ、根と境

心意識は[三八]體一にして而も名を異にするのみ。若し法にして能緣ならば是れを名づけて心と爲すなり。

問曰　若し爾らば、則ち受想行等の諸の心數法(しんじゆほふ)も亦名づけて心と爲さん、倶に能緣なるが故なり

答曰　受想行等は皆心の差別の名なり、[三九]道品の中の如し、一の念に五の名——念處と念根と念力と念覺と正念と——あり。精進等も亦是の如し」。又一の無漏慧に而も苦習[四〇]智等の種々の別名あり。」又一の[四一]定法を亦は名づけて禪とも解脱とも除入とも爲す」。是の如く、心は一なるも、但時に隨ふが故に差別の名を得るのみ。故に知る但是れ一の心のみなり」。所以は何、經の中にて、是の人にして漏心が解脱を得んと欲せば、有漏の無明の漏心が解脱を得と說くが如き、若し別に心數あらば應に心數が解脱を得ると說くべければなり」。又經の中にて說く、佛は若し衆生が歡喜心柔軟心調和心にして解脱を得るに堪任なりと知らば、然る後に爲に四眞諦の法を說きたまふと。是の中にも心數を說かず」。又[四二]經の中にて說く、心垢なるが故に衆生は垢なり、心淨なるが故に衆生は淨なりと。」又說かく、若し比丘にして四禪の中に入りて清淨不動心を得ば、然る後に如實に苦聖諦集滅道諦を知ると。又十二因緣の中にて、行は識に緣たりと說き、又六種を人と爲すと說き、又輕躁して轉じ易きこと心に過ぐるはなしと說き、又經の中に、使が城主に詣りて其の事實を語り、語り已つて還り去る、主を名づけて心と爲すとも說く」。又内に[四三]識身あり、外に名色あり、是れを名づけて二となすと說きて、」又但識身のみあるを說くも、心數有ることを說かず」。又三事が合するが故に觸と名づくと[四四]說く。若し心數あらば、名づけて三と爲さざらむに、而も實には三と說く。故に知る但心のみにして別の心數無きなり。

[四五]立有數品　第六十一

數は心所有と同じ。心數法にて心所有法なり。

【三八】心意識は體一異名なりとは佛教にては古くよりいふ所、小乘にてもまた大乘にても、唯識系統を除いては、認められたるものなり。唯識系統にても一方には心意識は體別異名となすも同時に他方にては三名は同一のものを指すとなす。以下心のみにして心所なしとの說を述ぶ。これ經部又は經部の一部人の說なり。心と爲すといふ心は識の意。四法品第十六に能識の故に識なりとの經の言あり。有相品第十九にも能緣の法は心心數法なりとの經の言あり。

【三九】三十七道品なり。

【四〇】習は集の古譯。後にもあれど、通常集と用ふ。

【四一】勿論禪定法なり。

【四二】此經有我無我品第三十四にもあり、何れの經ともいはれ居らざれど、此句を有する經は阿含の中にも存すれどよく知られたるは維摩經なり。

【四三】身は積集の意、一識のみならずして六識あれば、識身といふ。身は身體の意味ならず。

【四四】有相第十九にも三事合故名觸の經あり。此言は阿含經中諸所に存す。

相あらば、則ち堅相は卽ち流相と爲るなり。若し堅相を失して而も流相あらば、是れ則ち冷觸が滅し已つて更に冷觸を生ぜるなり。地觸の如き是れ不冷不熱なるも火と合する時に、觸にして若し失せずんば則ち〔三一〕熟變と名づけず、若し此の觸を失せば、更に異觸を生ず、是の如くならば、則ち冷觸は失し已つて更に冷觸を生ずるなり。若し爾らば、水の諸の求那も亦應に〔三二〕熟變すべし。汝が言は反覆して過あり。又相違の法が生ずるが故に諸相は無常なり。火と合するが故に草等の相は滅するが如し。若し熱觸が冷觸を覆ふと謂はば、他の人も亦乳相は滅せずして但だ酪相が覆ふのみと言ふべし。故に不可得なり。若し汝にして乳は還乳と爲るを見ずと謂はば、然らば則ち熟度あることなきなり。所以は何、無始の生死の中にて、何物か火の爲めに燒かれざらんや、〔三四〕亦土中に黑泥の得べきあるを見ればなり。當に知るべし亦熟變に從りて還る。故に知る熟變するも常に還らざるには非ざるなり。是の如くなれば、則ち冷觸が失するも還冷觸を生ずるなり。或は火と合することあるが故に黑色は滅し還つて黑色を生じて、赤色が滅し還赤色を生ずるなり。是の如く冷觸は滅し已るも、火を離るれば還生ずるなり。斯れに何の咎かあらん。又衞世師人の說かく、但地にのみ熟變の相あり、水等の中にはなしと。而も藥師は說かく、若し沸湯を飮まば則ち異果を得と。若し湯の中にて色等が失せずんば、安んぞ異果あらんや。故に知る水等にも亦熟變あるなり。火の物を燒くが如きは、本相を失するが故に更に異相あるなり。故に知れる物には異相あり、水も亦是の如くなり。又是の諸相は相違するが故に無常なり。水は能く火を滅し、火は能く水を消すが如し。火の力は物として〔三五〕消せざるなし、況んや水と合して而も冷觸が滅せざらんや。是の故に衞世師の〔三六〕經の水は決定して冷なりと說くは是の事は然らざるなり。

〔三七〕苦諦聚の識論の中の立無數品　第六十

實に屬するも、これが火と合するときは水の德が表はれて流るるとなす。故に白鐵等は地原子とそれ以外の原子とが結合して成れる複合物なるなり。

〔三二〕燒生なり。次を見るべし。

〔三三〕熟變は勝論說にては地以外にはいはざることなり。地にても瓶等燒物の生ずるとき等の場合にいふのみ。然しかゝる地に和合する德について同じくいふを得るなり。

〔三四〕何物が燒かれざるあらずむや、何物も燒かるゝなり。故に現に見る土も曾ては燒かれたるなり。從つて土として泥の黑色あるべき理なきに、事實、黑泥を見る。卽ち一度熟變したるものが再びもとのものに還れる證なりといふ意なり。何物にても燒かるとけ恐らく劫火に燒かるゝをいふならむ。

〔三五〕この消は鎔かすの意か又は破壞すの意なり。

〔三六〕意味としては勝論經にても勝論說にても可なることを前に註したり。

〔三七〕以上第三十六品より第五十九品までにて苦諦聚の中にて色論を終りたれば、此第六十品より識論をなす。立無數品の數は心數をいふ。一二等の數字の數の意ならず。心

答曰　六に限らざるなり、所以は何、或は三味が合し或は三或は四にして是の如く無量なればなり。甜と酢とが合するを以ての故に甜酢味とは名づけざれば、甜と酢とが和合して更に異味を生じ、是の如くにして無量なり。又世俗に隨ふが故に諸味を差別す、人が以て甘と爲さば卽ち名づけて甘しと爲すが如し。又諸味の熟する時には各々相因る、甘味が熟する時には或は甘く或は變じ、餘味も亦爾ればなり。故に知る諸法に是の如きの力あるなり、[二八]惟六のみなるには非ず。

觸相品　第五十九

[二九]觸は堅と軟と輕と重と强と弱と冷と熱と澁と滑と强澀と猗樂と疲極と不疲極と若しは病むと、若しは差ゆと身利と身鈍と嬾重と迷悶と瞪瞢と疼痺と嚬申と飢滿と飽渴と嗜樂と不嗜樂と懵と等に名づく。

問曰　有が說かく、觸に三種――冷と熱と不冷不熱と――ありと。是の事は云何。

答曰　堅等の中に於て知を生ずるなり。若し堅等を離るれば冷熱の知なし。

問曰　優樓佉[三〇]の說く、地の觸は是れ不冷不熱なり、風の觸も亦爾り、水の觸は冷、火の觸は熱なりと、是の事は云何。

答曰　先に已に決定あることなしと說きたり、謂く酥等は定んで冷にして鑞等は熱なし。又先に三觸を說きしが、若し是の風にして、客ならば則ち風には別觸なきなり。故に定相無し。又湯の中の冷相は得べからず、故に水は定んで冷相なるには非ず。

問曰　湯の中には微なる冷相あるも火が勝るが故に知らざるのみ。何を以てか之を知る。若し火の勢にして盡くれば還て更に冷なるが故なり。

答曰　[三一]白鑞等と酥等との堅物は火と合するが故に則ち流る。若し堅相にして失せずして而も流

【二八】最後の一句は麗本になく、三本宮本にのみあり。

【二九】觸に二十八を數へて說く。

【三〇】優樓伽自身を指すと解するも又は前にいへる優樓佉の弟子又は衞世師人を指すと解するも何れにても可なり。

【三一】これ勝論經にある文なり。勝論說にては白鑞等は地

の相は亦定んで冷なり。而も酥等は香あるが故に、說いて地物と名づく。又言く、火は決定して熱なり。白鑞等を以て火物と爲すに、而も中には定れる熱なし。又月等は實に冷なるも、而も汝は說いて火物と爲す。此等を以ての故に。諸の陀羅驃には決定の相なし。是の故に香は唯地にのみに有りとなす此の事は然らず。汝は白鑞等を以て火物と爲すも、是れ亦然らず、所以は何、決定して熱なきが故なり。優樓佉の弟子は、火は決定して熱ありと說く而も白鑞等には熱なし。

問曰　白鑞等の物の熱は果の中に在りて、觸の中には在らざるなり。

答曰　酥の果は冷なり、故に應に是れ水物なるべきに、而も汝は定んで香有るを以ての故に名づけて地物と爲すとす、是の故に果を說いて、因を用ふとは名づけざるなり。[二二]又訶梨勒は果の時には定んで熱あれば、應に是れ火物なるべきに、而も實には香あり五味あり。故に火物とは名づけず、果は因に非ずと說くを以ての故なり。白鑞等は是れ火物に非ず。又火相は輕く白鑞等は重く、火色は白くして、而も白鑞等の色は[二三]異る。又白鑞等と火と同相あることなければ、是れ火物と知るを得べけむや。又白鑞等は火と相違す、所以は何、熱すれば則ち[二四]消ゆるが故なり。若し是れ火物ならば、火を得れば應に增すべきに、而も實には增さず。故に火物には非ざるなり。汝等は善思せざる故に、香は惟是れ地物なりと謂ふも、是の香は皆四衆の中に在るなり。

味相品[二五]　第五十八

味は甜酢鹹辛苦淡[二六]等に名づく、此の六味は皆物に隨て差別す、四大が偏に多きを以ての故に有るに非ざるなり。地水が多きが故に甜しと說くが如きは是の事は然らず、甜味には無量の差別あればなり。當に知るべし、物の生ずるには自ら別異あるなり。

問曰　[二七]藥師は但六味あるとのみと說く、此事は云何。

【二二】訶梨勒、Haritakiの音譯前に出でたり。

【二三】三本宮本は黑とす。白鑞が黑しといへるや否や。鑞は註に錫なりとあればなり。

【二四】消ゆは鎔くる意。

【二五】此品は六味は物に隨つて差別あるものにして、四大が偏に多きに因るにはあらずと論ずるなり。

【二六】等は所謂等內の等にして複數なるを示すに過ぎず。六味として六を擧げ居ればなり。原文は明に madhura-āmra-lavaṇa-kaṭuka-tikta-ṣāyāḥ なり。六味の前後は淡とあれど、澁の誤寫ならむ。

【二七】藥劑師のこと。

と爲すや。

答曰　香の和合するに因りて更に異香を生ずること、青黃の色が雜りて更に綠色を生ずるが如くなり。又種々の業の因緣を以ての故にも、種々の香を生ず。

問曰　[一九]優樓佉の弟子は香は唯是れ地のみの求那なりと謂ふ、此の事は云何。

答曰　陀羅驃なきこと、是の事は已に明したり。故に知る然らざるなり。又衞生師の人の謂く、[二〇]白鑞鉛錫金銀銅等は皆是れ火物なるも、而も是の中には香あり。故に知る唯地にのみあるに非ざるなり。

問曰　白鑞等は地と合するが故に香あるなり。

答曰　此れ客香には非ず、所以は何、先に餘物の中には此の香を聞かざればなり。若し曾て聞きし者ならば是れ客といふべきこと、先に華中の香を聞いて後に衣の中にて聞くを是を客なりと名づくべきが如くなるに、是の白鑞等の香は是の如くならず。是の故に非因なり。又是の白鑞等は無香の時無ければ、應に客とは言ふべからず。又我も亦水等の中には色等なきも、但地と合するが故にのみ色等を得べしと說くべし。若し汝にして水等の中には自ら色ありと言はゞ、我も亦白鑞等の中には自ら香ありと說かん。又若し物の中に相離せざる法あらば、即ち此の物はあるなり。是の故に香は相離せざる處に隨つて、即ち此の物香しきなり。又水等の中に若し香あるも、微なるを以ての故に知らずとなすに何の咎があらん。月中に火あらば、火は決定して熱しと說き、又汝は溫室の中にて火が滅するも餘熱の中には微なる色ありと說き、亦湯の中には微なる冷の相ありと說くが如く、水の香も亦爾り。是の中には決定の因として水中には香なしと言ふもなし。又汝の諸の陀羅驃には決定の相なし、所以は何、汝自ら誓つて地中には香ありと言へばなり。而も金剛玻梨等は燒けて[二一]變異すが故に皆是れ地物なれども、而も皆香なければなり。又汝が水相は定で冷なりと言はゞ、乳等

【一九】　優樓佉、(Ulūka) 勝論派の開祖、迦那陀(Kaṇāda)の別名、優樓佉の弟子といへば、勝論派の人々なり。次に衞世師人といふ同じ。香が地の德なるについては前に註したり。

【二〇】　勝論經に此まゝの文はなきも、意味ならば存す。

【二一】　これ前に註せる燒生又は熟生のことゝ同じ。

言ふべきも、而も實にはなし。故に一切が相振れて盡く能く聲を生ずるには非ず。

問曰　俗の中にては、常に聲は是れ[一四]空の求那なりと言ふ。今、何を以てか之を知る。四大より生ずればなり。

答曰　今、現見するに、聲は四大より生ず、我等は現見を信ずるが故なり。又鐘の聲、鼓の聲と言ふが故に是れ鐘鼓の聲なりと知る。又四大は異るを以ての故に聲に差別あり、鐘鼓の聲の異るが如し。又銅器を撃てば則ち聲と動と倶に有るも、捉ふれば則ち倶に止む。當に知るべし、器の動と聲とも亦是の如し。又將に聲を爲んと欲すとすれば、必ず四大の質像を備ふ、故に知る聲は大より生ずるなり。又[一五]業の因緣の故に、聲に差別あり、衆生の聲が或は麁或は妙なるが如し。應に業の緣を以ての故に空の求那を生ずべからず、是の故に非なり。又因の相の故なり。因の相とは法に隨ふなり。何を以ての故に。有を卽ち名づけて因と爲せばなり。是の如く大に因つて聲あり、無くむば則ち聲なし。火あれば則ち熱く、火無くむば熱なきが如し。當に知るべし、火より熱あるなり。大より聲を生ずることも亦復是の如し。虛空熱することあるが如きは、虛空は猶在るも、而も熱は或は無し。當に知るべし、空は熱の因に非ず。聲も亦是の如し。虛空あつて聲あるが如きは、虛空は猶在るも、而も或は聲なし。故に知る非因なり。又聲は是れ虛空の求那なりとは、此れ信ずべきなし、現の事の中にて初めて聲の因を見ざれば、空に於ても亦比知することとなければなり。是の中にては何を以て比と爲さむや。又[一六]經書の中にも亦多く相違す。是の如く一として信ずべきなし。故に知る然らざるなり。

[一七]香相品　第五十七

問曰　[一八]多摩羅跋等の衆香が合するが故に、其香は本に異る、此等の香に卽して更に異香を生ず

【一四】勝論說にては聲は虛空の特有の德なりとなす。正理派も亦同說なり。

【一五】この業は佛敎にていふ善惡業なり。

【一六】經書とは印度一般の認むる典據となる經なり。

【一七】此品は香は地のみの德なりとの說を破して香は四大に通ずとの說を立つ。

【一八】多摩羅跋(Tamālapattra)にて、藿葉といふ。香の名なり。

なし。

答曰　法が異處に於て起る時には、若しくは他を益し他を惱ますが故に、罪福を成ずるなり。應に難ずべからず。

聲相品　第五十六 [二]

問曰　何が故に聲に因りて大を成ずと說かざるや。

答曰　聲は色等を離るるも、色等は相離せず、是の故に說かざるなり」。又聲は色等の如くに、常に相續せざるが故に」、又亦色等を俱生もせず」、又色等とは生じて異る、所以は何、色等は相生じ、漸く以て根と芽と次第して而して有るも、聲は是の如くならざればなり」。又聲は物に從つて名を得ること、瓶の聲と說きて、瓶中の聲とは言はざるが如し」。又人は、或は瓶を見ると言ひ、或は瓶の色を見ると言ふも、初より瓶を聞くと言はずして、但瓶の聲を聞くと言ふのみ」。又衆生は昔より靜寂の業を植うるが故に、若し萬物にして皆常に聲あらば、則ち時として暫くも靜なること無し。是の故に聲は諸大の因を成すには非ず。

問曰　物には皆聲あり。何を以てか之を知る。振るれば則ち聲を發すればなり。諸大は常に相振るるが故に一切盡く應に聲あるべし。

答曰　萬物の相振るるは皆是れ聲の因なるには非ず、所以は何、眼にて二指の相振るるを見るも聲を生ずること能はざればなり。

問曰　是の中には聲を生ずるも、微なるが故に知らざるのみ。

答曰　生ぜず、乃至微聲だも亦聞えざるが故なり。若し聲ありと言ふも、則ち現に信ずるものなし。他の人も亦水中に[三]聲あるも、細なるが故に聞えず、火中に味あり、風中空中に皆色等ありと

【二】此品は聲は色等を離る、色等は相離せず、故に聲に因りて大を成ずとは說かずと論ず。又聲は空の德なりとなす說を破す。

【三】麗本は香とす。今は三本宮本による。

にして而も妄に見るものなるが如く、色を見るも亦爾り。是の故に眼等は悉く邪縁たり。汝根と塵とが合するが故に知を生ずと言ふも、若しくは到るが故に知るとなすも、到らずして而も知るとなすも、皆先に已に答へたり。

色入相品[九]　第五十五

又言く、青黄等の色を名づけて色入と爲す。經の中に說くが如し、眼入が滅すれば色相は離る、是の處なり、應に知るべしと。

問曰　有が[一〇]說かく、業と量とも亦是れ色入なり、所以は何、經の中にては黑白長短麁細の諸色を說くが如くなればなり。

答曰　形等は是れ色の差別なり。何を以てか之を知る。若し色を離るれば則ち形量等の心を生ぜざればなり。若し形等にして色と異らば、色を離れても亦應に心を生ずべきに、而も實には生ぜず。故に知る異らず。

問曰　先に色の心を生じ、後に形の心を生ずるなり、所以は何、黑白方圓の心は並び生ぜざればなり。

答曰　長短等の相は皆色に緣るが故に意識の中に生ずるなり。先に色を見て、然る後に意識に男女の相を生ずるが如し。業も亦、諸の有爲法は念々に滅するを以ての故に滅法として去らざるはなく、去るを以ての故に名づけて[一一]業と爲すなり。

問曰　去るを身業と名づく。若し去ることなくんば則ち身業なきなり。

答曰　世俗の名字の故に身業あり、第一義には非ざるなり。

問曰　若し第一義の中に身業なくむば、第一義の中には亦罪福もなし、罪福なきが故に亦果報も

【九】此品は青黃等は色相にして黑白長短麁細等は色の差別なることを明にす。

【一〇】勝論者を指す。

【一一】この業は勝論說にていふ業なり。勝論說にては業は運動を形式的に見たるものに外ならずして、取捨屈伸行の五種なりとなす。これ垂直とお水平と其結合なり。

然らず、所以は何、法にして若し決定せば、則ち和合なし、體が相異るが故なり。木を合すること密なりと雖も、猶其の際を見るが如く、根と塵との和合して見えざることも是の如くなり。汝にして神を以ての故に覺すと言はば、當に神なしと說くべし。汝は諸大が根を成ずと言ふも是の事は然らず、業力が大を變じて根と爲さば則ち差別あればなり。

問曰 根は是れ決定なり、所以は何、是れ四大の所成なればなり。四大は定なるが故に根も亦決定なり。[七]又眼等の根は是れ決定なるを以ての故に、大等は能く利益を爲し、又大が變じて根と爲るなり。大が決定なるが故に變成する所の法も亦應に決定なるべく、又根に當つて塵あり、塵に當つて根あるなり。若し決定ならずんば應に相當るべからず、應に意と法との如くなるべし。故に知る決定なり。又世間人は瞳子等の決定せる法の中に於て說いて諸根と名づく。又、[八]根は五種の定法を知ること、意等の如くに非ず。故に決定と名づく。又根は現在のみを知り、餘は皆比知す。故に決定と名づく。又根の知は有緣なるも、意は亦無緣にてもあること、過去等を知るが如し。又根と塵とが和合するが故に根の知を生ず、法として應に決定せる根を以て決定せる塵に對すべし。故に知る決定なり。

答曰 汝は、根は大に由りて成ずれば決定と名づくと言ふも、倶に諸大に由ると雖も、而も是れ根なると非根なるとあり、是くの如く或は決定せるあると、或は決定せざるとなり。汝は利益すと言ふも、知を利益のみにして、根を助くるには非ざるなり。又大が變じて根を成ずと言ふも、變も亦知たり、根を利益するには非ず。又四大の清淨なるを根と名づく。故に決定には非ず。汝根と塵とが相當すと言ふも、亦是れ意が定なるなり、根は知に非ざればなり。故に其の餘は皆是れ意力の差別なり。又六識を說くと雖も、要ず意識を以て決了するなり、四諦を見る時、現に諸法を知るが如し。正しく法性を觀ずるは皆意識を以てするなり。又旋火輪と及び幻化と焔と乾闥婆城とは皆無

[七] この明に勝論說なり。

[八] 五根と五塵とが相互に一定し居るをいふ。眼には色、耳には聲等の如く一定し居りて混ずることなし。

法は不可得なり。故に決定なきなり。」又決定するを得ば、色等の法は則ち覺すること能はざるも、根を得れば則ち覺す。故に決定に非ず。

問曰　眼の光は能く大小を見、亦能く遠く去つて色を見るに、障礙あることなきこと、猶日光の身を離れて能く見るが如し。是の光は二眼の定まれる處に因りて合して一光となり、而して能く色を見るなり。」又眼は是れ一なり、耳鼻は內に在りて分別すべからず、是の故に汝が異りて見、異りて識ると說く此の言は則ち壞す。」又神が知り、根には非ず、根は是れ所用なるのみ。又汝が合せる法は不可得と言ふは、是の事は已に答たり、謂く日光が映ずる等なり。耳等の諸根は和合が密なるが故に亦不可得なり、木を合するに密際ならば知るべからざるが如し。」又神に因るが故に覺す、是れ諸根なるには非ず。又根は大に由りて成じ、大は覺なきが故に、根も亦覺に非ざるなり。又瓶は微塵に因り、微塵に覺なきが如く、瓶にも亦覺なきなり。」又異塵を知らず。故に知る覺なきなり。

答曰　汝にして光が去るが故に根は是れ決定なりと言はば、汝は光を以て根と爲すなり。光は定に非ざるが故に根も亦定ならざるなり。又此の光の無なり、先に已に破したるが故なり。又汝は一眼なりと言ふも、是の事は然らず。〔六〕一眼の見るは異、二眼の見るは異なり。若し一眼にして壞すれば見ることは則ち明ならざればなり。是左右の眼は先に已に答へたり。

問曰　若し一眼が能く識を生ぜば、則ち二眼は應に是れ一眼なるべし。何ぞ第二の眼を用ふることを爲んや。

答曰　鼻が隔つるを以ての故に、一と爲ることを得ざるなり。設ひ障隔なくも一亦と爲さざること、手指等の如し。汝が是れ神の所用なりと言ふは、此の事は先に破したり。神は用ふること能はざればなり。日光の映ずるも是れも亦先に破したり。汝は和合が密なるが故に見えずと言ふも、是れ亦

〔六〕一眼の見ると二眼の見るとは異るの意。

は五根は[四]我より生ずと說くも、我が卽ち色なるには非ず。又言ふ、五根は大を知り小を知るが故に決定に非ずと、是の人も亦無色を以て根と爲すなり。是の故に佛は諸根は是れ色にして、色等に因りて成ずと言へるなり。或は謂ふ、色等に因りて成ぜば、應に可見なるべしと。故に不可見にして、亦耳等の根の得る所にも非ずと說く。或は謂ふ、若し爾らば便ち應に無對なるべし、と。故に有對なりと說く、諸塵に對するが故なり。若し色にして有形有對ならば、是を塵色と名づく、但眼の見る所なるのみ。又外道の言く、諸の[五]數と量とは異と合と離と好と醜と作業と總相と別相と及び陀羅驃とは、色法に非ずと雖も、亦是れ可見なりと。故に佛は說いて、此等の中に於ては但色のみ可見なり餘法には非ずと言へるなり。手等に礙へらるるが故に有對と名づくるなり。

問曰 若し爾らば皆應に受觸なるべし。

答曰 俱に障礙すと雖も一切處に盡く生ずるには非ず、身識が隨つて識を生ずるが故に諸根を分別するなり。復次に諸根は實には決定に非ず、所以は何、法にして若し決定せば、手が物を取るが如くに唯一を取る手のみならむに、眼は能く大小を見るが故に定には非るなり。又若し定んで物が觸るれば則ち作あること、火に觸るれば則ち燒け、刀に觸るれば則ち割くが如くなるに、眼は遠くにして而も能く見る。故に決定には非ず。又若し法にして決定せば、則ち決定の法を礙へむこと、手の手を礙ふるが如くならむに、眼は水精雲翳等の中に於ても亦障礙せず。故に決定には非ず。又根にして若し決定せば、應に心內に在るべく、身內に在るが故に意と合すと雖も、亦應に外塵を見ざるべきに、而も實には能く見る。故に決定には非ず。又法にして若し決定せば、則ち數へて五根と名づくべきに、而も眼等は各二にして、舌と身を幷せば是を名づけて八と爲す。故に決定には非ず。但處に定有るのみにして根は定に非るなり。又左眼が見れば右眼も亦識り、應に異りて見、異りて識るべからず、根に左右の根なきを以てなり。故に是れ決定には非ず。又根と塵との合せる

【四】 これ數論說にして、我は我慢なり。非彼證品第四十及び根無知品第四十八の註參照。我慢は後には佛教の術語として用ひ居るを見る。數論說の我慢とは同義ならざれば區別するを要す。

【五】 麗本は量の次に一の字あり。三本にはなし。なき方可なり。一は數の中に入ればなり。數、量、異(別體)、合、離、彼體、此體は勝論說にいふ第二句義なる德の中のもの、作業は第三句義、總相は同にて第四句義別相は異にて第五句義、陀羅驃は實にて第一句義なり。好醜は德の中になければ、恐らく彼體(paratva)此體(aparatva)の異譯ならむ。陀羅驃を除いてこれ等は可見物に和合するとき可見たるなり。陀羅驃は九を含む其凡てが可見なるにはあらず。

卷の第五[一]

根不定品　第五十四

問曰　諸根を定と爲んや不定と爲んや。

答曰　云何が定と名づけ、云何が不定と名づくるや。

問曰　眼等の根の所知及び因なるを以て是を名づけて定と爲す。

答曰　若し爾らば、根は定には非ざるなり、所以は何、諸根は是れ眼等の所知及び因なるには非ざればなり。

問曰　眼の瞳子[二]と及び舌と身とは眼を以て見るべく、耳と鼻とは內に在るが故に見ること得べからず。

答曰　死人にも亦瞳子と舌と身とあるも、而も實には根[三]なし。

問曰　瞳子は二種にして、是れ根なると非根なると有り。死人には根の瞳子が滅するも、非根なる者在るなり。

答曰　根の瞳子には能見者なし、故に眼等の所得に非ざるなり、經の中に說く、五根は是れ色にして不可見有對なるものなりと。若し是れ可見ならば、則ち此の瞳子は是れ根なり、此の瞳子は非根なりと分別すべし。

問曰　若し經の中にて、四大に因りて清淨色を成ずるを名づけて五根となすと說かば、何が故に復た五根は是れ色にして不可見有對なるものなりと說くや。

答曰　是の故に業力の不可思議を疑ふべし。業力を以ての故に四大は變じて而して根と爲る。佛は弟子が此の五根は自ら業より生ずと謂はんことを恐るるが故に是れ色なりと言へるなり。」又外道

【一】三本宮本は卷を分たず。此品は根は決定なりとの說を破して根は不決定なりと立つる說なり。

【二】麗本は童とす。眼精なり。以下凡て同じ。

【三】根 indriya は元來は力の意、次に感官の能力卽ち感覺機能、更に感官をも指すに至れるなり。

破神品

る夢の中の意も亦去らざるなり。又心は但曾て見聞覺知せし所の法の中にのみ在りて、異法には行ぜざるに、若し去り到らば、亦應に異法をも知るべし。

問曰　[八五]神は意をして去つて能く餘方に到らしむる。

答曰　是の事は後の[八六]破神品の中にて當に廣く分別すべし。故に意は去らざるなり。

【八五】　神は我をいふ。以下に於てもすべて然り。カミの意ならず。カミのときは天といふ。

【八六】　破神品と稱せらるゝ品なし。恐らく多心一心を論ずる多心品第六十八以下などを指すなるべし。

て應に諸塵を知るべきこと、人が行きつつ道中にて色等の物を知るが如くなるに、而も意は爾らず。又心が能く無——謂く過去と未來と兎角と龜毛と蛇足と風色と赤鹽香等——を知るが如きも、亦知る、倶に到らざるが故なり。故に知去らざるなり。又若し心が緣に到らば、則ち應に無知と疑知と邪知とは有るべからざるに、而も實には之あり。故に知る到らざるなり。又心は泥洹を緣ず、若し心にして到らば、則ち有爲を以てして無爲の中に到るなり、是れ則ち然らず。還らば、無爲を出でて有爲の中に入るなり、是れも亦然らず。又若し心を生じて後世ありと[八三]念ぜば、心は卽ち後世に到るなり。此の身は應に死して、復た還ることを得ざるべし。是の故に去らざるなり。又心が未來を念ぜば卽ち未來に到らむも、現在法を以て未來とは爲すべからざるなり。又心が過去を念ぜば、卽ち過去に在るものなるも、去來の法を以て現在とは爲すべからず。故に知る去らざるなり。又欲心に從つて面に異色を生ず、恚等にても亦爾るも、若し心が異處に到らば、色は應に異なるべからず。故に知る去らざるなり。又心が緣の中に在るを、之を名づけて受と爲す、是の受は三種——若しくは苦と若しくは樂と不苦不樂と——なり。若し心にして異處に到らば、此は則ち受なきなり。故に知る去らざるなり。又心は身に依る、經の中にて說くが如し[八四]心は名色に依ると。是に身を離れて餘處に到つて去るにあらず。又身は識と合す、故に名づけて身と爲すなり。若し心にして異處に在らば、身は則ち識なし、識と合するに緣りて、便ち有識と名づくるあり。是の故に去らざるなり。

問曰　夢の中にては、心は餘方に至る。

答曰　然らず。夢の中の所作にて不淨を失する等の如きは是れ皆身に在り、心が顚倒するが故なり。餘方に在りと謂ふも、而も實には去らざるなり。又夢の中にて爲す所は皆是れ虛妄なり、人の飲を夢みるも竟に渇を除かざるが如し。又夢にて欲等を行ずるをも名づけて墮とは爲さず、故に知

【八三】麗本に食なし。三本宮本にあるを取る。

【八四】この心は識なり。ここにも明に混用の證を示す。

問曰　是の中には細微なる色あるなり。
答曰　火は色多くして而も觸少し、燈の色を見るも、未だ其の觸を覺せざるが如し。
問曰　觸は定んで到つて乃ち知るものなりや。
答曰　定んで到るが故に知るなり、所以は何、香風の中因り異香の生ずることあるが如く、是の如く日に因りて更に火の生ずることあるなり。
問曰　日が沒せば火の色は何が故に見えざるや。
答曰　或は火の但觸のみにして色なきあり、日沒の熱の如き、熱病の人の火の身に依るが如き、溫室の中の火が滅して、餘の熱湯の中の火等の如き、皆觸あつて色なきものなり。是の故に火にして或は色あるあり色なきあり、應當に信受すべし。

[八一]意品　第五十三

汝は意が行くと言ふも、是の事は然らず、所以は何、意は念々に生滅すればなり。風の如く業の如し。念々に滅する法なるときは則ち去相なし。又意にして去らば若しくは知り已りて去るか、知り已らずして去るかにして、二倶に然らず。若し先に知り已らば、復何ぞ去ることを用ひん、若し知り已らずして去らば、何れを趣く所となすや。又若し[八二]心にして眼に在らば云何か復た耳に到ることを得ん。若し心に念を生ぜば、我は當に耳に到つて則ち耳を念ずことを僞すべし。若し聲を聞かんと欲すれば即ち是れ聲を念ずるなり。若し心にして眼に在らば念を生ずることを得ず、餘根も亦爾り。故に意は去らざるなり。又若し人にして先に城國邑等を見しを、今、本に隨つて念ぜば現在をば知らざるなり。故に意は去るにあらず。又若し法にして去らば應に先に近づき後に遠ざかるべきに、而も今、遠きと近きと倶に念ず。故に知る去らざるなり。又若し法にして去らば、中道に

【八一】勝論說にては意は物質的のものにして身内に一つあり、而も原子程に微にして速に動く性を有す。我と眼根と色境とが合するも感覺の起らざることあるは、其際意が我根境の接觸の中に入らざるが爲なり。若し感覺起れば、其接觸中に意が來りて入りたるが爲なり。此と同刹那に香境と鼻根と我との接觸あるも、香の感覺は起らず。これ此接觸中に意が入り居らざればなり。次にここに感覺が起るは意が前者の接觸より速に動き來りて後者の接觸中に入れるが故なり。此の如く意は行き去り到るものなり。

【八二】心は意と同じ。勝論說にては心の字を用ひざれば、佛教にて心意識が異名同義となすに基いて、恐らく原本にはマナス(Manas)とありしを譯者がかく混用して譯出したるなるべし。混用は宜しからず。

色が合すれば變じて紫色と爲るが如く、是の如き等、異物の中に於ての色味を生ずるなり。

問曰 汝は風の中に更に異香を生ずと說くも、是の事は然らず、所以は何、風なき室の中にても遠き香を聞くことを得るが如くなればなり。又香は風に逆ひても聞くべし、[七八]波梨質多天樹の如し。故に知る風の中には異香を生ぜず、但應に香に因りて更に異香を生ずべきのみ。

答曰 緣に、二種あるなり。香にして、若し風の中にあらば、則ち更に香風を生じ、若し風なきときは、則ち香に因りて香を生ずるなり。斯れに何の咎かあらん。汝は先に香は遠く聞ゆべきが故に、應に到らざるべしと言へるも、是の事は然らず、所以は何、色に同じからざるが故なり。若し到らずして聞ゆるときは、則ち色と同じく、到らずして、而も聞ゆべし。又遠く香煙を覩るときは則ち聞くことを得ざるも、到れる時は乃ち聞ゆ。故に知る到らずむば聞えざるなり。又[七九]天鼻なきが故なり。故に知る到りて聞ゆるなり。若し到らずして而も聞かば、應に天鼻あるべきこと天眼耳の如くなるべし。

[八〇]覺觸品 第五十二

問曰 觸も亦應に到らずして知るべし、所以は何、日との觸は遠くに住するものなるが故なり。

答曰 日との觸は云何が知るべきや。

問曰 火分が日の邊より來り身に到りて乃ち知るなり。

答曰 若し日より火分有りて來らば、日の沒せし時にも火分は應に在るべきに、而も實には在らず。故に知る來らざるなり。

問曰 日は沒すと雖も而も熱は猶在り、觸を以ての故に知ればなり。

答曰 若し爾らば、火は則ち色なし。汝が經の中には色なき火なしとす。是を卽ち過と爲す。

【七八】 波利質多天樹、波利質多は Paricitra なり。前に出でたり。三十三天にある樹なり。

【七九】 神通力に天鼻なるものなし。これ香は到らずば知られざるが故なり。神通中には天鼻も天舌も天身(觸)もなくして眼耳のみなり。之によりても離中知合中知の區別せられ得るを見るべし。

【八〇】 以下も勝論說を對破するものなり。

が故に得べからざるべし。若し爾らば、風は則ち觸なけむ。是を卽ち過と爲す。他人も亦風が水火と合するが故に冷熱の觸あるが如く、是の如く、風が地と合するが故に不冷不熱の觸ありて、是の中には決定の因緣あることなければ、水分と火分とは風に隨つて去ることを得るも、而も地分は去らずと說くことを得べし。汝が經の中に[七三]三觸有りて身に觸るゝも、而も地水火には非ずとなすが如し。故に知る風は是れ相を見るべからざるものなり。此の言を以ての故に三觸は風に於て或は客とも客に非ずともなす。所以は何、是の三種の觸は、若し相を見るに非ずむば、則ち是れ風[七四]有るなればなり。汝が意にして、若し水火の中には冷熱の觸あるを見るが故に、是れ風分には非ず、是の如く地の中には不冷不熱の觸あるを見るが故に、亦應に是れ風分なるべからずと謂はゞ、若し先に別に風の觸にして地と合せざるあらば、應に是の觸は風に屬すと言ふべきに、而も初には見えず、云何ぞ當に不冷不熱は但是れ風の觸のみにして地分には非ずと知るべけむや。又我等も亦色香味觸は但是れ地の物のみにして水等の有るに非ずと說く。汝が意にして若し水等の中には色等有るを見ると謂はゞ、地と合するが故なり、水等の中に於て、水に非ざるもの等の有るを見ること、水中の熱相の如くなればなり。此の中には決定の因なし。水は火と合するが故に熱相あるも、地と合するが故に色等の相なし、初めには、曾て別に水等の地と合せざるあるを見ざればなり。若し曾て見たりとせば、是の色は水に屬し、是れ地の有るには非ずと言ふべし。亦應に是の如く水等を分別すべし。

問曰 何が故に風の中には異香を生ずることを得るも、而も異の色味觸を生ずること能はざるや。

答曰 風は法として應に爾るべし。法には種々の不可思議あればなり。餘物は異の色味觸を生ずることを得ること、華が麻に熏ずれば辛苦の味を生じ、乳が[七五]阿麻勒を浸せば卽ち甘果となり、[七六]燕支が[七七]摩頭樓伽子に熏じて種ふれば赤葉を生じ、青が雌黃に雜ふれば則ち綠色となり、青赤の

【七三】麗本には三の字なし。三本宮本によりて補ふ。冷と熱と不冷不熱となり。

【七四】有は三本宮本にては又に作り、下文の首をなす。

【七五】阿麻勒、(Āmalaka) 果實の名、藥用とす、餘甘子といふ。此の樹の葉は小棗の如く、花は白くして小し。果實は胡桃の如くにして味は酸にして甜なり。

【七六】燕支は草の名、紅花といふ、之より紅色染料を採る。

【七七】摩頭樓伽(Mātuluṅga)は拘櫞子といふ。子は果實をいふ。

答曰　若し常に損ぜば華すら尙應に無となるべし。況んや滅ぜざることを覺えざらんや。又若し華にして常に滅ぜば則ち見聞すべからず、常に滅ずるを以ての故なり。念々に生滅せば、念々に滅するが故に、應に異の陀羅驃を生ずべし。況んや更に異の求那を生ぜざらんや。而も實には是の華は見聞することを得べし。故に知る華分は去らざるなり。

問曰　若し但香にして去るのみならば香も亦應に盡くべし、常に損ずるを以ての故なり。又香には分なきが故に、便ち應に都べて盡くべし。

答曰　我等は華分をして風に隨はしめず、亦風をして華香を吹いて去らしめず、但華香のみの中因り更に異香を生じ、此の香風に因りて復香風を生じて、鼻に來至して聞ゆとなすが故に斯の咎なし。何を以てか之を知る。麻の中の香の華分の香に非ざるを聞くが如き、華を以て熏ずるが故なればなり。若し是れ華分ならば、何ぞ能く麻を熏ぜんや。故に知る此の香は華分に在るにあらざるなり。又此の華香を、若しくは摩し若しくは搦み若しくは熱中に著くれば、其の香は則ち滅す。若し麻の中に在らば、則ち滅すべからざるなり。又此の華香は但油の中にのみ在りて、滓の中には在らざるが故に華分なるには非ざるなり。又此の香は久しく麻の中には在るも、華の中には爾らず、故に華分なるには非ざるなり。

問曰　若し華分なるに非ずむば、是れ何れの物の香なりや。

答曰　是を麻の香と名づく、華に因りて而も生じて、麻を離るゝことを得ざればなり。是の如く華に因りて香風は更に異香を生ずること、是の事は已に明なり。復次に、或は熱風冷風は覺すべきも、是の中の水火の色は見るべからざるあり。當に知るべし、風の中に更に異觸を生ずるものにして、水火の分を吹いて去るに非ざるなり。若し風中の熱觸にして火に屬し、冷觸にして水に屬せば、則ち不冷不熱の觸は應當に地に屬すべし。水火の色の如き得べからずんば、地の色も亦應に細なる

するも、何れにても可なり。

【六八】離は合の反對にして、合と共に德の一なり。合は元來離れ居る二物の一となる場合にいひ、離はこれが又二物となる場合にいふ。糊付けせる紙を拆くとき聲の生ずる如きは離より聲の生ぜるなり。手を打つて聲生ずるは合より聲生ずるなり。

【六九】振は觸なり。

【七〇】前と同じく主として勝論說を反駁して問答往復す。

【七一】興渠、梵語 hingu の音譯、阿魏といふ。五辛の一、蒜類の草にして、臭氣も蒜に似る印度人に此の根を取り食物として用ひ、又藥用としても用ふ。

【七二】鬱金、(Kuṅkuma)は紅花ともいふ。草の名、其の花は黃色にして香しきが故に熏香として用ひらる。

〔七〇〕聞香品　第五十一

問曰　汝は、香は鼻に至つて聞ゆと言ふも、是れも亦然らず、所以は何、聲の遠く聞ゆべきが如く香も遠處にあるも亦聞ゆることを得べければなり。汝が意にして若し是の香の物より相續して香の因を生ずるなりと謂はば、聲の相續の中にて已に其の過を說きたり。

答曰　香は云何が聞くべきや。

問曰　微なる華分去れば香も亦依つて去るなり。

答曰　然らず。若し華分にして去らば、華分は是れ色なれば、應當に可見なるべきに、而も實には見えず。故に知る去らざるなり。

問曰　是の華分の色は微なるが故に見えざるなり。

答曰　香も亦細微なれば、應に聞ゆることとき得べからず。

問曰　香は勢大なるが故に聞ゆべし。羹の中の〔七一〕興渠は色を見ずと雖も但其の香のみを聞くが如し。

答曰　今現に華分に隨ふ色を見、亦其の香の細分の中の色をも聞くに、何が故に見ざるや。又若し華を燒かば、其の香は更に增すに、色は但減することあるのみ、故に香は華に非ざるなり。又若し香にして是れ華分ならば、亦應に少しく聞ゆべきに、而も實には然らず。又若し華分にして去らば、華は應に損減すべきに、而も實には減ぜず。何を以て之を知るや。一斤の〔七二〕鬱金にして常に有らば、香は去るも而も常に一斤なるが如くなればなり。

問曰　損ずる所が微なるが故に知ることを得べからざるなり。水瓶の中にて一滴の水を去るも、其の減ぜるを覺えざるが如し。

に、之をここに、求那を生じといふ。火と合すれば、瓶形の黑色は滅して新に赤色が生ずるなり。火と合したる時は瓶形を造る地の原子までも變化を受けて、もとの瓶形たる實もまた其德も新なるものとなると解す。この新なる燒物をパーカヂャ (pākaja) といふ。パーカヂャは熱變とも熟變とも譯さる。元來は燒生又は熟生の意なり。

【六三】三本宮本は作を非とす。然らば、鈴の聲に非ざるべしとなる。

【六四】勢は前にいへる如し。打つことの勢の著くことが多大なれば、聲は大なるも、漸次少くなれば、それに應じて聲は微小となるなり。

【六五】聲分は單に聲といふと同じ。ただ第一に對して第二といへるが爲に、第二聲を分といへるのみ。第二聲は第一聲より生じ、新に打たるることによつて生じたるにあらざるが故に、打の因なしといふなり。

【六六】折は弱るの意なり。三本宮本には打とあれど、これにては意通ぜず。

【六七】衞世師經は勝論經なり。此場合の經は書を指すと解するも、または學說を指すと解

念々に滅するには非るなり。又聲は云何が異聲と相違するや、[六一]毒と毒藥との如く相違すと爲んや、藥と病との如く相違すと爲んや。若し爾らずんば、則ち鈴には應に二聲あるべからず。若し一念の中にて鈴に二聲あらば、則ち千念の中にも亦應に二聲あるべし。又[六二]求那なき陀羅驃が火と合するが故に、求那を生じ、本の黑色を滅して更に赤色を生ずるが如く、聲も亦是の如く、前の聲が滅し已つて異聲が更に生ずるなり。若し爾らずむば、應に一念の中にて鈴に二聲あるべきに、而も實には二なし、是の故に然らざるなり。又若し聲より異聲を生ぜば、則ち因に隨はざるなり、而も實には鈴より聲を生ずるときは則ち是れ因に隨ふなり。又此の異聲は應に鈴の聲と[六三]作るべく、又此の異聲は終に應に斷ずべからず、斷の因なきが故なり。

問曰　是の初聲より轉生じて微聲となる、是の故に斷あるなり。

答曰　何が故に轉生じて微聲となるや。[六四]打の勢の著するに隨ふなり。著するに隨つて初聲あり、第二[六五]聲分等も亦著することの差別せるに隨ふが故に有るなり、打の因なきを以ての故なり。著する勢は則ち[六六]折す。著する勢が折するが故に聲は則ち轉微となるなり。又若し聲に因りて異聲を生ぜば、亦應に色に因りて水鏡の中の色をも生ずべし。是の如き水月鏡像を卽ち名づけて色と爲さば、然らば則ち[六七]衞世師經の一切は皆壞せむ。又汝等は[六八]離より聲を生ずと說くも是の事も亦無なり、所以は何、手よりの離は聲を生ぜざればなり。合するが故に聲あるなり、刀竹等の諸分を以て相著するに、離の時は相[六九]振れば是の故に聲あり。又我等は合よりも聲を生ずとは說かず、所以は何、指が空との合には則ち聲を生ぜざればなり。若し指にして相振れざれば亦聲を生ぜず。是の故に合よりは生ぜざるなり。但四大の若しくは合、若しくは離のときのみ則ち聲の生ずることあるなり、諸大の業の常に諸大に在りて捨てずして而も去るが如し。

業は如何なる場合にも業を生ずることなし。それによつて業が相續する如く見ゆるも、實は業は勢を生じ、勢より業を生じかくして業は相續すとなすなり。然るに聲は聲を生じ、以て聲は相續すとなす。聲は德なれば德は德を生ずと許さるる爲にかく說かるるなり。

【六〇】　因陀羅驃はカーラナ・ドラギヤ（kāraṇa-dravya）の譯にて、因としての實の意なり。然し業を陀羅驃卽ち實と呼び得ること絕對になし。實は六句義の第一、業は六句義の第三なり。之を混ずれば六句義とはならざることとなる。故に因陀羅驃は單に因といふと同じと解せざるべからず。

【六一】　毒を以て毒を制する如き場合をいふ。

【六二】　求那なき陀羅驃卽ち德なき實は勝論說には通常として有り得べからず。されどここにては泥にて瓶形を作り火に燒く場合を擧げ居るものにして、瓶形が火に燒ける時は赤色となる。此赤色は火と合する前には瓶形中になかりしものなれば、此點にて德なき實といふなり。これが火と合すれば、赤色を生ずるが故

ず。念々に滅する業の異業を生ぜざるが如く、聲も亦是の如く、念々に滅するが故に異聲を生ぜざるなり。若し聲にして異聲を生ぜば、業も亦應に異業を生ずべし。然らば則ち[五五]業は業を生ぜずとの此の言は則ち壞す。又汝が法の中にては、聲が異聲と相違するを不同處と名づく。[五六]若し聲が異聲と同處ならば、則ち各[五七]相違せざるなり。若し同處ならずんば、則ち前の聲が滅し已つて後の聲は自ら生ぜむ。是の故に聲は異聲を生ぜざるなり。又聲は是れ一法なり、云何ぞ能く異聲を生ぜんや。一物のみにして能く他物を生ずる者あるを見ざればなり。

問曰 合は是れ一なるも、能く他を生じて物を成ずるが如く、聲も亦是の如く、是れ一法なりと雖も能く異聲を生ずるなり。

答曰 汝にして合なる法は是れ一なるも能く所生あるを見、聲も亦然りといはば、色も亦一たるも、應に異色を生ずべし。香味觸も亦是の如し。然らば則ち陀羅驃は或は五性と三性と二性とを有せむ。又業に同じきが故に、聲は業と同相なり、聲なる求那は滅すと雖も、業と同じと說くが如し。指をもて刀を彈ずれば、刀の動くを業と名づけ、卽ち亦聲もありて、動は刀を離れざるが如く聲も亦是の如し。手を以て刀を捉ふるときは則ち聲と動とは倶に止む。故に知る業は異業を生ぜず、聲も亦應に更に異聲を生ずべからず。汝が初業の[五八]勢より更に後業を生ずと分別するが如く、是の如くに、亦應に初聲よりも勢を生じ、勢より後の諸業を生じ、是の中には異るもの有ることなかるべし、業に因りては能く勢を[五九]生ずるも、而も聲は能はず。又業は滅するが故に[六〇]因陀羅驃とは名づけず、所以は何、先に業が滅し已つて後に陀羅驃が生ずればなり。聲も亦是の如し、先の聲が滅し已つて後の聲が自ら生ずれば後の聲は應に因あるべからず。若し汝猶前の聲が異聲を生ずと謂はば、則ち聲は念々に滅すとは名づけず、所以は何、是の聲の生ずる時は是れ第一念にして、異聲を生ずる時は是れ第二念、異聲が生じ已れば是れ第三念、前の聲の滅する時は是れ第四念なるが故に

【五五】 業は業を生ぜずといふは勝論說の重要なる說の一なり。次の相違といふは一の聲が他の聲の爲に滅ずる時、之を聲が聲と相違すといふなり。故にかかる聲は同處ならざるなり。之を不同處といふ。

【五六】 三本宮本は聲與異聲相違、相違各不同處となす。然らば、聲が異聲と相違せば、相違は各不同處なり、と讀まる。これにても通ず。

【五七】 三本宮本は各を名とし、不名、相違とす。これにても亦通ず。

【五八】 ここに勢といふは勝論說にて行(Saṃskāra)と名づくるを譯したるか、又は行の中に念因と作因とある後者に當るものをヱーガ(vega)といふを譯したるか、何れかなり。行にても勢にても一種の情勢又は餘力にて、心の上にても物の上にても之を認む。行は詳しくは三種なり。一、想起の因となるもの、これ精神的方面のもの、二、後の業を起す因となるもの、三、妨障の除かれたる時もとの狀態に還らしむるもの、二と三とは物理的方面のものなり。一を念因、二と三とを作因といひて二種となす。

【五九】 勝論說にては業と聲とは刹那滅のものなり。而して

べし。又鈴の聲は鈴の中に於て聞くべし。何を以て之を知るや。人が鈴の音を聽かんと欲せば則ち耳を以て鈴に就くが如し。又聲は是れ求那なり、是の故に去らず、諸の[五三]求那は作業なきを以ての故なり。

問曰　聲より相續して聲なる求那を生ずること、水中の波の如くなるを名づけて聲が去ると爲すなり。

答曰　是の聲と波とは何を以て相喩へむ。水が相鼓扇するとき則ち波の生ずることあるなり、今聲の中に更に何れの聲あつて能く異聲を生ぜむや。若し汝が意に、聲が能く異聲を生ずるなりと謂はば、何が故ぞ[五四]本處に卽しても生ぜず餘處にも生ぜざるや。水と水と相撃つが故に波が生ずること有るなり。若し說いて言ふ、人の是の聲が耳に造つて卽ち是の說に應ずとせば而も實には不可なり。是の故に知る聲は說かざるも而も去るなり。又若し鈴の聲にして轉相續して生ずるも而も鈴には聲なきに非ず。若し聲にして波の相續して生ずる如くならば、先の水には波なし、是の如く鈴より聲あらば、鈴には應に聲なかるべきに、而も實には然らず。故に知る聲は鈴の中にあるなり。又鈴を捉ふるときは則ち聲は止む、故に知る聲は常に鈴に依るなり。若し聲にして鈴に依り亦鈴をも離るとせば、鈴を捉ふる時は鈴に依るの聲は應に滅すべく、鈴を離るる聲のみ應に在るべし。又現に語言の中には鈴の如くに相續して生ずる者あることなし。又聲の中には方の差別——謂く東と西との方の聲——あり。又近き聲遠き聲あり。若し聲にして耳に到るときは、則ち是の差別なからん。又若し聲にして來らば則ち天耳は用なけむ、所以は何、百千世界の聲が云何ぞ能く來らんや。又聲を射るに能く聲處に中るが如く、若し聲にして耳に到らば、應に自ら耳を射るべし。若し爾らずんば、聲を射るとは名づけず。又若し遠近の聲ならば、倶に聞くことを得べし。又聲は念念に滅するが故に、異聲を生ぜず、念々に滅する法の能く所生あるを見ざればなり。是の故に聲は異聲を生ぜ

【五三】求那は德なること前に註したり。德には業なきこと勝論派の重要なる說の一なり。業をここには作業と譯したるなり。勝論派の業は運動を形式的に見ていへるに外ならず。以下の問のいふ所は主として凡て勝論說なり。卽ち勝論派の說を駁するなり。かかる勝論說は殆ど其まま正理派の採用する所なれば、以下の中には正理派の說も混ぜられ居る理なり。例へば眼に光ありといふは正理派の說として勝論說にはあらざるも、何等派を區別せずに論ぜられ居るが如き是なり。

【五四】聲が他の聲を生ずとせば、前者の聲のある所卽ち本處に於て後者が生ぜず、又全く他處にも生ぜざるやといふは聲が連續して他方に傳はるについて考ふるが故にかくいふなり。

なきには非ず。但色を緣ずるのみにして餘を緣ぜざるも、亦緣ずることなきには非ず、乃至、意識も亦是の如きなり。

[五〇]聞聲品　第五十

汝が人にして遠處に在らば小語は則ち聞かず、故に知る聲は耳に到るなりと言ふは、是の事は然らず。所以は何、汝が、人にして遠處に在りて語らば、[五一]聲に從つて聲有り、相續して轉た微となり、更に復た生ぜず、是の故に聞えざるなりと言ふが如く、我も亦是の如く、耳に到らずと雖も、聲が小なるが故に聞えざるなりとせばなり。又、汝が眼の光は去ると雖も、但日輪を見るのみにして日業を見ずとなすが如く、我も亦是の如し、耳に到らずと雖も、聲が麁なるが故に可聞なり、細ならば則ち聞えざればなり。又汝が眼の光は遠く去ると雖も、百千萬由旬に至ること能はず、能く水精等の障を徹見すと雖も、壁等の障あらば則ち見ず、能く日輪を見るも而も日業を見ずといふが[五二]如く、我耳も亦是の如し、聲は到らずと雖も麁なるが故に能く聞ゆ、而も細辯することは能はざるなり。又、汝は風に順ずれば則ち了なりと言ふも、是の事は然らず、所以は何、爾らば則ち人の能く風に逆うて聞くことあることとなければなり。香の風に逆ふときは則ち聞くべからざるが如く、聲も亦應に爾るべし。風に逆はば應に少しも聞くべからざるに、而も實には聞くべし。是の故に知る聲は到らずして而も聞ゆるなり。若し聲の少しく聞く可きなるは、風の障するを以ての故なりとせば、又聲は、香の如くには、風の爲に吹かるべからず、何ぞ風に逆順することを分別することを用ひんや。又汝が聲は盡く聞くべきが故に知る來り到ること色に同じからずと言ふは是の事は然らず、所以は何、聲法は應に盡く聞くべきも、色法は爾らざればなり。萬物には皆同相と異相とあり、是れ知の塵なるが故に同なり、知の盡と不盡との故に異なり、到と不到との故に異ならにあらざる

【五〇】三本宮本はこれより第五卷とす。此品は前品の繼續にして、前品にいはれしことを論じつつ述ぶるなり。即ち耳は塵が到つて知るなりとの説を破す。
【五一】聲に從つて聲有りとは聲が聲を生ずるをいふ。これ勝論說なり。

【五二】麗本に如なきも、三本宮本にあるを取る。但し後者は前者の汝言を如汝となして、言の一字を有せざるも、此點は麗本の方可なり。

せざりし者には非ずと。生死人の先に用ひし所の法をば能く念ずるも、未だ用ひざるときは則ち念ぜざるが如し。聖人ならば若しくは經用せるも若しくは經用せざるも、聖智力の故に、皆悉く能く知る。」又、勝れたる塵なるが故に知る、色界の心を用つて欲界の法を知るが如し。又[四五]倒が障するが故に知らず、身見心が五陰を緣じて無我なるを見ざるが如し、無常苦も亦是の如し。又力が障するが故に知らず、鈍根の人は利根の[四六]障なるが故に心をして知らざらしむるが如し。上と相違するを知の境に在りと名づくるなり。

問曰　云何が意が壞すと名づくるや。

答曰　狂顚し鬼が著き憍逸して心を失すと或は酒にて醉ひ或は藥にて迷ひて悶亂の心を悶亂すとなり。或は貪恚等の煩惱が熾盛にして放逸が心を壞するあり、[四七]迷婆伽捕魚師等の如し。或は[四八]删若婆病の能く心を破壞すと、又老病死の亦能く心を壞すとなり。若し心にして善法若しくは[四九]不隱沒無記法の中に在らば是れを不壞と名づくるなり。是の如き等の因緣の故に、諸塵ありと雖も而も知ること能はざるなり。是の故に、汝が、若し到らずして能く見ば、何が故に一切の色を見ざるやといふは是の事は然らざるなり。又汝が三事和合するが故に觸と名づくといふは、隨つて、根が塵を知る時に則ち名づけて觸と爲す。必ずしも相到るにはあらず、所以は何、意根にも亦三事和合を說くも、是の中にては相到るを以ての故に名づけて觸となすにはあらざればなり。又汝は相到るを以ての故に有對と名づくと言ふも、是の事は然らず、對に非ざる相を說くを以ての故なり。又汝は現在に知が生ずといふも、第六識にも亦但現在を知るのみなるあり、他心智の如し。又汝が衆緣合するが故に知が生ずといふは、第六意根の中にて已に答たり、謂く所知に隨ふ時に名づけて和合と爲すなり。又意が法を緣ずるに因りて意識が生ずとは、此の言は則ち空し、到らざるを以ての故なり。又決定を以ての故に和合と名づく、眼識は但眼に依るのみにして餘には依らざるも亦依ること

【四五】　倒は顚倒の煩惱なり。

【四六】　鈍根が利根の障となり居るなり。

【四七】　迷婆伽、麗本は迷を迷とす。三本宮本に迷とあるを取る。迷婆伽は māʼsvika, mātsyaka などの音譯か。漁人捕魚者の意なり。

【四八】　删若婆、麗本は删を那とす。今は三本宮本據る。删若婆は Saṃnipāta の音譯ならむ。雜症と譯さるるも風膽啖の三主要素の混亂し衰退せる病なり。

【四九】　不隱沒無記法、新譯の云ふ無覆無記 (anivṛtāvyākṛta)のこと。

烏が烏群の中に入れるが如し、上と相違せるを知の境に在りと名づくるなり。

問曰 云何が眼が壞すと名づくるや。

答曰 風熱冷等の衆病の壞する所なり。若し風が眼を壞すれば、則ち青黒の[四二]轉旋する等の色を見、若し熱が眼を壞すれば、則ち黄赤の火焔等の色を見、若し冷が眼を壞すれば、則ち多く白き池水等の色を見、若し勞が眼を壞すれば、則ち樹木の動搖する等の色を見、疲倦が眼を壞すれば、則ち色を見るも了ならず、偏に一眼を按ずれば、則ち二つの月を見、鬼等に著かるれば、則ち怪異を見、罪業力の故ならば、則ち惡色を見、福業力の故ならば、淨妙なる色を見、熱氣が眼を壞すれば、則ち焔等の色を見る。又衆生は眼を得るも、成就せざるが故に、見ることが具足せず、又眼にして膚翳を生ずれば、蔽ふが故に見えず、若し眼根にして壞せば、故に見えず。是を眼が壞すと名づく。上と相違するを名づけて不壞と爲す。耳等の諸根も亦應に義に隨つて分別すべし。

問曰 已に五塵は知の境に在るが故に知るべきものなることを知りたるも、法塵は云何が知の境に在らずと名づくや。

答曰 上地の故に[四三]知らず、初禪の心が二禪已上の法を知らざるが如し。根が勝るが故に知らず、鈍根の心が利根の心の中の法を知らざるが如し。人が勝るが故に知らず、須陀洹が斯陀含の心の中の法を知らざるが如し。力が差別するが故に知らず、意識あるも此の法に於ては無力なるが如く、是の意識は此の法を知らざるを以て、心意識の知る所の法を攝すれども心意識の知ること能はざる所を亂るが如く[四四]辟支佛の意力の知る所の法は聲聞の意力の知ること能はざる所にして、佛の意力の知る所の法は聲聞辟支佛の意力の知ること能はざる所なるが如く、上品の法は下品の意識の知ること能はざる所なるが如し。又、細微なる法塵は知ることを得べからず。阿毘曇の中にて説くが如し、何等か心の念ずべきものなりや、謂く了了たる者なり。先に經用せし所の者は念ずべし、經用

【四二】 三本宮本は旋轉とす。

【四三】 この不知といふが即ち不在知境と同意なり。

【四四】 辟支佛(Paccekabuddha Pratyekabuddha)は獨覺又は緣覺に同じ、此名の中には佛陀即ち覺者があるも辟支即ち獨が付く爲に等正覺者としての佛陀と異るなり。獨覺は自利のみのもの、等正覺者は自利利他利行圓滿のものなり。聲聞も自利のみのものにて最後は阿羅漢なり。故に聲聞と獨覺とは小乘に屬すとせらるるなり。

答曰　是の事も亦汝が眼にして去つて色に到るも、或は能く見ることもあり或は能く見ざること、眼が日に到つて能く日輪を見るも而も日業を見ざるが如しといふと同如して、我も亦是の如し。眼は去らずと雖も、若し色にして知の境に在らば、是れ則ち能く見、若し知の境に在らずむば則ち見ること能はざるなり。

問曰　眼の光は遠に去るも、勢が極まるを以ての故に日業を見ざるなり。

答曰　若し勢が極まるを以ての故に細業を見ずむば、日輪の量は麁なるに、何が故に見ざらむ。是の事は然らず。又若し光にして彼に到つて能く見るとせば、何が故に、遠き日輪を見るも、而も彼の〔四〇〕巴連弗等の近き國邑を見ざるや。若し汝が意にして巴連弗等は知の境にあらざるが故に見えずと謂ふならば、我も、眼は到らず、亦色も知の境に在らざるを以ての故に、見ること能はずとなす。

問曰　已に諸色は知の境に在るが故に可見なりと知る、今、云何が可見にして云何が不可見なるや。

答曰　〔四一〕(一)世が障するが故に見えず、過去未來の色の如し。(二)映が勝るが故に見えず、日の光明が諸の星宿及び珠火の明等を蔽ふが如し。(三)顯はれざるが故に見えず、夜中の火は見るべきも、餘は見るべからざるが如し。(四)地が勝るが故に見えず、初禪の眼を以てしては二禪の色を見ざるが如し。(五)闇が障する故に見えず、闇中の瓶の如し。(六)神力の故に見ず、鬼等の身の如し。(七)厚濁の障の故に見えず、山外の色の如し。(八)遠きが故に見えず、餘の世界の如し。(九)太だ近きが故に見えず、自らの眼の睫の如し。(十)次が未だ至らざるが故に見えず、光の中の塵は可見なるも、光の外のは則ち見えざるが如し。(十一)細なるが故に見えず、樹杌の人に似たるは分別すべからざるが如し。(十二)多く相似せるが故に見えず、一粒の米が大聚の中に投ぜるが如く、又一

【四〇】巴連弗、(Pataliputra) 摩揭陀國にあり。華氏城とも稱せられガンジス河の沿岸にある都邑なり。此都を近き國邑といへば、成實論は卽ち中印度にて作られたるものなるを示すと見得べし。

【四一】不可見の條件として十二種あり、十二門論にも此の如き說あり。これ等は凡て數論頌に存するものと比較すべし。下の疑品第一百二十九には八因緣とあり。

法として爾らず。是の故に眼の光は去らざるなり。又若し眼の光にして去らば中道にも應に諸色を見るべきに、而も實には見ず。故に知る去らざるなり。又光にして去らば、光は則ち身を離れむ、名づけて根となさず。指が斷たれて身を離るゝときは則ち身の覺なきが如し。又眼あることを見ずむば、能く自の依を捨つるなり、比類なきを以て則ち非因と爲す。又此の眼の光にして能く見ることをなくんば則ち是れ無なりと爲す。

問曰　此の眼の光あるも、日の光明を以て映ずるが故に見えざるのみ、日の光の中にては衆星は現ぜざるが如し。

答曰　若し爾らば、夜には則ち應に見るべし。

問曰　色法は要ず外の明を假りて乃ち見ることを得べし、夜には外の明なし、所以に見えざるなり。

答曰　若し此の光にして晝夜倶に得べからすんば、是れ則ち竟に見るべきなきなり。

問曰　猫狸鼠等と諸の夜行蟲との眼の光は見るべし。

答曰　是の可見の色は猫等の眼の中に住するなり、螢火蟲の明色の身に在るが如し。是れ光なるには非ず、又夜行蟲は闇の中にても能く知るも、人は見ること能はざるが如し。然らば則ち但彼にのみ光有つて、餘物には則ち無きなり。法として自ら應に爾るべし。又汝は若し到らずして能く見ば、應に一切の色を見るべしと言ふも、若し色にして知の境に在らば、是れ則ち見るべし、經の中にて、若し眼にして壞せず、色にして知の境に在らば、是の如きは則ち見ると說くが如し。

問曰　云何が知の境に在りと名づくるや。

答曰[三九]　隨つて色が眼と合する時に知の境に在りと名づくるなり。

問曰　若し眼にして到らずんば、何れの合する時ありや。

【三九】隨つてとは何時にてもの意。

ずんば聞えざるなり。汝は耳等の根は塵が到らずして而も知るといふも、是の事は然らず。聲香味觸は應に來つて根に到るべければなり。若し根をして去らしめば是の事は然らず。耳等の根は光明なきを以ての故に、但一の火大のみ光あり、是の故に去らざるなり。又聲は、若し厚濁の物及び水等が耳を障するも、亦聞ゆることを得、若し光根あらば、是の如くなること能はず。故に知る耳根には光なし。又耳は闇の中に於ても亦能く塵を知る、若し光根あらば、闇なるときは則ち知らず。又光根あらば、方を待つて能く知り、能く一方のみを見て、一時に遍く諸方を知ること能はず、人が東に向へば則ち東方の色を見るも、餘方を見ざるが如し。又說く、意は能く去れば、是の故に塵に到つて能く知るなり。經の中に、[三八]是の心は獨り行き、遠く逝きて寢ね藏れて形なしと、又、是の心は散行すること、日光の照すが如しと、又、是の心は常に動くこと、魚の水を失ふが如しと、又、是の心は本（もとより）意行に隨ふ等と說くが如し。是の故に六塵をば、皆到るが故に、知るなり。

答曰、汝は光が到るといふも、是の事は然らず、所以は何、人の遙に杌樹を見て疑うて是れ人なりと謂はんが如き、若し光にして到らば何が故に疑を生ぜむや。又太（はなは）だ眼下に近きときは則ち見ることを得ず、眼に藥篦を著くれば則ち見ること能はざるが如し。故に光は去ると雖も、太だ近きの故を以てしては、亦應に見るべからず。又眼は明を離るれば則ち見ること能はず、太だ近きときは則ち明は壞せばなり。又若し光が彼に到らば、何が故に麁を見るも細攝すること能はざるや。又色の中には方の差別あるを見る、東西の方の色と謂ふが如し。亦遠近の差別もあり、若し眼にして到るが故に知るならば則ち差別なからん、所以は何、香味觸の中には是の差別なければなり。是の故に眼の光は到らずして而も知るなり。又眼の光にして若し先に見已らば、復た何ぞ去ることを用ゐんや。若し先に見ずんば、去るも何れに趣く所ぞ。又近き色と遠き色とを一時に俱に見て去らば、

【三八】此經の言は後の立無數品第六十一に引用せらる。法句經の偈なりと考へらるるも、兩所ともに偈の形を取らず。攝大乘論に、遠行し及び獨行し、無身にして空窟に住し、則ち調伏し難きを調伏せば、魔縛を解脫とあるものの前半ならむ。

あればなり。是の光が能く去つて色を見るなり、光は是れ火物にして、眼は火より生じ、火に光あるが故なり。又若し到らずして能く見ば、何が故に一切の色を見ざるや。眼の光の去るには障礙せらるることあるを以て遍くは到らざるが故に一切を見ざるなり。又經の中にて說く、三事が和合するが故に名づけて觸と爲すと。若し到らずんば云何が和合せんや。又五根は皆是れ有對なり、塵の中の障礙を以ての故に有對と名づくるなり。鼻は香の中にて、舌は味の中にて、身は觸の中にて、眼は色の中にて、耳は聲の中にて、若し到らずむば則ち障礙なきも、又現在の五塵の中にて知生ずれば、是の故に五識は到るが故に能く知るなり。若し到らずして能く知らば、亦應に過去未來の色をも知るべきに、而も實には知らず。又衆緣が和合するが故に知が生ずれば、是の故に眼の光が去つて塵と合するなり。光が色に到るを以ての故に和合すと名づくるなり。聲も亦耳に到るを以ての故に聞くなり、所以は何、人にして遠處に在らば小語は則ち聞えず。若し聲にして、色の如くに、到らずして而も知るものならば、小聲も亦應に可聞なるに、而も實には聞えず。故に知る到るを以ての故に聞ゆるなり。又聲は遠く聞ゆべし、若し到らずして聞ゆれば、則ち遠近なからん。又聲は壁を以て障するときは、則ち可聞ならず若し到らずして可聞ならば、障すと雖も亦應に聞ゆべし。又聲は遠く聞けば則ち了ならざれど、近く聞けば則ち了なり、若し到らずして而も聞ゆれば則ち差別なからんも、耳に到るを以ての故に、是の差別あるなり。故に知る音聲は到るが故に可聞なるなり。又聲にして風に順ずるときは、則ち了なるも、風に逆へば然らず、故に知る到るが故に可聞なるなり。又聲は盡く聞ゆべし、若し到らずして而も聞ゆれば、應に盡くは聞ゆべからず、色の到らずして而も見るが故に盡くは見ざるが如し。故に知る聲は色とは同じからざるなり。若し到らずして可聞なるときは則ち色と同じくして、色の一分が見え、餘も亦明を待つが故に見ゆるが如く、聲も亦應に聞るべきに、而も實には然らず。是の故に到ら

意は舌に依りて舌識を生ずるが故に舌は味を知るといふ、眼に依りて識を生ずれば名づけて眼が見ると爲すなり。故に佛弟子は眼の見る所の如しと言ふ。汝が根を以て塵を取り識を以て分別すと言へるは是の事は已に答へたり。根は知ることなきが故なり。又[三四]汝等も根が思惟して我に差別相あることを知るとは說かず。是の故に諸根は塵を取ること能はざるなり。又汝等の諸の知も根を待たずして生ずるなり。所以は何、大及び我等は根に先だつて生ずればなり。又汝の大等の諸諦は本性なきが故に、則ち應に皆無なるべし、汝の法にては本性が變じて大等と爲るも、本性の法は無ければなり、是の事は已に說きたり。是れ則ち根無きなり。

根塵合離品[三五]　第四十九

問曰　汝が、識が能く知り、根が知るに非ずと言ふ是の事は已に成じたるも、今、根と塵とが合するが故に識が生ずと爲すや、離するが故に生ずと爲すや。

答曰　眼識は到るを待つが故に塵を知るにはあらず、所以は何、月等の遠き物も亦見ることを得べく、月の色は應に[三六]月を離れて而も來るべからざればなり。又空と明とを假るが故に色を見ることを得、若し眼にして色に到らば、則ち間に空と明とは無し、眼と篦とが觸るゝときは眼は則ち見ることを得ざるが如し。當に知るべし、眼識は到らずして而も知るなり。耳識は二種——或は到るが故に知りと、或は到らずして而も知ると——なり。耳の鳴るは到るを以ての故に知り、雷の聲は則ち到らずして而も知るなり。餘の三識は皆根に到つて而も知るなり、所以は何、現に此の三を見るに、根が塵と和合するが故に知ることを得べければなり。意根のみは無色なるが故に到と不到ともなし。

問曰　汝は眼は色が到らずして而も知ると言ふも、是の事は然らず、所以は何、眼の中には[三七]光

【三四】　ここにていふ汝等又は汝は數論者を指す。故に我は神我、本性は自性卽ち勝因非變異、大等の諸諦は覺我慢等の諸諦をいふ。大及び我等といふは大卽ち覺と我慢と等を指し、これ等は根よりも前に轉變し出づるもの、而も本性卽ち自性より出づるものなり。本性が變じてとは自性が轉變しての意味。根本の自性が既に無なるが故に、それより出づる根等も亦なしと結論せるなり。

【三五】　此品の明す所は眼識は離中知にして合中知に非ざること、耳識は到故知と不倒故知との二種なること、他の三識は共に合中知なること、意根は無色なるが故に到不到なきことにして、此間に佛敎以外の派の說と論雜往復するなり。

【三六】　明本の外は凡て月を香とす。されど今は明本を取る。

【三七】　眼に光あり、此光が物に到るが故に見作用起るとなすは元來は正理派の說なり。

なり。

問曰[三] 眼等の五法と餘の色等との此の十法は倶に塵を知らざるも、眼等を離れては則ち識は生ぜざるが如く、若し色等を離るれば識も亦生ぜざれば、何を以てか勝と爲さむや。

答曰 諸根を以ての故に、識は差別を得て、眼識耳識等と名づく。鼓と桴(はち)と合して而して音あるも、鼓が勝るを以ての故に名づけて鼓音と曰ふが如く、地と穀等と合して而して芽を生ずるも、穀が勝るを以ての故に名づけて穀芽と爲すが如く、諸識も亦爾り。所以の處に隨つて差別の名を得るものにして、緣を以ての故なるにはあらず。若し色識と說かば、則ち疑を生ずべし、是れ眼識と爲んや、是れ色を緣ずる意識と爲んやと。又根の中には識あるも、塵の中には識なし。又眼等の中に於ては我癡心を生ず。又識の所依處は是れ根にして塵には非ず。又自身數の中に在れば根と名づくるも、塵には非ず、又是れ人の用ふる所の具なれば根と名づくるも、塵には非ず、又根は是れ衆生數なるも、塵には非ず。又根にして通利ならずんば、則ち識は明かならず。若し根にして清淨ならば則ち識は明了なり。又諸根は上中下なるを以ての故に識も隨つて差別す。此等の緣を以ての故に名づけて勝と爲すなり。又根は是れ不共なるも、塵は多人の共有たるを得べし。又根と識とは一業の果報なるも、塵は是の如くならず。又根は是れ因にして塵は是れ緣なり、所以は何、根が異なるを以ての故に識に差別あるも、塵を以ての故にはあらざればなり。種は是れ因にして、地等は是れ緣なり、種の異なるに隨ふが故に互に差別あるが如し。因は緣に勝るが故に名づけて根と爲すことを得るなり。汝が我弟子は微細の事に於て眼の見る所の如しと言ふは是れ俗語に隨ふなり、世間人は眼の中にて見ることを說くが故に眼の見る所の如しと言へるなり。佛の偈を說くが如し。

明達な智に近きこと　舌の味を知るが如し、
舌は知らずと雖も　瓢杓に同じからず、と。

【三】眼等の五法、眼耳鼻舌身の五根を指し、餘の色等とは色聲香味觸の五法を指す。

右眼にて見ると說くが如く、又日の明を以て見、月の明にて見、或は虛空にて見、或は中に[三〇]向うて見、若しくは門中にて見ると說く。物を煮る中にても、此の人が煮、彼の人が煮ると言ひ、或は草木の薪を以て煮、牛糞にて煮、油にて煮、酥にて煮、火にて煮る、日にて煮ると言ふが如し。實には是れ火にて煮るなり。餘は假に名を得るのみ。是の如く但識のみ能く見るも、眼が其の名を得るなり。又是の語は盡くは應に眼門を以て色を見ると言ふべからず。又眼は是れ人の用ふる所の具にして、人は是れ假名の作者なれば、應に具を用ふることあるべし。又眼識に因りて見るを名づけて眼が見ると爲すなり、床上の人の笑ふをば名づけて床が笑ふと爲すが如し。又眼は識の業に繫るが故に、中にて識の業を說くこと、手足等が人に繫在すれば、是の中にて人の業を名づけて手の業と爲すが如し。又眼識は眼に因れば、因の中にて果を說くこと、某の人が某の聚落を燒くと言ふが如し。金を食すと言へば、[三一]金を名づけて命と爲し、草を牛羊と爲すが如し。是れ皆因中にて果を說くなり。是の如く眼より識を生じて、能く色を見るが故に名づけて眼が見ると爲すなり。又識が眼に近づいて色を見れば、便ち眼が見ると名づくること、牧牛が水に近づけば便ち水に在りと言ふが如し。又眼を以ての故に眼識を分別すれば、是の故に眼中に眼識の業を置くこと、[三二]杖婆羅門の如し。又眼は能く眼識を成ずれば、是の故に中に於て眼識の業を說くこと、財物が損減するを人が損滅すと名づけ財物が增長するを人が增長すと名づくるが如し。又眼識が眼と和合するが故に能く見るを名づけて眼が見ると爲すこと、木が人と合して而して能く打つを木人が打つと名づくるが如く、墨染が衣と合するが故に墨衣と名づくるが如し。又諸法は互說すること、慧業を受等の中に於て說くが如くなれば、又應に眼識を以て色を見ると言ふべきを、中の語を略するが故に但眼が見るとのみ言ふ。又藥石が一に隨つて名を受くるが如し。汝にして、若し見ること能はずんば何ぞ以て根と名づけんやと言はば、今當に答ふべし。此の眼等の五法は餘の色等に勝るが故に名づけて根と爲す

【三〇】向中見とあり、向中は或は前方の中にの意味と解すべし。

【三一】明本宮本のみは金とす。他は凡て食となす。金の方可なり。

【三二】杖婆羅門。婆羅門遊行者の中に常に杖を携ふるものあり。之を杖婆羅門又は有杖者といふ。今、眼根によりて眼識を他識より區別するに譬へ、杖婆羅門といへば他の遊行者より區別せらるるが如しとなすなり。

る眼が能く色を取るなり。又眼等を根と名づく、若し知ること能はずんば、何ぞ以て根と名づけんや。又經の中に説く、我諸の弟子は微細の事に於て能く知ること眼の見る所の如しと。若し眼にして見ること能はずんば、佛の諸の弟子は則ち見る所なけむ、是の事は不可なり。是の故に諸根は定んで能く塵を取るなり。又根を以て塵を取り、識を以て分別すれば、是れ則ち根と識と異あるなり。

答曰　經の中に佛自ら説く、眼は是れ門なり、色を見るが爲の故なりと。是の故に眼は能く見るに非ざるなり。眼を以て門と爲して、識が中に於て見る、故に眼が見ると説くのみ。

問曰　亦説く、意も是れ門なり、法を知るが爲の故なりと。意を以て門と爲すべくむば、而も知るに非ざらむや。

答曰　意も亦次第滅の心を以て門と爲せば、是の故に意は知ること能はずして、意識が能く知るなり。又經の中にて佛は説く、眼は好色を欲すと。眼は卽ち是れ色法にして、分別なきが故に、實には欲せざるなり、是れ識が欲するのみなり。又佛は眼の識る所は是れ色なりと説く。識が能く色を識るも、眼は實には識らざるなり。又世間人は、世俗を以ての故に、眼能く見、耳能く聞くと説き、佛も亦隨つて説く、何となれば但色のみは見るべくして、餘は見るべからざるも、佛は亦貪欲等の過を見ると説けばなり。又世間は月盡くと言ふ、佛も亦隨つて説き、貧賤の人を字して富貴と爲すが如きにも、佛は亦隨つて名づく、佛の意は世間と諍ふを欲せざるなり。[二九]摩伽羅の母等の如し。是の故に當に知るべし、世語に隨ふが故に佛は眼が見ると説きたまふのみ。

問曰　世間は何が故に是の如き語を作すや。

答曰　眼識の因る所に隨ひ、是の因の中に於て説いて名づけて見ると爲すなり。彼の人が見、此の人が見ると説くが如く、人が罪福等を作せば諸佛天神が見たまふと説くが如く、又左眼を以て見、

【二九】前の論門品第十四を見よ。

きが故に則ち根あることなし。又諸根の力用は謂く塵と合するが故に知を生ずるなり。和合にして已に破るれば、則ち根の用なし。是の故に一性を根と爲すことあることなし。

根無知品　第四十八

問曰　諸根は塵に到るが故に知ると爲すや、到らずして能く知ると爲すや。

答曰　根が能く知るには非ず。所以は何、若し根にして能く塵を知らば、則ち一時に遍く諸塵を知るべきに、而も實には能くせず。是の故に[二七]識を以て能く知るなり。汝が心に或は根は識を待つて共に知り、識を離れずして知ると謂ふは是の事は然らず。一法として餘法を待つが故に能く所作有るもの有ることなければ、若し眼にして能く知らば、何ぞ識を待つことを須ひんや。又若し根にして能く知らば、應當に分別すべし、是を根の業と爲んや、是を識の業と爲んや。

問曰　照は是れ根の業にして、知は是れ識の業なり。

答曰　此れ分別に非ず。云何が照と名づくるや。汝が法の中にては[二八]耳等の諸根は是れ火性に非ざれば應に能く照すべからず。若し諸根にして識に於て燈の如くならば、今、諸根は更に應に照する者あること燈の如くにして則ち照すべし、復照あらば、是の如くにして無窮ならん。若し更に照する者なく、但根のみにして能く照せば、亦應に根無くして但識のみ能く知るべし。是の故に照は根の業に非ざるなり。又根は能く知るに非ざること、燈の能く照らして而も能く知らざるが如くなるも、必ず能く識の爲に依となる、是を根の業と名づく。是の故に但識のみが能く知るなり、諸根なるには非ざるなり。若し識有らば則ち知り、識無くむば則ち知らざること、火あらば則ち熱く、火無くむば則ち熱なきが如し。當に知るべし火に從つて熱あるなり。

答曰　經の中にて說く、眼を以て色を見るも、應に相を取るべからず、耳等も亦爾りと。故に知

[二七]　これ識見家の說にてまた成實論主の取る所なり。根能知は根見家の說なり。

[二八]　勝論派にては、眼は火より成れば、これ火性なるも、耳は、古說にては四大の何れよりも成ることなく、其構成の主要素を說かず。鼻は地、舌は水、身は風を主要素として成立すれば、鼻は地性、舌は水性、身は風性なるなり。

にいへる如く實と譯さるる原語の音譯なり。

べからず。」又汝は明を離るるときは則ち見ずと言ふも、若し虚空と憶念と及び色とを離るゝも亦見ること能はざれば、則ち虚空等も亦應に皆多かるべし。又一切の眼が皆外の明を假るには非ず、[二三]鵄鵂等の禽と猫狸等の獸とは外の明を假らずしても亦能く見ることを得るが如し。故に火多きには非ざるなり。又火は是れ明照にして常に熱相あるも、眼は是の如くならず。若し汝にして眼には光明ありて能く遠く色に對すと言はば、是の事は已に破したり。眼には光なきが故なり。若し日に還歸すと言はゞ、眼は則ち是れ常なり。又日等は根に非ざれば眼は何が故に歸せんや。又若し日なるものにして死せば日の根と及び日とは復何れにか歸する所ぞ。是の故に然らざるなり。又上天にて死する時は、眼は何れにか歸する所ぞ、上には日なきが故なり。又虚空は作なければ、則ち歸する所なけむ。又諸根には去なし、有爲の法は念々に滅するを以ての故なり。汝にして眼は定んで能く色を見、色は火に屬するが故に、還つて自性を見るなりと言はゞ、是の事は然らず、因を用ふることなきが故なり。聲の空に屬する等も亦是の如し。是の故に汝が五根の中に於て諸大は偏に多しと言ひしは是の事は已に破したり。

問曰[二四] 有る論師の言く、一根は一性なり、地の中には求那が多きが故に、香有りて能く香の知を發し、水火風の中には味色觸あるが故に能く味色觸の知を發するなりと。是れ實なりや云何。

答曰 我は先に不定と說きたり。地の中には香もあり餘物も亦あり、是の故に非因なり。又諸大にして合生して、地の水を離れたる等あることを見ずむば、若し地にして香有るが故に能く香の知を發せば、亦應に色等の知をも發すべし、地の中には四求那を具するを以ての故なり。

問曰[二五] 香は但是れ地のみ、鼻が地に屬するあり、故に獨り能く香を知ること有るなり。

答曰 地の求那は但是れ地なるのみにして、鼻ありて應に盡く知るべくむば、又水は但冷觸のみあり、火は但熱觸のみあれば、應に舌根を以て能く知るべきに、而も實には然らず。又[二六]陀羅驃な

ば世世達辯の報を得と。

【二二】 非因は因明上の術語と解するも可なり。

【二三】 鵄鵂は鵂鶹と同じく梟なり。

【二四】 有る論師とは勝論派のものを指す。求那 (guṇa) は譯して德といふ。色香味觸等を指す。地中に德多しとは地は色香味觸を有し、水は色味觸を、火は色觸を、風は觸を有するを意味す。地の特有の德は香なり、故に地を主成分となす鼻が香を感覺し得と說くが勝論說あり。故に、恐らく、「地の中には求那多きも、故に香有りて能く香の知を發し」と讀むを可とせむ。水等の下の故も同じ。

【二五】 勝論說にて地水火風を原子として見るときは、地は香、水は味、火は色、風は觸を有すとして、一實一德となす說と、又前揭註にいへる如く地は四德、水は三德、火は二德、風は一德を有すとなす說と兩說あることとなる。原子が結合して複合物となりたる上の地水火風の各の德は後者の說の如く順次に四德三德二德一德なりとなす。何れにしても四實に特有の德を配當し得べく、地には香が特有なり。

【二六】 陀羅驃 (dravya)。は前

答曰　無し、所以は何、虛空は無なるが故に、是の事は已に明なり、是の故に五大よりは生ぜざるなり。

問曰　[一五]諸の外道の言く、眼中には火大多し、所以は何、業因に似るが故なり。[一六]明を施すにより て眼を得るなり。經の中にて說くが如し、衣を施さば色を得、食を施さば力を得、乘を施さば樂を得、燈を施さば眼を得と。是の故に眼中には火大多きなり。又眼は明を假りて能く見、明を離るれば卽ち見ず、故に知る火大多きなり。又火は能く遠く照す、[一七]眼に光あるが故に能く遠く色に對するなり。又言く、人死すれば眼は日に還歸す、故に知る[一八]日を本性と爲す。又[一九]眼は定んで能く色を見る、色は火に屬するが故に還つて自性を見るなり。是の如く虛空地水風等も根に隨つて[二〇]偏に多し。人死すれば耳根は虛空に還歸すれば、耳は定んで能く聲を聞き、聲は虛空に屬するなり、餘も亦是の如し、是の故に根の中の諸大には應に多少あるべし。

答曰　汝が業因に似ると言ふは是の事は然らず、所以は何、或は果の業因に似ざるものあるを見ればなり。[二一]食を施して五事の報を得と說くが如し。又若し眼の中に明が多きときは則ち應に外の明なる燈燭の如き等を假らざるべし。又若し眼にして外の明を假るが故に火多しと名づけば、則ち耳等の根の中の空等も亦應に多くして外の空等を假らざるべきも、而も實には外を假る、是の故に[二二]非因なり。又水は能く眼を益すること、人の眼を洗へば眼は卽ち明了となるが如し、則ち應に水多かるべし。又火は能く眼を壞すること、日光等の如し、若し是れ自性ならば、應に自ら壞すべからず、故に知る火多きに非ざるなり。又天眼は明を離るゝも亦能く色を見る、是の故に眼は火に屬せず。又月の明の中にても亦色を見るを得るも、月は火の性なるには非ず。又眼は法として能く爾り、或は眼の明を待つて能く見るあり、明を待たずして而も見るあり、眼は空等の因緣にて色に到らずと雖も而も能く遠く見るを得るが如く、眼の法も是の如し、應に憶想分別して火大多しと謂ふ

【一五】諸の外道といふも、何れの派なるや明ならず。經の中とあるはむしろ佛教中の一派を指すと解する方が合理的なり。

【一六】燈明をいふ。燈明を施したる業が因となりて眼を得となすなり。かかる說は佛教說なり。ここに引用せる經も佛教の經にして其他の經ならざるが如し。

【一七】眼に光ありと說く說は正理派特有の說なり。百論には之を勝論說なるかの如くなすも、誤つて兩派を混同せるなり。

【一八】此說は古代印度の神話にも存す。

【一九】これは勝論說に存す。

【二〇】大正一切藏經は遍となすも、これ誤植なり。遍は偏と同一にて、而も偏とは異る。偏多なるべきこと此品の文首より知らる。

【二一】食を施すに五事の報を得。一に施命、死せんとするものに施食すれば世世長壽の報を得、二、施色、顏色憔悴のものに施食すれば世々端正の報を得、三、施力、力を失へるものに施食すれば世世多力を得、四、施安、食なく心不安のものに施食すれば世世安穩の報を得、五、施辯、物言ふを得ざるものに施食すれ

以ての故に穀は生じ、亦種子を假りて芽莖枝葉も次第して生ずるが如く、此も亦是の如くなり。

問曰　心のみは何が故に爾らざるや、眼識の如きは眼を以て根と爲し、亦[二]次第滅の心にも因るも、心は但次第滅の心のみを以て根と爲して、更に眼等の根處の如くに應に因緣と說くべきものあることなければなり。

答曰　定んで五塵あれば定んで五識あるも、心は是の如くならざるなり。又心法として應に爾るべし、但次第滅の心のみを以て根と爲して、更に餘を須ひざるなり、過去未來の法は無なりと雖も、而も意が能く緣ずるが如く、心法は是くの如くなれば、此の事も亦然るなり。又是の事は汝が法と同じ、汝が法は色等の塵の中にて識は根を待つて而して生じ、次第滅の心を待つて意識は生ずることを得となせばなり。

問曰　意識にして更に根なくんば、何れの處に依ると爲んや。

答曰　四大身に依るなり。

問曰　無色界は復何の所依ぞ。

答曰　無色界の識は所依なし。法として應に是の如くなるべし、依無くして住するなり、所依は何、[三]相が差別せるが故なり。意識は能く有と無とを知り、若し色あらば即ち依とし、色無くも亦能く住す、故に無色界も亦依無くして而も住するなり。又衆緣が合するが故に識は生ずるなり、經の中に、意が法を緣となすに因り即ち意識が生ずと說くが如し。此は何の所依ぞ。人の壁に依る等の如くなるに非ざれば、一切の諸法は皆自性に住するなり。

根等大品　第四十七

問曰　諸の外道の說く、[四]五根は五大より生ずと、是れ實なりや云何。

【二】次第滅心とは等無間緣としての意根をいふ。此意根を單に意ともいふ。この意に依りて起る識が所謂意識なり。通常順序より見て第六意識といふ。

【三】三本宮本は相を根とす。

【四】前揭註參照。

成ずる因に於て名づくれば、異とは言ふことを得ざるなり。

問曰 亦一とも言ふことを得ざらむ。

答曰 四大の成就せる中にて、假に名づけて根と爲すも、亦但四大のみを名づけて根と爲すにはあらず。故に知る諸根は四大と異ならず。

分別根品[九]　第四十六

問曰 是の諸根の中にては何れの大か偏に多なりや。

答曰 偏に多きものあることなし。

問曰 若し諸大にして等しくば、何が故に、能く色を見るものあり、能くせざるもの有りや。

答曰 皆業より生ずればなり。業より生じて眼に屬せば、四大の力能く色を見るなり。餘根も亦爾り。

問曰 若し業より生ぜば、何が故に、一根を以て遍く諸塵を知らざるや。

答曰 此の業に[一〇]五種の差別あればなり。業にして能く見の因と爲るものあり、燈燭を施して眼根の報を得るが如し。聲等も亦爾り、業が差別せるが故に根力に異有るなり。

問曰 若し是れ業力ならば、何ぞ諸根を假らんや。但應に業力のみに從つて識が能く諸塵を取るべし。

答曰 然らず。現見するに、無根なるときは則ち識は生ぜず、所以は何。盲者は見ず聾者は聞かざるが如く、現見の事の中にて、因緣は無用なれば、此は難に非ざるなり。又[一一]法として應に爾るべし、若し諸根無きときは則ち識は生ぜざるに、外の四大等は根無くして而も生ずれば、法として應に此を假るべし。又諸根は衆生の身を嚴るを以ての故に業より生ずるなり。數の因緣業を得るを

【九】これ根の義を明す段なり。

【一〇】五根各を生ずべき業を考ふるが故に五種の業となすなり。

【一一】法として一般に此の如くならざるべからずとの意味にして、下のことを指す。

問曰　或は有る人は言く、色の成就せるを名づけて眼と爲すと、是れ實なりや云何。

答曰　若しくは成就するも成就せざるも、四大の業の因より生ずるを眼等の根と名づく。若し爾らずんば、是の比丘の眼等の根の中に於ける疑終に斷ずべからず、所以は何、佛は爲に眼等の諸根は四大に因つて造らると說きたまふ、是の故に此の比丘は實の眼法無しと知りたるものなればなり。故に知る眼等は四大に異ならず。」又佛は處處に四大を分別し、眼の空なることを示すが故なり。慧を以て戲論せずと說くが如きは謂く此身を觀じて六種と分別し、堅と堅に依るとを名づけて地等と爲し、是の如くして五種を厭離し但一識あるのみなること亦牛を屠る喩の如くなるなり。象步喩經[五]の中にては、四大を分別するに更に眼あることなし、若し別に眼あらば、應に更に分別すべしと。又[六]和蹉等の諸の論議師も亦是の說を作す、過なきを以ての故なり。應當に信受すべし。

問曰　五根は四大とは異る、所以は何、眼等は[七]眼等の入の攝なるに、四大は觸入の所攝なればなり。又眼等は內入たるも四大は外入たり、眼等は根たるも、四大は根に非ず、又眼等は是れ造色の成就なるも四大は爾らず、故に知る諸根は是れ四大なるには非ず。

答曰　[八]因緣に隨ふが故に卽ち事が異り說かるるなり、信等の五根の亦行陰とも名づくるが如し。若し四大にして業より生ぜば、眼等の所攝にして、亦內入とも名づけ、亦は名づけて根とも爲す。又四大は卽ち是れ成就なり、輪等にして車を成ぜば、輪が卽ち是れ車なるが如く、是の事も亦爾り。

問曰　然らず。心の清淨なるを名づけて信と爲すも、信は異にして心は異なるが如く、是の事も亦爾なり。

答曰　然らず。清水珠に因りて水が卽ち清水と爲らば、淸は卽ち是れ水なるが如く、是の如く信珠を得るとき則ち心池にして淨とならば、是の心淨は卽ち是れ心なればなり。」又我等(われら)は此の論の中に於ては、心より異なれる信ありとは說かず、是の故に此の喩は非なり。」又根とは是れ假に假名を

【五】此經は非彼證品第四十にもあり。

【六】和蹉（Vatsa）。は犢蹉とも、婆蹉とも音譯せらる、恐らく、犢蹉國の論師の意味にして、犢子部の論師などならむ。智度論にも此の說あればなり。

【七】入は處の異譯なれば、十二入卽ち十二處をここに眼等の入といへるなり。十二處は六根六境をいふ。

【八】問は有部說にして、答は經部說と同じ。

卷の第四

[一]根假名品　第四十五

問曰　眼等の諸根は四大と一と爲んや、異と爲んや。

答曰　業の因緣に從つて四大は眼等の根を成ず、此の故に四大と異ならず。又佛は眼を分別して是の如き言を作す「眼の肉形の中の所有の堅と堅に依るとを名づけて地種と爲す」と、故に知る諸根は卽ち是れ四大なり、所以は何、但堅等を分別するのみにして、更に眼あることなければなり。佛は人をして眼の空なることを知らしめんと欲するが故に是の如きの說を作すなり。若し爾らずんば、應に眼の中に別に堅等あるべし。若し堅等の中に別に眼あらば、堅等を分別すと雖も、則ち益する所なけむ、是の故に諸根は四大に異ならざるなり。又六種經の中にて說く、[二]「六種は是れ人なりと」。若し諸根にして四大と異ならば、則ち眼等をば人を成ずる因緣とは名づけず。色等に因つて四大を成ずれば、聲も亦是れ人を成ずるの因緣なり。但六種の中にて假に名づけて人と爲すのみ。故に知る諸根は四大に異ならず。又比丘、佛に問ふ、何等をか眼と爲すやと、佛答へたまはく、四大に因りて色を成じ、不可見にして有對なるを是を名づけて眼と爲すと。故に知る四大に異ならず。是の比丘は利根にして智あれば、眼等の根に於て深く疑を生ぜるなり。世間は、皆色を見るは是れ眼、乃至亦觸を知るは是れ身なりと知るも、是の比丘は眼等の[三]根の中に於て有無の疑を生ぜるなり、所以は何、或は諸師あつて[四]五性を五根と爲すと說き、或は一性を說けばなり。是の比丘は佛の法を試觀せんと欲するが故に佛に問ひ、佛は五根が皆四大に屬することを示さんと欲して答へて、比丘よ、是の眼は四大所成の色に因りて、不可見にして有對なりと言へるなり。若し法にして實あらば則ち因成には非ず、假名の法に因りて更に假名を成ずること、樹に因りて林を成すが如くなり。

【一】三本宮本はここにて卷を分つことをなさず。

【二】此經は非彼證品第四十及び八解脫品第一百六十三にもあり。六種とは眼耳鼻舌身意の六根を指す。

【三】麗本には根なし。今は三本宮本に從ふ。

【四】性とは五大の性をいふ。勝論派にては、古くは耳を除く他の四根は各別に四大より成ると說く、卽ち、眼根は火大、鼻根は地大、舌根は水大、身根は風大より成ると。之れ一根一性の說なり後世に及びて耳根は空大より成るとの說を立て、五根は各五大の一より成るとなすに至れり。正理派は五根は各五大の一より成ると說く。數論派にても時代によりて異り、或は五大所成とも、或は、地大所成とも說くといはる。

答曰　冷を名づけて風と爲すことあることなし、氷雪には冷あるも名づけて風と爲さざるが如し。又風と冷とは名異る、所以は何、熱風及び不冷不熱風の如きをも亦名づけて風と爲せばなり。是の故に應に輕に依る衆を名づけて風と爲すべし。又色觸の法の生ずる無きを名づけて風と爲す、冷を風と爲すとは非ざるなり。

問曰　風にして色味あらば何れの咎ありや。

答曰　風の中の色味は不可得なればなり。若し有りと雖も微細なるを以ての故に不可得なりと言はば、心中にも亦應に憶想分別して色味ありと謂ふべきも、是の事は然らず。又我等は因中に果ありとは說かず、是の故に、若し事にして果の中に得べくとも、必ずしも因の中に先に有るにはあらず。是を四大の實なるを成ずと名づく。

答曰　相の多き者に隨つて即ち名づけて大と爲す、火の中にも亦輕熱の相あれども、熱が多きを以ての故に名づけて火と爲し、輕が多きを以ての故に火と名づくるにはあらず。風の中には但輕のみありて熱無し、是の故に但輕のみを以て名と爲すなり。又我等は但輕のみを以て風と爲さず、若し輕にして而も能く動の因と爲るが故に名づけて風と爲さば、經の中にて輕動の相を風と名づくと說くが如き、是の中に於ける輕相は是れ風、動は是れ風の業たればなり。

問曰　風は能く山をも倒す、若し是れ輕の物ならば云何ぞ能く爾らん。

答曰　風は麁にして力強ければ、勢能は是の如くなり。或は風の能く小草を動かし、或は能く山を頽するものあるが如き、當に知るべし、風の業は是の如くなり。

問曰　今、地等の大は皆是れ色香味觸の業にして差別なきや。

答曰　不定なり、[一四三]地と名づくる中には色香味觸あるが如きも、或は但色觸のみのものあり、金銀等の如し、或は水の中にも色香味觸あるも、或は三の色味觸のみのものあり、或は火の中にも色香味觸あるも、或は三の色香觸のみのものあり、或は但色觸のみなり、風の中にも或は觸ありて香無きもの、或は香觸あるものあり、是の故に不定なり。

問曰　風觸は云何。

答曰　寒熱堅軟等の諸觸にして若し大に隨つて相續して離れざること知るべくむば、即ち此の大の觸なり。

問曰、醫の言へる有り、風色は黑しと、是れ實なりや云何。

答曰　風は黑色の與に因と爲るなり。風病の人の口中には辛苦の味あるが如きは、而も此の醫にして風の中に味ありと說かざるも、則ち風は味の與に因と爲るなり。

問曰　或は有る人の說く、風は是れ冷にして、說いて輕と爲さずと、是れ實なりや云何。

【一四三】
地中在
水中在
火中在
風中在

色味觸
色香味觸
色觸
色香觸
觸
香觸

問曰　爾の時に於て是の重相を知るに非ずや。

答曰　人が衣を著くれば、相觸せずと雖も、亦有力と無力とを知るが如く、輕重も亦爾り、所以は何、種々の觸より種々の身識を生ず、或は[一三七]掐を按ずるに因りて堅軟の識を生じ、或は擧動するに從つて輕重の識を生じ、或は把捉するに從つて强弱の識を生じ、或は觸對するに從つて冷熱の識を生じ、或は摩捫するに從つて澁滑の識を生じ、或は[一三八]擠搦するに從つて强濡の識を生じ、或は劖刺するに從ひ、或は鞭杖に因りて異種の識を生ずるが如し。或は觸の常に身內に在つて、寒熱等の如く外より假に來るに非ざるあり、所謂、猗樂と疲極と不疲極と若しくは病むと若しくは差ゆと、身利と身鈍と嬾重と迷悶と[一三九]瞪瞢と疼痺と[一四〇]嚬呻と飢渴と飽滿と嗜樂と不樂と[一四一]懵等の諸觸にして、各々異識を生ず。

問曰　若し輕と重との相は卽ち色等の衆ならば、云何が色等の中に於て身を以て緣を識るや。

答曰　色等の衆の中にて身を用つて緣を識るには非ず、但此の觸分のみが身を以て緣を識るなり。堅と不堅等の如きは色等の衆の中に在りと雖も、或は眼を以て見て知ることを得、又猗樂等の如きは是れ色等の衆にして、亦身を以て識りて分別すること、是の事も亦爾り。

問曰　若し輕と重とにして、但是れ觸のみならば、何の咎ありや、何ぞ色等の衆を分別することを用ふることを爲さむや。

答曰　世人は、新穀と[一四二]陳穀とあり、是の新陳の相は應に異色なるべし等と說くが如きも、而も實には爾らず、但色等の初めて生ずるをのみ名づけて新と爲す。若し此の新相にして是れ色等の衆の重相ならば云何が非なりや。

問曰　若し色等の衆にして卽ち是れ輕と重と等ならば、是の輕相は火と風との中に在れば、則ち輕の多き色等の衆は應に名づけて風と爲すべし、若し然らば、火を卽ち風と爲んや。

【一三七】三本宮本は按を案とし、宮本は掐は稻とす、掐は爪にて刺すことなり。
【一三八】擠は排、搦は按の意なり。
【一三九】註に不明なりとあり。
【一四〇】三本宮本は嚬伸とす。
【一四一】註に昏闇なりとあり。
【一四二】陳の古の意。

或は法の相待なるが故に短なるあるが如し、總相は心に因るが故に卽ち別相と爲るなり。若し輕法は相待なるを以ての故に無ならば、是等も亦應に皆無なるべし、而も然らず、是の故に相待は是れ正因には非ざるなり。又輕は相待なるが故に有なるには非ず、稱るべからざるを以ての故に有なるなり。物の稱るべからざるは〔一三六〕槖囊の中の風の如し、是の故に相待の有には非ず。但重法のみは相待す、重物にして稱るべからざるものあることなければなり。

問曰　若し稱るべからざるを名づけて輕と爲さば、重を除いての餘の色等の法も、稱るべからざるが故に、皆應に輕と爲すべきに、而も然らず、是の故に汝が說く所は是れ輕相なるに非ざるなり。

答曰　我等の意は色等を離れて更に異法の名づけて重と爲すもの無しとなすなり、色等の法は、或は生性有つて稱るべし、堅と不堅と、力と無力と、新と故と、朽と不朽と、消と不消と、麁と軟と等の、亦色等を離れずして而も有るが如く、重相も亦是の如し。是の色等の衆にして若し地と水とに屬せば、是れ則ち稱るべし、若し風と火とに屬せば、則ち稱るべからざるなり。

問曰　若し重法にして色等を離れむば、輕も亦應に色等を離れずして有るべし。

答曰　然り、色等を離れては別の輕法なし、但色等の衆和合せるのみを輕と爲すなり。

問曰　然らず、輕と重とを分別せんと欲せば必ず身根を以てす、是の故に輕と重とは是れ色等の衆に非ざるなり。

答曰　堅等を分別するが如きは、或は眼を以てし、或は耳を以てする等なり。此の堅等の物は色等を離れざれば、輕と重とも亦是の如し。身根を用ふと雖も是の中には更に異相なし。又身根は觸せざれば身識を生ぜず、是の重相は、身と未だ觸せずと雖も、亦能く識を生ず、重物の物を以て裹み持つと雖も亦其の重きを知るが如し。

〔一三六〕麗本に排とす。三本宮本は槖とす。槖は鞴と同じくフイゴなり。

問曰　金の堅は則ち[一三四]消流となり、水の濕は則ち堅氷とならば、云何ぞ諸の大は自相を捨てざらむや。經に四大の相は或は變ずべきも、[一三五]四信を得たるもの異することを得べからずと說くが如し。

答曰　我は堅を以て流ともなさず濕を以て堅とも爲さず、但堅は流の與に因と爲り濕は堅の與に因と爲るとなすのみ、是の故に自相を捨てざるなり。

問曰　阿毘曇の中にて說く、濕は是れ水相なりと、或は有る人の說く、流は是れ水相なりと、經の中にて說く、潤は是れ水相なりと、竟に何れの者を以て實と爲さんや。

答曰　流と濕と潤とは皆是れ水の別名なり。

問曰　流は是れ水の業にして、眼の見る所の法なり、是の故に流は濕潤には非ざるなり。

答曰　濕潤を以ての故に流れ、是の故に下に赴くなり、是の故に流即ち是れ潤なり、亦濕潤は是れ水の相、流は是れ水の業なり。

問曰　風の中に輕動の相を說く、輕は異、動は異なり、輕は是れ觸入の所攝にして動は是れ色入の所攝なればなり。今、二法を以て風と爲すべきや。

答曰　輕は是れ風の相にして、動は是れ風の業なれば、業と合して說けるなり。

問曰　動相あることなし、諸法は念念に滅するが故に餘處に至らざればなり。餘處に至るを以ての故に名づけて動と曰ふ、至去と動とは是れ一義なるが故なり。

答曰　我は但だ世諦を以てのみの故に名づけて業と爲す、第一義には非ざるなり。是の輕法に因りて餘處に法の生ずるを名づけて業と爲ることを得、爾の時を去と名づくるなり。

問曰　輕には定相なし、所以は何、相待なるを以ての故に有なればなり。十斤の物は二十斤に於ては輕しと爲すも、五斤に於ては重しと爲すが如し。

答曰　重法と量法とも、心等の法に因つて亦相待の有なり。或は法の相待なるが故に長なるあり、

【一三四】消はとけるの意味。

【一三五】四信は法聚品第十八に說かれし信佛信法信僧信戒なり。

の事も然らず、長短等の如きは相待なるも亦有なればなり。又白石蜜の味を嘗めて、黒石蜜を以て苦しと爲し、[一三]呵黎勒の味を嘗めて、黒石蜜を以て甘しと爲るが如き、若し相待なるを以ての故に無ならば則ち味も亦無ならむ。

問曰　黒石蜜の中には二種の味あり、亦は甘亦は苦なり。

答曰　氎の中にも亦二觸あり、亦は堅亦は軟なり。又汝は石を見て堅を知ると言ふも是の事は然らず、眼を以て堅を知るべからざればなり。先に觸せるを以ての故に比知するのみ、火を見て熱を知るも、熱は見るべきに非ざるが如し。又人は欽抜羅を見て疑――堅と爲んや、軟と爲んや――を生ず、是の故に觸は眼の見るべきものに非ず、是の故に堅等の諸觸あるなり。又、實に堅等あり、所以は何、能く分別心を起すが故なり、若し堅無くんば、何の分別する所ぞ。又堅は能く心の與に緣と作ればなり。亦作す所の業は異ればなり、謂く打擲等なり。又軟濕と相違するとき則ち名づけて堅と爲せばなり。又能持の因緣を以ての故に名づけて堅と爲せばなり。又能く平等を障礙するが故に名づけて堅と爲せばなり。又我等は現に是の堅を知ればなり、現に知る事の中にては因緣を須ひざるなり。又世間の事を以て名づけて堅と爲すことを得ればなり、餘も亦是くの如し。故に知る堅あり。

四大相品　第四十四

問曰　我は是の堅法あることを知れり。而も今金は熱すれば則ち流れ、水は寒なれば氷と成るを見る、此の金は、堅を以ての故に、地に屬するや、流るるが故に水に屬するや。

答曰　各〻自ら相あり、若し法にして堅と堅に依るとならば是れ地種、若し濕と濕に依るとならば是れ水種等なり。

【一三】呵黎勒(Haritaki)は果實の名、大さは棗の實に似、其の味を酢苦なり。天主將來と譯す。五藥の一なり。

無堅相品　第四十二

問曰　汝は多堅の色等が地大を成ず、是の故に地等は是れ假名なりと說くも、是の事は然らず、所以は何、堅法すら尙無し、況んや假名の地をや。若し泥團にして是れ堅なるも、[三〇]泥團は卽ち軟たり、故に知る定れる堅相なし。又少因緣を以ての故に堅の心を生ぜば、若し微塵にして疎に合せるを名づけて軟と爲さば、密に合せるを名づけて堅と爲す、是の故に定なし。又一法の中にて、二の觸の是の心に身の堅と身の軟とを生ぜしむるもの有ることなし。是の故に定れる堅相なし、又堅と軟とは定なし、相待なるが故に有なればなり。[三一]欽拔羅を見れば、氎を以て軟と爲し、氎を見るが故に欽拔羅を以て堅と爲すが如し。觸法は應に相待なるが故に有なるべからず。又自ら金石を覩れば則ち是れ堅觸なるを知るも、眼の得べきものには非ず、是の故に堅なし。此の因緣を以て軟等の諸觸も亦皆無なり。

有堅相品　第四十三

答曰　[三二]實に堅相あり。汝は泥團にして是れ堅なるも泥團は卽ち軟たりと言ふと雖も、是の事は然らず、所以は何、我等には實の泥團の法あることなければなり。諸法の和合せるを假に泥團と名づくるのみなるが故に此の咎なし。又汝は少因緣を以ての故に堅心を生ずと言ふも是の事も然らず。我は密合せる微塵の中に於て、是の堅相を得るが故に名づけて堅と爲し、密ならざる中に於ては此の軟相を得れば名づけて軟と爲すが故に、是の故に咎なし、若し法にして可得ならば卽ち名づけて有と爲せばなり。又汝が一法の中にては二の觸なしと言ふは是の事は然らず、我は一法の中に於て多觸にして亦は堅亦は軟なるを得べければなり。又汝は堅と軟とは相待なるが故に定なしと言ふも是

【三〇】泥團は堅なりといけるも、實際としては軟なりの意。

【三一】欽拔羅、(kambala) 衣服の意味なり。特に細き羊毛にて織りたる衣服、氎は麗本には疊とあるも、三本宮本に氎とあるを可とせむ。氎は軟き毛織物なり。

【三二】前の無堅相品の問に對して此品は答なり。此品の說は成實論の說にして經部說と同じ。

れば謂く諸大は是れ實なりと言ふは是の事は未了なり、當に知るべし、是の依の義は異る、謂く假名是なり。又汝が、俗の言說に隨はゞ實の大には非ずと言ふは、是の事は然らず、所以は何、若しくは〔一二八〕經書にても、若しくは世間の中にても、因緣なきを以ての故に、色等の中に於て四大の名字を作さゞればなり。世間が、我は人を見ると言ふが如く、色等の中に於て人の名を說くは因緣なきには非ざるなり。若し因緣なきに、强いて名を作さば、馬を見て應に名づけて人と爲すべきに、而も實には然らず。又何を以ての故に、聲の中に於て說いて名づけて地と爲さゞるや、世人は常に地の聲と說くも終に聲は是れ地なりとは說かざればなり。若し因緣なきに强いて名を作さば、亦聲を名づけて地とも爲すべきに、而も實には然らず。是の故に色等の四法は是れ地にして、地の分の中に於て地の名字を說くなり。色は是れ假名の因を成ずれば、中に於て說いて人と名づくる如く、樹の中に於て說いて林と名づけ、比丘の中に於て說いて僧と名づく。是の如く色等の法の中に於て四大の名を說くなり。又汝は若しくは六觸入にて、若しくは六觸入を因として成ずる所と言ふも、是の經は然らず、汝が法の中にては、造色には所能生なきが如く、我法も亦爾り、假名の中に於ては更に所生なし、是の故に此の經は應に有るべからず。若し有らば應に此の義を轉ずべし。又汝は四大を因として造らるゝ淸淨色を名づけて眼と爲すといふも、是の事も然らず、四大の和合せるを假に名づけて眼と爲せば、〔一二九〕佛は四大を名づけて色と爲し、色淸淨なるが故に名づけて眼と爲すのみ。又汝は法が法の中に住して、依なく主なしと言ふと雖も、是れ卽ち依と主と爲す、住する者は是れ依にして、所住の法を主と爲すを以てなり。又汝は堅相は能持なり等と言ふも、是の事は然らず、但堅相のみが能持なるには非ずして、衆の因緣を假るものなればなり、餘も亦是の如し。是の故に四大は是れ假名有なり。

【一二八】世間一般の認むる經書なれど、印度としては所謂スムリテイなり。

【一二九】三本宮本は佛の代りに假とす。或は佛假名四大爲色なりしか。然らば、佛は假名の四大を色と爲し、となる。

の如き、物あるも熱なきこと月等の如き、物あるも冷なきこと火等の如き、物あるも相動ずること風等の如き、物有るも動なきこと方と石と等の如き、是の如く、或は物あるも堅ならず、或は物あるも濕ならず、或は物あるも熱ならず、或は物あるも動ならざるが如し。是の故に四大は相離せざるには非ざるなり。

問曰　外の因緣を以て諸大の性は發す、金石等の中には流相あれば、火を待つて則ち發し、水の中には堅相あれば、冷に因つて則ち發し、風の中に冷熱相あれば水火に因つて則ち發し、草木の中には動相あれば風を得て則ち發するが如し、是の故に先に自性あれば、緣を假りて發するなり、故に知る四大は相離することを得ず、若し本(もとより)、性無くんば、云何ぞ發すべけむや。

答曰　若し爾らば、風の中にて或は香ありて、香は應に風の中に在るべし、香が油に熏ずれば香は應に油の中に在るべきが如きも、是の事は然らず。又諸大よりは造色を生ぜず。濕より濕を生ずるが如く、是くの如く色より色を生ずればなり。又若し相離せずんば則ち因中に果あるべし、童女に子あり、食中に不淨ある等の如し。我等(われら)は因中に果あることを說かず。乳中には酪なしと雖も而も酪は乳より生ず。是の如くなるを、何ぞ憶念分別を用つて四大は共生して相離せずと謂ふや。

明本宗品[一二七]　第四十一

汝が先に我等(われら)は四大と色とは若しくは一若しくは異なりとは說かず、是の故に咎なしと言へるは、是の事は然らず、所以は何、諸の外道は我を成ぜんと欲するが故に四大の一異を以て喩と爲す、故に佛は假名の中に於て四大を以て喩となすが故に四大の義を說くのみなればなり。若し爾らずんば則ち應に說くべからず。世間は皆自然に地等の四大を知れども而も實性を了せず、是の故に爲に說くなり、手等をば說かず。若し堅等を以て四大と爲さば何の利益する所ぞ。又汝が依の義は二種な

【一二七】此品は別に分品せざるも可なるものなり。本宗とは、四大は假有にして實有にあらずとふ說を指す。此品はまさしく四大假有を明す品なり。前品も趣意は同一なるも、主として破を以て說き、本品は立を以て論ず。但し前品にも立の義を兼ね、本品にも破の義を兼ぬ。

亦は假名なりとは則ち是れ邪論なり。又[一二四]六種經の中にて佛は髪毛爪等を地種と名づくと說き、又[一二五]象步喩經の中にても亦、髪毛爪等を地種と爲すと說きたまふ、又何れの義を以ての故に種は是れ實なりと說きて、種は是れ假名なりと說かざるや。又此の義は經の載する所に非ず。又汝ば、佛は眼形の中の所有の堅と堅に依るとは是れ地等なりと說くと言ふも、佛は此の言を以て五根は四大に因りて成ずることを示せるなり。或は人有り[一二六]我より根を生ずと說き、或は大を離れて別に更に根ありと謂ひ、或は說く、諸根は種々の性より生ず、謂く地大より鼻根を生ずと、等なり。佛は此を斷ぜんが故に、眼等の根は四大合成し空にして實法なしと說きたまふ。又分別して假名の因緣を成ずるも、假名も亦無なり。又此の肉形の中には四分の堅と堅に依ると等あれば、佛は是の語を以て、諸物の中にて四大より生ずる者あることを示すなり。又汝が佛は風の中には依ありとは說かざるが故に實の大と名づくと言ふは、此の事は然らず、所以は何、風の中にては輕は是れ勝相にして、輕に依る法には非ざればなり。地等の中にては堅に依る法等が勝るも、風は則ち然らず、又輕に依る法は少きが故に說かざるのみ。又汝が若し、四大は是れ假名なれば則ち大の相を離ると說くと言ふは是の事は然らず、若し堅と堅に依るとにして四大より生ぜば、名づけて地種と爲す、異物の相依るを謂ふには非ず、若し法にして相異らば則ち依とは名づけず、即ち是れ相離するなり。

問曰　生ずるときは則即ち是を名づけて依と爲さず、依とは異物の來りて依るに名づくるなり。

答曰　名字を依と爲すのみにして、異物の相依るには非ず、生法は差別せるを以ての故なり、虚空は遍く至ると言ふも、實には至る所なきが如し。又汝が四大は共生すと言ふは是の事は然らず、日光の中には但色及び熱觸の得べきあるのみにして更に餘法なく、月光の中には但色及び冷觸の得べきあるのみにして亦餘法なきが如し、是の故に一切の物の中に盡く四大あるには非ず。物あるも味なきこと金剛等の如き、物あるも香なきこと金銀等の如き、物あるも色なきこと溫室等の中の熱

【一二四】此經は根假名品第四十五及び八解脫品第一百六十三にもあり。

【一二五】此經は根假名品第四十五にも引用せらる。中阿含には牛跡喩經とあり。

【一二六】此或人は數論者を指す。次の我は恐らく我慢を指す。次の或說は勝論派の說、次の或說は數論派の一派にても勝論派にても說くものなり。

り、是の故に但堅等のみを以て四衆を分別するなり。又經の中にて、堅に依るを以ての故に四大の差別を示すと說くが如し。故に知る堅に依る法を名づけて地種となす、但堅相のみには非ず、故に堅相は是れ地を成ずるの因なりと說くなり。又地を成ずるもの丶中に於て、堅は是れ勝因なり、是の故に別して說くのみ、餘の相も亦爾り。又名字を作すが爲に、所有の堅と堅に依るとを皆地種と名づくるなり。或は復人の但堅相のみを地種と爲すと說く有り、是を破せんが爲の故に、佛は堅と堅に依るとを地種と爲すと說きたまふ、餘も亦是の如し。又堅相衆の中にては堅が多なるを以ての故に二種の語あるなり。一切衆の中には皆堅等の諸觸あり、若しくは堅と堅に依るとを名づけて地種と爲し、若しくは濕と濕に依るとを名づけて水種と爲し、若しくは熱と熱に依るとを名づけて火種となす。又堅は是れ地を成ずるの勝因なるが故に、中に於て地が成ずと名づくるなり、假名の因緣の中には假名の名字あり、[一二]我は人の林を伐るを見ると說くが如し。又汝が二種の語ありと言ふは、此の事は然らず。若し種は是れ實なりと說くに隨はゞ、則ち十二入等は應に是れ實なるべからざればなり。是の故に、眼が色を緣ずるに因つて眼識の生ずるありとなすも、是れ則ち實には非ず、種を說かざるを以ての故なり、是を邪論と爲す。又佛は火種定に入りて佛身より種々の焰色を出したまふ、是の中の何れの者をか火種と爲んや。色等は火を成ずるを以て、但熱相のみには非ざるなり。又佛は是の身を僂と名づくと說けり、中に於ては但髮毛爪等を盛るのみ。經の中にて說くが如し、是の身の中に髮毛爪等ありと、是を以ての故に髮毛爪等は是れ地種なり、種の語あるを以ての故に名づけて實法と爲すにはあらず。又種子經の中にて說く、若し地種あつて水種なくんば、諸の種子は生長することを得ずと、是の中の何れの者か是れ地種なる。謂く假名なるのみ、[一三]因は但堅相のみに非ず、水も亦假名のみ、但濕相のみに非ざればなり。又一法にして二種——亦は實、亦は假名——なるは、是れ不可得なり、是の故に色等は是れ實なり。又眼等は假名なるが故に諸大あり、亦は實

【一二】我といふも人といふも林といふも共に假名假法なり。

【一三】因は何れにも田とあり。確に因の誤寫又は誤植なり。ここにては地を指し、種子を生長する地を因と稱せしなり。

問曰 是の明は燈より去つて餘處にあり、是の故に異るべし。

答曰 異處には在らず、此の明の色は現に燈の中に在ればなり。若し異處に在らば、燈を滅するも亦應に見るべきに、而も實には見えず、當に知るべし、是の色は燈に異ならざるなり。

問曰 更に一時に生ずる法にても亦因果と爲るあり、有對の中の識の如し、眼と色とを以て因緣と爲すも、眼と色とは識を以て因緣と爲すに非ざればなり。

答曰 然らず、眼識は前心を以て因と爲し、眼と色とを緣と爲すのみ、因の心にして先に滅せば云何んぞ倶生せんや。又若し法にして所因に隨つて生ぜば、即ち是れ因成なり。若し心にして情と塵とを因として有ならば、即ち是れ因所成の法なり。復次に四大は即ち是れ造色なり、因の生ずる所なるを以ての故なり。又現に世間の物を見るに似なる因より生ず、稻より稻を生じ麥より麥を生ずるが如し、是の如く地よりは地を生じて水等を生ぜず、是の如く色よりは色を生ず、是の如き等なり。

問曰 亦見[二九]に物の異因より生ずる有り、倒に牛毛を種うれば則ち蒲の生ずる有り、角を種うれば葦の生ずるが如し。

答曰 我は異因より生ずるもの無しとは言はず、但似因の中よりも亦生ずと說くのみ、故に色等よりは色等を生じて、但四大のみよりは生ぜずと言ふなり、是の故に定んで色等は四大より生ずと言ふことを得ず。又汝が堅等を以て四大を示す、是の故に堅等は是れ實の大なりと言ふは此の事は然らず、所以は何、堅等の相は定まれるを以て、以て[三〇]四衆の軟等の定まらざるを分別すべきも、或は多の堅衆の中に在り、或は多の濕衆の中に在るが故に、以て諸衆を分別すべからず、餘も亦是の如くなればなり。又堅等の觸に於て分別して名づけて軟等と爲す、何となれば、若し濕を以てせば、亦生性なるを以て柔軟細滑なり、堅相多きを以ての故に堅[三一]鞕麁澁なり、是の如き等なればな

【二九】見は現に通ず。

【三〇】四衆は堅濕熱動なり。

【三一】堅の意味。

色等は但四大のみより生ずるには非ず。

問曰　色等は業等より生ずと雖も、四大も亦應に[一八]少因と爲るべし、業に因るが故に穀あれども、此の穀も亦種子等を假りて生ずるが如し。是くの如く眼等は業より生ずと雖も四大も亦少因と爲るべし。

答曰　或は物の因緣無くして生ずる有り、例へば劫盡き已つて、劫初の大雨の如し。是の水は何れの所より生ぜむや。又諸天の所欲の念に應じて卽ち得ると坐禪人及び大功德人の所欲の意に隨ふが如きと、是の事は何等の緣あらむや、但だ業のみに非ずや。又色の相續の斷じ已つて更に生ずるが如し。若し人無色界に生じて還色界に生ぜば、是の色は何を以て本と爲むや。

問曰　何が故に物の但業のみより生ずる有りや、何が故に物の外緣を待つて生ずる有りや。

答曰　若し衆生ありて業力弱きときは則ち種子と衆緣との助成を須つも、業力強きときは外緣を假らざるなり。又法の應に爾るべきあり、或は業有るあり、或は法有るあり、或は生處有るあり、但業力のみにて得て外緣を須たざるあり。又若し因緣を須たば、應に種子は是れ芽等の因なりと說くべし、何が故に乃ち堅等に因りて生ずと說くや。又何れの義を以ての故に、堅等より色等を生じ、色等より堅等を生ぜざるや。又堅等と色等とは共に俱生するが故に、云何ぞ堅等に因りて色等あり、色等に因つては堅等あらずとのみ言ふや。又一時に法を生ずるときは、則ち相因たることなし、二角の俱生するが如く、左右相因たりとは言ふことを得ざればなり。

問曰　燈と明とは一時に生ずと雖も、亦明は燈に因り、燈は明に因るに非ずと說くが如く、是の事も亦爾るなり。

答曰　燈と明と異ならず。燈は二法を以て合成す、一に色、二に觸なり、色は卽ち是れ明なるが故に、燈に異ることを得ず、汝は諦には此の喩を思はざるのみ。

【一八】少因とは幾分かの因又は少部分の因の意味。卽ち四大も亦色の生ずる一部分の因なりとなすなり。

くは異と說くも、我等は[一六]觸入の少分が是れ四大なりと說く、是の故に答なければなり。又我等は現見の堅等を是れ四大なりと說けば、衞世師人が四大も亦有にして現見に非ずと說くが如くならざるなり。又汝が堅と堅に依るとを言ふも、依の義は二種なり、經の中にて、色と色に依るとを說き、又心と大の法に依るとを說くが如し。此の義の中にては、堅と說くは卽ち堅に依ることにして、更に異法なし。若し爾らば何の過あらんや。又汝が世人は皆信ず、乃至、八功德水は但俗の言說に隨ふのみ、是れ實の大には非ずと說き、又、汝が因所成法は皆是れ假名なりと說くは、是の事は然らず、所以は何、經の中にて說く、若しくは六觸入、若しくは六觸入を因として成ずる所の法ありと、又比丘ありて佛に問ふ、何等をか眼と爲す、佛は答へたまはく、四大を因として造らるゝ淸淨色を是を名づけて眼と爲すと、是くの如くにして十入あればなり。又汝は主あり依ありと言ふも、我等は然らず、但法が法の中に住することを說くのみ。又汝は堅等に何の義あるが故に、獨り大と名づくるやといふも、堅等には義あり、所謂、堅相は能持、水相は能潤、火相は能熱、風は能成就なり。是の故に四大は是れ實なり。

[一七]非彼證品　第四十

答曰、然らず、四大は是れ假名のみ。汝は阿毘曇の中にて、堅相は是れ地種なり等と說くと言ふと雖も是の事は然らず、所以は何、佛自ら堅と堅に依るとは是れ地にして、但堅相のみには非ずと說きたまへばなり、此の故に此れ正因には非ざるなり。又汝は色等は四大より生ずと說くも此の事も然らず、所以は何、色等は業煩惱飮食婬欲等よりも生ずればなり。經の中にて說くが如し、眼は何れを所因となすや、業に因るが故に生ずと、又說く貪樂の集の故に色集ありと、又阿難の比丘尼に敎へて、姉よ、是の身は飮食より生じ、愛慢より生じ、婬欲より生ずと言へるが如し、故に知る、

【一六】觸入は十二入卽ち十二處の一たるを意味す。觸の一部分が四大なるなり。

【一七】三本宮本はここより第四卷とす。非彼證は前品にいふ所が凡て論者の證となるものにあらずと說いて反駁するなり。彼とは卽ち四大實有論者なり。

問曰[二四] 四大は是れ實有なり、所以は何、阿毘曇の中にて、堅相は是れ地種、濕相は是れ水種、熱相は是れ火種、動相は風種なりと說けばなり、是の故に四大は是れ實有なり。又色等の造色は四大より生じて假名有ならば、則ち法を生ずること能はず。又堅等は四大を示すを以て、所謂堅と堅に依るとを地と名づく、是の故に堅等は是れ實の大なり。又經の中にて佛は二種の說は堅と堅に依ると濕と濕に依ると等なりとす。故に知る堅等は是れ實法にして、堅に依るは是れ假名なり、餘の大も亦是くの如し。是の故に堅等は是れ實の大、堅に依る法は俗に隨ふを以ての故に大と名づくるのみ。故に二種の大の亦は實亦は假名なる有るなり。又阿毘曇の中にて說く、形處は是れ地、堅相は是れ地種なり、餘の大も亦爾なりと。又經の中にて佛は說く、[二五]眼形の中にての所有の堅と堅に依るとは是れ地、濕と濕に依るとは是れ水、熱と熱に依るとは是れ火、肉形は是れ地なり、此の肉形の中に、佛は四大ありと說く、當に知るべし、堅等は是れ實の大にして、形は是れ假名の大なり、又佛は風の中には依あることを說きたまはず、故に知る、風は是れ實の大なり。又若し人にして四大は是れ假名なりと說かば、則ち大の相を離れむ。若し堅に依るを地種と名づくれば、水が堅の物に依らば水を卽ち地と爲らむ、泥團が濕に依らば、泥團を卽ち水と爲らむ、熱病の人の擧身皆熱なるが如くむば身を卽ち火と爲らむも、是の事は然らず。是の故に堅に依るは是れ地種なりとは言ふことを得ず、但堅が地種たるのみなり、餘の大も亦爾り。又四大は共生なるが故に相離せず。經の中にて說くが如し、諸の所有の色は皆四大の造なり、若し人にして四大は是れ實なりと說かば、則ち相離せざるも、若し假名なりと說かば、則ち應に相離すべし、所以は何、堅に依る色等の衆は濕に依る等の衆を離るればなり。若し爾らば則ち眼形の中には四大あることなく、則ち經と相違す、汝にして經に違せざらむと欲せば則ち四大は是れ實なりといふべし。汝が先に外道の爲の故に四大を說くといふは是の事は然らず、所以は何、諸の外道輩は四大は色等と若しくは一若し

【二四】四大實有說は有部說なり。堅等の法を以て直に四大となし、以て實有と說くなり。されど此說に於ても、若し堅等に依る法を以て四大となすとせば、同じく四大は假名となるに至るべし。

【二五】眼形とは、下の肉形より推して、眼としての形あるところをいふと知らる。

故に、此の相は假名の中にて說くなり、但堅相の中に在るのみにはあらざるなり。又地が水上に住すと說くは、是れ假名の地が住するなり、但堅が住するのみには非ず。又大地が燒盡して都べて烟炭なしと說くは假名の地を燒くことにして、但堅を燒くのみには非ず。又色等を以ての故に地等ありと信じ、但堅等のみには非ざるなり。又[二〇]井喩の中に說く、水は亦は見、亦は觸ると。若し濕にして是れ水ならば、則ち二あることを得ざらむ、所以は何、佛は、五情は互に塵を取ること能はずと說くが故なり。又佛は、八功德の水は輕と冷と軟と美と淸淨と不臭と飮時調適と飮已無患となりと說く、是の中にて輕と冷と軟との若きは皆是れ觸入、美は是れ味入、[二一]淸淨は是れ色入、不臭は是れ香入、調適と無患とは是れ其の勢力にして、此の八が和合するを總じて名づけて水と爲す、故に諸の大は是れ假名有なりと知る。(五)又因所成の法は皆是れ假名にして實有なし、[二二]偈の中に說くが如し、

輪等が和合するが　故に名づけて車と爲し、
五陰が和合するが　故に名づけて人と爲す、と、

又阿難の言く、諸法は衆緣より成ずれば我は決定處なしと。又若し人にして堅等は是れ大なりと說かば、是の人は則ち堅等を以て色等の所依と爲すなり、是れ則ち依あり主あり、是れ佛の法に非ずと。故に知る、四大は皆是れ假名なり。(六)又諸法の中にて柔軟細滑等あらば皆觸入の攝なり、堅等の四法は何の義あるが故に獨り大と爲すことを得るや。又[二三]一等の四執は皆過咎あり、故に知る、四大は但是れ假名なるのみ。(七)又實法の有相と假名の有相と及び假名の所能とは後に當に廣く說くべし、是の故に四大は實有に非ざるなり。

四大實有品　第三十九

[二〇] 恐らく井喩經。

[二一] 麗本は淸とし、淨を省く、三本宮本にはあり。

[二二] 此偈一文が立假名品第一百四十一に引用せらる。

[二三] 一と異と亦一亦異と非一非異との四句を執するをいふ。

答曰　聲等の一切は有形なり、有形なるを以てなり。有對有障礙なるを以ての故に、壁が障すれば則ち聞えざるなり。

問曰　若し聲等にして有礙ならば則ち應に餘物を受けざるべし、壁が障するが故に則ち容るゝ所なきが如し。

答曰　聲は微細なるが故に受く所あることを得るなり、香味等の細なるが故に共に一形に依つて相妨礙せざるが如し。是の故に聲等は有礙にして有對なり、故に皆名づけて色と爲すなり。(三)又惱壞すべき相なるが故に名づけて色と爲す、所有の割截殘害等は皆色に依ればなり。此れと違するが爲めの故に無色と名づく。(四)又宿命の善惡の業を示すが故に名づけて色と爲す。(五)又心心數法を示すが故に名づけて色と爲す。(六)又名を稱するが爲めの故に名づけて色と爲す。

四大假名品　第三十八

問曰　四大は是れ假名なりと、此の義未だ立せざるに、有る人は言く、四大は是れ[一〇六]實有なりと。

答曰　四大は假名なるが故に有なり、所以は何、(一)佛は外道の僞の故に四大と說きたまへばなり。諸の外道の色等は卽ち是れ大なりと說く有り、[一〇七]僧佉等の如し。或は色等を離れて是れ大なりと說く、[一〇八]衞世師等の如し。故に此の[一〇九]經は定んで色等に因るが故に地等の大を成ずと說く、故に知る諸大は是れ假名有なり。(二)又經にて說く、地種は堅と及び堅に依るとなりと、是の故に但堅のみを以て地と爲すにはあらざるなり。(三)又、世人は皆諸の大は是れ假名有りと信ず、所以は何、世人は地を見、地を嗅ぎ、地を觸し地を味ふと說けばなり。(四)又經の中にて、地の如きは可見にして有觸なりと說く。又地等の一切の入の中に入るも是の人は色を見て堅等を見ず。又人は地の色、地の香、地の味、地の觸を示せば、實法は中にあり、異示すべからず。又大の名の義は遍到なるを以ての

【一〇六】四大實有說は有部勝論派の說なり。

【一〇七】僧佉 Sāṃkhya の音譯、數論派なり。この大は大種の意なれど、數論說に當つれば、五唯の唯と同じ五唯より五大を生ずれば、五唯は能造五大は所造なり。能造の意を取つて大となすならむ。此派にても通常の意味の五大は地水火風空にして、色聲香味觸は五唯なり。

【一〇八】衞世師 Vaiśeṣika の音譯、勝論派なり。此派の說にては色等は德にして、地等の實に所有せらる。實は實體たるもの、德は屬性なり。故に實體と屬性とは全く別のものとなす說なり。

【一〇九】この經は前品最初の問曰文中の經を指す理なり。然らざれば、此成實論を經として指すこととなるべし。

大を成じ、此の四大に因りて眼等の五根を成じ、此れ等が相觸するが故に聲あり。地とは色等が集會して堅多きが故に地と名づくるなり。是くの如く、濕多きが故に水と名づけ、熱多きが故に火と名づけ、輕動多きが故に風と名づく。眼根とは但色を緣とするのみの眼識の所依にして、及び[一〇一]同性のものの依らざる時を皆眼根と名づく。餘の四根も亦是の如し。色とは但眼識のみの所緣にして、及び同性のものの緣ぜざる時、是を名づけて色と爲すなり。香味觸も亦是の如し。是等が相觸するが故に[一〇二]聲有るなり。

色名品　第三十七

問曰　經の中にて說く、諸の所有の色は皆是れ四大と及び四大所因成となり。何が故に諸の所有は皆是れなりと言ふや。

答曰　所有は皆是なりと言ふは、是れ定んで色相を說いて更に餘あることなきなり。外道人は[一〇三]五大ありと說くを以て此を捨せんが爲めの故に四大と四大所因成の者とを說くなり。四大は假名の故に有なり、[一〇四]遍到の故に大と名づく、無色の法は形なく、形なきが故に方なく、方なきが故に名づけて大と爲さざるなり。又麁現なるを以ての故に大と名づく、心心數法は現ぜざるが故に名づけて大と爲さざるなり。

問曰　何が故に地等の法を名づけて色と爲し、名づけて聲等と爲さざるや。

答曰　(一)[一〇五]有對の法を色と名づく。聲等も皆有對なるが故に亦名づけて色と爲す、心法等の如くには非ず。(二)有形なるが故に色と名づく。聲等も皆有形なるが故に名づけて色と爲す。處所を障礙するが故に名づけて形と爲すなり。

問曰　色等は盡く有形なるには非ず、聲等は無形なり。

【一〇一】同性のものとは眼識と同性のものにて耳識鼻識等なり。耳識等は眼根を所依とせざるが故にかくいふ。

【一〇二】三本宮本は名づけて聲と爲すとなす。此方解し易きも數行前にも聲有りとなり居るが故に今之に從ふ。

【一〇三】五大は地水火風空をいふ。數論派正理派は五大を認め、勝論派は四大を認むるのみにて五大を說かず。

【一〇四】大の意味、遍到、形方、麁現の義なり。

【一〇五】色とは有對、有形、惱壞、示業、示心心數法、稱名の義なり。

からずと言ふも、是の事は應に說くべきなり、第一義を知らしむるが故なり。又汝は世間の所說は盡く應に隨ふべしと言ふも、若し自在天より萬物を生ず等と說かば是は受くべからず、若し利益あつて實義に違せずむば是れ則ち應に受くべし、是の故に咎なし。世諦の中にて能く功德を生じ能く利益あらば、是の如きは應に受くべきものなること、後に當に度く說くべし。又汝が泥牛等を殺すも殺罪なしと言ふは、今當に此に答ふべし、若し有識の諸陰の相續する行の中に於てならば、業と業の報とあるも、泥牛等の中にては此の如きの事なければなり。是の故に當に知るべし、五陰の和合せるを假に名づけて我と爲すのみ、實有には非ざるなり。

[九四]苦諦聚の色論の中の色相品　第三十六

問曰　汝は先に當に成實論を說くべしと言へり、今當に說くべし、何れの者を實と爲すや。

答曰　(一)實とは[九五]四諦に名づく、謂く苦と苦の因と苦の滅と苦の滅の道となり。五受陰は是れ苦なり、諸業と及び煩惱とは是れ苦の因なり、苦の盡くるは是れ苦の滅なり、八聖道は苦の滅の道なり、是の法を成ぜんが爲の故に斯の論を造る。

(二)佛は自ら此の法を成じたまひしと雖も、衆生を度せんが爲の故に處處に散說したまふ。又佛は略して法藏を說きたまふに八萬四千[九六]あり。是の中に[九七]四依と[九八]八因とあり。是の義を或は捨てて而も說かずと或は略して說くとあれば、我は今次第に撰集して義をして明了ならしめんと欲す、故に說く。

問曰　汝は五受陰は是れ苦諦なりと言ふ。何をか謂うて五と爲すや。

答曰　色陰と識陰と想受行陰となり。色陰とは謂く[九九]四大と及び四大所因成法なり。[一〇〇]亦四大に因りて成ぜらるゝ法は總じて名づけて色と爲す。四大とは地水火風にして、色香味觸に因るが故に四

【九四】以上發聚卽ち序論を終りて、以下四諦の一一を細論する本論となる。

【九五】成實論を撰述する理由を述ぶ。二種あり。之によつて見るに成實は實卽ち四諦を成ずの意なり。

【九六】無明品第一百二十七にも此語あり。

【九七】四依とは所謂法の四依にして依法不依人等の四なり。四法品第十五參照。

【九八】八因とは八正道をいふ、之を因として證果を得るが故に八因となす。

【九九】通常、四大種及び四大種所造の色といはるると同じ。(四大種)所造色　(upādāya-rūpa)を四大所因成法と譯せるなり。四大因成せらるる法と讀むべし。

【一〇〇】四大者地水火風、因色香味觸故成四大、因此四大成眼等五根、此等相觸故有聲がこれ成實論の特有の說なり。

答曰　是れ亦同疑なり。何れの者か是れ然にして何れの者か可然なる。若し[八九]火種は是れ然にして餘種は是れ可然ならば、則ち然は可然に異るならむも、若し火種が卽ち是れ可然ならば、云何ぞ一ならずと言はんや。若し可然が卽ち是れ火種ならば、火種を離るるが若きは亦倶に然ならず故に同疑と名づく。若し然が可然を有せば、我が色を有するが如く、卽ち身見に墮せむ、又應に多我なるべし。[九〇]薪の火は異にして牛糞の火は異なるが如く、我も亦是の如く、人陰の我は異にして天陰の我は異ならむ、是れ卽ち多我なり。又、然と可然とは三世の中に在るが如く、我と五陰とも亦應に是の如く三世の中にあるべし。然と可然との如きは是れ有爲なるが故に、我と五陰とも亦應に有爲なるべし。又汝は然と可然とは一ならず異ならずと言ふと雖も、然も[九一]眼にては異相なるを見れば、我と五陰とも亦應に異あるべし。又五陰は失す、而して我は失せず、此の間に沒し、彼の間に至つて生じて兩喜するを以ての故なり。若し五陰に隨つて失あり生あらば、則ち同じく五陰なり、兩喜と名づけず。汝は妄想を以て是の我を分別して何等の利をか得る。又諸塵の中に一塵として六識の識る所なるものあることなし。汝が說く所の我にして六識もて識るべくんば則ち六塵に非ず。又十二入に攝せされば則ち諸入に非ず。四諦に攝せされば則ち諸諦に非ず。是の故に若し我ありと謂はば卽ち妄語と爲す。又汝が法の中にて說く、可知法とは謂く[九二]五法藏――過去と未來と現在と無爲と及び不可說の法と――なり。我は第五法の中にあれば、則ち四法と異ると。汝は四法に異ならしめんと欲するも而も[九三]第五に非ざれば、是れ則ち不可なり、若し我ありと言はば則ち此等の過あり、何ぞ妄想を用つて我を分別せんや、是の故に汝が先に外道は五陰を離れ已つて別に我ありと計すも、我等は爾らずと說くは是の事は然らざるなり。又汝が先に我は但假名のみ、應に深思すべしと言ふは是の事は然らず、所以は何。是は佛の法の中にて世諦の事を說くものなれば、應に深思すべからざるものなればなり。又汝が妄語見倒なりと說くも亦復是の如し。又汝は應に經の中の實義を說くべ

【八九】　火種は火大又は火大種なり。

【九〇】　薪の火と牛糞の火とは相異るが如くの意。

【九一】　眼とは現量を意味す。

【九二】　十號品第四にありし五種の語法と同じ。五法藏は犢子部の所說にして、過去藏、未來藏、現在藏、無爲藏、不可說藏の五なり而して、我は第五の不可說藏の中に攝す、此五を或は前三を有爲聚、第四を無爲聚、第三を非二聚の三聚ともなす。

【九三】　既に我ありと說きつつあれば、第五の不可說の法ならざるなり。

づけ、故に我は是れ彼の王なりと說きたまふのみ。汝が法の中にては我は是れ[八五]一なり、故に應に差別すべからず。汝が善く兩喜すと爲すと言ふは經の中にて佛は自ら是の事を遮して言く、[八六]我は有なりと說かず、此の五陰を捨て彼の陰を受くるものは、但五陰のみ相續して異らざるを以ての故に兩喜すと言ふなりと。又汝が心垢なるが故に衆生は垢なりと言ふは此を以ての故に實我あることなしと知るなり。若し實に我あらば應に心と異るべく、應に心垢なるが故に衆生は垢なりとは言ふべからず、所以は何、彼の垢を此が受くべからざるが故なり。但假名の因緣のみを以て、垢あるが故に假名垢と言ふなり、是の故に假名を我と爲すのみ、眞實には非ざるなり。又汝が法の中にて我は五陰に[八七]非ずと說くは是れ則ち我は不生不滅にして罪福等なく、是の如きの過あり、我等は五陰の和合せるを假に名づけて我と爲すと說き、是の我に因るが故に生もあり滅もあり及び罪福等もあり、假名なきに非ずして但實に非ざるのみなり。又汝が先に外道の意を破するが故に佛は無我と說きたまふと言ふは、汝が自ら妄想して是くの如くに分別するのみ、佛意は然らず。又種々に我を說くも、皆是れ過咎なり、汝が外道は五陰を離れ已つて別に我ありと計すと言ふが如く、汝も亦是くの如し、所以は何、五陰は無常にして、我は若しくは常なり無常なりと說くべからずとせば、是れ卽ち陰を離れたるものなればなり。復次に陰に三分――戒定慧品と、善不善無記と、欲界色界無色界の繫と――ありと、是くの如く分別するも、我は爾ることを得ず、故に五陰に異るものなり。又我は是れ人なるも、五陰は人に非ざれば、是れ則ち異たるものなり。又陰は是れ五なるも、我は是れ一なれば、是の故に我は陰に非ざるものなり。若し我あらば、此等の緣を以て則ち五陰と異るべし。又世間には一法として一とも說くべからず、異とも說くべからざるものあることなし、是の故に不可說の法あることなし。

問曰[八八]然と可然とが一とも言ふことを得ず異とも言ふことを得ざるが如く、我も亦是の如し。

【八五】我の性質の一は一なり。

【八六】麗本は佛自遮是事言我不說有となす。三本宮本は有を又として後文に續かしむ。然らば我(われ)は說かず、又云云となる。

【八七】我の性質の一は五陰に非ずとなす點なり。

【八八】然は燃、可然は可燃と同じ。前者は火。後者は薪なり。燃は然の俗字にて、然が正字なり。

知る我あり。又若し聖人にして實には我無しと見るも、而も俗に隨ふが故に我ありと說くといはば則ち是れ倒見なり、異說するものなるを以ての故なり。又若し俗に隨つて、無なるを而も有と說かば、則ち應に復經の中の實義たる十二因緣と〔八〇〕三解脫門と無我法と等をも說くべからざらむ。若し人にして後世有りと謂はば、隨つて而も有と言はむ、若し人無と謂はば、人に隨つて無と言はむ。又世間の萬物は皆自在天より生ず〔八一〕と謂ふ、是くの如き種々なる邪見の經書も皆應に隨て說くべからむも、是の事は不可なり。是の故に汝が引く所の經は皆已に總じて破したり。故に無我には非ざるなり。

答曰　汝が先に置答なるを以ての故に、我ありと知ると言ふは、此の事は然らず、所以は何、此は不可說の法なればなり、後の〔八二〕滅諦聚の中にて當に廣く分別すべし。故に實我なし、及び不可說とは但假名のみにして實有に非ずと說くなり。又汝が法の中にては我は六識を以て識るなり、汝が〔八三〕經に說くが如し、眼所見の色に因るが故に我は壞す、是れ則ち眼識の識る所にして、則ち應に色に非ず非色に非ずと言ふべからず、聲等も亦是くの如しと。復次に、若し我にして六識の識る所ならば、則ち經と相違す。經の中にて說く、五情は互に五塵を取ること能はず、伺する所が異るが故なりと。若し我にして六識もて識るべくむば、則ち六根は互用せん。又汝が言ふ所は前後相違す、眼識の識る所ならば則ち名づけて色と爲さずといへばなり。又汝は我無しと言ふは是れ邪見なりといふも、經の中にて佛は自ら諸の比丘に告げたまはく、我あることなしと雖も、諸行の相續に因るが故に生死ありと說く、我は天眼を以て諸の衆生の生時死時を見るも、亦是れ我なりと說かずと。又汝の自法の中にても過あり、汝が法の中にて我は〔八四〕不生なりと言ふ、若し不生ならば則ち父母なけむ、父母なくんば則ち逆罪なく、亦諸の餘の罪業なけむ、是の故に汝が法は則ち是れ邪見なり。又汝が本生ありと言ふは、五陰に因るが故に喜見王と名づけ、卽ち彼の陰が相續するが故に佛と名

【八〇】實際は無なるものを、世間に隨うて暫く有と說くとせば、十二因緣三解脫門無我法等は元來有なれば、之を說くを得ざるべく、强いていはば、世間に隨つて無と說かざるべからざるべし。此中三解脫門。空・無相・無願を三解脫門又は三三昧といふ。三三昧品第一百五十七參照。

【八一】大正大藏經にては麗本は諸に作り、三本宮本は謂に作るとなすも、縮刷藏經にては麗本が謂となすなり。

【八二】特に破不可說品第一百四十五、滅法心品第一百五十三參照。

【八三】我の性質は六識にて知らるるものなり。汝が經とは有我を主張する論者の奉ずる經なり。有我論者はここにては犢子部にして又上述の有我論も佛敎以外の學派の說にあらず。然らば此經は佛敎中の經にて而も犢子部の奉ずるものなり。之に由つて、犢子部の如きは他部の必ずしも認むるにあらざる經を有せしを推定し得るが如し。

【八四】我の性質の一は不生なり。

有我無我品　第三十五[七三]

問曰　汝は無我なりと言ふも、是の事は然らず、所以は何、[七四]四種の答の中にては是れ第四は置答――謂く人は死後に、若しくは有、若しくは無、亦有亦無、非有非無なり――にして、若し實に我無くんば、應に此の置答あるべからざればなり。又若し人にして衆生の後身を受くる者あることなしと言はば、卽ち是れ邪見なり。又[七五]十二部經の中に本生經あり、佛が自ら說いて彼の時の[七六]大喜見王は我身是れなりと言ふ、是くの如き等が本生なり、今の五陰は昔の五陰に非ざれば、是の故に我あつて本より今に至るなり。又佛は今の喜と後の喜とを說いて善く兩喜すとなしたまふ、若し但五陰のみならば應に兩喜すとなすべからず。[七七]又經の中にて說く、心垢なるが故に衆生も垢、心淨なるが故に衆生淨なりと、又一人世間に生ずれば、多人は衰惱を得、一人世間に生ずれば多人は利益を得と、又善不善の業を修集するが若きことは皆衆生に依り、非衆生數に依らずと。又處處の經の中にて、佛自ら說きたまはく、我は衆生の能く後身を受け、又能く自利して利他せざるものあり等と言ふと。是等の緣を以ての故に知る我有りと。汝は先に但名字のみ等と說くと雖も是の事は然らず、所以は何、佛は但外道が五陰を離れ已つて別に我の常にして不壞なる相なるものとありと計するを以て、此の邪見を斷ぜむが故に我なしと言ふのみ。今我等は五陰の和合せるを之を名づけて我と爲すと說く、是の故に咎なし。又我は但名字のみ等と言ふと雖も、應に深く此の言を思惟すべし、若し衆生にして但名字のみならば、[七八]泥牛を殺すも殺罪を得ざるが如く、若し[七九]實牛を殺さむも、亦應に罪あるべからず。又小兒の名字物を以て施すも皆果報あるが如く、大人の施を持するも亦應に報を得べし、而も實には然らず。又但名字のみなるが故に、無なるを而も有と說かば、聖人は應に妄語あるべきも、實語を以ての故に名づけて聖人と爲すなり、故に

なる。卽ち我論取にして、我ありと主張する取なるも、ここにては我の語を取と解するが如し。何れにしても我取とはいはずとなすなり。

【七一】 先尼は具には先尼迦(Se-nika)外道の名なり、雜阿含中に此の外道が佛に「我ありや」と問ひしに佛は默然として答へられざりしことを說けり。

【七二】 何れを六邪見といふか明ならざるも、下の邪見品第一百三十二を參照すべし。

【七三】 ここに分品する要なく、前品と連續さすべきなり。恐らく一品としては長きに失するが故に分てるならむも、問題が重要なる爲に論が長くなれるなり。

【七四】 四種の答、とは定答、分別答、反問答、置答なり。讚論品第十五參照。

【七五】 十二部經品、第八參照。

【七六】 此王はパーリの涅槃經にあり、中阿含にては大善見王となし、同名の經にあり。

【七七】 此經の言は立無數品第六十、非相應品第六十七にもあり。

【七八】 泥より作れる牛。

【七九】 實際生き居る牛。

と言ふべきやと、答へて曰く、舍利弗よ、我は先に惡邪見を有したり、今此の義を聞いて是の見は卽ち滅したりと。若し我あらば[六九]惡邪と名づけざらむ。又四取の中に[七〇]我語取を說く、若し我あらば應に我取と言ふべきこと、欲取等の如くにして、應に我語取とは言ふべからざらむ。又[七一]先尼經に說く、三師の中に於て若し現我と後我とを得ざるものあらば、我は是れを師なりと說く、則ち名づけて佛を爲すと、佛は得ざるを以ての故に知る無我なりと。(六)又無我の中にての我想を名づけて顚倒と爲す、若し汝の意にして我の中にての我想は顚倒に非ずと謂はば、是の事は然らず、所以は何、佛は衆生の所有見我は皆五陰を見るものなりと說けばなり。是の故に無我なり。又說く、衆生の種々に宿命を憶念するは皆五陰を念ずるなり、若し我あらば亦應に我をも念ずべきに、念ぜざるを以ての故に、當に知る無我なりと。(七)若し汝の意にして亦有る經にては、衆生を憶念し、其の衆生の中にては我は某と名づけたるが如しと說くことありと謂はば、是の事は然らず、此は世諦の分別の爲の故に說くものにして、實には五陰を念じ、衆生を念ずるには非ざればなり、所以は何、意識を以てしては意識を念じ、但法々緣となすのみなり、是の故に衆生を念ずる念あることなければなり。又若し人にして決定して我有りと說かば、[七二]六邪見の中に於て必ず一見に墮せむ。若し汝の意にして無我も亦是れ邪見なりと謂はば、此の事は然らず、所以は何、二諦を以ての故なり。若し世諦を以て無我と說き、第一義諦にては有我と說かば、是れ則ち過有らむも、我は今第一義の故に無、世諦の故に有なりと說く、是の故に咎なし。又佛は我見の根を拔くと說きたまふこと、癡王の問の中にて佛の癡王に答へたまふが如し、若し人一心を以て諸の世間は空なりと觀ずれば、則ち我見の根を拔き、復死王を見ずと。又諸の我の因緣憂喜等の事ありと說くは、皆五陰に在り、又諸の外道の我見を破する因緣を以てなり、是の故に無我なり。

【六一】諸行は無常なり、無常なるものは苦なり、無常にして苦なるものは無我なりと說くは極めて通例なり。

【六二】此言は思品第八十四にもあり。滅法心品第一百五十三參照。

【六三】立假名品第一百四十一に此經の同一文あり。そこには阿羅漢比丘尼とあり。

【六四】四大假名品第三十八の偈參照。

【六五】群那は Cunda か。勿論佛の最後に供養せし人とは別。

【六六】洴沙王は詳しくは頻婆沙羅(Bimbisāra)にして、摩竭陀國王なり、佛陀外護の王として憍薩羅國の波斯匿と相並ぶ。

【六七】弗尼迦は Puṇṇaka ならむ。

【六八】炎摩伽(Yamaka)は比丘の名。曾て漏盡の阿羅漢は身體解體して入涅槃すれば絕無に歸すとの見解を持したりしが、舍利弗によりて其の邪見を懇ろに諭さる。邊見品第一百三十一にも此經の引用あり。

【六九】原文は不名惡耶とあるも宮本は耶を邪とす。今之に從ふ。

【七〇】.我語取はパーリにて attavādupādāna といふ。梵語にては ātmavāda-upādāna と

說きたまはく、[六二]我は卽ち是れ動處なりと。若し實に有ならば、動處とは名づけず、眼は有なるが故に動處と名づけざるが如し。又處處の經の中にて皆我を計することを遮す、[六三]聖比丘尼が魔王に語つて言ふが如し、[六四]汝の所謂衆生は是れ卽ち邪見と爲す、諸の有爲法の聚は皆空にして衆生なしと。又言く、諸行は和合し相續するが故に有なり、卽ち是れ幻化にして凡夫を誑惑し、皆怨賊と爲ること、箭の心に入るが如し、堅實あることなしと。又言はく、我なく我所無く、衆生無く人無く、但是れ空のみ、五陰の生滅壞敗の相にして業あり果報あるも、作者は得べからず、衆緣和合するが故に諸法有つて相續するなりと。是等の緣を以ての故に、佛は種々に經の中にて皆我を計することを遮するなり、是の故に無我なり。(二)又經の中に識の義を辨す、何が故に識と名づくるや、謂く能く色を識り乃至法を識ればなり、我を識るとは說かず、是の故に無我なり。(三)[六五]群那比丘が佛に問ふ、誰か識食を食するやと、佛の言はく、我は識食を食する者ありとは說かずと、若し我あらば應に我が識食を食すと說くべきに、說かざるを以ての故に當に知るべし無我なり。(四)又[六六]洴沙王迎佛經の中に、佛が諸の比丘に語りたまはく、汝は、凡夫が假名に隨逐して謂うて我ありと爲すも、是の五陰の中には實には我無く我所無しと觀ぜよと。又說く、五陰に因るが故に種々の名あり、謂く我と衆生と人と天と等なり、是くの如き無量の名字は皆五陰に因りて有りと。若し我あらば應に我に因りてと說くべきなり。又長老[六七]弗尼迦が外道に謂うて言はく、若し人邪に無を見て而も有と謂はば、佛は此の邪慢を斷じたまふも、衆生を斷ぜずと、是の故に無我なり。(五)又[六八]炎摩伽經の中にて、舍利弗は焰摩伽に語つて言はく、汝は色陰が是れ阿羅漢なりと見るやと、答へて言はく、不なりと、受想行識が是れ阿羅漢なりと見るやと、答へて曰く、不なりと、五陰の和合せるが是れ阿羅漢なりと見るやと、答へて曰く、不なりと、五陰を離れたるが是れ阿羅漢なりと見るやと、答へて言はく、不なりと、舍利弗言はく、若し是の如くに推求して不可得ならば、應當に阿羅漢は死後には無なり

生衆となる。佛を衆生衆となすは過にあらずとはいへざるべし。故に有衆の方可なるべし。有衆の意明確ならざれど、存在するもの一般をいふか。生衆が生けるもの一般の意なるべきと對照すべし。

【五六】化地部は僧中有佛の故に僧に施せば大果を得、別に佛に施すには非ずと主張す。法藏部は別に佛に施せば果は大なり、僧に非ずとなす。

【五七】瞿曇彌(Gotamī)は本名は mahāprajāpatī と呼ばる、佛陀の父なる淨飯王の夫人にして、佛陀の母なる摩耶夫人(māyā)の妹なり。摩耶夫人の死後は我子の如く佛陀を養育し、後出家す。比丘尼の始なり。

【五八】羯磨は Kamma の音譯にして、進具式即ち得度式等の儀式作法なり。

【五九】此品と次品とにて十論の第十なる有人・無人を述ぶ。人とは我をいふ。

【六〇】犢子道人は所謂小乘二十部の中の犢子部を指す、梵語にては、跋私弗多羅(Vatsīputriya)といふ。此部は非即非離蘊我を立て、後世附佛法の外道と稱せらる。此部のみならず、法上部賢冑部正量部密林山部も亦之を說く。經量部の如きは勝義補特伽羅ありとなす。

答曰　此の施は何等の僧に屬するや、此の經は小失あり、是れ應當に施は佛と僧とに屬すと言ふべし。

問曰　佛は[五七]瞿曇彌に語りたまはく、此の衣を以て僧に施せば則ち我に供養すと爲し、亦是れ僧をも供養するなりと。

答曰　佛の意は、語言を以ては我に供養すと爲し、是の物は僧を供養するなりと言ひたまふなり。經の中に、若し人病を瞻(み)れば卽ち是れ我を看るなりと說くが如し。

問曰　諸有の聖功德を成就せる人なる舍利弗等は皆僧數の中に在れば、佛も亦是の如し、同相なるを以ての故なり。

答曰　若し同相を以てせば、諸の凡夫人及び衆生數に非ざるものにても亦應に僧數に入るべき者あらむも、而も實には然らず、是の故に知る、佛は僧の中に在らずと。又佛は僧[五八]羯磨の中に入らず、亦諸餘の僧事にも同ぜず、又三寶は差別せるを以ての故に、佛は僧の中に在らざるなり。

無我品[五九]　第三十四

論者言　[六〇]犢子道人は我有りと說き、餘の者は無しと說く。

問曰　何れの者を實となすや。

答曰　實に我なる法は無なり、所以は何、(一)經の中に、佛は比丘に語りたまはく、但名字のみを以て但假に施設するのみ、但用あるのみを以ての故に名づけて我と爲すといふが如し。但名字等のみなるを以ての故に眞實無しと知る。又經の中にて說く、若し人にして苦を見ずむば是の人は則ち我を見るも、若し實の如くに苦を見ば則ち復我を見ずと[六一]。若し實に我あらば苦を見るも亦應に我を見るべきなり。又說く、聖人は但俗に隨ふのみの故に、說いて我ありと言ふと。又經の中にて佛は

り。現在を失せば、これ過去となれるなり。過去のものとなりて失せずとせばこれ常住なるに外ならず。

【五二】若し然りとは過去の因は已に滅して報は後に生ずといふを肯定せばの意なり。因は滅し已れるを以て無因と同じこととなり、よつて次の如き過を犯すこととなると論ずるなり。

【五三】此品は十論の第九なる佛在僧數・不在僧數を述ぶ。三本宮本は二寶とす。以下は佛と僧との二寶のみについて論じ居るが如くなるも、最後に三寶の差別をいへば、全體を辯三寶品といふも可なり。三寶の差別も宮本は一寶となせど三寶にて可なるべし。

【五四】摩醯舍娑はMahīśāsakaの音譯。道人は此部の人をいふ。Mahīśāsaka は化地部を指す、何れの版にも摩醯舍婆とあれど、婆は娑の誤なり。化地部は彌沙塞部ともせらる。異部宗輪論は有部よりの分派となす。大衆部系統の影響を受けたる上座部系統の有力なる一派なり。此派が僧中有佛說を主張するが故にここに之を論ずるなり。僧中有佛說は法藏部も之を唱ふ。

【五五】有衆、三本宮本は有衆衆となす。然らば有衆と衆

問曰　共相因より生ず。

答曰　是れも亦然らず、因果は一時に合することを得ざるが故なり。此の事は後の[四八]燈喩の中にて當に說くべし。故に應に諸使は心と相應するに非ずとは言ふべからず。

過去業品[四九]　第三十二

論者言　[五〇]迦葉鞞道人の說く、未だ報を受けざる業は過去世にあり、餘は過去になしと。

答曰　此の業にして若し[五一]失すれば則ち過去なり、過去にして若し失せずんば是れ則ち常となす、失すとは過去の異名にして、則ち失し已ると爲すなり。復失せば、是の業は報の與に因と作るも、已に滅して、報は後に在りて生ずるなり。經の中に、是の事を以ての故に是の事は生ずることを得ること、乳は滅する時に酪の與に因と作るが如しと說くが如し、何ぞ過去の業を分別することを用ひんや。又若し、[五二]若し然りと言はば、餘の因の中にて過あり、云何ぞ因なくして而も識は生ずることを得んや、乳なき時の如き、何ぞ酪あることを得んや、若し四大無くんば身口等の業は何に依りてか而も有らん、是の如き等あり。我は先に過去のものは過ありと說きたり、彼は應に此に答ふべし。

辯三寶品[五三]　第三十三

論者言　[五四]摩醯舍娑道人の說く、佛は僧數に在りと。

答曰　若し佛は四衆に在りと說き、謂ふ所は[五五]有衆と生衆と人衆と聖人衆とならば、是れ則ち過に非ず。若し佛は聲聞衆の中に在りと言はば、是れ則ち咎あり、法を聞いて悟を得るを以ての故に聲聞と曰ふ、佛は相異するが故に、此中には在らざればなり。

問曰　佛は僧の首に居る、人あり、之に施せば名づけて僧に施すと爲す。[五六]

【四六】久習は熏習と同意なるべし。

【四七】生の字三本宮本になし。あるもなきも何れにても可なり。

【四八】恐らく非多心品第七十、明多心品第七十二、識無住品第七十四に存する燈喩などを指すなるべし。

【四九】此品は十論の第八なる已受報業或有・或無の說を述ぶ。

【五〇】迦葉鞞は Kāśyapīya にして、道人とは北部の人を指す。迦葉鞞は迦葉遺部にして飲光部とも、善歲部ともいふ。上座部系統の一派にて、異部宗輪論は之を有部より出づとなす。此部は煩惱は已斷已遍知なるときは體は無なるも、之に反じて未斷未遍知ならば、過去にしても體ありと說き、同樣に、業の果已に熟せば業の體は無なるも、果が未だ熟せざるときは過去なるも亦體は有なりと說く。ここに未だ報を受けざる業といふは果が未だ熟せざる業を指す。此部は現在は實有なるも、過去は有體無體の何れかにてあり、未來は無體なりと主張する說にして、大衆部系統の影響を受けたる上座部系統の一派なり。

【五一】失すとは落謝すの意な

問曰　我は念々に滅する心の爲の故に是くの如く説くにあらず、相續心を以ての故に垢が染すと説くなり。

答曰　是の相續心は世諦の故に有にして、眞實義には非ず、[四一]此れ應に説くべからず。又世諦に於ても是れ亦過多し、心は生ずれば已に滅し、未だ生ぜずむば未だ起らず、云何ぞ相續せん、是の故に心性は是れ本淨にして、客塵の故に不淨なるには非ず。但佛は、衆生が心は常に在りと謂ふが爲の故に客塵に染せらるるときは則ち心は不淨なりと説くのみ。又佛は懈怠の衆生にして若し心は本不淨なりと聞かば、便ち性は改むべからずと謂ひ、則ち淨心を發せざらむが爲の故に本淨なりと説きたまふなり。

[四二]相應不相應品　第三十一

論者言　有人の説く、諸の使は心と相應すと。有るは説く、[四三]心と相應せずと。

問曰　何の因緣の故に心と相應すと説き、何の因緣の故に相應せずと言ふや。

答曰　心と相應すとは後の[四四]使品の中にて當に説くべし。又[四五]貪欲等は諸の煩惱業なり、是の業は諸使と相應す。汝が法の中にては心と相應せざる使は心と相應する結纏の與に因と作ると説くと雖も、是の事は然らず、所以は何、經の中にては、無明邪念邪思惟等より貪等の結を起すと説き、經として使より生ずと説くことあることなければなり。汝が法の中にては[四六]久習せる結纏を則ち名づけて使の[四七]生と爲すと説くと雖も、是の事は然らず、所以は何、身口業等にも亦久習の相あれば、是も亦應に使として心不相應行に似ることあるべきも、而も實には有ることなければなり。若し然らば諸法は皆現在の因より生じて、過去の因なけむ。然らば則ち應に業從り報を生ずべからず、亦應に意より意識を生ずべからず、又此の諸使は念々に滅するが故に復何れの因より生ぜんや。

【四一】　眞實義は眞諦なれば、眞諦にては相續心ありとは説くべからず。

【四二】　此品は十論の第六なる使與心相應・心不相應を述ぶ。前品と順序を顚倒せるなり。

【四三】　使は anuśaya (anuśaya) の譯にて、新譯の隨眠と同じ。隨眠即ち使は心と相應せずとは大衆部系統の説にて大衆部一説部説出世部鷄胤部の主張なり。化地部も亦此説を主張す。此際の隨眠は煩惱の種子にして心にも非ず心所法にも非ずまた無所緣なり。隨眠は貪等の種子にして十種あり、煩惱の因となりて煩惱を生ず。煩惱を纏又は結等と稱す。隨眠に對していへば煩惱は現起のもの現行のものなり。大衆部系統にては心性本淨となすが故に、無心の時にても善心の時にてもかかる隨眠あることを説かざれば、凡夫は聖人とならざるを得ざるに至るなり。

【四四】　煩惱相品第一百二十一以下を指す。

【四五】　この貪欲等は現行の煩惱なれば、諸煩惱業といへるなり。此煩惱は隨眠即ち使と相應すれど、隨眠即ち使は現行のものならざれば心とは相應せずと主張するが大衆部の説なり。

別相の說なり。

不退相とは又佛は偈を說きたまはく、

　勝にして若し還生ぜば　名づけて勝と爲さず、
　勝にして而も生ぜざるを　是を眞勝と名づく、と。

若し阿羅漢にして還煩惱を生ぜば則ち勝と名づけず。又阿羅漢は、生已に盡きたるが故に復た身を受けず。汝の經は阿羅漢は退法にして還得に應ずと說くと雖も、若し爾らば亦法は不退に應ずべし。若し比丘にして能く[三五]諸相をして生ぜざらしめば阿羅漢と名づく。是の故に退なし。

[三六]心性品　第三十

論者言　有る人は說く、[三七]心性は本淨なり、客塵を以ての故に不淨なりと。又說く、然らずと。

問曰　何の因緣の故に本淨なりと說き、何の因緣の故に然らずと說くや。

答曰　然らずとは[三八]心は本淨にして、客塵の故に不淨なるには非ず、所以は何、煩惱は心と常に相應して生ずれば、是れ客相なるには非ざればなり、又、三種の心——善と不善と無記と——あり、善と無記心とは是れ則ち垢に非ず、若し不善心ならば本より自ら不淨なるも、以て客なるにあらざるが故なり。復次に是の心は念々に生滅して煩惱を待たざるも、若し煩惱と共生ぜば名づけて客となさざるなり。

問曰　心は但色等を覺するに名づけ、然る後に相を取り、相に從つて諸の煩惱を生じ、心の與に垢と作る、故に本淨と說くなり。

答曰　然らず、[三九]是の心にして心なる時は卽ち滅すれば未だ垢相あらず、[四〇]心なる時に滅し已らば、垢は何の染する所ぞ。

[三五]　三本宮本は根とす。

[三六]　此品は十論の第七なる心性本淨、性本不淨の說を述ぶ。次品に第六を論ずるが故に、前に十論の名を擧げたるとは順序を異にす。

[三七]　心性本淨說は大衆部系統の說にして、大衆部一說部說出世部鷄胤部が代表的主張者なり。

[三八]　麗本は心非性本淨とす。三本宮本は心性非本淨とす。

[三九]　是の心といふは一般的にいひ、心なる時とは心として働く時をいふ。心として働くときは一剎那にして滅するなり。

[四〇]　此句に前句の理由なり。心として働く時既に滅するが故に垢の染する所とならず、故に未だ垢相あらずといふべきなり。

の過を見るときは、是れ則ち不退にして泥洹に親近すと。又經の中にて說く、

　麋鹿は野に依り　　鳥は虛空に依り
　法は分別に歸し　　眞人は滅に歸す、と。

又[三〇]三の因緣は諸の結使を起す、貪欲の斷ぜざると、所欲の現前すと、中に邪念を生ずとなり。是の阿羅漢は、貪欲已に斷じ、所欲に對すと雖も、邪念を生ぜず、故に結を起さざるなり。又說く、比丘は邪に諸法を觀ずるが故に[三一]三漏を起すと、是の阿羅漢は、邪觀なきが故に、諸漏を起さず。又經の中にて說く、若し聖慧を以て知り、已れば則ち退あることなし、須陀洹果に退する者あることなきが如しと。又阿羅漢は善く三受の生相と滅相と味相と[三二]過相と出相とを知るが故に結を起さず。又說く比丘にして若し戒定慧の三事成就せば則ち退轉せずと。又阿羅漢は已生の結を斷じ、未生の者をして生ぜざらしむと。又經の中にて說く、實行の聖人は終に退することあることなし、阿羅漢は已に四諦を證して諸漏は盡きたるが故に實行者と名づくと。又說く、[三三]七覺を不退法と名づく、阿羅漢は七覺を具有す、是の故に退せず。又阿羅漢は不壞解脫を證す、是の故に退せず。又阿羅漢は佛の法の中に於て堅固利を得、所謂不壞解脫なり。又人の手を截るが如く、念と不念とを常に手を截ると名づく。阿羅漢も亦爾り、結使を斷じ已つて念と不念とを常に名づけて斷と爲す。又經の中にて說く、信等の根の利なるを阿羅漢と名づく、利根なる者は終に退あることなしと。又阿羅漢は能く無上の斷[三四]愛法の中に於て心善く解脫を得、畢竟して盡滅す。又譬へば火は未だ燒けざる所を燒き、燒き已つて本處に還らざるが如く、比丘も是の如く已に能く十一法を成就したるが故に終に退あることなし。

問曰　二種の阿羅漢あり、汝が引く所の經は不退の者を說くのみ。

答曰　此は是れ總相の說なり。諸の學人は應に不放逸なるべし、阿羅漢は非を須ゐず、とは是れ

【三〇】三の因緣、貪欲不斷、所欲現前、生邪念の三を指す。此の三因緣なき時は結使起らず。

【三一】三漏とは一に欲漏、二に有漏、三に無明漏なり。

【三二】麗本には生相・滅相・味過出相とし、三本には生相滅相味相道相出相とし、宮本は生相滅相味相過相出相とす。宮本可なりと考へらるるが故に、今之に依る。

【三三】七覺は七覺分に同じ、前に出づ。

【三四】宮本のみは受とす。

色界に生ずればなり。是等の縁を以て當に退あることを知るべし。

不退品　第二十九

有る人の言く、聖道は不退なり、但禪定を退するのみと。

問曰　若し然らば二種の阿羅漢なくして、但退相のみあらむ、一切の阿羅漢は禪定の中に於て皆退あるを以ての故なり。

答曰　禪定の中の自在力を退するのみ、一切の阿羅漢は皆自在力を得るに非ざればなり。

問曰　然らず、[三六]劬提比丘の如きは六反(たび)退し已つて便ち刀を以て自ら害したり、若し禪定を退すとせば應に自ら害すべからざればなり、佛法の中には解脱を貴びて定を貴ばざるを以ての故に。

答曰　是の人にして此の禪定に依つて當に阿羅漢道を得べくむば、此の定を失するが故に則ち無漏を失せむも、無漏には退あるに非ず、所以は何、[三七]偈に説くが如し、

　故(こ)を畢りて新を造らずむば、　諸有の中に於て皆厭離を得、
　諸の結使を滅して更に生相なくむば、　是の諸の健人は猶燈の滅するが如し、と。

又説く、譬へば石山は風の動かすこと能はざるが如く、健者も是くの如く毀譽も之を傾けずと。又經の中にて説く、愛は愛を生ず等と。是の阿羅漢は永く愛根を拔く、何れよりか結を生ぜん。又説く、所謂聖人は究竟して邊を盡し所作已に辨ぜりと。又説く、聖人は散滅して集めず破裂して[三八]識らず等と。又經の中にて説く、無明の因縁は貪恚癡を起すも、是の阿羅漢の無明は永く盡く、云何ぞ結を生ぜんやと。又經の中にて説く、若し諸の學人にして泥洹の道を求むれば、我は説く、是の人は應に放逸ならざるべし、若し漏盡を得ば復[三九]漏せずと。是の故に不退なり。又説く、智者は思惟を善くし語言を善くし身業を善くして所作は失なしと。又説く、比丘は不放逸を樂(ねが)ひて放逸

諫諍、嘗事、多諍訟ともなす。

【三五】優陀耶 Udaya の音譯にして人名ならむ。中阿含に此人に關する經存す。

【三六】劬提(Godhika)は後の止觀品第一百八十七品に瞿提阿羅漢として出づ。此の比丘、六度悟り六度退轉す、七度目に悟りし時、復た退轉することを恐れて刀を以て自害せりといふ。

【三七】偈とはいふも、引用文は偈の形をなさず。

【三八】宮本のみは織とす。

【三九】三本宮本には須とあれば、復須ゐずとなる。漏は元來漏泄にて流出なり、心垢が外に流泄するに名づく。

の心あるべく、但十六心のみに非ざるなり。又汝が眼と智と明と慧とを言ふは佛自らは四諦の中に於て眼と智と明と慧とを得と言ふのみにして、次第に十六心ありとは言はず。又汝は佛が自ら口（くち）から漸次に諦を見ること梯に登るが如しと說きたまふと言ふも、我は此經を習はず、設ひ有るも應に棄つべし、法相に順ぜざるを以ての故なり。又汝が四種の邪行といふは五陰等に於ても亦應に邪行なるべく、邪行する所に隨つて皆應に智を生ずべく、是の如くならば則ち應に但十六心のみを以て道を得べからざらむ。又汝が應に定にて分別すべしといふは、色等の中に於ても亦應に分別すべし。是の故に但十六心あるのみなるべからざるなり。復次に行者は諸諦を得ずしに唯一諦のみあり、謂く苦滅を見るを初めて道を得と名づくればなり。法等の諸の因緣を見るを以ての故なり。行者は煖等の法より漸次に諦を見、諦を滅して、最後に滅諦を見る、故に名づけて道を得ると爲すなり。

退品[二二]　第二十八

論者言　有る人の說く、阿羅漢は退すと。或は說く、不退なりと。

問曰　何の因緣の故に退すと說き、何の因緣の故に不退と言ふや。

答曰　退ありとは經の中にて說くが如し、[二三]時解脫の阿羅漢は、五の因緣を以ての故に退す、[二四]（一）作務を樂しむと、（二）誦讀を樂しむと、（三）斷事を樂しむと、（四）遠行を樂しむと、（五）長病となりと。又經にて二種の阿羅漢——退相と不退相と——を說く。又經の中にて說く、若し某の比丘にして解脫門を退せば、則ち是の處（ことわり）ありと。又經の中にて說く、身を觀ずること瓶の如く、意を防ぐこと城の如くならば、慧は魔と戰うて勝を守つて壞することなしと、若し退無くむば應に勝を守るべからざらむ。又二種の智——盡智と無生智と——あり、若し盡智によりて復生ぜずむば何ぞ無生智を用ゐん。又[二五]優陀耶は滅盡定を得ること難しとは則ち是れ退の因なり、是の人は退すと雖も亦

ひ、解脫道を苦類智といふ、集諦についても之に準じて集法智忍、集法智、集類智忍、集類智といひ、滅諦道諦についても同じ。故に各一諦に法智忍と法智との二あり、四諦について、八心となり、欲界と上二界と合して十六心となる、此中第十五心にて見惑を斷じ終り、第十六心は修道に入るなり。

【二一】　十二行については前品の註を見よ。

【二二】　此品と次品とにて十論の第五なる有退、無退を論ず。羅漢有退に上座部系統有部の說、羅漢無退は大衆部系統大衆一說部說出世部鷄胤部及び上座部系統の化他部經部などの說なり。

【二三】　時解脫（Samayavimukti）とは羅漢の中鈍根なるものが勝緣の時を待ちて入定し及びよく煩惱を脫するをいふ。其定は現法樂受の爲の四禪を無色滅盡定なり。而して猶未だ定障の不染汚無知を淨盡せざるが故に隨意に入定するを得ずして必ず一に好衣を得る時、二に好食を得る時、三に好臥具を得る時、四に好處所を得る時、五に好說法を得る時、六に好同學を得る時、此の好時緣を得て入定するなり。

【二四】　此五を或は長病遠行、

答曰　次第見なりとは經の中にて說くが如し、若し人にして世間の集々見れば卽ち無の見を滅し、世間の滅を見れば卽ち有の見を滅すと。[一八]當に知るべし、集と滅との二相は各異るなり。又若し人能く所有の集の相は皆是れ滅の相なりと知らば、是を垢を離れ法淨眼を得と名づく。又說く、利なる智慧の人は漸に諸惡を捨つること、練金師の能く身垢を離るるが如しと。又漏盡經にて說く、能く知見せば則ち漏は盡くことを得、行者にして自ら日日に盡くす所を知ること能はざるも、常に修習するが故に諸漏を盡くすことを得、と。復次に佛の言く、諸諦の中に於て能く[一九]眼と智と明と慧とを生ずと。欲界の苦の中に二あり、色無色界にも二あり、集等も亦爾り、又經の中にて佛が自ら口から說きたまふ、漸次に諦を見ること人の梯を登るに次第にして而して上るが如しと。是等の經を以ての故に知る、四諦は一時得るに非ざることを。又諸の煩惱は四諦の中に於て四種の邪行あり、所謂、無苦と無集と無滅と無道となり、故に無漏智にも亦次第の四種の正行あるべし。又行者は應に定心にて是は苦、是は苦の因、是は苦の滅、是は苦の滅の道なりと分別すべし、若し一心の中ならば、何ぞ是くの如く決定して分別することを得んや。故に知る次第にして一時には非ざるなり、と。

一時品　第二十七

有る人の言く、四諦は一時見なり、次第には非ずと。汝が世間の集を見れば則ち無の見を滅し、世間の滅を見れば則ち有の見を滅すと說くは、則ち自法を壞す、若し然らば亦應に[二〇]十六心[二一]十二行を以てしても道を得べからざればなり。又汝が所有の集の相は皆是れ滅の相なりと知らば法眼を得と言はば、若し爾らば便ち應に二心を以て道を得べし、一には集の心と二には謂く滅の心となり、但然らざるのみ。又汝が利智のものは漸に惡を捨つと言はば、應に但十六心のみなるべからざるなり。又汝が漏盡經にて、能く色等を知らば漏盡を得と說くと言ふは是くの如くならば則ち應に無量

【一八】此旨は論中に甚だ多し。

【一九】次品の註にいふ十六心の中、四法智忍を眼とし、四類智忍を明とし、四法智を智とし、四類智を慧とす。四諦について其一一に示と勸と證との三種あり、之を敎の十二となし、更に此三轉の一一に眼智明慧の四智生ず。合せて十二となり、之を行の十二となす。次品に十六心十二行といふ十二行は之を指すに外ならず。又欲界の苦の中に一一あり云云とは欲界の苦に對して苦法智忍と苦法智とあり。上二界の苦に對しては苦類智忍と苦類智とあり集滅道の三諦についても此の如くなれば、合して十六となる。故に漸現觀なりとなすなり。

【二〇】十六心は見道に於て無漏の聖智を發し、四諦の理を見照して迷理の惑を斷じ、更に迷事の惑を斷ずる修道に入る間の十六刹那をいふ。欲界の見惑を斷ずるにつき四諦を觀じて先づ苦につきて其の苦なることを觀ずる間を無間道を苦法智忍といひ、觀じ終りて得たる智を苦法智となし、之を解脫道と云ふ。次に色無色界の苦なることを觀ずる場合には無間道を苦類智忍とい

生報と及び後報との業[一四]――を說きたまふも、中陰の報業ありとは說かず。復次に若し中陰に觸あらば、卽ち生有と名づくべく、若し觸すること能はずんば是れ則ち觸なきなり、觸なきが故に受等も亦なし、是くの如くならば何の所有ぞ。又若し衆生にして中陰の形を受くれば、卽ち受生と名づくること、經の中にて、若し人此身を捨てて餘身を受くれば我は說いて生と名づくと說くが如し、若し身を受けずんば則ち中陰なきなり。復次に若し中陰に退あらば則ち名づけて生となす、所以は何、要ず先に生じて後に退するが故なり、若し退なくんば是れ則ち常と僞ればなり。又業力を以ての故に生ず、何んぞ中陰を用ひんや。又若し中陰にして業に從つて成ぜば、卽ち是れ生有なり、業の因緣にて生ずと說くが如し。若し業に從つて成ぜずんば何に由つてか而も有ならん、是れ應に速に答ふべし。[一五]答へて曰く、我は生有の差別を以て說いて中陰と名づく、是の故に上の如きの過なし。是の人は中陰に生ずと雖も亦生有とも異なる、能く識をして[一六]迦羅羅の中に到らしむるを是を中陰と名づくるなり。

難曰　業力を以て能く到らば、何ぞ分別して中陰を說くことを用ゐんや。又心には所至なし、業の因緣を以ての故に、此の間より滅して彼の處に於て生ずるなり。又現見するに心は相續生ならざること、人の足を刺せば、頭中にて痛を覺するが如し。此の足の中の識は因緣ありて頭中に至ることなし、近遠の衆緣和合するを以て心を生ずるなり。是の故に應に分別して中陰ありと計すべからず。

[一七]次第品　第二十六

論者言　有る人の說く、四諦は次第見なりと。有る人の說く、一時見なりと。

問曰　何の因緣の故に次第見なりと說き、何の因緣の故に一時見なりと言ふや。

異神異とは共に問と答と相異り身と神と相異るの意味なり。神は人我をいひ犢子部の非卽非離蘊我を指す。

【一四】三業報品第一百四參照。

【一五】この答曰は、本論の一般の慣例と異りて、反對論者の通難の答なり。卽ち論主が難じたるに對しての答釋なり。次に難曰とあるが論主の再難なり。

【一六】迦羅羅(kalala)譯して凝滑といふ、胎內五位の第一にして、母胎內五位の第一にして、母胎に受胎せし初日より七日間の名なり。新譯に羯羅藍と音譯すると同じ。

【一七】此品と次品とにて十論の第四なる四諦次第得、一時得の論なり。四諦次第得又は四諦次第見は漸現觀のこと、四諦一時得又は四諦一時見は頓現觀のことなり。前者は上座部系統有部の說、後者は大衆部系統大衆部化地部本宗などの說なり。

有る人の言く、中陰あることなしと。[三] 汝は阿輸羅耶那經の中に中陰ありと說くと言ふと雖も、是の事は然らず、所以は何、若し是れ聖人にして此は是れ誰にして何れの處より來ると爲すかを知らずんば、則ち中陰は無なるものなればなり。若し有なりといはば何が故に知らさらむや。汝は又和蹉經にて說くと言ふも、是の事は然らず、所以は何。是の經の中にては問は異にして答[三]異なればなり、是れ和蹉梵志が所計は身は異にして神は異なるが故に、是くの如くに、中陰の中に五陰ありと答へたまふなり。又汝は中有にして滅する者ありと言ふも、是の人は欲色界の中間に於て身を受け、此の中に於て滅するが故に中有にして滅すと名づくるのみ、所以は何。經の中にて若し人死して何れの處にか去り何れの處にか生じ何れの處にか在りと說くが如きと、是の義は異るなければなり。又汝は雜へて身を受け雜へて世間に生ずと言ふも、若し身を受くと言はば、世間に生ずと言ふと是の義は異ならず。又汝は四有七有と言ふも、是の經は然らず、法相に順ぜざるを以ての故なり。又汝は閻王の訶責することを言ふも、此は生有に在りて中有なるには非ざるなり。又汝が佛は中陰に因りて宿命を知りたまふと言ふは是の事は然らず、聖智の力にて爾るなり、相續せずと雖も亦能く念知したまへばなり。又汝が天眼は死時と生時とを見ると言ふは生ぜんと欲するを生時と名づけ、將に死せんとするを死時と名づくるものにして、中陰には非ざるなり。又汝は衆生は陰の爲めに縛せられ此より彼に至ると言ふも、後世あることを示すが故に是くの如く說くのみ、中陰あることを明すには非ざるなり。又汝が死時には微なる四大ありて去ると言ふは世人の所見のみにして信ずべからず、此は因を用ふるに非ざるなり。又汝は若し中陰なくんば中間は應に斷なるべしと言ふも、業力を以ての故に、此の人は此(ここ)に生れ、彼の人彼(かしこ)に生るること、過去と未來とは相續せずと雖も而も能く憶念するが如くなり、是の故に中陰あることなし。復次に宿命智の中にては此の人は此の間に死し彼の間に生ずと知るを說くも、中陰の中に住すとは說かず。復次に佛は三種の業——現報と

ち、生般を有行般、無行般、生般の三種に分つ、故に合して七種となる。

【八】 雜へてといふは有漏無漏の禪定を雜修するをいふなるべし。上流般の者が有漏無漏兩定を修し、無漏慧の力を以て有漏慧に熏じ色界五淨居天に受生するを指し、之によつて中陰の有の存する證となすなり。

【九】 三本宮本には閻羅王とあり。閻は yama の音譯、羅は rāja (王)の音譯。故に閻王の方可なり。通常いふ閻魔王にして地獄の王なり。閻は精密には yam の音譯、羅は rāj 又は rā の音譯。古く支那に傳はれるときは最後の音 a が脫略せられ居たるを其儘音譯せしものなり。此例は甚だ多し。

【一〇】 數論派の如きは所謂細身を說くが、これ一般の人人の考より說くに至れるならむ。而して佛敎にて說くものもこれ等の影響によるならむ。

【一一】 三本宮本は、無くんばの次に則ち後世なし、若し中陰なくむば、を有す。

【一二】 中陰の無を主張するは大衆部系統の大衆部一說部說出世部鷄胤部化地部本宗などなり。成實論主も此說を取る。

【一三】 問異答異と及び次の身

卷の第三[一]

有中陰品　第二十四

論者言　有る人は說く、中陰は有なりと。或は有が說く、無なりと。

問曰　何の因緣の故に有と說き、何の因緣の故に無と言ふや。

答曰　[二]中陰は有なりといふは佛は　[三]阿輸羅耶那經の中にて說く、若し父母にして會する時は、衆[四]生は何れの處にか隨つて來りて其の中に依止すと、是の故に中陰は有なるを知る。又、[五]和蹉經にて說く、若し衆生にして此の陰を捨て已つて、未だ心の生ずる身を受けずむば、是の中間に於て我は[六]愛を說いて因緣と爲し、是を中陰と名づくと。又　[七]七善人の中には中有にして滅する者あり。又經の中にて說く、[八]雜へて業を起し雜へて身を受け、雜へて世間に生ずれば、當に知るべし中陰ありと。又經の中にて四有を說く、本有と死有と中有と生有となり。又七有を說く、五道有と業有と中有となり。又說く、[九]閻王は中陰の罪人を訶責して顚倒して墮せしむと。又佛は中陰に因りて衆生の宿命を知りて、此の衆生は此處に生じ彼の衆生は彼處に生ずと謂ひたまふ。又經の中にて說く天眼を以て諸の衆生の死時と生時とを見ると。又、說く衆生は陰のために縛せらるるが故に此の世間より彼の世間に至ると。又世人も亦中陰ありと信じて言ふ、若し人死する時は微なる四大ありて此の陰より去ると。又、若し中陰あらば則ち後世あり、若し中陰無くんば是の身を捨て已つて未だ後身を受けざる中間は應に斷なるべし。是を以ての故に知る、中陰は有なりと。

無中陰品　第二十五

【一】三本宮本はここにては卷を分たず。此品と次品とが十論の第三なる中陰有・中陰無の論なり。疑惑、動機、標準、定說、支分、思擇、決定、論議、論諍、論詰、似因、詭辯、誤難、負處、之を本文では十六種の義となせるなり。

【二】中陰は中有なり。中有の實在を主張するは上座部系統の有部、化地部末計などなり。

【三】阿輸羅耶那は恐らくAssalāyana。此經は中阿含に存す。

【四】大正大藏經は衆住とす。衆生の誤植。

【五】和蹉はVatsaの音譯にして、ここにては和蹉は梵志の名なり。此梵志に對して說きたる經なり。

【六】麗本に愛とあるも、三本宮本に受とあり。

【七】七善人、七善趣士といふ。不還向のものが不還果を得るに時處の差別あるによつて分たるる七種をいふ。即ち欲界に死し、欲界より色界に生ずる中有にて般涅槃する中般と、色界に生れて般涅槃する生般と、更に無色界に上生して般涅槃する上流般との三種の區別あり、此の中、中般を速般、非速般、經久般に分

すべからずと言ふも、未來世の惡法の因緣を防ぎ、亦未來の善法の因緣をも起す。又汝は則ち佛なしと言ふも佛は寂滅の相なり、世に現じたまふと雖も有無に攝せず、況んや滅度したまへるをや、衆生歸命すること、亦世人が父母を祠祀するが如し。[一二八]又汝は亦應に修戒の久と近とあるべからずと言ふも、時を以ての故に戒に差別あるにはあらず、所以は何、時[一二九]法は實なし、但諸法の和合し生滅するを以ての故に時ありと名づくるのみ。是の故に汝が說く所の因は是れ皆然らざるなり。

[一三〇]一切有無品　第二十三

論者言　有る人は說く、一切の法は有なりと。或は說く、一切の法は無なりと。

問曰　何の因緣の故に有と說き、何の因緣の故に無と言ふや。

答曰　有とは佛の[一三一]十二入を說いて名づけて一切と爲すものにして、是の一切は有なり。地等の諸の[一三二]陀羅驃、數等の諸の[一三三]求那、擧下等の諸の[一三四]業・[一三五]總相・別相・和合等の法と及び[一三六]波居帝本性等と及び世間の事の中の兎の角、龜の毛、蛇の足、鹽の香、風の色等とは是を無と名づく。又經の中にて佛は說く、

虛空には轍跡無く　外道には沙門無く
凡夫は戲論を樂しみ　如來には則ち有ること無し、と。

又所受の法に隨つて亦名づけて有ともなすあり、陀羅驃等の[一三七]六事は是れ[一三八]優樓佉の有、[一三九]二十五諦は是れ僧佉の有、十六種の義は是れ[一四〇]那耶修摩の有なるが如し。又若し道理あつて能く事を成辨せば、亦名づけて有ともなす、十二入の如し。又佛の法の中にては、方便を以ての故に一切有とも一切無とも說くも、第一義にはあらず、所以は何、若し決定して有ならば卽ち常邊に墮し、若し決定して無ならば卽ち斷邊に墮し、此の二邊を離るるを聖中道と名づくればなり。

dārtha）に當る、以上六句義が勝論說の要目なり。

【一三六】波居帝の原語は（prak-ati）などなりしなるべし。雅語にては prakṛti にて譯して本性、又は自性といふ。數論（sāṁkhya）の哲學の認むる根本二元の中の根本物質因を指す。波居帝本性は原語音譯と義譯とを並擧せるなり。

【一三七】六事とは、六句義を云ふ。

【一三八】優樓佉（ulūka）は勝論派の祖にして、支那に譯して、鵂鶹といひ、又食米齊仙人といふて居る。優樓佉の說に從へば實有なりとの意。

【一三九】二十五諦、數論派の所說なり、此派では、神我と自性とを根本二元とし、自性卽ち本性より一切萬有を發生することを說き萬有成立までの一切を分類して二十五種の名稱を設く。僧佉（sāṁkhya）は數論と譯す。

【一四〇】那耶修摩は Naya-sama の音譯にて、雅語の Nyāya-saumya に當る。Nyāya は正理、saumya は學徒の意（saumya は俗語形にては suma とも soma ともなる）故に、論理因明の學徒にして茲にては特に正理學派の學徒を指す、此の正理派は、十六諦を說く、卽ち、量、所量。

ふは本現在の時にても、猶有なりとは言はず、若し過去を說かば滅盡して則ち有ることなしと知るなり。」又汝が無我を觀ずべしと言ふは衆生が去來の法に於て有我と計するを以ての故に佛は是くの如くに說きたまふなり。」又汝が是れ正見なりと言ふは此の身が業を起し、此の業は果の與に因となり已つて滅し、復後ち還つて自ら受くるを以ての故に果ありと說くのみ、佛の法の中に於ては若しくは有も若しくは無も皆方便の說にして、罪福の業因緣を示さんが爲めの故なるのみ、第一義には非ず。因緣を以て衆生ありと說くが如く、去來も亦爾り。」過去の意に依るとは是れ方便依なり、人の壁に依る等の如くなるにはあらず。亦心の生ずるは[一二六]神に依らず、先の心に因るが故に後の心生ずることを得ることを明すのみ、業力も亦爾り、佛は是の業は滅すと雖も而も能く果の與に因と作ると知りたまへども、定んで字の紙に在るが如くに知ると言ふにはあらず、罪業も亦爾り、此の身が業を造るを以て、是の業は滅すと雖も果報は失せざるなり。」又汝は應に諸の無漏根あるべからずと言ふは、若し學人にして無漏根を得已つて現在に在ることを得ば、過去は滅し未來は未だ至らずと雖も、成就を以ての故に無とは言ふことを得ざるなり。」又汝は聖人は應に未來を記すべからずと言ふも、聖智の力にて爾るなり、未だ法あらずと雖も而も能く[一二七]懸記すること過去の法は已に滅盡すと雖も念力は能く知るが如くなればなり。」又汝は應に五塵を念ずべからずと言ふも、是の凡夫人は、癡なるが故に、妄念して先に定相を取りたれば、後に滅盡すと雖も猶憶念を生ずるなり、法を憶するは應に爾るべし、兎角等の如きには非ざるなり。」十八意行も亦復是くの如し、現在に色を取れば、滅せる過去なりと雖も亦隨つて憶念するなり。」又汝は應に自ら我は禪定を得たりと稱すべからずと言ふも、是の定は現在に在ることを得れば、憶念力の故に自ら我は得たりと言ふなり。」又汝は應に內心內受を觀ずることを得べからずと言ふも、二種の心――一には念々生滅すと、二には次第相續すとあり。現在心を用つて相續心を觀ずれば、今猶在るには非ざるなり。」又汝は四正勤を修習

廣道人の說は知られざりしものか。

【一二二】成實論は十二入を實となす說なり。異部宗輪迹記發軔によれば蘊處界三科について何れを假、何れを實となすか各部に異說あり。經部は蘊處を假、界を實とし、俱舍論は蘊を假處界を實とし、說假部は蘊を實、處界を假とし、有部は三科凡てを實とす。

【一二三】勝論（Vaiśeṣika）の學說を擧ぐ。陀羅驃（Dravya）、實と譯し、所依諦とも譯す。一切の屬性を抽出し去れる實體其ものをいふ。之を實句義（dravya-padārtha）といひ、之に地、水、火、風、空、時、方、我、意の九を數ふ。

【一二三】求那（Guṇa）は德句義（guṇa-padārtha）なり、實の有する屬性質を指し、之を實在視したものなり。之に色、味、香、觸、數、量、別體、合、離、彼體、此體、覺、樂、苦、欲、瞋、勤勇の十七を數ふ。

【一二四】業（Karman）は業句義にして、一切の運動をさす、取、捨、屈、伸行の五業を數ふ。擧下は取捨を指す。以上が勝論の所說たる三句義である。

【一二五】總相は同句義（sāmānya-padārtha）、別相は異句義（viśeṣa-padārtha）の異譯、和合は和合句義（samavāya-pa-

果は則ち因無ければなり。又經の中にて說く、若し過去の事にして、實にして益あらば佛は則ち之を說きたまふと。又說く、應に過去未來の一切の無我を觀ずべしと。又未來を緣ずる意識は過去の意に依る、若し過去なくんば識には何の依る所あらん。又過去の業には未來の果ありと知るを是を正見と名づく。又佛の十力は去來の諸業を知る。又佛自ら說く、若し過去の所作の罪業なくんば是の人は終に諸の惡道に墮せず。又學人にして若し有漏の心の中に在らば、則ち應に信等の諸の無漏根あるべからず。又諸の聖人は應に決定して未來の事を記すべからず。又若し去來なきときは則ち人は應に五塵を憶念すべからず、所以は何、意識は現の五塵を知らざるが故に、又[一二四]十八意行は皆過去を緣ずと說けばなり。又若し未來無くんば則ち阿羅漢は應に自ら我は禪定を得たりとは稱すべからず、定の中に在つては言說なきを以ての故なり。又四念處の中にては應に內心內受を觀ずることを得べからず、所以は何、現在に過去を觀ずることを得ざるが故なり。又亦應に四正勤を修すべからず、所以は何、未來世の中には惡法なきが故なり。餘の三も亦爾り。又若し去來なくんば則ち佛あることなし、又亦修戒の久と近とあるべからず。是の故に然らず。

二世無品　第二十二

答曰　[一二五]過去未來は無し、汝は有法の中にて心を生ずと說くと雖も、是れ先に已に答へたり。無法も亦能く心を生ずればなり。又汝は色相と色數と色可相とを說くも是の事は然らず、過去未來は應に是れ色なるべからず、惱壞なきが故に亦無常相とも說くべからざればなり。但佛は衆生の妄想分別に隨ふが故に其の名を說くのみ。又汝は智より智を生ずと言ふも、因は果の與に因緣となり已つて滅すること、種が芽の與に因と作り已つて滅するが如し、佛も亦是の事生ずるが故に是の事生ずと說きたまふ。又汝は實にして而も益あらば佛は則ち說きたまふと言ふも、佛の是の事を說きたま

【一二四】十八意行。六喜行、六憂行、六捨行なり、辯三受品第八十一參照。

【一二五】過去未來無は現在實有過未無體說にして、これ大衆部系統の說なり。經部も此說なり。但し大衆部系統に於ても上座部系統の三世實有論の影響を受けたるものもあり。此の二世無の說が成實論主の說なり。

【一二六】我をいふ。故にこれ佛教以外の派のいふ所を借りていふ言なり。

【一二七】麗本は玄とす。懸の方解し易ければ三本に從ひたり。

【一二八】三業品第一百の後半參照。

【一二九】佛教にては凡て時間なるものを實法となすことなし。時に實體なく唯法によつて立つのみなり。

【一三〇】本品が十論の第二なる一切有・一切無の論なり。この一切有と一切無とは佛教と外學とを對せしめて述ぶるも佛教內に於ても有部の如きと方廣道人の如きとを對せしめ得べし。成實論の著者には方

等の合するとき則ち識の生ずる有るものなるに、未來世の中の芽と字と識と等は因緣未だ會せざれば、云何ぞ有なることを得ん、是の故に二世は應に有なるべからざるなり。(五)復次に、[二〇]若し未來の法にして有ならば是れ則ち常たらむ、未來より現在に至るを以ての故なり。而も舍より舍に至つて則ち無常なることなきが如き、是の事は不可なり。(六)又經の中にて說く、眼の生ずるに從來する所なし、滅するにも所至なしと、是の故に應に去來の法と分別すべからず。(七)復次に若し未來に眼色識有らば則ち應に作あるべし、過去も亦爾なり、而も實には然らず、是の故に去來の法なきを知る。(八)又去來の色あらば則ち應に有對にして有礙なるべきに、而も實には然からず、是の故に無なり。(九)復次に若し瓶等の物にして未來に有ならば、則ち陶師等は應に作すこと有るべからざるに、而も現に作すことあり、故に未來に有なることなし。(十)又佛は說く、有爲法には三相が可得なりと、生と滅と住異となり、生とは法の先に無にして今現に有作なる若きもの、滅とは作已つて還無となれるもの、住異とは相續の故に住にして變の故に異と名づくるものなり。是の[二一]三有爲の相は皆現在に在りて、過去と未來とには非ざるなり。

[二二]二世有品　第二十一

問曰　[二三]實に過去未來有り、所以は何、若し法にして是れ有ならば此の中にて心を生ずればなり、現在法及び無爲法の如し。又佛は色相を說くに亦過去及び未來の色をも說く。又說く、凡そ所有の色の、若しくは內、若しくは外、若しくは麁、若しくは細、若しくは過去と未來と現在とを總じて色陰と名づくと。又說く、過去未來の色すら尙ほ無常なり、何に況んや現在のものをやと。無常は是れ有爲の相なり、是の故に應に有と說くべし。又現見するに、智より智を生ず、修習するを以ての故なり。稻より稻を生ずるが如し、是の故に應に過去有るべし、若し過去なくんば、

【二〇】未來法が實有なりと主張せば、當然これ法を常住なりとなす意味となる。然るに已に未來法ならば現在法となり來るべきものにして、恰も甲家より乙家に至る如く變遷すべし、此點よりいへば無常といはざるを得ず。而も常住にして無常にあらずとなるが故にこれ不合理なり。これ有部說を難ずるなり。

【二一】此說は明に有部說と異る。

【二二】三本宮本はここより卷三となす。此品と次品とが十論の第一なる二世有・二世無の論なり。

【二三】過去未來有の說は卽ち三世實有論なり。これ上座部系統の說にて說一切有部を代表となす。但し上座系統にても過未無體說の影響を受けたるもあり。化地部の如き是なり。

實有過去未來は宗、所以者何若法是有此中生心は因、如現在法及無爲法は喩に配當せられ得べし。從つてこれ基本的の說をここに擧げたるものなりと知らる。これ有部の說なり。

むも、而も此れ實には無なり。故に知る陰界入所攝の法は是れ有相なるには非ざるなり。

問曰　若し人にして[二六]現知等を以て所得ありと信ぜば名づけて有相とせんや。

答曰　此も亦有相に非ず。此は可信法なるのみにして、決定分別して說くことを得べからざるものなり。又有る經にて說く、應に智に依るべし、應に識に依るべからずと[二七]。性得を以ての故に色等の諸塵は不可得なり、後に當に廣く說くべし。此の無相にして壞せずんば有所得の相云何が立すべけんや。

問曰　有と法とが合するが故に名づけて有と爲すや。

答曰　有は後に當に破すべし。又有の中に有は無ければ、云何ぞ有と法とが合するが故に有と名づけんや。是の因緣を以て有相は決定分別して說くことを得べからざるものなり。但世諦を以ての故に有なるのみ、第一義には非ず。

問曰　若し世諦を以てして、有ならば、今還た世諦を以ての故に說いて過去未來を有とせんや無とせんや。

答曰　無なり[二八]。所以は何、(一)若し色等の諸陰にして現在世に在らば能く所作あること見知することを得べければなり。經の中にて說くが如し、是の色相を惱壞するに、若し現在に在らば則ち惱壞すべきも、去來には非ず、受等も亦然りと、故に知る、但現在の五陰あるのみ、二世は無なり、(二)復次に若し法にして作無くんば則ち自相なし、若し過去の火ならば燒くこと能はざれば、名づけて火となさず、識も亦是くの如し、若し過去に在りて識ること能はずんば則ち識と名づけず。(三)復次に若し因なくして而も有ならば、是の事は然らず、過去の法は因なくして有なるべければ、是の故に然らず。(四)復次に凡そ所有(あらゆる)の法は皆衆緣より生ずること、地に種と水と等の因緣有るときは則ち[二九]芽等が生じ、紙筆と人功と有るときは則ち字が成ずることを得ること有るが如し。二法

【二六】現量を指す。

【二七】非有數品第六十三參照。

【二八】以下は現在實有過未無體論にして、これ次の二世有品と二世無品との序論となるものなり。此中に十種の理由あり。

【二九】麗本は牙とす。牙は芽と通ずれば牙にても差支なきも今け解し易き爲に三本宮本の芽を取る。以下凡て同じ。

らず若し無ならば知ならずと言ふも、若し緣有るの知なるも、亦是の過に同じ」。又汝が木の中に浮性有るが如しと言ふは、此の事は然らず、因の中に果あるの過あるが故なり。」又汝は相を取る心にして轉廣しと言ふも、是れも亦然らず、本より青相の少きに而も大地は一切皆青なりと見るは則ち是れ妄見なればなり、是くの如く少青を觀ずるが故に、能く閻浮提が盡く皆是れ青なりと見るは妄見に非ざらむや。「又汝が、幻網經にて説く、幻あり、幻事とは衆生なきも、中にて衆生に似たるを見て衆生の事と爲すと言ふは、」此の事は實には無なるを而も見るなり、則ち是れ無緣の知なり」。又汝は三昧力を以ての故に此の無相を生ずるのみにして、實有の色の壞するを空と爲すが如しと言ふも、若し色は實有にして而も壞して空と爲るとせば則ち是れ顚倒なり。」又少なきを而も無と言ふとなすも亦無の顚倒なり。」又汝が、見ることが審ならずと言ふは是の事は然らず、眼氣病の人は空中に毛あるを見るも其は實には無なるが如くなればなり」。又汝は五蓋の七覺法と相違するを見るが故に便ち念を生じて我は無を知ると言ふと言ふも、[二三]七覺法は異にして無貪も亦異なり、云何ぞ一と爲さんや。」又汝は眞實慧の妄解と相違するを見れば貪の斷と名づくと言ふも、妄解は虛妄の觀に名づく、是の故に、欲の斷の故に色の斷なりと知れば眞實慧なりと説くは、無常觀なるのみ」。又汝が夢の中にて實を見ると言ふは是の事は然らず、舍より墮つと夢みるが如きは而も實には墮ちざればなり。是の故に無を知るの知あり、知が行ずるを以ての故に有相と名づくるにはあらざるなり。

[二三]無相品　第二十

問曰　若し此にして有相なるに非ずんば、今の[二四]陰界入所攝の法は應當に是れ有なるべし。

答曰　此も又然らず、所以は何、是の人は、凡夫法は陰界入の攝なりと説くものなるが、是の事は法相に順ぜざればなり。若し然らば[二五]如等の諸の無爲法も亦應に是れ有なるべしと説くもの有ら

【二三】原文は、「七覺法異無貪亦異」とあり、此の「異……異」となれるは、梵語の「anya......anya」(the one......the othr)の直譯なれば、意味は七覺法と無貪とは相異るといふことなり。七覺法は一方のもの、無貪はそれと異る他方のものといふ意なり。

【二三】以上にて有相無相兩説を對論せしめて大體を終れるなり。以下無相品といはるるものは其餘論的のものなればここにて分品せざる方可なりと考へらる。

【二四】新譯の蘊處界なり。陰入界といふが順序なる理なれど、舊譯にては多くは陰界入の順序とす。

【二五】如は法性とも眞際ともいひ、眞如と同じ。不相應行品第九十四の最後部を見るべし。

る所なるに因るが故に夢の中にて見るのみ。又冷熱の氣が盛なるが故に隨つて夢見し、或は業緣を以ての故に夢みるなり。菩薩に諸の大夢有るが如し。或は天神等が來りて夢を現ずることを爲す、是の故に夢の中にて有を見る、無を知るには非ざるなり。

〔一〇九〕**難曰** 汝が要ず二法の因緣を以て識は生ずることを得と言ふは、是の事は然らず、佛は〔一一〇〕神我を破するが故に二法の因緣にて識を生ずと說くのみ、盡く然るには非ざるなり。又汝が所識あるを以ての故に識と名づくと言ふは、法を識るには、有ならば則ち有と知り、無ならば則ち無と知り、若し此の事にして無ならば、此の事なきを以ての故に名づけて空を見るとなすなり。又三心が滅するが故に名づけて滅諦となすも、若し空心なくんば何の滅する所ぞ。又汝が眼識は色を識り、乃至、意識は法を識ると言ふは、是の識は但能く塵を識るのみにして有無を辯ぜざるものなり。又汝が若し無緣の識あらば是れ則ち錯亂なりと言ふは、則ち無を知るの知あるなり、狂病人の無き所の者を見るが如し。又汝は若し無を知らば應に疑を生ずべからずと言ふも、若し有とせんや無とせんやと疑はゞ則ち無緣の知あるなり。又汝が、經の中にて若し世間に無き所を我にして知見するが若きは是の處なしと說くが如しと言ふは、是の經は法相に順ぜず、佛語に非ざるに似たり。或三昧は是くの如くにして、此の三昧に入らば所見は盡く有なれば、是の三昧の爲の故に是くの如く說くのみ。又汝が我言を指して汝の言は自ら相違すと言ふも、我の緣なしと言ふは相違にはあらざるなり。又汝が心心數法は能緣にして一切法は是れ緣なりと言ふも、心心數法ありて而も所緣なきあり、又心心數法は實には緣ずること能はざるが故に緣とは名づけざるあり。又〔一一一〕諸法實相は諸相を離るゝが故に名づけて緣とはなさず。又汝が諸塵は是れ識を生ずる因なれば、若し無ならば何を以てか因と爲さんやと言はば則ち無を以て因となす。又汝が三事和合するを名づけて觸と爲すと言ふは、若し三事にして得べくんば則ち和合あるも、一切處に盡く三事あるには非ず。又汝は若し知ならば無な

〔一〇九〕再び有相の說を難じて無相の義を主張す。この難曰はむしろ論主の說なり。かく破するは經部の說にして、論主の取る所なり。

〔一一〇〕神我(Puruṣa)數論派の說く我を指す。數論派は精神的原理として神我を立て、物質的原理として、自性(Prakṛti)を立つ。

〔一一一〕諸法實相の語他にも存す。例へば智相品第一百八十九の如し。

故に疑を生ずることを得るなり。又經の中にて說く、若し世間になき所を我にして知見せば、是の處あることなしと。又汝の言は自ら相違す、若し無ならば何の知る所ぞ。又經の中にて說く、能緣の法とは是れ心心數法なりと、亦說く、一切の諸法は皆是れ所緣なりと。此の中にては、無法を緣と爲すとは說かず。又諸塵は是れ識を生ずるの因なれば、若し無ならば何を以てか因となさんや。又經の中にて說く、三事が和合するが故に名づけて觸となすと。若し法にして無ならば何の和合する所ぞ。又無緣の知は云何が得べけんや、若し知ならば則ち無ならず、若し無ならば則ち知ならず、是の故に無緣の知なし。又汝は知は無所有の處に行ずること、信解觀の非青を青と見るが如しと言ふも、是の處あることなし、所以は何、是の非青の中には實には青性あればなり、經の中にて說くが如し、[一〇八]是の木の中に淨性ありと。又青相を取る心力にして轉廣からば一切は盡く青くして、青相なきには非ざればなり。又幻網經にて說く、幻あり、幻事とは衆生なきも、中にて衆生に似たるを見るが故に名づけて幻と爲すなりと。又汝は無所有を知るを以ての故に無所有處定に入ると名づくといふも、三昧の力を以ての故に此の無相を生ずるのみにして、是れ無には非ざるなり、實有の色の壞すを空相と爲すが如し。又是の三昧に入らば見る所の法は少なきが故に名づけて無となすのみ、塵が少なきが故に無塵と名づけ、慧が少きが故に無慧と名づくるが如し。又非有想非無想處と說くは是の中には實には想ありと雖も亦非有非無と說くものなるが如し。又汝が指を以て目を按ずれば二月を見ると言ふは見ることが審ならざるが故に一を以て二となすのみ、若し一眼を合せば則ち二を見ざればなり。又汝が、我は內に欲なきを知るといふは、是の人は五蓋の七覺法と相違するを見るが故に、便ち念を生じて我は欲なしと言ふのみにして、無を知るには非ざるなり。又汝が色の中の貪の斷ぜるを知るを色の斷と名づくと言ふは眞實慧の妄辨と相違するを見るが故に貪斷と名づくるのみ。又汝が夢の中にては無なるをも而も見ると言ふは先に見聞し憶念し分別し及び修習せ

相應して起る作意の心所なり。自相作意、共相作意と共に三種作意といはる。以下、知の無に轉ずる例として幻事と無所有と二月と無貪欲と色斷と夢中とを擧ぐ。かく物の全無なる所にも知が轉ずるが故に、知の及ぶ境は卽ち有りとはいへずと難ずるなり。

【一〇六】再び有相の說を主張し述ぶ。

【一〇七】例へば眼識の起る場合には、眼根が依、色境が緣なるが如く、根境なる依緣によりて、識生ずるなり。

【一〇八】不淨想品第一百七十八に同文の引用あり、

〔一〇〇〕有る人は二世の法は有なりと言ひ、或は有るは無なりと言ふ。

〔一〇一〕**問曰** 何の因縁の故に有と説き、何の因縁の故に無と説くや。

答曰 有とは若し法あらば是の中にて心を生ず、二世の法の中にては能く心を生ずるが故に當に是れ有なりと知るべし。

問曰 汝は當に先づ〔一〇二〕有相を説くべし。

答曰 知の〔一〇三〕所行處を名づけて有相と曰ふ。

難曰 知は亦〔一〇四〕無所有の處にも行ず、所以は何、〔一〇五〕信解観は非青を青と見るが如くなればなり。又、所作の幻事は亦無なるも而も有と見るが如く、又無所有を知るを以ての故に無所有處定に入ると名づけ、又指な以て目を按ずれば則ち二月を見る、又經の中にて説く、我は内に貪欲なきを知ると、又經の中にて説く、色の中の貪の斷ぜるを知るを名づけて色斷と爲すと、又夢の中にて無なるをも而も妄に見るが如し、是等の縁を以て、知も亦無所有處に行ずるなり。知の所行處なるを以ての故に、名づけて有とは爲すべからず。

〔一〇六〕**答曰** 知は無所有の處に行ずることあることなし、所以は何、要ず二法の因縁を以ての故に識は生ずることを得ればなり。一には〔一〇七〕依、二には縁なり。若し當に縁無くして而も識が生ずべくんば亦應に依無くも而も識は生ずることを得べけむ、然らば則ち二法は無用なり。是くの如くむば亦解脱もなし、識は應に常に生ずべければなり。是の故に知る識は無には行ぜず。又所識有るを以ての故に名づけて識と爲す、若し所識なくんば則ち亦識も無し。又説く、識は能く塵を識ると、謂く眼識は色を識り、乃至、意識は法を識る、若し無縁の識ありと言はゞ此の識は何を所識となすや。又若し無縁の識ありと言はゞ是れ則ち錯謬なること、有る人の、我は狂し心が亂れて世間に無き所を而も我は皆見ると言ふが如し。又若し所有なきを知らば應に疑を生ずべからず、所知あるを以ての

【一〇〇】十論の第一、二世有二世無を述ぶる前に一般的に有と無とを論述して其序説となすなり。本品は有相品とのみ名づけずしてむしろ有相無相品とし、次の無相品第二十を獨立せざるを可とす。無相品は此有相品の中に有論無論を論じたる餘論的のものに過ぎざればなり。本品に於て以下に問曰といひ難曰といふは假の反對者の言、答曰は假の論主(著者)の言なり。故に其言は必ずしも論主の抱懷し主張する説とのみは限らず、二世法有を述ぶる場合には論主は自らを二世法有論者として反對説を論難するなり又二世法無論を述ぶるときは論主は自ら二世法無論者として述ぶ。從つて或場合には反對説が却つて論主の元來の主張と合することもあり得べし。

【一〇一】有相論の主張。

【一〇二】所行處は知の及ぶ境をいふ。

【一〇三】有相の説を難じて無相の義を述ぶ説論主の説と見ても可なり。

【一〇四】各所有處は無色界の第三と同じなるが如きも、こゝにては別なり。有ること無き處の意なり。

【一〇五】信解は新譯の勝解、信解觀は勝解作意にて假想觀に

生の因緣より老死等あるなり。此の中にて、若し無明と諸行とを說かば則ち過去世の有を明し、常見を斷じて無始の生死往來に從ひ業煩惱の因緣に從つて身を受くことを知らしめ、若し生死を說かば則ち未來世の有を明して、斷見を斷ぜしむ。若し眞智を得ずむば則ち生死は無邊にして但苦果あるのみなり。若し中間の[九六]八分を說かば現在の法は但だ衆緣より相續するが故に生じて眞實有ること無きと明す。此の中にて、無明と諸行とは是れ先世の因緣にして、此の因緣の果は謂く識名色六入觸受なり、此の五事より愛取有を起す、是れ未來世の因なり、此の因緣の果は謂く生老死なり。諸受を受くる時の若きは還愛取を生ず。是の故に此の十二分は輪轉して無窮なり。能く眞智を得るときは則ち諸業を集めず、諸業が集まらずむば則ち生有ること無し、生は起成に名づくればなり。若し人にして此の正論を習はゞ則ち諸法は皆自相空にして諸業を集めず、諸業が集まらずむば則ち生有ることなく、生有ることなきが故に老死憂悲苦惱は都て滅すと知る。故に自利し兼て衆生を利し漸に佛道を成じ、自法を熾然し他法を滅せんと欲せば當に此の論を習ふべし。

十論の初の有相品　第十九

問曰　汝は[九七]經の初めに廣く諸の異論を習ひ佛の法の義を論ぜんと欲すと言へり、何等か是れ諸の異論なりや。

答曰　[九八]三藏の中に於ては諸の異論多きも、但人の多く喜んで諍論を起す者は、所謂[九九](一)二世有と二世無と、(二)一切有と一切無と、(三)中陰の有と中陰の無と、(四)四諦の次第得と一時得と、(五)有退と無退と、(六)使は心と相應すと心と相應せずと、(七)心性本淨と性本不淨と、(八)已に報を受けたる業は或は有と或は無と、(九)佛と僧數に在ると僧數に在らずと、(十)人有ると人無きとなり。

【九六】識以下有までをいふ。

【九七】この經は成實論を指すに外ならず。廣習諸異論……我欲正論三藏中實義は發起偈中に存すればなり。

【九八】三藏とは廣く佛の法即ち佛教といふ意に解すべきなり。三藏を經律論とすればこゝには三藏とはいふも、かゝる十論は主として論義中に存するものにして、經藏中には極めて少く、律藏には皆無なりといふべし。

【九九】二世有二世無と一切有一切無と乃至有人無人との十種を本節の題名に十論といへるなり。有人無人は下には有我無我とあり。故に有我無我品第三十五までがこゝにいふ十論なり。

(四)諸求を捨て、(五)濁思惟せず、(六)諸の身行を離れ、(七)善く心解脱を得、(八)善く慧解脱を得て、(九)所作已に辨じ、(十)獨にして而も侶なきなり。五法を斷ずとは[九一]五上結を斷じ阿羅漢を得て一切の結が盡くるなり。六法を成ずとは六妙法を行じて眼等の諸情が色等の塵に於て憂せず喜せず亦癡せもせざるが故なり。一法を守るとは念を身に繋するなり。四法に依るとは謂く乞食等の[九二]四依法なり。復有る人の言く、四法に依るとは聖人に法の遠離有ると、法の親近有ると、法の除滅有ると、法の忍受有るとなりと。淨く戒を持つが故に能く實相に達するを僞諦を離ると名づく、一切の見を斷ずるを初果を得ると名づくればなり。諸求を捨つとは、謂く欲求と有求と及び梵行求とあるも、初果を得るが故に有爲法は皆是れ虚誑なりと知りて、三求を捨てゝ金剛三昧を得んと欲し已つて學道を捨つれば、爾の時に能く盡くを諸求を捨つと名づくるなり。濁思惟せずとは[九三]六種の覺を滅して心は清淨を得、能く三毒を薄うし第二果を得、貪愛を滅除して第三果を得るを濁思惟せずと名づくるなり。身行を離るとは欲界結を除いて四禪を得るが故に身行を離ると名づけ、盡智を得るが故に善く心解脱を得と名づけ、無生智を得るが故に善く慧解脱を得と名づく。諸の聖人の心は此の十處に住するが故に聖處と名づく。佛の法の所作は必ず應に苦を盡くすべきものなるが故に所作已に辨ずと曰ひ、凡夫及び諸の學人を遠離するが故に侶なしと曰ひ、心は諸法を離れて畢竟空に住するが故に名づけて獨と爲す。

[九四]十二因緣の無明とは謂く假名に隨ふ心にして、此の倒心に因つて能く諸業を集むるが故に無明は行に緣たりと曰ひ、識は[九五]業に隨ふが故に能く有身を受く、故に行は識に緣たりと曰ひ、有身を受け已るを名づけて名色六入觸受と爲し、此の諸の分等は時に隨つて漸く增し、諸愛を受くる時には假名に依止するが故に能く愛を生じ、愛に因りて餘の煩惱を生ずるが故に名づけて取と爲し、愛取の因は有に緣たれば、是れを三分と名づけ、是の諸の業と煩惱の因とより後世の中の生に緣たり、

【九一】通常は五上分結といふ。色貪、無色貪、掉擧、慢、無明を指し、貪、瞋、身見、戒取疑を五下分結といふに對す。

【九二】四依法とは一に著糞掃衣、二に常乞食、三に樹下座、四に用陳腐藥なり。

【九三】六種の覺は六根の欲なり。

【九四】十二因緣、四諦品第十七に說かる。

【九五】業はこゝにては行と同じ。行は業の義となすなり。

く三寶を信ずるを知ると謂ひ、是の戒力を信ずるが故に信戒と名く。四聖種を以ての故に衣服の愛の爲に染せられず、飮食臥具從身の愛の爲に染せられず、故に四聖種と名づく、四惡行とは貪の故と瞋の故と怖畏の故と癡の故とを以て惡道の中に墮つものなり。

五陰中の色陰とは色等の五法、受陰とは能緣の法、想陰とは能く假名の法を分別するもの、行陰とは能く後身を生ずるの法、識陰とは唯能く塵を識るのみの法なり。

地種とは色香味觸の和合にして、堅相の多きは名づけて地種と爲し、濕相の多きは名づけて水種と爲し、熱相の多きは名づけて火種と爲し、輕相の多きは名づけて風種となし、色相がなきが故に說いて空種と名づけ、能く法を緣ずるが故に名づけて識種となす。眼入とは四大が和合して眼識の所依たるが故に眼入と名づけ、耳鼻舌身入も亦是くの如く、意入とは謂く心なり。色入とは眼識所緣の法にして、聲香味觸法入も亦是くの如し。六生性とは、謂く[八七]黑性の人は能く黑法を習し、亦白法及び黑白法をも習し、白性の人も亦是くの如きものなり。[八八]六喜行とは貪心に依るなり、六憂行とは瞋心に依るなり。六捨行とは癡心に依るなり。六妙行とは實智慧なり。

七淨の戒淨とは戒律儀なり、心淨とは禪定を得ることなり、見淨とは身見を斷ずることなり、度疑淨とは疑結を斷ずることなり、道非道知見淨とは戒取を斷ずることなり、行知見淨とは思惟道なり、行斷知見淨とは無學道なり。

[八九]八福生とは人中の富貴乃至梵世なり、諸の福報の樂は此の中に最も多きが故に此の八を說くなり。

[九〇]九次第滅とは初禪に入つて語言を滅し、二禪にては覺觀を滅し、三禪にては喜を滅し、四禪にては出入の息を滅し、虛空處にては色相を滅し、識處にては無邊の虛空相を滅し、無所有處にては無邊の識相を滅し、非想非非想處にては無所有の想を滅し、滅盡定に入りては受及び想を滅するなり。

十聖處とは聖人が(一)五法を斷じて六法を成じ、(二)一法を守つて四法に依り、(三)僞諦を滅し、

【八七】黑性は惡性、白性は善性、黑法は惡法、白法は善法なり。黑性の人が黑、白、黑白の三法を習し、白性の人も亦然るなり。

【八八】以下の六は六情を指す。下の六法を成ずの說明を見るべし。

【八九】八福生は人間と六欲天と梵世とを八福生とす。

【九〇】九次第定なり。初禪品第一百六十五以下に說明せらる。

至阿迦尼吒天なり、無色界繫法とは四無色なり、不繫法とは無漏法なり。苦難行道とは鈍根にして定を得て道を行ずる者是れなり、苦易行道とは利根にして定を得て道を行ずる者是れなり。樂難行道とは鈍根にして慧を得て道を行ずる者是れなり、樂易行道とは利根にして慧を得て道を行ずる者是れなり。出味とは出家して道を求むるなり、離味とは身心の遠離なり、寂靜味とは禪定を得るなり、正智味とは四諦に通達するなり。念證法とは四念處なり、是の念處に因つて能く四禪を生ずれば是れを身證と名づけ、四禪に因るが故に能く三明を生ずれば名づけて眼證と爲し、四諦に通達せば名づけて慧證と爲す。四受身とは能く自ら害して他は害すること能はざるあると、他の爲に害せられて自ら害すること能はざるあると、能く自ら害し他も亦能く害するあると、自らも害せず他の爲にも害せられざるあるとなり。四入胎とは自ら入胎を念ぜず亦自ら住胎出胎をも念ぜざるあると自ら入胎を念じて而も自ら住胎出胎を念ぜざるあると自ら入胎住胎を念じて而も自ら出胎を念ぜざるあると自ら入胎出胎住胎を念じ、顚倒心の亂れたるを以ての故にとは自ら念ぜずして、心が正しく亂れざるが故に能く自ら念ずるあるとなり。

四緣の中の因緣とは生因と習因と依因となり。生因とは若し法にして生ずる時ならば能く與(ため)に因となるものにして、業を報の因と爲すが如きもの、習因とは貪欲を習すれば貪欲が增長するが如きもの、依因とは心と心數法とが色香等に依るが如きもの、是を因緣と名づけ、次第緣とは前の心法の滅するを以ての故に後の心の次第して生ずることを得るが如きもの、緣緣とは緣より生ぜる法の若きもの にして、色の能く眼識を生ずるが如く、增上緣とは謂く法の生ずる時の諸餘の緣なり。

八六 四信の中の信佛とは謂く眞智を得て佛に於て淸淨の心を生じ決定して、佛は衆生の中に於て尊なりと知ること、此の眞智を信ずるが卽ち是れ信法、是の智を得る者は一切衆の中にて最も第一と爲せば是れを信僧と名づけ、聖所愛の戒を得、深心にて諸惡を造らざるを以て我は是の戒に因つて能

【八六】麗本には四信の二字なきも、三本宮本に存するに依りて今之に從ふ。此方解し易し、四信は大乘起信論は佛法僧眞如に對する信なるが、此論にては佛法僧戒なり。戒とは何れを指すか。通常の意味ならば僧の中に入るべく、特別と見るも法の中に入りて可なるものなるべし。法と戒とを分つとせば、法は三藏の中の一分を缺くこととなればなり。之に由て思ふにこの戒は佛陀が其當時の他の宗教家の行へる惡德惡行を全く離れ居たりとせらるゝその戒を指すと見るべきが如し。此戒は元來起原よりいへば律とは同一にはあらざるものなり。後には、此戒と律との內容が同一なること多き爲に、同一視せられて戒律と熟字せらるゝにも至れるなり。但し此熟字は支那にていふことにして印度にはかゝる複合詞なし。印度としては律の中に戒をも入れて見るなり、故に三藏としては律藏といひて戒藏といふことなきなり。

可知法とは第一義諦にして可識法とは謂く世諦なり。色法とは色聲香味觸にして無色法とは心及び無作法なり。可見法とは謂く色入なり、有對法とは色法是れなり、有漏法とは法の能く諸漏を生ずる若きもの、阿羅漢の假名法の中に非ざる心の如き是れなり、上と相違するを無漏法と名づく。有爲法とは衆緣より生ずるもの、五陰是れなり、無爲法とは五陰の盡滅是れなり。心法とは能緣是れなり、心數法とは若し識にして緣を得ば卽ち次第して生ずる想等是れなり、心相應法とは謂く識にして緣を得ば次第して必ず生ずる想等の如き是れなり。心共有法とは謂く法と心との共有にして色心不相應行の如きもの是れなり。隨心行法とは若し法にして心有らば則ち生じ心無くば生ぜざるものにして、身口の無作業の如きものなり。內法とは己身內の六入なり。麁細法とは相待有のものにして、五欲色定を觀ずるを細となし無色定色定を觀ずるを麁とするが如し。上下法も亦是くの如し。近遠法とは或は異方の故に遠、或は相似せざるが故に遠なり。受法とは身より生ずる法なり。出法とは謂く善法なり、共凡夫法とは有漏法なり。次第法とは他の次第より生ずるものなり。有次第法とは能く次第を生ずるものなり。

色法とは色等の五法なり。心法とは上に說きたるが如し、心不相應行とは無作業なり。過去法とは已滅法、未來法とは當生法、現在法とは生じて而も未だ滅せざるなり。善法とは他の衆生を利益せんが爲の[八五]法及び眞實智にして、上と相違するを不善法と名づけ、二と倶に相違するを無記法と名づく。學法とは學人の無漏心法にして、無學法とは無學人の第一義に在る心なり、餘をば非學非無學と名づく。見諦斷法とは謂く須陀洹所斷の示相の我慢及び此より生ずる法なり、思惟斷法とは謂く須陀洹と斯陀含と阿那含との所斷の不示相の我慢及び此より生ずる法なり、無斷法とは謂く無漏なり。

欲界繫法とは若し法にして報得ならば、阿鼻地獄乃至他化自在天なり、色界繫法とは梵世より乃

【八五】　麗本は法を缺く。

のみ。阿那含果とは能く欲界の一切の煩惱を斷ず。阿羅漢果とは一切の煩惱を斷ず。若し能く此の佛の法の論を修習せば則ち能く四諦に通達し四沙門果を得。故に應に此の正法の論を修習すべし。

法聚品　第十八

此の論を習するときは則ち能く可知等の[八四]法聚に通達す。通達するを以ての故に外道の邪論は制伏すること能はず。亦能く速に煩惱を滅し自ら能く苦を離れ、亦能く人を濟ふ。

可知等の法聚とは謂く、可知法と可識法、色法と無色法、可見法と不可見法、有對法と無對法、有漏法と無漏法、有爲法と無爲法、心法と非心法、心數法と非心數法、心相應法と心不相應法、心共有法と心不共有法、隨心行法と不隨心行法、內法と外法、麁法と細法、上法と下法、近法と遠法、受法と非受法、出法と非出法、共凡夫法と不共凡夫法、次第法と非次第法、有次第法と無次第法、是くの如き等の二法なり。

又三法あり、色法と心法と心不相應法、退去法と未來法と現在法、善法と不善法と無記法、學法と無學法と非學非無學法、見諦斷法と思惟斷法と無斷法、是くの如き等の三法なり。

又四法あり、欲界繫法と色界繫法と無色界繫法と不繫法となり。又四道あり、苦難行道と苦易行道と樂難行道と樂易行道となり。又四味あり、出味と離味と寂滅味と正智味となり。又四證法あり、身證法と念證法と眼證法と慧證法となり。四受身と四入胎と四緣と四信と四聖種と四惡行と是くの如き等も四法なり。

五陰と六種と六內入と六外入と六生性と六喜行と六憂行と六捨行と六妙行と、七淨と八福生と九次第滅と十聖處と十二因緣と、是くの如く可知等の法聚は無量無邊にして說き盡すべからざるも、我今略して其の要を擧げん。

【八四】以下の法聚によつて此論の說く所が如何なる範圍なるかを知るべし。全くこれ小乘論藏にて說く所なり。

(七)[八一]八聖道分とは、(一)聞より慧を生じて能く五陰の無常苦等を信ずるを、是を正見と名づけ、(二)是の慧にして若し思より生ぜば正思惟と名づけ、(三)正思惟を以て諸の不善を斷じ[八二]諸の善業を修習し精進を行せば、正精進と名づけ、(四―六)此より漸次に出家し受戒して三道分――正語と正業と正命と――を得、(七)此の正戒より次に念處及び諸禪定を成じ、(八)此の念と定とに因つて如實智を得るを八道分と名づく。是くの如く次第す。又八道分の中にては戒は應に初めに在るべし、所以は何、戒定慧の品の義が次第するが故なり。正念と正定とは是を定品と名づけ、精進は常に一切處の行に遍じ、慧品は道に近きが故に後に在りて說き、是の慧に二種あり、若しくは麁、若しくは妙なり、麁とは聞慧と思慧とにして正思惟に名づけ、妙とは修慧にして、謂く煖等の法の中に入り、能く假名及び五陰の法を破す、是れを正見と名づけ、此の正見を以て五陰の滅を見るを初めて道に入ると名づくればなり。

是より次に七菩提分を得。(一)念菩提分とは學人は念を失するときは則ち煩惱を起すが故に念を善處に繫ぐなり。(二)念を先來に繫ぎて得る所の正見を是れを擇法と名づけ、(三)擇法を捨てざるが故に精進と名づけ、(四)精進を行ずる時には煩惱は減少して心に歡喜を生ずるが故に名づけて喜となし、(五)心が喜ぶを以ての故に則ち身に猗を得るを是れを名づけて猗と爲し、(六)身が猗ならば樂を得、樂ならば則ち心は定なり、(七)是の定は得難ければ名づけて金剛と爲し、無着の果を得て憂喜等を斷ずるが故に名づけて捨と爲し、是を上行と名づけ、又沒せず發せずして其の心は平等なるが故に名づけて捨と爲す。菩提をば無學智と名づけ、此の七法を修して能く菩提を得るを菩提分と名づくるなり。

此の三十七品は四沙門果を得。須陀洹果とは謂く空に通達し、此の空智を以て能く三結を斷ずるなり。斯陀含果とは、卽ち此の道を修して能く煩惱を薄らげ、欲界の中に於て[八三]餘すところ一生有る

へるなり。原語は chandasamādhiprahāṇasaṃskārasamanvagato ṛddhipāda なり。精進又は勤は vīrya 心は citta 思惟又は觀は mīmāṃsā にして三摩地又は三昧以下は相同じ。

【八〇】　五根と五力とは共に信精進念定慧なり。根と見るか力と見るかにて名を異にするのみ。

【八一】　菩提分と八聖道分とを順序を轉換したり。

【八二】　麗本には修集諸善發行精進とあれど、今は三本宮本に修習諸善業行精進名正精進とあるを取る。

【八三】　麗本は餘有二生とし、三本宮本は有餘一とす。二は一となすべし。

道諦とは謂く三十七の助菩提法にして、四念處と四正勤と四如意足と五根と五力と七菩提分と八聖道分となり。

（一）四念處とは身受心法なり。[七七]中正に念を安んじ、及び念より慧を生じ身の無常等を觀じて緣の中に安住すれば、身念處と名づけ、是の念及び慧は漸次に轉增して能く受を分別すれば、受念處と名づけ、又轉淸淨にして能く心を分別すれば、四念處と名づけ、能く正行を以て諸法を分別すれば、法念處と名づく。

（二）[七八]四正勤とは（一）若し惡不善の法を生ぜば其の過患を見て、斷ぜんが爲の故に欲勤精進を生ず、斷の方便は謂く知見なり。（二）未生の惡不善の法を緣じて生ぜざらしめむが爲の故に欲勤精進を生ず、生ぜざらしむるの方便は謂く知見なり。（三）未生の善法を緣じて生ぜしめんが爲の故に欲勤精進を生ず、生ぜしむるの方便は謂く知見なり。（四）已生の善法を緣じて增長せしめむが爲の故に欲勤精進を生ず。上中下の次第の方便及び不退轉を以ての故なり。

（三）[七九]四如意足とは（一）欲三昧妙行成就修如意分なり。欲に因りて三昧を生ずれば欲三昧と名づけ、欲と精進と信と猗と憶念と安慧と思と捨と等の妙法が共に成ずれば妙行成就と名づけ、功德が增長するが故に如意足と名づく。（二）是の欲の增長を名づけて精進と爲し、是を第二と名づく。（三）行者に欲あり精進あるが故に定慧を修習して心三昧を得、所謂定なり。（四）思惟三昧は所謂慧なり。

（四）五根とは法を聞きて信を生ずるを是れを信根と名づけ、信じ已つて垢法を斷じ淨法を證せんが爲めの故に勤めて精進を發すを、是れを精進根と名づけ、四念處を修するを、是れを念根と名づけ、念に因つて能く三昧を成ずるを、是れを定根と名づけ、定に因りて慧を生ずるを、是れを慧根と名づく。

（五）是の五根が增長して力あるが故に[八〇]五力と名づく。

根、捨根なり。

【七一】信根、勤根、念根、定根なり。

【七二】慧根なり、慧の三時といふが未知根欲知根、已知根なり。以上にて二十二根となる。

【七三】集諦聚の業論の中の業相品第九十五以下なり。

【七四】集諦聚の中の煩惱論の煩惱相品第一百二十一以下なり。

【七五】集は因の義なればなり。集諦は惑即ち煩惱と業とありて、苦諦に苦あり。之によつて惑業苦となる。十二因緣も亦惑業苦に外ならず。

【七六】滅諦聚の立俗名品第一百四十一以下なり。

【七七】或は、身の中に正しく念を安んじと讀むも可ならむ。

【七八】四正勤、一、未生の惡は生ぜざらしめ、二、已生の惡は永く斷ぜしめ、三、未生の善は生ぜしめ、四、已生の善は增上せしむ。

【七九】四神足ともいふ、欲三摩地斷行、成就神足と勤三摩地斷行成就神足と心三摩地斷行成就神足と觀三摩地斷行成就神足となり。單に欲神足と勤神足と心神足と觀神足ともいひ、又は欲、精進、心、思惟ともいふ。こゝにては第一を欲三昧妙行成就修如意分とい

とを生じ、愛と取との二法は是れを煩惱と名づけ、有を名づけて業と爲し、未來世の中に初めて身を受くるの識は之を名づけて生と爲し、餘をば老死と名づく。[六六]是の十二因緣に過去と未來と現在と有り、但業緣生なるのみにして我有ること無しと示す。(ホ)又生死往來し還滅するが故に二十二根を說く、一切の衆生が初めて身を受くる時には識を以て本と爲し、是の識は六種にして眼等より生ずるが故に六根を說く、所謂[六七]眼根乃至意根なり、能く六識を生ずるが故に六根と名づくるなり。以て男女の相を分別すべきが故に[六八]男女根と名づく、有る人は名づけて身根の少分と爲す、此の六根を或は六入とも名づく。此の六事より六種の識を生ず、故に名づけて[六九]壽と爲す。所以は何、是の六入と六識とが相續生を得るが故に名づけて壽となすなり、是の相續の斷するが故に名づけて死と爲す、是の故に此の事は之を名づけて命と曰ふ。是の中にては何等か是れ根なりや。所謂業なり、因たる業を以ての故に六入と六識とは相續生を得、是の命の中の業を名づけて命根と爲す。「是の業は諸受より生ずれば、諸受を卽ち樂等の[七〇]五根と名づく、此の五根より貪愛等の一切の煩惱及び身口業を生ずれば、此の業の因緣は還生死を受く、是を垢法となす、能く生死の因緣をして相續せしむればなり。何の因緣を以て能く淨法を生ずるや、必ず信等に因る、信等の[七一]四法の因緣は[七二]慧を成ず、慧に三時あり、謂く未知と欲知と已知となり、修習の所作の辨ずる時は、此の根は皆是れ智慧の差別なればなり。佛は生死往來と還滅垢淨とを以ての故に二十二根を說く。是くの如き等の法は苦諦の所攝なり、能く此を知らば是を善く苦諦を知ると名づく。

集諦とは業及び煩惱なり、業とは[七三]業品の中にて當に說くべし、煩惱とは[七四]煩惱品の中にて當に說くべし。諸業と煩惱とは是れ後身の因緣なるが故に[七五]集諦と名づくるなり。

滅諦とは後の[七六]滅諦聚の中にて當に廣く說くべし。謂く假名心と法心と空心とにして、此の三心を滅するが故に滅諦と名づくるなり。

知根、具知根。

【六二】苦受、樂受、捨受なり。

【六三】貪瞋癡なり。

【六四】四緣。一、因緣、二、次第緣(等無間緣)、三、緣々(所緣緣)、四、增上緣をいふ、因緣(Hetupratyaya)直接の親因を云ふ、次第緣、(Samanantarapratyaya) 心作用が前後相續する上に於て、前念を後念の因とす、其間無間なるが故に等無間緣と云ふ。緣々(Alambanapratyaya) 心作用を刺擊惹起せしむる客觀の諸象をいふ、增上緣(Adhipatipratyaya) 以上の諸因以外の一切の間接因を總稱す。

【六五】かく補ふべし。或は元來かくありしものが、同一字の爲に遂に脫失せるに至れるならむか。

【六六】この十二因緣は三世兩重因果にて說かるゝものなり。無明行は過去の因、識名色六入觸受愛取有は現在のものなるが此中初めの五が現在の果、後の三が二に分類せられて現在の因、生老死が未來の果なり。現在の果は過去の果といふも同じく現在の因は未來の因といふも同じことなり。法聚品第十八と比較すべし。

【六七】六根。

【六八】男根女根。

【六九】命根なり。

【七〇】樂根、苦根、喜根、憂

殘は四生なり。(四)又四食あり、[五五]摶食とは若しくは麁若しくは細にして、飯等を麁と名づけ酥油香氣及び諸飲等は是れを名づけて細と爲す、觸食とは冷と煖との風等なり、[五六]意思食とは或は有る人が思願を以て命を活かすものなり、識食とは中陰と地獄と無色の衆生とのものなり、滅定に入る者は現識なしと雖も識は在ることを得るが故に亦識食と名づく。(五)又[五七]六道あり、上罪は地獄、中罪は畜生、下罪は餓鬼、上善は天道、中善は人道、下善は阿修羅道なり。(六)又六種あり、地と水と火と風と空と識となり。四大が空を圍みて識の中に在ることある*數を名づけて人と爲す。(七)又六觸入あり、眼等の六根が識と和合するを名づけて觸入と爲す。(八)又[五八]七識處あり、是の處の中に於て、顚倒力を以ての故に識が食樂して住す。(九)又世の八法あり、利と衰と稱と譏と毀と譽と苦と樂となり。人にして世間に在らば必ず此の事を受くるが故に世の法と名づく。(十)[五九]九衆生居あり、衆生は皆顚倒力を以ての故に能く此の中に處す。(十一)又諸法に五種の分別あり、[六〇]五陰と十二入と十八界と十二因緣と[六一]二十二根となり。(イ)五陰とは眼の色を色陰と爲し、此れに依つて識を生じ能く前色を取らば是を識陰と名づけ、即時に心に男女怨親等の想を生ぜば名づけて想陰と爲し、若し分別して怨親中の人を知りて[六二]三種の受を生ぜば是を受陰と名づけ、是の三受の中にて[六三]三種の煩惱を生ぜば是を行陰と名づけ、此の事が起るを以て身の因緣を受くるを五受陰と名づく。[六四]四緣を以て識は生ず、所謂、因緣と次第緣と緣々と增上緣となり、業を以て因緣と爲し、識を次第緣と爲す、識が次第して識を生ずるを以ての故なり、色を緣々と爲し、眼を增上緣と爲す、此の中にて識は二の因緣より生ず、所謂眼と色と乃至意と法となり。[六五](ロ)眼と色と乃至意と法とを十二入と名づく。(ハ)是の中に識を加へて十八界と名づく、謂く眼界と色界と眼識界と等なり。是の陰等の法は云何が當に生ずべきや。(ニ)十二の時の中に在るが故に十二因緣と名づく。是の中にて、無明は是れ煩惱、行は名づけて業と爲し、此の二の事に因つて次第に識と名色と六入と觸と受

【五五】麗本に揣、三本宮本は、摶、後者が通常なり。段食をいふ。
【五六】思食をいふ。
【五七】こゝにては六道をいふも行苦品第七十九にては五道をいふ。五道は有部說、六道は犢子部說なりといける。
※ 數とは衆生數といふときの數の意。
【五八】所謂七識住なり、一、身異想異如人一分天、二、身異想一如梵衆天謂劫初起、三、身一想異如極光淨天、四、身一想一如遍淨天、五、空無邊處、六、識無邊處、七、無所有處をいふ。通常は三界に於て識を長養して識自ら處せんことを樂ふ所を差別して七識處を立つとして、一、欲界の人天識住、二、初禪天識住、三、二禪天識住、四、三禪天識住、五、空無邊處天識住、六、識無邊處天識住、七、無所有處天識住の名にて呼ぶ。
【五九】九衆生居、右の七識住に非想非々想處と無想有情とを加へたるをいふ。
【六〇】初三は五蘊十二處十八界にして蘊處界三科なり。
【六一】二十二根、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根に男根、女根、命根、樂根、苦根、喜根、愛根、捨根、信根、勤根、念根、定根、慧根、未知根、已

に隨ふ、謂く無漏見なり。

又此の論を聞かば則ち四の德處を具す、慧德處と實德處と捨德處と寂滅德處となり。法を聞いて慧を生ぜば是れ慧德處なり。是の智慧を以て眞諦空を見れば實德處と名づけ、眞空を見るが故に煩惱を離るゝことを得ば捨德處と名づけ、煩惱が盡くが故に心は寂滅を得ば是れ寂滅德處なり。

又人にして佛の法の正論を聞くことを得ば能く泥洹に隨順する四種の善根を種ふ、所謂、煖法と頂法と忍法と世間第一法となり。無常等の行を以て五陰を觀ずる時に泥洹に順ずる下の軟善根を生じて能く心をして熱せしむ、是れを煖法と名づけ、煖法が增長して中の善根を成ぜば、名づけて頂法と爲し、頂法が增長して上の善根を成ぜば、名づけて忍法と爲し、忍法が增長して上上の善根を成ぜば、世間第一法と名づく。又四種の善根あり、退分と住分と增分と達分となり。諸の禪定を離れたる禮敬誦讀の是等の善根を名づけて退分と爲し、得定等の善根は是れを住分と名づけ、聞思等より生ずる諸の善根は是れを增分と名づけ、無漏の善根は是れを達分と名づく。若し佛の法を聞かば永く退分を離れて三分の善根を得。

四諦品　第十七

若し人佛の法の義を聞くときは則ち能く四諦――苦諦と集諦と滅諦と道諦と――を善知し分別せむ。

苦諦とは謂く(一)三界なり。欲界とは[四九]阿鼻地獄より他化自在に至る。色界とは[五〇]梵世より阿迦尼吒に至る。無色界とは[五一]四無色なり。(二)又[五二]四識處あり、色と受と想と行となり。外道は或は識は[五三]神に依つて住すと謂ふが故に佛は識は此の四處に依ると說く。(三)又四生あり、卵生と、胎生と濕生と、化生となり。諸天と地獄とは一切化生なり、餓鬼に二種あり、胎生と化生となり。[五四]餘

【四九】 阿鼻地獄、八熱地獄の最下にあるものにて所謂無間地獄なり。他化自在は六欲天の最上にある天。

【五〇】 梵世は色界初禪天の三天を總稱せるもの、阿迦尼吒は色界第四禪天の最上の天にて所謂色究竟天又は有頂天といはるゝ天。

【五一】 四無色は空無邊處、識無邊處、無所有處、非想非々想處なり。

【五二】 四識處は四識住をいふ。色識住、受識住、想識住、行識住なり。有漏の自身中の四蘊を體となす。

【五三】 神は我の意。識は神に依つて住すとは識は我の屬性なりといふ意。此說は勝論說にして數論說にはあらず。

【五四】 諸天地獄餓鬼以外即ち畜生人間は卵胎濕化の何れにも通ずるなり。阿修羅を考へ居るや否やは明確ならず。

依ると說かば則ち一切の法を總ぶ、是の故に次に了義經に依つて不了義經に依らずと說くなり。了義經とは卽ち第三の依なり、謂く義に依りて語に依らざるなり。若し此の語の義にして修多羅の中に入り法相に違せず比尼に隨順せば、是れ則ち依止なり。智に依りて識に依らずとは、[四七]識は色等の法を識るに名づく。經の中にて說くが如し、能識の故に識なり、智は實法に通達するに名づくと。經の中にて說くが如し、實の如くに色受想行識を知るが故に名づけて智となすと。實の如くにとは卽ち空なり、是の故に識には所得あり、應に依るべからざるなり。若し智に依らば卽ち是れ空に依るなり、此の上依止に通達せんと欲するが故に當に此の論を習ふべし。

又經の中にて說く、天人の四輪は能く善法を增すと、一には善處に[四八]住す、二には善人に依る、三には自ら正願を發す、四には宿殖善根なり。善處に住すとは謂く中國に處して五難を離るゝなり。善人に依るとは生れて佛世に値ふなり。宿殖善根とは聾瘂等ならざるなり。自ら正願を發すとは是れ正見を謂ふ、正見は必ず佛の法を聞く從り生ずればなり。是の故に應に此の佛の法の正論を習ふべし。

又此の論を誦習せば壽命の中に於て大堅利を得、謂く諦に通達するなり。經の中にて說くが如し、四の堅法あり、說堅と、定堅と、見堅と、解脫堅となり。說堅とは若し一切の有爲は皆無常苦なり、一切は無我なり、寂滅泥洹なりと說かば、是れを說堅と名づけ、是れ聞慧が滿ずるなり。此れに因つて定を得れば思慧が滿ずと名づけ、此の定に因るが故に有爲の法は無常苦なり等と觀じて能く正見を得れば、修慧が滿ずと名づけ、三慧が果を得るを解脫堅と名づく。又若し佛の法の正論を聞かば則ち大利を得、經の中にて、四大利法を說くが如し、善人に親近すと正法を聽聞すと自ら正憶念すと法行に隨順すとなり。若し善人に近づかば則ち正法を聞く、此の正法は善人に在るを以ての故なり。正法を聞き已らば則ち正念を生じ、無常等を以て諸法を正觀す。此の正觀に從つて能く法行

【四七】三本には謂隨順色等法卽ち謂く色等の法に隨順するなりとあり、宮本には謂名識色等法卽ち謂く色等の法を識るに名づくとあり。麗本可なり。

【四八】三本宮本は依とす。恐らく不可。

して不善あることなきものなり。若し人にして能く佛の法の正義を解せば必ず二種に入る、少罪と無罪となり。

又若し人にして佛の法の義を解せば則ち苦を受くるにも量(かぎり)あり、必ず當に涅槃に至ることを得べきを以ての故なり。

四法品　第十六

若し此の論を習はゞ上攝法を得。經の中にて說くが如し、四攝法あり、布施と愛語と利行と同利となり。布施とは衣食等の物にして此の財施を以て衆生を攝取すれば還(かへ)つて敗壞すべし。愛語とは意に隨ふ語言なり、是れも亦咎あり、彼の意を取るが故なり。利行とは他の爲に利を求むるなり、若し因緣あらば他を助けて事を成ずるも、是れも亦壞すべし。同利とは一船を共にすれば憂喜は是れ同じきが如し、是れも或は壞すべし。若し人にして法を以て布施し愛語し利行し同利して衆生を攝取すれば則ち壞すべからず、法を以て攝すとは謂く此の論を習ふことなり。

又此の論を習はゞ上依止を得、[四六]經の中にて、法に依りて人に依らずと說くが如し、人あり、我は佛從(よ)り聞く、若しくは多識の比丘の所從(よ)り聞く、若しくは二三の比丘の所從(よ)り聞く、若しくは衆中にて聞く、若しくは大德長宿の邊從(ほとりよ)り聞くと言ふと雖も此の人を信ずるを以ての故に便ち其の語を受くることをせずして、是の語にして若し修多羅の中に入り法相に違せず比尼に隨順せば、然る後に應に受くべしと。修多羅に入るとは謂く了義修多羅の中に入るなり、了義修多羅とは謂く是の義趣が法相に違せざるなり。法相とは比尼に隨順するなり。比尼は滅に名づく、有爲法は常樂我淨なりと觀ぜば則ち貪等を滅せざるも、若し有爲法は無常苦空無我なりと觀ぜば則ち貪等を滅するが如し。無常等を知るを名づけて法相と爲す、是れ法に依つて人に依らずといふに應ず。若し法に

【四六】此經は六因緣經なること、此中の同文が想陰品第七十七及び一切緣品第一百九十一に引用せらるゝにて知らる。パーリの涅槃經及び長阿含經遊行經の中にもかゝる文存し、之を法鏡と名づく。依法不依人、依了義經分依不了義經、依義不依語、依智不依識を四依法といふ。後文に數々いけるゝものなり。三善品第六にも四の中の二あり。

る中に任せざるなり、諸の外道等は二種の因——共因異因——に於て、若し他にして共因を說かば、答ふるに異因を以てし、他にして異因を說かば、答ふるに共因を以てすれば、是くの如き二種の因の中に任せざるなり。分別の中に任せずとは譬喩の中に任せざるなり。道の中に任せずとは論道の中に任せざるなり。論者にして惡言を出すこと莫く義宗を捨つること勿く但實利のみを說いて方便して勸誨し解悟することを得しめ自心に歡喜せば聖語法と名づくと說くが如し。是の中にて、若し人にして正しく佛の法の論を知らば、乃ち與に言ふべきものにして、餘人には非ざるなり。

「又與に言ふべからず」とは、應に定んで問に答ふべきに、以て不定にして答ふるものと、應に分別して問に答ふべきに、以て分別せずして答ふるものと、應に反質して問に答ふべきに、以て反質せずして答ふるものと、應に置して問に[四五]答ふべき有るに、而も置せずして問に答ふるものとあり。此と相違するを與に言ふべしと名づく。應に定んで問に答ふべしとは唯一因あるのみ、佛世尊の如く、世間に等しきものなし、此くの如きの比なり。應に分別して問に答ふべしとは更に因緣あり、死相續等の如し。應に反質して問に答ふべしとは人の問ふことあらば、還つて問うて答へしむるが如し。應に置して問に答ふべしとは、法に實體なく但假名あるのみなるが若くなるに、若し此の法は一と爲んや異と爲んや、常なりや無常なりや等と問はば、是れには答へず、義は唯佛の法を解する者のみ乃ち能く知る、是の故に應に此の佛の法の論を習ふべし。

又三種の人あり、正定と邪定と不定となり。正定とは必ず泥洹に入るもの、邪定とは必ず泥洹に入らざるもの、餘は不定と名づくるものなり。若し人にして能く佛の法の義を解せば必ず正定に入る。

又四種の人あり、純罪と多罪と少罪と無罪となり。純罪とは人の但不信あるのみにして一の善法もなき若きもの、多罪とは多惡少善のもの、少罪とは多善少惡のもの、無罪とは但善法あるのみに

【四五】麗本には有應置答問而不置答とあり。有の字不要ならむ。三本宮本にはなし。以上の四種を四答といふ。

又此の人を名づけて功徳を修す者と爲す。若し人にして身の[四一]戒と心の慧とを修せずむば、少しの惡業を作すも亦惡道に墮せんも、若し人にして身の戒と心の慧とを修集せば、多く惡を爲すと雖も惡道に墮せず。身を修すとは聞慧を以て身受心法を修するなり、身を修するを以ての故に漸次に能く戒定慧品を生じ能く諸業を滅す、諸業を滅するが故に生死も亦滅するなり。又經の中にて四種の人ありと說く、結使が利にして而も深からざるあり、深くして而も利ならざるあり、亦は深く亦は利なるあり、深からず利ならざるありと。初めを、增上結ありて時々に而も來ると名づけ、次をば、若しくは軟中結の常に來つて心に在りと名づけ、三をば、若しくは增上結の常に來つて心に在りと名づけ、四をば、若しくは軟中結の時あつて而も來ると名づく。若し人にして佛の法の正論を聞くことを得ば、二種の結の深くして而も利なるものを斷ず。

又佛の法の[四二]義を解せば、既に自ら惱まず亦他をも惱まさざるに、外道は戒を持つも即ち自ら身を惱し、若し邪見に墮せば即ち他人を惱ます、罪福の業と果報となしと謂ふが故なり。若し布施を行ずるも亦是れ自ら惱まし亦他をも惱ますと名づく、天[四三]祠の中にて多く牛羊を殺すが如くなればなり。若し佛の法の義を解せば、但利を得るが爲に自ら身を惱まさざるのみならずして亦他をも惱まさず、禪定を得て慈悲を行ずる者の如し。是の故に應に此の佛の法の論を習ふべし。

又此の論を習ふ者を與に言ふべしと名づく、正義を解するが故なり。經の中にて說くが如し、若し論議する時は應當に是は與に言ふべし是は與に言ふべからずと分別すべし。若し人にして智者の法の中と處非處の中と若しくは分別の中と及び道の中とに任せずむば、是の人は皆與に言ふべからずと名づく、此と相違するを與に言ふべしと名づくと。智者の法の中に任せずとは論者は正智慧を以て善く義趣を解し、然る後に執用するも、此の人は知らざれば是の故に執せず。[四四]尼延子等の自ら我が師は是れ信ずべき人なりと言うて但其の語にのみ隨ふが如し。處非處に任せずとは因を用う

【四一】三不護品第五の註及び三報業品第一百四、六業品第一百一十を參照すべし。

【四二】三本宮本には正義とあるも、正の字は必要なるにはあらず。下も同じ。

【四三】婆羅門の祭祀なり。

【四四】尼延子、通常尼乾子となす。尼乾子は元義は尼乾陀(Nigaṇṭha)といふべきを、何時よりか尼乾子とし、以て尼乾陀派に從ふ人々を指すに至れり。之を尼延子といへるなり。尼乾陀は現今の耆那教(Jaina)となれる以前の宗派なれど、佛教にては多くは耆那教を其まゝ指す。

等に大果を得しむるが故に亦利他とも名づくと雖も此の中にての佛意にては、此の利を說かず。若し人にして但能く他の爲にのみ法を說かば是を利他と名づく、是の人は自ら法に隨つて行ぜずと雖も、他の爲に說くが故に自も亦利を得、經の中にて、人の爲に法を說かば[三六]五種の利を得と說くが如し。此の中にての佛意にては、亦[三七]此をも說かず。此の中にては但最第一の利は謂く說の如くに行じて諸漏を盡すことを得るなりと說く。是の故に法を說き能く他人を利し、以て兼ね利するが故に人中の最と名づく、猶衆味の中の醍醐の如し。復次に是の人は今は明の中に處し、後にも亦明に入るも、世間の衆生は多くは冥より冥に入り明より冥に入る。若し少しく佛の法を行ぜば、是の人も亦能く冥より明に入り明より明に入る、所以は何、布施等を行ずるも、佛の法を聽くが如き利を得ること能はざるに、若し少しにても佛語を聽かば能く達慧を得、諸の衰惱を破し無量の利を獲ればなり。

[三八]經の中にて說くが如し、四種の人あり、冥より冥に入ると、冥より明に入ると、明より明に入ると、明より冥に入るとなりと。又四種の人あり、流に順ずる者あり、流に逆ふ者あり、中に住する者あり、度を得る者あり。若し人にして一心に佛の法を聽かば是の人は卽ち能く[三九]五蓋を除滅し[四〇]七覺意を修す、是の故に此の人は生死の流を截てば、流に逆ふ者と名づけ、亦名づけて住とも爲し、亦度を得とも名づく。復四種の人あり、常に沒する者あり、暫く出で〻還沒する者あり、出でて觀ずる者あり、度を得る者あり、若し泥洹に隨順する信等の功德を生ずること能はずむば、是れを常に沒すと名づけ、或は世間の信等の功德を生ずるも堅固なること能はずして、還復退失せば、是を暫く出でて還沒すと名づけ、泥洹に隨順する信等の功德を起して善惡を分別せば、是を出でて觀ずと名づけ、具足して、泥洹に隨順する信等の功德を修習せば、是を度を得と名づく。若し人にして能く佛の法の正義を解せば、終に常に沒せず、設ひ復暫く退すとも亦永く失せず。

【三六】右にいふ四種と次の最第一とをいふならむ。

【三七】三本宮本には此の下に利の字あり。意味としては解し易きも、利の字はなき方可ならむ。

【三八】十二部經品第八に同文あり。

【三九】五蓋は貪欲、瞋恚、睡眠、掉悔、疑法の五つの煩惱をいふ、蓋は、心性を蓋覆して善法を生ぜざらしむるより名を得。煩惱の異名。

【四〇】七覺意、通常は七覺支といふ。修道に於て思惑を斷じて聖道を生ぜんために心に於ける定と慧とを均等に發展せしむる修行法を七種に分類せしもの、一、擇法、二、精進、三、喜、四、輕安、五、念、六、定、七、行捨なり。

應に此の論を習ふべし、所以は何、此の論を學習すれば智人法を得ればなり。經の中にて說くが如し、世に二人あり、一には謂く智人、一には謂く愚人なり。若し善く陰界諸入十二因緣因果等の法を分別せずんば是れを愚人と名づけ、若し善く陰界入等を分別せば是れを智人と名づくと。今此の論の中にては正しく分別して陰界入等を解す、故に此論に因りて智人法を得、是れを以て應に學すべし。

又此の論を習ふが故に凡夫と名づけず。又二人あり、一には是れ凡夫、一には非凡夫なり、鬚髮剃り法衣を被服し佛の威儀を受くと雖も猶佛の法に遠し、信等の根を成就せざるを以ての故なり、若し能く信等の根を成就せば、家に處居すと雖も凡夫と名づけずと說くが如し。經の中にて說くが如し、四種の人あり、僧の威儀に入るも僧數に入らざるあり、僧數にあるも僧の威儀に非ざるあり、僧の威儀にも入り亦僧數にも入るあり、僧の威儀にも非ず亦僧數にも非ざるあり、初めを出家の凡夫と名づけ、次を在家の聖人と名づけ、三を出家の聖人と名づけ、四を在家の凡夫と名づくと。此れを以ての故に知る、信等の根を離るれば則ち僧數に入らず、是の故に當に信等の諸根の爲に勤行精進すべく、信等を得んと欲せば、當に佛の法に於いて聽受し誦讀し說の如くに修行すべし、是の故に應に此の佛の法の論を習ふべし。

又此の論從りは二種の利を得、自利と利他となり。經の中にて說くが如し、四種の人あり、能く自利するも利他すること能はざるあり、能く利他するも自利すること能はざるあり、能く倶に利するあり、倶に利せざるありと。若し能く自ら戒等の功德を具するも、他をして戒等の中に住せしむること能はずんば、是を自利と名づく。是くの如きの四種は若し人にして能く自利して他をして施

ち得ずと雖も但近きを以ての故に亦名づけて得とも爲すなり。

又同相論門あり。[29] 一事を說かば餘の同相の事をも皆已に說きたりと名づくるが如し。又佛が心を輕躁と爲すと說かば、則ち已に餘の心數法をも說きたりと爲すが如し。

又[30]從多論門あり。佛の言ふが如し、若し人にして二見の生滅の相を知らずむば、皆有欲と名づけ、若し能く知らば皆離を得と名づくと。須陀洹の人も亦二見の生滅の相を知るも而も貪欲あり、但知る者は多くは是れ[31]離欲の人なるを以てなり。

又[32]因中說果論門あり、[33]食を施さば則ち五事――命と色と力と樂と辯才と――を與ふと說くが如きは而も實には命等の五事を與ふるにあらずして、但其の因を與ふるのみなり。又錢を食すと說くが如きは、錢は食すべからざるも、錢に因りて食を得るが故に錢を食すと名づくるなり。又經に女人を垢と爲すと說くが如きも實には垢には非ずして、是れ貪著等の煩惱の垢の因なるが故に名づけて垢と爲すなり。又五塵を欲と名づくと說くも實には欲に非ずして、能く欲を生ずるが故に之を名づけて欲と爲すなり。又樂の因緣を名づけて樂と爲すと說くは、法を以て集まる人を說いて是の人を樂と爲すが如く、又苦の因緣を說いて名づけて苦と爲すは愚と同止するを說いて是れを名づけて苦を爲すが如く、火は苦なり、火は樂なりと說くが如く、又命の因を說いて命と爲す、[34]偈の中にて說くが如し。

資生の具は　皆是れ外命なり、
人の物を奪ふを　名づけて命を奪ふと名づくるが如し、と。

又漏の因を說いて漏と爲す、[35]七漏經に、此の中の二は是れ實の漏なるも、其の餘の五事は是れ漏の因緣なりと說くが如し。又果中に因を說くことあり、佛の我は應に宿業を受くべしと言ふが如きは謂く業の果を受くなり。是くの如き等の衆多の論門を盡く應當に知るべし。

【二九】第九、同相論門。

【三〇】第十、從多論門。

【三一】離欲の人なるを以て、須陀洹人を離欲の中に入れて、しか名づくるなりを補うて解すべし。

【三二】第十一、因中說果論門。と果中說因論門。

【三三】以下と同一事が智相品第一百八十九にも出づ。

【三四】此偈の後半は智相品第一百八十九に引用せらる。

【三五】此經は智相品第一百八十九にも引用せらる。そこには用斷等漏因名漏とあり。ここにいふ五事の一ならむ。福田品第十一參照。

ずるに因りて而も眼識を生ずと說くは是れを名づけて通となす。若し爾らば、應に一切の色を緣じて皆眼識を生ずべきも、而も然らず。又經の中にて、耳は聲を緣ずるに因りて耳識(等)[二三]を生ずるも眼識を生ぜずと說くは是れを名づけて塞と爲す。又言ふ所の通塞には皆道理ありて法相を壞せず。

又二種の論門あり、[二四]一には決定、二には不決定なり。決定とは佛を一切智人となし、佛の所說を眞妙法と名づけ、佛の弟子衆を正行者と名づくと說くが如し。又一切の有爲は皆悉く無常なり苦なり空なり、無我なり寂滅涅槃なりと言ふ、是くの如き等の門は是れを決定と名づく、不決定とは若し死する者は皆生ずと言はゞ是れ則ち不定なり、愛有らば則ち生ぜむも、愛が盡くときは則ち滅すればなり。又經の中にて、若し心に定を得ば皆實智を生ずと說くも是れも亦不定なり、聖人にして定を得ば能く實智を生ずるも、外道にして定を得るも則ち生ずること能はざればなり。又經にて、求むる所は皆得と說くが如きも、是れも亦不定なり、或は得或は得されざればなり。若し六入は必ず能く觸を生ずと言はゞ是れも亦不定なり、或は能く生ずることもあり、或は生ぜざることもあればなり。是くの如き等を不定門と名づく。

又[二五]爲不爲論門あり、奇草の芳花は風に逆うて薰ぜずと說くも、又[二六]拘毘羅花は能く風に逆うて聞ゆと說くが如きは人花たるが故に風に逆ふて[二七]聞えずと說き、天花たるが故に風に逆ふて薰ずと說くなり。又三受は苦受と樂受と不苦不樂受となりと說くに、又餘經にては所有の諸受は皆名づけて苦と爲すとも說く、三種の苦――苦々と壞苦と行苦と――有れば、此れが爲の故に所有の諸受は一切皆苦なりと說くなり。又說く、是の苦の三種に新と古と中とあり、新受を樂と名づけ、久しく厭へば則ち苦なるも、中を名づけて捨と爲すと。又說く、道を得たるが爲の故に名づけて道人と爲し、未だ道を得ざる者も亦道人と名づく。是くの如き等の相有りて因りて名を得るなり。

又近論門有り。[二八]佛の、比丘よ、汝にして戲論を斷ぜば則ち泥洹を得と語りたまふが如き、未だ便

【二三】衍字恐らく次の眼識の下に入るものならむ。
【二四】第六、決定門と不決定門。
【二五】第七、爲不爲論門。
【二六】拘毘羅 Kovidāra か。波利質多羅 Pāricitra と並べ擧げらるゝこと多く、兩者合して樹花の名なりともいふ。此樹花は忉利天にありとせらる。
【二七】三本宮本は薰に作る。此方解し易し。
【二八】第八、近論門。

俗に隨つて稱して尊貴となす。又一の器が國に隨つて名を異にするが如き、佛も亦名に隨ひたまふ。又佛が是れ吾の最後に[18]毘耶離を觀るなりと言へるが如し。諸の是くの如き等の世の語言に隨ふを世俗門と名づく。賢聖門とは經の中にて說くが如し、因緣にて生ずる識と眼等の諸根とは猶大海の如しと。又經にて說くが如し、但陰界入の衆緣が和合するのみにして作者あることなく亦受者もなしと。又一切は苦なりと說く。經の中にて、世間が樂といふを聖人は苦と說き、聖人が苦と說くを世間は樂と言ふと說くが如し。又諸の說く所の空無相等を賢聖門と名づく。

又三時論門あり、[19]若し此の事の中に於て名づけて色と爲すと說かば、若しくは色の曾有なるも當有なるも今有なるも皆名づけて色となし、識も亦是くの如く、若しくは識の曾知なるも當知なるも今知なるも皆名づけて識と爲す。是くの如き等を三時論門と名づく。

又[20]若有論門あり。若し觸有らば必ず六入を因となすも、一切の六入を盡く觸の因と爲すには非ず。若し愛有らば必ず受に因るも、一切の受を盡く愛の因と爲すには非ず。或は具足因を說かば、觸の因は受に緣たるが如し。或は不具足因を說かば、受の因は愛に緣たるも、無明を說かざるが如し。或は復異說す。經の中にて、心にして歡喜せば身は[21]猗を得と說くも、三禪には喜無きも亦身の猗あるが如し。又猗者は樂を受くと說くも四禪には猗ありて而も樂を受くことなし、是を異說すと名づく。

又通塞二種の論門あり、[22]經の中にて、若し人にして發足して塔を供養することを爲さば、中間にして命終するも、皆天上に生ずと說くが如きは是れを名づけて通となし、又餘の經にて、逆罪を作る者は天に生ずることを得ずと說くは是れを名づけて塞と爲し、又經の中にて、諸欲を受くる者は惡として造らざることなしと說くは是れを名づけて通となし、須陀洹の人は諸欲を受くと雖も、亦惡道に墮する業を起すこと能はずといふは、是れを名づけて塞となし、又經の中にて、眼(まなこ)は色を緣

【一八】毘耶離(Vesali, Vaiśāli) 佛陀當時の大都市の一。パーリ涅槃經に、佛陀は入滅前此の都市の近傍の丘陵上より此都市を見て、かく言ひたまへりとあり。長阿含遊行經參照。

【一九】第三、三時論門。

【二〇】第四、若有論門。

【二一】猗は輕安なり。

【二二】第五、通門と塞門。

受持すべしと。是の故に修多羅の中に於て義を取り論を立てゝ別して異部と爲す。故に應に論を造るべし。又佛は種々に衆生を度すべきが爲に世間[一二]等の諸の論議門を說きたり、[一三]莎提等の如きは解すること能はざるが故に其の心が迷亂して、莎提等の比丘は生死往來は常に是れ一識なりと說けるなり。佛の是くの如き等の種々の說法にして若し論議なくんば云何が解すべきや。是等の緣を以ての故に應に論を造るべし。

論門品　第十四

論に二門あり、[一四]一には世界門、二には第一義門なり。世界門を以ての故に有我と說く。經の中にて說くが如し、我は常に自ら防獲し、善を爲さば自ら善を得、惡を爲さば自ら惡を得と。又經の中にて說く、心識は是れ常なりと。又言く、長夜に心を修すれば死して上生することを得と。又說く、作者が業を起し作者が自ら受くと。又說く、某の衆生は某の處に生ず等と。是くの如きは皆世界門を以て說くなり。第一義門とは、皆、空無なりと說くものなり。[一五]經の中にて說くが如し、此の五陰の中には我我所なし、心は風焰の如く念々に生滅し、諸業及び業の果報作者受者有りと雖も皆不可得なればなり。佛は五陰の相續する因緣を以て生死ありと說くが如しと。

又二種の論門あり、[一六]一には世俗門、二には賢聖門なり。世俗門とは世俗を以ての故に、說いて月が盡くと言ふも、月は實には盡きず。[一七]摩伽羅の母が兒婦を說いて母と爲すも、其實は母には非ざるが如し。經の中にて、舌は能く味を知ると說くも、舌識を以て味を知るものにして、舌は知ること能はざるが如し、槊が人を刺さば人は苦を得と言ふも、是れ識が苦を知るものにして、人が苦を受くには非ざるが如し。貧賤なる人を字けて富貴となさば、佛も亦人に隨つて名づけて富貴と爲すが如し。又佛は外道を呼んで婆羅門と名づけ、亦沙門とも名づけ、又刹利婆羅門等の如きを佛も亦

【一二】次の論門品第十四を見るべし。

【一三】莎提(Sāti-kaivartaputra)「識が輪廻す」輪廻の主體は識なりとの見解を立てたれば、佛陀は之を邪見なりとして訓誡したり。中阿含の中に此を說きたる經存す。

【一四】第一世界門と第一義門。

【一五】此論にて說く空は大乘のそれと異ること此所の文にて明なりといける。

【一六】第二、世俗門と賢聖門。

【一七】摩伽羅（Bakula, Skt. Dvākula）か。佛成道以前に憍賞彌の長者の家に生れ或る日、閻牟那河(Yamunā)に水浴中、一大魚の呑む所となり、その魚ベナレスの長者の妻に買はれ不思議にも救はる、依て兩婦人各々自分の子なるを主張し、國王裁いて兩家共有の子たらしむ。と。

ずることを得ればなり、一には他より聞くと、二には自ら正しく念ずとなり。佛は阿難に語る、但善知識のみなるときは、則ち具足して道を得、己を利すと爲すと。又佛の言ふが如し、若し我にして人の爲に說法する所あらんに、是の人は我意を得ざるが故に諍訟を生ずと。今諸の論師は各所執ありて、或は[八]過去未來は法ありと言ひ、或は有は無しと言ふ。當に知るべし、是くの如きの諸論師等は如來の宜しきに隨うて說く所を解せざるが故に諍訟を生ずるなり。又阿難が三摩提の爲に、諸の所受を說いて皆名づけて苦と爲すが如し、爾の時に佛は諸の比丘に語つて言く、汝は阿難が是の義を髣像するを觀るやと。又諸の論者は謂く、阿羅漢は應に先に供養を受くべしと。比丘は知らざれば、便ち往いて佛に問ふ、佛は言く、我法の中に於ては前に出家せる者は應に先に供養を受くべしと。飮食の麁事すら猶尙知ること能はず、況んや如來の意の微妙の法を說きたまふをや。此等を以ての故に應に論を造るべからず。

答曰 然らず、所以は何、因緣あるが故に能く他の意を知ればなり。偈の中にて說くが如し、

能く說を知る者は　意の趣向する所をも
亦知る、說者は　何れの事を說かむと欲するやを、と。

二種の道あり、聖道と世間道となり、後に[九]當に廣く說くべし。此の道を以ての故に、說者の意を知るなり。又異論經の中にて、佛も亦盡く聽したまふ。又迦旃延等の大論議師は、佛意を得るが故に佛は皆善と讃じたまふ。又[一〇]優陀夷比丘[一一]曇摩塵那比丘尼等が佛の法の論を造るも、佛は聞いて即ち聽したまふ。又佛の法は深妙なれば解せる者は論を造るも、解せざれば則ち止む。是くの如くにして、其の餘の、佛は諸法の根本たり等の問にも悉く以て通じて答へたり。又應に論を造るべし、所以は何、若し經に論を造らば義は則ち解し易く、法は則ち久住すればなり。又佛は論を造ることを聽したまへり。經の中にて說くが如し、佛は比丘に語りたまはく、造る所の論に隨つて應に能く

【八】 次下の十論を參照すべし。

【九】 特に此二道を說く品は存せざるも、世間と出世間とを對せしめて說く所は存す。

【一〇】 優陀夷比丘(Udāyi)迦維羅城の婆羅門にて、佛陀歸城の時、歸佛出家し、悟を得、佛陀を龍象に比して讃偈を作ると。

【一一】 曇摩塵那比丘尼、(Dhammadinnā)王舍城のある家の娘にして毘舍佉(Visākha)の妻となり、毘舍佉が優婆塞となるに及び自ら出家を乞ふ、毘舍佉は依つて黄金の轎にて僧團に送り出家せしむ、悟りて後鄕里に歸り毘舍佉の來訪を受けて一一その間に應じ深き佛敎の理解を示す。兩人の問答より成る經中阿含の中に存す。四無礙品第一百九十五參照。

[一]卷の第二

立論品　第十三

今佛の法を論じて世間を饒益せんと欲す。佛は大悲心を以て、廣く一切世間を利益せんが爲の故に是の法を說くに齊限する所なし。或は有る人は但[二]婆羅門の爲のみの故に解脫經を說くが如きも、佛の所說の經は皆[三]四品の衆生乃至畜生を度脫せむが爲にして亦限礙せず。

問曰　應に論を造つて佛の語を論ずべからず所以は何、若し佛にして自ら論ぜば名づけて論と爲すべきも、若し佛にして論ぜずむば、餘は論ずること能はざればなり。所以は何、一切智人の意趣は解し難ければなり。何の所爲の故に而も是の事を說くかを知らず、若し佛意を得ずして妄に說く所あらば則ち自ら傷ぶることをなす。經の中にて說くが如し、二人は佛を謗る、一は信ぜずして憎惡するを以ての故に謗り、二は信ずることありと雖も、佛の所說に於て諦(あきらか)に受くこと能はざれば、又佛を謗ると名づくと。設ひ眞智あるすら、佛意を知らずんば、尙佛の言ふ所を論ずることを得ること能はず、況んや未だ得ざる者にして而も論を造つて佛意を論ずることを欲せむをや。所以は何、異論經の中の如し、佛は[四]獨の爲の故に是くの如き事を說くも、諸の比丘等は種々に異論して皆佛意を得ずと。」又長老[五]摩訶迦旃延の諸の比丘に語るが如し、大樹を伐り、根莖を棄捨して但枝葉を取るのみなるが如し、汝等も亦爾く、如來を捨離して而も我に問ふやと。若し摩訶迦旃延にして、論議の中に於て自ら枝葉に喩ふるに、何に況んや餘人にして能く佛語を解せんや。」又佛は舍利弗に問ふ、云何が學人なる、云何が[六]數法人なると、三たび問ひたまふも答へず。」又佛は一切諸法の根本たり、唯佛のみ能く解し、餘人は能はず。」又阿難が佛に白さく善知識に遇へば、得道の中に於ては、則ち半利と爲すと、[七]亦道理あり、所以は何、二の因緣を以て正見は生

【一】三本宮本はこゝにては卷を分つことをせず。以下有我無我品第五十五までは論を起す大意を叙べて發起偈を釋す。
【二】何れの經と定まりて指すにはあらざるべし。故に婆羅門の爲に解脫を說ける經といふ意ならむ。
【三】下の例よりいへば、婆羅門、刹帝利、毘舍、首陀羅の四姓をいふ。
【四】三本は解に作る。此方了解し易きが如し。
【五】十二部經品第八に出でたり。此摩訶迦旃延の次の語は阿含中にて分別と稱せらるゝ經中に數々存す。
【六】數法人とは法數名目の研究者を指す。支那にては數論師は毘曇有部の研究者にして、成實論研究者を成論師といふと並用せらる。從つて毘曇有部の說は數論成實論のは成論ともいふ。
【七】五定具品第一百八十一に同一文の引用あり。

愚痴の人を遠離し、　　有智者に親近し、
敬すべき者を則ち敬せば、　　是を最吉祥と爲す。
是の故に應に三寶を禮すべし、最吉祥なるを以てなり。故に我は經の初めに說くなり。

とあると、(五一八)清淨の心は多くして四種の物を施すも亦爾るなるとにして、僧中に於て施さば必ず當に若しくは二若しくは三を成就すべし。一切の善人は皆衆僧に因りて功德を增益し然る後に意に隨つて菩提に回向す。又所施の僧も此の物も皆當に解脫の果を得、生死の中に於て終に盡くこと能はざるべし。又施す所の衆僧は皆爲に嚴心す。又若し一人に於て信を生ぜば淨心は或時は壞すべきも、衆僧の中に於て信心が淸淨ならば終に壞敗せず。又一人に於て愛敬心を生ぜば或は廣きこと能はさらむも、衆僧の中に於て信敬心を生ぜば、緣が無量なるが故に心は則ち廣大なり。又施して一切の爲にし僧數の人に入らば心は大なるを以ての故に果報も亦大なり。是等の緣を以て諸の賢聖の人を名づけて福田と爲す。是の故に應に禮すべし。

[一六一]吉祥品　第十二

是の三寶は功德が具足せるを以ての故に經の初めに說く。又此の三寶は一切世間に於て第一吉祥なり、吉祥偈にて說くが如し、

佛と法と及び衆僧と　是れを最吉祥と名づく、と。

復諸經有つて吉祥を以て初學の爲にせば壽を增すこと萬歲にして名聞流布す。是れ經を作る者の意なり、[一六二]阿啊等の字の貫いて經初に在るが如きは此吉相なるに非ず、後に當に廣く說くべし。若し第一最吉祥なるを求むれば三寶是れなり、應當に歸依すべし。吉祥偈にて說くが如し。

諸天世人の中、　無上尊の導師なる
佛を大覺者となす。　是を最吉祥と名づく。
若し人にして佛所に於て　信心を安じて動ぜず、
淸淨戒を奉持せば、　是れを最吉祥と名づく。

【一六一】三本宮本はこゝより第二卷とす。此品は、以上にて三寶を釋し終りたれば、それを讚めて敬禮すべきことを述ぶる結論なり。

【一六二】麗本は阿陀とす。阿啊は a.ā なるべし。阿陀は恐らく不可。阿啊が字母の最初にあるが故にかくいふ。

問曰　何等を以ての故に此の諸の賢聖を名づけて福田となすや。

答曰　(一)貪恚等の諸の煩惱を斷じ盡すが故に福田と名づくるなり。稊稗にして去らずむば善穀の苗を害すと說くが如し、是の故に無欲の人に施さば報利を得ること大なり。(二)又是の人は心が空なるが故に福田と名づく。所以は何、相を空ずるを以ての故に諸の貪恚等の煩惱は起らず惡業を生ぜざればなり。(三)又諸の賢聖は不作法を得るが故に福田と名づく。又是の人等の得る所の禪定は皆悉く淸淨にして永く大小の諸の煩惱を離るゝが故なり。(四)又憂樂を棄捨するが故に、福田と名づく。(五)又能く[一五三]五種の心傳を斷除して心は淸淨なるを得るが故に福田と名づく。又[一五四]八種の功德田を成就するが故に、又[一五五]七定具を以て善く心を護するが故に、又能く盡く[一五六]七種の漏を滅するが故に諸の漏失なければなり。(六)又戒等の[一五七]七淨法を具足するが故に、又能く少欲知足等の[一五八]八功德を成就するが故に、又能く彼岸に度り及び勤めて度ることを求むるが故に、福田と名づく。(七)又經の中に說く、但能く發心して善法を行ぜんと欲するすら尙利益多し、況んや修行せんをや、と。是の諸の賢聖は常に善法を行ず、故に福田と名づく。(八)又經[一五九]の中にて說く誰かの施主家にて持戒の比丘有りて供養を受け已つて無量定に入らば、是の施主家は無量の福を得、衆中に無量三昧無相三昧無動三昧に入るものあらば能く施主をして無量の報を得しむ、と。故に福田と名づく。(九)又經の中にて說く、三事が和合するが故に大福を得、一には曰く有信、二には曰く施物、三には曰く福田なり、と。衆僧の中に於ては功德人多く、功德の人の中にては信心は生じ易し。又衆僧に施さば、[一六〇]九の因緣を具するが故に大果を獲。又衆僧に施せば受者が淨なるを以ての故に施も必ず淸淨なり。又施に八種あり、(一)淸淨の心は少なく施物も亦少なくして破戒の人に施すことあると、(二)淸淨の心は少なく所施の物は多くして破戒の人に施すことあると、(三)淸淨の心は少なく施物も亦少なくして持戒の人に施すことあると、(四)淸淨の心は少なく施す所の物は多くして持戒の人に施すこ

【一五三】貪恚慢嫉慳をいふ。
【一五四】佛田、聖八田、僧田、和尙田、阿闍梨田、父田、母田、病田をいふ。
【一五五】初五定具品第一百八十一にいふ十一法の初七ならむ。即ち淸淨持戒、得善知識、守護根門、飮食知量、初夜後夜損於睡眠、具足善覺なり。
【一五六】七流ならむ。見諦所滅流、修道所滅流、遠離所滅流、數事所滅流、捨所滅流、護所滅流、制伏所滅流なり。
【一五七】七淨法は戒、心、見、度疑、道非道知見、行知見、行斷知見の淨なり。法聚品第十八參照。
【一五八】八大八覺なり。
【一五九】此經の同一文が三障品第一百六、滅盡定品第一百七十一に引用せらる。
【一六〇】九因緣とは下にいふ所を指していふか。

して思惟道にあらば信解脫と名づけ、利ならば見得と名づく。若し阿那含にして八解脫を具せば是れを身證と名づく。是等を皆行阿羅漢者と名づく。結を斷ずること同じきを以ての故なり。

若し盡く一切の煩惱を斷滅せば阿羅漢と名づく。阿羅漢に九種あり、[一五〇]退相と守相と死相と[一五一]可進相と住相と不壞相と慧解脫相と俱解脫相と不退相となり。是の諸の阿羅漢は信等の根を得るを以ての故に差別あるなり。最も鈍根なる者は是を退相と名づけ三昧を退失す、三昧を退するが故に無漏の智慧は現前すること能はず。守相とは、根は小しく勝るが故に若し三昧を護るときは則ち退失せざるも、護らざるときは則ち退す、前の退相の者は護ると雖も亦退す。死相とは根は又小しく勝るも深く諸有を厭ふ、是の人は三昧を得ること能はざるが故に、無漏の智慧は現前するを得ること難し。設ひ得るも喜んで失するが故に死を求む。住相とは若し三昧を得るも進まず退かざれば、是れを住相と名づく。前の三種は退分三昧にあるも、住相の者は住分三昧にあるなり。可進相とは、若し三昧を得れば轉深く增益すれば、是の人は增分三昧に住在するなり。不壞相とは三昧を得已れば、種々の因緣も敗壞すること能はざれば、是の人は達分三昧に住在し、慧が最も利なるが故に、善く三昧の入住起の相を取る、故に壞すべからず、滅盡定に因るが故なり。二人あり、此の定を得ざるを慧解脫と名づけ、此の定を得る者を俱解脫と名づく。不退相とは所得の功德は盡く退失なきなり、經の中にて說くが如し、佛は比丘に語る、若し我弟子にして床を以て我を輿かんも、我の先の所得は盡く退失なし、と。

是くの如きの九種を無學人と名づく。先の十八學人と及び九無學とは是れ[一五二]二十七人にして、名づけて一切世間の福田と爲し、僧中に具足す。是の故に應に禮すべし。

福田品　第十一

見到なり。

【一五〇】此等は所謂九無學にして、順次に俱舍論にいふ退法、思法、護法、安住法、堪達法、不動法、慧解脫、俱解脫、不退法に相當す。不動法は之を區別して鈍根なるを不動法、本住なるを不退法となす。こゝには不退法を不壞相とし、不動法を不退相となすなり。

【一五一】三本宮本は住相と可進相となす。次の解釋より見れば此順序の方が可なり。

【一五二】
一、隨信行
二、隨法行
三、隨無相行　} 者　行須陀洹
四、須陀洹果
五、行斯陀含者
六、斯陀含果
七、行阿那含者
八、中陰滅者
九、生有滅者
十、不行滅者
十一、行滅者
十二、上行至有頂滅者
十三、至無色處者
十四、轉世者
十五、現滅者　} 阿那含
十六、信解
十七、見得　} 行阿羅漢者
十八、身證

以上が十八學人なり。之に九種の阿羅漢を加ふれば、二十七賢聖なり。

中に住すれば斯陀含と名づくるなり。是の斯陀含は或は今世に涅槃に入る。

行阿那含者とは若し第七第八品の結を斷ずれば是の人を皆行阿那含[140]者と名づくるなり。第八品を斷ずれば是を[141]一種と名づく。行阿那含者にして、或は今世に卽ち涅槃に入るあらば、盡く欲界九品の結を離るゝが故に阿那含と名づく。此の阿那含は差別せば八種なり、所謂(一)中陰滅の者[142]あり、(二)生有滅の者有り、(三)不行滅の者有り、(四)行滅の者有り、(五)上行して[143]阿迦尼吒に至つて滅する者有り、(六)無色處に至る者有り、(七)轉世の者有り、(八)現滅の者有り、上中下の根に隨ふが故に差別有るなり。(一)中陰滅の者にも亦三種あり、上中下の根なり。阿那含にして深く世間を厭ふも少しの障礙あつて現滅すること得ざるあらば、是の人は中陰の中に於て滅するなり。(二)生も亦三種なり、謂く、生滅の者と行滅の者と不行滅の者となり。生滅の者は生時に深く有を厭離して卽ち涅槃に入る、是れを生滅と名づく、根が利なるを以ての故なり。或は生じ已つて諸の無漏道が自然に在前し勤行を加へずして而も涅槃に入るあり、是れ不行滅なり、根が中なるを以ての故なり。或は生じ已つて深く身を受くることを畏れ、勤めて道を修行して乃ち涅槃に入るあり、是を行滅と名づく、根が鈍なるを以ての故なり。(五)上行して滅する者には亦三種あり、若し一處に終りてより一處に至りて生じて便ち涅槃に入らば是を利根と名づけ、二三處に生ぜば是を中根と名づけ、一切處にて終りて一切處に生ぜば是を鈍根と名づけ、初禪より[144]廣果天に至らば是を決定と名づけ、廣果に到りて已つて若し[145]淨居に生ぜば是の人は復無色處に到らず、[146]樂慧なるを以ての故なり。若し無色處に入らば是の人は終に淨居天には生ぜず、[147]樂定なるを以ての故なり。[148]轉世の者とは若し先世に須陀洹果、斯陀含果を得、後に身を轉じて阿那含果を得ば是の人は色無色界に入らざるなり。現滅の者とは第一の利根なり、卽ち現身に於て涅槃に入ることを得るなり。復二人あり、一を[149]信解脫と名づけ、二を見得と名づく、是の二人は根が差別するが故なり。若し鈍根の學人に

【一四〇】麗本に者なきも、三本宮本にはあり。故に之に從ふ。

【一四一】一種子といふ。新譯の一間なり。

【一四二】中陰、滅者は中般、生有滅者は生般、不行滅者は無行般、行滅者は有行般、上行至阿迦尼吒滅者は上流般、至無色處者は無色般、(轉生者は不明確)現滅者は現般なり。

【一四三】阿迦尼吒(Akanistha)譯して色究竟といふ。之は色界の最上天にして形體を有する天處の究竟なれば色究竟天とも有頂天とも名づく、之を超ゆれば無色界の天、唯だ心識のみありて形體なし。

【一四四】廣果天は色界第四禪天の八天中、第三天の名。第四禪天に於て凡夫の生れ得べき天處の最勝處なり。決定は不明。

【一四五】淨居天、色界第四禪天の中に於て不還果を證せる聖者の生ずべき五地(無煩天、無熱天、善現天、善見天、色究竟天)を云ふ。

【一四六】これ樂慧なり。

【一四七】これ樂定なり。

【一四八】名遍沒、半超、全超などに當るものか。

【一四九】修解脫は信解、見得は

と爲すことを得ざるなり。三果とは此の事は[128]後に當に說くべし。

須陀洹とは佛が經にて說くが如し、若し人にして三結——身見と疑と戒取と[129]——を斷ぜば須陀洹と名づく、惡道に墮せずして必ず正智を得、[130]極至七有なり、と。

問曰 若し須陀洹にして見諦所斷の煩惱が都べて盡きて無量の苦を滅すること、[131]池喩經にて說くが如くならば、何が故に但三結のみを斷ずと言ふや。

答曰 此の事は後に當に廣く說くべし、謂く身見が盡くが故に餘等も亦盡くなり、惡道に墮せずとは後の業聚の中にて亦當に廣く說くべし。[132]必ず菩提に至るとは此の人は法流の中に入りたれば必ず涅槃に至ればなり、木の恒河にありて[133]八因緣を離るれば必ず大海に到るが如し。[134]極七有とは是の人は七世の中に於て無漏智の熟すること、[135]歌羅羅等の七日にして變成するが如く、又[136]酥等を服して極して七日に至れば、堅病も則ち消するが如く、又親族は限つて七世に至るが如く、又七步蛇の人身を螫す時は四大の力を以ての故に七步には至ることを得るも、毒の力を以ての故に八には至ることを得ざるが如く、又歎誦法は極して七世に至るが如く、又七の日の出づる時は則ち劫は燒盡するが如く、是くの如く七世に無漏慧を集めて煩惱を燒きて盡す。又法は七有に應ずるも、須陀洹の今世にて涅槃に入る有り、第二第三より極して第七に至る有り、是れを須陀洹と名づく。

行斯陀含者とは思惟[137]所斷の結に九品ありて、若し一二を斷じて三四五に至らば、是を行斯陀含者と名づく。有る人の言く、一無礙道を以て斷ず、と。是の事は然らず、佛は經の中にて無量心を以て斷ずと說けばなり、[138]斧柯喩經の中にて說くが如し。又行斯陀含者は亦[139]家家とも名づく、是の人は或は二たび或は三たび往來し、或は現身に於て涅槃に入ることを得、是れを行斯陀含者と名づく。

斯陀含とは一たび此間に來りて便ち涅槃に入るなり。是の人には思惟所斷の結は薄し、是の薄き

【一二八】後に說くと約束するも、賢聖等修行の階位については論中組織的に說かるゝ所なし。

【一二九】此三結の順序は古き時代のものなり。後文には此順序を異るものありて不可なり。

【一三〇】極至七有は極七返有(Saptakṛdbhava-parama)なり。預流の聖者にして、修惑を斷ぜざるものは、欲界の人と天とに往來して生を受くること七道する中に必ず聖道成就して羅漢果を證するが故に之を極七返有と稱す。

【一三一】三本宮本は地喩經とす。

【一三二】前文には必得正智とあり。故に正智と菩提とは同一なり。

【一三三】八因緣については後五定具品第一百八十四の不著下を見よ。

【一三四】前文には極至七有とあり。

【一三五】歌羅羅(Kalala)譯して凝滑又は雜穢といふ、託生の最初より七日間の名にして、胎內五位の第一なれば、第二等を指して等といふ。

【一三六】酥はSarpin又はGhṛta の何れかなるべく、一種の藥なり。

【一三七】修道なり。

【一三八】智相品第一百八十九に此經の引用あり。

【一三九】家家(Kulaṁkula)斯

行須陀洹[二三四]者に三種の人あり、一には隨信行、二には隨法行、三には隨無相行なり。

信行とは若し人にして未だ空無我智を得ざるも、佛の法を信ずるが故に佛語に隨うて行ずるが故に信行と名づく。經の中にて說くが如し、我はこの事に於て信を以ての故に行ず、若し眞智を得るときは則ち但隨信行のみならず、と。經の中にて、知つて作さざる者と信ぜざる者と等を是れを上人と名づくと說くが如し。是の故に當に知るべし未だ眞智を得ざるを隨信行と名づく。經の中にて說くが如し、若し人にして法に於て能く少慧を以て觀じて忍樂せば是れを信行と名づく、凡夫地を過ぐるも未だ須陀洹果を得ざるも其の中間に於ては命終するを得ず、是れを信行と名づく、と。是の人は聞思慧の中に在りて正しく諸法を觀じ心に忍じ欲樂し、未だ空無我智を得ずと雖も能く世間の忍法に似たる心を生ずれば、此より以來を凡夫地を過ぐと名づく。所以は何、後に當に廣く說くべし。若し信等の五根無くむば是の人は則ち外凡夫の中に住するも、是の人は漸く習うて煖法等の修慧を得ば、仍ち本名の故に亦信行とも名づく、終に法行の人に及ばざるを以ての故なり。是の經は應に要必(かなら)ず須陀洹果を得べしと言ふべく、應に命終を得ずと言ふべからず、所以は何、是の信行者は尚遠きを以ての故なり。[二三五]郁伽長者が衆僧を供養せしとき、天神示して、某は是れ阿羅漢なり、某は是れ行阿羅漢者なり、乃至某は是れ須陀洹なり、某は是れ行須陀洹者なりと言へるが如し。若し十五心の中に在らば、示すことを得べからざれば、當に知るべし、行須陀洹者にも近あり遠あり。是れを信行と名づくるなり。

法行とは是の人は空無我智を得て、煖頂忍第一法の中に在りて、法に隨順して行ず、謂く空無我等なり。是れを法行と名づく。

是の二行の人が[二三六]見諦道に入りて滅諦を見るが故に無相行と名づく。

是の三種の人を[二三七]行須陀洹者と名づく。世俗道の中にては結を斷ずることなきが故に名づけて行

【二三四】麗本には者の字なし。後文には者の字あれば、とゝにも三本宮本によりて入るゝを可とせむ。

【二三五】郁伽長者（Ugga, or Ugra）毘舍離城外の人、曾て、毘舍離城外の大森の重閣講堂にて、世尊の法を聽き、衆僧に、種々の美食、美しき坐臥等を施して、死後、意成身（淨居天）を得たりと。智相品第一百八十九にもこれと同一事の引用あり。

【二三六】見道をいふ。

【二三七】麗本には行須陀洹果者とあり。果の字は衍なること最初の行須陀洹者に三種人ありといへるによりて明なり。行須陀洹者は須陀洹向にして未だ須陀洹果に達せざるものなればなり。

く。又淨戒を持つて[二〇]二邊を離る、五欲の樂を離ると又身を苦しむることを離るとなり、故に聖所愛の戒と名づく、是の戒を名づけて智者所愛と爲す。又心が淨なるが故に戒も亦清淨なり、又深心に惡を止め但(ただ)戒を守るのみにあらずして、後世をも怖畏す。故に僧寶を戒品清淨と名づくるなり。

定品清淨とは若し定ならば能く眞智を生ずるが故に清淨と名づく。

慧品清淨とは若し慧ならば能く煩惱を盡くすが故に清淨と名づく。

解脫清淨とは、若し諸の煩惱を盡くすことを得ば、但能く遮すのみに非ざるが故に解脫清淨と名づく。

解脫知見清淨とは諸の煩惱の盡きたる中に於て智を得るなり、謂く我(わが)生は盡きたりと。未だ煩惱を盡くささる中にて、我(わが)生は盡きたりと言ふには非ず。是れを解脫知見清淨と名づく。

應に請すべく應に禮すべく應に供養すべしとは能く是くの如きの功德を具足するを以ての故に應に求請し禮敬し供養すべきなり。

福田とは中に於て福を殖うれば報を獲ること無量にして、乃(ない)し涅槃に至るも猶盡くすべからざるなり。能く施者を益し能く施者の功德を增益せしむること[二一]八功德田の五穀を滋茂して敗壞せしめざるが如く、僧田も亦爾(しか)なり、[二二]八功德を成就するが故に能く施の種の功德をして增長せしむ。是の故に應に禮すべし。

分別賢聖品　第十

問曰　何れの法を以ての故に之を名づけて僧と爲すや。

答曰　四行と四得と戒定慧と等の功德が清淨なるが故に名づけて僧と爲すなり。四行とは行須陀洹と行斯陀含と行阿那含と行阿羅漢となり。[二三]四得とは須陀洹と斯陀含と阿那含と阿羅漢となり。

請により廣說す。十大弟子の一人として論議第一の稱あり。

【二〇】二邊は次の五欲の樂を離ると身を苦しむることを離るとの二をいふ。この二邊を離れたるを中道といふこと初轉法輪經に見ゆ。この中道の意味の方が古く、他には十二因緣の緣起說を有無を離れたる中道となす說あり。此方が發達せる考なり。

【二一】八功德田とは八功德水の滋ふ田の意か。八福田を指すとしては五穀を滋茂せしむとはいへざればなり。

【二二】八功德とは少欲、知足、寂靜、正念、正定、精進、正慧、無戲論をいひ之を八大人覺ともいふ。

【二三】須陀洹（Sotāpanna）預流と譯す、始めて聖道の流に入るを云ふ、斯陀含、（Sakadāgāmin）一來と譯す、阿那含（Anāgāmin）不還と譯す、阿羅漢（Arhat）此まゝ音譯を用ふ。行須陀洹は須陀洹向をいひ、須陀洹は須陀洹果をいふ。他の三行三得之に準じて知るべし。故に四行は四向、四得は四果なり。

て、得道の人あり二月を過ぎ已つて、乃ち一言を出すと說くが如しと。此を斷ぜむが爲の故に、廣經あり、他を饒益するが故なりと說く。說くが如し如來は二種に說法す。一には廣、二には略なり、廣は略に勝るが故なり。

阿浮陀達磨とは未曾有經なり。劫の盡きたる大變異の事、諸天の身量、大地の震動を說くが如し。有る人は是くの如き等の事を信ぜず、是の故に此の未曾有經を說く、現業の果報、諸法の勢力は不思議なるが故なり。

憂波提舍とは[二九]摩訶迦旃延等の諸の大智人の廣く佛語を解するものなり、有る人は信ぜずして、佛說にあらずと謂ふ。佛は是れが爲の故に論經ありと說く經に論あるが故に義は則ち解し易ければなり。

是の十二部經を名けて佛の法となす。法寶は是くの如きの功德を具有す、是の故に應に禮すべし。

僧寶論の初の淸淨品　第九

問曰　汝は先に應に僧を禮すべしといへり。何が故に應に禮すべきや。

答曰　佛は處處に於て自ら僧を稱歎したまふ、是の僧寶は戒品淸淨にして定品も慧品も解脫品も解脫知見品も淸淨なれば、應に請ずべく應に禮し合掌し供養すべし、無上の福田にして能く施者を益すればなりと。

戒品淸淨とは佛の弟子衆は戒を持して瑕なし、乃至小罪にも深く畏懼を懷けばなり。又佛弟子は福報として人天に生ずる等の爲にもあらず、亦地獄に墮する等を怖畏するにもあらずして而も勤めて戒を持し、但善法を樂ふのみなるが故に淸淨と名づくるなり。又淨戒を持するに時節を限らざること、婆羅門の六ケ月戒を持つが如くならずして、長夜に受持して乃し究竟に至る、故に淸淨と名づ

【二五】十二部經の第二を指す。

【二六】路伽は Sloka の音譯。之に順煩惱不順煩惱の二ありとは奇說なり。Sloka は anuṣṭubh なれば、順煩惱はアヌシュトウブなどを譯したるものか。されどアヌシュトウブには順煩惱の義はなし。上の說く所は左の如くなる。

偈＝祇夜─┬伽陀
　　　　　└路伽─┬順煩惱
　　　　　　　　　└不順煩惱

之を更に、不順煩惱の祇夜中にあるものを伽陀となすといふなれば、其いふ所全く明確ならず。

【二七】秦の言以下は譯者の添加なり。此事過去如是は伊帝曰多伽の義譯なり。元來は iti-ukta-ka = ity uktaka なりしが iti-vṛta-ka とせらるゝに至れるなり。前者は、といはれたるものゝ意、後者は、とありしものゝ意。後者が此事過去如是と義譯せらるゝなり。

【二八】三本宮本には雖の下に是事の二字なし。

【二九】摩訶迦旃延（Mahākaccāyana）、Ujjeni の人、其國の王命により、佛を迎へんために七人の王臣と共に佛を訪ひ歸佛出家す、後しば〳〵佛の略說せられし法を比丘等の

惡業を造りて惡道に墮す等の如しと說くが如し、是の如き等の經を和伽羅那と名づく。

問曰 佛は何が故に答なく解なき經を說くや。

答曰 經の義理深重なる有り、是の經の義は[二三]阿毘曇の中にて當に別に說くべし、是の故に解せざるなり。或は有る人の言く、佛の所說の經は皆義の解あるも、但[二四]集法者が深義の經を撰して阿毘曇の中に置けるのみ、內結外結の人は終夜に義を解するに由りて此の義は應に結使聚の中に在るべきが如し。

伽陀とは[二五]第二部に祇夜を說き祇夜を偈と名づけしが、偈には二種あり、一を伽陀と名づくと、二を路伽と名づくとなり。[二六]路伽に二種あり、一には順煩惱、二には不順煩惱なり。不順煩惱とは祇夜の中に說くものにして、是れを伽陀と名づく。

二種の偈を除いて餘の偈に非ざる經を憂陀那と名づく。

尼陀那とは是れ經の因緣なり。所以は何、諸佛賢聖の說く所の經法には要ず因緣あればなり、此の諸經の緣は或は修多羅の中にあるも或は餘處にあるも、是れを尼陀那と名づく。

阿波陀那とは本末次第して說くもの是れなり。經の中にて說くが如し、智者の言說は則ち次第あり義あり解ありて散亂せしめずと。是れを阿波陀那と名づく。

伊帝曰多伽とは是れ經の因緣及び經の次第にして、若し此の二經にして過去世にあらば、伊帝曰多伽と名づく、[二七](秦には此の事過去には是くの如しと言ふ)。

闍陀伽とは現在の事に因りて過去の事を說くものなり、如來は未來世の事を說くと雖も[二八]、是の事は皆過去現在に因るが故に別說せざるなり。

鞞佛略とは佛の廣說の經を鞞佛略と名づくるなり。有る人は信ぜずして謂く、諸の大聖は寂滅を樂しむが故に憒鬧を喜ばず、世の雜語を厭ひて衆を樂しむ根を拔く、故に廣說を樂はず、經の中に

種々の神力不思議を現ずることを記せし經。十二、憂波提舍、(Upadeśa) 論議と譯す、法義を議論し問答する經、以上の中、修多羅祇夜伽陀は形式上より、他は內容上より分てるなり。此十二部經は、時には大乘を說くものにして、小乘にては九部經を說くのみともいふ。九部教は憂陀那鞞佛略和伽羅那を省きていふ。然るに又大乘にて九部教をいふことあり、此時は尼陀那阿波陀那憂波提舍を省くものとなす。これ支那にて後世の解釋なるが、正當ならず、所謂小乘にても十二部教をいふのみならず、九部教をいふ時にも右の如く三を省くにはあらず。憂陀那も和伽羅那も九部教中にあればなり。十二部も九部も十二分とも九分ともいふ。

【二一】三本宮本は誦。以下同じ。

【二二】讃論品第十五に之を經の文とす。

【二三】阿毘曇は Abhidharma の最後の母音の落ちてアビダムとありしものゝ音譯。雅語にては (Abhidharma) なり。對法と譯す、經を解釋せる論部を云ふ。

【二四】集法者とは結集者を指す。

[二〇] 十二部經品　第八

復次に佛の法は分別すれば十二種あり。一には修多羅、二には祇夜、三には和伽羅那、四には伽陀、五には憂陀那、六には尼陀那、七には阿波陀那、八には伊帝曰多伽、九には闍陀伽、十には鞞佛略、十一には阿浮多達磨、十二には憂波提舍なり。

修多羅とは直說の語言なり。

祇夜とは偈を以て修多羅を[二一]頌するものにして、或は佛の自說、或は弟子の說なり。

問曰　何が故に偈を以て修多羅を頌するや。

答曰　義理をして堅固ならしめんと欲するなり、縄を以て華を貫けば次第に堅固なるが如し。又言辭を嚴飾して人をして喜樂せしめんと欲するなり、散華を以て、或は貫華を持して、以て莊嚴をなすが如し。又義は偈の中に入れば則ち要略にして解し易ければなり。或は衆生の直言を樂ふものあり、又偈說を樂ふものあればなり。又先に直に法を說き、後に偈を以て頌すれば、則ち義は明了にして信をして堅固ならしむればなり。又義は偈の中に入れば則ち次第に相著して讃說すべきこと易ければなり。是の故に偈を說くなり。或は謂く佛の法には應に偈を造るべからず、歌詠に似如たればなりと。此の事は然らず、法として應に偈を造るべし、所以は何、佛は自ら偈を以て諸義を說くが故なり。又經に一切世間の微妙の言辭は皆我法より出づと言へるが如し、是の故に偈頌に微妙の語あればなり。

和伽羅那とは諸の義を解する經を和伽羅那と名づくるなり。若し經有りて答なく解なき四無礙等の經の如きは修多羅と名づくれば、問答ある經を和伽羅那と名づく。[二二]四種の人——冥より冥に入ると冥より明に入ると明より冥に入ると明より明に入ると——あり、冥より冥に入るとは貧賤の人の三

【二〇】十二部經、(Dvādaśāṅga-dharma-pravacana)は一切經を內容又は形式上より見て十二に分類せしもの。
一、修多羅、(Sūtra) 契經といふ、經典中の散文をいふ。
二、祇夜、(Geya)應頌又は重頌といひ、經典中の重說偈言の偈を指す。
三、和伽羅那(Vyākaraṇa)授記と譯す、成佛の記別を授け又は豫言を說く。
四、伽陀、(Gāthā) 諷頌又は孤起頌と譯す、長行に依らずして直に偈頌の句をなすもの。
五、憂陀那(Udāna)無問自說と譯す、問者なきに佛自ら說くもの。
六、尼陀那 (Nidāna) 因緣と譯す、諸經の序品の如く、因緣を說く處。
七、阿波陀那、(Apadāna)譬喩と譯す、經中、譬喩を說く處。
八、伊帝曰多伽 (Itivṛttaka) 本事と譯す。佛弟子の過去世の因緣を說く經。
九、闍陀伽(Jātaka)本生と譯す、佛自身の過去世の因緣を說く經。
十、鞞佛略 (Vaipulya) 方廣と譯す、方正廣大の眞理を說く經。
十一、阿浮多達磨 (Adbhuta-dharma)未曾有と譯す、佛が

し。故に知者自知といふ。

復次に佛の法は甚深なり、開示するときは則ち淺きも、虚僞を斷除して天人に流布せむ。甚深とは佛の法の甚深なること、因を知らざるを以ての故なり。世間は多く現果を見て因を知ること能はざるが故に、[一〇六]自在天等の邪因を説き、十二因緣は深きが故に解し難きに、世間の智は淺ければ、佛の法の中に於て深想を生ぜずして衆因緣法に通達すること能はず。乃至小草をも衆因緣を以て思惟し觀察すれば其の相は轉深し、佛の説ける所の衆因緣法の如きは是の事は甚深なり、愛盡離滅及び涅槃處是れも亦見難し。

問曰 若し因緣にして甚深ならば阿難は何が故に淺想を生ずるや。

答曰 有る論師は言く、是の語は然らず、阿難は是れ大弟子にして法相に通達せり、云何が當に因緣法は淺しと言ふべけんや。又若し總相を以て因緣法を觀ずるが故ならば、淺想を生ず、所以は何、是の人は善く分別して煩惱業を觀ずること能はざるが故なり。復次に若し人にして本學べる所の事に於て究竟を得ば便ち淺想を生ず、大智を得て還初章を觀るが如し。或は復人あり、智慧未だ成ぜざれば、甚深の法に於て則ち淺想を生ず。又佛は善く説法したまふが故に或は衆生の便ち淺想を生ずるあり。復次に佛の法は皆空なり、是の空は甚深なれば佛は種々の因緣譬喩を以て宣示したまふ、義は則ち解し易くして小兒も亦知ること、[一〇七]須陀耶沙彌等の如し。復次に佛の法は堅固なり、諸の言説の中にて最も眞實と爲す、[一〇八]婆羅陀羅摩延經等の但語言のみ有りて實義あることなきが如くならず、[一〇九]盧提梵志が世尊よ、諸の比丘等は利益の法眞實の法の中に於て精勤し修學す、所謂漏盡なりと言ふが如し。復次に佛の法は一切世間を利益せんが爲の故に説き、婆羅門が婆羅門の法は但自ら道を得るのみにして、餘人は得ずと言ふが如くならず。又佛の法は尊重なり、諸の天王等の五欲に自ら恣なるものも亦來りて信受すればなり。是の因緣を以ての故に應に法を禮すべし。

【一〇六】自在天（Īśvara）、大自在天外道の認むる最高神にして世界の創造神なり。

【一〇七】須陀耶沙彌（Sudāya, or Sudāna）譯して善施といふ。年始めて七歲の時、佛が汝の家は何處に在りやと問はれし時、「三界に家なし」と答へしと云ふ。

【一〇八】婆羅陀は（Mahā-）Bhārata、羅摩延は Rāmāyaṇa なり、之を經といへるなり。

【一〇九】盧提梵志、原語不明なるも或は Rādha の音譯ならむか。

有らむや、故に無時と說く、經の中にて說くが如し、佛の法は行じ易し、行住坐臥に時として得ざるなければなりと。

能將とは正行を以ての故に能く衆生を將ゐて解脫處に至らしむ、故に能將と名づく。

來嘗とは佛の法は應當に自身に作證すべく、但他に隨ふのみならざれ、佛の比丘に語るが如し、[103]汝等は但我語を信ずるのみなること莫れ、當に自ら、是の法は行ずべく、是は行ずべからずと思惟すべし、と。外道が弟子に語つて、是の問答を捨つること人の淨洗して塵土を喜ばざるが如くすべし、當に聾瘂の如くにして但、我語にのみ隨ふべしと言ふが如くならず、故に來嘗と曰ふ。

智者自知とは是の佛の法の利は智慧人ならば乃ち能く信解するものなり。斷食等は麁愚者は信樂するも、智者は受けず。正智慧は能く煩惱を破すを以て、是の如き等の法ならば、智者は乃ち解し、甘膳を以て其身を充足すと雖も一心に精進せば、貪恚は染せず、是くの如き等の事ならば智者は現知す、人の病にして愈ゆれば自ら離るゝことを得るを知るが如く、水の相の冷をば飲む者は乃ち知るが如し。復次に或は語を過ぎたる法あり、地の堅相の如し。堅とは何等の相ぞ、語にて答ふることを得ざるも、觸るれば乃ち知るべし、生盲の人には語るに青黃赤白を以てすべからざるが如し。若し人にして佛の法の味を得ずむば、語るに佛の法の實義を以てすべからず、寂滅なるを以ての故なり。復次に佛の法は自ら證知すべく、己が所證を以て他人に傳與すべからざること、財物等の如し、[104]婆羅延經の中にて、佛の言へるが如し。

我は自ら汝の疑を斷ずること能はず
能く我が法を證せば汝の疑は自ら斷ぜむ、と。

復次に是の法は他身に到る時にも火の傳はる如き等を見ることを得べからず、又凡夫愚人は無明の山の爲に障覆せらるゝが故に是の法を信ぜず、[105]阿夷羅曰沙彌に因りて大山の喩を說けるが如

【一〇三】此言は四無畏品第三に引用せられ居たり。

【一〇四】此經は八解脫品第一百六十三にも引用せらるゝが、これパーリのスッタニパータの最後部パーラーヤナ(Pārāyana)なり。波羅延はパーラーヤナの音譯なり。

【一〇五】三本宮本には阿夷羅越沙彌とあり、Aciravata-sāmaṇera なるべし。

の如くならざるなり。又佛の法の中にては一切の有爲には皆過患あり稱讚する處なしと說き、婆羅門の[九九]梵世を讃する等の如くならず、故に佛の法は能く涅槃に到ると名づく。

能く正智を生ずとは所有の佛の法は皆涅槃の爲なり、是の故に能く正智を生ず、又佛の法の中には眞智の果あること、聞慧より思慧を生じ、思慧より修慧を生ずるが如し、故に佛の法は能く正智を生ずと名づく。

能く善く將導すとは佛の法は先に自ら善く成じて後他人をして正法の中に住せしむるが故に善導と名づくるなり。

復次に佛の法には六あり、一には曰く善說、二には曰く現報、三には曰く無時、四には曰く能將、五には曰く來嘗、六には曰く智者自知なり。

善說とは佛は諸法の如法の實相を說きたまふなり。若し不善法ならば不善の相を說かむも、善なれば善相を說く、故に善說と名づく。

現報とは佛の法は能く現世の果報を得しむ、[一〇〇]經の中にて、晨朝に化を受け夕に得道せしめ、夕に爲に法を說き、朝に得利せしむと說くが如し。又現報とは說くが如し、現在沙門果經[一〇一]の中にて說く、現に恭敬と名聞と禪定と神通と等の利を得と說くが如し。復次に佛の法には皆義理あるが故に能く恭敬の現報後報及び涅槃報を得ることを致すも、諸の外道の法には義理なきが故に尙現報及び後世の報すらなし、何に況んや涅槃をや、故に現報と名づく。

無時とは佛の法は某の日月歲と星宿の吉凶とを待つて乃ち道を修することを得、某の日月歲には道を修すること得ざるにあらざること、婆羅門の法の初春には婆羅門が火を受け、春末には[一〇二]刹利が火を受くる等の如くならず。復或は日出を待ちて、或は日の未だ出でざるに、而も火を供養すること、五穀の時を待て種うるを見るが如く、或は佛法も亦當に是くの如くなるべしと。謂ふこと

【九九】梵世は梵の世界なり。即ち梵天又は梵界なり。こゝに至るが婆羅門には解脫とせらるゝなり。

【一〇〇】此經は四無畏品第三修定品第一百八十八に引用せられ居たり。

【一〇一】四修空品第一百五十八の阿闍世王の註を見るべし。

【一〇二】刹利は刹帝利と同じ。此四姓に配しての規定は法經などに存する說ならむ。

ることを得るが如く、佛の法は然らず。一偈の中に於ても其の義は具足す。

諸の悪は作すこと莫れ、　諸の善は奉行せよ
自ら其の意を淨らせよ、　是れ諸佛の教なり。

と説くが如し。故に具足なりと名づく。清淨調柔なりとは二種の清淨の故に清淨調柔なりと名づくるなり、語が清淨なるが故に名づけて清淨と曰ひ、義が清淨なるが故に名けて調柔と曰ふ。又佛は正義の中に於て義に隨ふ語を置き、正語の中に於て語に隨ふ義を置くことを聽したまふこと、外道の經に隨つて而も取るが如くならず。又佛の法の中にては、法に依りて人に依らず、法をも亦分別し、[94]了義經に依りて不了義經に依らず、[95]是れを淨法と名づく、但、經に隨ふのみには非ず。又佛の法の中には三法印あり、一切無我と、有爲の諸法の念々無常と、寂滅涅槃となり、是の三法印は一切論者の壞すること能はざる所なり、眞實なるを以てなり。故に清淨調柔なりと名づくるなり。

梵行に隨ふとは[96]八直聖道を名づけて梵行といひ、[97]梵は涅槃に名づけ、是の道が能く到るが故に梵行と名づく。法寶は是くの如きの功德を成就す。是の故に應に禮すべし。

衆法品　第七

復次に、佛は自ら讃じて言く、我が法は能滅にして、能く涅槃に到り、能く正智を生じ、能く善く將導す、と。

能滅とは貪恚等の諸の煩惱の火を滅するが故に能滅と曰ふなり。不淨觀を習して婬欲の火を滅するが如く慈心を習して慎恚を滅するが如き等にして、外道の斷食等の法の如くならざるが故に能滅と名づく。

能く涅槃に到るとは佛の法は究竟して必ず涅槃に至り、外道の[98]有分の中に住し禪定に著する等

【九四】了義。不了義の語に對す、顯了分明に究竟の實義を説示せる完全なるものを了義と云ひ、未了未盡の不完全の説を不了義とも未了義とも云ふ。

【九五】これ四依法の中の二なり。四法品第十六を見るべし。

【九六】八直正道。八聖道に同じ。

【九七】麗本に梵名涅槃是道能到故名梵行に作り、三本宮本にては是名涅槃道能到故名梵行に作る。

【九八】有分は明確ならざるも、有は恐らく生存の意味、こゝにては生存の場所即ち三有（三界）を指し、分は其中の何れかを指すの意ならむ。

中後時に常に智者の爲に愛樂せらる。又三時に於て一切甚深なること、餘經の初は麁、中は細、後は則ち微末なるが如くならず、是等の緣を以ての故に三善と名づく。

義も善なりとは佛の法の義には深き利益ありて今世の利及び後世の利と出世道の利とを得ること、外典の天眼を增さんと願ふが如くならざるなり。

語も善なりとは方俗語に隨うて能く正義を示すが故に語も善なりと名づくなり、所以は何、言說の果は所謂義なり、是の故に諸の言說する所は能く義理を辨ずればなり、是を語も善なりと名づく。復次に佛の法は說の如くに行ずることを貴ぶ、但言說のみなるには非ず、是の故に方俗語に隨ふも能く道を得しむれば、名けて語も善なりとなすなり。外典の但語言のみを貴び若しくは語言を失し若しくは音聲を失し、主に辯(ことば)すれば罪を得るが如くならず。復次に善く眞諦を說くが故に義も善なりと名づけ、善く世諦を說くが故に語も善なりと名づくるなり。

獨法なりとは佛は但正法を說くのみにして戲論の爲に往古の事を說きたまはず、亦法及び非法をも雜へ說かざるなり。又獨法なりとは但[九〇]無餘涅槃の爲のみの故に說きたまひ、又獨り佛のみ能く說きたまふが故に獨法なりと曰ふ。

問曰[九一]聲聞部の經の但聲聞のみ說くあり、又餘經の諸天神の說くあるに、汝は何が故に獨り佛のみ說くと言ふや。

答曰 是の法の根本は皆佛より出づればなり。是の諸の聲聞及び天神等は皆佛語を傳ふるのみ。比尼の中にて說くが如し、一佛の法は佛の所說、弟子の所說、變化の所說、諸天の所說に名づくと。要を取りて之を言はゞ、一切世間の所有の善語は皆是れ佛說なり、故に獨法と名づくるなり。

具足なりとは佛の所說の法は減少する所なければなり。[九二]鬱陀伽經の中にて具足の相を說くが如し。又佛の法は餘經を待ちて而も成ずるにはあらず、[九三]和伽羅那經が五種の經を待ちて然る後に成ず

【九〇】無餘涅槃（Nirupadhiśeṣanirvāṇa）。灰身滅智して寂滅せし境界をいふ、有漏の依身都滅するが故に無餘といふ。

【九一】大乘にては經は佛と弟子と菩薩と諸天と化人とが說くものを含むといふ。阿含にても實際上これと異ることなし。次には四種をいふのみにて菩薩の所說を缺く。

【九二】鬱陀伽經は三本宮本には鬱陀羅伽經とあり。前者はUddaka 後者は Udraka にして共に同じ。

【九三】和伽羅那經（Vyākaraṇa）。婆羅門系統にていふ、吠陀の六支の一にして文法學の書なり。六支の一なれば、他の五を待つて六支たるを得るをいふ。雜煩惱品第一百三十六にも出づ。

と。又佛世尊には精進等の諸の功德聚あり、[八六]和利が百句を以て佛に此の功德有ることを讃するが如し、是の故に應に禮すべし。又佛は自らも功德を說きたまふ、[八七]增一阿含の如來品の中にて、自ら我は是れ人中の師子なり、人華なり、人象なり、沙門の中に於て第一なり、[八八]沙門婆羅門の中にても亦是れ第一なり、衆聖の中の王なり、行に錯謬なく、苦樂に隨はざるは我身是れなればなりと說けるが如し。

問曰　佛は何を以ての故に自ら其身を讃したまふや、自ら身を讃するは是れ愚人の相なればなり。

答曰　世尊は名利を求めたまはずして、但他の爲の故にのみ自ら己身を歎じたまふ。又佛には我心なければ、人を利せんが爲の故に自ら歎じたまふも咎なし。又因緣の少くること多きを以て自ら讃じたまふ、佛の功德に於ては說き盡すこと能はざればなり。是の故に愚人の相の中に墮せず、自ら高ぶらざるが故なり。又淸淨經の中にて、舍利弗の佛前に住して佛の功德を讃するが如し、是の故に應に禮すべし。又少欲知足等の無量の功德は皆佛身にあり、所以者何、佛は一切の諸の功德を集めたまふが故なり。是等の緣を以て應に佛を敬禮すべし。

法寶論の初の三善品　第六

問曰　汝は應に法を禮すべしと言へり。何れの功德を以ての故に應に禮すべきや。

答曰　佛は自ら讃じて言く、[八九]我が說く所の法は初も中も後も善、義も善、語も善にして、獨法なり、具足なり、淸淨調柔にして梵行に隨順すと。

初も中も後も善なりとは佛の法は時として善ならざるはなく、少壯老の三時に於て皆善、入の時も行の時も出の時も亦善なるなり。又初は惡を止め、中は福報を捨し、後は一切の捨にして、是を三善と名づく。又佛は三時に常に正法を說きたまひて、非法の餘の外道の如くなるを雜へず。又初

【八六】和利（Upāli）。持律第一の比丘と同一人か否かは不明。

【八七】增一阿含は故不故品第九十七にも引用せらる。一切緣品第一百九十一にある如來品も增一阿含あらむ。行苦品第七十九、善覺品第一百八十三參照。

【八八】三本宮本にはこの沙門なし。なき方可ならむ。ありとするも第一沙門なりと讀むか、沙門婆羅門の中にてもと讀むか、何れにても差支なかるべし。佛陀時代の宗敎家を一般的に沙門婆羅門と呼ぶが阿含經の例なれば、之を分つて前に沙門、後に婆羅門となしたりと見れば、沙門の一は不要なるも、前の沙門は佛敎者、後の沙門婆羅門は一般宗敎家を指すと見れば、存するも可なるべし。

【八九】之を一般に七善と稱し、正法たるの條件となす。

を樂しみたまふて以て惡道等に墮することを怖畏せず。」又佛の一切の身口意業は皆人を利するが爲の故なれば不善なし、不善なきを以ての故に護ることを須ひず、淨にして不護の業なるを以て、是の故に應に禮すべし。」又佛は〔八三〕三念處を成就したまへるが故に所以に應に禮すべし、若し法を說きたまふ時に、聽者が一心なるも、以て喜と爲したまはず、若しくは一心ならざるも以て憂となしたまはず、常に捨心を行じたまふ、所以は何、佛には貪恚の習に餘有ることなきが故なり。又諸法の畢竟空なるを知るが故に憂なく喜なし。又佛は善く大悲心を集めたまふが故に善と不善とに於て心に憂と喜となくして、等しく大悲を起したまふ。又佛は深く衆生の各各の性を知りたまふが故に若しくは善心にして聽くも、以て喜となしたまはず、不善心にして聽くも以て憂となしたまはず、性爾るを以ての故に常に捨心を行じたまふ、又佛の心は堅固なること猶大地の如く、重を去るも高かまらず、若しくは重物を置くも亦復下らざるも、餘の凡夫人の其の心は〔八四〕稱の少しく增せば而も下り、少しく減ぜば而も高まるが如し。又佛世尊を大悲〔八五〕者と名づく、是の故に天人皆應に敬禮すべし。又深き禪定の樂を捨てて人の爲に法を說き餘人の悲心は成辨する所なきも、世尊の大悲はよく衆生を濟ふ、故に有果と名づく。又大悲を以て無上道を成じて更に餘緣なし。復次に佛には我心なく少欲知足は最も第一たり、大悲を以ての故に自ら己身を歎じたまふ。又佛は性柔和なるも、大悲を以ての故に苦切の言あり。大方便を起し諸の勤苦を受けて衆生を度することを爲したまふ。又佛は大悲を以て衆生を度したまふが故に世間に住し、五陰の身の熱鐵丸の如く須臾の頃に於ても堪忍すべからざるを受けたまふ。又佛世尊は善く捨心を修したまふも、此の捨心を捨てゝ常に大悲を行じたまふ、故に尊敬すべし。又佛を善人と爲し、善の中の善とす、所以は何、自ら大利を得亦他人をも利したまへばなり。自ら利し人を利するが故に善人と名づく。又佛は衆生の眞の善知識と爲りたまふ。經の中にて說くが如し、我は是れ衆生の眞の善知識なり、是れ憐愍者なり利益者なり等

〔八三〕三念處は次の喜びと爲さずと憂と爲さずと捨心なるとなり。
〔八四〕三本宮本は秤に作る。何れもハカリなり。
〔八五〕四無量定品第一百五十九の最後部を見るべし。四無量心の悲とこゝの大悲とを混ずべからず。

[七六]此の五法を得たれば、如來は自ら已に功德具足し、正智を得たるが故に能く世間の一切の心念を知り、所念を知り已つて而も爲に法を說くが故に無上と名づく。

[七七]調御とは、當に調すべき所の者は調伏せざるなく、已に調伏せる者は永に敗壞せざるなり。[七八]調伏せらるる者は天人是れなり、故に天人師と名づく。或は有るは疑を生ぜむ、云何ぞ人に生ぜるものを以て而も能く天を化せんやと。故に我は是れ天人師なりと言ひたまふなり。

[七九]佛とは若しくは過去未來現在の諸法の有爲無爲有盡無盡なるも若しくは麁なるも若しくは細等なるも一切の諸法をば道場に坐せし時に無明の睡を除き、一切智を得て、朗然として大悟せるが故に覺者と名づくるなり。

[八〇]是の如く九種の功德が具足して、三世十方の世界の中に於て尊なるが故に世尊と名づく。佛は十號具足したまふが故に自身に具足し、他にも亦具足し、自利利人す。是の故に應に禮すべし。

三不護品[八一]　第五

佛の身口意業は不護なり、所以は何、佛には不淨なる身口意業の他人をして見ず知らさらしめんと欲するものなければなり。又諸餘の人には或は無記にして不淨なる身口意業に似如たる有りて智者の呵する所なるも、佛には亦無し。所以は何、如來の一切の身口意業は皆智慧正憶念に由りて起ればなり。若し諸の妄念小智の人ならば是くの如きの業なし。又世間の人は或は卒に誤り語るも、佛には此等なし。又佛は善く身の戒と心の[八二]慧とを修したまふ、是くの如き等の法をば善く修するを以ての故に、一切の不善及び不善に似たる業は皆悉く除滅す。復次に世尊は久遠より來、善法を修行したまうて、今に適りたるにあらず、是の故に諸業の性は淨にして不護なり。又佛は常に戒行

【七六】世間解無上の解。

【七七】調御の解。

【七八】天人師の解。

【七九】佛の解。次の覺者は勿論佛の譯語。

【八〇】世尊の解。

【八一】三不護。如來の三業(身口意)は純淨にして、過を離るゝが故に防護を須ひず、之を三不護といふ。

【八二】戒心慧は戒定慧をいふこともあり。然しかく解すとせば、上の身の字が適切ならず、身に戒定慧を修すとけいふを得ざればなり。これと同一の句が讃論品第十五にも三報業品第一百四にも六業品第一百十にも出づ。何れも今は身の戒と心の慧と讀みたり。

て乃ち道法を說くと。故に如說と名づく。又應に爲に說くべき者には卽ち爲に之を說く、[七〇]緊叔伽經の中にて說くが如し、又應に說くべき所の法をば而も爲に之を說く、所謂若しくは略若しくは廣の陰入門等なりと。是の故に說く所は眞實に非ざるはなし。復次に二種の語法あり、一には世諦に依る、二には第一義諦に依る、如來は此の二諦に依りて說きたまふが故に、言ふ所は皆實なり、又佛は、世諦は是れ第一義諦なりとは說かず第一義諦は是れ世諦なりとも說かず、是の故に二の言は皆相違せず。復次に如來は若しくは遮するも若しくは開するも亦相違せず、作す所の事に隨ひて遮せば、此の事に卽しては開せず、爲す所の事に隨ひて開せば、此の事に卽しては遮せざればなり、是の故に言ふ所は皆相違せず。又三種の語法あり、一には見より生ず、二には慢より生ず、三には假名より生ず、佛には二種の語なく、第三語に於て淸淨にして染なし。又四種の語法あり、見と聞と覺と知との法なり、佛は此の四に於て言ふ所は淸淨にして心に貪著なし。又[七一]五種の語法あり、過去と未來と現在と無爲と及び不可說となり、是の五種の法をば佛は悉く通達し、明了に知り已つて然る後に乃ち說きたまふ、故に如說と名づく。能く如說するが故に名づけて如來となす。

[七二]煩惱が盡きたるを以ての故に此の法を得、貪恚癡等は是れ妄語の根本なるが、此の諸結を滅したれば、是の故に應供なり。

[七三]復次に、如來は應供法を說く、是れ結を滅する法にして、正智に由りて生ず。無常等の慧を以て正しく法を觀ずるが故に諸の煩惱は盡く、故に正智を因として應供法を生ずるなり。

[七四]是の正智の法は明行より生じ、前際にも後際にも及び不相續にも善く通達するが故に正智と名づくることを得。盡く施等の波羅蜜を行ずるが故に諸の明行足なり。

[七五]餘人も亦無始の生死に於て施等の法を行ずるも、正行なきが故に善逝とは名づけず、佛のみは正道有りて施等の行を行ずるが故に善逝と名づく。

【七〇】緊叔伽は恐らく Siṃsa=uka=Siṃśuka の音譯。見一諦品第一百九十四の甄叔伽經と比較すべし。

【七一】五種の語法は有我無我品第三十五に五法藏といはるゝものと同一なり。過去、未來、現在、無爲、不可說の五法なり。これ小乘犢子部の五法藏說として有名なり。

【七二】應供の解。

【七三】正遍知の解。

【七四】明行足の解。

【七五】善逝の解。

得ればなり。若し遮法を犯すと雖も猶道を得と言ふも、實の遮法を破せば必ず道を得ること無し、若し實罪に非ずむば、重緣を以ての故に佛も還た自ら聽したまふ、遮法を壞するに非ざればなり。若し道を修するも亦結ありと言ふも、聖道は能く一切の結使を破すれば、未だ具足せざるが故に盡く破すること能はざるなり、譬へば、酥の性は能く熱病を破すも、服すること少なきを以ての故に消し盡すこと能はざるが如く、道を修するも亦爾り、是の故に咎なし。如來は、四無所畏を成就したまふ、是の故に應に禮すべし。

十號品　第四

復次に、經の中にて、如來等の十種の功德を說きたまふ、謂く、如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解[六七]無上・調御・天人師・佛・世尊なり。

(甲)[六八]如來とは如實の道に乘じて來りて正覺を成ず、故に如來と曰ふ。(乙)言說する所あらば皆實にして虛ならず、佛の阿難に問へるが如し、如來の言ふ所は[六九]頗一ありや不や、不なり世尊、と。故に如說と名づく。復次に、如來は得道の夜より涅槃の夜に至るまで、其の中間に於て、說きたまふ所は皆實にして破壞すべからず、故に如說と名づく。又一切種智を以て前後際を知り、然る後に說きたまふが故に言ふ所は皆實なり。又諸佛世尊は憶念堅固にして忘失する所なきも、有る人は或は比智を以て而も所說あり、有るは經書に隨ひ、或は有るは現在に善く見ること能はずして而も所說有れば、是の人の所說は若しくは得若しくは失なり。經の中にて說くが如し、比智者の言は或は得或は失なりと。佛は諸法に於て現に知り已つて說きたまふ、是の故に言ふ所は皆壞すべからざれば、實說者と名づく。又佛の所說は皆實義を說き、餘人の實と不實とあるが如くならざるが故に壞すべからず。又言ふ所は時に應ず、經の中にて說くが如し、佛は衆生の心の喜び心の樂ふを知り

【六七】三本宮には無上士とあり。又三本宮本には調御丈夫とあり。此方が通常なるも、下の釋は士と丈夫とを省きたり。如來以下を十種となすには異說あるも、ここにては世間解無上を一と見るものゝ如し。實際としては最初の如來は主語、以下のものが述語にて、十種を含み、之を十號となすなり。

【六八】以下如來の辨。甲乙を區別して見るべし。

【六九】頗は通常はモシと讀むも、頗はカタヨルの意なればカナラズなり。

何れより來れるやと言ふ、是くの如き等有るが如し。又經の中にて、人若し城邑聚落に至りて其の名字を問ふことあらば、我は是を一切智人と說かずと說くが如き、斯の經を聞く者は佛は是れ一切智人に非ずと疑ふ。又佛の所說は貪著あるに似たるあり、經の中にて說くが如し、佛の言はく、善く來れり比丘よ、汝は此の身に於て大利を得んが爲に我法に隨順すれば、我は則ち歡喜すと。瞋に似たる語あり、調達よ、汝は死人たり、是れ唾を食ふ人なりと語りたまふが如し。又、慢に似たる語あり、自ら言ひたまふ、我は是れ人中の師子なり、十力四無所畏を成就し大衆の中に於て能く師子吼すと。又、見に似たる語あり、言く、善く我法を持つこと油鉢を擎ぐるが如くすべし、と。又、調達に語りたまはく、我は衆を以て[六四]舍利弗目犍連等にも與へず、況んや當に汝に與ふべけむや、と。小智ある人にして此等の言を聞かば、便ち如來の諸漏は未だ盡きずと謂はむ。又佛は、諸欲は是れ道を障ふる法なりと說きたまふに、人有り、受くと雖も亦能く道を得、又[六五]比尼の中にて說く所の遮法を人の毀壞すること有るも亦能く得道すれば、小智は、佛は障法を知りたまはずと疑はむ。人有り道を修するも亦[六六]結使あれば、小智は疑を生じて、聖道を修するも結を盡くすこと能はず、既に結を盡さず、何ぞ能く苦を離れんやと謂はむ。是の故に如來は此の四法に於て無所畏を說きたもふなり。

問曰　向に疑ふ所の如きは當に云何が斷ずべきや。

答曰　佛は俗に隨うて語りたもふ。世間にも亦知りて而も問ふ者あるも、以て過と爲さず、佛も亦是くの如し、世間に在るが故に俗に隨うて而も問ひたまふなり。又世間にも亦心に貪著なくして而も言の貪あるに似たる有り、是くの如き等あれば、佛も亦是くの如し、衆生を利するが故に是の言あることを現じたまふなり。若し欲は障法に非ずと言ふも、如來は欲は實に是れ障法なりと說きたもふ、若し欲にして心に在るときは則ち道を修することなし、要ず先に欲を除いて然る後に道を

【六四】舍利弗（Śāriputra）。は王舍城外の Upatissa 村の生れ、目犍連（Mahāmaudgalyāyana）も王舍城外の Kolita 村の生れ、兩者共に親友にて、或る機會に無常を感じ共に删闍耶（Sañjaya）の弟子となる、後、王舍城に於て、馬勝比丘（Aśvajit）の端正なる威儀に打たれ、初めて佛教を知り同門の弟子二百五十人と共に佛陀に歸す、兩者共に弟子中の上足として、智慧第一舍利弗、神通第一目犍連として讃せらる。

【六五】比尼。麗本は比尼、三本宮本は毘尼、以下同じ。（新譯にては毘奈耶 Vinaya）律藏の梵名。

【六六】一般には、結も使も共に煩惱の異名。

り、正行の清淨なるを盡苦の因と名づく、諸の外道の論には相似の因有るのみにして、正因なきが故に勝ることを得ること能はざるなり。又佛の經は清淨にして說く所の義趣は實相に違せざること、外道に同じからず。又佛の所說の道は但語に隨ふのみならずして、皆心にて自ら知る、經の中にて說くが如し、佛は比丘に告げたまはく、[六一]汝等は但我が語を信ずるのみなることなかれ、當に自ら知見し自ら身證して行ずべしと。又言く、[六二]汝は來れ、諸の諂なき者よ、若し我にして晨朝に汝が爲に法を說かば夕に得道せしめ、夕に爲に法を說かば晨に得道せしめんと。復次に、若し人にして法に於て達せざる所あらば、便ち止めて言はず、設ひ言ふ所あるも亦必ず壞すべきも、佛は達せざることなきが故に能く畏るることなし。又如來は諸の無礙智を得、一切の法に於て通達せざることなきが故に畏るる所なし。又小智は大人の所知を知らざるも、大は能く小を知る、佛は衆生よりも最も大たるが故に能く小論を知りたまふ、故に畏るる所なし。又諸の外道の論は所見を因として起るも、佛は是の見は衆緣より生ずと知り、集を知り滅を知り味を知り過を知り出を知りたまふ、諸の外道等は盡く知ること能はざるが故に諍論を生ず、佛は一切種智を以て一切の法を知りたまふが故に、能く一切の諸論を破壞して、一切の諸論の爲に壞せられず、故に畏るる所無し、是くの如き等の緣を力無畏差別の義と名づく。

問曰 佛は諸法に於て悉く畏るる所なきに、何が故に但四無畏のみを說くや。

答曰 四を說かば則ち總じて一切の無畏を說くと爲せばなり。所以は何、前の二無畏は自ら智と斷とを說き、後の二無畏は他の爲に障道法を說き盡苦の道を說き、亦智斷とも名づくれば、師と及び弟子と智斷具足するが故に總じて一切の無畏を說くと名づくればなり。

問曰 衆生は何が故に佛は一切智人に非ずと疑ふや。

答曰[六三] 佛の言說したまふ所は或は一切智人に非ざるに似たること有ればなり、佛の問うて、汝は

【六一】此言は衆法品第七にも引用せらる。

【六二】此は經の文にて衆法品第七、修定品第一百八十八に引用せらる。

【六三】一切智人難の解答。此問題は重要なるものなり。

も後に少智を得れば便ち能く無畏なり、何に況んや、世尊は久遠より來其の心は廣大にして又一切智を得たれば而も畏あるべけんや。

復次に人有り他に勝ること能はざるが故に畏るる所有るも、一人として佛のこれに勝らざる者あることなきが故に畏るる所なし。又論者ありて言辭に善く亦義趣をも善くすれば則ち畏るる所なし、佛は卽ち是れなり、一切智を得るが故に義趣に善く、無礙辯を得るが故に言辭を善くしたまへばなり。或は復た人あり、事に於て力無くして而して怖畏を生ずるに、如來は一切智を逮得したまふが故に一切の事に於て力有らざることとなし。一切の經書、一切の論議にも皆悉く通達して明了に問答したまふ、故に畏るる所なし。復次に人の若しくは家、若しくは性、若しくは色、若しくは戒、多聞智等を短闕するが故に譏論を致すも、如來は此れに於て都て闕くる所なし、故に畏るるなし。又如法論者は破壞すべからず、佛は卽ち是れなり。[五八]阿叔羅婆羅門の世尊に語りて言へるが如し、如法論者は勝り難く壞し難し、順道論者、思量論者、有因論者も亦復是くの如し、と。復次に若し人にして四種の論法を成就せば、亦勝り難く壞し難し。一には正[五九]報に住す、二には因非因を受く、三には能く譬喩を受く、四には論法の中に住す。佛は此の四を具したまへば、諸天世人の能く勝るものなし、故に畏るる所なし。復次に善師に諮らずして而も論議する者は則ち壞すべきこと易し、如來は昔曾て[六〇]錠光等の無量の佛の所に於て論法を修集したまひしが故に壞すべからず、復次に佛は二諦を說きたまふ、所謂世諦と第一義諦となり、是の故に智者も壞すこと能はざる所にして、凡夫は無智なれば亦與に諍はず、又佛は世間と共に諍はず、世間が有と謂はば佛も亦有と說き、世間が無と謂はば佛も亦無と說く、是の故に諍ふことなし、其の諍ふこと無きを以ての故に壞すべからざるなり。復次に論に二種あり、一には眞實論、二には諂曲論なり、諸の外道等の多くは諂曲論なるも佛は眞實論なるが故に壞すべからず。又佛の法の中にては正行が淨なるが故に論議も亦淨な

【五八】阿叔羅婆羅門は Asmara-Brāhmaṇa なり。

【五九】三本宮は正執とす。

【六〇】錠光（Dīpaṁkara）。また然燈と譯す、釋迦如來が因位修行の時、此佛の出世に逢ひ、五莖を買ひて供養し、髮を泥に布きて之を踏ましめ、未來成佛の記別を受けし佛なり。十一切處品第一百七十二には定光に作る。

淨を說くが故に十力有り。九力を得るが故に則ち智が成就し、第十力を得るが故に則ち斷が成就し、智と斷とが具足したまふが故に世尊と名けたてまつる、天人の敬ふ所なり。

四無畏品　第三[五三]

又佛は四無所畏を成就したまふ、是の故に應に禮すべし。四無畏とは如來が一切智と一切漏盡とを得て能く障道と及び盡苦道とを說くを云ふ。此の四法の中にて、若し人有り來りて法の如く難問せむに、我は畏るゝ所なしといふ、初めの無畏は是れ一切智にして亦是れ九力なり、第二を斷と名づく、即ち第十力なり[五四]、智と斷とが具足するが故に、如來には自ら[五五]已に功德が具足し、後の二無畏は他をして具足せしむるなり。佛の說ける障礙は實に是れ法を障ふ、所謂不善或は善の有漏は解脫を障ふが故に障礙法と名づけ、障礙を離るるが爲の故に出道と說く。

問曰　汝が此の中にて說く所の諸力の如きは即ち是れ無畏ならば、今[五六]、力と無畏とは何の差別有りや。

答曰　智を名づけて力と爲す。此の力を以ての故に堪受する所あるを是を無畏と名づく。愚癡の人は慚愧なきが故に、多く堪受する所あるも、如來の堪受は智慧より生ず。又智を以ての故に他人を畏れず、故に無畏と名づく、所以は何、[五七]或ひとは智有りと雖も猶怯弱なるが故なり。又智を名づけて力と爲し、能說の是の智を無所畏と名づく、所以は何、人の知ると雖も善說せざるもの有るが故なり。又能く他人に勝るを名づけて無畏となす、所以は何、人の知ると雖も他に勝らざるもの有るが故なり。智が無盡なるが故に名づけて力と爲し、辯才が無盡なるが故に無所畏と名づく。復次に說に義趣有るが故に名づけて力と爲し、所說自在なれば名づけて無畏と曰ひ、又因を名づけて力と爲し、果を無畏と名づく、智の中より無畏を生ずるを以ての故なり。又人は生れてより怯弱なる

を永斷する智力。六通の中五通は佛教以外にていはれ居たるものにして後に佛教に入りたるもの、此第六のみは佛教にて認めらるゝに至れるものなり。

【五三】四無所畏の定義。麗本は單に四無畏品となせど、三本宮本は四無所畏品とす。無所畏の方が通常にて、次文にもかくあり。四無所畏は一切智無所畏と漏盡無所畏と說障道無所畏と說盡苦道無所畏とをいふ。

【五四】前品の最後部を見るべし。

【五五】大正大藏經は己に作り、縮刷藏經は巳に作る。後者は巳を已と同じとなす例なり。十號品第四の善逝の釋の部に如來自已功德具足の句あり、そこにては已に作れば、今こゝにてもそれと同一と見る。

【五六】力と無畏との差別。

【五七】ここにては、或の字を用ふ。他處にては有の字を用ひて或の意を示す。故に有人は或人と同意なり。有人を本國譯にては時には人有りとも讀み、時には有る人とも讀みたり。

まふなり。

[四四]佛は世間の無量の種性を知りたまふ。衆生にして久しく所樂に習ふときは則ち其の性を成ず、[四五]調達等の世々に佛を謗りて惡心轉深まれば便ち名づけて性と爲すが如し。善性も亦然なり。或は衆生有り性從り欲を起し、或は現を緣じて起す、如來は悉く所樂及び性を知りたまふ。故に名づけて力と爲す。

[四六]佛は一切の所至の處道を知りたまふ、是の道を行ずれば地獄の中に生じ、乃至天に生ずと知り、是の道を行ずれば、涅槃に至ることを得と知り、是の業は皆根欲性より生じ、有漏業の故に五道の中に生じ、無漏業の故に涅槃に至ることを得と知り、先には[四七]但道のみを說き、今は道果を說き、又先には總相にて說き今は分別して說く、是くの如きの業あらば地獄に趣き、是くの如きの業あらば能く涅槃に到る、地獄に趣く者にも亦差別有り、是の業は當に[四八]活地獄の中に墮すべし、是の業は當に[四九]黑繩地獄に墮すべしと。是の故に佛は第七力の中に於て細微の業を知りたまふに、餘人は若し知るも分別すること能はず、故に名づけて力と爲す。

[五〇]佛は是くの如く過去の業果を知りたまへば、宿命智力と名づく。又佛は衆生の先に行ずる所の道を知るに應じて、知り已りて法を說きたまふが故に宿命に於て智力有りと說く。又佛は過去の一切の生處の若しくは色處に在り若しくは無色處なるを念じ、自ら己身を知り亦衆生をも知りたまふ。故に名づけて力と爲す。

[五一]佛の天眼智は未來世の三有の相續を見、三種の業、四種の受法を知り、亦記說をも爲して、了知すること無礙なり、故に名づけて力と爲す。

[五二]漏盡力を以て不相續を知りたまふ。衆生は命終して、或は相續する有り、或は相續せず、是の力を皆一切衆生至處道力と爲す、總じて涅槃道と說く。今此の力の中にて、廣く分別して佛の因の垢

【四四】種々界智力にて世間衆生の種性を知る智力なり。
【四五】調達（提婆達多 Devadatta）。は阿難の弟にして、佛陀に反對し、靈鷲山に岩を割りて佛陀を傷け、又象を放ちて佛陀を傷けんとして、失敗したりといふ。されど實は凡ての比丘に糞掃衣、常乞食、一坐食、常露座、不受鹽及五味を嚴密に守らしめむことを提言して佛に容れられず、自ら他と共に之を固く行じ居たる人なり。此五事が佛の趣意と一致せざるに、之を强いて行ひて多人を率ひたるより別派の如き觀ありて後世の佛教者より異端視せらるゝなり。
【四六】偏趣行智力にて一切の趣に至る道を知る力なり。
【四七】但は此論を通じて唯と同じタダシと讀むべからず。
【四八】活地獄、八大地獄の一、衆生を斫刺等にて半死にし再び活かしむるが故に此の名あり。
【四九】黑繩地獄、八大地獄の一、黑繩を以て支體を秤り後に斬鋸するが故に黑繩といふ。
【五〇】宿住隨念智力にて宿命を知る智力。
【五一】死生智力にて天眼無礙の智力。
【五二】漏盡智力にて一切煩惱

は淨く、施し已つて悔ゆること無くむば、是の業は果を得、之を名づけて報と爲す、と。唯佛のみ能く是の業の多少と若しくは定不定と現報生報と及び後報と等を知りたまふ。悉く知りて餘なきが故に名づけて力と爲す。

[三七]佛は諸の禪解脫三昧[三八]三摩跋提に於て垢を知り住を知り增を知り淨を知りたまふ。此の義の中に於て、禪とは[三九]四禪四無色定に名づく、即ち是れ色界無色界の業なり、解脫とは謂く[四〇]八解脫にして、能く是の業を盡くす。是の禪と無色定と及び八解脫とを名づけて三昧と爲し、是の三昧の用の現在前することを得るを三摩跋提と名づく。三摩跋提に四種を分別す、隨垢と隨住と隨增と隨淨となり。垢を知ることは隨垢定、住を知るとは隨住定、增を知るとは隨增定、淨を知るとは隨達定にして、隨達定とは煖頂忍等の四法是れなり。佛は此れ等に於て悉く知りたまひて餘なし、故に名づけて力となす。

[四一]佛は衆生の諸根の利鈍を了知したまふ。信等の根勝るが故に名づけて利と爲す、諸佛等の如し、鈍は不及に名づく、蛇奴等の如し。中根有ること無し、不定なるを以ての故なり。利根にも邊あること、諸佛に如く、鈍にも亦邊あること、蛇奴の如くなるも、中には邊なきが故に中根を說かず。復次に二種の道あり、信行と法行となり、復二道あり、難道と易道となり、此の二道に異るが故に名づけて中と爲す、人を觀ずるに利鈍あり、是の故に中と爲す。又所樂(げう)に隨ふが故に根に差別有り、信根を樂(ねが)ふが故に名づけて信と爲す。多く智慧有る人は諸根皆勝る。所樂を以ての故に[四二]和伽利と名づく、信根を勝と爲す。是くの如きの諸根を悉く知りたまひて餘無し、故に名づけて力となす。

[四三]佛は衆生に各所樂(げう)あることを知りたまふ、樂(げう)をば名づけて欲と爲す、人が酢を樂(ねが)へば則ち酢を欲するが如し。佛は所樂に隨つて各各に別知したまふ、謂く是の衆生は五欲を樂ひ、或は道を修することを樂ふと。此くの如く知り已りて宜しきに隨うて法を說くが故に能く廣く一切の衆生を度した

【三七】之を一切靜慮解脫三摩地三摩鉢底出離雜染淸淨智力といひ、諸禪解脫三昧三摩跋提を知る智力とす。

【三八】三摩跋提(Samāpatti)。譯して等至といふ、心の平靜の狀態に住するをいふ。

【三九】四禪は初禪第二禪第三禪第四禪にて色界四禪に相當す。四無色定は無色界に相當し空無邊處識無邊處無所有處非想非非想處をいふ。初禪品第一百六十九以下參照。

【四〇】八解脫。八背捨ともいふ、八勝處、十一切處と關連して說かれる禪定にして、三界に繫縛する染法を棄捨するための八種の出世間の禪定をいふ。八解脫品第一百六十三參照。

【四一】之を根上下智力といひ、他の衆生の根の上下を知る智力をいふ。

【四二】和伽利、は恐らく Upa-kāri (-n利益) の音譯ならむ。

【四三】種々勝解智力といひ他の衆生の種々の欲樂を知る智力を指す。

となす。

復次に、佛には十力が成就するが故に智慧が具足したまふ。往反の因緣を以ての故に十力と說く。

十力品　第二

初めは[三三]處非處力なり、是れ因果の中の決定智なり。是の因よりは是くの如きの果を生じ、是の果をば生ぜずと知ることにして、不善を行ずれば必ず苦報を得、樂報をば生ぜざるが如し。是處は是の事有るに名づけ非處は是の事無きに名づく。是の初めの力は諸の力の本なり。

問曰　世間も亦因果の是處と非處とを知る、麥よりは麥を生じて稻等を生ぜずと知るが如し。

答曰　處非處力は業等の法を知るが故に此の力を甚深第一なりと名づけ、諸天世人の及ぶ能はざる所なり。又生法の因の次第と緣の增上とを了知したまふ、是の故に此の力を名づけて微妙と爲す。謂く、去來現在の諸業及び諸受の法を知り、處を知り事を知り因を知り報を知りたまふなり、是の故に此の智は之れを名づけて力と爲すなり。

[三四]三世の處と事と因と報とを知りたまふを以ての故に甚深と名づく。所以は何。[三五]或は謂く過去未來は無法なるが故に佛は此れに於て說いて力有りと言へばなり。[三六]又は法は過去未來世の中に在らば現相無しと雖も佛は亦現に知りたまへばなり。復次に業に二種あり、若しくは善と不善となり。或は善業にして而も現に苦を受く有り、持戒を以てして而も諸惱を受くが如し、或は罪業にして今現に樂を受く有り、破戒を爲して而も自在を得るが如し、或は疑を生じて、未來世も亦現在の如しと謂ふ有り。是の故に如來は業に次いで受を說きたもふ。受の法は四種なり、現苦後樂と現樂後苦と有り、現樂後樂と現苦後苦と有り、佛は悉く處と事と因と報とを了知したまふ。處とは受者に名づけ、事とは施物に名づけ、因とは施心に名づく、經の中にて說くが如し、先に心が歡喜し、施す時に心

瞰想、散想、骨想、燒想にして、人身についてかく觀念するなり。

【三三】是處非處力。處とは道理の義にてコトハリなり。非處は非道理なり。或は是處非處智力ともいふ。是處の是は是非の是なり。

【三四】業異熟智力といひ、三世の業と報とを知る智力を指す。

【三五】大衆部系統の說なり。

【三六】上座部系統の說なり。

を斷ずる智の念念に盡く所に於て悉く分別し知りたまふ。又衆生の深心に念ずる所を知り、應の如くに法を說きて解脫を得させたまふ。是の故に能く衆生の一切の解脫道の中に於て、知見具足したまふ。又佛世尊は時を知りて法を說きたまふこと、[二三]鈨扶盧梵志等になせしが如し。又如來は善く諸法の差別を知りたまふ、應に是の人の爲には是くの如きの法を說くべしと。佛の阿難に語りたまふが如し、應に[二四]車匿の爲に離有無經を說くべし、と。是の故に如來は善く解脫を知りたまふ。又善く方便して衆生の垢を斷じたまふこと、[二五]難陀の爲に欲を以て欲を斷ずるが如し。又先に衆生の信等の根の熟せるを知り、然る後に法を說きたまふこと、[二六]羅睺羅になせしが如し。又衆生の業報の爲に障へられて解脫を得ざること有らば佛は能く盡くさしめ、然る後に法を說きたまふ。又た衆生の時を待つて漏の盡くこと有ること、夫婦經に說くが如く、又衆生の人を待つて漏の盡くこと有ること、舍利弗の[二七]阿說嗜を待でるが如く、又衆生の處を待つて漏の盡くこと有ること、[二八]弗迦沙王の如く、又衆生の伴を待つて漏の盡くこと有ること、[二九]放牛難陀の[三〇]阿由陀村人を待つ等の如し、又衆生の佛の眞身を待ち、又は化身を待ちて而も漏の盡くことを得るも有り、佛は悉く別知して而して爲に法を說いて解脫を得しめたまふ。又佛は種々に妙法を說きたまふが故に、能く一切の解脫を障する法を破したまふが故に、解脫知見具足と名づく。又佛は法を說いて義趣を善くし、非義にして果報なき事を說きたまはず。又佛は漸次に解脫道を說きたまふこと、猶算數の[三一]見の故に解し易きが如し。又佛は衆生の宿植善根の次第を知りて法を說きたまふ。又佛は現に解脫を得て而して人の爲に說きたまひ、他從り聞きたまはず。又佛の法は多諸の技能を具足す。衆藥を以て具足して病を療するが如く、佛の法も亦爾り、衆の治門を以て一切の煩惱を除くこと、[三二]九想等大小諸結の反害すること能はざるが如し。故に能く具足して諸の煩惱を破するなり。又無上の方便にて衆生を濟度したまふ、或は軟語を以てし、或は苦言を以てし、或は復兼て軟言苦言を以てす。是れを如來の解脫知見具足

【二三】鈨扶盧梵志、鈨は鈂と同じ。シン或はチンの音。Timbaru 又は Timbaruka の音譯か。
【二四】車匿（Chanda）。比丘の名佛陀出家の際從へる御者とは別人。智相品第一百八十九にも出づ。
【二五】難陀（Nanda）。佛陀の異母弟、佛歸城の二日目に結婚せむとせしを出家せしめ、後愛欲に苦しみしを遂に化度したりといふ。三慧品第一百九十四にもあり。參照すべし。
【二六】羅睺羅（Rāhula）。悉多太子の子。立俗名品第一百四十一、三慧品第一百九十四、四十四智品第二百一參照。
【二七】阿說嗜（Assaji）。舍利弗は此人の威儀に感じ、此の人の敎を受けて、佛門に入る。
【二八】弗迦沙王（Pukkusāti）、Takkasilā の大王なり、出家して佛陀に歸依す。
【二九】放牛難陀。牧牛者にて、憍賞彌（Kosambi）の恒河の岸にて、世尊の浮木海に流るゝ喩に就きて敎へ給ふを聞き出家す。
【三〇】阿由陀（Ajita）。
【三一】現と通ずる見ならむ。
【三二】九想とは、脹想、青瘀想、壞想、血塗想、膿爛想、

樂に於て能く捨想を生じたまふ。

問曰　不樂の中に於ては捨想を生ずべし、云何ぞ、中に於て能く樂想を生ぜむや。

答曰　善く心を修するが故に、惡口等の不樂の法の中に於ても以て礙と爲さざるなり。餘の神通――天眼と天耳との知と他心智と宿命通と[18]――の中に於ても亦所礙無し、定力を以ての故に神通無礙なれば、諸の禪定に於て通達明了なるなり。其の餘の衆生は其の名をも聞かざるも、唯如來のみ有りて出入無礙なり。又佛の禪定は之を名づけて力と爲すこと、[19]十力品の中にて說くが如くなるも、餘人には有ることなし。是の故に如來には定品具足したまふ。

[20]慧品具足とは二種の無明――一には禪定を障ふと、二には煩惱を起すと――有るを、如來は悉く斷じたまひ、相違を斷じたまふが故に慧品具足するなり。又自然法を得て他より聞かず、言辭に巧にして善く義趣を知り、辯才竭くことなく智慧盡くこと無し。又餘の衆生は諸の技術に於て具足すること能はざるも、唯佛のみは盡く知りたまひて減少なること有ることなし、是の故に如來には慧品具足したまふ。又佛の所說の法は義趣を善くしたまふに、餘の小智の人は言說する所有るも過無きこと能はず、唯如來のみ有りて言ひたまふ所に失なし、故に知る、如來には慧品具足したまふ。又無量の功德をば此の智慧を成じたまふが故に能く具足したまふ。又微妙の法を說きたまうて錯謬あることなきこと、不淨觀の婬欲を破す等の如し。又智慧勝るが故に威儀も亦勝る。是等の緣を以て慧品具足したまふなり。

[21]解脫品具足とは二の無明に於て心は俱に解脫して餘習有ることなく、永に退轉したまはず、是くの如き等を解脫具足と名づくなり。

[22]解脫知見具足とは能く一切の斷結道の中に於て念念に悉く知りたまふことなり。人の木を伐るがために手に斤斧を執るとき、邊に智者有りて柯の微しづゝ盡くを知るが如く、佛も亦是くの如く、結

【一八】これ六通中の四種なり。

【一九】次の品を見よ。

【二〇】第三、慧品具足。

【二一】第四、解脫品具足。

【二二】第五、解脫知見具足。

問曰 諸餘の[一〇]聖人にも亦復此の五品の功德あり。佛と何の異ありや。

答曰[一一]佛の五品の法は具足して淸淨なり。所以は何。

[一二]身等の諸業は錯謬なきが故に戒品具足す。又、佛は尙誤つてすら禁戒を毀りたまはず、況んや當に故らに犯したまふべけんや。又久しく慈悲を集めたまへば、惡心は發らず。經の中にて說くが如し、[一三]佛は[一四]阿難に語りたまはく、若し人にして生れてより慈を習せば能く惡を起さんや、不や、不なり世尊、と。佛は久しく善性を集め、自ら守り、名聞を怖畏するが爲に而も禁戒を持するにはあらず、又無量の佛の所に於て、久しく戒行を修し三毒の根を拔きて永く餘習なし、是等の緣を以て戒品具足したもふ。

[一五]定品具足とは佛は此の定に依りて一切智を得たまへり、此を以ての故に知る、定品具足す。[一六]酥油多く、燈炷大なるが故に、光明も亦大なるが如く、又佛の定は堅固なること、漆が木に漆するが如くなるに、餘人の禪定は華上の水の久しく住することを得ざるが如し。又佛の禪定は無量劫に於て次第に漸に成じたり。故に能く具足す。又如來の定は衆緣――若しくは人にても若しくは處にても若しくは說法等にても――を待たざるに、餘人のは爾らず。又如來の定は常に深修習なること、人が自の字を恒に憶うて忘れざるが如し。佛の禪定に入りたまふには心力を加へたまはず。又譬へば人は自ら住處に於ては乃ち自ら語言し安穩にして難きことなきが如く、佛の定中に處したまふも亦復是くの如し、故に如來は常に三昧に在しますと言ふ。又禪定を壞する大喜等の法をば佛は悉く能く斷じたまひ、又定の果報として自在神通を得ること最勝第一にして、如意[一七]通を以て一念の頃に於てすら、能く十方無量の世界を過ぎ、一切の爲す所を意に隨うて卽ち辨じ、諸の變化に於て自在無礙にして、心は能く普く一切の諸法に周りたまふに、其の餘の衆生は能く及ぶ者莫し。又佛は聖自在法を成就したまひて、可樂の中に於て不樂の想を生じ、不樂の中に於て能く樂想を生じ、樂不

【一〇】五品は五分法身なれば、こゝにいふ聖人は直接には阿羅漢果を得たるものをいふ理なり。

【一一】佛の五品具足を說明す。

【一二】第一、戒品具足。

【一三】思品第八十四及び三業輕重品第一百一十九に同一の言あり。

【一四】阿難（Ānanda）。佛陀の從弟にして、佛陀歸鄕の時に出家し、佛陀の侍者となりて二十五年間、よく佛に仕へし人。

【一五】第二、定品具足。

【一六】酥油（Ghṛta）。牛乳より製せし油にして燈用、又は食用に供す。

【一七】六通の第一なる身通と同一なり。六通の第一は神通ともいはる、此論にては身通と譯さる。自在神通も身通と同一なる理なるも、これは一般的にいへるものと解するも可なり。一念は一刹那。

若し人にして此の　罪負等の衰惱を除かんと欲せば、
正論を求めんが爲の故に　當に深智の者に近づくべし。
深智の者に親近するは　是れ正論の根本なり、
此の正論に因るが故に　能く福勝等を生ず。
利智の人の　百千の邪論を誦すこと有りと雖も、
衆に於て辯才　名聞の利を得ること能はざるに、
佛法の第一なることを知りて　說かば、亦樂果をも得、
法をして久住せしめんと欲し　名聞の爲にせざるが故なり。
廣く諸の異論を習ひ、　遍く智者の意を知りて、
斯の實論を造らんと欲す、　唯一切智のみ知りたまふ。
諸の比丘の異論の　種々なるは佛は皆聽したまへり。
故に我は正しく、　[四]三藏の中の實義を論ぜんと欲す。

[五]是に於て論を說く。

問曰　我は今汝が成實論を說くことを知る。汝は先に、前に所應禮を禮したてまつると言ふは所謂佛と爲すなり、何が故に佛と名づくるや、何れの功德を成ずるが故に、應に[六]禮すべきや。

答曰　佛とは[七]自然人にして一切種智を以て、一切の法の自相差別を知るに名づく。一切の不善を離れ、一切の善を集め、常に求めて一切衆生を利益するが故に名づけて佛となす[八]。教化の所說、是れを名づけて法と爲し、此の法を行ずる者、之れを名づけて僧と爲す。是の如きの三寶の應に禮すべき因緣を我は今當に說くべし。佛には[九]五品が具足したまふが故に世間と天人との爲に敬せらる。

【四】經律論の三藏なれど實際は廣く佛の法即ち佛教の意味に解すべきなり。或はこの三藏は小乘の異名とも解する說あり。これ三論宗の說なり。然るに十論の初の有相品第十九の初めに佛の法の義を論ぜむと欲すと解釋せられ居れば、三藏を小乘の異名となすは附會說たるに過ぎず。
【五】以下吉祥品第十二までは三寶を明して歸敬偈を釋す。
【六】三本宮本には應に所應禮を禮すべきやとなす。恐らく所應禮の三字は不要ならむ。
【七】自然人は修行に由りて新に得ると反對に、本性上本來完備具足せるをいふ。
【八】佛は佛陀にして覺者の義なり。覺者は自覺覺他覺行窮滿の意。自覺の方面にて一切の不善を離れ一切の善を集めといひ、覺他の方面にて常に求めて一切衆生を利益すといふ。自覺は修得を意味するにはあらず、衆生に範を示すに外ならざるなり。
【九】五品とは、戒・定・慧・解脫・解脫知見なり。

成實論

訶梨跋摩造る

姚秦三藏鳩摩羅什譯す[一]

卷の第一

發聚の中の佛寶論の初の具足品　第一

[二]前に所應禮たる　自然正智者

一切智應供なる　大師の世間を利したまふを禮し、

亦眞淨の法と　及び聖弟子衆とをも禮したてまつる。

[三]今佛語を解して　世間を饒益せんと欲し、

修多羅に應じて　實の法相に違せず、

亦善寂の中に入ることをも論ず、　是を正智論と名づく。

譬へば天の日月は　其性本明淨なるも、

煙雲塵霧等の五翳あるときは　則ち見えざるが如く、

邪論にして正經を覆へば　其の義は明照ならず、

正義が明ならざるが故に　邪智の門は則ち開く、

罪負と惡名聞と、　心悔と疲倦と等、

此の衰惱亂心は　皆邪智に由りて起る。

【一】各卷の下に著者譯者の名を擧げ居るものは本國譯にては凡て省略したり。

【二】此一頌半は歸敬偈。成實論全體を分つて二段となし、初品より三十五品までが序文、三十六品以下終までが正宗分となる。更に序文の中を二分し、頌と三十五品とになす。又頌の十二を分つて、初めの一頌半を歸敬序、十頌半を發起序となす。而して三十五品についても之を二分し、初めの十二品は具に三寶を明して歸敬序を釋し、後の二十三品は論を起す大意を叙して發起序を釋すとなす。正宗分は四諦によつて分たれ、流通分はなし。

【三】以下は發起偈。

論の目錄を擧ぐる所七枚、今將釋此論大分二段云々の部が一枚、成實大小論の部が二枚半、成實論の各品の要文を拔書して大要を知らしむる部が五十七枚半より成つて居るものである。成實論が大乘か小乘かの論に於ては大小乘兩方であるとし、古來異義あるも論は經部の攝で、大衆部より出で大衆部に大乘を雜へ、經部のものとしても大に大乘を混じたものとなす趣意で、穩健な說である。又要文拔書の部には數々有部說經部說を指摘した所があつて親切である。こゝに東田文學士と高野山大學圖書館員諸彥とに謹んで感謝の意を致す。

昭和八年十月三十日

譯者　宇井伯壽　識

ら、理佛としての法身の考は明でないといはねばならぬ。故に法身を基とした報身を考へて居るといふべきであらう。而も此佛を有無兩亦兩非で言詮はすことを得ないとなすのである。之に對して化身は如何に考へられて居るか。故不故品第九十七に、經の中にて亦佛は謗等の不善業の報を受くと說くといふ問に對して、佛は一切智人にして惡業の報なし一切の不善法の根本を斷ぜしを以ての故なり、但無量の神通方便を以てのみ現に佛事をなすこと不可思議なりと答へて居るから、化身は神通變化身とも見らるゝ。然し又此論では菩薩といへば多くは成道以前の佛陀を指し、無上正覺は施等の六波羅蜜の善業によつて得らるとなすこと修定品第一百八十八並に大小利業品第九十九に見ゆる如くであり、菩薩は前世に善業を修集したることを說くから、これ等の點からは業報身と見做すことになると考へらるゝ。然るに又菩薩は勿論斷惑であつて伏惑ではないから、常に求めて衆生を利益すといひ、神通方便にて佛事をなすといふに見れば、願生說になるのであらう。但し願生が明確に言詮はされて居ないのが、考を明瞭ならしめないのである。恐らく此佛陀の考は異部宗輪論に見ゆる大衆部の考と軌を一にすと見るべきもので、龍樹の二身說までは發達して居ないものである。龍樹の說では十八不共佛法は右のものとは異つて居るから、右の如き十八不共佛法を綱格として佛身を說く所は小乘說の型を脫し盡さないが、同時に說明解釋に於て小乘以上となつて居ると認めらるゝのである。

　以上で此解題を終る。我邦に於ける成實論の渡來傳播等についてはこゝには之を述べないが、格別著しいこともない如くである。

謝辭

　この成實論國譯は文學士東田大童君が豫稿として全部を擔當したものである。同君は曾て刊行せられた國譯大藏經論部にある國譯成實論を參照し、麗本を基としたのであつた。解題者はこの豫稿を取つて思ふまゝに改竄更正したから、全部の責任は解題者の負擔である。改竄更正に際しては參考書は殆ど求むるを得なかつたが、高野山大學圖書館所藏本の中に小乘成實論要文備目なる寫本があつて便宜を得た。此書は元來は洛陽五百佛頂山求法沙門智本海應のものであるが、この所藏本には卷尾に明治二十七年夏安居中以海應僧正眞蹟之本令書寫焉とあつて、更に在東京目白僧園慈窮隆應と記されて居るから、浦上隆應師所藏本で、高野山眞別所から圖書館に寄託せられて居るものである。內容は初めに目錄として成實

義の冠註によれば、成實論を大乘論となすは梁の三大法師の說、小乘論となすは淨影嘉祥の考、具に大小を含むとなすは光統智首南山定賓の說であるとせられて居る。

然し、一層根本的に考察すれば、抑大乘と小乘との區別が何處に存するかゞ問題となるであらう。若し嚴密に大乘と小乘との區別を立つることを得ないならば、成實論を大乘論となすか小乘論と見るかの爭は取るに足らぬものとなるであらう。從來一般に行はれて居る說は、大乘學者の側のみからの說であつて、所謂大に大多勝の義あり、小に小少劣の義ありとなす種類の考が、根本に橫はつて居つて、眞の學術的の價値に乏しいものであるが、然し又他方からいへば、同時に長年月間通用したものであるから、大體としては大小乘に區別があると認められ得る。故に大體概念として通用する大小乘の區別に基いていへば、成實論を全體として見、又其典據として引用せらるゝ殆ど凡てが阿含經なるより考へて小乘論的傾向の勝つて居ることが表はれて居るといへるであらうし、せい／＼小乘から大乘に及ぶ中間過渡にあるといふべきであらう。然し今こゝに於ては、大小乘の根本的區別問題にまで立入つて、これ等のことを確定し、又はそれによつて成實論の所屬を確定せむとするのではない。それ等の點は廣く學者の研究の成果に一任せむとするのであるが、一つ附して置くべきことは成實論が佛を如何に考へて居るかについてゞある。佛陀は自然人にして一切種智を以て一切法の自相差別を知悉し一切の不善を離れ一切の善を集め常に求めて一切衆生を利益すとなすが、五分法身を完備し、十力四無所畏三念住大悲の十八不共佛法を有し、十號三不護を具足すとなすのが大綱である。一切智人なるはいふまでもないが、佛陀自らの語にも一切智人ならざるが如きに似たものがある點で、これが問題となり龍樹などの論ずる所を思浮ばしむるが、成實論では、佛は俗に隨うて語るからといふを根本として通難して居る。故に、世諦と第一義諦とあるとなす二諦說に基くのであるが、又之に基いて佛陀に眞身と化身とを分つて居る。此二身の解釋は、明瞭に表はれて居ないが、如來を釋する所に如來とは、(一)如實の道に乘じて來りて正覺を成ずと、(二)言說する所、凡て眞實にして虛ならざる如說をなすとの二種の解釋が存するから之によつて考へると、如から來つたと見る佛を眞身となすのであらう。二世無品第二十二に、佛は寂滅の相であつて、世に現ずと雖有無に攝せずとあるから、如何にも如を其まゝ佛と見て居るかの如くであるが、然し明確に如を佛となすとまでは言詮はさないか

講讀研究は唐代までも盛であり、多くは江南に流行したが江北にも亦行はれたのである。梁武帝の時には建業は大品成實が盛であつたが陳武帝の時には大品三論が盛になつたといはれ、續高僧傳慧榮の傳にも梁武帝は建初彭城盛に成實を弘むとある。然し僧傳は決して特に成實論に注意し又は成實論を主として述ぶるものではないから、逸せられて居るものも鮮くないに相違ないし、義疏註辨も以上いうた外に多々あつたに相違ない。法雲傳には勅によつて諸名德が義疏を作らしめられたとあるし、略成實論記によれば齊の文宣王は僧柔慧次等の諸論師に成實論を抄略せしめて九巻とし周顒に序を製せしめて天下に流通せしめたと傳へて居るから僧傳のみでは凡てを盡くすことは出來ない。卽ち他の方面に於て典籍目錄及び關係著述などを調査するを要するのであるが、然しかゝる方面で完全なものが存するのではないから、以上によつて大要を知ることにする外はない。以上によつて之を見るに支那に於ては其最初から多くは成實論は三論十地大品法華涅槃勝鬘維摩等と共に研究せられ講演せられたのであつて、自然成實論とこれ等の大乘經論と關係付けられ其辨釋に於ても論は經論に據つて大乘として扱はれたものなるを示して居る。實際支那に於ては成實論は大乘論とせられて居たのであるが、隋代に入りて天台嘉祥、特に嘉祥が力を費して之を小乘論となしたから爾來遂に小乘論とせられ終つたのである。嘉祥は三論玄義中に十箇條によつて小乘論なることを證して居る。現今として見れば十箇條凡てが正當なものとはいへないが、殊に最近境野博士の成實大乘義なる論文によつて嘉祥の論の正しくないこと及び嘉祥に傳はつた新三論が之をなすのであること並に梁の三大法師等の大乘的の辨釋及び之を大乘論となすことが羅什以來の說なることが明にせられた。故に三論宗の嘉祥が成實論を小乘論となすに努力し成功した理であるが、三論宗に於ても法朗慧勇慧布の如きは成實論を學むだのであり慧布の弟子保恭も亦學習した等の事蹟があるから三論宗のもの凡てが嘉祥の如くではなかつたのではなからうか。長干寺辯公は中假師と呼ばれて法朗嘉祥から排斥せられて居る程である。之に反して成實師の中には、數論毘曇にのみ通じたと傳へらるゝものもあるから、これ等は或は必ずしも、成實論を大乘論とのみ見たのではなからうかとも想像せらるゝ。玄暢の阿梨跋摩傳では大乘論となして居るとは思はれないこと、前述の如くである。然らば之を大乘論となすべきか小乘論となすべきかは、學者の意見によるものであつて、何れかと決定せねばならぬものではないであらう。藏頭三論玄

初め律を學び後成實を聞き韶法師からも聞いたといはるゝが、韶は慧韶であらう。又寶海は法雲から成實を學び、道紀も成實に長じて講ずること三十年であつた。

隋代に入つて法安は三論宗の法朗に學むだ人であるがそれ以前已に成實を研究して居たといはるゝし、眞觀も亦法朗に就學したがそれ以前に華林園法師から成實を受くる十遍であつたし、慧暅（慧暅ともあり）は龍光寺僧綽から成實を習ひ更に龍光學士大僧都舒法師に從つて成實を精研し更に後に涅槃大品と共に講じ、成實玄義を講ずること六十三遍、論文を講ずる十五遍涅槃大品各二十餘遍と稱せられ、慧弼は惠殿寺領法師より成實を聽受し爾來四論涅槃法華に通曉し、道憑の弟子靈裕も嵩林二師から成實を學び後成實毘曇智論に各抄五卷を作り其他三藏の疏著甚だ多く、智脱も亦華嚴十地に通じ成實に造詣深く莊嚴寺智嚼法師なる成實研究者にも重んぜられ後に論疏四十卷を製したるが如く又梁代琰法師（恐らく僧遷傳に僧遷が招提慧琰の禪品義を難じたとある慧琰であらうし、鼈頭三論玄義の冠註に此人の言が引用せられて居る）の成實論玄義十七卷を修治し、生涯に大品涅槃淨名思益を講ずる各三十許遍成實文玄各五十遍、業を傳ふる學士に慧詮道灌詮聲德雙揚灌復立貞梗があつたといはれ慧乘は其叔祖智强も成實涅槃の達人であるが自らも莊嚴寺智嚼法師に成實を受けて佛果は二諦の外に出づとの義を立てたといはれ、道莊は前にいうた寶瓊から成實を學び三論宗の法朗から四論を受け又法華に疏を製し、法論も恐らく同學で成實に深く、眞諦三藏の弟子法泰に學むだ靖嵩もそれ以前に道猷法誕から成實雜心を受けて居つたのであるし、又智琳は東安寺大僧正暅法師（前の慧暅と同じ）から成實毘曇を受け後大品法華淨名を講じたといはるゝ。此外にも隋代に曇觀曇瑎寶巖なども成實に達して居た。當時は既に攝大乘論續いて漸次倶舍論が多く研究せらるゝ頃であつて、成實論の研究講演は比較的に少くなりつゝある時期である。攝論に達せる道奘の弟子の道宗は智論十地地持成實毘曇を學びて後慧日寺に住して常に成實を講じ、保恭は三論宗の人で慧布の弟子であり、開善徹法師より成實を聽いて義疏を寫した如く又惠曉禪師からも成實を學び、慧隆は法雲寺確法師の成實を講ずるを聽き慧暅にも就き後成實を講ずる三十遍涅槃大品各十餘遍といはれ、唐代にも前にいうた寶瓊から成實を學むだ慧因があり、莊嚴寺嚼法師より成實を受けた法琰があり、新羅の人圓光は僧旻の弟子から學むだが成實に通じたといはれ、其外猶道傑神素玄績等多少はあるが殆どいふに足らない如くである。

以上の僧傳の上のみで見ても成實論の

甚だ多く、法雲は莊嚴寺で僧成玄趣寶亮に學び、恐らく道慧をも知つて居たであらうし、更に僧宗にも從ひ、後勅によつて諸名德に成實義疏を作らしめた時法雲は經論合撰して四十科あり四十二卷あり之を自ら勅によつて講じ、智藏は僧旻法雲と同門であり又定林寺で僧遠僧祐、天安寺で弘宗に師事し、後彭城寺で成實論を講じ聽者千餘人あり、恐らく私記を製したであらうし、大小品涅槃般若法華十地金光明成實百論阿毘曇心等を講じ各義疏を著はしたといはれ、弟子龍光寺僧綽があつて特に成實に秀で、嘉祥大師は單に龍光と呼びて此人の說を數々著書中に引用闢說し、僧旻の弟子には慧朗慧略法生慧武等があつて廣く諸部を綜するも特に成實を以て名を擅にし、又僧旻の他の弟子慧韶は成實を聽いて註を作り、龍光寺僧綽にも從ひ、成實の滅諦を本有と爲し、そして麁細を以て心を折したといはれ、僧密は道明の弟子で經として講ぜざるはなきも專ら成實を以て奇を繕へ氣を負ふといはれ、道登は涅槃法華勝鬘を研究し僧淵から成實論を學び、道超は僧旻に聽き、後に法珍が成實論を講じ、滅諦の三心の滅に先後なしといふを聽いて之を誤とし僧旻の解の勝れるを知つたといはれ、又法寵の弟子慧開があつて法寵から阿毘曇成實を學び又智藏僧旻にも聽き、僧柔慧次から成實論を學むだ法開があつて成實論に於ては智藏と相並むだが、慧開も法開も共に道登の同學なる法度並にその弟子で三論宗の祖師僧朗と關係の深い人と見えて法度傳の中にも列名せられて居るし、法貞は道記の弟子で法華を誦したが長じて成實を善くし、寶淵も亦僧旻に成實を受けて通じ、歷代三寶記によれば梁天監中に優婆塞袁曇允は成實論類抄二十卷を撰し文宣王の抄と相似て居つたといはるゝが、曇允は寶唱法雲等と共に僧伽婆羅の譯場で筆受をなした人である。

陳代に入つて洪偃は龍光寺僧綽に値ひ成實を闡揚した人で成實論疏數十卷を著はし、三論宗の法朗も南澗寺仙師（蕺頭三論玄義の冠註に此人の言が存する）から、成實論を受け、慧勇も亦僧綽法寵から成實を學びて刻苦砥勵後に論文を講ずる十許遍とあり、眞諦三藏の十七地翻譯に參加した寶瓊も南澗寺仙師に從學し成實に通じ講ずること九十一遍で玄義二十卷を造り文を講ずる二十遍文疏十六卷あり涅槃大品法華維摩を講じ疏を製し、眞諦三藏に學むだ警韶も天台大師等の爲に龍光寺で成實を講じ、一生成實を講ずる五十餘遍涅槃大品金光明等數十遍といはれ、三論宗の慧布も寶瓊から成實論を習ひ、慧嵩は智遊から毘曇成實を承けて名聲聞え、光統律師の系統では道憑が成實地論涅槃華嚴四分に通じ、靈詢は成實涅槃を學びて論の刪要兩卷を作り、寶象は

た僧導は三論成實に達し、恐らく初めて成實論義疏を造り、弟子の僧威僧音も成實に達して居た。涅槃の達人慧嚴の弟子の法智も亦成實を善くしたといはるゝから、慧嚴なども亦通じて居たに相違ない。

宋代に入つては、高僧傳によつて見るに、道亮は成實論義疏八卷を作り、多寶寺に居たが、同寺には涅槃に達した靜林なども居た。七宗論の著者曇濟も成實に達し、梵敏は法華成實を講じ或は成實の序か要義か一卷を作つたのであらうし、道猛は成實論に於て獨歩と稱せられ、宋太宗臨幸の下に興皇寺で成實を講じ、猛の後、此寺に道堅慧鸞慧敷僧訓導明がある。

齊代に入つては、僞魏の僧淵は僧嵩から成實毘曇を受けて通じ、弟子の曇度慧記道登に授け、曇度は涅槃法華維摩大品も通じ、成實に詳しく當時に獨歩といはれ成實論大義疏八卷を作つて北土に流行し、道慧は僧遠の弟子で、道猛曇斌から學び、道猛から成實論を受け、若き時師道猛が成實論について張融から難を構へられたのに代つて通釋した程であつたし莊嚴寺に居たが、莊嚴寺には玄趣僧達も居たのであるし、僧導の弟子の僧鐘は成實三論涅槃十地等に達し、百論の講筵は僧導をして嘆ぜしめたといはれ、訶梨跋摩傳を書いた玄暢も成實に達して居たに相違なく、又僧柔慧次も成實の達人で、僧柔は弘稱の弟子、慧次は志欽の弟子で法遷に就學し、齊の文宣王の命で共に普弘寺で成實を講じ、又諸論師と共に成實論を抄略し、同時頃に慧隆も成實を講じて聽者多く、同學に智誕法度があり、法安は慧光の弟子で、中寺に於て涅槃維摩十地と共に成實論を講じて止まなかつたといはるゝ。

梁代に入りては、慧球（序錄には慧琳とあり誤）は道馨の弟子で、慧度と同學であるが、彭城の道淵（僧淵とあるは誤）から成實論を受け、荊土に於て講論相繼ぎ、智順は智度の弟子であるが涅槃成實に於て獨歩といはれ常に數百人の聽者を得、寶亮は道明の弟子であるが齊の國都で大涅槃を講ずること八十四遍、成實論十四遍勝鬘四十二遍維摩二十遍大小品十遍其他種々あり、勅によつて涅槃義疏を撰し弟子も多かつたし梁の三大法師も其下に居たのである。更に續高僧傳によつて見るに、法申が成實に明であり、智欣は僧審の弟子であるが、道猛から成實を聽いて講述し文義精悉聽者八百餘人あつたといはれ、法寵も道猛曇濟から成實論を受けて精通し張融をして嘆ぜしめ、梁の三大法師の僧旻は、僧回の弟子であるが、莊嚴寺に於て曇景を仰ぎ、同學の法雲禪崗法開と共に僧柔慧次僧達寶亮に學び又僧宗に涅槃を聽き、僧柔慧次から成實を學びて興福寺で成實論を講じ、弟子

り世第一法に至る七方便と有爲法の無常苦無我を觀ずる三種觀と苦法智苦法忍との關係、世間の九智と阿羅漢との關係、法智比智他心智名字智四諦智盡智無生智の十智、無明を除いた十一因緣の一一の智とそれ〲の集の智と其滅の智と滅の道の智と合はせて四十四智、老死を除いた十一因緣一一について、例へば生は老死に緣たり生を離れずして老死ありといふが如きを三世に配當して得らるゝ六種の法住智と作起盡相壞相離相滅相を觀ずる泥洹智との七種を以てする七十七智を說いて智論を完了するのである。智論全體も亦殆ど組織を整へることなく、必要なるべき名目法數の並列釋義に過ぎない。

以上の如き梗概によつて之を見るに所謂小乘毘曇として論ぜらるゝ法數名目の重要なものは殆ど擧げられ闘說せられて居るといへるが、然しこれを凡て用ひて此成實論の一大組織的體系を立てることには努力が拂はれて居ない。一一について凡て問答往復しつゝ釋義せられて居るから、之によつて異說偏執が淘汰反正せられ得となすのであらうが、かゝる論法は却つて異說を提出して却つて複雜ならしむるに終ること鮮くない弊にも陷る。然し一論の論鋒は凡て鋭く新說新解釋も多く堂々たる論書たるに於ては異論はなからう。唯問答辯難が複雜である爲に何れが果して論主の眞說であるか明確でないこともあつて、從つて上述の梗概も時には誤解を含むでは居ないかを恐るゝのである。讀者の一層檢覈せられむことを望むで止まぬ。特に本國譯をなす間にも亦脚註の中にも、成實論を讀むには參照すべき大毘婆沙論に對照することをしなかつたことは、甚だしい缺點であるから、讀者によつて此缺點の補はれむことを祈るのである。

譯本

羅什の譯本は僅に一年を費されたのみであつて恐らく再治校覽を經たものではなかつたであらう。譯語は必ずしも統一せられて居らぬし、同一文が前後一致して居ないことの存するのは、其證であらう。然し大翻譯家の手を經たゞけに、かかる煩瑣な說の論文ですら、後世の如き佶屈聱牙を離れて流暢に讀まれ得るのは流石に群を拔いたものである。文辭と內容と相俟つて漸次盛に弄ばるゝに至つたが、譯出講讀については姚顯曇晷曇影僧叡の效は沒すべからざるものである。其後の流通を考へて見ようが、支那としては成實論は何れの部に屬するかといふよりも、むしろ大乘論なりや小乘論なりやが問題であることを注意し居るを要する。

羅什の門下であつて而も僧叡にも事へ

れて居るのは遺憾である。

道諦聚に於ては八正道三十七道品が主であるが、大別して三昧即ち定と定具とを説く部と智を説く部との二とせられて居る。定としては心住一處即ち心一境相で如實の空智の因である。かゝる定を詳しく說いて一分修共分修聖正の三三昧、空無相無願の三三昧、空空無願無願無相無相の三三昧、現在の樂と知見と慧分別と漏との爲に修する四修定、四無量心定、喜と樂と清淨心と明相と觀相との五聖枝三昧、一相修爲一相と一相修爲種々相と一相修爲一相種々相と種々相修爲一相と種々相修爲種々相と種々相修爲一相種々相との六三昧、初禪より無所有處までの七三昧、八解脫、八勝處、九次第定の一一、十一切處、無願想等の十想の一一を述べ、定具としては十一定具の中先づ清淨持戒と得善知識と守護根門と飮食知量と初夜後夜損睡眠を述べ、次に具足善覺を說く前に欲覺瞋覺惱覺親里覺國土覺不死覺利他覺輕他覺を說き又出覺無瞋覺無惱覺八大人覺を述べて具足善覺とし、後に十一定具の後の五なる具善信解と具行者分と具解脫處と無障礙と不著とを論じ更に阿那波那即ち出入息の數息觀を明し定難とし麁喜、怖畏、不適、異相、不等、無念、顚倒、多語、不取相、慢、貪恚癡等の三惡法の十種、愁憂、貪著喜味、不樂、貪等の蓋を數へ、又止觀を重要視して述べ、最後に修定についての修習、熏習等について述べて、以て定論を終るのであるが、定の一一と斷惑との關係は十分明にせられて居らぬから、全體としては一一に對する異說を訂すを主とする如きものである。更に第二部として智について述ぶるが、智は眞慧で、眞とは空無我であるから、假名中の慧の想と名づくべきものとは區別せらるとなすのである。空無我の眞智が第一義を緣じ煩惱を斷ずるを得るものである。故に之を無漏心出世間心とし之に對して假名を緣ずるは世間心であるとなす。かゝる眞智は滅諦を見て得らるゝものであるから、四諦を見るを得道時と名づくるも、滅諦の一を見るによつて得道するのである。又一切緣の智を說き、無我智は五受陰を緣ずるので一切を緣ずるのでないと說き、經に無我智は一切を緣ずとなすを解釋するに一切といふに一切を攝すと一分を攝すとの二種ありとなして實例を擧げて論ずるが、これ全分の一切と一分の一切とであつて大乘でよく論ぜらるゝもので大乘涅槃經を思起さしむる。進むで聖行としての空行と無我行とを說き、正見と正智との一體無差別なること、忍は即ち智なることを述べて智の性質を明にし、これより聞思修の三慧、法住と泥洹と無諍と願と邊際との五智、身通と天眼と天耳と他心と宿命と漏盡との六通智、五停心よ

三の空心を滅するを要する。空心の滅するのは滅盡定に入ると無餘涅槃に入るとの二處に於てゞあるが、前者に於ては緣が滅するからであり、後者に於ては相續が斷ずる時に業が盡くからである。滅盡定品第一百七十一によれば、滅盡定には煩惱斷盡と煩惱未盡との二種あり、前者は阿羅漢果で、後者は心心數法の滅である。今空心を滅するは前者である。煩惱滅盡の滅盡定は八解脫中の第八解脫で色を滅し心を滅して有爲が都て滅した阿羅漢果である。この阿羅漢果と無餘涅槃とを二となす點から見れば、一般的の名でいへば前者は有餘涅槃に當る理である。此論では あまり二涅槃の ことを いはない。五智品第一百九十六には涅槃は諸行五陰の滅無に名づけ涅槃なる別の實法が存するのではないとなし、又八解脫品第一百六十三には現在泥洹究竟泥洹の二泥洹をいふも而も必ずしも生前死後の區別を明言しないが然し後三想品第一百八十には阿羅漢果を有餘涅槃となし、死せば無餘涅槃となして居る明因品第一百四十にいふ如く煩惱が盡くとも勢力を以ての故に身は猶斷ぜざること輪の杖を離るゝも猶轉ずるが如くであるから、涅槃を得て直に死となるのではない。故にこゝでも有餘涅槃を全く認めて居るのである。然し又涅槃と滅盡定との區別を說いて涅槃に入れる者は先業所受の命と熱と識とを滅して更に生ずることを期せざるに、此人(卽ち滅盡定に入れる者)には命と熱とは滅せざれば先の心の生ずることを期せばなりといひ、又死と滅盡定との區別は死は命と熱と識との三事が都て滅し、滅盡定では心のみ滅して命と熱とは身を離れずとなすに併せ考ふれば、涅槃は煩惱滅盡した死と選ぶ所はない理である。又滅盡定に入れる者にも心の得は常に在りその得の力を以ての故に心有りとも名づくるから、木石に同じではないとなすのを見れば、滅盡定も全然無心とのみなすのではない。故に此方は有餘涅槃に相當すと見るべきであらう。かゝる無餘涅槃に入れば空心も滅するのであるが、かく滅した所が どう なつて 居るの であるか。後有を受くるに至らないことはいふまでもなく有漏無漏一切法も滅し有所得を離れて無相を見るのであるから、本淨の心性が其まゝ顯はるとなすのであらうし、そこが下にいふ如く僧旻の弟子慧韶のいふ本有の滅諦であらう。五智品第一百九十六の泥洹智の說明の下に苦の滅あるが故に不生不起不作無爲法等ありと說くも悉く害する所なしといひ聖行品第一百九十二に滅は第一義の有というて居るからである。然し唯心論的學說が精しくは述べられて居らぬから、これ以上は何れともいふを得ぬであらう。一般に最も重要なる滅諦が比較的簡單にのみ論ぜら

等を分類組織して居らぬのは奇である。根本煩惱も唯十使と稱するのみであり、煩惱大地法として不信、懈怠、忘憶（惛沈）、散心、無明、邪方便、邪念、邪解、戲掉、放逸を擧ぐるも、他の根本煩惱隨煩惱と交錯し正確な分類となつて居らぬ如き如何にも透徹して居ない。これ必ずしも斷惑の實際修行にのみ重きを置いたが爲ではないから、此論一般が建設的構成的方面に缺けて居る缺點に由來するのであらう。

滅諦聚に於て滅諦は假名心と法心と空心とを滅するをいふとなすのは此論獨得の說である。通常は愛盡涅槃が滅諦解脫とせらるゝのであり此論にも他部にてはかくも說かるゝが、此處では既にかく簡單に說かずして三心を差別せむとするのである。假名とは諸陰に因る所有分別で五陰に我ありとし五塵に因りて瓶ありとなす如きものである。即ち衆緣所生の名字、憶念のみなるを實と見るものである。此論に於ても之を全く排するのではないが、許し得るのは世諦又は俗諦の上でのことに過ぎぬ。故にこれ等は第一義諦即ち眞諦よりいへば凡て空無のものである。かく二諦を說くが爲に佛教に於ては常斷二見を離れた聖中道を得るのであるが、然し俗諦は實法有か假名有かであつて、實法有は空を以て破し假名有は空を假らずして破すといはるゝから、相待因緣相續の理によつて假名有を破すのである。世諦を實の如く考ふるのは我心に基くからこの點で我心を滅することに努めねばならぬ。更に假名有から見ると、一、異、不可說、無の四論に過咎ありとして四論一一を破斥するが、無論は若し之を第一義諦より立つるならば、これ即ち假名心を滅する點であつて、之を多聞或は思惟の因緣の智を以て滅すといふのである。成實論としてのこの無論は一方に於ては因緣生の故ともなすが他方に於ては同時に析空觀的のもので、詳しく色聲香味觸意識因果について一一無を論ずるが、同時に之に對して世諦有を說いて中道を逸しない注意を怠らない。」次の法心を滅するについて、法心とは五陰心あるを法心と名づくとなすから、法は假名の起る基たるものである。故に假名心を滅するのは人無我に達することで、法心を滅するは法無我に達することであるといへる。これを論では前者を空觀、後者を無我觀となし、無我は無性なりともなし法印經を引いて色等の無常敗壞虛誑厭離の相を見れば空と名づくるも淸淨には非ざるも、五陰の滅を見れば是の觀は淸淨なりと述べて居る。かゝる法心の滅は煖等の法の中に在りて空智を以て滅するのであるから、これ前の空觀の實際的に進むだものである。」然らばそこには空心のみが殘ることになるから更に進むで此第

根本で、此三業に不作卽ち無表を認め、無作を心不相應行となす點は何れも有部とは異つて居る。心不相應行ならば假法であるべきである。更に詳しく故不故業、輕重罪業、大小利業、善惡無記の三業、邪行と正行、界繫業、現生後の三報業、苦樂捨の三受業、業煩惱報の三障、黑々報白々報黑白黑白業不黑不白無報の四業、五無間業、五戒の業、地獄畜生餓鬼人天不定の六報業、七不善律儀、七善律儀、八戒齋、八種語、欲界色界各の作無作非作非無作と無色界の作無作無漏との九種の繫業、十不善業道、十善業道を詳論し進むで不善業の過患と身口意三業中の意業の獨り重き所以從つて罪福等も皆心より生ずることを明にし、業は身を受くる因なれば四諦を知る眞正智によつて煩惱を斷じて業因を除くべきを說いて結むで居る。然し業から直接に色等を生ずとなすものであらうこと、非彼證品第四十に色等は業煩惱飮食婬欲等よりも生ず、經の中にて眼は何れを所因となすや、業に因るが故に生ずと說くが如しとし、根は又根假名品第四十五に業の因緣に從つて四大は眼等の根を成ずとし諸根は四大と異らずとなすことから推定せられ得る。果して然りとすれば、成實論の說は必ずしも業感緣起論のみではなく、殆ど唯心論である。此點は頗る進步したものであるが、然し猶未だ之を組織的に說く方面には進むで居らぬ。業論に續いて煩惱論をなすが、煩惱は垢なる心行で、心が生死をして相續せしむるを垢と名づけ、垢心の差別を貪恚癡とし、詳しくは貪、恚、癡、疑、憍慢、及び五見を根本煩惱とし差別すれば九十八使となすのである。貪については貪相と貪因と貪過と斷貪とを說くが、瞋恚と癡卽ち無明と憍慢と疑とについてもかく說き、貪を斷ずるには不淨觀、瞋恚を斷ずるには四無量心並に忍、無明を斷ずるには眞智を修すべきであるとし、五見を身見、邊見、邪見、二見卽ち見取戒取となし之を說く中には佛教以外の說を破し、更に隨煩惱として睡、眠、掉、悔、諂、誑、無慚、無愧、放逸、詐、羅波那(瞞ならむ)、現相、憿切、以利求利、單致利(倦)、不喜、頻申、食不調、退心、不敬肅、樂惡友の二十一種を擧げて說き、又貪恚癡を三不善根として明し雜煩惱として欲有無明の三漏、七漏、四流、四縛、四取、四結、五蓋、五下分結、五上分結、五慳、五心栽、五心縛、八邪道を擧げ、九結を說き、進むで根本煩惱の十種について論じ其斷除等を述べて有部に反對し、斷過について有部の說に對して異る說をなし、遂に煩惱によりて業あり業より身あることに關して、煩惱よ身との關係及び煩惱の因並に斷滅と四果との關係等を論じて煩惱論を終るのである。煩惱を述ぶるに相當に詳しいが、これ

て止まぬのであり、而も地は色等が集會して堅が多きものとなすから堅相の實有を主張して有部說に反對するのである。同樣に水の濕、火の熱、風の輕についても同一議論をなして居る。又根についても之を假名となして有部勝論派數論派正理派を破し、各根の差別は業に因りて起るものであり、根自身は無知である點で根見の說を排し、根塵合離については眼鼻舌身は合中知、耳は合中知離中知、意は兩者にあらざることを論じて佛教以外の說を退ける。聲香觸意について論じ、此間に味をも含ましめ、根は五性又は一性より成るにあらずして不定であるとなし、更に十二入の中のものとして色聲香味觸の五相を詳論するが、此中に於ての論では著者が勝論說に精通し勝論經をも熟知せるを示して居るのみならず、有部の說とは數々相反する主張をなして居る。識論に入りても心相應の心數法卽ち心所有法の獨立性を否定するに論難往復する所は有部に反對して經部を立つるものであり、從つて一心を排して多心を主張するもの〻如くであり、更に識の暫住說を破して無住說によつて念々生滅を明し、俱生併起を取らずして次第生起を主張するのであるが、有部の說と異るものも少くない。故に羅什が僧叡に成實論の詳論中に七處毘曇を破した論があつて其言は隱れて居るも、問はずして發見するを得ば英才と謂ふべしといひ、僧叡が之を指摘したから羅什をして嘆ぜしめたといふ高僧傳中の逸話も、論の實際からいへば、恐らく七處のみではなからう程である。想陰については假法の相を取るを想となす說で異論なく、受は三受であるが、樂も結局は苦となす厭世觀で、無漏の諸受すら苦となし、又苦樂捨憂喜の五根の在る所については有部と異る說をなす。行陰としては思、觸、念、欲、喜、信、勤、憶、覺、觀、不放逸、不貪、不恚、不癡、無記根、猗、捨を說くが、これ等は相應法でなくして次第起となす意味の如くである。此中では觸は假であつて、別の心數法ではないとなす。又心不相應行としては得、不得、無想定、滅盡定、無想處、命根、生、滅、住、異、老、死、名衆、句衆、字衆、凡夫法を說くも、何れもか〻る別法が存すとなすのではないこと一一についていうて居るので明であり、諸論師が外典を習うて阿毘曇を作つて別に凡夫法なるものが存すとなすのであるといふ如く、諸論師が別法となすに過ぎぬとなすのであらう。卽ち心不相應行は色心の分位に假立するに過ぎぬとなすのである。

集諦聚に於ては集とは業と煩惱とであるとなすから、これ卽ち惑業であつて苦諦の苦と共に惑業苦の三道を明にせむとするのである。業としては身口意三業が

る。これ等は凡て成實論の缺點である。

成實論一部が五聚二百二品となつて居る點は全體の結構の整頓せるものなることを示して居る。發聚中に於て初十二品の三寶を釋する部は暫く措くも、次の二十三品に於て論を起す大意を叙する部は初品に論を造る所以と論門の種類と論の勝れて居る所以と論を習ふ利益とを述べ、次の二品には此論の內容となる四諦の大要と含まるべき法の種類とを擧げ、進むで第十九品から第三十五品の間に佛敎內に於ける重要なる異說諍論十種を論じて論主の態度を明にする。第一の過未の有無の論にては論主は無論を取るから上座部有部に反して大衆部並に經部の說に同じであり、第二の一切の有と無との論では十二處のみを有となす此論特有の說をなし而も有無の二邊を離れたるを聖中道とし、一論の最後究竟說としては空無となすのであり、これも有部に贊するのでなく、第三の中陰の有無の論に於ては無論を取つて大衆部化地部に同じで上座有部と異り、第四の四諦の漸現觀頓現觀については頓現觀を取つて同じく上座部有部に反して大衆部化地部に左袒し、第五の阿羅漢の退不退に於ては恐らく眞の阿羅漢は不退となして上座部有部に同一でなく大體大衆部化地部經部と說を等くし、第六の心性本淨と否とについては本淨說を取つて大衆部に與みし有部其まゝではないが、第七の種子としての隨眠を認めて心と相應せずとなす大衆部化地部の說に反對し、第八の迦葉遺部の業果未熟ならば過去に體ありとなす說をも退けて過去無體を徹底せしめ、第九の化地部の僧中有佛說にも贊成せず、第十の犢子部の非卽非離蘊我による有我說を取らない。かく十論一一を論じて種々の異說に對して取捨をなして居るのは論の目的から見て用意周到である。

苦諦聚に於ては五陰が苦であるとして全體を五陰に分つて論述するが、通常の順序を變じて色識想受行となすのは一方に於ては想受行は色識の間に於て起るものであるから色識を先とするのではあるが、然し同時に他方からいへば色論識論にありては他說を辯難折徵する所が多いが爲に初めに置き、他の三は唯詳說を述ぶるに過ぎない如きものである爲に後になしたのである。これ明に論難に興味を有することを露はして居るものである。色陰の色は四大及び四大所因成法卽ち四大種及び四大種所造色であるが、四大は地水火風であり、色香味觸に因るが故に四大を成じ、又此四大に因りて眼等の五根を成じ、此等が相觸するが故に聲ありといふのが此論の根本說である。四大をいふて五大をいはないのは有部勝論派と同じであるが、然し四大は假で、色香味觸が實であるとなすから、兩派の說を破し

ば猶一層多くの派に出入して居ることが知らるゝであらうから、單に何れかの一派のみと定むることは無理である。故に以下に於て大體内容を一瞥するであらう

【一】玄暢は浮馱跋陀禪師の弟子の玄高の弟子であつて、高僧傳に獨立の傳記を有する。華嚴を研究し、章を提げ句を比して初めて傳講した人であり、又三論に長じて學者の宗となつた人、齊永明二年六十九歲で寂し、周顒が碑文を製した。

【二】原文には偏に作る。偏の誤植ならむ。

原本

前にもいへる如く、成實論は漢譯にのみ存して印度にも西藏にも存在しない。此點からいへば、漢譯は實に稀覯の珍書と稱すべきであるが、著者及び著作の場所並に譯本から見て梵語で書かれて居たのであらうし、恐らく製作後間もなく羅什の手に入り、印度では流通することが比較的に少かつたであらうと思はるゝ。和漢に於ては斯論研究は盛であつたし、其系統が成實宗と稱せらるゝ程であるが印度本土では、玄暢が旬日にして摩竭陀を傾震すといふにも拘らず、後世研究せられたことは殆ど知られて居ないし、又此論の影響の痕迹も殆ど認められない。一論一般の傾向は澄汰商略以て偏謬を斥するに重きを置いて筌極を明にし遺軌を隆にする方面はむしろ從屬的になつて居るから、一論によつて闡明せらるゝ新説も、いはゞ、斷片的のもので、統一的に組織せられた體系を與へて居ない點が恐らく遵奉者を出さず影響を遺さなかつた所以であるであらう。成實論の實は三藏の中の實義を指し、これは又佛の法の義を意味し明に實とは四諦と確言するが如く、具體的には四諦說である。このことは二百二品を五聚に分つた點にも表はれて居る。佛の法の義全體を四諦に纒めることは法勝の阿毘曇心論等に於ても殆ど同じであつて、當を得たものであるが、然らば道諦の下に於て修行向上の階位が明にせられ、四眞の一一について其斷證を示すべきであり、かくして初めて遺軌を光隆し共に通濟に遊ずるを得るのである然るに成實論に於てはかゝる點は唯分別賢聖品第十に十八學人九無學合はせて二十七人を並列するのみで、其等一一の意味すら明にせられて居らぬ。即ちこれ成實論は既に他の論に於てかゝることが詳說せられて居るものを豫想するに外ならぬことを示す點であつて、餘弊としては幾分議論倒れの論であるといへる。從つて諸所に後當廣說と約束せられて居ることが殆ど全く履行せられて居ないものすら存し、又品の分ち方は細に過ぎて却つて文の連絡脉理の明確を害するものが存し、更に同一意味の譬喩を多數反復する如き煩瑣なもののあるに比せば深旨の闡明の簡略に失するが如きあるも見らる

第五部については成實論の內容から見て訶梨跋摩は最もよく勝論說に通曉して居たことが明であるから、勝論者を說服したことも事實であつたであらう。然し論爭の內容として記さるゝ所は殆ど取るに足らぬものである。又巴連弗の國王といふのは何れの王か明でなく、當時は笈多王朝興起以前であると考へらるゝから王としても單なる地方的の小王に過ぎないであらうし、或は外學者說伏と共に、傳記に於ける一種の型としていはれて居るに過ぎないのかも知れぬ。

以上の如きことが知られて居るのであるが、これ等によつて更に考察を進めよう。先づ訶梨跋摩の年代を見るに、玄暢は佛滅九百年とし、傳記文中にも耆德が、生れて千載の末に屬す、といふて居るから、千載の末は九百年から千年までの間であつて、單に九百年といふのが九百年から千年までの間を指すのと一致する。然るに支那では更に羅什の言を成實論の初講者僧叡が成實論序の中に錄して八百九十年といふて居るとせられ、嘉祥大師は又九百年とも七百年ともなして居る。然しこれ等は基點としての佛滅年代が明確でない爲に數字が一致しても異つても殆ど何等決定せしむることが出來ないものである。從つてかゝるものに重きを置く要はないであらう。他方に於て羅什は弘始三年(四〇一年)長安に來たのであるし、姑臧に來たのが建元二十年（三八四年）頃であるから、羅什が成實論を得たのはこれよりも以前なるに相違ない。故に最下年限としては三五〇年頃となすを得るであらう。最上年限としては提婆の四百論の引用によつて考ふべきで、提婆を大體一七〇―二七〇年の人と見れば、二五〇年を成實論の最上年限と見るを得る。故に訶梨跋摩は二五〇―三五〇年の人であるといへる。此年代說は本解題者が既に他所に於て採用したものである。

成實論の製作せられた場所は玄暢の言から見て巴連弗附近と考へらるゝが、これは正しいことであらう。根塵合離品第四十九に彼の巴連弗等の近き國邑を見さるやといふて、巴連弗を近傍の都市となして居ることから確め得らるゝ。巴連弗は昔阿育王の都したパータリプトラ(Pāṭaliputra)であつて、佛敎には代々關係の深い中印度の一都市である。摩竭陀國華氏城といはるゝものがこれである。

訶梨跋摩並に成實論の屬する派については後世種々の異說があつて、或は有部或は大衆部或は曇無德部即ち法藏部或は經部ともせられ、三論玄義は多聞部の說に大乘義があり、成實論はこれから出でたとなして居るが、それだけ成實論の內容が所謂理長爲宗的に各派に亙つて居ることを示すものである。精密に考察すれ

延を排するから之と同列の説をなすのであり、論は宗を會し乖競を廢して遺軌を明にし通濟に遵ふを目的としたものであり、經律論に崇附し預流一來不還羅漢に准列して筌極教旨を述べるといふに過ぎないから、決して論全體が大乘の深旨を説いて居るものとなすのではないといはねばならぬ。然し大衆部にあつて大乘を知れるものと共に方等を研究したといふから、素養としては大乘説を有したとせられて居るのである。成實論の內容を見てもこの點は明である。六三昧品第一百六十一には菩薩藏を引用して入宗超越相を説き、有我無我品第三十五等に心垢故衆生垢、心淨故衆生淨を經の言となすは或は阿含經なるやも知れないが、如何にも維摩經を思はしむる大乘經典的のものであり、十智品第二百には馬鳴菩薩の偈を引用し又諸大論師も亦かく説くとし、三受報業品第一百五には四百觀の偈を引用するがこれ明に提婆の四百論の偈であり、不相應行品第九十四には餘の論師が別に如、法性、眞際、因緣等の諸無爲法ありと説くといひ、諸所に俗諦眞諦の二諦を説くが世諦品第一百五十二では俗有眞空の説を明にし、滅法心品第一百五十三では空は人法二空に外ならぬことを示し、三業品第一百には佛は非有、非無、亦非有無、亦非非有非非無と説く經を引用し、破因果品第一百五十一其他の議論の如きは恐らく龍樹の中論十二門論の影響を示すと見るべく、其他利他を説き六波羅蜜を説き三世十方の諸佛を認むる等諸所に大乘を知つて居たことを示すものがあつて、これ等が數々論の中に用ひられて居るから、訶梨跋摩は決して所謂小乘のみの人ではない。然し既に大衆部の人に學むだのであり、又論中にも現在實有過未無體説を取り心性本淨説を奉ずる如く大衆部説を根本となすから、必然的に大乘的になる關係は存する。他方に於て、脚註に示した如く、成實論の説は有部説を排して經部説を取つて居ることが頗る多く、經部が大衆部の影響に依つて立つて居る點が多いから、訶梨跋摩の大衆部説採用はむしろ自ら經部説を取るが爲であると見るべきであるかも知れぬ。大衆部説に反することもあること、十論の一一について見れば判る。此の如く論中經部説に據る點が甚だ多いことから見て訶梨跋摩は經部の人として成實論を作り、成實論は經部の一論と見做してもよいことになるであらうが、然し他の部の説も數々採用せられて居るから、一般的には經部を主として、他部の長を採つたものといふべきであらう。そして諸所に大乘説も織込まれて居るのであつて猶未だ大乘思想によつて凡ての説に根據を與へて新意義を明にするまでには至つて居らぬ。

らう。そして其研究した迦旃延所造の大阿毘曇數千偈といふのは疑もなく八犍度論卽ち發智論であるから、究摩羅陀は訶梨跋摩をして先づ有部の根本論藏を研究せしめたのである。經部としても此論を研究することは當然である。成實論を見るに、不善根品第一百三十五に阿毘曇身と稱して居るのは卽ち發智論を指すのであろ。單に阿毘曇として引用せるは四大實有品第三十九、四大相品第四十四、根塵合離品第四十九、邪見品第一百三十二等であつて比較的に少いが、不相應行品第九十四には諸論師が外典を習うて阿毘曇を造ることをいひ、三報業品第一百四、邪見品第一百三十二には六足阿毘曇を引用し、六業品第一百一十には六足阿毘曇樓炭分が引用せられて居るから、訶梨跋摩の此方面の造詣は發智六足に及び、確に婆沙にも及むで居たのであるし其他健陀羅系統の批評的自由思想にも通じて居たのであらう。

第三部について、發智論の名相に墮して居るのに滿足せずして、遂に自ら三藏を研究するに至つたことは阿梨跋摩をして名を成さしむるに至つた所以である。九流の源といふのは支那流に言詮はした修辭句に相違ないが、五部は古い傳說でいふ同世の五師のことで、つまり異部の起る基を究め、之によつて發智論が偏競の始めをなすことを洞見するに至つたから、廣く學者に接して研鑽に努めたのであらう。成實論中には數々有人の說が擧げられ、其中には有部の說を有人の說として居るのも少くないが、恐らくこれ等の學者に接して知つた說もあるであらうし又初めの部に十論を論じて居る如きは訶梨跋摩が諸派の異說を知り而も之を批評し得る力を具して居たことを示して居るものである。從つて發起偈に廣く諸の異論を習ひ遍く智者の意を知りて斯の實論を造らむと欲すといふのも決して誇張の言ではない。

第四部について、巴連弗で僧祇部卽ち摩訶僧祇部、譯して大衆部、の學者にして大乘を遵奉せるものに遇ひ、研究を進めて方等九部敎に通じ、五部の如き各派と發智論の偏謬とを退けて成實論を造るに至つたとなすのは成實論の思想學說の根本に關する點である。玄暢の記す所では成實論を以て大乘論と見做したとは考へられない。文に、是に於て博く百家衆流の談を引き、以て經奧通塞の辯を檢し、五部を澄汰し異端を商略し、迦旃延を考覈して其偏謬を斥け、槃を除き末を棄てて存を慕ひ本に歸して明論を造述し厥を成實と號す、三藏に崇附し四眞に准列して大に筌極を明して二百二品と爲す、志は宗を會し遺軌を光隆するに在りて、乖競を廢し共に通濟に遵ずるに庶し、とあるによつて知らるゝ如く、五部異端迦旃

奉ずるのではないことを示して居る。此の如く成實論の引用闘說から見るに、數論說は決して本論中で重要視せられて居るものでなく、却つて其說を不正確に述べ誤解をすらなして居る程である。かゝるものが數論說に精通して居た爲に佛敎に入つて後にも之を捨つるを得なかつたとか又は其說に據つて新しい佛敎說を主張したとかいふ如きことは到底信用せられ得ることでなく、むしろ後世の學者が成實論と數論說との關係を精察せずに考出した臆說に過ぎないといはねばならぬと考へらるゝ。成實論の闘說するものは數論說などよりも遙に勝論說の方が多數であつて、而も明に勝論經を熟知して居つたのであるし、勝論說の變遷が成實論中の引用闘說を集むることによつて知らるゝ程に精密でもある。量に於ても質に於ても數論說などは比較にもならぬ。不幸にして古來勝論說は佛敎者の間には數論說程によく知られて居る所がないから成實論中にある勝論說が佛敎者によつて勝論說として知られなかつたのである。又正理派の說も闘說せられ、正理派の十六諦のことをいうて居るが爲に之によつて正理派の學派成立の最下限を定め得る程である。然し正理派の學說は數々勝論說と混ぜられて居て截然區別せられて居ないことがある。これは他の佛敎論師に於ても見らるゝ所であつて、成實論主に限ることではない。以上の點から見て訶梨跋摩が佛敎に入る以前は數論學徒であつたとなす說は單なる想像說に過ぎぬといはねばならぬ。

第二部について、薩婆多部卽ち有部に入つて出家したとなすが、其師究摩羅陀は恐らくクマーララータ（Kumāralāta）であらう。達摩沙門は法沙門で、通例あまり用ひられない稱號であるが、重大な意味があるのではあるまい。クマーララータはよく知られた人としては經部の人で、童受と譯され、一の傳說では馬鳴龍樹提婆と共に四日世を照らすとせらるゝ人であるが、こゝの究摩羅陀と同一人か否かは必ずしも明瞭ではなく而も一問題であらう。有部と經部とでは屬する部派を異にするから、之を無視して直に同一人視することは出來ないが、然し玄暢當時此人について有部經部を嚴密に分つて考へて居たかどうかについては後世の考のみから之を律することを得ぬと思はるるから、此點に重きを置かずば、恐らく之を同一人視してもよいであらうと思はるる。然らば訶梨跋摩は實際は經部で出家したことになる。但しかく解釋するのは不都合であつて、依然として有部で出家したと見なければならぬとしても、出家後に於ては迦濕彌羅系統の保守的精神を奉じたのではなくして健陀羅系統の自由進歩的精神に育つたことは疑ないであ

差別相あることを知るとは說かずといふは數論說として正しいとはいへるが、續いて又汝等の諸の知も根を待たずして生ずるなり、所以は何、大及び我等は根に先だつて生ずればなり、又汝の大等の諸諦は本性なきが故に則ち應に皆無なるべし汝が法にては本性が變じて大等と爲るも本性の法は無なればなりとあるのも疑もなく數論說であつて、唯述べて詳しくないのみである。本性は明因品第一百四十では世性とも譯され一切有無品第二十三では波居帝本性と音譯義譯兼擧もあり明業因品第一百二十では波羅伽提とも音譯せられて居つて、通常いふ自性であるから數論說上、この本性から大卽ち覺が轉變し生じ、大から我慢が生じ、それから根等が種々に生ずるのであるから、大及び我等の我は(三)と同じく我慢であるべく、然らば我に差別相云々の我も我慢である理である。我慢から何が生ずる順序となるかについては成實論主の時代には數論派内に異說があるべきことと他の文獻から知らるゝから、數論說に基いて說を立つる程の人ならば、右に列擧したものよりも精密正確に述ぶべき筈である。更に又(五)破一品第一百四十三には、又僧佉人は說く五求那は是れ地なりと、とあるが、此處にては色聲香味觸を五求那(guṇa)となすのであつて、數論說でいへば求那は自性の構成要素で、三種ある爲に三德と稱せられ、決して色聲香味觸を五求那と呼ぶことはないから、明にこれ誤である。恐らく勝論說でかく用ふるが爲に、それに準例してかく呼むだのであらうし、又しか解釋する外はないが、數論說に通曉する者ならばかかる準例的用法をなす如きことはあり得ることでない。數論說でいへば、色聲香味觸は之を五唯と稱するから、(二)と併せ考へて、成實論の著者は數論說には通曉せず五唯の名稱すら熟知して居なかつたといはねばならぬ。大と求那とを同一視する如きは何れの說に於ても不都合である。此外に數論說と認め得るものは色名品第三十七に外道人は五大ありと說くといひ、非彼證品第四十に諸根は種々の性より生ず謂く地大より鼻根を生ずと等なりといひ、根假名品第四十五に或は諸師あつて五性を五根と爲すと說くといふ如きものであるが、これ等は數論說にのみ限る特有の說でなく又數論派内にも異說も行はれたものである。これ等以外には數論說特有の說は殆ど引用關說せられて居なくて、因中有果論の如きも論門品第十四、非彼證品第四十、四大相品第四十四、破因果品第一百五十一其他にも關說せられて居るが數論說に限るものでなく、疑品第一百二十九に說く不可見の八因は數論說を出すと考へらるゝも、根塵合離品第四十九には十二因を出して數論說のみを

を撰述し其結果旬日にして摩竭陀國を傾震せしめた、(五)後訶梨跋摩は巴連弗の王廷で勝論學者と對論して之を屈服せしめて國師とせられ、是等によつて薩婆多部の學者もかゝる名賢を退けたのを愧ぢて舊居に歸るを請ふに至つたし又八方の論士と論じて絶倫の才超群の辯を以て正說に從はしめたといふのである。

以上五部に分つた中、第一部については訶梨跋摩は韋陀等の世典六分法經等に通じて居たことは成實論の內容から知られ得るが、同時に精粗の差こそあれ、數論派勝論派正理派等をも研究したことが知らるゝ。然し其中の何れの派に屬したかは明言せられて居ない。後世は數論派の人であつて、從つて佛教に入つてから後にも元來奉じた數論說を取つて、成實論中に述べて居るといふ。此說は主として成實論苦諦聚色論中色相品第三十六以下に於て地水火風を假とし色香味觸を實となす說を主張し、有部の說である地水火風を實となす說に反對するが、これ數論說に基いて居ると見做した點に存するのである。然し實際としては、これは經部の說を根本として、更に有部說の中堅等に依る法を四大となす說を推究すれば四大假名の說となる論理的歸結を併せて、主張せらるゝに至つたと考へらるゝものであつて、決して數論說に基いたものとは見做すを得ないものである。成實論の著者は通常學者の考へる程に數論說に通曉して居ないこと論の內容上明確である。(一)一切有無品第二十三に二十五諦は是れ僧佉の有とあるから、數論派の二十五諦說は知つて居たのである。然し(二)四大假名品第三十八に諸の外道の色等は卽ち大なりと說くあり僧佉の如しとあるが、數論說にては、色等は五唯であつて決して五大ではなく、五大は地水火風空であるとせらるゝから、此言は正確ではない。而も論主がもと數論者であつたとなす說では、數論派がかく五唯が能造で、五大は所造であると說く說に基いて論主は四大は假で、色等が實であるとなす說を立てて來たとなすのであるが、此の如く既に數論說を誤解して居るものに基いて新說が立てらるゝに至り得る如きことは到底あり得ることでない。故に此點のみから見ても論主が數論者であつたとなす說は成立しない。更に(三)非彼證品第四十に或は人有り我より根を生ずと說くとし、根不定品第五十四にも外道は五根は我より生ずといふとなすが、これ數論說を指すもので、數論說でいへばこの我は我慢であるべく、それを單に我といふのは必ずしも誤ではないが不精密である。然し成實論は譯語が統一せられて居ないから、我慢を我となすも咎むべきではないとなすべきであるかも知れぬ。(四)根無知品第四十八に汝等も根が思惟して、我に

小分せられて居るに於ては猶更である。大正大藏經が目錄に於て卷數を單に小括孤内にのみ記すに留めたのは一大英斷であり卓見であるといふべきである。本國譯は大正大藏經に存する麗本に基いたものであつて、必要なる限りは縮刷大藏經の麗本をも參照し、又三本宮本をも校合資料に用ひて文字章句をして通じ易からしむるに努めた。更に天和癸亥卽ち三年の刊行にかゝる町版の返點訓讀の附せられ居るものをも參照したが、返點訓讀は比較的に據るには足らぬものであるのみならず、此版本はもともと明本を基となし居るから文字も時には他本と異つて居る。唯便利なことは各卷末に音切字義が存することである。本國譯中に註にあるとして脚註に記したのは之を採つたのである。

著者

成實論の著者は訶梨跋摩（Harivarman）であること、羅什三藏の翻譯以來確定して居る。卽ち羅什將來の原梵文にかく署名せられて居たのである。訶梨跋摩の事蹟については知らるゝ所が多くないが、出三藏記の中に玄暢の書いた訶梨跋摩傳なるものが收められて居て、和漢に於ては古來之に據つて其大體を知ることになつて居る。嚴密な意味の傳記の體裁をなして居ないのは印度的のものとして又古い時代のものとしては止むを得ぬが、後世更に種々なる臆說も出でて却つて紛糾を來した點も存する。嘉祥大師の三論玄義には訶梨跋摩の高足の弟子の言として述べられて居るが、何人を高足の弟子となすのか明かでなく、又傳としても簡單に失する。玄暢の傳に據つて大要をいへば、(一)訶梨跋摩は佛滅後九百年に中天竺婆羅門の子として出で、初め世典韋陀其他に通曉し、(二)後佛敎に入つて薩婆多部の達摩沙門究摩羅陀の弟子となり究摩羅陀の指敎によつて迦旃延所造の大阿毘曇數千偈を精硏し、(三)其名相に滯つて浮繁情を妨げ支離志を害するを洞見して却つて之を退け自ら數年の間三藏の旨を窮め九流の源を考へ以て五部の興起流盪の基をなす所以と迦旃延の述作偏競の始を啓く點とを知つて廣く諸派の學者と辯難したので或者は訶梨跋摩に贊同左袒せむとし他の耆德は從來奉ぜる所を執つて此少年の言に聽かなかつたし其耆德の言の中に「既に生れて千載の末に屬す孰か能く遠く正法の初めを軌とせむ哉」とあるが、(四)訶梨跋摩はかくして偶巴連弗で摩訶僧祇部の僧で大乘をも知れるものに遇ひ進むで心を方等に硏き意を九部に銳にし微言幽旨を探搜し以て百家衆流の談を引き經奧遮塞の辯を檢し五部を澄汰し異端を商略し迦旃延を考覈し其偏謬を斥け繁を除き本に歸して成實論

成實論解題

漢譯

　本論は漢譯にのみ存して、印度の原典も知られて居ないし、西藏譯にも見出されない。その漢譯は羅什三藏の筆に成つたものであつて、羅什は姚秦の弘始十三辛亥年(四一一年)九月八日より始め翌十四年九月十四日に終了したと記されて居るから、約一ヶ年を費して譯出したのである。羅什の寂年は既に高僧傳の出來る頃に異說があつた程で不明確とせらるるが、然し廣弘明集に存する僧肇の誄によれば、癸丑年卽ち弘始十五年四月十三日に七十歳で入寂したことが知らるるから、之によつて算すると西暦三四四—四一三年の人となり、成實論の翻譯は其晩年最後のものであるといへる。成實論記及び略成實論記によれば、姚秦の尙書令であつた姚顯が此論の譯出を請うたのを緣として翻譯にかかつたのであつて、曇晷が筆受し、曇影が正寫したといはるる。故に羅什は此論の原梵文を執つて口で傳譯したのである。譯し訖つた時は二百二品に分品せられたのであるが、この二百二品は確に原典がかく分品して居たのを其のまゝに出したのであつて、決して譯者の勝手に分つたものではない。

　翻譯が訖つてから羅什は弟子の僧叡をして之を講ぜしめたといはるるから、僧叡は本論の最初の講者である。然し譯文の正寫者たる曇影は本論の內容が複雜で問答往復も支離なるを見て全體を五番に結び、之を羅什に呈したから、羅什は是れ我意を得たりと喜んで之を採用したといはるゝ。五番に結むだといふのは二百二品を發聚苦諦聚集諦聚滅諦聚道諦聚の五聚に分類したことを指すのであつて、爾來成實論は曇影の分類に基いて五聚とせられ、現存のものも此くの如くなつて居る。譯出した時は卷數は十六卷とせられたのであつたが、爾來種々に異つて分卷もあらはれ、現存の宋元明三本及び宮本は二十卷となすのは其中の一種の分卷であらう。然し麗本は十六卷となして居るから、恐らくこれが譯出當時のもの其まゝであらう。元來卷數の分け方は現今としては殆ど全く無意味なものであつて、品の分ちだにあらば之を捨つるも何等差支はない。唯廣瀚な論である場合には或箇所の搜索上には多少の便宜もあるが、其代り數々內容上の聯絡を犧牲にするものである。目次の括孤內を一瞥すれば直に此點は看取せらるゝであらう。況んや已に五聚に分たれ而も各聚が更に

目次

論集部　三

宇井伯壽譯

41

國譯一切經

大東出版社藏版

8369